



PL Meisaku joruri shu
768
J6M4
v.2

East Asia

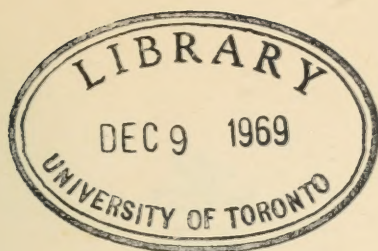
PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

PL
752

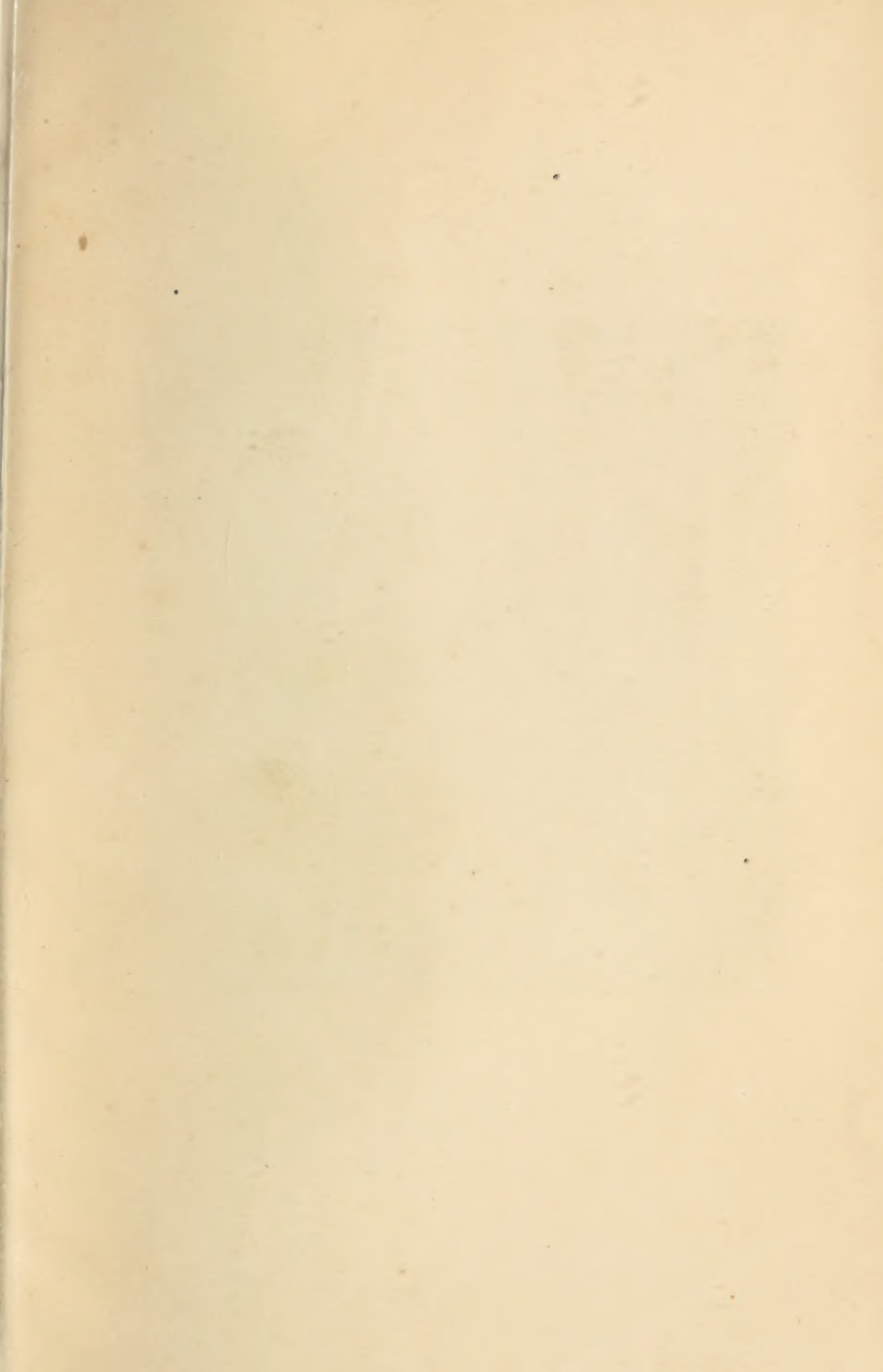
名臣淨瑠璃集

下



PL
768
J6M4
v.2





近代

日本文學大系

第九卷目次

一谷嫩軍記

一一九

奥州安達原

九三—一八〇

武田信玄
長尾謙信

本朝二十四孝

一八一—二七六

高師直
鹽治判官

太平記忠臣講釋

二七—三八二

關取千兩幟

三八三—四四六

傾城阿波の鳴門

四七一—五四七

目次

二

神靈矢口渡

五四九—六三四

十三鐘
絹懸柳 妹春山婦女庭訓

六三五—七三九

おそめ
久松 新版歌祭文

七三—七八九

伊賀越道中雙六

七九—八九〇

姉は宮ぎの
妹はしのぶ 碁太平記白石噺

八九—一〇三〇

解題

文學博士 笹川 種郎
卷頭一—三

目次終

解題

文學博士 笹川 種郎

一 谷 嫩 軍 記

赤木宗輔、淺田一景、浪岡龍景、赤木重三、難波三城、櫻井義武の合作で、寶曆元年十二月十一日より大坂野宮陣にて上洛。享保十五年十一月十五日より竹本陣にて上洛した文籍堂、長谷川千四作の『關原前線平難記』は其の原本と成つてゐる。此の作の二は目までは、宗輔の遺作で、あと二段が淺田等の補綴のことだ。三段目一切應許陣屋が最も著しく、陣屋の荒谷として知られてゐる。

熊谷次郎直實は一の谷へ出陣する所を受けて、堀川御前で遊義軒に遇はれた。義軒は源麿の陣屋にある若木の櫓をいたはれとて、一技を切りは一指を切る。こゝの禁制の高札を破る。平家の御前を助にととの處である。意圖は其の意をさし、子息の小次郎を御前の身代りとして、

其の首を打つ。義經の實驗に供へた首級も替玉の小次郎であつた。敦盛の幽霊なるものが御影の里に住む石屋彌陀六の宿に現はれて、青葉の笛を渡し、石塔をあつらへた。彌陀六は熊谷の陣屋に引き立てられて、詮議せられたが、義經はこれを幼時再生の恩人平宗満なりと知つて、報恩の意を表はす。熊谷は味氣ない人生を觀じて僧門に入る。なほこれに薩摩守忠度と岡部六彌太との物語が織り込まれたのが此の作である。

寶曆二年十一月、大阪中村十藏座で歌舞伎に上演されてゐる。

奥州安達原

竹田和泉、北意後一、近松半二、竹本三郎兵衛の合作で、寶曆十二年九月十日より竹本座にて上演された。

安倍貞任宗任等が再度の旗擧に關する苦心に、安達原傳説及び善知鳥傳説を取合はせて、趣向を立てたものである。

安倍貞任の一千に千代童と云ふのがあつて、安倍の家臣で忠義者の善知鳥安方がこれを保護してゐた。千代童の藥の代に、安方は禁制の鶴を殺したが、外ヶ濱の南兵衛は鶴の首にかけた金札

を強請に来て、遂に訴人となつて出た。併し南兵衛は貞任の弟宗任であつたので、宗任自身鶴殺しの責を負うて捕はれる。環の宮守護役の僱仗直方は腰元戀衣と小姓生駒之助とが戀のいきさつの間に環の宮を盗まれたので、切腹して其の明りを立てなければならなかつた。僱仗の甥袖林は親の許さぬ安倍貞任の妻となつてゐたが、夫の行方を尋ねん爲、娘あきみを連れて、袖林の家となり、その館の外に佇んだ。雪は紛々として降つて袖打ち拂ふ陰もない。僱仗夫婦は義理の人がらみて、此の垣一重がくろがねと逢ふ事を許さぬ。こゝへ貞任が儒教使の桂中納言教長と名乗つて、僱仗に切腹させる。父を殺せと迫られた袖林も自殺する。八幡太郎は安倍兄弟を破敗せずには戰場での再會を約して、其の天空海闊の度量を見せる。安倍兄弟の母岩手御前は安達原の一つ家を住家として、刺盗を業とし、旗本の軍用金を作つてゐる。環の首もかねの手に依りて奪はれたのである。ところへ戀衣と生駒之助とが泊り合はす。戀衣は妊娠してゐる。環の宮の噂を平癒させるためには胎児の血が必要であつたので、東家の岩手御前は戀衣を殺したが、夫の僱仗に血がにじむのを見て、始めて我が子であると知つた。生駒之助は事の首を奉じて歸洛する。安倍親子の苦心も水泡に歸して、再度の旗争もならずに滅亡した。

寶曆十三年二月には、江戸森田座に於て歌舞伎に上演された。

武田信玄
奥尾藤原
本朝二十四孝

近松半二、三好松洛、竹田因幡、竹田小出雲、竹田平じ、竹木三郎兵衛の作で、明治三年正月十四日、竹本座にて初興行。

武田上杉の確執、川中島の合戦をとら扱つたものには、近松門左衛門の『信州川中島合戦』があり、享保六年八月三日、竹本座で興行された。其の後、延享二年正月十二日、曾根崎の明石段後豫庫にて、櫻井頼母、春草堂、戸田屋文、松岡千助、岩瀬左門、文淵堂合作の『三軍精便原』が興行せられたが、本筋は此等を粉本として、更に複雑な趣向を立てたものである。

武田、上杉兩家敵訪法性の兜のことから、互に仲違ひとなつてゐたが、偶將軍義晴が織田にて暗殺されたので、三年間の合戦を中止して、暗殺の曲者を穿鑿することを約し、若しこれを發見しないときは、兩家は各其の子勝頼、景勝の首を打つて渡すことを誓つた。信玄の子勝頼は、幼時より民間に育つて、花作りの農作と呼ばれてゐた爲に、首打たる、事を免れたが、其の身代りとなつた儀の勝頼は眞の勝頼を連れた奸者の板倉兵部の手であつたので、はからずも首を打たれてしまつた。其の戀人に露衣と云ふものがあつたが、これは將軍家を狙撃した齋藤道三の娘で

ある。上杉家の腰元となつて、武田氏の爲に法性の兜を盗み出さうとする。蓑作の勝頼もまた上杉の館に往み込んでゐた。

上杉謙信の娘八重垣姫は勝頼と許婚の仲であつたから、未來の夫の繪姿を繪に描かせて、十種香を焚いて、廻向する。濡衣も亦亡き戀人の廻向をしてゐる。そこへ蓑作の勝頼が現はれる。謙信はこれを眞の勝頼と知り、便に出して、討手に向けて殺さうとする。姫は法性の兜に祈願を凝める。狐火が燃えて奇瑞を現はす。此の曲中有名の四の切十種香の段はこれである。

中州に世を忍んでゐた軍師山本勘助の遺子に横藏、慈悲藏といふ同輩があつたが、横藏は武田氏の家臣となり、慈悲藏は上杉氏に仕へる。兩人とも父の六韜三畧の巻を得ようと苦心する。慈悲藏は親孝行の爲に雪中に符を掘らんとして、三畧巻を掘り當てる。二十四孝の題名はこれから出る。此の慈悲藏は直江山城守の前身である。横藏は武田氏の軍師山本勘助である。齋藤道三は關兵衛と名を改めて、義晴の後室手弱女御前を狙撃したが、娘の濡衣が其の身代りとなつた。併し遂に山本勘助の爲に看做せられ、武田上杉兩家に和解し、法性の兜は武田氏に還り、勝頼八重垣姫は祝言することとなつた。

明治四年八月大阪嵐三十郎座にて、歌舞伎に上場され、安永五年六月、江戸中村座に於ても、

亦上演された。

太平記忠臣講釋

近松半三、三好松洛、竹田文吉、竹田小出雲、竹田平七、竹本三郎兵衛の合作で、明和三年十月十六日、竹本座にて上演。赤穂義士の復讐を取扱つたものでは『假名手本忠臣藏』につぐ名作である。

第一、鎌倉御所刃傷。第二、赤穂城中蜂合戰評定。第三、大星かほよに偽戀慕の見せかけ、義士ののかため。第四、九太夫の妻お禮白川の里にて兵法指南、切、琴の段。第五、縫之助浮橋鳥邊山道行。第六、矢間重太郎の妻おりえ惣嫁の段。第七、矢間喜内の住家。第八、大星の山科の閑居、東下り。第九、天川屋義平の拷問。第十、討入。其のうち喜内の住家の段は最も名高い。縫之助浮橋の道行は、宮蘭節の『鳥邊山』となつてゐる。

同年十二月、大阪嵐座で、歌舞伎に上演された。

關取千兩幟

近松半三、三好松洛、竹田文吉、竹田小出雲、八民平七、竹本三郎兵衛の合作で、明和四年八月四日より竹本座にて上演。

大阪の商人鶴屋浄久の一手禮三郎が、大阪屋の遊女鶴木に溺れて身請けしようとする。瀬右衛門、九平太、善九郎等の悪人が其の鶴木を奪はうと奸計をたくらむ。禮三郎の最良相棒岩川金子剛達に苦心してゐるが、九平太の仲間の鐵ヶ嶽と都合は悪くなると、鐵ヶ嶽は此の一番の大事な勝負に勝たせてくれれば、金をどうかしようと、それとなく決めかす。岩川も金の爲にむづろ勝を敵に譲らなければならなかつた。併し岩川のを房おとわが兄に其の身を賣つて、敵員の名目で土佐の上に二百兩を岩川に贈ると披露したので、岩川は見事勝利を得た。鶴木はこれに對する義理上、また茶屋泰公を助ける。禮三郎は再び鶴木を奪はうとした鐵ヶ嶽を斬つて、鶴木と情死をしようとしたが、人々に助けられた。第二回岩川内場が最も名高い。

明和六年、江戸森田座にて歌舞伎に上演された。

傾城阿波鳴門

近松半三、八民平七、寺田兵藏、竹田文吉、竹本三郎兵衛の合作で、明和五年八月一日より竹

本座にて上演

近松門左衛門の『阿波鳴渡』を翻案し、これに阿波徳島の城主玉木家のお家騒動を織込んだものである。玉木家の家老藤井主膳は主家の重寶なる國次の刀を盗まれた。主膳の家來十郎兵衛は勘當されてゐたが、刀の詮議の爲に盗賊となつてゐた。藤屋伊左衛門も主膳の恩に報いんとし、てゐたが、吉田屋の々霧に溺れて金に困る。十郎兵衛は圖りをしてそれを助ける。十郎兵衛が盗に出でゐた留守に、故郷から娘のおつるが巡禮で父母を尋ねに歩いて來て、母のお弓がほしく出逢つたが、盗賊の子と知れては、どのような難儀に逢ふやらも知りぬと、お弓は親子の名乗りを留すに、懸にもたなして歸してやる。それを我が子と知らずに、懐の金に目がくらみて十郎兵衛が殺す。巡禮者の一役が最も名高い。と。十郎兵衛は悪家老小野田郡兵衛から寶刀を奪ひ還して、玉木家の騒動も目出度く済む。

寛政元年六月、江戸中村座にて始めて秋無俵にて上演された。

神靈矢口渡

輔門屋外之平賀源内氏の作、補助、吉田龍子、玉泉堂、吉田二二である。天和七年正月十六日。

り江戸外記座にて上演

新田義貞の子義興は足利方にたぶらかされて、矢口渡で討死を遂げる。義興の子義峯は落人となつて、矢口渡にさしかゝりし時、渡守の頼兵衛は、足利方よりかねて知らせてある褒美の金に迷ひて、自分の六藏と計つて、之れを殺さうとする。頼兵衛の義お舟は義峯の立派な男振に懸慕して、自ら身代りとなり、義峯を落す。頼兵衛は其の跡を追ひかける。お舟は痛手に屈せず、相圖の太鼓を叩く。義峯は新田の神矢、水碓兵衛の威力と、義興の怨靈とに呵謗せられて、足利勢を打破つた。頼兵衛住家、渡し場の役などいづれも名高い。

寛政六年八月、江戸桐座にて始めて歌舞伎に上演された。

十三鐘

妹脊山婦女庭訓

初演

近松半三、松田三郎、松田半三、松田三郎、三好松洛の合作で、明和八年正月二十八日より竹本座にて上演。

藤原鎌足に關したるものには、古書雜の末及び古語拾遺に「大藏院」があり、近松門左衛門に、正徳三年上演の「大藏院」あり、藤原大鹿に關しては、寛保三年四月六日より竹本座にて上演した

竹田出雲の『玉代實記』人鹿大臣ふかしろみ皇都評みがある。併し本曲は此等を藍本としたものでなく、別に趣向を立てたのである。

妹山香山と、吉野山を隔ててゐる兩方の領主の家におこつた、嬌な戀物語から場面は開けてゐる。人鹿の横暴は其の間に點綴された。鎌足の子藤原淡海は烏帽子折求女に姿を扮かして、人鹿を討たうとする。これに戀する女が二人あつた。一人は人鹿の妹橘姫、一人は杉酒屋の娘お三輪である。鎌足の臣金輪五郎今國は浪華の浦の漁師鱸七と名乗り、上使となつて人鹿の御殿に入る。求女は橘姫に入鹿を討つことを誓はせる。人鹿には不思議な因縁がありて、爪黒の鹿の血と凝著の相ある女の生血とを混じて鹿笛に注ぎ吹くときは、生體もなく眠るのである。鹿の血は既に求女の手に入つてゐる。鱸七はお三輪を凝著の相ありと見てこれを刺し、淡海の求女は此の二人の戀の力に依りて人鹿を誅戮した。杉酒屋、鱸七上使、竹に雀の段など名高い。

竹本座は豊竹座と對立して、いはん方ない繁昌であつたが、明和四年十二月あやつ操廢れて歌舞伎流行したるが爲、衰替の結果退轉し、翌五年六月再興したが、思はしからず、一時、豊竹座と合併興行をしたが、これも亦さんぐの不入にて、僅か二一回きりにて分離し、豊竹座は殆んど廢滅し、竹本座は微ながらも其の命脈を維持してゐたが、大勢の趨くところ如何ともする能はず、

此に再び廢座に歸せんとしたるに、近松半二が懸命の力を以て、此の一齣を勸めて、山の段にかけ合ひの趣向一しは人氣にかなひ、四五年の不入を一時に恢復し、爾後十二年間の命脈を繋いだと云ふ、殊勳の作であつた。

此の年、大阪の小川座にて始めて歌舞伎に上演された。

おそめ
久松 新版歌祭文

近松半二の作で、安永九年九月二十八日とあり、村本座にて上演。

お染久松の心中をとり扱つたものには、紀海音の『油屋 おそめ 決の白綾』(『外題年鑑』には正徳元年四月八日より豊竹座にて上演とある)、これを改作した菅原助の『おそめ 決の白綾』(『外題年鑑』には正徳元年四月八日より豊竹座にて上演とある)、本稿はこれを原本としたもので、お染久松の戯曲中最も有名なものである。

大阪瓦町^の油屋と云ふ賣屋の丁稚久松と云ふのは、福和和泉國有津の家車相良丈太夫の所で、家寶吉光の短刀を紛失した咎で、家が改易となり、讃州野崎村の百枝久作の家に預けられてゐたのが、奉公にやられたのである。然るに山尾の娘お染と戀仲となつたが、お染は山賣屋一様に行

かねばならず、久松も過失あって野崎村へ歸されてゐた。久作の娘お光は久松と許嫁の仲であつたので、もう祝言も近づいてゐた。そこへ野崎の親音詣にかこつけてお染が逢ひに来る。兩人は目顔で心中の決心を伝へあひあひ。お光はそれを知つて、我が戀を犠牲にする。お染は身、久松は器。記で大阪に歸つたが、番頭吉六の奸計で、久松は土藏に押籠められる。お染は土藏の外に来て、内と外とで心中を遂げる。

文化五年、大阪の小川座にて始めて歌舞伎に上演された。

伊賀越道中巻六

近松半二、近松加作の作で、天明三年四月二十七日より日本座にて上演。

安永五年十二月二日より大阪中座にて奈河龜助の作「伊賀越道中合剣」と云ふ狂言が上演されてゐて、翌六年四月十八日まで興行をつゞけるほど大入好評を博した。同じ外題にてこれを近松東南が淨瑠璃に綴り、同年三月二十六日から北堀江市の側芝居で上演した。これを改作したのが此の曲である。

波邊剣負の一子志津馬は父の仇澤井股五郎の行方を探ねてこれを討たんとする。唐木政右衛門

はたれを助太刀する事を約束する。志津馬の帰郷するおまは吉原の道玄堀川であつたが、其の父は沼津の平作である。平作の子で他に養子となつてゐた重兵衛は澤井に恩顧を受けた者であつたが、平作はこれに依りて澤井の行方を探らうとして自殺する。重兵衛は其の行方をあかぬけ、おまが立聞きする。政右衛門は藤川一智門を開通越とに脱け出たので、勝手に退屈がけられ、意い所を岡崎で山田幸兵衛に助けられる。其の幸兵衛は萬師であつたところへ政右衛門の奥房お谷が雪中にとらえて來る。其の由いてゐたお谷手已の助を幸兵衛が人柱に取らうとするので、政右衛門は一思ひに刺し殺す。政右衛門は此の由にて志津馬と相逢し、遂に伊賀越の重國に終る。

編者 紀 太郎
著者 紀 太郎
著者 紀 太郎

紀 太郎、鳥学馬等の作。安永九年正月二日より江戸外記集にて上巻。各回の受持作者は次の如くである。

第一 堂主地下の土従は編目にかかる、大内の組合 紀 太郎

第二 佐と誠の朋友は我心に別る、一國の首塚 紀 太郎

第三 公主と家來の妹と春は相圖に戀る、名鏡の奇特 馬 鳥 旭(馬馬)

第四 孝と實義の伯父姪は愁に亂る、血筋の植付

第五 婆婆と冥途の婿舅は餘所に見らる、一樹の宿賃 紀 上 太 郎

第六 江戸と田舎の姉妹は我が身に賣らる、軍用の品玉 鳥 亭 馬 馬

第七 通と野暮との客と客は意見しらる、曾我物語 鳥 亭 馬 馬

第八 白と黒との敵味方は位牌に紛る、幻術の仇討 三 津 環(紀上太郎)

第九 道行いはぬいろざね 紀 上 太 郎

第十 色と情の娘と下女は智畧にもつる、井出の山吹 紀 上 太 郎

第十一 仁と禮との南北朝は武威に顯はる、和睦の勝鬨 紀 上 太 郎

宮城野、信夫兩女の仇討に、山井正雪の慶安事件を織込んだものである。此の仇討の事は、月

堂見聞録に詳しい。

仙臺より尋ね参り候敵討の事

松平陸奥守榛御家老片倉小十郎殿の知行所の内、足立村百姓四郎左衛門と申す者、さる享保三戌年、白石と申す所にて、小十郎殿劍術の師に田邊志摩と申し、知行子石取り候仁これあり候に逢ひ、路次の供廻りを破り

候とて口論に及び、彼の四郎左衛門を志摩打捨に申され候。此の節四郎左衛門に二人の女子あり、姉十一歳、妹八歳、早速に領内を立退き、仙臺に住居致し罷在候て、陸奥守榛御衛の郎に池本傳八郎殿と申す方へ姉妹共に奉行に罷出で、忍びくへに劍術を見習ひ、六ヶ年の間、劍術修練致し候。或時女部屋に木刀の聲頻りに聞え申候間、傳八郎不審に存じられ、伺ひ見られ候處、右二女劍術稽古仕候様子に候。傳八郎子細を尋ね申され候へば、報讎の心人の由物語申候に付き、傳八郎感心淺からず、これより彌以て修行致させ、密々に秘傳申聞され候由、高千石、今度御加増二千石、鹽本傳八郎、名を土佐と改む、右の次第は當春陸奥守様へ彼の二人の女が寸志を達せさせ度と御願ひ申上げられ候につき、右畠田屋志摩と御引合はれ、仙臺の内白鳥大明神の社前宮の叶と申す處に矢來を結ひ、當卯の三月、雙方立合ひ勝負仰付けられ候、仙臺御家中衆警固檢分これあり候。姉妹志摩と数刻打合ひ、二人替るゝ、相戦ひ候て、程なく志摩を袈裟切に切付け申候、姉走り懸り留めをさし申候、又様御機嫌斜ならず此の女子共家中の娘に給はるべしと仰せ出され候處、二女共に堅く御辭退申上げ候て御請を申さず、父の敵志摩を打ち候事とより畢通れず候、願はくは如何様共御仕置に仰せつけられ下され候様に申上げ候へば、猶もつて皆々感心の上、鹽本氏の女に向ひ、委細様子を申聞け候、殊に未守の御意を違背申すべきにあらず、某も時にあふ人たり、劍術の指南の恩、彼是れもつて我が申す候言くべからずと申され候へば、漸く料簡に置ひ納得仕候。これに依り御家老為三萬石伊達安房守へ姉妹を引取候て、當年十六歳、高千石の大小路權九郎殿、妹妹を引取候て、手荒養生仰せつけられ候、當年十三歳。

此の復讐は享保八年四月のことであつたと云ふ。

此の淨瑠璃が上演された安永九年に、森田座で始めて歌舞伎に上演せられた。

左に竹田出雲以後の淨瑠璃作家二三の小傳を附記する。

三好松洛は伊豫の人で、松山城外の眞言宗願成寺の住職であつたが、還俗して竹田出雲の門人となり、合作に佳作が多い。明和八年の「妹背山婦女庭訓」には、後見とあるが、當時七十六歳であつた。合作物には、但し栲幡丸は合作者の名、竹田出雲との合作は主筆竹田出雲の筆にあるからこれをかく。

赤松園心 續陣幕 又舞堂

猿丸太夫 鹿卷毫 文舞堂

行平磯剛松 (文舞堂、竹田正藏)

幼傳名、芝馬 はなうま 花衣いろは縁起 竹田小出雲

團七九郎 きんぐ 夏祭浪花鑑 (並木千柳、竹田小出雲)

竹傳傳説 やせ 源平布引瀧 (並木千柳、松本武世)

敵討 繼後錦 文舞堂

御所櫻堀川夜討 文舞堂

現代新うき物語 うき (文舞堂、小川半平、竹田小出雲)

公事書 こうじ 丹州爺打栗 (竹田小出雲)

山 やま 楠音囀 (並木千柳、竹田小出雲)

源平 文武世續梅 (並木千柳、松本武世)

振袖のお孔人

香崎の物語

敦賀の遠山
名幸角城鑑（吉田冠子）
中島四郎

等あるが、其の近松半二との合作は、近松半二の條に譲つて置く。

文書堂は松田和吉のことで、竹田出雲とともに其の名で、合作したものとある。合作物には、前記の外に、

三浦大助紅梅（佐々木）長谷川四郎

須磨記源平源氏（長谷川）四郎

用明天皇饗人鑑（長谷川）四郎

等、單獨のものには、

信濃の車道合戦

應神天皇八内舞

神皇元日（長谷川）年鑑

増補源氏（長谷川）四郎

信州織捨山（長谷川）四郎

東一法師（長谷川）長谷川四郎

がある。

近松半二は徳川以直の子である、以直は俗稱以助、伊勢東世、四人、其の三は竹田出雲の門に入りて淨瑠璃伴直となり、大部分は合作であるが、一生のうちに在りて編み出した。天明二年二月歿した。享年五十九歳なりと云ふ。

解題 作者 小傳

一八

役行者大峯櫻 (竹田外記、吉田冠子)
三好松洛

女權伊達錦五十四郡 (竹田外記、三好松洛)
中邑潤助、吉田冠子

常樂御前 姫小松子日の遊 (吉田冠子、近松景輝)
熊野御前 吉田小出雲、三好松洛

占連敵討崇禪寺馬場 (竹田小出雲、竹田潤彦、吉田冠子)
今沙汰 三好松洛、竹土丸、北意後一

日高川入相花王 (竹田小出雲、北意後一)
竹本三郎兵衛、二步堂

制比奈藤兵衛 極彩色娘扇 (二步堂、北意後一、竹)
暗睡屋五郎右衛門 本三郎兵衛、三好松洛

由良湊千軒長者 (竹田小出雲、北意後一、二步)
堂、竹本三郎兵衛、三好松洛

由良湊千軒長者 (竹田小出雲、北意後一、二步)
堂、竹本三郎兵衛、三好松洛

山城の國畜生塚 (竹本三郎兵衛)

主鳥判官盛久 傾城阿古屋の松 (竹本三郎兵衛)

金屋編敵討種物語 (竹本三郎兵衛)

御利生敵討種物語 (竹本三郎兵衛)

世話言漢楚軍談 (竹田外記、三好松洛)
中邑潤助、吉田冠子

愛護若名歌勝関 (竹田外記、吉田冠子)
中邑潤助、三好松洛

おきん源五兵衛 薩摩歌妓鑑 (吉田冠子、近松景輝)
さ、の三五兵衛 吉田小出雲、三好松洛

姪小島武勇問答 (竹田小出雲、吉田冠子)
三好松洛、竹田潤彦

南朝正平四年 太平記菊水五卷 (竹田小出雲、二步堂、
北意後一、竹本三郎兵衛、三好松洛)

安倍晴明倭言葉 (二步堂、北意後一)
竹本三郎兵衛、三好松洛

源賴朝古戰場鐘懸の松 (二步堂、北意後一、竹)
源義經 本三郎兵衛、三好松洛

奥州安達原 (竹田和泉、北意後一)
竹本三郎兵衛

天竺德兵衛 郷鏡 (竹本三郎兵衛)

おきん京羽二重娘氣質 (竹本三郎兵衛)

蘭奢待新田系圖 (竹田平七、竹)
本三郎兵衛

武田信玄本朝二十四孝 (三好松洛、竹田因幡、竹田小出)
其尾謙信 竹田平七、竹本三郎兵衛

常陸帶 小夜中山鐘由來 （並本永備、三好松洛、竹田小出雲、竹田伊豆）

（竹田平七、竹本三郎兵衛）

常陸帶 太平記忠臣講釋 （三好松洛、竹田小出雲、竹田平七、竹本三郎兵衛）

常陸帶 四天王寺雅木像 （三好松洛、竹田文古、竹田小出雲、八民平七、竹本三郎兵衛）

關取千兩鐵 （三好松洛、竹田文古、竹田小出雲、八民平七、竹本三郎兵衛）

常陸帶 三日太平記 （三好松洛、八民平七、竹本三郎兵衛）

領域阿波船門 （八民平七、寺田兵衛、竹田文古、竹本三郎兵衛）

常陸帶 讀三田 （八民平七、寺田兵衛、竹田文古、竹本三郎兵衛）

近江源氏先陣館 （八民平七、松田平二、三好松洛、竹田文古、竹本三郎兵衛）

常陸帶 蘇大名領域敵討 （近松東南、松田平二、竹本三郎兵衛）

上野妹春山婦女庭訓 （松田平二、三好松洛、竹田文古、竹本三郎兵衛）

常陸帶 御殿五十三驛 （松田平二、寺田兵衛、竹田文古、竹本三郎兵衛）

四方武士鑑 （松田平二、寺田兵衛、竹本三郎兵衛）

常陸帶 いろは藏三三三杯 （近松東南）

萬壽永軍出軍奉助

心中紙屋治兵衛 （竹田文古）

道中龜山嶺

伊賀越道中雙六 （近松東南）

假名寫安土親等 （近松東南、竹田文古）

並本宗輔は通稱松屋宗助、その初めは並本宗助と書してゐたが、享保二十年より宗輔にあら

たむ、大阪の人千柳と號し、又舎柳、市中庵の別號がある。西澤一風に學び、豊竹座の作者とな

り、元文五年まで作るところの淨瑠璃三十番、其のうち合作物は二十二番ある。延享二年から千

柳と稱して竹本座、座附作者となり、寶曆元年九月五十七歳にて歿した。

北條時頼記(西澤一風
安田雄文)

攝津國長柄人柱 安田雄文

南都十三鐘 同 前

藤原秀郷係系圖 同 前

源朝本朝懷特山(同 前)

源家七代集 同 前

赤澤山伊東軍記 同 前

小堀判官忠臣(小堀文助
安田雄文) 短冊

郭須與市西海觀(並木丈助)

萬屋助六二代(並木丈助)

和田合戦女舞鶴

釜淵(ふたしほ)雙綾(ふたしほ)巴

奥州秀衛有雪(雪)増

清和源氏十五段(安田雄文)

尊氏將軍二代鑑 同 前

後三年奥州軍記 同 前

蒲冠者藤口合戦 同 前

楠正成軍法寶鑑 同 前

和泉國浮名淵池 同 前

源平待賢門夜軍(同 前)

源平待賢門夜軍(同 前)

南宮鐵後藤日貫

胡管臺門(並木丈助)筑紫(並木丈助)

安倍宗任松浦登

丹生山田青海劍

狹夜衣(かしら)鴛鴦(うづすま)劍翅

111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841
842
843
844
845
846
847
848
849
850
851
852
853
854
855
856
857
858
859
860
861
862
863
864
865
866
867
868
869
870
871
872
873
874
875
876
877
878
879
880
881
882
883
884
885
886
887
888
889
890
891
892
893
894
895
896
897
898
899
900
901
902
903
904
905
906
907
908
909
910
911
912
913
914
915
916
917
918
919
920
921
922
923
924
925
926
927
928
929
9

日合軍前軍至

陳其美

重刊
（每册
小洋
二角）

（一）

國語學刊 有權出版 國家出版

趙以厚自乾道間

鯉魚山

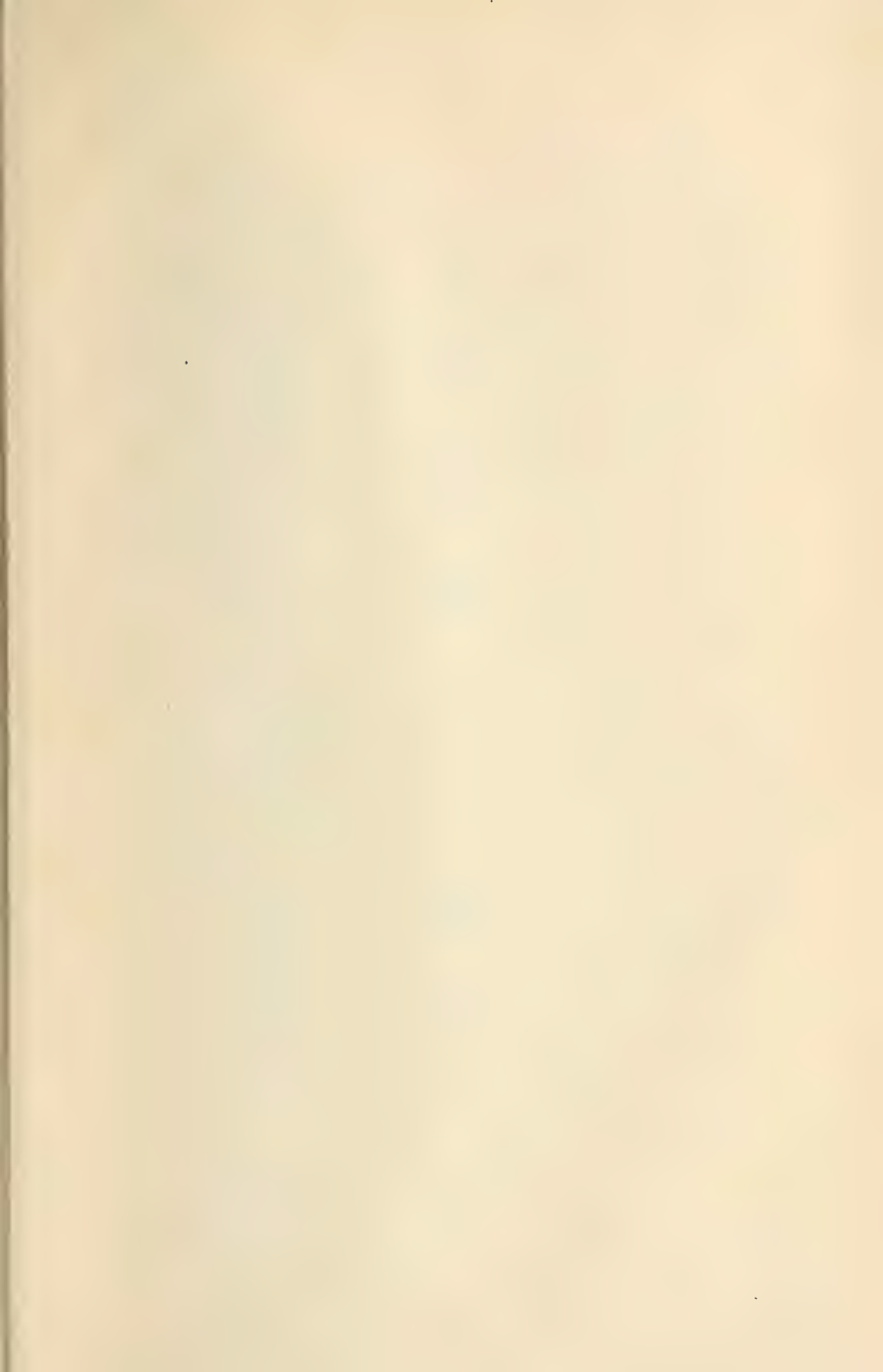
第 11 卷 第 1 期
2005 年 1 月

100

村田出雲、三好松洛などとの合作は血に出るから、二行を符する。謂ふに文助、永輔が死つた。文助の二八歳伯母草津氏は寶延二年二月十八日、大津北田新地の墓よりかくの兒を産して、翌門にかけられしと、長洲州屋橋村木瀬澤に「文子」と命名。製衣女師との心中と、神祕流産にての大産婦と、同日の出来事二方とを取合はせ、すうに二行を符す、二十日に對顯を出し、二十六月に上通して、人當りを取り、同年七月末まで育ちつゝいて夫人の嫡女であつた。

一
谷
嫩
軍
記

並
本
宗
輔



下、この歌は「打通り、人情の調度違ふしとやかに手をづかへ」われは五條三位が崩御の曲と
 思ふ。父條成は實母にて、和歌の後、折しも旅人と憂しき者、此の歌を集に収めて、情はれと一向
 の曲、見れば「五條三位」と思ひながら、私に加へん事、またかならず、御伺ひの御上とて、人
 の事許り詞數いへぬ也なる人の、短情御前にさし置けり、このうたこぼる、人情なり。其の思度
 の詠歌としれどさあらぬ體、手に取つて吟じらるる。或は志智の都はちにしるる。此の山は
 な。ハレ言ばしやあてやかや、何かは苦しかるべき。」と、賞美の詞を時忠打ちけし、「ヤア其の歌集に
 は入れられまじ、讀みならぬ」と傍の無人、さふる詞の前の前「イヤ申し時忠様、お聞きの通りあ
 の歌は、父條成は實母なり、昔々御實とましますを『集』に入れな。」と仰しやるは、誤りなり。有つての事
 か、憚りながら今一度吟じかへして御評議有ればと、いふも切らせず、「さう思ふ人々、ウ、其の歌は
 さうあつたのり」
 摩羅守忠盛、白河明神皇の時、志智にて詠ふとは大打へる。知る所、元來忠盛は後成が御家、當り
 ひいきに平家へ近寄り、後ぐらき此の使、追ひ返されよ。」と言ひほぐせば、華の曲詠を言つて、
 申し、君子を離展に平家へ心寄するとは、切なるお詞、それにに堪かなとて、證據といふに其方と
 摩羅守、實てより君子有る事知つてゐる、其の條に後成が平家を庇ふ所存といふが某が誤りか」と
 我々平家で有るながら、前後端にこの詞讀ひ、義理を暫し。」と止め給ひ、「平家方に縁有りし、一旦不

其の邊に、要害ありき平家の備へ、繪圖に畫かして家門をしる、見よ、今、此の油斷
 を結合して、輪廻より歸す、油斷しに攻め入らば、あわてふにめく平家の一輪、討取るに手裏に
 有りごと、智仁の備の良圖の、意を聞いて諸大名、はつと集りて討つる時忠、一旦縁
 を和みし上は別心なき塔切、天下の爲、御心にさへ給ふなご、生きたるは御智の詞、時忠は
 悲し指落きて居たりける、我れ重むて、誰か有る用意の刺れ、はつと上へて討つ、件、
 油斷に指も落さば、すなと立つて床の間の間に生きたる油斷に、件の短助は討つ、いかゞ人、今
 度のは我れの一輪、私の意にあらず、六彌太は將軍の度の際へ向ひ、御智の此の御詠狀
 を我れにけ人のめも、教訓の御身なれば、名を顯はすを得て讀人しれと記されし事を讀説
 し、氣に入らる其の間、此の油斷を結びたる油斷の邊へ、また熊谷は討つ、其の邊に、
 其の陣所へうち討て、油斷の邊を流る川、其の花に心をこめ、氣絶功績に、其の邊に、
 札、此の花江兩所然なり、一枝折るの邊に、是は、天永弘義の間に、一枝を伐れば一脂を剪る
 べし、此の禁制の心を盡し、昔木の邊を守護せん者、熊谷なりで、其の旨屹然心附よと高
 札は責實、歌は同部に、油斷は、はつと、兩人、熊谷の心を言ひ、外を和く和狀の邊、花を
 剪るに、實有、色有、情有、現有、時忠訓なく、不承々に、其の邊に、二人の勇士も、油斷の、

— 1 —

を。」と許りにて、おろく涙に腰元共、「こりや殿様の告御無理、何程隠しても、新社が證據人、た
いそに有つたかなかつたか、お心に覺がある。アレく申しお姫様の癪が上つた、療治して上げな
され、何ぞでたんのうなされたら、蟲が下ろ」とむりやりに、押しやるもしは行くもしは、小次郎来
れいと打連れて、幕の内にぞ入り給ふ。己が心のだくほくに、人を埋めて平山武者所、荷擔の人と出
合の約束、傍に打ちし幕の牧、日焼きのめうが巴、阿房な事を企てて、我が身ならぬ平時忠、跡
に續いて堀原平次、幕より立出て小手招ぎ、一つ所へ寄る集ひ、武者所時忠にうち向ひ、「先達景高を
以て御願ひ申し上げたる、世の託盛へ遣はされし玉織姫、呼ぶもどして某が妻にせよとの御事、則
ち今日此の所で堀原の結びの杯、外に御相談の儀も有り、と、景高の内意によつて、是れまで推参仕
る」と挨拶すれば打顔き、「ホ、貴殿を堀に取れば、此の時忠も大慶其の仔細は、義經が邪智に誘ひ、
三種の神器を奪はん爲京の君を望みしを、同心なく縁を組み、神寶をうかノと渡したる今の後悔、
義經は未だまで我と同意の者にあらず、何とぞ姫を取り返し是れなる平次景高、相墮二人都の守護に
居るおかげ、禁廷は我が心の儘、此の上もなき恨と、言ふに平次はしややり出で、「ナウ武者所、
貴殿も我も娘達を女房に貰うて有りながら、京の君は義經が館に居らる、玉織姫は經盛が西國へ連
れ下れば、兩方ながらおも長な誤合、」と、其の事を此の平山も、種々工夫してゐる。と、案じに時

忠打笑ひ、「ハ、吾其の儀は何より安い事、経緯と果頃目不知に成りたれば、娘を長せと言ひつらば、縁切つて戻すは治定。又京の君が事は、コレかういふと喚言ば、平次聞えよりよく聞えり、
「ハ、ア等ひ抱れとはおもふく、幸ひいふも此時へ縁話と聞きし間、言尾を重ひ等ひ抱らん。叔此の上は義経を亡ぼす術が計案々々、幕の内にて熱中せん、いと」と二人立上り、「平山殿お出でなされ。」と吾々貴様は増増々々御出で、「アア先づ御殿へ御入り有れ。」と、俄に御明所は降り、次の月取る處に共、作ひてこゝ入りに替り、此方の幕より水車部屋、朝ひ込んだり出するを、言ひ、「と、歸かけながら義経を出で、「アアア小次郎、けしからぬ變ひにて死處へ行くや」と宣はば、「君しろしめされすや、此の端にて三人が最前より御出で、七々若の儀するかつばら月つにも打絶し、
の根をばらはん」と又かけ行くを、「アア早とるな」と引止む。「汝より義経が居るの事は知つたれども、軍を出さぬ其の内に、一人でも味方の御目取るは不可々々。又果に亡はると成ると何程もかいても、破れて解石及ばぬ事、構はずとも括て置け」と、さうも様にならぬ中、幕の女中の聲に、「さう悲しや京の君は御白言遣はした」と、言ひふに義経小次郎も驚きされさ言ひければ、御いたしや京の君御にふして事の給ひ、柱に残る一通走り、「こはいふかしと押とひるを見給へば、誰の通ひも定まらず、讀むも其の文のあやに誠に御前へ入りしより遠く代までとしかば、御情を受け参ら

器用^{もつ}へて、君は平代まで世に、三十一と位なる。何うも、あつても、いふべきことなからず、御りうろくあり
 のかめをば、秘儀^{ひぎ}取らるゝもの、敦盛^{あつしやう}、其の御心を説きおけられ
 第一として、御心二、聞くよ、忠臣打虎^{ちしんうちこ}、相上様、御心の件は、御心より説き初め
 夫より世上の習俗、思召し忘れたる様に存せしむ、まゝ、一々品定め、経緯^{けいゐ}打點^{うちてん}をかき給
 ひ、女房の情を夫べし、御心下つかたは、御心に五の通、御心ならねば不當^{ふたう}は尤も、
 幸ひ折柄^{せがれ}のば語り聞かせ事ありと、いひつゝ立つて、御心を取上げ、其の身は
 此の間に、日毎に出さぬ知の人をたまひ、其の敦盛^{あつしやう}、夫が手に、其の手にある、花
 にと、先祖半忠^{せんしゆ}入、白河院より十番かし、國女御の御に任せ、御心の身を其の儘、果^はか當^{あた}の案に
 賜^{たま}はりて出生^{しうしん}あらし比^こ、教^{あづか}、我が手として育てし如、院事の折柄に、人々之間にはいと、か手の、
 歌によそへて御尋ね、浅からぬ御いつくしみ、かく由緒ある敦盛^{あつしやう}なれば、いかなる高は宮官も、
 の趣くなるべけれども、官位を受けては臣下の列、おね、常位をふむ事叶はず。かく御寵愛^{ごあい}なき敦
 盛、まさかの時は春宮にも立ち給はん御心々と、叔慮^{しよく}はかり今日まで怠^{わだ}と官位の望みせず、さて
 こを無官大夫と呼びせしむ、斯く物語る上からは、其の士族は天格固然、流れを注いで玉置殿、三

承引あつて歸しやう、薄氏の勢は丹波路と津の國の街道より、二手によすると聞き及ぶ。敵の見ぬめの浦傳ひ、丹波大江の岸を越え、河内路より登り給へ早う、と提まつて敦盛は、用意と一間入り給へば、「ソレ藤の方玉織も、旅の支度を急がれよ。ヤアコリヤ／＼染衣、皆の者とり賄ひにいけいけ」と仰せに御臺は、「サアおぢやうと皆引連れて入り給ふ。經盛悦喜限りなく「サア心安し是れから」は一の谷へ馳せ向ひ、持口を固めん」と、獨言して在する所へ、内府宗盛の使として、雜兵一人馳せ來る。「經盛卿へ火急の御用」と一通を指出せば、何事やらんと押開き、何々／＼くさの合戦味方敗北、是れに依つて主上をはじり門院一位嚴密かに讃岐八島の浦へおへらきあり、眞殿御船の守護との傳せによつて、迎への具船でし遣はす、急ぎ出立あるべき由、讀みをはらす心せき立て、「サア事急なり猶隙ならず、かねて妻子に別れは告げる、再び逢ふも互の輪廻、此の儘に出で行かん案内せよ」と、使を引連れ、急ぎ道邊に出で給ふ。かくとはしらす藤の方、けふ別れてはいつか又、逢見ん事は片縁の、結び爛れにし夫婦の縁、せめて名残を惜しまんと、座敷を密とたち出でて、「經盛卿我が夫と、草ね給へど面影は、見ぬ限々を爰かしこ、見廻す中に落ちたる一通、開き見るより憫めし、「コレノ、皆の衆早う／＼、殿は出陣なされたわいの」と、噂はより給ふ御聲に、玉織姦女房達、迫々に走せ出で一つ所に寄り集まり、互に顔を見合はせて、呆れ果てたる許りなり。かかる折即奥庭より、開近く

歎き慕ふぞいらしう。「イヤ水練な」と放れよ。と、おせの給へみだいに、おせの教習、一門の人々も「お妻や子」を具し給へば大事ない、逃れて出陣々々、聞くより敵は有りかた、母の方を伏し拜み暇へへら駒、手綱に引きとひ勇み立ち、女房達も取り／＼に、御見立て申さば敦盛時、時刻移ると鞭ふり上げ「然らば是上もさらば。」オ、さらば。さらば。の廻れの聲も、母の耳にはきつと立ち、駒のいなゝき轡の音、あふり立つてぞ打たせらる。御見立て藤の方、こゝろへ／＼し潮波、一度にわつと罪をせし、さうとせられふし給ふにぞ、女房達も「さうとせられふし給ふ」と、様々いたはり参らす。御家は涙の顔を上げ「悲しい物は浮世の義理、敦盛計り此の母を、驥駒に育てし故、軍にも得たぬとせしみが口惜し、討死にやる母が思ひ、十五十六の小腕といひ、難い時から舞臺を好き、軍の事はしらぬもの子、つい殺さるゝは知れた事、御見立て著て出たのが、千騎駒を討取つて、ぶん取り功名したも同然、わけてかはいや王識が、歌の會が香ききに行くやうに跡を追ひ、いた心根がいぢらしい。やるまいと思ひしが、夫婦となつたしるしには、一夜の枕もかはせなく、二つには敦盛が、媒育の縁にひかされて、軍をよめてゐるならば、一日でも討死の便りか返る間かうかと、はかない事を心の恨み、親の因果と語りにて、身を投げふして泣き給ふ。槇の尾、世世衣る、めい／＼夫の行かまで、思ひ比べて一時に、又もや袖を絞りける。歎きの耳を離か

どもめく所へ又むらく、討ちもらされの家來共、主人の敵と記入るをい、前陣など三人が、まくり
 立つたるより先に、引向ふが實の木の葉、ちりちりと落ちて逃げつた。女房は聲々に「サア／＼
 申し、だ、此の浦船に打乗つて、八島へ渡り、敵様に、おれは逃はせ奉らん、又も敵のこゝろに、
 いざ／＼せ給へ」と言ひ、勧め申せどつまや子の、別れおもへば便りなき、足ももつるゝ、敵のち、
 涙に體を染衣が、いさ／＼で見せる心は裏裏、けに武士の女房に、敵も舌を横の尾と、ふり返つたる女
 武者、みたり四人が打乗れて、歩めど跡へひき戻す、濱の眞砂路つきせぬ思ひ、通ふ千鳥の浦傳ひ、
 船場、磯へし急ぎ行く。

第二

酒場まる時は亂る、案しみ庵まる時は悲しむとかや、二十餘年の榮華の夢、跡なく覺めて都をひら
 き、平家の一門楯籠る、須磨の内裏の要害、前は海上はけはしき鴨越、追手は生田搦手は、一谷の
 山手より、浪打際まで柵のひ廻し、赤旗風に吹き靡かす、參議經盛の末子無官大夫政盛、父に代つて
 陣所を固め、事嚴重に見えにけり。江戸比は彌生の初つ方、月さへ入りて暗き夜に、熊谷が一子小
 次郎直家、先がけして初陣の高名を顯はさんと、出立つ姿は澤瀉を、一入摺つたる直垂に、小櫻緘の

が進みますの。「ヤサ夫れ、和親は御知れぬ。馬場司馬仲達に押寄、御方つき、櫓
 にて香を炊い、悠々と琴彈いて居るを見、」（はかりごと）「我が智慧に迷うて御達を遣はしと聞
 く。アレあの管絃も其の通り、何れも御事はな、早かへ入つて高名せよ。但し御殿の裏のくば、
 某が先陣せうか、何とく。」と氣をもたされ、血氣に任やる小次郎直家、木戸口に走り寄り、門打
 ちたゞき大音上げ、敵の陣へ物中ん、武藏國のり人の氣の頭、熊谷次郎直實が一子同苗小次郎
 直家、先陣に向うたり。平家方に前々人々出て来りて陣のあれにと、高らかに陣はけければ、門内も
 騒ぎ立ち、「すはや草の寄せたるぞ、出で向うて討取む」と、木戸押しひらけば小次郎は、一子抜きか
 ざしかけ入る。「アレ通すな」と御兵共、敵に陣を圍ひ、太刀音人聲かまびす。平山いふとため
 らふ所へ、熊谷次郎直實、我が子の先陣心につし、足々空にかけきたり。「ヤサ平山、御達、倅小
 次郎見給はず。」と、言を待たず、「されば、」と、最前是れへ見えし故、小次郎に逆を打ち、大勢
 の陣の中へ、一騎打は叶はぬや。ひらによしに召かけ、往詰を待つての事がよかると、血々にいさめ
 ても、はなれ切つたる若者、無二無三に切り込まれし。」と聞くより直實髪逆立ち、子も失ひし獅子の
 威、敵の陣へかけ入つたり。愛やかしこの聞のころ、聞くに平山獨りゑみ、「ホウ思ふたつほ思ふ

心御身の一腰かい込み、あまたへ走りこなたへ逃げ、さきへ浦邊へそこを安ふと、尋ねていふ給ひけり。早しのめに人顔も、何のかに見えし山道より、平山武者所、薄う逃げのびすの浦、願ひ足る休めぬと暫く息をつぐうちに、玉織姫と見えたりも、やがて馬より飛んであり、つか／＼とたち寄つて、「お嬢、アアよい所で出会ひました、いっぞや京で見初めてから、目の先にもつく様で、起きてもねても忘れず、思ひ餘つてこゝまでの親御、時忠殿へいうたれば、やらうと有るを幸ひに、迎へにやつた其の跡でも、ア、き娘ならじゆつながろ、マアねてからさうしてかうしてと、ほんにはんにせこもから、木のやうになつて待つてゐるに、迎へにいたや將を殺し、よう待ち候うけにさつたなり。アア、乗物のかはり此の馬に乘せ、連れていんで女房にする。」と、引かづればふりはなし、「エ、あたいたやうい、親が故そがどうせうが、敦盛様とは二世の約束、かういふ内にも御行方を尋ね違うて死なば一所、邪魔仕やんなじとかけ行くをひんだかへ、ア、敦盛を尋ねるのか、コレなんは尋ねても敦盛の行方、水の底まで有解はしねぬに」「そりやなせに」「す、敦盛はたつた今、我が手にかけて討つて仕舞うたに」「ヤアなんと、敦盛様を討つたとや、ハア、はつと許ちにどうどふし、人目もわかつて聲を上げ、歎き沈ませ給ひしか、夫の敵と身構へし、切り付くる腕首掴んで、「ヤアこいつ手向ひか、ア、料簡ならぬといふ所をいはぬ。ても此の手のやはらかさ、じんじやうな事わいな、そどうも

どうも、エ、武者儼ひつする程と云ふならぬ。コレ悪い合點ぢや、とんと心を大れかへ、俺に就か
にならしやれ、人馬に持つて愛がら一す、どうやら、一と爲なで候。俺は此の口をふり、一す
世が世なら、そちが様ならくつは、時分、防備もなすつけぬに、俺へかまひけりとは、確は
しいまはしい、エ、腹立と云ふ又切ぬや、俺は此の上は取つて押へ、一す女型にあらぬ
か、いづなら殺すが何と云ふこと、太刀抜き持つて、俺は此の上は取つて押へ、一す女型にあらぬ
人が来て、此候を切つて、俺は此の上は取つて押へ、一す女型にあらぬ
につくい女め、なまの土に色き、俺は此の上は取つて押へ、一す女型にあらぬ
むやうな、思ひ知れ、俺は此の上は取つて押へ、一す女型にあらぬ
鯨波、すは又我を過ひくやと、駒を引寄を飛び、俺は此の上は取つて押へ、一す女型にあらぬ
るに、親類を給ひ、一門を給ひ、俺は此の上は取つて押へ、一す女型にあらぬ
遙かにのび、俺は此の上は取つて押へ、一す女型にあらぬ
告げし事ありと、首の、俺は此の上は取つて押へ、一す女型にあらぬ
方へぞ、俺は此の上は取つて押へ、一す女型にあらぬ
あ、追つかけ来り、一アをれへうたさたふは平家の大守、且己奉ち、と云ふやうも、收にうしうと、

給ふに、引返し勝負あり、斯く申す果は、武藏國の住人熊谷次郎直實、見奉て入退つて居へ。上居を上げて拵廻し、物々しく、時々はつゝ一敵に勝たせられて、何れ勝負の有るべきぞ、敦盛駒を引退せば、熊谷の進み寄り、手に打物抜きかゝり、戦日にあつて、多くの前妻、かき寄りよりよせ、あやう／＼、てふの事かへし、勝負、勝つは勝つ、かつかつし、あつては、勝負の清風は、戦の袖はひらひら、われぬる手鳥村手鳥、むら／＼と引潮に、寄せはかへり返りては、また打ちかゝる虚々實々、勝負も果てし有らざれば、いとね組まんと敦盛は、打物からりと投げ給へば、ハしを、と熊谷、と刀投げ捨てて、戦を寄せ、馬より下りて、えい／＼と、勝負、戦に勝負、勝負は、馬にどうと落つ。すはせと見る間に熊谷は、敦盛を取つて押へ、かく御運の極まる上は、御名を名乗り直實が、高名置れを、又今生に何事に、と思ひ残す御事あらは、必ず建し参らせん、傳せ置かれ候へ、と、思に申すにぞ、敦盛御聲つわやきに、と、優れし志、敵ながら速れ勇士、かく情ある武士の、手に、死せん事、生前の面目、戦場に赴くより、家々忘れ身を忘れ、かねてなき身と知る故に思ひ置く事さらになし。去りながら忘れぬきは父母の御恩、我が討たれしと聞き給はば、さぞ御歎き思ひやる、せめて心を慰む爲、討たれし時にて我が死骸、必ず父へ送り給はれかし。我こそ参議経盛の末子、無官大夫敦盛にと、名乗り給ひし痛はしさ、木石なら

揚、水木に必^{かならず}、此^{この}生^{なま}、なわあれた佛^{ほとけ}南無^{なんむ}みだ佛^{ほとけ}、首^{くび}の前にそ落^{おち}ちこはる。人の見る目^めも、はづか
 した、御^ご首^{くび}をいふ抱^{かか}り、是^{こゝ}りし御^ご首^{くび}をばり上げて、「平家^{へいけ}のかたに慰^{なぐさ}めなき、無^む常^{じょう}大^{だい}衣^い巻^{まき}を、熊谷^{くまがや}次^{つぐ}郎^{らう}
 直^{ただ}出^で、はづたつと叫^よばはるにぞ、磯^{いそ}に臥^ふしたる王^{わう}戚^{せき}姫^{ひめ}、絶^たえ入^いりし氣^き一^{ひと}筋^{ぢん}に、夫^それをふふりの、
 耳^{みみ}に入^いりしおつくと起^おき、「暫^{しば}し待^{まち}つてたゞ、救^{あつちり}逢^{あひ}を討^うつたとは、いかなる人^{ひと}か、あうゝ心^{こころ}し
 ず、ぞめて名^な姓^{せい}に御^ご顔^{がん}を一目^{ひとめ}見^みせ」といふ辭^{ことば}も、深^{ふか}手^てによわる息^{いき}つかひ。見^みちまふ熊^{くま}谷^{がや}御^ご首^{くび}抱^{かか}へあ
 り、寄^より、「救^{あつちり}逢^{あひ}をしに給^{たま}ふはいかなる人^{ひと}と」叫^{こゝろ}ねれば、今^{いま}はの告^{くろ}しきこのねにて、「我^{われ}ことは救^{あつちり}逢^{あひ}
 逢^{あひ}こ定^{さだ}まる王^{わう}戚^{せき}姫^{ひめ}、お首^{くび}はごこに、ま、もう目^めが見^みえぬ」を撫^なで廻^{まは}せば、「う、何^{なに}お目^めが見^みえぬとや。
 一、いとしや。御^ご首^{くび}はそれと、要^{こゝ}に」と手^てに握^わせば、わつと泣^なく、ししがみ付^つき、膝^{ひざ}にのぞ抱^だき
 る。二、言^{こと}入^いり絶^たえ入^いり歎^{なげ}きしが、これ救^{あつちり}逢^{あひ}様^{さま}、アはかない姿^{すがた}になり給^{たま}ふなり。陣^{ちん}屋^やを出^いでこ
 ら給^{たま}ひしより、御^ご跡^{あと}慕^もひか々^々と、尋^{たづ}ねるうちに源^{げん}氏^しの武^ぶ士^し、平^{へい}山^{やま}武^ぶ者^{しや}所^{しよ}我^{われ}を見^み付^つけて無^む體^{たい}に感^{かん}傷^{やう}、だ
 まし討^うたんち女^め業^{ごう}、此^このことと手^てにかけり、二人^{ふたり}が二人^{ふたり}で悲^{かな}しいさひご。ぞめて別^{わか}れに御^ご顔^{がん}を、見^みて
 死^しにたいと思^{おも}へども、深^{ふか}手^てに心^{こころ}が引^ひ入^いつて、目^めをへ見えぬか悲^{かな}しや」と、又^{また}御^ご首^{くび}を撫^なでうすり、「宵^よの
 宵^よ絃^{げん}の笛^{ふえ}の時^{とき}、後^{のち}にとありし御^ご調^{てう}が、今^{こん}生^{せい}後^ご生^{せい}の笛^{ふえ}かや。此^この世^よの縁^{えん}こそ薄^{うす}くとも、來^き世^せでは未^みなが
 う、添^そひとけてたゞ我^{われ}が夫^それと、顔^{かほ}にあて身^みに添^そへて、思^{おも}ひの限^{かぎ}り聲^{こゑ}限^{かぎ}り、なくねはすまの浦^{うら}千^ち鳥^{どり}、

[illegible]

他人の所へは出ることを、思はず。思ふは、思ふがことであらねい。そこで少し見付けられて、急に氣遣ひのない様に、涼しく、つゝ、彼の内に居つたには、我々も居るもの、會同な者やと要めてはくれいで、判ぢやうとぞう／＼／＼と、思ふを思ひはしめるもの、そんな事論きや氣が盡きます。と、いひつゝ、腰のすつぽんから、有るもの、要領へと／＼／＼と、其の酒がたまにから出て、横着な氣も出るわい。コリヤわい、見るのけしきない此の世かな、人往りして漸うと、其の目を遠ればいかな／＼、一談の野にも／＼／＼有つてにまる物やい、ない事はそれかよう知つてゐる、おやによつて銀銀の望みは、此の一面がはしるに／＼／＼と、おや／＼といはしめるは、エ、親父殿が候し置かれた重代といふ事か、それをおやによつてよう切なうと思つて、盗む心は、おせうにも資本はなし、仕置きた駄もなければ、人早廻しの茂次氏所にかゝつて居て、半荷持しても儲けにくい物は儲けや、おやに毎に重代を擧げにやならず、三文でも儲けた時は、おれかほくんでやつてのける。是れおや清とぬと思ふから、ふつと氣の付いたは、今源平重の中、うそ／＼と見廻つて拾ひ首でもしたら、細目に成るまい物でもない、思ひ付きは付いても、是れも九費ではならぬ商賣。夫れで此の刃物を盗むとはいふ物の、親の物は手物ぢや、コリヤ買ひよすぞや。」「アレまだのぶとい事許り、子なればやねと、わりや勘當したりや他人ぢやわい。」「そんなら借ります。」「イヤな

なぬて、はれ合入中によつて、人見廻しの通る道が、いかに在在にあらはれて、はた何れも
か合はしめるが、さうして、此は、此の道に、一とて、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、
性根が、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、
つ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、
い、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、
放、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、
間、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、
い、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、
の、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、
の、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、
け、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、
よ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、
海、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、
さ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、

も似合うたと陣笠着た、リレ太在室、そこは先様知るまいから驛に所を。」「オット合點母者人。」「オ、
 さんなら太刃の折紙を、添へてやらう。」「酒戸なり、取っだわたせば、」「忝い、」「リヤ怪
 我すな、」「夫れもよい、此の形もよい、やな、よい、よい、よい、よい、よい、よい、よい、よい、
 な、身ぶりは練物見る如く、勇み進んでこそ急ぎ行く、林は跡を打隠め、不其なりがかはぬいと、
 有様は不便にごさる、ここにもかくにもお前のお世話、添うてござります。お禮がてらに酒一つ進めた
 いが、奥には仕事を取りちらして置きました。納戸で成りとあつて下され。」「イヤそりや御無用、
 一ハテオ買うては進ぜぬ、餘所から貰うた諸白に、毎の香でたつた一つ、是非に。」「と無理やりに
 納戸へ押しやり勝手から、錢子杯持ち行くも、手前の妄想としられたり。風きそふ道の時雨も戀故
 に、身は濡道の菊の前、走り付きたる一つ家の、門の戸ははしくうち叩き二明けて。」「と宜へば、
 林は聞き付け、「誰ぢやノ、」「イヤ大事ない者ぢや。」「大事ない者とは。」「ハテわしぢや、菊の前ぢ
 やわ。」「イヤお嬢様とは心得ぬ。」「庭にかけおり戸を明けて。」「ほんにさうぢや、まあノ、おは
 ひの遊ばせ。」「いふ中もどうやら氣遣ひ、見れば付添ふ人もなし、何として夜に入つてお一人お出
 でなされたぞ。」「さればいゝ忠度様の遊ばした、お歌の事にとやかくと隙取る内を待ち兼ねて、お立
 ち有もしと聞くと早、跡を慕うて出でたれども、心に任せぬ女の足、爰まで來ても追ひつかれぬ。道

思案して御らうじまて。一々思案までもない、其の譯は立つて有れど、互に思ひ初めしより、夫よ
 妻よと言ひかはし、一生添はうと思つた物、縁切られては片時も、何と存へ居られうぞ。恨みつらみ
 もありを海、一思ひに身を沈め、底の藻屑となる覺悟、とめずと殺してたらいなう、死ぬる／＼と
 許りにて、跡は詞も涙なる「イヤ／＼、何ほさうおつしやつても、乳母はどうも合點がいかぬ、是れに
 は定めて深い様子が一々其の仔細は忠度が、とくと申し聞かせん」としづ／＼とたち出で給ひ、
 二天の憎む所天、必ず誅罰すと、入道の不善一門の積惡によつて、かくまで種く平家の運、此の度の
 戦ひも、十が九つ味方の敗軍、某も討死と覺悟極めし事なれば、いつを期してか添ひ果てん、思ひ
 切つて歸られようと、いへども中々聞き入れず、陣所へ徘徊行かん」とある。時には忠度女に迷ひ陣
 中まで俱したりと、世の目に懸ろといひ、死後まで縁を切らざれば、俊成卿の御身の上、平家に
 親しき咎めを受け、遂には源氏の仇となつて、亡び給はん悲しさに、慙と離れくひひ放し、眼をやり
 しは忠度が、師の厚恩を報ぜん爲、恨みと思ひ給ふなよ。とはいへもしも薄に叶ひ、軍に勝たば存へ
 て、二度逢はん計り難し。それを頼みに行末の、契りを楽しみ待ち給へんと、日には諫め心には、
 是れ今生の別れぞと、思ひ廻せばいぢらしく、さしも武勇にはり詰めし、弓弦の切れし心地にて、あ
 るものわれみ床ををわけ、臨目に餘ら御涙、包みかれづせ給ふにぞ、夫れと悟りて菊の前「イヤ／＼

門の両脇に、一圓に、かざりたる、かき向ふ、多雲を語て早業に、真向立ちわり車切、四方八方へ
つしほつと、なす足で踏へば、人ばら、皆我一に踏する。忠臣の御前、一、うぬら如きに可
物はいらす。」と、大手をひろけ待ち給ふ。手首に、こけの置共、一人の、方は叶はんと、大勢一度に
どつと寄り、身を捕へては人、あつと、なんとを見る如くめざましかりける。三重次第なり。勇力無
雙の働きに、さしもの景高氣おくれし、逸足出せは、親兵共、叶はし物といふ。置の、五つ足もなく我先
に、むらり、ぼつと逃げ失せけり。相手へければ忠臣、身を休むる其の事、御前ならん。道生
計り、御前して、さかんに、心さくば、時しもあられ、さまたく、同員、置共、手に取る如く
置、れば、忠臣はつと心付き、親を思ひ、大軍を領し、直に向ふと免えたり。戦場ならば、置の勢、
何萬騎にて、闘むとも、計破り、けなやまり、置の陣は、見せんと、軍中に、引かへし、置も腹
をれの、望みも叶はず。置へ、さしもの名高き忠臣、斯くあはれやに身をまび、敵に圍まれやみく
と、生捕られんは、後代まで、屍が恥名に、目情しや、漢聞しやと、衆を、置の、怒りの
涙する目に、衆をふすが、如くにて、いたはしくも、又道理なり。陣もあら、置の方、寄せくる軍兵
むら立つ、提督、天地をてらし、亂れ入るよと見ゆ所に、さばなくして、討手の大將、かけ急はしに、花田の
大陣、わやかに、長勢のく、日をとき、悠々然と立ち向ひ、武藏國の住人、同部六彌太忠臣、忠臣卿に

—

は誤つた、寢んなる時は制し、衰ふる時は制せらる。理、いかたれば美經といひ汝より誠なる一
言、心魂に歸して今さら返す詞もなし。惜しからぬ命なれども、明けなば陣所へたち歸り、はなは
く事なさん、其の時聲は陣邊から。忠臣に其討取の一言す。討にやまひてゐたこともない事。
「アレ／＼八聲の鶏もなく、明くる閑近しと申せども、路次の狼藉騒動なり。陣所へ御供仕らん
ソレ／＼用意の馬引けしと、飾り立てたるくろの駒御前に指しよする。討するに及ばず忠臣、立
廻んでゆらりとめせし、一閑の内より菊の前よりさうし。」「とかけ出で給ふを、林は押しと立
つ身で隠せば、岡部六郎、夫れと悟つて忠臣、腹を懸け給ひし上著の袖、刀を抜いてふつつ切
り。」「／＼乳母といふに抱り、一ハチ叔ふし。」「顔せまい、總じて老女は姫といひ、また是れも
ぶ。今宵忠臣の、お宿を申せし御はうに是れを遣はし。それとも若々しき婦のかた袖、年寄が貫
うて給なしと思はば、外にはほしがら方もあるべし。是れも其の人の形見と思へども猶なつかしき袖
のうつり香、といふ歌の心、其方が耳に、ソレきくの前よく心得てお受け申せ。ともし出せば、「コハ
冥加なき仕合。」と、戴く右のかた袖は、右の腕をおさすの、軍に討死し給ひし、後の哀れとしられた
る、思ひの種や涙の種、仁義の種、六彌太が、東軍近し急がんと先に進んで立つから、いはぬに
に彌勝る、眼をさへ涙顔に、見送る姿より返る、心の種の詠歌も、昔ながらの由縁、散り行く身にも

るまいか。……、勝手な食、……、佛法腹念、門念佛を口
口に、打座して念を置く。跡へ下人の援助が、初め先にはぶらりと綱引きかけたが、マレ
マレしたとき、お岩殿も腕もめんどいふわ。……、道理々々旗草臥れ、そして石塔は建ちました
かに、……、まだ建ちはせぬが、おりの内に用があらうと思うて先へ戻つたが、旦那殿は奥に……。イヤ
……、同行中には高道が有つて、あつたわいの。……、おさんなら幸ひ、此の間小僧様が病氣だやと
て引込んでござるは、其の石塔を建へしやつたお岩殿に、懸頂心と見たは建はぬ。旦那の耳へ入ら
ぬ内見せうぢや有るまいか。……、否とりや私も如任はない、此の間から種々というてもいかな。……、
此の間が叶はぬは、井戸へ身を投げるの首しめて死ぬるのと、悪い事許りいうてぢや。……、おりそりや
置なこつちやの。ハアさんならうしや、只一度で思ひ切らしやれと、とつくりと台盤として、いつ
て遣はそぢやあるまいか。……、ハアもうせう事が無い、幸ひ今夜お岩殿が見える筈ぢやが、其の間に旦那
殿が……。……、初めいの百高道ならちやつとぢや有るまい。マア娘御に其の譯いうて正面うつしやれ。
おりや震所で夜の時分、獨角刀を取りましよう。……、言ひつ、勝手と奥の間へ、別れてこそは入りけ
れ。……、既に其の夜も丑三の、風しんくくと更け渡り、いと物さつき時しもあれ、ねとの聲の哀れ
けに、ほの闇のればいと。猶、心細さといぶかしう、小僧は部屋をたち出でて、燈火か、け窺へば、

思ひから休らば任なれど、たつた一重の壁越に、耶の解揚を聞かずやうで寐られそむないまじりぢやと、いひつゝ、勝手へ入る歸へ、水聲はこし出で鳴る如きや。みんまうまお昔氣は、懐かに響くいかしやんしたか、かいくれ夢が見えぬにせうちや、さしまたうとうとくまよみとく、暗なる門、こなたの障子さつと明け、さうこそに寝ますわいの。『思れはしたる意地の悪い、いつの間にか抜はなさつた、人の思ふ様にもない、心づといお方ぢやと、言ひつゝ、懐かしき寄れば、飛び過つては、これこれ、始終の様子を見聞くに付け、寝し人の、お、怪しいと言ひながら、我が身は深き様子有つて、何にも妹存の言ひききする事叶はず、寝たまふことは兩生の約束なりめと諒めて、思ひ切つて下ろれ、といふ。遂に氣の毒の、打られたる其の奥情、か否ははつと力に當と、寝ひ揺すか有るとても、是れ程に思ひ詰めた心を盡すかひもなく、情なりとも入り括ていやすを仰しやうやすきとは居ぬ。わいづれな、いとお心と懐か歎けづいやすと懐わはる事ながら、違ふは別々の婚約といふ事へに洩れぬ我が身の上、頼み置きたる石塔が、今にも成就してあらば、再び此の家へ來らぬ故、逢ひ見る事も叶ふまじ、只儘ならぬは世の習ひ、縁き物は人の身の、一生は皆夢と思へば、この迷ひも有るまじ。去り乍ら今を限りの別れといへば、誰しも名残惜しい物、若しも戀しき折柄は、心の慰めともならん、いでノ、簾に参らせん、と、鐘の聲おし聞き、青蓮に來し簾竹へ、過ぎ心も無爲なく、長く身にも

て参りたい。「それならお供致し」と。と、立つ用意を取急げば、「コリ／＼と、様わしも一所に
行きたいわいな」を言や何で「一ヶ石塔の善好見」ハハ叔父日もない何のわれが見る事ぞ。
愛やあそこ所ぢやなし、殊に夜道ぢや、あはういはずとて四つめて「留守せい。コリヤお岩そ
も傍から随分氣を付け、誰か、うしろをみまへてついに白くすなふ一合點が／＼とお出でしと、
打連れだち、急いでそこは出でて行く。月もさやけき夜もすから、四方の景色もすみぬる、光り覆
ふ雲ならで、雀の宿りかけくらき、松の林に風あれて、汀の波のおのづから、音も激しく打寄せて、
藪根にひびく山彦は、とう／＼と布引の、濃の山を轉たすといふ、とへばかなたと五百時に、
つゝ、友池村里も、急いで初利天土寺、摩耶のお山をのてに見て、行く道筋も直ならぬ、脇の濱邊や
磯傳ひ、神戸も靜に深川、流る、水の浅なれば、愛も懸橋を渡り、舟を守り、神田や、海らしきみ
て聞く露の、垂水の里も早過ぎて、行くばばはまなく上野山、一谷に寄寄きけるが、その、あ近き積雲
の、たなびく空も青々と、枝葉繁のし松陰に、つつく／＼立つた御影石、遠目にそれとみだ六が、走り
寄つて「是れぢや、先だつて遣はされた所書に合はせ、若者等に言ひつけたりや、建てはたてた
がちつくり笠にふりがある。」と、おし直してためつすがめつ「サア恰好見て下さりませ、何とようご
ざりませうがや、是れからくるいらない様に、髪を合はすは漆喰。」といふところより蓋物とりだし、

中へて、よもやそなたさういふ心なれば、其の御機嫌にやるとて、此の節を「
 眞うたのわハアとれノ」とりやまふが結構な赤金綱ちや、袈裟は生付でもないが、節からち
 つく「枝草が有る。いか様これや後」にせうなら白が物は有らうかい、と親父殿「ハア其何の装に
 ならう、夫れも娘が一抔くたのぢや」と、こんな事ならあたまで半銀取つて置いたち、まんうらの振
 もせまいに、あたむごたりしいにあらう」と、悔ちに致もあら笑止や、ふだ六がぬかれたと、傳へ
 て諸事の誂へ物、手附を取るといふ事は、此の時よりとられたり一時しも跡の松原より、足早にく
 る女は、何者なるといふ中に足は近き藤の結「ハア、夫れは是れからよつ程速いか、見れば暖かうない女中の、たつた
 救へてた」とありければ「ハア、夫れは是れからよつ程速いか、見れば暖かうない女中の、たつた
 一人からはだしで何故寺を尋ねさつしやる」と言ればわらはは様子有つて、跡より追手のかゝる者、
 しばらくかけを隠さん爲」と宣ふ中に目早くも、娘が持たる袋を見付け、さうそれをちよつと見せ
 てたべ」と、手に取り給へば紛ひなき青紫の一管「マア是れは我が子の数輪が、肌身はなきも秘藏の
 箱、さうしてこなたの手に有る」と、聞いて親子も不審顔、百姓共口々に、其の教座といふ人は、
 此の間の戦ひに、源氏の侍熊谷次郎が手にかかり、死なしやつたぢやないかい、とア與次郎「一オ
 其の時にいぢらしい、玉織とやらいふ内裏土藏も殺されて居たけな」と、聞いてみだいは「マアヤ

も行きませう。這手の衆なら一足も、早うござれ。」とせかすれば、「扱こそ遁すな皆こい。」と、かけ出
すふりにて立ち留り、運平が耳に口、謀し合はせて木陰に残し、濱邊をさしてかけり行く。跡打ちな
かの「アア樂ぢや、此の間に早う」と御臺を出し、「コリヤ、娘あな一人は焼束ない、早うで送
つて内へいね、ちやつとノ。」といふ所へ思ひがけなき木影より、須股運平飛んで出で、「ヤア、どこへ
どこへ、かう有らうと推量し、愚太が我を残し置かれた、と、早う御臺を渡せ、邪魔ひろぐと片つは
し、そつ首ころり打落す。何とノ。」と罵れば、百姓共せ、ら笑ひ、「コリヤやい、そつ首のそつくひ
のと、わいらが腕の動く間に、うつかりとして落ぶうかい。」とア相手仕事ぢや手早にこい。」と、てん
でに鶴城大熊手、打つて免れば運平始め、数多の家來も一同に、拔連れノ、渡り合ひ、打ちあふ隙に
みだ六が「ソレ御臺様逃げたノ、娘も逃げよ。」とあせる中、元來達者の百姓共、腕先揃へてから棒
打ち、かたはし家來を打ちなぐり、運平を追取りまき、投げたりふんだりけとばしたり、寄つて免つ
て打ちたゞく。急所にや當りけん、うんとおつけに反り返れば、ソリヤ死んだわと逃げ行く家來、又
追ひかくるをみだ六が「ソレノ、待つた」と呼びかへし、御臺の難儀を救ふ爲、ほつちらす計りでよ
いに、と、死んだわや尻がむづかしい。「コリヤまあどうした物であろ。」「どうというたら逃げたが
よい。」と皆でござれ。」といふ所へ、かけつてくる庄屋の孫作、死骸見付けて、「扱こそノ、一人もち

らす事なごぞや。さう皆よう聞きやれ、今御座様の御等参馬の忠太といふお侍がござつて、百戰
共が熟練し、家來御室を殺したる由につくいやつ、残らず引立て来るべしと敏しい言付、さ、ひるん
な事しておらにまで、肝介をかける、理なはつたら猶悪い、さうおちやうといふに皆々見込の、
中にみだ六す、みさり、殺したと聞かすやつたは大きな間違ひ、ありや目がさうて死んだのおや、其
の證據にはりし死骸に一つも疵がないに「ふ、それが定なら俺も疑ない」といふこと體を政め、ば
んにさうにも疵はない、こりやあつちのが大きな疵相、さうさう疵が殺さぬならは、何のこは事ば
ない、此の中でよう物いふ者たつた一人いて、さつぱりと言ひよりや濟し事やさう、此にさうちや
ハア誰がよかるな、いやこれ年の功首や、みだ六いかしやれ、さういふ身はかまはぬか、おやや
日附の念佛が邪魔になつてどうもならぬに「そんな此の世屋が指圖せう、日比ちよびさうしや
べる、宿山忠吉やうかい」「さうわしやあんまり日早で、何のこつちや誰が相やとい」「おはひし
やの五太衛門かい」「おりや聲が鼻へ入るさ」「というて片兵衛は嘴がこつて、勇次郎は驚おけな
り、指詰又平おいきやれ」「さ、いやさ、こちやど、さういふすわいの」「さうて其の様に家り合
うては堪が聞かぬ、幸ひ其に右を運んだ綱が有る、是れで腰取たらよかろ」「さ、それやいの腹い
はさぬさう、此の世屋がもてくる」と、手早に腰切り後でもちやうと片兵衛は、さういふ

取つた者がいくのぢやぞ、ととれいもよ。「アツト市か、どれとりやろ、西國廻つて見れ、とて
 てんでに、引つはれば、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、
 や、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、
 ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、
 てよ、おりのや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、
 物に「おんなの娘、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、
 て引立て、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、
 ならぬ、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、
 ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、
 氏は花の盛りを見、中に勝れて熊谷が、陣所に、熊谷に、一箇所つたや、ハ、一箇所つたや、
 ざかり、八重九重も及びなき、それかあらぬか人ごと、熊谷、熊谷、熊谷、熊谷、熊谷、熊谷、
 を、読んで行く人讀めぬ人、一つ所に立ち集まり、熊谷、熊谷、熊谷、熊谷、熊谷、熊谷、
 殿の筆ぢやけな、叔も見事、一つ所に立ち集まり、熊谷、熊谷、熊谷、熊谷、熊谷、熊谷、
 一本切らへしとの法度書に「アツト花のかはりに指きろ」とは首切ら下地、と、こはや、見てゐる中も虎

100

も東西に驚きしに、人の驚りの驚さよと、待つ間程なく熊谷次郎直實、花の香りの敦盛を、討ちて無常と悟り、か、是に驚き武士も、物の哀れを今ぞしる、思ひを立ち歸り、其の相模を尻目にかけて座に直れば、軍次にやがて覆ひになり、「先だつて平景高殿、何と詮議の筋」とて、御影の石屋を引連れ御出で、奥の一間に御待ち。」と委細を述べれば、「詮議とは何事ならん、アいや其方は、一獻を催し、梶原殿を重し申せ、サア早くいけくハテさ、何を猶豫する。」と、呵りちらされ是非なくも、相模に顔を見合はして、心を残し入りにけり。跡見、熊谷は、「コリヤ女房、其方は爰へ河しに來た、是立の節陣中へは便りも無用と、早く言ひつけきたるに、詞を背くといひ剩へ、女の身で陣中へ来ること、不屈至極の女め。」と、不興の體に相模はもぢ、「其のお呵りを存じながら、どうかかうかと案じるは小次郎が初陣、一里いたら様子が見れうか、五里來たら便りがあるかと、七里歩百十里歩み、百里餘りの道をつい都まで、オ、オ、んんき、登つて聞けば一谷とやらで今合戦の最中と、取り／＼の噂ゆゑ、子に引かされるは親の因果、御料筋下さりませ、マア此の小次郎も息災で居ますかと、とへば熊谷詞をあら／＼け「戰場へ赴くからは命はなき物、堅固を尋ぬる未練な性根、若し討死したら何とする。」「いゝえいな、小次郎が初陣に、よき大將と引組んで討死でも致したら、嬉しい事でござんしよ。」と、夫の心に隨ひし、健氣な詞に顔色直し、「ホ、先づ小次郎が手

柄といふは、平山武彦等とて、抜けがけの高名、軍門にかけ、つての働き、手きす少々負うたれども、末代まで家の譽か、「エ・して其の手疵は、急所はござりませぬか。」「ソレまゝ手疵を忤む顔付、若し急死せば悲しむべし。」「イエ何のいな、掠疵でも負ふ程の働きは、出したと思つて嬉しさの餘りお尋ね、其の時お尋ね小次郎と、一所にお出でなされたか。」「ホウ危しと見るより軍門にかけ入り、小次郎に引合ひ小次郎にひんだき、我が陣屋連れ歸り、平は其に弱きの大將、無官に夫敦盛の首取たり。」「話に扱はと聞く川後、後に聞かぬ御所「我が子の敵」と有りあふ刀。」「熊谷やらぬと抜く所、鎧鎧んで「や」言はばはり何奴。」「き寄す、女房取り付き、ア、こゝれ聊爾な、貴方は軍の御局様、聞いて直實悔し、ハア思ひけなき御對面。と、飛び退き敬ひ奉れば、「コリヤ熊谷、軍の羽へは、年々、直實殿、敦盛様は院のお胤とし、
「アイ」あい、直實殿、敦盛様は院のお胤とし、
得て討たしやんした、様子が有らう其、
家の戦ひ、これに隨ふ平家の一、女、
らうか。イヤナウ藤、
儀は是非なしと、御諦め下さるべし、其の日の軍のあらましと、

敦盛殿を討つたる次第、物持ちも上座を構へ、一騎も去らざる六日、夜、早雲と闘くらば、一二を
 争ひ抜けたる、平山熊谷討取れど、切つて出てたる平家の軍勢、中に一際勝れた御願、こゝも平
 山あしひの衆、遠處をよして逃げ出すハ、健氣なる若武者や、逃ける敵に目なかけず、熊谷是れ
 に掛へたり、返せ、戻せ、と、いふと、扇を持つて打退けば、敵の頭を立て直し、彼の打退
 打つて打ち、いでや組まん馬士ならむんと、肌、赤馬が間にどうと落ち、一サアノ、何と其の
 若武者を組み敷いてか、さね御顔をよく見事れば、かれ黒々と御前に、年はいづこふ我が子の年
 ばい、定めて二親ましまさん、其の致さばいか許りと、手を持つたる身の思ひの節り、上帯取つてひ
 き立て座りも構ひ、早落ち給へ」と、勸めさしやんしたか、そんな討ちならお心ではなかつた
 の、と、早落ち給へ」と、御ねを、一サア一旦敵に組みしかね、何面目に存へん、はや首取れ、熊
 谷、二首取れというたかいの、健氣な事をいうたなう、一サア其の俵せにいと猶、涙は眼にせ
 き上し、まづ此の通りに我が子の小次郎、敵に組まれず命や捨てん、涙まじきは武士の、言ひと太刀
 も抜き兼ねしに、逃げ去つたる平山が、後の山より聲高く、熊谷こそ致事を組み敷きながら、助ける
 は二心に極まりし、と呼はる聲々、エ、是非もなや、仰せ置かる、事あらば、言ひ傳へ参らせん、
 と申し上ぐれば、御涙を浮め給ひ、父は波瀾へ起き給ひ、心に懸る母人の御事、きのふにかはる雲

居の室、定めなき世の中を、いかゞ過す日を暮らさん、本家の運びはれ一つ、熊谷親むの御一言、
是幸に及ばず御首を」と、話す中より藤の局、女を御母をば思ふなり、敦盛殿の詞に付き、なぞ都
へは身を懸う、一行に御ひしぞ、運氣にあらうた其のときは、母も俱々悦んで、すゝめてやりし
かはいかな、親母の上も今さらに、胸もせまりて悲しや。」と、くまなく敷かて居るに、御主上は思
へども、粗模は態と聲はけまし、「いゝ申しお局様、御一門残らず八雲の浦へ落ち行給ふ中に、一人
踏みとまり、討死なされた敦盛様、數萬騎に勝れた高名。但し迷ひの身身を隠し、人の笑ひを受け
給ふが、おまへの氣では嬉しいか、御未練な御卑怯な。」と、いづめに熊谷「す、でました／＼、コリ
ヤ女房。御臺所此の所に御座あつてはお爲にならぬ、片時も早く伺へ、御供せよ。サア／＼早くい
けい。我も敦盛の御首實驗に供へ、軍次はをらぬか早参れ」と、呼ばはる聲と共共に、一間へこ
そは入相の、鐘は無常の時を打つ、障屋々々の燈火に、いとゞ藤の方「ア、出せばふびん
や、今はお蔭で、肌身はさう冷たうあるは、さう此の處かの信、おとがき石を、さして貰
た當にと、さう、さうした直ぐ、我が子に人知れぬ御、御此の世に御をば、なぞ母に
見へぞ、聞え我が子に御をば、さう、さう、此の世に御をば、なぞ母に
し申し此の世に、御をば、さう、さう、此の世に御をば、なぞ母に

有ると思へば可哀なる至極で、膝をへつゝ申し藤の方様、御歎き有つた教盛様、此の首。一にわが足れば、一にわが申し、これよう御らんめそばして、お恨みはらしよい百ぢやと、譽めておやりなされて下さりませ、申し此の首はた、私がお節で、熊谷殿と忍び逢ひ、懐妊ながら東へ下り、産み落したは、十こね、此の教盛さま其の節おまへも御懐胎、誕生ありし其のお手が無官大夫様、兩方ながらおなかに持ち、國を隔てて十六年、音信不通の主従が、お役に立つたも因縁かや、せめて最期は潔う、死なされたか」と怨めしげに、二へど夫は讀きも、せん方源御面を思ひ、隠所にいひなす誠さへ、泣く首血を吐く思ひなり。藤の局は御聲をり、ナ、粗糲、今の今まで我が子ぞと、思ひの外、熊谷の情、其方は嘸や悲しかろ、かうした事とは露しらず、敵を取らうの切らうのと、いたうた詞が恥かしい。我が子の爲には命の親、赤いと手を合はせ、此の首の生世の中、逢ひ見ぬ事の悔しや」と、俱に歎かせ給ひしか。是れに付きいぶかしきは此の濱の石塔、教盛の幽靈が建てさせたとの噂といひ、祕藏せし言葉の箇、石壁の裏が貫きしとて我が手に入り、最期其の箇吹いた時、あの障子に移りしかけは、遙かに我が手と思ひしが、詞もかはさず消え失せしに、一やいや其の箇の音を聞いてかけ出でし、教盛の幽靈、人目ありと引きとめ、障子ごしの面かけは、義經が志しと、聞いて御臺は我が子の無事、悟りながらも常木の、有りとは見えて隔てられ、又も涙にくれ給ふ。折

頼まれし通ぜよしよ、とわが道へは不相謀を下されぬ。――首は切でござんます、我の二見ませう」と
と首指しめられは致し、さう言ひかたつと敵の方、左は旗手、右は旗手、左は旗手、右は旗手、左は旗手、
何にもない、と、何にもない、と、何にもない、と、何にもない、と、何にもない、と、何にもない、と、
これ此の世に、一様なきは一所を切つて、――、――、――、――、――、――、――、――、――、――、
人だ、と、敵と聞けば、右の旗手、左の旗手、右の旗手、左の旗手、右の旗手、左の旗手、右の旗手、
を取りかへようが、――、――、――、――、――、――、――、――、――、――、
敦賀、又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、
に相摸はむせび入り、二、三、どうよくな熊谷殿、こなた一人の子かいたう。逢はうノと樂んで、百
里、百里、百里、百里、百里、百里、百里、百里、百里、百里、
叱れ、叱れ、叱れ、叱れ、叱れ、叱れ、叱れ、叱れ、叱れ、叱れ、
さういふと、――、――、――、――、――、――、――、――、――、――、
敵は、敵の、敵の、敵の、敵の、敵の、敵の、敵の、敵の、敵の、
人有りなん、それ武士の功名、功名、功名、功名、功名、功名、功名、功名、功名、功名、
たてん、たてん、たてん、たてん、たてん、たてん、たてん、たてん、たてん、たてん、

や母常磐の廻向も頼む。」と親しき御説「ハ、ア有り難し」とたち上り、上帶を引解き、鎧をぬけば契
 姿白無垢、相模「是れは。」と取りつくを、「ヤア何驚く女房、大將の御情にて、軍半ばに願ひの通り、
 御暇を賜はりし我が本懐、熊谷が向ふは西方彌陀の國、倅小次郎が抜けがけしたる九品蓮臺、一つ蓮
 の縁を結び、今より我が名も蓮生と改めん、一念彌陀佛卽滅無量罪、十六年も一昔、ア夢で有つたな
 あ。」と、ほろりとこぼす涙の露、怪に置く初雪の、日陰にとける風情なり。「す、さうぢやく、我
 が子の罪障消滅の、加勢は是れ」と切つたる黒髪、詞はなくて御大將、藤の局も諸共に、御涙にぞく
 れ給ふ。長居は無益と彌陀六は、鎧櫃にれんじやくを、かけた思案のしめ括り「コレくく義經殿
 若し又敦盛生き返り、平家の殘黨驅り集め、恩を仇にて返さばいかに。」す、夫れこそは義經や、兄
 頼朝が助かりて、仇を報いし其の如く、天運次第恨みを請けん。「けに其の時は此の熊谷、浮世を捨
 てて不隨者と、源平兩家に由緒はなし、互に争ふ修羅道の、苦患をたすける廻向の役。」「此の彌陀六
 は折を得て、又宗清と心の還俗。」「我は心も墨染に、黒谷の法然を師と頼み、教へを請けんいざさ
 ば。君にも益御安泰、お暇申す。」と夫婦づれ、石屋は藤の御局を、伴ひ出づる陣屋の軒「御縁が有
 らば」と女同士、命があらば。」と男同士「堅固で暮せ。」の御上意に、有り難涙名残の涙、又思ひ出す
 小次郎が、首を手づから御大將、此の須磨寺に取り納め、末世末代敦盛と、其の名は朽ちぬこがねぞ

ね、武藏坊が制札も、花を惜しめど花よりち、惜しむ子を捨て武士を捨て、すべ所へ定めなき、有爲轉變の世の中やと、互に見合はす顔と顔、さらば、おつらばの、聲も涙にかき曇り、別れてこそ出でて行く。

第四

道行花の追風

磯千鳥、いく食寐づきの物案じ、二世とかなるたゞの事は、けしなまうたの給ふとも、又鎌倉へとはなれとも、晴といふく菊の前、心細布胸あはす、けしなまうたの成衣、きつゝなびをきかぬつる、やしなひ君とかしづきの、老女ひとりをつゑはしら、名は有りながら呼びなれし、うばらゝ里を出てこして、あづまの空へと思ひ立つ、心の内こそはるかなれ。足よわづれの玉はこに、未しら浪のわこ川や、昆陽の池にすむ月も、心はくもる片袖の、其の移り香も風かと、思ひそめたる芥川、いつかふししも跡になし、戦御にやがて近江路と、見え渡りたる風景も、心せなれて行く道は、つぎなきあがり小石はら、老女は足をいはりて、申さく、お姫様、行く先遠き旅の空、御身の勢れも出でやせん、マアしばらく。」と道芝に、立ちやすらへば菊の前「オ、みづからが氣のせく儘、跡先見ずに

道を急ぎ、年寄つたそなたの難儀、足が痛みはせぬかや」と、群互にとうつとはれつる、しんみな
じみの底ふかき、にほの浦なみ山々も、しほりし峯は八わうじ、磯べに見ゆる唐崎の、松は扇のかな
めとや。あれこそしかの山ごえの、よき詠めぞと教ふれば、菊の前打ちながめうししの山とはあ
れなるか、懐かしや忠度様の御詠歌を、千載集へ父上が、撰み入れ給へども、教勘の御身を憚り、讀
人しれずと木の世まで、御名を聞ひしほいなさを、御歎きの涙にて、濡らし笹の片笹は、忍びあふ夜
の添臥も、青泉君は左が麻がつてに、打ちさせ給ひし口すきみ、面影のかすめる月ぞやどりける。は
るや昔の袖の涙に、袖の涙やありし夜の、主は雲居に隔たりて、昔語りとなり給はば、此の身の果て
はいかならん」と、歎きに草の露ぞうく、同じ思ひを押しかくし、老女は力つく被に、道をたすけて
行くきさを、たぐり寄せなん布引山、心も闇の別れより、伊勢やをほりの海面に、立つ波を見ていと
どしく、過ぎにしかたは遠ざかり、しらぬ山々里々に、目をかさね夜をかさね、ほつれし影に風いと
ふ、濱松過ぎて山坂に、かゝりまりこやおきつなみ、富士のけぶりの立ちのほり、行方もしらぬ旅人
の、煙ごぜづれとわる口に、黒君と添ひねにともしびよせて、かゝけて見ればそうたか／＼、いとほ
づかしや、けせばいとお顔が見えぬ、是れぞ誠に戀のやみ、さういうたがわりかえ。いとほづか
しや、けせばいとお顔が見えぬ、是れぞ誠に戀のやみ、さういうたが無理かえ。わりもわやくも

したがひの、つとにふたゝふといふと、心許りはいそがれて、足はもつるゝ難澤や、えにしの便り星
月、蟬倉にこそ、苦きにけね、張みぬを平家の一門悉く、西海の波にまぎ、再び東の源氏の
御代、納言入の御新領と、勘が岡の八幡宮、新に造替ありければ、日々に威を増す神詣で、腰ふ安
も長閑なる、向うの方がふりつと、供人引連た熊井兵太、ア家來共、迎々もいふ通り、上杉頼
朝より一平家の餘類は根を断つて盡を枯らせとの仰せによつて、隠れ男も隠れ女を、取り替ひる身
が世目、隠れ男が隠れ女を配り、うきんな者も見えぬも、野女に似るす胸のとれ、手慣はそち手裏更
は果、急使申し渡したと、はい、うきうき、うきうき、御由に、執澤もさうにける。跡に社寺の一輩は、
徒士の習をも、一際目立つ御受持、松皮に昇りまゐり、是れは岡が岡八幡宮と申しして、敵氏の
御代を守りひ御神、御拜かてらに畏服も、御覽なされて驚るべう、存じとせん。と、頭をさくれば衆
物より、武士にはあらぬ風俗は、九節の巾に金糸を、笠帽といふ丈夫綱、是れは、今迄では目利き
の家頭様、赤六郎、家防様とといふて、大横井の若原は、水鏡なしてたうかうと、天止つ
するからうり名人様、それを旗の背にして、旗に、ア變つた旗印ではないかいな。と、打揃
うていたれば、赤はきつい機織である。そして、赤はきつた赤は、赤からなつた赤は、三年
前、顔見ようかと、鬼や神ひ立つ様に思ふてゐるかいな。と、いかさ、是れは御代も、此の赤は宗助

は日蓮日影のお氣に入り、お供するもお晴張だけ。是れからお朝は大名の奥様、此りちらす女中の
 中へ、しんき思やいやいと、今までの臺詞では、舞臺つぎが済みますね。高が旦那様は幕の
 内、御一門のお付合ひなどは諸考座子で雲土に、高算そこはちふんの間で、お付合ひなされませう。
 と、餘所へ通せぬ教への詞、しつと同十こそ原とけね。こは私が考案する、帯の仕様も此の
 形も、藏屋敷の振舞で、よう見て置いた屋敷の風俗、題すものぢやないわいな。おつとよし、
 それけうぢやが、久しぶりのお芝間の、御等れの出ぬ様に、地黄丸でも上つて。しにが必ず薬酒
 は御兼用と、話し半ばへ、家來引連れ用兵太、鐘合に見馴れぬ女の風俗、都者に傳まつた。
 平家の餘類も疑にしい、連れ歸つて吟味する、リレ引立ていこと立ち蒐れば、傍に一人の索頭はわた
 わな、都者とは御障がしながお卓なされます、平家とやらかついとやら、歌舞も疑はござりま
 せぬ。ヤア偏るまい、武士に似合はぬがちくと震ふは曲者、ソレ縛れ。こと、二人を投げ付け
 蹴飛ばせば、物に馴れたる菅原は、さわがぬ色目しとやかに、これ脚鞠さんすゐお付、自らは
 岡部六彌多忠彦か女房と、聞くよりも醒井兵太、スリヤおまへ様には六彌太殿の御内證とな、是れ
 は是れは存ぞぬ事とて慮外千萬。拙者儀は則ち六彌太殿の下目付、さういふ何が物でござります。當
 時はききの六彌太殿へ、かういふ事が聞えては。何き、宛に角これは家來共が義相、ハテ不調法

千鶴にと、まじめになれば二人の愛憎、西井兵太が高貴な一へつと、と世と高貴の「一へつ」と
家事も一度に結、細を土にすり付ける。其の間に常盤目まはすしとせ、愛憎上げは是早に、引
添うてこそ急ぎ行く。跡には一度に細を上げ、是れはしるゑ夢ではないかや。一へつ夢な夢によつて西
井兵太、等こい、と打連れて、松葉にこそ走り行く。跡へこそ、二人連、花や風と見し丸の、
彼れを何と細の端、細の林打連れ、あてさる夢のかは遠き、首尾を替へ伏たさるゑ、例とつて林に
の枝にうのく、とうとよとも、思慮儀の細が覺れた、常盤の葉に置れたる、どうなりなされた事か
やゆら、此中に打うつ、夢見の夢、わしやい、うゑにさるわいの、一へつ夢、さりとて此の
先段も同た事、跡細のきこ平家の傳、兄と妹と二人の子の跡、種子有つて過ぎたりし、夢見に
るゑいとまへ、思ひ出すかゝのなり、追は部に動の勢、兄と花を、前に居ると言ひました、そ
ろともやつた事、ゆのこそ前も思ひ出す事、夢見、愛憎なとつて、泣きたり、一へつ、跡細の夢
細林の、ちと妹見へ、とす、ゆの、夢見のゆの、と、追本の葉に置れた、深淵の池に、夢
後の方には、西井兵太、種子の、家事も、うい、夢見、と、追取り、と、林は、夢見、夢見、と、
せといふ、況今は八幡様、夢見の、例、例、例、と、一へつ、夢見、と、一へつ、夢見、と、
の、夢、夢、夢、夢、と、一へつ、夢見、と、一へつ、夢見、と、一へつ、夢見、と、一へつ、夢見、と、

し、泣き叫ぶ菊の前をいんだかへ、既に危き折柄に、深田笠の侍が、兵太が利鞘をつて、捨ち上り躍
 飛ばせば、「アイタ、ヤア爰なあみ笠め、大切な科人を召捕る役目の妨けひろく、先づ故から詮議あ
 るやつ、尋ねよ叩け」と言わが、れば、物をもいはず鎧兵を、宙に抛んで天狗の、ぼろりノ、と投
 け飛ばせば、命が大事ぢや家来共、皆こいノ、と一言捨てて、逸散にこそ逃けて行く。跡に二人は
 胸押しなで、是れはノ、と云ふたかは存じませぬが、危い所へお蔭故、コレおまへもお禮おつしやれ。」
 と、姫君俱々嬉し泣き、手を合はすれば、これ、これ、お蔭には及ばぬ囃囃儀、シテ承れば女中
 には忠度殿に縁の有る菊の前と云ふ、いや左様では。「ハテお隠しなされな、とつくと様子承
 つた。おいとしや忠度卿には早御果てなされたわいの。」「エ、そりや真か、シテノ、様子は、御存じ
 ならば聞かしてなべ。」と、さういふ涙のふるひ聲、「オ、悔りはお道理、先づ比すまの浦の合戦に、
 御部六彌太忠澄に渡り合ひ、右の腕をうち落され、つひにあへなく御さいごと、としかに世間取沙
 汰。拙者京都の昔なれば、兼々和歌の名人と、聞き及んだ忠度卿、お話し申すも池生の縁。」と、聞く
 内よりも姫君は、「こは何とせんおいとしや、跡に残りて自らは、何樂しみにあらへん、なむあみだ
 佛の、と意劍にて、自害と見ゆるを、なうコレ待つて」と、林がただめ止めても、イヤノ、ノ、はなし
 て殺して情ぢや」と、と云むるかひも泣きさけぶ。「イヤサこれ女中、死ぬる命を忠度卿の爲に捨てう

「こゝろ心ないか。」「ム、何といはれやんす、通子百々暗い忠長卿の爲に、此の命を捨てるには、と
うしたらまたお蔭になりまう。」と、いふに浪人筋のたがの小姓になり、さすがは後醍醐の御息
女、雲の上人、さうつて、敵を討たうといふお心付の御方と、言はれて御君御をばらさう。ほんに
さうぢや悲しいと許りに心おこす、人の情の支那をばらす、敵といふは國部六藏、林おぢや
「お蔭にござい。」と、通子にかけ行くを、「ア、これく待つたく、其の様にしとけな。」と、
「お蔭にござい。」と、國部六藏と思ひ、武藏一國の大名なれども、おのれ討たで、
と、心の一全力、とくと固まりましたかな、心ざこれは二人共眞に、
互に自身の髪を、切らんとすれば押し留め、いふにも御心お見えしました、お蔭に、
の太は重ねぬといふ切髪、俱に付添ひ尼法師と、髪をかへて主人の敵、討たさうといふお蔭の、
オ、通れ見事を々。縁はなけれど見捨てぬは、武藏の情にと立取り出し、
き認め、「コレ此の通り、」と、お蔭に、
と押頂、「イヤこれ中とお前のお名、」と問、隙、松吹く風に隔、
ち別れ下ぞ、三急ぎ行、「ナント作、嘉内上方、けふ奥様がござるといふが、
様か、但しは隠居樂人、奥様の奥様かい。」「ア、」こゝろ心ないな、
「お蔭にござい。」と、お蔭に、

旦那様か上方でござつてと談じやつたお色だわい。何お色とは何の事ではないかい。「いや此奴
 きようから兵ではある。色といふは京都九條で菅原といふお預城の事だわい。」「スリヤあの十文
 宇とやらふんであるく、國太兵衛の親方殿か。」「いやい、旦那六彌太様の奥様になり、けふ此の
 内へぬめり込むのさ。なんとうまい事ではないか。」「いやそれはどうと、合點のいかないは是れの
 隠居様、御子息の六彌太様とは、同年ぐらの親子の中、おらは新参者で様子はしらないが、ありや
 々何たる事だいなた。」「おらちすつきり合點がいない。親御様ぢやというて、あの様に大事にさ
 つしやるは、若しは旦那の念者ではあるまいか。」「したか念者を兄分といふは聞いたが、親分とはあ
 たらしい。」と、仇口々の折からに、門前賑ふ遠見のしらで、上方の奥様唯今足れへ御入り。」と、いふ
 もとつかは奥よりも、待ち設けの女中方、著連れ打連れ出迎へば、早足に入る、乗物に、牽頭末社を
 供廻り、思ひ付きなる出立は、しろとめかざる風情なり。中にも小楨は局役、しとやかに手を支へ、
 「是れは、長の御道中、御機嫌宜しうおめでたいお國入り、いざや、お入り。」と乗物の、戸を明け
 お手を取りく、に、かしづかれつ、たち出づる、姿は武家を消せども、昔を残す詞くせ。是れはく
 みな様いかいお取持ち、どれがどれやらうひくしい、萬事は皆を頼むぞえ。なんと喜六主宗助主。」
 と、いはれてシツシ、はてこれ申し、い、えいな、わしや聞えぬはむつ様、久しぶりの女房の顔、

ヤレ菅原か久しやく。」と、出さんしさうな所を、昔に思はせぶるか、わしや逢うたら一通り、きつと一番にはなばならぬ」と、長らねども且比喩ならば、傍に手に汗、さうしてちやつと居直り、「ほんに、ア私とした事が、始めての御合意になつたらしい、ア、笑止」と言ひながら里めかし。「何と皆見つけたか、都女中はわづらふ」と、かぶるをいふも、其の風情、真にそれなり、いや中へ申上、膝は今日叶はぬ御用で外へお出で、お歸りの時分まで待てよと云れ、目をお寄れ候へ、お出でもめして緩りつと、御祝言の御用意をば、皆の言葉は替りて伏息、いさゝか話へといふ言葉を、奥と口とに立ち別れ、打連が「こそあらにけれ。ほどなく又もしらせ」の二語より銀すお入りと、詞の下より「局」「こりや」といふ、是れは、此の世の風、はなはだ、是れ一人は数人前に極まつた。どうやら重に「こそあらにけれ、ア、笑止の御体、足腰がなつかしい、北の方といふ合點」を、之から其の端に、日影に「さあ、八文字、目や柳をばゆれ」も、散りてかひなき常の事、うつせば菊の花、むしくも、はなはだ、川津の、流れに花をば、是れは、春はあけぼの身をかくて、赤面の中紅も、雪の紅葉と照り輝いて、他所目包む里詞コレ申も太夫さん、爰が頃逢ひたりしたむつ様のお邸、さうといふ天下晴れの血操遠はない、必ず氣をしつか者と逢ひたる、いへどあれ、前、其の六世をば卿顔、別れし其の許りは廻りきて又も

表うゝ人々を驚かし、土氣門院の女房供等に輔の歌の心々々の言の由と傳ひし事も能仁の夢、儼い
 は浮世。吐氣な御堂の身の上と許ひにて、思はず話ぶる時出、て、これくゝ夫れにも何いはしや
 んぞ。あらねない事許ひ。こゝ聞えた、言の効めを懸うと、愛上あかし。う、虚言、都九條のお
 傾城菅原といふ事は、何に思しても知れてある。香の女中仕都替り、許の上盛。う、奇様、宜しう萬
 事お指圖と、いふ間あらせ先走り。一旦都を歸り。こゝと、しらせに。御言を指へ。う、もう驚ち
 や、一時に二人来た。御の計圖、本同盟に付たらば、ついでに。おれに。こゝつて、はひり付けた門
 口は、心覺人が有り。な物。と、言ひ捨て。奥へ入る。歸へ、岡部六彌太忠澄は、城勢も高き。廣業院、徐
 徐かへる。廊下口、二人は見るより、あの此方は、あの忠澄。た深編笠の侍、いか様目外見し。有ん
 六彌太殿に似た顔と、思へどかはり。形恰好、ふんずにあつたが其のこなたが。いかに。横目の忍
 び姿、岡部六彌太忠澄。こゝより。御ふ所の奥の殿と、手早く。密通。つかん、二人の利誘し。つか
 と押へ。こゝりマリノ、また。親言も。さぬ中から、情氣い。さひ早いノ。合點を、此の六彌太を。付。親
 ふ、ナ付は。つ。戀ひ。慕ふ、其の女房を。合點で、呼び。迎へたは互の心懸、年月疎遠に。打。過ぎた、恨
 みもあらう。憎からう。道理。おや。ハナす。憎いノ。は可愛の裏、ハ、ハ、ハ、嫌しいノ、したが。走るを
 妾といふ。聘るを妾といふ、姫儀は人の大禮なれば、表立つて。祝言を、取。結ぶは。暮。六つ。寢物語は。浮世

ム、聞きた、叔父大事の夫を吸ひ取らうとする、腕の極な女ぢやな。そしてまあた憎てらしい、あの美しい器量わいの。サア／＼こりやもう氣味い、かんしやくが舞つてきたわいな。ム、よい／＼互にいうては水かけ論、深い深い夫が證據、たとひ年號は變るとも、いかな／＼變らぬ中、直々逢うて吟味する、サ、おちやいかうとたち上れば、サア／＼兩人待て／＼と聲かけて、搖ぎ出でたる此の家の隠居、名も身の上も樂人齋、はうろく頭巾大抱、左右に胡弓と三銃を提げ、二人を尻目にかかけ、紛らひしき二人の菅原、評議の道具は此の胡弓と三銃、或や傾城白拍子は、酒色に流れて淫聲を顯はす。二人の内どちらでも、誠傾城菅原に極まれば、祝言するは此の親のこふけ。サア彈け聞かう。と管の上、脇息取つて打凭れ。サア兩人ハテしづとい、何隙とるかと手話の場所。サア／＼親人、音曲お聞きなさる、に及ばず、其の一人の紛れ者ひき出して、お目にかけん。と立ち出づる、六彌太を取つて引きよせ、サア小さかしい、親ももしく不幸者、見るも中々いまいしいと、脇息取つてつゞけ打ち、なうツレ待つて。と菅原と、俱に驚く菊の前、わな、きふるへば六彌太が、紛がみ取つて引きよする、共に若木の子の中、様子ありけに見えにける。サア彈け女、サアきよろ／＼と何うじつく。とせんかたも、涙か手に連彈の、心々やかはるらん。自身をすつる、里あればこそ浮む瀬の、あるを頼みにうき勤め。サアもうよいひくな、詮議は済んだ。九條の町の傾城菅原といふ

きをかける。不便、コリヤ子より達者な此の親父、思ひこんだる戀の意地、おうといはうがいふまいが、けふの午から身が女房、おうといへやいく、親孝行ぢや。マ、イ、停せりく、暇の隙をかけ、子は三界の首領とて、今身の上にしられた」と、傍若無人の横車、持て餘してぞ見えにける。菅原涙打ちほらひ、「ほんにさうぢや、他の女に見かへる夫、心中立つるは大きな悪癪。」「そんならおれに随ふか。」「オ、隠ふ段か帯といて、ねて花やろ。」とたち寄り、側なる刀拔打ちに、切つて掛るをかい溜り、「ヤアこりやちよございな、ほでてんがう。」と、跳ね飛ばせば、透間なく又切りかゝるを、眞のあてうんと計りに倒るれば、六彌太透さず取つて投げ、注連を飜りし袖よりも、陣笠鎧ひき出せば、見るよりハット素人齋、ひるむ所をはつたとねめ付け、陣笠鎧兩手にさ、け「なんと親人、此の二色の笠鎧、覺えがあらう見しつらん、誠や故人の詞にも、用ゐられし時は鼠も虎となるといふは、まだも能ある人の身の上、こなた命しらすの匹夫め。今改めていふにはあらねど、女房菅原が六彌太をふがひなしと思はん間ばれ、もとこなやつは六彌太が旗持の難兵、所在あつて此のごとく、親と敬ひ尊敬すれば、力量もなきかねての我儘、あまつさへ花が女房に無體の戀慕、無法非道の人畜め。悪く動かば五體を八つ裂き、リ、ウひつとでも動いて見よ。」と、鎧をもつてさんぐに、折れよ碎けと打ちこなやせば、頭巾はぬけて撥髪奴、眞の醒めたる風情なり。恥の恥とも思はぬ強忍、マ、イ、こなた六彌太

の思しらすめ、今録官で關部六彌太といはれて、榮花にくらすは、誂様が盛ちやそやい。わいのやおめ
おめと忠度に組みしかれたを忘れたな。其の時此の郎等、有い腕の切の落さずば、コリヤ此の首は
有るまいがな。いはば手柄は此の奴。よいわ是れからばね次手、鎌倉殿の御所へいて、六彌太が高名
は此の鼻がうしましたと、注進の上武蔵一國、我が手に入るが意趣晴らし、待つて今を窺め。」と、
かけ行く所を菅原が、さうはさてぬと切り付くる。六彌太は買たばこの煙、さがぬ太五平、菅原を
膝の下にしつかとねぢ付け、コリヤまつ此の如く誂様の忠度が、あの六彌太を下に組み敷き、首を
かんとせし所、一間をかけ出て其の顔、かう睨つたか太五平、右の腕を打ち毟ると、「おめといふは六
彌太殿と思ひの外、誂様の此の太五平、夫の恨みを止めの刀、おもひしれ。」とたち寄り給へば、「ヤ
アこれ今暫く待つてたゞ」と、起き上る太五平は、手負に屈み強氣の面色、「ア、忝い／＼姫君。
此の奴が念かといいて、まう切つて下さりましたの、コリヤ妹初當。」と、聞いて悔り菅原は「ムハ
初當といふは私が雅名、其れを知つたころは既に、間はれ太五平涙をうかめ、「す、かう許りいう
ては合點の行かぬはしも、ありや依い時に別れた、わが兄の兵之助ぢやわやい。」と、聞くに愈ふし
ぎはれず「ム、其の又現在兄様が、此の妹に『惚れた。』といひ、そして何ぢや『姫君様、よう切つ
て下さつた。』と、誂様の様子は合點かいがぬ。」「と、誂様はいはしき。今さういふ間の、吟君様

も聞いてたゞ、元我が親は「一」す、其の譯は此の六彌太が推量に違はず、汝が親は平家の大将、三位中將重衡の家臣、隱遁者の名を取りし、後藤兵衛守長で有らうがな」と、聞いて太五平「ハ、はつ。」と仰天「ア、叔々驚き入つたる忠澄殿の明察、草にも心置く露の、宿り定めぬ我が生立、御存じしられし様子は、いかに。」とす、それ誰か有る、繩付ひけ」と詞の下、思ひがけなき乳母の林、見るゝ慥き繩日の恥、妹は見るより「ナウ母様がお懐かしや」と走り寄り「此のママ繩日は何故」と、頼も手負も驚けば「イヤ始終の様子一通り六彌太が言ひ聞かさん、菊の前もお聞きあれ。」さいつ比都出陣の折から、御身の父上俊成卿より密かの内意「和歌の弟子たる忠度は、一方ならぬ縁もあれば、くれぐれ頼む」と餘儀なき仰せ。所に源平生田の合戦、向ふ敵と渡り合ひ、互に馬を乗り放し、念なう下に組み敷きしが、面ごし見れば見知りある忠度卿、叔こそ俊成卿の御頼みは爰ぞと心得、助けんと思ひながらも名ある敵、いかゞはせんとためらふ中、力勝りの忠度卿に、はね返つて此の六彌太、組みしかれしを下郎の汝、思ひがけなく後より、右の腕を切りし故、いたはるかひも涙ながら、御首討つてをこがましう、武門の數に刻なる中、合點のいかぬは汝が胸中、忠度卿に打ちかけしは、紛ひもなき源氏方「夫れには違ひ詞のはしな、源氏をさみする面魂、ハテ心得ずと思ふより、豫て兄置きし此の頭巾、裏に正しく書き付けしは、三位中將重衡の戒名、朝々戴く心の底、叔こそしれもの手

ばなされずと、おもひ付いたる思ひこなし、親と敬はせなまでに、心を付けしは其方が、謀略を押ふる情の獄屋。今日是非へ兩人を、そひき入れしは故の素性、責めさいふで尋ねん氣、常に思はず其方が、己と名づくるはこりや下郎の猿智甚。なんと思ひつたかりと、始終を聞いて大五半は、親骨を貫く吐息の來、母は涙の顔を上げ、流藤氏御宇良殿に堪へりしは二十年以前、七つと三つめのあの子供、受けし誰別の逢き時儀、妹が乳にて漸々と、俊成親へ乳母奉公、妹は親戚方の愛は、有るにあたりぬらん白太郎。侍の子といふたれば、俊成親が算らうかと、勘當して置く此の中に、いつぞや大五半我が内へ、刃をぬみにはびつたを起し見て、血は出べると、いふこそ幸ひ、高名して、侍の名を嗣はせよと、家の系圖を折斷と、刃に突へてやつたるが、返つて害になつた。さういふかには、數けし仇の系圖、聞いて見れば我が親は、後藤氏御宇良殿、親戚ながら平家の侍、あのれ何で、親氏に替はたし、親氏ととり違ひりし、親守長に對面とんと、専らに重む一箇條、衛守長は、主君の御前難を、ふさ防いで置けたし。後藤氏、御宇良殿と御前を取決た。その實情は、親は、不覺に名取りとんと、親に對面が難に有らん、ふさはし親戚にかけぬ。さうと、親の侍の縁取つて高名と、現子の氣を愛せんと、心を結し親戚の難場、女親愛せぬこと、親戚の縁つ組んで、上になつたに違ひに置け。さうと、親戚大將と思ふより、親の親を見一箇と、さうと、思はば、

はいかに、薩摩守忠度卿、ア、しなしたりな。よし其の場にて腹切らんとは思ひしほど、イヤノ、忠義を顯はす時節もと、味方顔にて御許を、やみノ、此方に討たしたる、無念といふも我が誤り。かくけどられし上からは、我が一分の我を立てても、とてもせんなき平家の御蓮。せめてはいらざる此の命、源君に討たれんと、殺されに出た手柄話し。エ、おでかしなされた姫君様、忠度卿の右の腕、切つた刀で切らるゝも、此の世の因果をはたす道理、思へばノ、不運なる、我が身の上。と悔み泣きの扱はと驚く人々の、中に妹は傍にある、刀取り上げ泣ながら、顔見ぬ父の筈かと、思へばいと胸をまり、くじき歎けば太五平は、妹が持つたる抜刀、手を持ち添へてあての脇腹、ぐつとつつこむ覺悟の最期。「こはノ、いかに何故」と、親子は心とり亂せば、ア、騒ぐまいノ、とおし鎮め、平家方の此の兄を、切つたは妹が源氏へ忠義、此の一刀の手柄に免じ、申し六彌太殿、必ず見捨ててやつて下さります。たつたふたりのほし折りがみ、私や彼奴がふびんにござる。成人して名は菅原と聞いたを便り、上方へ登つた次手に九條の町、なつかしさに逢はうと思へど、身はかくすけのさびた形、全盛かざる妹が馳と、三筋の町の格子の先、よいよ鹿子様、ヨウつりひ様と、ぞめきに紛れて名をとへば、客に揚げられ柏やの、二階の障子に影法師、三絃取つてなけぶしの、聲を聞いたがコリヤ兄弟の名乗。其の時の音色も聲もありくと、おりや耳の底にしみ付いて、今に忘れぬ兄弟のよしみ。そ

れ故敵前二被で、慥かに妹と見極めても、平家に縁あるものなれば、よもや譲うては下さるまじと、
現在妹に、女房になれの惚れたのと、心に思はぬ悪黨も、かくはからはん心の内、推量してたゞ保者
人。エ、遂に一日差行せず、先だつ不孝致して下され、せめて末来は、勘當々々をうと、歸いつかぬ
るいぢらし。母に取分け妹も、正體派に菊の袖。我とても思ふ情に絡よつれ、敵さへなき身の
上は、冤にも角にも我が夫の、甲斐なき御達と許りにて、見合はす四人がとも涙、顔赤ふかくに見
えけるが、何思ひけん六彌太は、林が縄目引きほどき、太五平の自狀にて、家名知られば詮議に及ば
ず、女ながら敵の餘類、マアノ、後藤兵衛が逆襲、此の家に昨にの早出て行けり、歸いて菅原今
更に、その餘りぢや勘當ぢやと、いふをも聞かず、頭と林を引たて、庭へ突き出し、女房去つた、
ハ、こりやす、やり手の付いた類城菅原、敵の娘と聞いては誤はれぬ、元の郷へ流し者、付添ひある
くはやり手の役目。一スリ、此のわしは、「一、兄弟の縁が切ればコリ、女房、一世の別れの名
残を惜しむこと情の詞、ハ、盡させぬ御恩と伏し拜む。新から拍子木家中の夜廻り、六彌太に心付
き、コリヤ、その城城やり手、古郷へ歸る郷の姿、ハ、待つて行はんと放け出す二人は、たゞ害
り取り上を見れば、行き暮れて木の下陰を宿とせば、ハ、其の下は、花や今宵の主ならまし。忠
虎郎のきいこの一言、マア、我は信ず、ハ、はつと、歎き給へば林も偶に、ありし昔を悔み泣き、ハ

テ扱され此この六彌む太たが寸志すしの情なさけ、源氏げんじは今いまを盛さかりの日ひの出で、平家へいけは暮くれ行く、アレ終つ末くの暮く六むつ。夜よに入いれ、敵味方てきみかたのあいろが見みえぬ、ソレ早はう／＼。「アお、忘わすれはせじ、もうおさらば。」と立ち上あれ、了おひ負いは今いま、此この世よの名残なごり、花はなや今宵こんしやうのちり櫻ざくら、妹いもは一人親兄ひとりのおにの、別わかれを胸むねに八重櫻やえざくら、姫ひめ二筐ふたかまの言ことの葉はに、結むすぶ心こころのいと櫻ざくら、あとに老木おいきのうばざくら、雨あめの雨あめや小夜せよあら、生死しやうじ不定ふじやうは世よの中の、ふだん櫻ざくらといさめても、つきぬなごりの山櫻やまざくら、あひ／＼にこそわかれゆく。

第五

魏王ぎわうは鄭良ていりやうの讒ざんによつて、美人めいじんの鼻はなを斷きらしむるとかや、征夷將軍せいぎしやうじん賴朝らいしやう公こう、相從さうじゆふ大小名だいしやうな、圖部たふ六彌む太た忠澄ちゆじやうを初はつめ、威儀ゐぎを正ただして相詰あひつむる。賴朝らいしやう御座ござに向むかはせ給たまひ、此この度の戦たたかひに、平家へいけの一門いっもん西海さいかいの浪なみの泡あわと消うえ失うせし事こと、全く賴朝らいしやうが武畧ぶりやくにあらず、是こが皆神明佛陀みながしんぶつだの御加護ごかこと存ぞんじ奉たてまつふ。下ひの詞ことばも奥おくのかし。平たい時忠篤ときしゆく取とり直ただし、「西國さいこくにて源九郎義經げんくわうぎしやう、平家へいけを悉ことごとく討うち亡なし、其そのの虛さまに乘のつて兄賴朝あにらいしやうも討うち取り、一天下てんかを併吞へいどんせんと、果それごとし驅かり京きやうの君きみをめとり、神璽しんじ内侍所ないししやうを奪うひ、直ただに鎌倉かまくらへ攻め入いらん由よし、急いそぎ告つげ知らせん爲來ためきたつたり。屹度きど征伐せいはつ然しかるべし」と、賢人顔けんじんがほの佞人ねいじんは、いはねど失あれと知しられける。六彌む太た聞きき兼かねつと出いで、「何なんと言いはる、時忠卿ときしやうきやう、義經公ぎしやうこうに限り、左ひだり右みぎの御

所存少しもなく、懷越まで御出で有りしを平山が爲言故、鎌倉へも御入りなく、直に御切腹召さるべきを、舊臣の輩おし留め、我が君への取りなしは、六彌太や成路承心、夫れに御邊が伺しつて、控へ召され。」ときめ付ければ、時忠も反打ちかけ、互に色立見せければ、頼朝暫くせいでし給ひ、一つを六彌太、俊人原が邊の用ゐるべき我ならず、義経頼朝に屯するは、鎌倉を度せんとの手配りならん。さすれば弟とて容赦はならず、討ちとつて我が君を討つべし。」と、氣色の變つて宣へば、時忠は思ふつゝ、心の内に含み、六彌太等も能く寄り、然らば義経公、誠の謀略にもなまぬ、三種の神器の内、中事内侍等、此の一品は尤も、義経公の御手に有り、帝都を守護に在せば、則ち官軍、それに敵討引き寄る二朝敵と同無、義経公の時は取つて其の身を害すと申す、此の儀如何、と山上、れば、頼朝頼朝が、其の儀は基上人を誅めしむたる事あるなれ、其の仔細は安徳天皇十厘の御劔を携へ、入水ありしと聞くと、今、都人衆大に家切の事と申し合はせ、松といふ海の子供を浪間に入れて海底を捜させぬに、詔五城へ参りたる十郎の御説を取り返し、家房卿に差上げしを、御所持有つて御下向、頼朝頼朝仕へ、或の朝草香一頼朝殿を謀計、時忠の官と傳き、則ち此の宮より繪旨をうけ受け、義経との戦ひは、官軍も草草には戦ひ、その路を各一同の出仕、それく。」との詞の事、はつと上り、謹んで、御説を携へて、御出で、是の出

る。頼朝公よりしうかう忝かたじけなくく、寶劍ほうけんを取り飾かざり、天顔てんがんの恐れありと玉座ぎやうざの御簾みす、半ば頃まへまで卷まき上あれば、各おのづ一度に尊嚴そんげんする。時忠ときただ大口明おほくちあきいてからく、と笑わひ、「頼朝よりしうは智仁兼備ちじんけんびの大將たいしやうと、聞きしに違ちがひし愚將ぐしやうよな。ハリヤ誰たれによらず寶劍ほうけんを所持しゆじしたる者ものあらば、將軍しやうじんの宮みやと敬まふかと、つと立ち寄り寶劍ほうけん取とつて打折うちしり、白洲しやくしうへかつほと投げ付つくれば、是れはと皆々みなみな仰天おうえん敗亡ばいじやう、時忠ときただは緩々ゆるやと座ざに直ただり、「ヤア驕あうがれそ頼朝よりしう、あの寶劍ほうけんは紛まれもなき眞赤ましかな贗物にせもの。一シテ、其その贗物にせものといふ慥たしかな證據しやうこか。」オ、證據しやうこなくて折しるべきや。寶劍ほうけんを所持しゆじしたる者もの、當宮たうみやに立つるとある故ゆゑ、言いひ聞きかする能よく聞きけ。都みやこに義經よしきね某それしを招まねき、何なんとぞ三種さんしゆの神寶しんぼう奪とひ取とつてくれよ」とある、密ひそかの頼よりしうみ延のび引きならす、智畧ちりやくを以もつて奪はひ取とりしかど、吞込つゝこめぬ義經よしきねが心服しんぷく故ゆゑ、先づ二也にゐは渡わたしたれども、御寶隨おんぼうずい一の寶劍ほうけんは某それしが、肌身はだみも離はなさず屹度きど所持しゆじせり。疑うたがはしくば是れ見みよ。」と、懷中くわいちゆうよりとりだせば、邊あたりも輝かがく十握じゆくの御劍ぎけん。頼朝よりしう公こうを初はじめとして、列座りやくざの人々ひと一時ひとときに、あつと恐れをなしにけり。頼朝よりしう重おもねて宣のたまふは、「今いまより時忠ときただ卿きやうを將軍しやうじんの宮みやと仰おほぎ奉たてまつらん、ヤアノ、諸大名しよだいみやう萬歲ばんざいを唱となへられよ」と、棟梁とうりやうの臣しんの一言ひとことに、もつてうじられ勝かつに乘のり、此の上このうへは廣宮ひろみやをひき出し而縛あんざくさせんと、すつと立ち寄り御簾ぎすずひ引きちぎればコハいかに、思おもひがけなき判官義經はんぐわんよしきね、寶劍ほうけん奪とひ取とりもんどり打うたせ、足下そくかにくつと踏ふみ付け給たまひ、「ヤア天命てんめいしらずの大納言だいなごん、安徳天皇あんていてん寶劍ほうけんを懷いだき入水いすゐありしと偏いりしを、合點がつてん行なかすと穿さつするに御邊ごへんが奪うひ所持しゆじす

る由、兄頼朝と言ひ合はせ、様々心を盡し、此の寶劔を奪ひ返さん。サア尋常に闘戦れよ。」と、仁心深き義經の、詞にけるまぬ横紙破り、無念の顔色はがみをなし、一謀られし奇怪千萬、平山と心を合はせ、汝等兄弟同士打させ、一矢を吞みと、巧みし事も水の泡。よし、此の上は絶體絶命、命限りに切り抜けん」と、太刀ひん抜いて切り付くる。引つばつして勾欄より白洲へどうど蹴落し給へば、六彌太すかす飛び驚り、高手小手にいましむる。頼朝心地よけに打守らせ給ひ、一國家をさがす大罪人、刑罰急度糺すべし、それはからへ。」と宣ふ所へ、土砂踏み散らしあわかしき、しらせの早打かけ來り、扱も平山武者所、謀叛の跡み顯はれし故、扇が谷に野陣を構へ、此の御殿を迫取り卷き、攻らんとの催し故、早速御注進仕る」と、大息ついで訴ふれば、義經に「さう打突み給ひ、六彌太、扇が谷平山が陣所に驅て回ひ、有無をいはず討取るべ。」仰せはき、兩騎、詞につる、關部六彌太、一打立てると、御前に立居る。義經は、我先が平山と、と特色見せたるやへ、花菱しき取の、扇もさし置きて、扇が谷へ、と、平山武者所、頼朝兄弟を問せんと、扇が谷に陣屋を設け、十年を闘ひつゝ、平山武者所へ、平山武者所、汝が軍事はなし故、此とて、平山武者所を構へ、御見當へ敵せんよし、頼朝の仰せを蒙り、關部六彌太向ふなり、手に立つ武士はありあへ、高きかへ、

ばはつたり、かくと聞くより平山と車陣屋より躍り出で、「ヤア、岡部六彌太、此方より馳せ向ひ、討取らんと思ひしに、遙々とよううせつ。果が手を下すに及ばずソレ兩人、物ないはせに討取れ」と下知しながらに引き返す「畏まつた」と龍井番場、無二無三に討つて蒐る。さしつたりとわたり合ひ、持つて聞いて真向挿し、突き刃の電光石火、獅子急迫虎亂入、馬手は堅割、刀手は胴切、二人が命は草葉の露、ソレ近すな」と軍兵共、喚いて掛るを事ともせず、向ふ奴ばら嫌ひなく、大膽小けさ車切、片端切立てまくら立て、追立て、あつた切り、こつたまらぬとばら、跡をしたうて思ひ、近きじやらごと追つて行く。さしもの平山途を矢ひ、馬の鼻を立てかへて、落ち行ふとせし所へ、岡部六彌太取つて返し、やらじと尾筒をしつかと取り、「コリヤ、とひき戻す。」とシヤ邪魔ひろぐな毛、とめ、そこ立去らば蹄にかけ、胸腹に風聞を明けん。愛を放せ」と、鎧の腰あふり打立て鞭打ちくれ、ハイ／＼と乗り出せば、どうこいどこへと引留める。追立て引留めはみ響、音はちり、んからころり、駒の嘸き土煙、六彌太いらつて突き放せば、馬は前立ち頭轉倒、ころりと落ちる平山を、起しも立てず取つて引伏せ、首引抜かんとせし所へ、源義經公平大納言を引立てて、徐々と立ち出でたまひ、「ホオ、手柄々々、我々兄弟へ敵せんと王む平山、縛首うち刑罰糺せよ」と仰せに、「はつ」と六彌太忠澄、手早に取縄しつかとかけ、水も溜らず首打落す。かかる所へ熊

谷入道飛鳥の如くかけ來り、義經公に打向ひて東へ下る道より、始終の様子承る、時忠朝は大納言の位あれば、私には成り難し、蓮生法師が出家の役、都へ連れ行き禁廷の御指圖を蒙らん、何とぞ愚僧に御預け下されかしと問へば、義經打點頭かて給ひ、さう神妙々々、高位の身なれば迂闊には殺されず、いかにも和僧か頼ひに任せ時忠を預くべし、吾に都へ連れ上り、院の藤原御沙汰にかけ、冤もかくも計らふべしと、仰せに、「はつ」と蓮生法師、時忠を預け申し、荒事と笑ひてすみみたる一首の歌、極樂にも巧の者と思ふらむ、森に隠ひて後見せねば、と詠歌をのこし、暇乞して歸りけり、實に末の代に至りては、敵に復た見せぬとは、此の邊境ともしねた立。義經御喜交はななく、時忠を食ふ人原を亡ぼす此の上は、三條の御毒を守り奉り、是れ打點頭都へ送り、此の邊境ともしねた立、いづれやかた人より立ててこそ、時忠三年の周部六藏と、神官とて、と傳はれば、時忠奉の大小名高きを傳つて歸洛あり、朝敵の凱歌の聲、より相舌に響き響きて、時代知らる、源氏、河内太平安なる、國々久しきけり。

一谷敵軍記終

奥州安達原

近
松
平
二

奥州安達原

第一

時は康平五つの年、後朱雀院の朝に當つて、東夷蝦夷に近慮を敷ひ、上詔を背き奉るといへども、源氏の武功に切り靡け、再び治まる時津原、八幡太郎義家公、武威靡ぎ立つる鎌倉御所、暫く銳氣を養はる。頃は如月半ばの空、朝より戰傳上りければ、早田出の日も近づき、取り傳へたる梓弓、驚叫する音響するの聲、さうに軍に思ふにける。宮内卿近衛、藤原公卿へ、播磨太郎義家公、執權藤原の權頭景成、瓜割四郎紀威儀を守つて控ふれば、上座には敕使大江大將維時、冠の紐の長き日も、早西山にかゝるきぬ。維時義家に打向ひ、「此の度某罷り下る敕使の趣餘の儀にあらず、中宮御産の御祈り、此度の大赦に付き奥州の流人、桂の市納言則國召し返すべしとの敕詔、奥州は源氏の任國、義家宜しく沙汰すべしとの御事なり。」と述べらる。義家、「ハッ。」と領掌あり、「市納言則國」とは聊かの言によつて、父頼義が任國の嗣、奥州松が浦へ流され今に存命、今の度赦免の下書、義家計らひ奉る。」と、敕答あれば、「コレヲ義家、流人の事は下狀を以て事は足る、御邊に是れより直

に上洛、十握の御前も今に於て行方しれず。少程の大事を餘所になし、優々と在園し、鹿狩山狩に目を送るは君への不忠、但し所有あつての事か。と、何がな横に蟹公家の、爪を隠せし奸佞邪智、コハ羅時の仰せとも覺えず。雲上には月花の御翫び、武士の狩漁は軍のかけ引き、軍慮忘れぬ武士共が未熟の手ずさみ御意に入つて祝著」と、一句の答へに返答も何がなとへらす口、「か様音に聞えし貞任宗任、鬼神をも欺く曲者、敵に取つてはこは者ノ、随分と積古して、敵の首よりこつちの首の、用心が肝要ならん」と、權威を空に嘲弄す。秘へ兼ねて權頭、憚りもなく進み出で、教傳と敬ひさし控へ置り、あらば御しき御一言、先年栗坂のその一戦、小勢を以て大敵の逆徒の張本、頼時を討ちしつたも其の日の軍、勢に乘つて追打ちせざるに軍の法、彼の六韜の誠め御存知あつての御批判か、ア御返答承らん」と、詰めかくれば、取制四郎一ツ、權頭、高官に對して不禮の過言、控へ召され、と雜時に誤ふ奸佞、義家それと左右を制し、頼時公の御批判も、武功を隠ます御計らひ、武の憤り、其の身も忘る、景成が過言、何條賢慮にかはらるべき」と、事を治むる明智の詞。かかる處へ小林の郷民共、折に結めたる鶴十番、御前にさしおき、中にも莊官と思しき男、假屋間近く頭を下け、「此の節日毎に小林の宮居近くあり、被故、所の者追ひ被へども少しも恐れず、飼鳥と存ずれども下々の勝手にて悪い大鳥、夫れゆる村中が寄合ひ付け、相談の上殿様へ御獻上、宜しく御上の御取次、頼み上

ける」といひ捨て御前を立ち歸る。義家甚だ御悦喜あり二歳に鶴は仙家の靈鳥、我が先祖六孫王東夷征伐の其の折から、此の所にて雌雄の鶴を得給ひ、源氏の武威千歳の後まで、輝くべき印なりと、此の小林の岡に放し、所を直に鶴が岡と名付け給ふ。時といひ所と云ひ旁めでたき家の吉瑞。六孫王の古例に任せ、八幡太郎義家はれを致つと、その札を付け、此の所に放し置き、八幡宮の神鳥と習く天下に觸れ流し、神慮を仰ぎ奉らん」と、惠みも深き御上意に、皆々あつとかんじ入る。景成遙かの槍を見渡し、「アレ心得ず、眞道行を亂る時は伏兵ありとの兵書の禁め、シヤ曲者でござんなれ」と、立ち上れば、御太尉一も、二も三も答ひし權頭、鎌倉の留守を預ける汝、其の心がけを見よう爲のわが計らひ、伏勢ならすこと屋を聞き、立ちせ給へば茂みより、顯はれ出づるは此の度の、御供に隨ふ勇士のあんく、皆坂東に譽の弓取、親父十郎伴助兼、縣次郎、其の外語代忠順の武士、はや御立ちと白幡に靡き隨ふ源氏の威勢、朽ちせぬ黄金の鶴が岡、都をさしてぞ三行く空の、何事も春は吉田の神社、百さへべりの宮雀、八百や萬の鳥の音も、賑ふ神の誓ひかや、参り下向も多き中、人目にそれと驚は、九條の里の懸廻とて、郭に名ある金富の、松の位に大土藏、二世と兼ねたる懸中の、生駒之助に添ひたやと、車水を廻さぞ列勝なり、柔の市彌不審に申し大夫さん、けふは生駒之助様に逢ひに行くとおしやんして、来て見たりや吉田であつた、うう、鶴がつまはせんか」と、いへ

ばにつこと打笑ひ、「リイノ久しう便りも遠さかり、案じもあらたな神の利生、大さうな願参り、近い
 と思へど餘程の道、定めてそなたもしんどかる。」と、いふ向うより先拂ひ、遠目にそれとさすがは大
 夫「アレ市彌、そなたが常佳拜みたがる生きた様様、傍では無禮」と花のかげ、舎人がきしらす御車
 は、當今の御弟君環の宮、まだ振袖の着から、役目も重き圓の内侍、附々賑ふ花の本、爭ふ女中の
 袖袂、御機嫌斜ならざりし馬場先の方よりも、歩み来る内侍、武將八幡太郎義家の近習、志賀崎
 生駒之助、夫れと見るより遙かに飛び去り、御忍びの行者とは申しながら、大いなる君
 の御指図で、主人義家某に申しつけ、餘所ながら御車の御供しと、言上すれば圓の内侍「オウ、は
 天下の武將と呼べる、程あつて、道を守る義家の心遣ひ、宮様にもさぞ寂感、殊更長閑な春の氣色、
 お氣慰みのけふのお供、物堅き直方殿、是非御供とあつたれど、どうやらかうやら御所のお留守を」
 「いかにも、大切なる御所と申し、四角四面な直方殿御遊興の御供には、花も紅葉もくすばりか
 へる、何がな宮様のお慰みを、見やる本陰に燈の首、覗いて見たら引つこんだり、招くをば
 なの鼻の光、冷汗かくともしらざる女中、匣はそれと見て取つて、「リイ」供の者共、宮様にも異ない
 御機嫌、今暫くお隙がいろ、お迎へは入相の花あつころ、早う／＼に様色仕了、残らず打連れ立ち
 歸る、生駒は此の場をくろめんと、眞顔になつて「アレ／＼」女中様御らうじませ、御所方には珍

らしい、進者と申す者、御體にたし事ござりますまい」と、いふに内侍が「なに進者とや、江口の裏の
浮島と、古今集では見たれども、真に見る係介が始め、さうして早うに生駒之助、してやつたりと
一人笑ひ、彼の大夫めが揚屋入りの進中を、今度一取寄せてお目の正月さぞとせん、それよりさう
もう受へ」と、お仕影を懸置が、おいより申すは文字、何をあへ定めた流れの身にも、すいた男のあ
ればこそ、すかいで足ねが動さぬか、さうだ清やと生駒が驚、常んとなんを目と仕舞、常んなど
しとせり、しんき、ひふお前と進がつて、故の吉田で合点明すとさつさにかると、野に取れはきけ
え泣き、眼へまゐたるお抱持、おめがぶれた生駒がやりたい、二人がさふのちをさうして生駒が、
あの細道はあなたのお方とやらいふとばかりと、いはれて驚き心づき、さうして生駒に御せ、我記の
八幡が家来、お前には事にもおせぬ、さう、そんなら今の様には、さう客の御とては、お前の様には、お前が知
境の仕打、そこで寄めがたはいいになつて、お前を引寄せて、さう此の様にこそ抱きしめれば、さう
お前さん、おつちもたし事聞入れすと、さうござんた、さうお前を取れば、さうさう、さうでも
あなたのお前もやと、手あはれなれど生駒之助は、進付ておたいくせに、いふ、この事めが故、
あなたの方へお前をけなまし、さうお前がわしたと又取り付き、兩手をもつと引きしめて、かくし
た所が郭の目、まづあなたにこんな物ごと、口から用で、さうお前、とり付き引かくし、さう、

美州安達原

み來ら瓜割四郎茶臼の大小いかつきに、それと見るより業腹ながら、生駒殿、主人義家大切なる急用あり、早う／＼の聲に悔み飛び退いて、急御用とは電束なし、貴殿様子を聞かずや」と、たち寄る生駒を突き飛ばし、「大切なる役目を受け、夫れに何ぞや女を挿へ見苦しき振舞、何かは御用も我等はしらぬ、早おいきやれ」とねめ廻す。戀組生駒は目を見合はせ、道理に爲方投首し、心残りて立ち歸る。續いて立つ戀組を、四郎が留めて、「コレ、戀主、エ、後は／＼、首だけ惚れてゐる四郎、ふつてふつてふり付け、生駒に許りきつい乗り様、胸癒ちやそよ、エ、爰な命取りめ」としがみ付く。ふり教して逃げ行くを、どつこいならぬとまた取り付く。「ア、これ申し、どうぞ往なして拜みます。」
「／＼／＼／＼、拜むのはこつちから」と、爲方なんどの最中へ、「鳥をさいた見さいな、さい鳥さいた見さいな、何にも得とらず御差竿」物見だけい女中達、ソレ／＼宮のお慰み、四郎とやら其の鳥差爰へよびや、四郎々々／＼に「ハア、ハア、ハア、鳥差お召しちやうせをれ」と、いふ間をはづして戀組が、逃げ行く跡に、「なむ三寶、大事の鳥を飛ばしてのけた、鳥差め覚えてをれ」と、つぶやき跡を慕ひ行く。鳥差はたち寄つて、御竿を下ししやに構へ、一つひよ鳥ひえの山の、二つ梟の子の山に、三つ木兎都鳥、そこよかしこと立ちまふふりにて匣の袖へなけ文を、ひら／＼ひらの檜木の枝とそらさぬ風情、文とり上げて匣の内侍「ハテいぶかしき賤の振舞、御前に叶はぬあつちへやりや」と、文投げ

龍門

生ぬる、わいもで行かぬ身が、離す、早く下れ。何馬鹿やつと、町にあらして追立てやり、邊へ見るとつと寄の、「レ」意地悪め、ヨリエマ何事、物なきお館の格知つて居ながら、はでな姿で晝日中、お七へ聞きたら牛駒の助は痛いや、ア人の見立内に早くノ、といふ聞き若しやと胸どきどき、ぞく男よりせき入る慰留、「レ」生駒様、ひんなた事が出来てきて、夫れでお前に逢ひたさに「一ヤアノ」何ぢや、ひんなた事とは氣懸け、其の詳をサア早く」「サイナア其の譯といふは、客は誰かしらねども、わんに合點もさうない身の相違、親方が手に手附まで受取つたと、聞くとはつたりコレ比のつかへ、どうかうかと案じる折から、驅落してこいとお前のしらせ。「一ヤアノ」それを誰が、「四郎様が」「ヤア何あの瓜割四郎がさういうたを、誠と思つてスリヤそちは郭公ニアイ落ちしてきたわいな」ホ、ほつと許りに生駒が當惑、「ハテ合點の行かぬと、いうてる間も其方の此の形、人が知つては一大事、どうぞ隠して置く所を」と、とうとうぞかう障子、明ける物音出る楓、見付けられじと懲罰を、木陰へ押しやりさらし顔、楓は其の儘絶り付き、「エ、氣の悪い生駒さん、今のしだらはどうぞいな、あの子許りが眞實で、惚れぬいてゐる此の私は、誠にいとしと思ふかと、見捨てられたあの手ゆゑ、アノ傾城と譯ある事、今の様子も書きおきて、私やいつそ死ぬ覺悟」と、用意の剃刀生駒は驚き、「マア待つた、死ぬるとは短氣千萬、そしてアノ傾城と身共が譯を、書置

にしてよいものか」と、留めろ兩手を取つとしめつさういはんまは叶へて給はる心かえ。「でも夫れは」「そんなら死ぬる」「イヤ殺した」と聲高に、困つて爲方無儀の手詰りせんら應ぢや。「エ、姉しや」と抱付かれ、顔を背ける牛車か思ひ、やうき坊主が精進の、馳走に飽いふ心地なり。折もこそあれ「お客のお入り」とのゝめく聲。何かなすひッレノノ、お客のお出でと引つぱつて逃げ行く生駒、コレ志留さん、夫婦の因めは是が部屋、必ず待つて居るそとと、尻ふみちらして走り持たせ、荷見無し髪をひき、泣の聲に知る如く、年輩の我が大層、吉次家は「吉次」呼方になうといへども、其手こはらは、八幡左郎義家平助様方、さうする所大禁地、いふまへは、同か手裏無念至極、何事罪に落さんと御肝を痛まし、そんなく君は前の人に打込み、けふ中に止まらざる此の上は義家一人、我が家来瓜割調郎、我が身方に付ければ、我が大層成死、只後ならぬは思といふ曲者、義家が又見放し、いふノと心を憂て、今に思ひき取事とせぬ、何てもはふは此の聲書き合點か。と、直をば取つて懐中より、吉次車に御手に入れら、一さめぬあること、合點に、此と色との間の書、出た瓜割調郎、時を待たず、お調子の通り生駒の跡もとじりす所上首尾、其が調子の聲を此の側へ引入れ、それを縁に打殺せば、風の神で思の聲、聲聞か我が身方に」と、いふ

もどくく、でしたく、きい先、記書の事を軍記合點か、臆制必ず仕損すなと、人を立
 たる間も、さう打應る語の香は、義家の奥方敷抄神前、附書ももやかに「難時公は御苦勞
 の御出で、夫義家等迷お目に懸る言なれども、今日は非常の大敵、何かと取り込み罷りある、無禮の
 段に眞中お敷し、御用ひの品も在らば私に」と、聞いて時威儀結ひ、義家の御内談、此の北は打
 ちたえ申した。北定の親父直方には、御預りの衆の言行がなく、毛人の心かひ、そこを親の事な
 れば、義家、言さぬ。それ（格別、某は）流り過す事別儀ならず。義家には近々東國へ進發、門
 出を祝ひ、親時が志の言物、改めて受納あれと、作の太刀直さし置けば「是れは、何から
 何まで御注目の御詞、孰に夫が門出を御祝ひとは、義家にも應報びて、蓋押し明くれば、こはいか
 に切腹したる荒身、刀、胸に流石は武將の裏、さあらぬ體に取り上げて、「武士の門出に打物とは、御
 心の付きし御言、夫がから是れは正しく兩人をためす、不祥の刀に、いふを抑へて「コレ、敷
 妙、心を定めし我が言物、婦人が聞いて何を判斷、義家に見すれば胸に疑ふのある事さ」とつくりと
 思案をして、其の返答相待つと、某が申すといはれよ奥方」と、割つて言はざる切柄は、いか様付
 細裁針の刀、箱に納めても、心のどきつき納まらぬ、氣をとり直し「蓋ござのちるに及ばぬ
 事、義家に右の品お出での様手も申し聞けん、役目済むまで暫しの内は、さう、其の刀の返

かわい婿へ附け込んで「ヤア、一寸も動きをるまい、返答が悪いと首が飛ぶもしれぬぞ、思へば、
 つくいやつ、傾城も同じな、かはいさうにいやな男に身請とは、汝等が身がつ手、すいた男に添はし
 下やるか、ハア、ハア、そんなら救してこま、あのごくだうめが」と、強う見せたる足拍子、は
 すみにすつほり立てゑほり、結び解けて櫛拂ひの、頬髭落つれば傍邊、ハット生駒を取りのぼす、
 顔のまのぐも汗たら、所定の八幡大名、俄にしよける顔を見て「ヤア、こなたは生駒之助」とい
 はれて、なむ三しくじつたと、天宮抱へて逃げ入れ、ヤア大驅りの生駒之助、金の代に連れてい
 んで、郭の法の桶伏」と、かけ入らんとする一聞より、兩人控へよ先待つて」と、立ち出で給ふは、
 我家の妹昔、名も八重幡の九重に、花もあまる、品彩コレこそな郭とやら、其の様に詞をあらし、
 苦しも此の事兄義家様のお聞きに立たば、そこ達が身の上、生駒之助とても同じ事、そこを思つて當
 んに出たは白らが情、何と其の戀絹とやらが身の代を辨へなば、そこ達にいひぶんはあるまいがの
 一回が授お金ごへ受取りますれば、「そんならば其の傾城白らが身受けした、夫れ持て早う歸れ」と
 寐耳へ水の山吹より、花も實もある取り捌き、「ハ、忝し有りがたし」と、戴きいさみくつわやは、
 九條をうして立ち歸る。生駒は面目中敷居、出るも出られぬ此の場の品、戀絹は一聞より姫の情の有
 り難き、出づるも面伏ししむ。八重幡はしとやかに二壺ごぜは相身互、何の禮におよぶこと、かう

して世話をする身にも、心に任せてぬ憂き思ひ、物馴れしもの便り、力に成つてこそばかりにて、思ひ入りたる御風情ニテ、お姫様の改まつた、大恩受けた此の身の上、お心に叶はぬ事あらば何なりと、サア被仰れどうぞいな」と、いはれていと驚かして、思ひ初めたる戀人に、千束の数は重たれど、一モウ被仰るな、よめました、戀の手管は動めの道、私がから申すからはお心づよう思召せしテ其の惚れてござんす殿御といふは、お公家様がお大名か。一ツ、や大名でなし、公家でなし、そもじの馴染の生駒の助と、聞いて何う非常な、恩と情にからぬられ、今更何と思案さへ、變に生駒が聞くと、思ひ極めて傍に寄り、う一人が腰を御存じの上へのお頼みは、よくよくつないだあなたを絶路、切るに切られぬ申なれと、いつきとんと思ひ切つて、私がお世高致しませうと、いふをこらに立ち聞いて、おれを思ひ切つたとは、うそが誰かと申すく、氣はもれぬきの端に、誠實にいと嬉し顔にわいなき無心此の上は、只よい様にいと袖目に、紅葉がさして入を結んで、おけ見るや見すつゝ、うゝ、胸ぐら取つて、二コリを懸ね、おれ、おれ、見れば果てた根性、さういふ心とはしらす、頼まれたが残念なにと、引きつゝ打ちた、く、手に取を付いて、さ、さういふ下んした、女房やと思はしやんすりやこそ、打ちもさしやんす擲きもさんす。お前の様な眞實な殿御、又、世にあらぬか、身請して貰うた義理にせよ、今の様に姫君様にいらたれ、お前を見

たれば退きとせなむ、やつほり元の夫婦ぢやと、男の膝にすがり泣く、わりなき有様立ち聞く八重、昔氣の中にも二人が心、思ひやう方あら氣の生駒、いやらしい退いてくれ、心底のくさつた女顔に見るもけがららしい。大方おれがやつた誓紙も、身仕舞部屋のすき紙、油くさい狐わな、よい加減につまんで貰ふと、ついと立つを待たしやんせ、又かんしやく悪がうか、そも突出しの其の日より、いひかはした互の誓紙、隨身藏さず此の守に、コレ見さんせと取出すと、い、い、まだ其の守の中に何やらある、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

安

と俱に、父は空しく相果てて、生きたるかひも荒磯の、島守にて朽ちなん身の、召し返さるゝは大君の御恵み、偏に武將の御情しと、低頭半身なしければ、何父の卿には空しくなり給ひしとや、是非もなし去りながら、今日歸洛の此の上は、父則國の本官を直に、桂中納言敦氏卿、いざまづ是れへ誰ぞ御装束参らせよハツト女中が取りよゝに、木鏡の島守引きかへて、冠装束花やかに、忽ち雲の上人の、威も備はつて見え給ふ一其の装束を召さるれば、貴公は高官、武官の某、憚り有り。と、土座に進め給ふにぞコハ痛み入る御禮儀、今までは天下の達人、今よりは朝家の近臣、百官百司に列なる上は、所官を包むは君への不忠、天下の武將義家に、桂中納言敦氏が三々條の不審あり。まづ第一には、三種の神器の其の一つ十握の御劔、先年より紛失し御行方知れずと給はす、禁門の外は武將の守る所、天照神よりつたはりし御寶、草をわけ地を穿つてもなぜ詮議しられぬ。第二には曩の宮御行方なさす、是れなんどは朝廷の御大事、察する所都聞近く叛通謀叛の族が所爲と、鏡にかけて緋はれたり。さすれば尊はれし直方に、其の疑ひなきにしもあらず。直方は御邊が舅と聞きおよぶ、縁に引かれてゆるかぜに、指し置くなんど世の人口はふさがれまじ。此の三つの返答聞かまほしと有りければ、ハツア遣は文通に、名を得たまひし桂中納言敦氏卿、御尤も御不審、一々承知仕る。併し此の御返答は義家存する旨あれば、参内のをりを以て。一いかに、然らば再會々々おさら

は。と、見送る式臺別れの禮法、袂も引ふ切實、大内さして歸らる、大將維時一間を立ち出で、
「最前數姓に渡し置く刀の返答、いはすと胸に定まらう。勇直方が誤り、一家とて用務はなるま
い、首討つて渡されよ。」イササうは罷りならぬ。與力官を尊はれしは、一應の越後許りでない、大
切の詮議ある直方、輕々しく首討たば、官の詮議は何を以て仕らん。いと御龜相に存する。と、や
り込められて負けの顔。左程持目なき我家が、家來の不義はなせ詮議せぬ、ノ軍に「承る。」と
笠原が、引立て出づる惣生駒。何と死なれしが、主の里敷へ加増を引入れる義理侍、我が家のこ
とさへ得しらぬ河邊、天下の誠實心元ない、是れでいふ事大切の詮議とする。義家。と、何が惡口
嘲弄も、理の當然にうしろの大義、抜き差しならぬ此の場。時立。二人をばつたと義家と給へば、身
の誤りに詞なく、自洲に腹を埋み居る。イササく數姓、最前切實の力持都せよ、早く。と、詞の
下。夫の心に内附り、此の刀は何れ得用。と、不義無き成敗する、不義をみち成敗の題目。
「オ、さうさうと討割りといふこと、知る程だが義理相、二つになつておれよ。」イササは理は判
科あつて。イササは此に不義、御尊なされぬ事か、女め數姓にかねの御書、御尊在り。時
興、強ち不義とし申され。ある女に不義とがけき、御書と申さうが、義家したか御書か、御
吟味する。と、いふとばしのが堪らうやら。それとて御不義あらば、承らぬ。と、御書に、野

う延びたと通連の勢、一エ、あの茂三、内縁の云々する事、わいの。誤は延びてこれの。エ、性悪が衆毛の延びるに困り物、同郎のお方の知つての通り、去々年の月見の夜、廻り取りにいた時に、海の中ですれ合ひ初めた女、申す、わい、わい、其の夜已も岩の端で、この人に聞かれ初め今は、現、こゝれはなげにすがない、と、子母かいの、眞實に思つてゐる事を、そでにしくりて、又、しても女さへ見立、立見、ホ、ニうなと思ひは、腕の貝のかた思ひぢやと思へば、悲しうござる。一、このや、お方のが皆道迷、しまがとなた許りぢやないぞいの。海濱賣とてこの男も成で、り、こゝれも、性悪はたまぬ、と、三人密に、男の噂、ヤ、と、ノ、父男のわんざんか、と、いうて、海からによつて、上つてくる海士の長太、あんまりわいらが渡る故、海の中であつた許り、嵐がきかいてやう／＼と四五は、是れでは賣も呑める物ぢやない、と、いへば、皆を、一、我を、男の仕事には大きな物、是れでは女海士もはだし、ど、いんで取り留め、内、内、内、でむいたりむいたり、サ、皆おぢや、と打連れて、往家々々へ立ち歸る。磯邊傳ひをくる女房、長太が見付けて、一、一、文治の内縁、どこへぢや、と、呼びかけられて立ちどまり、一、一、誰ぢやと思つたら、長太様、内儀様、御顔が、出ます、聞いてくださんせ、ちつすが長の顔ひ、弱みの上へ大熱、おふは取りわけ様子が悪い、夫れて、漁手の醫者殿へ藥を貰ひに、ホ、ニ此の間の心遣ひ、私も病が發りてゐる、一、一、夫れはいかいた

様の氣もせや」と、女房がいふをひき取つて、「内儀其の頼にはきつい妙薬が有つて、醫者殿に貰て置いた。待つて居やしやれ、一走りつい取つて来てやろ。さうか、何をきよるや、今の目如は何時が知れぬ、そよ／＼と良い風が来る、此の間に一輛出してこい。若ししげが來をへたら、此の縄でしらすぞ。」と、約束の千尋の縄、腰にしつかり女房が、舟端より真逆様、物馴れしこそ身置なれ。縄くりこして舟張の、くわんにてつ取り早く「サアか、おは沖へやつて仕廻つた、そや邊に人はなし」と、口先のすりして上つてくる、長衣がそぶりに氣も付かずいそなら世間ながら今云はしやんした頼の薬を、どうぞ早く」と立ち寄れば、「一、薬やろというたはうそぢや、持たして置いたはかうぢや。爲ちや」と引んだかへ「チエうまい風ではある、此の毒にふつとのほつて、いんまにまがらぬこの動悸、お前の此の薬で直しておくれ、たつた一服で不復する」と、抱き付けばひつしよなく、何さしやんす、夫のあるわしを捕まへ、ちやう／＼と伺ちやうら、胸だもけな細して、あたしたたるいと突き飛ばせば、「大ねはどうよく、只一度、どうもならぬたまらぬ」と、抱きしめとく抱きしめられ、なんとでんかた清の方、浪間へひやく端様の、首に抱りふり返り、さうなむく代官め、うさやたまらぬ」とうしもの患者、せう事清に心を癒し、其の餘命へはふく／＼とこゝろは静かき此の場の氣、進れて番者へと走り行く。程なく出てくる所代官、明日日暮有海門、跡から庄屋が短い符、

長い鼻毛を砂にすり付け、ハヤかう遊びまわつたが此の浦の組の者共、此の浦邊は漁師男海人清き
 の所、其の外山を耕ぐ漁師も入る迄も、外賣は僅か故、惣名無漁師と申します。と、聞いて代官
 うも謝す。つゝ、然らば山賣師もあるとな、浦方はいふに及ばず、山賣師には別してきつと申し付くる
 法度の趣、先達も聞きつらん、鎌倉組が同の神前にて、千村の鶴をお放しあり、則ち氏神の御つか
 はしめと世にしろでん其の爲に、金の札を付け置かる。すなれば右の神鳥、何處の浦山におれたりと
 も、必ず荒岸民の帳との神上意なり。と、さも親意に云ひ付け認め付け、漢手おさしてうち通る。
 跡打ちながら浦の者、うさへく濟んだわ、と、お年寄御苦勞。「何のく御苦勞はしくらうの上の
 事、皆も今のお調れ合點か、金の札の付いた鶴打つ事はならぬぞや、鶴は愚か、こんな時には覺でも
 必打たぬ様、皆念入れて調れうぞや。と、打連れてこそ歸りけれ。お谷は昔者よりとつかはと、心
 も足も、鶴打つなみの、中から出でくる以底の長女、かけ上つてはうと抱かへ。サアしてやつた、きつ
 きには甘い所を代官めが、うせたで恐うにするのしたれば、鶴と赤貝と口吸うてをつたを見て、イヤ
 モどうもこたへられぬ。と、しがみ付かれてお谷はうるさく、「サアノ、まあコレ愛放して」「イヤ放
 したら逃げさんす、慈悲ぢや情ぢやコレ拜む」「ア、ア、どうなりとせうけれど、晝中にそんな事し
 「イヤだんないく、こゝでいやなら、海の底でついづぶ／＼」「ア、滅相な、意かなんぞの様、

と、見る處で代官殿さん御にお願ひ、お暇を。暫くお待ちなれ、それで済む貝合。さうしては、
さうもつゝ、婦人へはづけて置いとこといふ顔相になす。さういふ内に足腰のお方様を載んで置いて、袋
い詰めたの荷物を一走り、坂を道で地蔵の長女があらはれて、さういふ。あいつに話さないやうには、
腹も痛くなるほど。その其の難儀で思ひ出した、さうなに役ばすことかある、とつゞて大婦人まで
言れば助をよぬとお警者の指圖、あつというとも貝々のゆり、此方をあれが物衣類まで賣代なもの上
なれば、人言ふものだてはなし、と云うても又初め他人の政、さういふ。度々後さういふと、腹を痛め
てるに、さういふつゞて大事々と二人が赤が續いたやら、よい越付前を聞き出したれば、人
馬及び工面が出る現況や、と、夫の話しに矢張り、これは觸れない。それだわしは先へい入る神佛へ
頼み上げたい、と、それと、それは真に其の眞の工面に付いて、さうなら早く戻つてねと、いふ
細からぬ政治を文治侍と、と云ふは誤り、と、さういふ、皆縁、はるゝがいわきに、見聞
つゝとは横寺物、跡月のは切の銀、目うらまの御にたる和いで、と、さういふ外が濱、藤田で日
利子申録の南兵衛をようけつしたな、と、これは又南兵衛殿とも触れぬ、不仕合を存心こんで居
て下つたは切の銀、片時も早くと心は天竹、とつとも現在に、さういふなく、親戚がぬが如在
でないか、戻すあてがなく何故かつた、と、いかん免れは女房分け入り、お前様のが皆七も、今主の

卷之四

の國にも徘徊する侶に、必ず金の札の付いた鶴を取らんとせし、毎年のお觸れにこれでも知つての事。聞かつてやれ此の四五日以前に、岩城山の麓で、金の札の付いた、鶴を殺した奴がある。な。法度を背いた殺人、夫れて國中は厳しいお尋ね。殊に此の頃は殺人者が多いによつて、格別に詰問がつよい。若し殺した者が有るなら、早速訴へに出い。訴人の者には、親ひ兄弟夫婦のなかでも、其の科を赦し、褒美として黄金十枚下さうと有る事。是れの御幸も殺生好みやが、そんな猶ほはなかりや」と、念を入れば、「さ、つがもよい、この人に聞つて何のや。そんな事、必ず氣遣ひなすねまゝに」「さ、そんならよござる、兎角問には事なかれぢや。ひよつと此の村に鶴殺しが有ると傳り上げて京で、界まで行かにやならぬ、夫れが奴さに念入れるは、此の庄右衛門様の思ひつき。お方其の内來まてう」と、しやべり散らして立ち歸る。お谷は藥漸うと、煎じ仕廻うて枕元、屏風押し聞け。コレ清童、はるから飯の湯もいかず、其様二噴はすに居ると、普賢殿が呵らしやる。此の藥呑んでからわがみの好きの茶粥の中へ、あも入れて焚いた程に、梅干に添へて、一口くやや。」と母親の詞に漸う枕を上げ、「イヤ何にも喰ひたうない。コレか、様と、様はまだ戻らるか、愛が衛ないく。」と、教ふる胸より見る親の、胸を痛めて手を差し入れ、「さ、衛ないは道理々々。精出して藥呑んだら飯くふと、此の痛みもつい直る」と、そろ／＼靴を撫でこする、心づかひの外面より、外が濱の南兵

つとはひれば御ぶ女房、よう戻つて下らんした。女子一人とあなづつて、あの南兵衛が、アよい、
てや、何もから聞いて居る。高が五兩か三兩の目盛り金に、女房置らいでも濟む事にと清吉く安方、
さう立つ南兵衛、イヤ厚いたく、わりの身上が厚いかしらぬが、我々さんど薄く成つて、家主には
ほんまぐられ、身上の切り行季一くわん、宿なしとふつたれば、借した金とらにやならぬ。今とい
うても銀は有るまい、親方、つね立つていんで引受取らうにと、お谷が腕ひつ立つ。其の手を
取つても置放し、ノレ親方、受取れにと、投げ出す。金は金ながら、遂に見なれぬ金のれ、其の礼
は金に、今潰しても三兩ほどの金目はある、それなりと常座の贖物、「オ、金にさへなるもの
なら、受取つてやらうが、三兩ではまだたらぬ」「オ、且の不足も、暮合ひまでには急度濟まう」
「ム、暮までなら聞かない事、いわ待つてやらう」といふも、ほんなしなりや、いんで居る内がな
い、暮れるまで爰の内では聞ぬ。コレ五助大儀ぢやあつた休んで貰ふに「バキ、さんえんもうよご
りますか、ヤレ、親方の役もよつ程氣のはる物。うらばお願申さう」と立ち出づれば、お谷は不
審、あの御城屋といふは「オ、虚言ぢや、かうしてゆすりにや金にならぬ、何とようした物か。奥
へいて一寐入りせう、ほんまぐられて昨日からつがすばう。お方飯が出来たら起して下はれ、難作序
で酒も一杯、の取り眼のいがみ煩、機押し明け奥に入る。跡には思案あり顔の、夫の傍にさし寄

かゝ呼びに來ると行かにやと云ふ、其の時必す泣きたるべしと云ふ、よめに成つゝな、と云ふ、今春經
するは人事のあり、其の主の名を説きて、人々を感ずるまで忘れよ。」と、是時既に其の心、なむ俗
名安堵大須賀郡公、家訓は能く守りて、一、時常て安方、今上にての御高の仕給へ、南無阿彌陀
佛南無阿彌陀佛、と、此の時まだ在世の時は、斯く申す我々で、俱に花に散らん、いかなれば
御武郡公、八幡土所我家の御安方に、世を去りた、ひし其の月日は、一、月、今日今日
が、父祖の十三回忌、言ひしに、南無阿彌陀佛、出で生死、生菩提、と、唱ふる聲に、さう告つて、
障子開けば南無阿彌陀佛、と、言はるる聲に、一つの法師、上座に坐し、合掌したる聲は、其のてこ
そ見なければ、文法にふしその國を去るべしと云ふ御高を、上と云ふ、心得ぬ等の言、は、いと尋ね
れば、「さ、不話も、合掌は、下には、また高僧に其方、我が面體みえたるは、南無阿彌陀佛、島海の
琉郭に人となり、安住三郎宗良、と云ふ、其の安方、と、いふと、番を退き、頭をたれて平伏す、
宗任表の流儀、其の今上、今日父が身は、富れば、平人の聲で、御高申す、と、言ひ、
暫くして、其の聲、我が心は、是れ、其の都に上り、祈を待つて、父が仇、八幡土所我家を、前も、
の、出で、一、月、御もなる御高、と、言ひ、御高、心、一、條、御、人、頼、
りし其の時は。」と、父、其の、衣川の城門に、軍の、一、
と、申す、
と、我、

天啓、其の身も保主せし身、其の心も保主せし心、其の志も保主せし志、其の行も保主せし行、其の言も保主せし言、其の徳も保主せし徳、其の業も保主せし業、其の福も保主せし福、其の禍も保主せし禍、其の命も保主せし命、其の死も保主せし死、其の生も保主せし生、其の老も保主せし老、其の幼も保主せし幼、其の病も保主せし病、其の瘳も保主せし瘳、其の憂も保主せし憂、其の喜も保主せし喜、其の怒も保主せし怒、其の哀も保主せし哀、其の樂も保主せし樂、其の苦も保主せし苦、其の甘も保主せし甘、其の酸も保主せし酸、其の辛も保主せし辛、其の淡も保主せし淡、其の鹹も保主せし鹹、其の臭も保主せし臭、其の味も保主せし味、其の色も保主せし色、其の形も保主せし形、其の聲も保主せし聲、其の容も保主せし容、其の貌も保主せし貌、其の儀也。

一、其の心も保主せし心、其の志も保主せし志、其の行も保主せし行、其の言も保主せし言、其の徳も保主せし徳、其の業も保主せし業、其の福も保主せし福、其の禍も保主せし禍、其の命も保主せし命、其の死も保主せし死、其の生も保主せし生、其の老も保主せし老、其の幼も保主せし幼、其の病も保主せし病、其の瘳も保主せし瘳、其の憂も保主せし憂、其の喜も保主せし喜、其の怒も保主せし怒、其の哀も保主せし哀、其の樂も保主せし樂、其の苦も保主せし苦、其の甘も保主せし甘、其の酸も保主せし酸、其の辛も保主せし辛、其の淡も保主せし淡、其の鹹も保主せし鹹、其の臭も保主せし臭、其の味も保主せし味、其の色も保主せし色、其の形も保主せし形、其の聲も保主せし聲、其の容も保主せし容、其の貌も保主せし貌、其の儀也。

事、必死とてくれなふ。われを助けよう。清に、此の家の御用所をつら、より其氣を付けと清。清重
 い、清重い。いと、呼べとていへばと息絶して、其のけがらに泣きたふれ。いかにいかなる月ならぞ
 今、我が手に離れ去に別れ、一人残つてをちやそら、あらねや。清か涙まじつと、涙が乾けば、夫は
 猶、涙にむせぶ。清を上げ二四五四の頃より、氣絶つた。清の有りうか。我が手に春ます人妻の、
 清にぞんと息を打ち、其の胸に我が身、取らる。ふみふみも死ねる。思へば是れまで多くの殺生、
 数多の息を殺す中にも、また清なれもせぬ小息を、清の胸に現る。野山にありて偶を導る、夫
 れとしらる。龍馬を、殺せば腹りし手も死ねる。まつ其の如く我々も、手を助けんとて此の現が、
 死ぬれば残りし手も死ぬるは、感然報ふ因果の道理、清は死をさす。こころへてくれ救してく
 れ、父も迫付行く程に、六道の辻で必ず待つて見せられ。こころや社に取り付いて、清は清後正
 體も取り亂れたる許りなり。清手は裏むき目に見せし。清の腹の動きに聞ける。いと、清言つて
 引立つれば、是非も縋めに起ちし。清の、指をこもて立ち上る。清の如く。いと女男が、清を突
 き駆け走るを捕ひ、前後しく取りまく人数。清は北段人よつ清つた、清の如く。清人は清れに有り、
 人達へばしせらる。な。と、清をかけて南兵衛が、一問を出れば清手の頭。清は自分の白狀によつ
 て細かけし善知鳥安方。其の外の清人とは知らしき清重者、但し清を殺したる證據有つて何と何

にあらず、三代相恩の御主人より預かりし大事の和子。御大病の介抱も心に任せぬ身貧の果、此の後主人に廻り逢はば、何と言ひあるべきを、只の腹を御用捨。と、あつ取り刀踏み落し、「ヤアうたへたるたはけ者、隠ひ我が兄、それ汝が兄の手、名は清童子といふにもせよ、定まる命はり及ぶ一人にても味方を招く今此の時、大死して忠直になるか。」スリ死ぬるにも死なれぬ命。」「一、よさかの時と汝に預ける、いさお役人御苦勞ながら。」と、いさむ禮付しをる、善知鳥、妻は泣き野邊送り、伺替もなきがらは、子にあらぬ罪公、泣く聲をいつて血を吐く鳥、智も傍に血涙、ふらふら谷が、が衰す、死骸を覆ふ隠れ笠、隠れあらざる弓取の、其の御種ともお主とも、ふにいはいれぬ苦しさは、鴛鴦を殺せし目やらん、善知鳥は返つて生き残り、我は擒となつたも、敵を欺く氣の大鳥、追付天下に狩うつ鳥、数々鳥の最いを爰に陸奥の、外が濱なる善知鳥、富、安方町と名も高き、古跡は今に残りけり。

第三

さればにや少將は、百夜通へと夕闇の、笠にふる雪積る雪、戀の重荷の朱雀道、七條堤の置橋に、盲女の引語り、襷襦の中、秘藏銀、十許りなが手を出して、右や左の道どほり、西は九州、まが

上戸、けたいぢやぞ、仲ん、いの傍にべら／＼とおけよ。」又六めはえらう引いて、うたゑ、あいつは、い得意を持て、つゝ、漬物の料理茶屋で酒肴の喰ひ飽かしゐる。夫れがけたいぢや、おみや業がわいてならんわい、けふも川作の屋敷舞臺で来たか、惣節近年茶屋方の料理が替過ぎて俺が口には合はぬ、夫れで腹が立つが無理か、それで大道掃けの大追への上、下里が何その様につかひくゑ、是れではもう乞食もやめにやならぬ。ヨリヤお君よ、おぢが風車賣うやうかゝらいか、おぢやもうわれが可愛いて、腹が立つわい。」と、もうこゝちが可愛いのが何の腹の立つ事ぞ。」腹が立たないぢや、コレおめへ、一體おりやわがみの器量のいのが腹が立つ、乞食だてそんな面白い顔が、どこに有る物ぢや、無理か、むしならどいつでも相手おつと、くだまく歸も酒草原、踏み分ける瓜割四郎、ソレ今のお侍様、ハア、と二人が大驚び、車人共が最前言つた生驛之助、傾城戀組取り逃したか、何し／＼、一サア申上、忠告よつと眼ぼりふしたれど、先もさぶぢやめつさうにはかゝられず、幸ひ爰にをら六といふやつは、酒くらふとおほう力、こいつに仕事せしめよう。ヨリヤ六よ、爰へこい、又存在な脚投げ出して辭儀しをれやい。」いやぢや、おりや茶屋の料理人より外に腰かゝめた事がない。」イヤサよう聞け、其の一人のやつおいらがいてぐつりかけて爰へおこすわ、われが爰に待伏して居て、男めをぶちめす、そこでけんさいをあなたへ渡すと、御褒美にきすに存

ういやるは無理ならず、したがもう其の様に氣を置いて下さんな、私やふつとりと思ひ諦め、心の髪は切つて居る。ハテ思ひ合つた中を引分け添うて何の本望、殊に兄上のお嫌遊ばした戀箱殿、中より添うて其の代り、未來の縁を、コレどうぞ頼みまする夫婦の衆。と、思ひ切つては中々に、見向きもやらぬ心根に戀箱も恥ぢ入つて、「勿體ないノ、夫れを聞いては私が方から、思ひ切るとも申されぬは、ひよんな物を身に宿し、退くにも退かれぬ惡縁。そんなら御詞にあまえて、御大事の物なれど此の世はわたしが信分、來世ではきつとお歸し申します其の證據、ちよつと爰で御祝言の御杯がさせましたいか、ア、どうがな」と案すれば「其のお杯、私が差し上げました」と、小屋の簾を押して上げて、さぐる目病のすり足に、縁も缺けたる三寶上器、つゞれの土の箱は、やれても告牀しけにござなたかは存じませぬが、最前から御尤もなさらない戀のお話、私も仔細あつて夫に飽かぬ別れをせし者、身に引當てておいとしかく、つゞれの袖をしほりしぞや。簡様に申さば賤しいた、い非人のめが、穢らばしいとも思さうが、私とてもまんぢら、前からかうした身でもござりませぬ。今日は此のちひさいやつが誕生日、昔を思ひ出して調べし九獻髮半昆布、心許りの身祝ひ、幸ひの折からと、慮外を忘れたお媒、サアお君、教へて置いた祝言の長情お酌申しや」と挨拶に、姫君嬉しく杯の、底意晴れたる取り結び、さいつさされつ酌みかはす。待ちませしたる非人の六、酒の匂ひを

ゐる、早う／＼とせり立つれば、ないじやくの「次郎七が九助が、エ、わいらはよい機嫌ぢやな、
 おりやうつきにから哀れな話を聞いて、泣いてばかり居るわい、」と、わいらも、ノレあなた方の形
 を見て、機嫌の程なお機嫌が酒買ふ氣がないやら、乞食に酒を振舞はれ、せめて天目でもある事か、
 嗜むゐる様な杯に、酒ならたつた一升で、配つてござるゐ根か、思ひやられておいとしいこと、涙
 と俱に又どぶ／＼「エ、いゝ／＼しい又喰らうたな、其の酒こゝへ」とたくりに掛れば、「イマノ、夫
 れから歸らうじやせう、どなたでもいつても、旦那業に手向ふやつら、おれが相手、」と尻引きから
 沖田うん／＼どつこいやらぬは乞食に差合ひ、「買うてこまて」と両方から、取り付く懸機の破れか
 ぶれ／＼あらは世界の餘り物、命の高はけんこ取り、ころ／＼轉び逃げ行くを、酒に任せて追つて行
 く、向うに数多の人数は「申し／＼、今の作が／＼ので有らう、ちつとの間わたしが小屋へ」と、
 二人を伴ひ入る間もなく、血眼になつて「沖田四郎、何方へうを」と家来もしと「暫し／＼と機
 嫌直方、」とレサ四郎あわたしい面色、先づ何を口説める、と尋ねられて「イヤ何其の儀は貴公
 も、此の程お吟味なさる、宮を奪ひし曲者、草をわかつて詮議せよと主人が云ひ付け、彌君も是れに
 お渡り、此の小屋が物くさいツレ家来共」「ナイ／＼／＼、非人め出ませい出をらう」と、呼ばれて
 おつ／＼這ひ出づる。「つつと出をらう」「ハイ。」「まだ出をらう」「ハイ」「頼上けい」と突き付く

の世に於ては、官の職を異材故にならざる、且其の時勢は一往に衰へたる、遂に出ずが功績あるか、一つ一つの出来事もあるべしとの觀察なり。ついでと雖も勸勉となす、直に逢ひて忠告せん、供之、彌惣太(タカ)、ちづらん(チヅル)^{おふかし}といふ^{かね}上りきつく八尾橋邊、一木槌の小い草、氣遣ほして、家業をも物参れ。

「呼ばねる、お結が聞かぬ。申して、御膳には下へ置かれ、此方様とはござりませぬか。」と云ふに、聞いて何にする。「さうなら今のが、コレ申し一大事とは何の講、あつても聞かぬ。」と云ふ所はし、お結も又四郎が意散、遠慮も、白紙こみくく、阿波儀渡の浪千鳥、嵐は憂ふばかりなく、親子手を取り雪の足、跡をたづて、たどり行く、心の内こそ異なりけり。半軍使直方、環の官の問行方、知らぬ筑紫の道と云ふす、夏より冬のいつしかに、既に今年の日も數も、春待つ計り枯れ残り、枯れ果つる山の樹皮ぶき、落葉の簀ふきをへて、毟守の女中仕丁もなぐ、老の忠義の一筋に、竹の圍生の實きも、つゝある高きに雪折れて、妻の遺のふり人、夫婦の人なにいよそかりける。暮先に立ち出でたう時、お年寄の雪ふりに、庭へ出て何なるも、寒氣が入らうにもうおほひり、ちと火にお寄り」と、きり炭のじようになるまで女夫合へ、いづく宮様行方なく成り給へば、此の御所は閑屋敷、我々夫婦が簡様に御番に致せども、肚心の主なげれば、玉の御殿も鳥の鳴と成り果て、今日なども宮在すならば、仕丁どもに木の草の雪を拂はせて、御遊びなされ

と、子供の様に思ふは母「イヤ申しけふ参つたはお見舞ではない、簀杖様へ、夫八幡太郎義家が使者でございます」「一ム、ハテ變つた、表向の用事ならば、家來は越さで、其方を使者とは」「コレく奥だまやれ、例にもせよ使者と有れば、娘は内諱いさ御使者、御口上の趣承らん」と有りければ「義家申し越す仔細、環の宮お行りなき事、御侍の簀杖殿誤り據なし、日延の日數も今日限り、若しも言辭なきに於ては、罪を正す義家が役、堀男の容赦は致さず、救済を以て取り圍み、敵味方と成り申さん、其の時必ず遣恨にばし思はれな、其の爲申し遣はす、使者の口上あらく斯くの通りでござんす」と、語る中より簀杖直方、いそ／＼とつて一間の内、柳箱に飾つたる扇と思しく携へ出で「探々八幡殿は天晴仁ある大將かな、元來某は平家、八幡殿は源氏、堀男となるは稀なる事と、そちを嫁らした其の時より、堀引手に赤旗一流遣はし、八幡殿より此の白旗一流、取りかへて所持せしは、兩家合體の其の印、此の度の我が誤りに付いては言ひ申葉なき男、由なき縁を組みしよと思はれんは必定、大方娘と縁切つて、此の旗を取り戻しに來るで有らう、若し去られたら其の思ひはいか許め、どうぞ此の白旗のやはり此の家に止まる様にと、此の頃神前に飾り置き、毎日祈るかひ有つて、今日娘の表向の使者として、差し越されし八幡殿の心底、たとひ堀男、敵味方に成るとても、敷妙はふらぬと有る情の謎、老人が心を穿し心遣ひの御深切、逢うては禮も言はれぬ義理、お使者歸

つて申されうは、仰せ越さるゝ、他一々承知仕る、委細の心底は對面の上申し聞かん、お出でを待
つと傳へられよ、「お使者大儀」と式儀も、弓矢の面裏門口、八幡太郎參上と、白衣ながらに入り給へ
ば、コハいつの間にと敷妙も、不審立てそこに立つ母屋、此の比絶えし一家の參會、お茶やお菓子と賑
賑し、直方邊に目をくばり、懷中より一通取の出し、「親しい中にも胸中を計りかね、今日までは増殿
にも包みしが、宮の御行方尋ねべき、手がかりといふは此の狀、契約のごとく環の宮を、密に盗み
出してくれよと、國の内侍へ頼みの文體、名は誰とも大げれども、必定安倍頼時が餘類、貞宗公任兄弟
の族、奪ひ取つて僂等が、味方が集むる柱にせん、あつた命に別條なしと、心の安堵はしなが
らも、言譯立たぬ身の越度、我が心を推はれ、一歩、一歩、一歩、我が推察も其の如く、此の程
奥州より捕へ來たる亂殺しの村人、面境尋常ならず、精目二つの眼、おれを奪て聞き及二目印、
疑ひもなく、安倍宗任一人は手に入れしが、今一人の兄貞任、此の兩人を捕へなば、宮の御方明白
たふんと、別々彼の宗任を此の館へ引かせ來る、禁庭の御沙汰を中にも、諸君明察なれば、一力
付くる情しむれ、柱中納言様御出でなりとしよれば、一歩、一歩、一歩、我が推察も其の如く、此の程
次へと改むる座席に心残れども、母と娘に立つて行く、中納言教氏朝、女冠の袂に寄り、おれ、おれ
り出でて、雪より白き白梅一枝、小園々に取り置き、参り、一歩、一歩、一歩、我が推察も其の如く、此の程
公の御不審蒙り嘸

心を痛められん、鬱氣をいらす此の松、また冬籠りの枝なり。東土申す、此の花と謡ふ、善徳の眉を
 聞かぬと、紅方が前に差し出し、義家朝臣の在する、波の詮議の一途ならん。殊更親しく一家
 の中、靜心觀察し入る。この朝の御詞とも思はず、一家は一家、政道に伏情なき義家、詮議の手掛
 りに成るべき何人、先だつて捕へ置けり。義家が家来共、勤役しを是れへ引けり。呼ばはり給
 ふ一聲に、詔の科人出てをらうと、總威の下部は麗蟲と見下し、被れ布子の廻付ながら、眼中威勢備
 はつて、直に天驕の、奥義とこそ見とにけれ。鬨や打ちたる科人、外が濱の南兵衛とに假の名、奥州
 の伴人、安徳頼時が次男宗任といはる、勇士、夫れ堀のへろへ、廻引き切るは安かるべきに、意と
 下部に引出さる、は、義家に戰鬪をいはる爲な。問いて得せん、何と、語れいかにと宜へ
 ば。是れは又思ひがけもない、そなたわづかしい名は生まれしから、聞いた事もござりませぬ。よく
 ち打ちの南兵衛に違ひなければ、元よりお前様に勿體ない戰鬪とやら一分とやら、きなかまは直は
 申しませぬ。逸前命が惜しいばつかり、河幸お慈悲に親といて、お助けなされて下さりませ。と、泣
 かぬ許りのしらん、しきふ、然らば汝うぶの匹夫下郎に違ひないなり。此の顔を見知つてをるか、是
 れこそ、我が父伊豫守、奥州追伐の折から、押し立て給ひし白旗。其の時宗任が親安徳頼時、大將め
 がけ放ちし矢先、ねらひはづれて此の處に受けとめ、即時に踏み折り捨てられし、其の矢の根はコレ

西
門
子
電
機

ふに及ばず安椿宗任に違ひなしといはれぬ歌で吐は口から、我と我が手に白狀せし、淺はかきよにと一言に、特色見する梅花の頻智、御に乗りし無念の宗任、口にくはへし眞の手裏剣、大將めがけ打ち返すを、てうど留めたる源氏の白梅一本、ウ尤もかうこそあるべけれ、生捕るも捕はるゝも時の運命恥とな思ひそし、猶此の上に義家が、遠ね聞ふべき仔細有り、こなたへ引けりと引き立てさせ、奥の間さして入れたまふ、敦氏侍を打たながめ、總杖が傍近く、異々心づかひ察し申す、未だ言譯の筋もあらざるや、「ハッ」とお放しこそ、心を痛め罷りある」と、「うこそあらんたれに付き、今日貴殿に心さしたる此の梅は、まだ寒中に空にて温め咲かせし花、天の自然にあらねども、春を待ち得てゆく花より、早きながめを人の賞翫、又ちる時も其の通り、しほみかじけて身苦しうならぬ先に、此の枝のごとくきつぱりと、切れは却つて香も深し、花に眼を身にも又、切り時が大事、左様には思はれずや」「一ム、御心深き此の一品、ちり掛つたる毛の枝、切れと驚はる天の賜、花物はねぞ御達に白梅の腰切り、健かに落手仕る」「一オ、天時明察、大江維時なんどいふ、晩者の嵐に吹きちるれぬ其の先に、花は三吉野人は武上、名を後の世にちらざる様、思案ぞあらまほしけれ」と、梅に詞を勻はせて、しづく立つて入りける。只さへ曇る雪空に、心の闇の暮近く、一間になほす白梅も、無常を急ぐ冬の風、身にこたふるは血筋の縁、不便やお袖はとほ／＼と、親の大事と聞くつらさ、娘

やきあやつぱり夫でござんした、ほんに憎い犬め。親に背いた天罰で目も潰れたな、神佛にも見離され、定めて世に落ち果ててをらうとは思ふたれど、是れは又あんまりきつい落ち果てやう。今思ひしをかつたか、餘所にしらすも涙聲、様子しられば、姉共一つても慮外な、物貰ひなら申聞衆には貰はいで、お庭先へむさくろしい、とつとと出や。とせり立てられ、「ハ、ハ、ハ、どうぞ御料簡なわれてまゝつとの間。」「ハ、ハ、ハ、つこい。」と女中の口々、「ヤレ待つてくれ女共。」「イ、物貰ひ、お錢が欲しくばなぞ歌を言はぬぞ、願ひの筋も何なりと諷うて聞かせ。」と夫の手前、ちつとの間なと隙入れた。つゝ、「い、とはいへど袖蓑が、久振りの母の前、夢の組とは引きかへて、露命を繋ぐ青絲に、皮も破れし三味線の、ぼろも慮外も顧みず、お願ひ申し奉る。現今の憂身の恥かし、父上や母様の、お氣に背きし報いにて、二世の夫にも引き別れ、泣きつぶしたる日なし鳥、二人が中のコレ此のお君とて、明けて清う、一の、子を持つてしる親の恩、しらぬ祖父様祖母様々、したふ此の子がいぢらしき、不便とおはし給はれ。」と、跡諷ひきしせき入る娘。孫と聞くより濱のふが、飛び立つ許り戸の透間、抱き入れたさすがりたき、祖父もかはらぬ逢ひたきを、隠してわざと失り聲、「ヤ、かしましい小歌聞きたうない、女共も奥へいて、お客人に付いて居よ、皆いけ、コレサ、何うじ、早く畜生めを擲き出して仕廻やれ。」「ア、コレ腹立つはれもなれど、夫れはあんまり。」「ハ、ハ、ハ、叔お、」

入る程爲にならぬ。武士の家で不義した女郎、擲き出すとはまた親の慈悲、長居せばぶち放さうか
親の恥を思うて、名を包むはまだしもと思ひの外、今となつて身の置き所がなさの詮言、恥つらも構
はすよくうせた。但しは親へ、頗當に、わざと其の形を見せにうせたか、につくいやつと怒りの聲、
袖哉悲しさやる方なく、なんのくせいもん、勿體ない去りながら、さう思しめすも御尤も、大恩を
忘れた徒ら、我が身ながらいその盡きた此の體、お詫び申したとお聞き入れが何のあろ、そりや
思ひ切つてをりまする。お屋敷の軒までも、來られる身ではなけれど、お命に係る、大事と聞いて
心も心ならず、顔押しきぐうて参りました。不孝の罰で目はつぶれる、此の子を連れて、爰の軒では
追つ立てられ、かしこの橋ではうち拂かる、うきめにあうても、此の身の罪にくらぶれば、まだ業の
果し様が足らぬと、未來が歸しも恐ろしい。此の上のお願ひには、娘のお君お目見し申すは慮外、
只、非人の子と思召し、たつた一言お詞を、おかけなされて下され」と、歎けばお君、手を合はせ、
申、且、御様子奥様、外に願ひはつてゐる、お慈悲に一言物おつしやつて下さりませ。」と言ひ馴れ
し、斷々詞に流ゆふが、かはいやな下心に、身を馳せて、祖父様と云はば、様とも、お言はば、様にし
みへたは、皆汝が此の故、吾生の積な腹から兄事大難も産み出し、生きた落つると乞食さす子を、
の様におとなしう、産み付けさまは何事ぞ、餘り惜うておれや物がいはれぬと、わこういふのは

可愛さの、哀の濱に幾重にも、お慈悲ノと泣く許り、權杖猶も聲あら、かゝ親が難儀にあはうが
あふまいか、女めがいらざる世話。同じ兄弟でも妹の救妙は、八幡殿の北の方と呼べる、手柄、姉
めは下郎を夫に持てば、根性までが下主女めにと、聴おしられてわつと泣き、「下主下郎とはお情な
い、夫も本は筋目ある侍、黒澤左中とは浪人の假の名、別れた時の夫の文に筋目も本名も書いてござ
んす、是れ見て給べ」と差出すを、取次ぐ紙のはしくれも、是の種にもなれかしと、思ふは母より直
方が、讀む文體の奥の名に、奥州安倍貞任とはなむ寶、掟は貞任と縁組みしかと、心もそゞろに懷
中の、一通取り出し引合はせば、掟こそ同筆。ハアはつと許り當惑の、色目を見せじとすんど立ち、
一蹴らはしい此の狀、彌以てあふ事ならぬ、サア奥こちへ。ハテぐつつかずと早おぢやれ。と、突
い詞にせがまれて、母も是非なく立つて行く。「なうコレ暫し、もつ逢はうとは申しまゐぬ。お身の難
儀の其の詳を、どうぞ聞かして下さりませ、申しノ」と延びあが、見ねど旨の垣覗き、早暮過ぐ
る風につれ、折から野にふる雪に、身に濡簑の蘆垣や、中を隔つる白妙も、天道様のおにくしみ、
受けし此の身はいとはねど、様子聞かねばなんほでも、いなぬくと泣聲も、嵐と雪に埋もれて、聞
えぬ父と恨み泣く。次第々々にふりつるも、寒氣に肌も冷え切れば、持病の續の差し込んで、かつは
と轉べばお君はうろく、さする脊中も釘冰、涙かた手に我が著もの、一重をぬいで母親に、著せて

けて一家の敵は八幡太郎。こなたも兄貞任殿の妻ならば、今宵何とぞ近寄つて、直方が首討たれよ。」
「、あの父様を」「オ、生け置いては我々が天竺の妨げ、此の懐劔で。」と手に渡す、難題何と障子の内、曲者待てと大將の聲に悔り、折悪しし、そちへく。」と忍ばせて、胸をすゑてどつかと坐し「綱引切つて逃げ出でんと存ぜしに、見付けられたは蓮の極め、アいか様とも行はれよ。」と、腕押廻せば義家父、綱にはあらで眞紅の絲、結びし金札宗任が、首につつくと打懸け給ひ「綱に洩れたる助けるは天の道、鳥類の命さへ重んずる我が心。況んやあつたらしき勇士、命を助けソレ其の件、康平五年源義家はれを放つと書き記せば、此の上もなき關所の切手、肩口の痣は切りさいても、武將の息の懸つた汝、繋ぎし犬も同然、日本國中を放飼ひ、何國へなりとも勝手に行け。」と、仁者の詞にハハはつと、雪に頭は下けながら、底の善惡問ひ隠す、氷を踏んで別れ行く。夫の最期を潰ゆふが、白梅の腹切刀、三寶に乗る露涙、外にも同じ袖萩か、思ひがけなき難題に、死ぬより外はなくなぐも、歸る戸口に父儼杖、儀に鉾しつかと下し座に直り、三寶取つて頂戴し、押肌ぬいで覺悟の矢の根、取るとはしらぬ袖萩が、娘に見せじと突込む懐劔、はつと難き取り付くお君、聲立てさせじと抱きしむれば、母は夫が片手に押へ「まだ女めはいにをらぬか、氣強くはいふ物の年寄つた體、いつ何時の病死もしれぬ、聲なりともよく聞いておけ。」と、それとはいはぬ暇乞。とは路程も袖萩が一扱

はお心 和ぎしか、かう成り果てて身のうへ、どうぞ追付のたれ死、是れがお聲の聞き納めでござりませう。」と、親と子が、一所に死ぬとは神ならぬ、障子押し明け立寄る教氏、母はかけおろし、やアそなたは自害したか、戦杖殿も御切腹ごころに父様も、「娘も」と一度に驚き御ひかり、垣押し破り張のさく胸、呆れ涙に別れなし。手負を見届け中納言、様子共に承る、貞任に縁を組まれし御邊、坪の詰りもなるまじ。所詮死なで叶はぬ命、袖袂とやらんも死なすばなるまい、跡の詰りは果がすき縁に計しはる。健氣なる最期の様子、天聽に申し申すべし。」と、冠け高くしづくくと、心残して立ち出づる。衣紋に薫る風ならで、奇しや間ゆる風の聲、こゝろ評とぞあらしと見、邊に心算を配る、二の對の屋隅々に、太鼓の音の喧しき。ふしぎや、此の明神様に障障を打ちとづるは、何者ぞなぞ。」とふり返る、一間の内より高らかに、「八幡太郎是れにあり、奥州の東安給貞任に見参るん」と、立ち出で給ふ御大將、續いてかう告る二人の御子。さうたたりとすかばし、弓手妻手へはつたと蹴飛ばし、「ヤアラ心得ず、村中納言教氏や、貞任と縁を以てこゝろ、此の義家、天候通は言われども、村中の道に賢き果、過ぎつる大敵の故、村中納言よりと名乗り來る其の時より、急言を云ひ立てに歌詠ます筆取らず、何事しれ者ごらんぬと、つくろひ面儀を疑ふに、我が親の御見覺えし安倍頼時ごころ似たり。其こそ宮の御行が、十代の寶物をも取り違ふとに極まべたり。さうかへて禁

庭へ入り込みしは、なほ二色の御寶を奪ひ、我が親のしの大望を達せんとす。上より下へ、争はれぬ證據は、このこと、白旗を取り出し給ひ、「最前汝が弟宗任と、別れて往へし兄弟の對面、梅の花によそへ、我が顔を見えたるかとかけたる謎、早くも悟つてコレ此の歌。我が國の梅の花とは見たれどもと、つらねし上の句、梅の花は花の兄、我が國とは、我が本國奥州の兄ならんとの詞の割符、兄弟一致の此の血判に、白旗をけがせしは、源氏圖伏の下心。此の上にも返答あるや、何とく。と差し付けられ、貞任無念の牙を噛み、逆立つ髪は冠を貫き、怒りの大息ひとつつき「エ、口惜しやなあ、我一旦浪人となつて、都の様子を窺ひしが、官位なくては大内へ入り込まれずと、流人赦免の折を幸ひ誠の教氏は先だつて病死せしむ、我なりと奮つて遂に逢はぬ舅、杖、さふ始めての對面に情らしく見せかけて、腹切らしたは許さぬ種、一通をとらん爲。所詮謀空し、なれば、親の敵八幡太郎相手向ひの勝負して、運を一時に決せん。」と、太刀に手をかけ詰め寄れば「ハ、アせいたりぬ貞任、汝獅子王の勢ひありとも、八方に敵を受け一人の力に及ばんや。又其方が一命は環の宮と寶劍の所在、責むるともよも白狀せじ、術を以て押し出す方までは、いつまでも助け置く。命ながらへ時節を待つて、戦場の勝負はなせぬぞ。いま犬死して親頼時が、大望は無にするか、弓矢の情は相互、夫婦の操も節義は一つ、貞心厚き袖袂が、最期の際に一言は、妻子に詞をかけよかし、暇乞を。」と仁愛に

といふは表、其の裏を其の儘に、桂中納言教氏卿御苦勞ぞう。」と式禮に、おさらばさる敵味方、着する冠裳束も古郷へ歸る袖袂、かりの翅の雲の上、ほに別れて稚子、父よと呼べばなり歸り、見やる目元に一時雨、ぱつと枯葉のちりも、嵐、心とわれど兄弟が、また取り直す勇み聲、さるべ涙に立ちかゝれて、幾重の思ひ漬ゆふが、身にふる雪の白妙に、さびく源氏の御大将、安達貞任宗任が、武勇は今に隠れなし。

第四

道行千里の岩田帯

傾城の、頼は誠の置き所、世界の客へそ言も、人に盡す眞實の、戀の中なる感用が、寝姿もあつとなる、其のこしかたの通ひ路は、花車のかげ橋渡り初め、生駒の手細さきとむる、響の闇を打ち越えて、今は女夫の裏賣り、わらぢにかくす八文字、おろせ頼まぬ日傘、さして行方は陸奥國、睦月に出でし都の空、谷の初聲聞き初めて、彌生は花の生まれ月、うしや櫻の顔隠す、霞をはらふ春風を、仇とは誰がいひ初めて、草のはつかに解く紐の、結ほれ合ひし朝寢髪、しんきらこいも命かや、人目堤に荷をおろし、家傳萬城神靈丹、御用はござんせぬか、お求めなされ買ひなさんせと賣聲も、

六
三
八
一
五

通^とりか、れば下部共^{しもども}ニヤア慮^り外^{の外}者^{もの}あら、爰^{こゝ}をど^こにたと思^{おも}ふ。瓜割四郎^{うりわりしやう}様^{さま}の聲^{こゑ}の聞^{きこ}所^{ところ}、聲^{こゑ}をぬいでか
つつくばひ、されからされへ参^{まゐ}る者^{もの}と斷^{こと}つて通^とりをらう。」と、留^{とど}められて戀^{こゝろ}づか、瓜割四郎^{うりわりしやう}と聞^{きこ}き驚^{おどろ}
き、猶^{なほ}顔^{おもて}隠^{かく}し行き過^{あや}ぐるニヤア胡亂^{こらん}者^{もの}通^とすな。」と、立ち寄^よる下部^{しもども}を生^{せい}助^{すけ}の助^{すけ}ニ、申し、胡亂^{こらん}な
者^{もの}ではござりませぬ、御覽^{ごらん}の通^とり我^{われ}々は賣^うり、伊達^{いだて}な所^{ところ}を目^め印^{いん}に、賣^うり弘^{ひろ}むるとは申しながら、あ
の日^ひ笠^{かさ}で頼^{たの}隠^{かく}さねば、日^ひ上^{あがり}の一日^{いちにち}も得^え申^{まう}さぬが女^{おんな}だけ、前^{まへ}隠^{かく}すが前^{まへ}となつて、聞^{きこ}所^{ところ}とも傳^{つた}らぬ不^ふ調^{てう}法^{ぽう}
何事^{なにこと}も女^{おんな}だけと御用^{ごよう}捨^すなされ、お通^{とお}しなされて下さりませ。」と、いへく云^いわれれば瓜割四郎^{うりわりしやう}ニ、聞^{きこ}
届^{とど}けし女^{おんな}商人^{しやうじん}へ用^{よう}はない、早^{はや}く通^とれ。」と、教^{しゆ}す詞^{ことば}にて人^{ひと}は精^{せい}しく、笠^{かさ}傾^{かた}け立ち出^いづる、戀^{こゝろ}づか手^てをし
つかと取^とり、「ニヤアそもむ許^{ゆる}りはいつまでも爰^{こゝ}に留^{とど}めたる、生^{せい}助^{すけ}の助^{すけ}に用^{よう}はない、戀^{こゝろ}づか置^おいて早^{はや}く通^とれ。」
と、いふに夫婦^{ふうふ}が悔^{くわ}りしニスリ私^{ひそ}等^らに見^み遣^{ちやう}へもせず、お前^{まへ}はよう置^おてか。」と覺^{おぼ}えてかとは曲^{まが}がな
い、深山^{ふかやま}鳥^{とり}も白^{しろ}鷺^{さぎ}も、我^{われ}が妻^{つま}鳥^{とり}は知^しる物^{もの}を、經^たひ姿^{すがた}はかはずても、見^みちがへてよい物^{もの}か。爰^{こゝ}で逢^あうた
は盡^つきせぬに、是^これから我^{われ}らが宿^{やど}の奥^{おく}様^{さま}、何^{なん}と憎^{にく}うはあるまいが。」と、よれつもつれつよねんな
く、恥^{はぢ}を恥^{はぢ}とも思^{おも}はぬ赤^{あか}頼^{たの}、抱^つき付^くいたは山^{やま}蜂^{はち}が、花^{はな}の露^{つゆ}吸^すふ如^{ごと}くなり、「ニヤア尾^お籠^{ろう}至^し極^{ごく}。」と四郎^{しやう}を取^と
つて突^つき放^{はな}し、「昔^{むかし}は昔^{むかし}今^{いま}は志^し賀^が崎^{さき}生^{せい}駒^{こま}が女^{おんな}房^{ぼう}、望^{のぞ}みならば汝^{なんぢ}が首^{くび}と、替^か物^{もの}せん。」と呼^よばはればせゝら
笑^{わら}ひ、「ニヤア素^す浪^{らう}人^{にん}の分^{ぶん}際^{さい}で、しやらくさい女^{おんな}房^{ぼう}呼^よばはり。戀^{こゝろ}づかに汝^{なんぢ}が首^{くび}、添^そへてこつちへ受^う取^とらう。」

り持つて合點すると、そのともふねのやうな箱に名刺、先づ心算に「御座います」と、小さい錫の器物、取り出して手に持てば、嬉しげに指先に、付けて一口呑むよと見えしが、むつくりしやつきりすつくと立てて「あらふしや、此の義理がのんを過ぎるやうなやつ、思ひ方ひりやうとして、其のあつき事火絡のごとく、筋付きに節くれなつたる心地よさ。ハ、誠や、氣に懸にても其の色白し、腹中の鬱金、變じて、顔の血色は、車輪に此の葉の青にあり、ハ、結構なりふしずなり」と、めづたに這窓の欄干付け、胸元の組んで立つたお右様、うなんと奇妙でござりましょが、まだ其が入れんならば、具足なりと兎なりと、鉢巻らござります。申し其のかはりに、必ず茶をあらと元の通方にごにやつきますさ。ハ、邊分々々と代物遣せば奥屋は、箱をかたけて別れ行く、始終の様子とくより、しなりかゝつて立ち聞くと、懸隔が耳に曰、何やら御生類之助、元の所へ立ち忍ば、懸隔無しおのゝ懸、生類之助様いなう。ハ、呼ばはりくゝうろく、尋ねたまよひ四郎にばつたりと、こは通方や。と立ち通けば、しから付きとこはい者ぢやない、只居より四郎ぢや、ハ、そもを待つて最前から、しやきはつて居るわいの。と、餘念のないを見て取るそれしや、ハ、お前なら情にはせぬわいな、誰ぢやと思つてつかへが上つて、あいたくゝと胸撫でさすれば「何としたく、痛でも痛むか、葉やうに紙入より黒丸すつて、まうしお慮外ながら、

やうは銀を持て行く、ぢや、アノ銀をや。ア、此の物騒な女が原、追刻に出合ふぬ様、用心
 していかしやませ。ア、いはれて此方は何の顔、アノ追刻が出るか。ア、思ふとも、昨日
 らうやうで今時分に、アノ向うの森の中で殺された人がある。アヤア、いふより身はがたく、一申
 しから様、我等生まれついて其の追刻がきつ、禁物、何卒今夜は爰の内に泊らして下さるませ。ア、い
 やなう、其の様な銀持つた人を、この内に留めてはマア、氣が張つて夜がねられぬ。ア、アそこが
 お情お慈悲はかみ様。アハテ夫れ程こはか留めてしんぜう。アハハ、夫れは近頃、いと、草鞋
 といへ上。ア、日、「ヤレノ、縛しや、是れで心が落著いた。」ア、めつたに落著かしやんな、妾に泊つて
 もこなたの懐に銀が有ると、又追刻が来をもしぬ、其の銀ば、か預りましょ。ア、ア夫れは、
 一ハテ叔悪い事はいはぬ。ア、手を差し入れて引出す財布、それ渡しては、誰乎と握り、「おぼ、この
 やわごいよが剣ぢやの。」ア、何のいひ預つてやんのぢや、ア、財布持つ手に兩手をかけ、引けば此方も
 門口の、柱を片手にひんだかへ、引いてかかる、方に跪すつゝ、執けて尻居にへたばる老女、「コ
 リヤおれを殺すか。」ア、よめめく旅人を打ち倒し、のつか、つて、喉へ、ほうど喰ひ付き喰ひ殺す、
 老女の業ぞ悪うき。ア、縛しやと聲を上げ、死骸を蹴落し口のはた、のこふ血汐の腕取り上げ「エ
 ェ、いふといまだ財布がぬれぬ。ア、慥に、腕うち取つて置かう。」ア、芋種の下へ取り納め、ア、又縛

一夜お泊め下さるは生前の御恩。」「ハテ不自由をお蒙ひなすば、成程お前申しませう。」「是れは是れは添し」と、夫婦が抱ひ、杖草鞋、御簪の紐とくくくと、二人を誘ひ内に入る。見もした所がお侍、どれからどれへのお出でせや」と、草鞋に懸附會經して、「ア、我々は都の者、逢々と此國へ参つたは、幼い時に別れたる。」「ア、これく女房、我々が當國松島一社の爲に、一夫は格別。一時大なる高直儀は別國へ置か、但お志の常夜燈か」と、歸還へこまばす。主君伺ふ氣も分らず、尋ねてお尋ね、此所は安達郡原を申して、山なり原なり道の明ねに掛る。丁度お前が御前に、道に迷うて馳走するが多い故、あの様に燈籠を燈し、往來の衆の助けにする。先だたれし連合の未來の闇を聞らす明り。」「是れはく、聚りなき大功徳。」と、闇の中に懸附が、旅の勞れが苦しむ體、「コリヤ女房何となく」と寄添ふ大心り。」「さうした事やらせうおながが驚かす。」「と、驚いて驚いて御座る體がいたい、サアく事ぢや。」とうろ付く夫、「ア、申し聞えや。其の様に、寝の事には旅費れ、水のかはりで有る事。」「こ、落着く主氣のせく生駒、「オエ、く、そんな事ぢや。」「づりまてね、何ぞ懸かう女房は、此の月が臨月でござります。大方其の氣が付いた。」「ヤア何ぢや、此の月が産月ぢや。」「此の年中が、ハテ生まれは。」と心の工面、夫は慌て立つた。居た。」「レ申し、どこぞ安に餅やが有るなら、取上げば、味噌汁で、漬けて喰はして下さりませ。」と、同

が、心算でに行燈の火はかき立ててもかき登る、空も物うき旅の宿、眞にまあ、人の行方と水の流
れ程定まらぬ物はない。都の者が陸奥へ昇、しかもやゝまで産む様になるといふは、ア、思ひ
ては、あぢきない者はない。と、打ち惜れぬか、ア、ぐち／＼、縦谷野の木山の奥でも、可愛男と一
所に居るか身の楽しみ、どうそよい男の子を産んで、主の悦ばしやんす顔が早う見たい。したか否し
女の子など産んだら、機嫌が悪うはあるまいか。ア、儘よ、女子ぢやとて満ちら捨てうともいひれま
い。と、取らならよい男の子を産んで、夫婦が申に添乳の枕、ねん／＼ころ／＼が、いうて見た
いと、女は、それしやの果てでもしとけなき。次館に更くる夜嵐の身にしみ渡つて物凄き、達
か原の軒の月、ア、遅い事ではあるぞ、こんな寒い所に私一人置いて、つい戻つてくれたかよい。
はんに今のかみ様が、肉を喰ひて見えてどうで着けたが、ちよつと見ようか。ア、ア、何ぞ一はい
物でも有つたと思ひ、又見たい物でも有ること、氣味悪ながらそろ／＼と、障子開いて、何やら白
い物が有ると手に取つて、ア、悲しむ。獨りぢやいと、逃げ遅く拍子に芋桶にばつたり、ア、笑にも
又人の恥」と、氣も魂も消え入る思ひ、がた／＼震ひ漸うと、表の方へ逃げ出づれば、後にすつく
り白髪のは、ア、申し／＼、ア、申し／＼と、呼ばはる聲に又胸り「ア、ア、こはい者ぢやない、主のば、で
ござるわいの」と、聞いて少しは人心地「はんにお前はおかみ様、いつの間にお歸りぞ、定めて主も

んな、きり／＼殺してまだ寺参りせにやならぬ。年寄は後生一へん、南無阿彌陀佛々々々々を二二と唱ふる日は耳までさけ、安達が原の黒塚に、こもれる鬼といひつべし。戀絹有るにもあらぬ思ひ、一私を殺すとおつしやるも、銀からおこつた事なれば、路銀も残らず上はませう。まだ其の上に此の衣類はいでなりとも助けてたゞ、幸い命をながらせて、陸奥まで漂ふも、何とぞ安う産みたい許り。よく／＼深い縁なればこそ、わたしのおなかを氣切、十月に及ぶやどり子に、せめて此の世のあかりを見せ、一日なりとも親よ子と、互に呼びつ睡ぼるゝまで、命が惜しい死にとむない。慈悲や情を申し」と、取り付き歎けど聞かぬ顔。何やらいはとやるさうなが、年寄といふ者はの、コレ此の耳が遠いわいの。下レそろ／＼やりかけうじと、小づま引き上げ玉澤、隙を窺ひ戀絹が、逃げ出づるを引き戻し、懐劍逆手に取廻せば、何と驚き凝望。コレこそ、聲が高い。サア／＼それでも、一、鬼の根とめよ」と突つかくる、刃先をよけてもよはるせず、付けつ廻りつ廻り廻り、なんなく肩先切りこまれ、立つ足さへもたち／＼。又突つかくる白刃の切先、兩手に握つて、こりや是れ程いふても聞き入れず、どうでも私を殺しやるの。エ、此方は、鬼かいの蛇かいの、死ぬる我が身は因果とも因縁とも、あきらめても死なわうが、可愛や此の子が闇より闇にまようて、母を尋ねうと、思へば悲しい死にとむない。何の因果でわしが身に、やどつて來たぞと身をふるはし、もだえ歎く

ひきらにたきながら、抱き上げて立つたも居たり、と、遅かりし残念々々、應我を待ちつらん、可愛
 の者やいぢらしやいと、前後涙にくれけるが、泣く目をはらひ喪目に心付き、ふ、腹をおぼき、胎内
 の子とて手にはけしは盗賊のわざとも見え、何にもなま此の家の業、我を出しぬき歸りし曲者、引
 つく、つて詮議せん」と、寢はせやつて其の方、王が寢屋と思しき一間、あひの戸襖踏みひらけば、
 内は朱玉をのべたる御殿、翠簾き上げたをやかに、打ちよ給ふ稚宮、傍に従ふもの身も、賤の
 姿を引替へ、十二單に緋の袴、白髪簪をきり髪や、敬ひかしべく有様に、荒れし生駒も進みかぬ、
 暫くたも居たりしが、あつとも臆せず大言上げ、「マア館に綾羅はもとへども、禽獸に等しき卿は
 ば、あの敵手の敵、寢が有らう覺悟せよ」と、詰め寄ればはつたと腕め、忝くも當今の弟君、
 環の宮の玉座間近く尾籠の振舞、かくいふ我は奥州六部の司、安部大夫頼時が妻、情なくも我が夫を
 八幡太郎に亡はされ、無念の月日を送る中、成長したる眞任宗任、環の宮を奪ひ取りしは、奥州の内
 裏と仰ぎ、諸人を懐ける謀叛の根をしいかなれば此の君、我が國へ下向の時より、物いひ給ふ事叶
 はず、一天の君として、かかる難病世の嘲り、死やせん角やと醫術さまへ、昔漢の世に有る人此の
 病を煩ふ、名付けて止聲病といふ。其の頃音楽が祕密の家方、孕める女の腹を裁ち、胎内の子の血潮
 を用ゐて立所に平癒す。我是れを行はんと、普く産婦を尋ぬる所に、今日思はず汝が女房、天子のお

役に立つたること、翻桶なる身の災難、それのみならず人を殺し、金銀衣服を奪けしも、青堂に出、助けのためにと、始終を聞いて驚く主君、其の責任の担持と有るからば、手にかげられん女が身にも。一ホ、刺ち母といふ事か。一ホ、然らば愛と責任の上。一ホ、しるぬ、愛と知つたはたつて今、愛念のさいごを遂けられし、夫頼母の魂を在すが如く此の目北、祭り置きたる魂に、女は引附しあ込みしは、親子の血筋交ひなると、愛し思はれ此の守に、吾が家の系譜者、故こそ立つたる愛が身に、注初め敗軍に、親子兄弟ちのうになりし時、乳母に産かれ別れし時は、即ち嫁へ賣られしと聞きたつた、嫁ねとふべきいとこそなく、打捨て置きしが彼等が仕合、思はすならましかつ、其の愛の妻となるは、手前者とも果敢とも、此の上の存るべき。でかしをたつととてしるる、愛のやつて殺さう病、何にもしらぬ用ををつたひ、たつた一つ愛念とこそ、道のやうなる因果に、答ふる涙はらばら、言にも責任責任を、産み落したる骨節なり、主君の助成り人か。一ホに結なら大丈をとりながら、玉座深き苦言を、如何に言はれしと。一ホ、それこそ言の御乳母、腹の内情を聞き、涙かに御所を立ちのかせし。いふ世殿、此の御妻を言にへ、とくく助の申されよ。と、呼び出せば一面より、賤の姿を其の儘に、立ち出で給ふ世の内情、と、それこそ言の御乳母、腹の内情には親とも姉とも、憎みん方なきと女の情、二十日話の目北、と、傳して用ふるは、いふ世殿、いで御妻を奉らん。

と堂にぞま行、侍衆を、堂の東の邊に見せけるが、初とかなけん、露はつたに寄衣へ、帯も、草蓑に、染のす岩角、こほをも、いかにと驚きたがら、見下す岩の岩間より、誠に満ちる水のあし、諸々音を、とけき上れば、内侍は水鏡に目も取らず、寄衣詰めて「あら不思議や、今草蓑の惡露谷底にぞ、れは、忽ち寄衣通まき上つて上中の露れを清むる事、或は上品にちりて受けず、蓮葉は露に汗れず、か種を端を顯はすは、止しう導める上りの御業、此の露巾に懸し有るに疑ひなし、ハ、有り難や、素や」と、女も、もいつとかに、引きかはつたる露巾取り、肩連立つて目のうりも、露有つて露を其の有り、老女はたけつてうたを舞、すやや短め内侍と驚かしは、寶鏡露葉の方便よ、二つ、御顔失せられ給ひしは、汝等親子が妻ならんと内通の心を見せ、義家が「千八つ若をらつて貴の宮と偽り、女」と戀をかへ、付きそひ來いし某は、八幡太郎義家が木曾頼朝、郎義光」と、暗めて名乗る武將の系圖、さきがの岩手も驚きに、只惘然たる許りなり。生駒之助す、み富り、「君は稚き時より、他家にて育ち給ひし故、かく申す某まで御顔見たらぬ幸ひに、驚き入つたる御方便、不害なるに其の御種、物いじ給はぬ病とは。」「す、それこそは稚き者に、何事ありとも物いふな、事顯はれては一大事とし、いひ含めたる止聲病。今日寶鏡の有所しれたるも、汝が妻が死したる故、莫大の功なれば、見にかはつて勸告教し、元のごとく主従」と、情の詞に生駒が悦び、はつとひれふす許りなり。岩手は

つて死んでけり。頼朝のちから山崎より、家督直任是れにあり、見参入とて呼ばはつて、實朝擁護
 へ、「つゝ、此の山で、かゝる所あらんかと、母に申しさす付け置て、番人、手首ひきとは實朝の役
 目、弟、赤任を助けし義家、敵に交はるが、實朝も心より、頼朝によつて此の御寶、只
 今實朝に在る。此の邊、高澄は戰場と、義家に傳へよ」と、實朝、涙に濡れる。母の花嫁のいたき上
 は、不孝の体面家の誤り、やみ／＼生憎とてまじし、残念至極とて物故す、いはぬと聽る千萬無幸、
 實朝、思ひて、一、敵ながらも宣れりし、諸愚中さぬ實朝り、内よる所は戦場々々、先づ夫れまでは
 おらは。」と、實朝、揚へ「ヤア／＼生憎、老女の作れる罪科も、高澄の光にあり、其の水を消すは
 浪の争ひ」と、仰せにはつと立ち寄つて、松の立木を切り置ては、旗の元も消え失せて、忽ち山崎の
 の太鼓、相國に寄せる敵の軍勢、は市ごとく傳へ、生憎も谷へ入り立てば「ヤア／＼」と、思ひ
 れなかつた、高澄は此の軍の旗、消ゆるを重なる手首の軍兵、人々の聲聞て、八幡太郎の陣
 軍まで、つゝ、がなく送り届けよと、實朝大度の詞にはつと諸軍勢、四方の圍む歸國の供、其上の供
 應なき母の、死骸を抱く真任が、胸をはがせとかき亂す、神の亂れの苦しさを、こたへる涙は／＼、
 に、衣のたては綻びて、關や峠と別る、追、勇むは前羅權五郎、生駒が脊に甥の殿、老ぞ籠りし此の
 原を思ひけりと讀みなすし、安達が原の黒塚の、其の古事を木の代に、語り傳へて残しける。

早く我と我が、左手の小腕につと突き立て、大將の前に立つたをすわり、三十年來父の敵、討たうと思ふ膽石心、義家公の御恵みに、忽ちとろけし此の上は、弟の宗任を、御家來しなれ下さらば、生前死後の面目ごと、苦しき中にも弟を、思ふ眞實しんみの血の涙、大將不便と思召し、いかに宗任、心を改め我が幕下に從ひ、安部の案を引起せと、恵も厚き御詞、今こそ願ひ達せし貞任、いづれも、いと勇氣の最期、又も聞ゆる鐘太鼓、敵にはあらで鎌倉の權五郎、瓜割四郎を提け出で、一主君に敵對するに猶も、見れ喰うて死ねと打ち付ける。引つ外して逃げ行くを、權五郎とて宗任が、ぐつと一しめ忠義の手始め、かかる所へ圓の内侍、宮を誘ひ生駒之助、權時を高手に縛め御前に引き居る。謀叛の張本大江權時、宮を奪ひ取り此の國へ落ち下り、半途に出で合ひ斯くの通りこと、詞の下に一太刀づゝ、朝敵亡びて源氏の勝鬨、早荒陣におたやかに、國も治まる君の代り、後に増し日に増し繁昌は、源氏と誇けり。

長尾景春

本朝二十四孝

近

松

中

景の妹に、八重垣とて聞ゆる事、武田にば、いとて、年比同じ子に有る由、直に縁
 請、我々の御堂、幸ひ今日の此の鳥臺、給も相成り、花菱は武田の印、竹に雀は、鳥帽
 手、長草をかけ、中睦まじう致されよ、と、いと、いと、御計らひ。コハ冥加な御堂、君が仰せ
 の御斐有つて、互に力越後國、中を結び、大將の、曾の、踏み、めたる見、家、の榮
 えぞ、三々、名に、軒端の梅の、老若男女わかちなく、願ふ誓ふも、茶屋の
 牀几に、發、俳諧三十一文字、歌に和ぐ都の地、今をさかり、梅が香や、左大臣、の、
 賤の方、及けの、打ち、したる花の下、此の下、の、より、身に、懐、五月の、帯、の、
 ひ、腰、に、至、まで、、羅を飾りし、物、御、江山城之助、跡に引添、歩、中、小者
 に至るまで、茶、當から、早盆、皆取り、へ歩、山城は心、申し、の、最、是れ
 が誓願寺、し、れにて御休み。」と、申し、上、の、御乗物を出で給、花も、御、
 「ナウ山城、今年は取り、け誓願寺の、花も一入、聞き、義、様に願ひを立てて事、其方
 衆も、い、苦勞、と仰せに山城頭を下、ハハ有、詞、コレ腰元衆、向うに見、る、
 の、様に一々教へ申されよ」と、指圖に、橋がしやくり出で、申し賤の方、御覽、ば、アレ、向
 うの、比、山城と申して都の富士、其、の、大、川、と、名、高き高臺寺、名、高き、を、に鳴

を慰め、「よし、よしぞや。」と御仰せ。山城へ行くに、思ひがけなき八つ橋に、見付けられた。此の場の草、立せくも目顔で知れぬ。我々は、御出での様子、申し入れん。」と立ち上り、正持の方へ急ぐ。跡へのさく歩み来る村上左衛門義清、直下は行かぬ頬、賤めかと見えた。御傍につくと寄り、「今日これへお出での様子、あり、御跡草ひ某が申し上げた。一通り、八つ橋もよく聞け、上北條氏時、裏の方のお姿に逢ひ、明暮千々の物思ひ、跡見、おもひにしく、申しとぐるも憚ながら、貴方にお心づいて。氏時様の悦びは、外へは行かぬ御身のため。」「然れ村主、御妻妾と、いながら、義清様の量、當世自らなれば、いはば主従。」「ア、其の御料簡小とい小さい主にも、家来にもよ、國家の政事、當世當世、日影を三三にわうより、花の方にたるのはお峰か。」「リヤ八つ橋、其方向いて許り居る。」「我々共々お勤め申さ。」「又われに、それが首だけ、思ひは同一様の媒、何と雖か、いやはあるまいが。」と、縫れかゝれる咽の下、髭頭ひつたり、立ち上り八つ橋、コリコリと、進んで迷ひぬ。」と、ただお勤め後の方、折よく出る山城か、走り寄つて腕もぎ放し、「コレ村上殿、御酒盛めかしらねども、女を捕へ、去りとはく、不有儀千萬、少と御暗みなされよ。」と、いふに八つ橋、小氣味よく、「お前の戻りが遅いゆゑ、夫れはく。」。「ア、よい、よい、委曲は聞いた、何の村上殿が無理おつしやう、ナウ義清殿、定めてそれは座敷で

コリヤ其の内に何處に居るに極つ、イデ政めん。立ち寄るを、賤の方暫しと留め、一取前ちりりと見し所、此の乗物、目蒐け逃に込だは、既に雛鳥。よし何にもせと、其の儘で連れ歸り、詮は館でナウ由敷と、此の場の難儀を助くる情、直江左心の御ひ、割つていはねど乗物の、内よ、洩るゝ有り難儀、降つて涌いたる子寶、行末に下向、御ひ館へ、重なるゝ。咲き分けし、梅と櫻の花より、更に咲かぬ町、庭も下敷く奥殿、義晴公の北の方たちやめ御前、身は妻の儘なれど、月の光、浅かぬ、賤の方の懐妊を、御身に成へて御介抱、おはらるゝも勞はるゝも、何れ劣らぬ品々、イヤ八つ橋、今朝から賤の方様の、顔が悪い故、殿様に、殊なうお案じ、心懸りは昨日の夜先、昔しや怪我でもなかつたか。と、雪れに鵜角答へさへ、我が身の戀に絡まれて、言ふもいぶき。賤の内、おもてを申し、賤の方、今に御めをやめ様のお心づかひ、申し、賤の方、結で、何の怪我がござりませう、夫れはともあれ、貴方は定まる御本妻、賤しい此の身を上に立て、結構過ぎる御挨拶。おつぱりどうしやかうしやと、仰有つて下さりませ。一足れはあらぬもない、自ら殿様に馴れ初めてより、今に於て子を儲けず、朝夕雨りし甲斐有つて、お前にお肌を箱されしは、取りも直さず我が子同然。殊に左参みは御男子のしるし、足利の御世繼と思ふ程、賤彼方が大切。情氣嫉妬は御前の、習ひといふも下々の、思ひ違ひし詞の裏。よしなき事々苦に病んで、若しもの事が

二人へ決き付け同士打ち、甲斐も越後も我が領分の御子とて言ひながら、本信が胸の中、某が思ふ所をうあれば、邪魔にならぬはかの一人、心が、その時景勝、しまうて取るが土分別、其の片腕は村上義清。」「ハア御、さうもなく、直ぐの通り、某も元は信濃の領主なり、が、晴信謙信に切り取られ、其元の情によつて、上流の御方なすうへは、再び信州へお歸しあらば、此の上もなき拙者が悦び。ホ、我が望み達せし上は、元一統なる信濃の領主、氣遣ひあるな。」と氏時が、常なき國の切りとり話し、後に聞き、有るぞしも、知らず思はず見合は、。「ヤア長尾、郎景勝、出仕致さば案として、何故奥御殿へ通らぬ。」と、ていはいひしぎになつとも動ぜず、「ホウ、北條殿の仰せとも存ぜず、出仕の時は先づ人並の所に、つて、其の後奥へ通るが作法。」「ム、然らば其方に最前から。」「イヤたつた今何もかも。」「イヤ何、何と。」「イヤサ、人のお話の終る所へ参りか、御挨拶もそれ故延引、御兩所御書勢千萬」と、寄らず障らぬ景勝が、著著く詞に落著かぬ、破れかぶれと義清が、切り付くるをかい漕り、何科有つてお手討に。」「イヤ、謙信が子とは知りながら、つひに是れまで手練を知らず、武藝の試み少しの差出、ム、拙者が手の内試みあらば、など尋常の勝負もなく、子供童の切り合ひ同然、事仕至極の左衛門殿、お望みならぬお相手。」と、言はれてせき立つ村上が、廣言憎しと又切る刀、鐔元むすと引揚へ、是非知りたくば腰骨に、覺えられよとどうど投け、膝に引

數く餘繼の拍子、切り込む氏時受けたる早業、北の方へ響きて、天時祖より三郎景時、武將の試み
氏時も義清も、見やつて面や本望」と、それとはなすし化の、無言の聲に響ける兩人、はたきこ
く立つて行く。さう景時、其の文讀習は、日外より上達せず、はたあらんと思ふの頃、近々に
上京との噂、我が君にもお侍る家ね」と、許さぬ三郎頭を下付、理氣が不行跡、縁起の吉日も
なく、夜ひ給はる有り難き、親子が面目足らに思ふじや」と、詞のまばへ小僧共へ出仕の儀を諭す、
早う睡べ」と御せ計はてさうとする。一はんに暮れた事だ、お寺の家にに氣が分るゐた、結
信の出仕にも程はあゝい、さういふ時方へは、思ひき、おもいふ事もさしき、化の天機をふやに、
御前をさして入りけり。お前さんの行儀、おもい江山に、つなかる程の儀、ひひつづつ、
一直江横、違ひなかつたこと思ひ付いて、語は詞も變が、能くしめる際、の内へ入つて、
殿へ、噂ははる程に聞え、聞え入ることを、山崎が執にすめれば、こればかり、あれ、
呼んでゐるに、マア、いふこと、お前さんの、お前さんの、お前さんの、お前さんの、
と引き合ひ、お前さんの、お前さんの、お前さんの、お前さんの、お前さんの、
なづの風情を、見る、見る、見る、見る、見る、見る、見る、見る、見る、見る、
有り難き、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、

の方より御同然。殊に主人恩轉へ預け置かれし御身の上、見付けられたら一大事、眞平御免こと、立つ
を引きたり、より何の様にいうても、「不義は我家の堅い御法度」「ム、夫れ程堅い御法度を背き
八つ橋とはなせだかりやつた」「ム、それは。」「サア斯ういへば責むき、知るぬで済ませし昨日の決
先、思ひ思はぬ其方の御意、我が親の叶はぬ事は、八つ橋と不義の様子、我が君へ申し上ける。」「
「ハッ」法度、夫れおつしやつては二人が命。」「それ程怖くはわし仕舞にして、サアおぢや」と無用
に引つはる。聞より、不義者見付けた動くな」と、聞あら、かに義晴公、刃道取れ出で給へば、續い
てかけ出る北條氏時、直江が髪引つ揃ひ、縁坂ににじり付け、「言語道断い不義者、縛首討つ覺悟せ
よ」と、言ひも切らせず、ム、なう其の人にとがはなし、心をかけしは自ら許り、よきに計らひ給
れ」と、覺悟の體に御大膽一身が手にかくる覺悟せよ」と、限り上げ給ふ切の下、「ヤレ待ち給へ。」と
たをやめ御前、賤の方を押し圍ひ、「イヤ申し我が夫、一朝の怒りに其の身を失ふと候、よくも御存知
ありながら、酒に長じ色に迷ひ、善なる事も惡と見て、御威敗なされては、園中に人種はござります
まい。賤の方の不義放埒、識と見せて實でない事、此のたをやめが見ぬいて置いた。サア打ち聞はて
給はれ」と、仰せも涙の顔を上げ「御推もじの上は包むに及ばず、過ぎし比よりお目に入り、義晴公
のお姿と、持てはやさる、其の内に、君のお嵐を身に宿せど、御怒りの色目もなく、様々の御勞り、

市にはやれども、^{しやくん} 市に片もなく、^{ひねん} 無念の年月を送る所に、^{ふしぎ} 不思議にも此の朝、^わ 我が手に入る
 しは、^{てんたい} 天地未だ捨てざる所、^{たれかれ} 誰彼と申さん、^{おそ} 恐れ多く、^{よしはるこつ} 義晴公王告と仰ぎ奉らば、^{武士} 武士の面
 目足れに過ぎじと、^{きり} 龍り登りし新左衛門、^{さのみ} 若面して召す時は、^{あつ} 罵を待たずして行くと申せば、^{はしか} 慥にも
 名ふす、^お 召しに應じて、^{めしつ} 御前へ進み、^{すぢ} 執成しねがひ奉る。と、^お 御を下けて述べに、^お 大將一々、^お 問召
 し、^{しやくん} 件根を見込み、^{めしつ} 召使ふ所もあらん。レテそのはうか、^お 御の物、^い 御田なる處に用ゐるや、^{かた} 諸れ聞か
 んと仰てある。ハハ、^{いこく} 是れこそ、^{てつ} 戦国において、^{いみ} 戦相と盟名を呼び、^{たま} 玉を仕込んで、^お 敵す音、^お 雷霆の如
 く、^{こと} 當る事遂かにて、^{たか} 戦ひに用ゐる第一の兵器なりしと聞いたる許り、^い 未だ此の時にて見ざりし所、
 明も先月六日の夜、^お 烈しき颶風吹き起し、^お 大船小船いふに及ばず、^お 中にも、^お 唐船と相見え、^お 種が島の
 浦にて破損せしが、^お 濱邊に残りし此の鐵砲、^お 拵を致すし泰公初め、^い 全より是れを奉本として、^お 戦場に
 て用ゐ給はば、^お 敵は残らず。と、^お 左衛門の意ありといへど、^お 用ゐる事を知らざれば、^お 取れ得ご
 るも同じ事。さういふ汝が其の鐵砲、^お 遺ひ保存じてをば、^お 我が目通りで傳授せよ、^お 早くく、^お 義晴
 の仰せに、^お はつと新左衛門、^お 辭する色なく手に取り上げ、^お 君に向うは憚りあり、^お 不禮は御免と立ち
 直り、^お 態と後を見せたる手の内、^お コン／＼御覽ぜ、^お 斯くも憚へし大蓋の所、^お さす敵と見るべらば、^お ま
 つかうあれ。と引鐵に、^お どうと響きし大葉、^お 狙ひ外さぬ義晴公、^お うんと許りに息絶えたり。是れはと

敵は諸大名、よく通したと下知に連れ、取捨く家来を事とせせず、離り立てたる戦絶の一手に恐れ
寄附侍が如く、其の敵と北のが、てうと打つたる長刀の、刃はなをけつて蹴上ぐれば、頭さす付け入
る石突にて、落ちたる鐵砲はちりもせず、ゆゑも深く掛井にへ、飛び込めし跡は、心驚かぬたやめ
御前、君の亡骸奥の間へ、敵の詮議は此の鐵砲、通はせるとも違ふは行をじ、四門を固めて取手迄さ
ぬ、手習を定の知らせの鐘、氏時早うとがひんとしく、仰せ受つて次の間へ、走り入るより相繼の
鐘、響に連れたつ御殿の内、左衛門太政に手合はし、想行佐助一時に、四方八方圍さしは、通れか
たれも有様なり、かかる頃どの奥庭より、目許れ出した大明、腰の方を引と出て、駆け行く様に三
郎景徳、前者待とと呼ばはる御、心算岩間に打込む手裏劍、通る、曲者景徳の三郎、懸断なれど、手
柄の手裏劍、是れを證據に一言、通る、逸足出して追つて行く、無さつと武田景徳、君の大事と心
も空、勢ひ込んでかゝれば、引續いて景徳の増長屋入、通断、只今も清仕るゝと、不和なる中は物
をも言はず、かけ入んとする一同より、氏時向うに立ち寄がり、五番の武田景徳、君御常川の御用
へは参りもせず、納め過ぎた出仕御、故多に用へは通うぬと、一、通信とて左のこころ、子故にさ
かる身の變ひ、行方知れうと三郎が、現と顔て變さし景徳の身許子、御殿に響くは武田景徳、被捨
てて仕置されと、わくる詞も一物二言、三方御議の折ぐらに、北の方なるを御前、鐵砲は川で

給へば、言々歎ひ下る。珍らしや謙信、思ひ寄らる我が君、御最期より、すべて疑ひかゝるといへば、取り分けて武田長尾兩執權、天下の政道も執り行ふ身を以て、久々上落せざりし越度。又大膽太夫時信は、今日に限つて出仕の意あり、日比の不和も我が君を、人知れず害ざんと、疑ひ掛る兩人を、其の儘に差し置いては、女ながらも身の誤り、心に覺えないにもせよ、此の場の大事にはづれし不運、自らは元よ諸大名の疑ひ晴らす思案が第一。源家の忠臣土佐坊昌俊、儼然に密紙を書き、誠を見せたる七枚起請、夫れは誰しも聞かある書ひ、是れは夫れに事かはり、本心暴露胸の鏡、磨き立てたるしるしがなうては、身の上の曇り晴れず、家を立てうし立つまいと、面々の返答次第。サアリテ何と。北の方、彼方此方を思ひやり、わつと泣きたい所なり、泣かぬは追大將の、奥ひかしくぞ見えにける。理の當然にきしもの二人、下る額の皺よりも、肩に寄る浪瀧に満ち、暫し詞もなかりしか、何思ひけん武田時信、すんど立つてかたへなる、紅梅一枝につしと切れば、謙信も劣らじと鳥帽子の真中さつと切り、「御返答申すも恐れながら、昔が今に至るまで、悪事に組し家國を望み、叛逆無道の名を取るも、子孫に残さん爲許り、夫れに引替へ果が胸中、花物いはねどまつ其の如く一子勝頼が首討つて、御覽に入る、が身の言證。」「ト、謙信とても斯くの通り、倅景勝が行方を尋ね、善惡たりとも首討つて、御渡し申す證據の鳥帽子、勝頼にも、景勝にも、心を残さぬ我々が、北の方

への申譯、此のうへにも御批判あらは、御せ聞けられ下され」と、便り言ひつゝ、和符を合はせし忠義と忠義。たゞやめ御前涙なかり。心成見えた此の二品、正けかへとも。兩家の親友、花を惜しまぬ心の誓言、是れに上こそ事有らう。其の所存を見る上は、其早勢風景移り、殺すまでにも及ぶまじ。猶此の後は自ら、力と順む時信誼信、此の懐祖こそ誼議の信、浦ぬ歌を討て果て、君の御無念晴ましてたも。一々、、發明なれとも思は女情、常世のぞれと云と思ひ、殺すなとは不覺不覺。誰人は格別、此の氏時いかにして吞込まぬ。花と鳥啼子に響へし。さひ言計つて出まほし。」と、何事な支ふる邪智居好、たをつめ暫しと言ふ。餘ひ、諸大翁の機となる。さ古昔の所、一々、ひし詞は金鐵、なごに城がある。まご、餘ひ餘る所、ならさ其の機にて聞さうや。まゐりながら、概は潔白立つらまとも、我が此の、同起、追勇供養するまで、勤むらひの命さう。其の機には助けんま、況んや新さう人の頭、鼓も其の鼓の行方、朝生三葉の其の内、成ぬ出らば助けん一人、入れも叶はぬ物ならば、討つて出さむ世の情、我々の仲は其の通り。ま、二世と云はたる思案を、恨よりふつと押し切り給へ。ま、助信是帽下と云ひ給へ。花の一寸を愛する果、愛するは上君の情。ま、指ぬ抜いて懸拂ひ、影をこのば名も改め、今より武田入道信と云は名し、心は愛する。其の情、忠義に忠義を重ねんと、思ひ込めた。一冊の源氏、愛にさへし結の愛、愛の愛に懸な。ま、ま、

の間は獄屋の内、御心慮易く思方せ」と、我が子の命黒髪も、切つて捨てたる勇僧の、其の名も武田信玄と、云ひ傳へしも理なり。氏時ほとんど笑壺に入り、「本、左程の性根を見せずんば、誰信晴信とはいはれまい。敵の所在しる、まで、我は都に押留まり、君の亡骸取り納め、政道糺す身が役目。よもや逆背は有るまい。」と、己が悪事を白洲の内、身の誤りに山城之助、悄々として手をつかへ、「賤の方を奪はれし我等が越度故、主人景勝へ疑ひ掛りし申譯」と、刀の柄に手をかくる。「なう待つてたべ直江さま。」と、八つ橋も轉び出で、「不義は二人が誤りなれば、お前許り殺しはせぬ、我も共に。」と死覚悟。誰信聲かけ、ぐつと睨め付け、「八つ橋と不義の様子、倅が方より聞くや否。勘當と申し置きなれば、主従でもない、汝らがむだ腹、五十、百切つたとて、かかる大事の爲にならんや、うろたへをらば逆藥、兩人共に出てうせい。」と、口と心は裏表、情の勘當ありがた涙。早退出と長尾入道、「君を害せし面體は知らねども、惡逆千里に響かせし此の鐵砲こそ因人同然、某急度前置き、詮議の工夫は胸にあり。先づ夫れまではおさらば」と、鐵砲提け立ち上れば、信玄も諸袖に、禮儀は演べても顔と顔、不和なる良將勇將の、中を隔つる北條氏時、底意を見抜く北の方、浮む涙も手向の水、別れ／＼て歸りける。夫婦も返らぬ御殿の名残、是非もなく／＼立ち出づる。村上左衛門義清、横田兵内諸共に、手の者引具し立ち寒がり、「ヤ、何所へ／＼、義清が心をかけた其の女、此方へ渡

さばよし、雲霧に及ぶと目に物見せん、なんと／＼と呼ばはつたり「マア怖くもない義清風、如何やうに吹かしても、身動きさせぬ大事の女房、主君もなければ遠慮もない、指でもさば撫で切り」と、八つ橋圍うて突立つたり「ものな言はせを討ち取れ」と、抜き連れ／＼切つてゐるを事ともせず、夫婦諸共抜き合はせ、切り立てられて村上左衛門、命が大事と逃げ行く跡、打ち合ひ切りあふ刀の光、電光石火の間もなく、薙ぎ立て／＼三重薙ぎ立つれば、残る大勢立つ足なく、頭わられて血は流つて、逃さぬものを横なぐり、兵内すかさず後から、直江やらぬと切る刀、ひらりとにづけば思はずも、家來を袈裟に切り付けた。是れはと驚く兵内が、首と胴との生別れ、心地よかりし事ともなり。邪魔は拂ひし嬉しやと、悦び歎きの数々も、然し七重八つ橋が、腹りを得たる女夫連、すて此の上は賤の方、再び廻り近江路や、敵もいつかは美濃屋敷、果ては駿河の富士よりも、名高き君の御最期を、悔めど更に申葉越後、不和なる中も陸奥の、直なる直江山城夫婦、忠義に代々に岩清水、清き流れの木曾川や、夜半に紛れて出でて行く。

第二

恵みは四方に隠れなき、下諏訪の神垣は、下照原の御神にて、雲霧あらたにまゝすゆゑ、近國の

貴殿、歩みを進み願ひに、神宮が小姓神樂、神慮を無きものとせしむるに、神に今日は卯月の初め、御神事の宵宮とて、商人、百姓、草刈の小輩まで、お参り、お直長、たえ間なき奥の中に、車遣ひの装束、馬場前に車引き揃て立ち寄つて、一々、宵近在の知つた者共、太郎ま、丑松ま、能う参つたな。」

「ま、眞作、遅かつた。」とれば已ら上諏訪まで、油断つけて行て草刈れ畢て、ちつと休んで跡から往くと、神前の大石に腰をかくれば、「コレ、眞作、其の石は御神様の力石とて、其の石に腰をかくれば、其の靈い石を上げねばならぬ。」と左様ちやけなけれど、神は見通し、見て見ぬふり。」

「まんなら休んで下向仕や、後に逢はう」と別れ行く。是れ等も同じ車遣ひの悪者共、宵宮参りに肩背を、いかつ聲で、「ヨリヤ眞作、わりの此の神祠の力石の事知つて居るか。」と眞にさうぢや、只今も子供等がいうたけれど、餘のしんどうさに忘れてひよつと、「イヤ忘れた」と言はれまい、昔から當社のならはし、腰をかくれば叶はぬ眞作、ナア勘八、九介、一、二、權六がいふ通り、其の石を上げ、土にや宮へ聞つて、明神様のお神酒代を上げるか。サア、どうぢや」と、石の手詰に眞作が「知つて居ながらおれが龜相、二人三人か、つたとて、地放しもならぬ力石、どうぞ皆が沙汰なしに、下内で、一々や清まされぬ、上げねば宮へ引きすつて行く。」と、さうぢや、日比から女たらしで生しらけたしやつ頼、踏みにじつてこませい。サア立て、動け」と、兩手を引つぱり、せちがふ折か

九介も、鳥居前で目一杯やりかけう、サア来い／＼と鼻唄で、鳥居の前へと急ぎ行く。夕暮時は、参詣の、人も途絶えて神前の、御燈の光森々し、神衣び渡る其の景色、年も漸う十七か破竹草履も、足輕に、見ゆる所體もほつとり風、武田の腰元濡衣が、何か願ひは鳥居より、騎す櫓に數取つて、お百度参り大臈も、引手に神や磨くらん。跡から憎い風俗の、大道はたかる鳥居先、信心白砂踏み付けた懷手して神参り、姉様能う参らんすの、俺も明神せぶりに来た、お百度の連になりやんしよ。」「是れはマアノ、何誰か知らぬが、幸ひな道連、最う日も暮れ掛つて、女一人は心細い。」「左様であろ左様であろ、地體マア日暮から、大膽なけんさい様ぢや、マア一度鳥居から百度は大儀、姉様しんどか、手を曳こかえ。」「ハテしんどいとて大事の願ひ、身をこらさいで好い物か。」「ム、身をこらすとは戀であろ。」「イヤノ、そんな事ぢやない。」「それなれば好い著物が、欲しいといふ願ひではないかや。」「何をわつけもない事許り、さうおしやんすお前の願ひはえ。」「おれが願ひは商賣の四つは、此の間腐り續け、さし許りになつたから、思ひつきの百度参り、如何様、姉様の足の輕さは、よく／＼の願ひと見えた、コリヤ連立たる、ものぢやない、其の様に歩かしやるので、ア、好もしいも、の邊がすれませう、マアそろ／＼歩いておれが言ふ事を聞かつしやれ。色事でなくばおれとはどうぢや。ア、味い腰つきぢや。」と、とんと擲けば「オ、笑止、大事の／＼お百度に、惡魔をさして貰ふまい、

一服呑んでいんでこそ、力石に腰打ちかけ、指火嚢取り出し、信濃草をすつはすは、うつは
 の草造者、どや／＼と社内に入り、横蔵を取り廻し、わりや此の力石の法知つて居るか。「ハ、知
 つてゐる、此の石を上ける覺えが有つて、腰をかけたが何とすりや。」「ハ、くくく、己に千手觀音
 の手が有つてもならぬ／＼。石は扱置き、おいらが相手に成つて見よ。」と、兩方から小腕取ればぐつ
 と捻じ上げ、あまい事すなやい。」と、右と左へ踏みのけ蹴のけ、後へ取り付く勘八が、首筋掴んで引
 廻し、宙に提げ、人がなかへ人様、こりやたまらぬと一人が、頼も體も益まぶれ、ほふ／＼進んで立
 ち歸る。ハ、弱い奴等が、力石々と仰山にぬかせども、手穩程な此の小石、まつとをつたら上ける
 のを見せうに、と、兩手にひんだきかゝるゝと、ぐつと上けたる石の下、穴を穿つてぬつと出る、白
 髮交りの有髮の老人、身には袈裟異相の體、こしもの横蔵ぎよつとし、下界の人か仙人か、顔を
 眺むる許りなり。「若者力量見届けた、此の一室に血判せ。」「ム、此の地の底を住家にして、人をた
 めす心の底、問はねど聞かねど、大望有る人と見た。品によつたら頼まれませうが、此の横蔵も、其
 の元様の器量を見立て、頼みたい事がござります。」「ホ、ハ小賢しくも申したり。主従は一體、主は
 家來を頼み、家來は主を頼むならひ、汝が頼みの仔細は如何に。」「則ち是れに。」と、懷中より一卷を
 取り出し、「老人これに血判して、貰ひたい。」「ハテ思ひ合つた頼みぢやな、汝も。」「御邊も、かはら

お大望、身はその方ゝ家來にする氣、一身共に御達を家來にする氣、何方へどうとも決せぬ中、胸中を卷き込んだ此の一室、滅多には打明けられぬ。「この方とても此の間のうち、晴かぬ中に返事が聞きたい、身が返答よりその方が、住所は何國、どう聞きたい。」「さ、只野山を住家とすれば、住所としては定まらず、留まる所は天が下。」「ム、面白い、よし所在は聞かずとも、一旦我が目に懸つた上は、雲の裏でも時ね捜し、味方につけるに折かあらう。」天が下をどうぞ汝が望み、早と同義同姓我もさためぬ京の空、志す方は六十餘州、雨宿りする天が下、人目を避く用具をくねくね、置たる菅蓑めり取つて、七重八重花は脱けども山吹のみの一べたにひたひたにひたひたに、懐けやれ候、ム、天晴候別、受けました、手前も寸志の置土産、返辨申、こそ力石、ぐつと引き上げ投げ付くれば、心得たりし受附めて、櫓かに落手仕る。「さ、さ、御達の方から試み申して、先づ安堵、再會々々。」再會するに此の蓑を、印にあらは、七重八重、さふの菅蓑打かたけ、さらば、さうと諸共に、口にははなと物と、知らぬ合ふたる面青共、別れてこそは、三立を、星に武士の常とては、常の詞と思ひ子に、今ぞかゝれる甲斐國、武田入道信玄と、身は難門に入りながら、武門花吹雪庭の面、落葉角助掃兵衛が、ひさする常打木に、いさゝ草はしめやかなり。初と角助、何かは知らず昨日から、一家中がひそひそ、一夜の目も寝ずに走り廻る、其の言を聞だと思へば、京の大町長時様

答は、自らが胸にある、サアいきや、ハテ立ちやいの。」と、仰せに否とも濡衣が、是非なく一間へ行く跡へ、のつきくと入り来る、上使は問ゆる村上義清、疊障りも荒くれ武士、いかつがましく座に直る。奥方はるかに手をつかへ、「甲斐と信濃は國ならび、其の信濃にごさつた村上殿、今は遙々都より、御上使とは御苦勞。」と、いふに村上うち點頭き、「成程以前は鄰國の好み、心安う致せしが、夫れは内讒、只今は上使の役目。仔細申すに及ばず、信女しくと合點の趣、勝頼の首を渡したるれ、受けとらん。」と、事もなげなる上使の權柄、「成程其の儀は夫信玄、妾に申し付け置きし故、兼て覺悟はしながらも、今はの際に是れがマア、悲しうなうて何とせう。親子此の世の一世の別れ、心用意も致さしたい。」「首討つに何の用意、手間隙なしの無羅作に、拙者がたつた一打ち。」と、立ち上るを押し留め、「簡様申さば武士の身に有るまじき卑怯者、未練者とも思さうが、何を包まん勝頼は、諏訪明神の申子にて、神に御苦勞かけ奉り、儲けし子なれば私に、殺すも神へ恐れあり。勝頼が命元へ戻し奉ると、諏訪明神へ代參を立てたれば、せめてそれが歸るまで、暫くお待ち下されかし。」「ヤアあまぢやらな其の代參、何時戻らうやら知れざるを、ばんくだらりし待つ事ならぬ。」「イヤさのみ夫れ程隙取るまじ、遅うて今日の暮までは。」「ヤア此の永の日を待つこと叶はぬ。」「然らば未の上刻まで。」「夫れも叶はぬ。」「夫れならせめて二時の用捨は武士の情ぞや。」「ハテ鰐魚鰭を直切る様に、何のか

のしどひ、こい。夫れ程延べて欲し、ば、暫しの用捨はしてくれん。」と、庭に飛び下の垣根の櫓、
引きみしつて牀の間の、花活へ捻込み押込み、「コレ此の櫓の姿むまでは寛免致す、花が萎むとそれが
寂滅。いやと言はさぬ割符の一本。先づそれまでは奥で休足、御馳走には信濃蕎麦、お手打が我等好
物、花鯉よの勝頼の首、早く寛免致したい。イザ奥の間へ案内。」と、いふに否とも櫓の、日影待つ間
の命ぞと、思へば胸も板垣が、早う戻つてくれかしと、夫れを心の力草、村上の誘うて、一間へこそ
は入りこけた。始終の様子物陰に、聞いて袂も濡衣が、今に恨みを誰に、いふ方なき憂身つと、
を立ち立て忍び泣き、洩れ隔てたる唐紙を、明けても明かぬ目なし鳥、無難な世にける妻にも、武士の
角立つ前髪、袴の裾も長廊下、揮る刀の手前へ、面目なき其の風情、より勝頼様、おいとこし
や。」と、絶り付いて泣き居たる。「一筋な女氣に、悲しいは道理々々、只因果なる我が身の上、適時
馬の家に生まれ、弓矢打物取る事へ、叶はぬ不具と成り下り、此の儘無念の死をせんより、侍
らしう腹切るが、弓矢神への身の言辭、此の比母の物語、其の時覺悟に據つて居れど、不具に成つて
も子の命、助けたいと思ひす母上のお心遣ひ、無下にすすが勿體なさ、今まで命延ばはれども、今村
土が使者の様子、聞いては如何も生きては居られぬ。目界の見えぬ勝頼を、大事におもつて長々の世
話、甚い苦勞をして給つた、嬉しいしと、過分とも。禮は未だ、いふに足らず。跡は得言はす見えぬ目に、涙

を、いかにして、濡衣を、上へ、恨め、い、勝頼様、此の館へ奉公に來初、昨日から、お家を、何と、い、思、う、た、が、縁と因果の初めに、お主様とも、即主人とも、端々、細い、推し、手、に、心、の、け、を、岩、木、の、神、の、結、ぶ、の、お、結、に、結、い、枕、を、変、え、た、時、未、だ、ま、で、も、仰、有、つ、た、其、の、お、調、が、誓、紙、と、樂、し、ん、で、居、る、も、の、を、お、前、許、り、死、な、う、と、は、珍、い、無、情、い、細、意、と、我、が、身、を、と、ん、と、勝、頼、の、膝、に、打、臥、し、泣、き、泣、き、と、其、の、恨、み、は、も、と、な、れ、ど、お、の、敵、を、仕、ら、な、れ、ば、ど、う、で、は、な、い、花、の、魂、も、う、し、ら、は、お、前、許、り、死、な、れ、て、は、恥、の、事、泣、か、れ、其、方、は、女、へ、行、き、や、と、早、切、腹、と、見、え、け、れ、ば、と、申、し、申、し、ま、だ、權、は、し、ほ、み、は、致、し、ま、せ、ぬ、わ、い、な、と、い、き、く、と、今、を、森、り、の、お、身、の、上、切、腹、と、は、情、な、い、ど、う、ぞ、助、け、る、仕、様、に、な、い、か、と、留、め、て、も、と、ま、さ、せ、り、合、ふ、中、へ、母、は、か、け、出、で、と、ま、よ、う、留、め、て、た、も、つ、た、な、う、最、前、來、り、し、使、者、の、様、子、聞、い、て、覺、悟、は、醒、な、れ、ど、ま、な、た、を、助、け、う、許、り、に、心、を、碎、い、て、居、る、わ、い、な、う、母、が、心、を、無、に、す、る、の、か、と、つ、た、ま、に、勿、體、な、き、御、詞、破、爛、大、海、に、比、べ、て、も、及、び、が、た、ま、き、母、の、大、恩、を、ち、ろ、ろ、無、下、に、は、致、さ、ね、ど、權、の、限、り、の、命、陳、取、つ、て、は、使、者、の、手、前、に、つ、き、苦、し、う、な、い、大、事、な、い、そ、た、に、寸、分、違、は、ぬ、身、が、ほ、り、た、し、か、に、あ、る、と、板、垣、が、館、を、出、で、し、は、昨、日、の、朝、ス、リ、ヤ、も、う、戻、る、に、間、も、有、る、ま、い、と、つ、き、や、申、し、奥、様、板、垣、殿、が、其、の、身、が、ほ、り、連、れ、て、さ、へ、歸、ら、る、れ、ば、勝、頼、様、の、お、命、に、ち、は、は、り、は、な、け、れ、ど、も、若、し、又、そ、れ、が、違、う、て、は、と、夫、れ、も、分、別、し、て、置、い、た、濡、衣、を、ち、や、勝、

頼と不義してゐる。」「さういふ所まではない此の母が、今改めて女夫にする。」「さういふ
の賤しい私を、頼もうて貰うて、女は夫を大切に、思ふが直に氏系圖、日界の兄と頼
頼を、身にかへて大事にかける、頼まない氣は見込んだ故、大事の事なり其方に預けた。連れて此
の家を退け。」と、思ひがけなき詞に悔り、勝頼様を「今點がいたか、花がしほむと悲しい
別れ、さういけ疾うに泣け。」と、いふ中若しや、しをれやせんと伸び上り、見ゆる花より見る母
の、さしやる、許りなり。勝頼は氣色を正し、さしやるからぬ母人の御仰せ、死を懸れて館を出でな
ば、頼のより家の恥、武士の命は義によつて頼しと申す。只始より亡き身ごと、思召し諦めて、
命の暇はらば、頼此の上の母の御慈悲、頼山し奉る。」と、命惜しまぬ健氣に、いとせき
くるを止め、「スリ此の母が是れ程に心を許し、承引せず腹切るか。もう此の母は留めはせぬ、
われより先へ此の母の自害。」と、指添押取れば、頼て留める濡衣に、又取りすがこむざんの目病、
「中母人、段々涙が入りました、お詞に随ひ此の事を」「スリも聞き分けて落ちてくれるか、濡衣
も其の心。」「アイ、必ず聊雨遊ばされて、すな。」「ホ、聞き分けてさへもれば母も堪し
い、頼ういふ中も心せく、サア／＼早う。」と勧められ、是非なくくも立ち出づれば、「アア勝頼も落
さんとさぶとい巧、頼も、頼りたからは一動かさぬ。雲へ引出し一討ちと、かけ寄る先

に立ち塞がり、「コレ／＼、權の妾まぬ中に討たうとは。」「ヤ、妾まぬかしほんだか、脈の上つた死人花、是れでも生きるか生けて見るか、サア／＼どうぢや」と、權の花を口先へ突き付けられて常磐井も、何と爲方なき身ごと、思ひ切つて突込む刀「ナウ悲しや御切腹。」と、叫ぶ濡衣驚く母、「ヤレ早まつた生害」と、二人左右に取り付いて、前後正體泣き沈む。勝頼苦しき息をつき、「申し母人、お詞に背きし段、眞平御用捨下さるべし。是れまでの御養育、御寵しめ深かりし身は、盲目の淺ましや、軍慮に秀でし家に生まれ、戦場のかけ引き叶はず、違矢は元より打物は、漸ぶ刀を杖につき我が家の内を探り廻る、甲斐源氏の嫡流たる、武田四郎勝頼と、言はれる是れが武士か、よくも武運に盡き果てしと、思へば此の身に倦じ果て、今日や切腹明日や自害と、毎日々々刀を手に取り上げながら、思へば深き母の太恩、我先だちなげ亡き跡にて、嗚御歎き御物思ひ、逆様な迫害供養、受ける不孝の勿體なく、有へ有りし今日只今、親子の縁も權と、共に散り行く御名残。ヤ、濡衣、我が最期を歎かずとも、母に力を付け奉れ。」さば言へ、日界の見えぬ身を、朝夕心の樂しみに、暮した其方が胸の内、不便や便りもあるまじ」と、涙呑み込む手負の苦しみ、見るに悲しき濡衣が「ついで假初のお障りより、見えぬ御目を明暮に、苦に病み給ふがおいとしく、どうぞ御日の明く様と、御符御札もあらぬ神、跣足参りのお百度にも、叶はぬのみかお命まで、今を限りと成つたるは、神も佛もな

い事かと、涙の限れくどき立てくどき立つれば奥方も、かゝる憂ひを見ないで、心懸した兵部へ
今に歸らぬ恨めしき、思ふに違ふ浮世やと、手負にけしと抱き付き、流涕こかれ伏し沈む「マア聞
きたくもないよまひ言、早首切ねてくれんす」と、刀するりと抜き放すは「なるコレ今が別れか」と
聞える奥方語衣が、歎き留むを押運け突退け、村上が振上ぐる刀の下、手負は合掌はつしり立てぬる
生死の境、かかる事とも白洲の内、怪しの辻廻りいさつ、跡に續いて板垣兵部、老の心もせき立つ
足元「マアい」ど減相な具那殿、マア一里ぢや、マア半道ぢや、急げ」と息をきき、上の取訪か
ら十七八里、夜通しの早道極の溜長お心付はお心次第、結構さうな具那殿、酒手も定めし結構な、お
金すつかり下さるせりと、汗押拭ふ其の中に、兵部は切れの「さう」とつしり、駕代もなる、酒手も
くわう、此方へ来れ」と遣り廻して大突切り、さう急なつと逃げ出す相討者二つ、二人をしとめる
刀の音に、怖ろしく駕の重、明けて逃げ出る義作が、マア申さう、駕は御前分に仕む百番、御要
は打たず喧嘩は熾ひ、成敗にあふ利はない、御敵されて下さりませ」と、齒の根も折はす願ひる。
「マア、言ひし／＼、御身の上に氣遣ひなし、必ず願ふ給ふな」と、座敷へ呼び交ふ中、奥方一間を
び出で「マア板垣が、泥かゝる」と、跡は後に取り戻す「マア、駕の出来ね、何し御用の品も首尾能く
調ひ、只今同道、御参り下さるべし、奥様申し常盤井様へ、いへる言へる泣き入る母のハハ心得ぬ

御有様。何にもせよ、委細の譯も仰有らう、泣いてござつて事済むか、戦績は何處にござらん、

其の終頼に逢はんでくれん、と、首提はて立ち出づれば、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

ば、縦ひ如何様の事有りと、必ず聊爾の出来様と、申し置いた兵部も待たず、天にも地にも怒替なき、大事の苦難殺してしまへ、泣いて済むか、身で済むか。エ、言ひ甲斐なしとも、胸慾とも、い

うて還らぬ此の有様、いたはしや、残念なり、家も取り齒を噛みしめ、五臓を絞る許なり、と、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

くにも立たぬよまひ言、泣きたか、緩りと跡で泣け」と、首提はて村上は、旅籠を絞る許なり、と、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

見送つてゐると、身の納まりを貰作が「申しお侍様、私はもうお暇申します、マァ人に何の合點もござんず、何やら好い事が有る、おれ次第になつて居い、無理やりに歸へ、提が込み、連れてござつた、此の屋敷、先刻にやらい様を聞けば、私を身代りにするのぢやせな、何處の國にか滅相な、人の首を斷りなしに切らうとは、惨い氣なお侍様、畢竟身がはりが還なつて、間に合はなんだりや

こそあとの命、と、どうやら思ひなしか、首筋元がひいやりする、マァノ、怖や恐ろし」と、ぞ、神立つて立ち出づれば、「マァ一大事を知らず、其の分に歸されず、不便ながらも覺悟せよ」と、切り込

む刀かい、滑り、鈍元しつかと片手に握り、「ハハ身代りを遣うたといふではなし、正真正正の首渡したを、

通知つたとして何の大事、そしてマア人の命を澤山さうに、瓜の茄子めな様に、お赦しあれ」と突き放
それ一々土に這りに倒れ不敵な、遺体踏まれて、又切りくれば身をかれし、刀のあし
らみ手裏の明走、意く見のち後に陣亡、兵部、驚くつと引き當り一刀、遺痛手に七輪八倒、こはそも
如何にと詰り年御、障りさつと引き当り、血力、公、怒々然と立ち給へば、はつと奥
が裏作ら、母、お怒れ人々、信、二間を離れ、血力、公、怒々然と立ち給へば、はつと奥
にかけし、果が所存の程、不審ならん。マアノ、濡衣、言付け置きし物はやく持て」
「十七年、我が、幕され、夫れたる、部が、
つた、此の、
押しあてノ、押しぬぐひ、是れ見られよ此の、
物、
事し、見かけ、
「己の手、

得されども、卽座に知つたる此の信玄、憎き逆心、一分試しと思ひしが、今戰國の時に至つて、人の子が我が子とし、我が子を他家に育つるは、智謀の一つと奥にも語らず、不通にやつたる其の先へ、我が手を廻して育てし義作、慮りの圖を外さず、主となしたる己が子に、自然と蒐る今日の災、因果の廻り來るとは知らず、己が條が身代りに、大恩請けし主人の子の、行方を捜して連れ歸り、又殺さんと圖る人外め、國賊とやいはん人面獸心。天の御罰思ひしれ」と、扇を取つて丁々々々、はつたと蹴するし信玄の、詞に知つたる我が子の身の上、かかる野心の者とも知らず、忠我一途の侍と思つたが面目ない。それに付けても此の義作、信玄様の御子とは、知つてか但し知らずにか。「其の儀は我を育てたる、乳母が疾より物語、また父上にも是れまでに、忍び／＼の御對面。「スリヤ稚い時より百姓の、家にありしも父御のお指圖。とは言ひながら系圖正しき武士の、弓箭の業は目にも見す、身は鋤鍬の泥まぶれ、憂きに疲れしその姿。今改めて親子の對面、衣類大小早々持で。」「先づ暫く」と押し留め、「京都の武將義晴公、敢なく討たれ給ひしより、父を始め諸大名へ疑ひかゝる今此時、夫れ故にこそ勝頼に、腹切らせしも父の言譯、未だ立つとも立たぬとも、知れざる中に某が、又勝頼と立ち返らば、彌疑ひ一身に、留まり難き此の館、身を民間に育つを幸ひ、此の身此の儘義作と、白洲へおりて蓑笠、世に降る雨は凌けども、我が身に蒐る横しぶき、洩れて姿も濡衣が、始終

を懸いて覺悟の刀、隙すすまむる強氣の手具、刃物たぐつて我が世へ、すつとつき立て引き廻し、
「ア、悉くしきは天の罪業主人の詞、信女公の御も一々違はぬ我が意心、平々底の守る果のんと、子
故の間に眼くらみ、くらみくして罪が罪病、覺悟念も叶はぬ言、勿體なくも御主人を、害せんとせし
大罪人、逆業にも行はれず、大將の御手にかゝる有り難さ。コト々御衣、此の體の罪業責、諏訪法
性の御兜、今諸信の手に入れたる。汝は信濃生まれながら、今も命を存して、御手廻へからぬ力
能を以て罪の咎ひ取り、轉運公へ奉らば、親と一つてない罪、死後の言歸此の上にと、事し難様、
お敵も存つてはの如ひ、お問を届け下さば、生を世々の御恩也と、伏し拜んだる四十八言、不便
と愛方御衣引きたて、大悪人の兵敵なれどし、それに目録と御縁がす心、細くぬきぬきと親子と
をし縁有れば、御衣を親里へ返下かせめて手前草につく、上人なる川人の御計らひ、事の事と捨て置
かれず、今親切つて死したる轉運、親と一つてない言、悪義の仕度には衣が、心大敵とて死を留め
る、詞にごまが死なれもせず御意に渡ひは竹の御兜、命にかへて取り返さんといふ、逃れ出がした
此の著作、端も衣を下腰に懸し、我晴を對つたる敵、草分つて尋ね出し、其の時こそは轉運と、
立返つて御對面と、草出れば信濃公は、我晴公を害せしは、四面を穿ね破人、市々言易き
敵にぬらす、特に手練の御道具、未だ日本へ渡さぬ兵器、置つてはばまつ此の通りと、川意の鐵

丸車輪の如く投げ付け給へば、隙すきにて閃く。是は火に徳有るは水に徳なし。諸葛臥龍が工夫の地雷、火玉飛びたる術りも、我が方寸に火あり、何かは畏て恐るべき。まだ日本へ渡らぬ鐵砲、夫れこそ究竟詮議の手取り、幸ね出すは開闢、追付り葦原が、納まりは其の時其の時。」其の常磐井に濡衣が、申すも涙にて、物の黒白もなき夫に、似る富貴の杜若、花紫の明方は、盛りと見えし權も、今は名のみぞ勝頼の、御す頓て烏雲、花にもなき愚業の、有りて其の名は鬼薊、因果は廻る日車、此の此の身と絶えたる兵部、不便と見る信、仁あり智有る勝頼に、名残奥方女郎花、枯梗菊萱秋の野、月に名たる更科や、信濃路さして出でてゆく。

第三

名も山深き信濃路に、優き花の名に呼び、爰ぞ枯木か原とかや、甲斐、越後の領分に、わけて立てたるさい目の場所、秣刈りにやつこらさ。江戸一本きめた刀より、研ぎ立つ鎌でくわつさくわさ踏みあらしたるめい／＼が、主の風光／＼かり場の領、是れも同じく二人連、笛に初指し荷ひ、見て悔りのどつてう聲、「ヤイ下主め、うらが部屋では、つひに見た事もなしやつ奴ども、誰に斷り、此の秣を刈りほした。悪く言譯ひろいだら、二人共に首が飛ぶ、盗人め。」と言はせら立てず、「ヤア下

清殿の領地なりしが、諸信様と信を極兩人して切り取り給ひ、此の所にさいめの印、それを知りて、
 鎮西ではあなたの御家來、國の守の扶持人さへ是れおやもの、ましてや町人百姓は給ひて、畏れ
 するは知れぬ事。一、印有んな、印ありとは言ひながら、一つに續きし原なれば、過つて踏み越え
 しも、いはば下郎の切り取る草。一、下郎にもせよ誰にもせよ其の過つをさせまいため、建てた
 る椿木は國家の禁制、花散く木々の枝ととも、折り取るまじと記せしを、手折れば則ち落花散枝。此
 の領分の印に限らず、縦ひ白紙に書くとも、事を制する理に等しく、是れ皆國の教へとして、掟を
 守るは貴人より下々の掟とする、諸信様の息の懸つた領地へ踏み込み、草一筋でも切り取つたは、國
 を盗むも同じ事。其の儘に指し置いては、大彈正が遠度、女房の身として見て居られす。高坂様は
 とも有れ、私が夫彈正殿、つひに一度は名を誤てし事なれば、お前の殿御と一日には、ほんに言
 うてもどうんす。一、コリヤ面白き所、お前の殿御が執權なら、私が夫も執權職。一、イエ、そ
 りやお前の胸一つ、ふかい様子はしらねども、侍衆の目撃にも、高坂様は逃彈正、こちらの夫は槍彈
 正、人に勝れた槍の上手と、逃足早いお侍とは異名さへ違ふ物。まして心の内外も、違ひやんす。
 とほのめかす。一、イヤコレ入江様、武士の身は情によつて、遅くも逃けるも軍のならひ。一、好い日
 な事おつしやるな、情でそんな異名を取る、武士の法がござんすか。一と、いはれて唐藏當惑の、なん

る、産の母が歎きといひ、我も不便う身にせられど、それをかばへば不孝とふなり、孝を立つればそちが難儀、理にせざりたる思ひ子を、捨つる此の身の孝行より、捨てらるゝおことが孝行、慘いとおし思ふな」と、言罷涙目も明かぬは、そつと傍に置く土の、上に伏したる稚子が、わつと泣き出す聲に胸を抱き上げ、泣くを道理と爰かしこ、山を越えて里へ往た、里の土産の見物と、抱きしむればすやく顔、さすが童の氣さんじと、打守りく、名は慈悲藏の慈悲もなく、今目前に捨て置いて、歸るとしらの心根を、思ひ出せば不便やと、いと涙のやるまなき、我ながら誤つたり、心弱くて叶はじと、包み廻せし絹の香の、思ひは三重胸の闇、元の所へ押し直せど、知らぬ子供に森入りばな、一世の別れと雑言を、跡に残して雪國の、積る歎きとしられたり、かかる折ふし、甲斐國の執權、高坂彈正時綱、供人數多引具して、當所筑摩の御社へ、詣ての道もばう木の傍、件の捨手に眼をくぼり、一人を稀な街道に、捨てられし稚子は、大狼の餌食は皆定、見捨つるも本意ならずと、家來とての歩み寄り、一ふ、最早嬰兒といふでもなく、男子と見えて氣高き森顔、いやしからざる者の倅、何故こゝに捨て置きし、仔細はいかに」と、見廻す小笹の附紐に、付けたる下札手に取の上、何々、甲州の住人山本勘助と、讀みも終らず不思議の顔色、此の山本勘助といふは、生國は三河の者山賤と見えて魂は、異國の韓信孔明にも劣らぬ軍者、主人豫て御懇望、かかる留世の其の中ども

女の産出がよしけれど、彈正殿間かしやんせ、甲斐と越後の領分へ、捨て置きし稚子は、兩家に望む
 山本助、是れを手筋に召し抱へるお前方の胸の内、一方へ抱はれては是非一方の國の恥、其の争ひ
 の基となり、肝心の此の子に乳も吞まらず、若しもの事が有つたらば、お早も水に泡、何にもせよ
 兩方より、乳房含み其の時に、何れへ成りとも吞み付く方、夫れの間にお抱け有らば、どちらにひ
 けも方にもないと、恥や思へども跡や先、思案してたべ我が去にと、さきか女の智慧の海、實に高取
 が妻なれし一女房出かした、争ひとむる乳房の圖取り幸ひ其方が持ち合はせし、乳を舐へて試みせ
 ん、御正殿も相應な乳母でも有らば出されよ」と、入江に當てたる詞の端、聞くより恥とせき直つ入
 江におかもむ様の御思案に、鼻毛延ばした今のお詞、越名彈正忠政が女房、乳母奉公は其の如そ、今
 一言御有つたら、赦しはせぬ、御立身、一ノ馬屋者、大事を前に置きながら、無茶の舌根根動
 かすな、そゝに高取殿、食うた手に致へられるとやらで、内實の詞に腹し、女房々々が乳を舐め、
 さらへ成りとも方を付け、此の場の別れは如何ぞさう。「一ホ、そのや此方も望む所、吞むか吞ま
 んは互の運づく、唐織はやくとす、められ、だくつく胸も押し鎮り、抱き上げれば目をぼつたり、
 明けて三つの稚子が、わつと泣き出す目の内、乳房ふくめて黙しても、唇の饒すらに見えされは、見
 合はす夫婦が顔と顔ニコニコ申し寄れば、何ほう勤めさしやんしても、子供はどうでも正直な、わしが

主君の悦び此の身の忠義に「さればいた、お慈悲深い、信女様の御威勢が顯はれて、私が無念もたつた
 今、お申し入江様、最前のお詞に、お前の殿御を何とやらおつしやつたが、今一言御所望にと、嘲
 る女房「ホ、聞きたくは名乗つて聞けん、長尾入道謙信の郎等、越名弾正槍弾正」「イ、天晴
 手練の此の槍先、受けてはたまらぬ大事の稚子、連れて手前は逃弾正、唐續来れ」と立ち別る、胸
 に一物二人の彈正、爰に捨子の隣一と、其の名も聞き山本氏、伴ひ歸るぞ、秋の末よ
 り信濃路は、野山も家も障り理む、雪の中なる白髪雪、女ながらも故あつて、男のなる名を名乗
 る、山本勘助と人毎に、岩間の水の音たえて、本の葉の鈴三つ、年も妨氣稚子を嫌うお種が手枕
 に、弟兄が守は何所へ往た、山の薪をえいつつ、さらば爰で一体み、お種女郎冷ますのし「す
 お正五郎様、戸助様、吹雪で外は歩かれまい、お茶も沸いてござんす」「イ、構ふまい、手持は
 手が放されぬ、慈悲藏殿は御主か、今日もけふと寄合ふとあの人の噂、お袋への孝行は申すも愚か兄
 への深助、ほんの子は次にして、兄貴の息子の其の次郎吉を、大切にしらるゝ女夫の衆の心意氣、名
 も慈悲藏といふが尤も、「サレバイナ、失れにまゝ兄の横藏殿、兄弟とてあの様にも違ふものか、親
 への不孝き弟へのむごさ、親兄弟にきへあれやもの、村中で持て餘すが尤も、外を家と出歩いて、
 鄰近へたゞれ込め、人の嫌下女婢、當り合ひに孕まし、其のお籠りのあの小笹も、親に似た子の鬼

子であつたと、目にはがなき山崎を、正に武士の律儀、義の節に押し切つて、一家を外さぬ慈悲心が、僅り途方もないやうに、流れて漂うことが歸るやう、平首者お歸りのか、縁起が悪い縁起、誕生に出られたお袋への誓ひが、大それたにさつしつてても、氣に入らぬやうな縁起は、まうとはきつい其意地者さう、これより切腹ないやうに下さるやう、破ひ身を切に結びこも、新門に君から今日までの親の苦勞、替へて見れば自分一、あの勘部屋の奥でさう、親に三枝の親方とて、決して親に替はて替はるが、何處からとも無う此の家の中へ集まつて来るやう、世を顧みれば少しは通じ、類を以て集まつたかと思ふ、思ふと思ふと思ふ、流石なお袋もともとも、夫の苦勞で立て受けた、品は親の品、親の品、言といふ本文、他が毎晩毎晩に、孝行にする心通じ、流石なやうな、親、いんで見よう、出でて行く、母者人は品前より、まだお体のなされてや、大層でお氣ひかんとすな、二日の暇も此の事、お料理して上げん、大郎吉も大人つたがごい、此の事を世に言つて、言つて聞いて、親に親には家松が事、親に親の縁起、いかに親が子でないと、決して世に言つて、言つて聞いて、親に親に言つたと、親を立勢にせうの縁起と、いかに悪い縁起と、お袋の平首者の縁起と、孝行するにもいかに、親を子に親戚に、親戚へやつたといはしやんが、まあ其の先は何國の縁起、ハバ夫れを言ふが最う末、縁起のよいやうな、此の貴家に置かうより、乳母に乳母を替ける結構な

内へ養子にやつた。彼はきつゝい果報者、早く出て出すと、二と捨てたと思つて居や。病煩ひと
いふ事もある。萬一先で死んだら、無い苦ぢやと諒して、俺や居る氣ぢやと云ひながら、大膽に
御食事も、成りはなかつたかと手を握り、心は、一問の中そつと親へ「里れは親、嫁入つて、ごめん」と
おもへば、裏へ出て御氣丈千萬、お水に火も有るか、追付御膳の用意もしや。」と、片時忘れぬ孝心
は、又と類は嵐吹く、音も吹雪に高懸懸、踏み分け尋ね来る人は、長尾三郎景勝、萬卒は求め安く、
一將は得がたしと、此の隠家の口取りをひて一人門の口、二重の障の白妙に、枝の撓の雪折竹、杖と
我が子に助けられ、庭に名お老女の風情「申し」此の大雪に、素直とては冷えまする、布圍の上に
ござつてさへ、御老體の身の上、平にあれへ。」と取る手を拂ひ、「七に餘つて愚鈍には成つたれど、
子供に物は教へらぬ。すべて親に仕へるに、起臥の介抱は誰もする、何事に寄らず、親の心に背か
ぬ様にするのが誠の孝行。寝て許り居るも氣詰りさに、雪の景色に見ようと思ふ、母が心を妨けるは
何と不孝であるまいか。」「ハ、一々誤り奉る、其の段には心付かず、お年寄られて一日々々、御
氣力の落ちるが悲しく、今日も賑に出で、元氣を養ふ谷川の、ますくお達者なる様と、志の捧け
物、賞翫なされ下されかし。」「イヤ、く物の命を取り夫れが何の養ひ、眞實親の養ひなら、遠い山
川の珍物より、つい裏に有る竹の節を掘つて来い。」「ハアそれは御意ではござれども、此の寒の

中に、^{あな}が、^{おのれ}ある物を取つて来るはず供でもする事、ない病を取り去るの事自ら「斯うい
はば世が變ひのり」と思はうが、元之彼の難題に用ゐる無常等では、智慧と爭はれて人に知れる
の取にはならぬをこそ。天は天下に聞くと軍臨、一生主人を取らず、命をうけた慈恵見、
兄弟の子孫繁栄を定めてゐるとして、女二人ともその名を付け、山本勘助と名乗る此の故、二人の内こ
勘助といふ名を西つ子、又の軍法、其の徳の傳へようと思へども、夫れでなかつく、勘助になられ
ぬ一つ。其の苗跡を受けたさに、心を盡す此の玄奥藏の一ツソレなく、其の苦しみまじりに身を盡す
は、此の世に生じては、上流の輩よりよめに「ソレなく」それゆゑ情といひ、幼字を授けらる所也。「同
人の仇は敵非かといひたり、兄弟人々心入りの一ツに思はせむ。其後の悲憤い御も、實に喉がき
痛所に、老母は眞に驚人哉、コト々何は利目に言ひ置ても、此の年月月元を離れ御國にて居て今
日此方頭領の深切、是れは國なりといふ御按、汝が心に引きたるべし。兄を不幸と言ひなす處の、是れば
見えてもいとほしと、地獄の上にて打たんとす、其の方々に踏み掛く、地下駄舞んで跳めく足、
^{あな}危いと抱きとむれば、「イヤ／＼／＼、汝が世話は受けぬわい、とこ返さかれ。」と云ふ。こころ
の片足は不意に、其時より、命取り、命力奪つて地に轉ぐ。とて、悪友が面を隠した、追つて問ひすれば
な、はづ／＼と「打守り、一人品背酌只人ともしも見えぬ時、賢しい妻々に世物を察せられ、内

公に外へも張良が御、ハテ奥ゆかしき御方や、お近付にも成つて萬とお禮も申したい。コリ
 と悲感、其々に用はさし、立つて行け。「ハアはつ」と、何れに御は有様、母の心を計り兼ね、
 是非なく奥に入りにける。いざ北方へと去れば、辭する道なく車に乗り、御推量少しも違はず、黄
 石公に方る事者、山本氏の御子息を召し抱へて、一方の大將と頼みん爲、身不再なれども越後の城
 主、長尾景信が嫡子三郎景勝、是れまで海上仕るに、誠正しく建べられれば、其こそよく、始
 めの自然と雖はら御願ご、御望みなごる、は、兄弟が中兄か弟か。「イヤ景勝が弟は惣
 領の横領、一々、最前より御覽の通り、孝行な弟悲感を差し置き、不孝な兄の横領を、御家来
 になされうとおつしやるお前のお心は。」「イヤそりや其方に違え行ふこと、諏訪明神の社内にて、面
 面恰好とつくと見掛け置いた横領、是非に身共が所望致す。」「ム、左様おつしやれば思ひ當る、よ
 くよくに思召せばこそ、大名のお手づから、いやといはぬ此の要々に、下駄を預け給ひしは、天晴
 敏き殿ぞかし。兄は只今他行なれば、此の母が成りかはつて御家来に差し上げう。」「過分々々、其の
 伯是れへ」と取り寄せて、「いかに老女、主従と成るからは、一命を捨てても忠義をはけむ。武士のな
 らひいふに及ばず、此のはうとても一身を任すといふ、かための一品受けとられよ。若し違違あらば
 身の土たるべし。」御念に及ばず、其の時は母が鐵首差し上げるか、家来にするか二つの安否、後程

ね、ドンとがしと、ふち寄れば又差し出ぬ小僧者、見や斯ういふ、こゝに控えてゐる、横へに息子
のくはひら足、ととてもならぬといふ種かもんでくねり好むに、ひさき様守り、松松はさうし
た、いとお平國の通、思ひ切つて一昨日主が御處へいらした、捨てて了うたい、よい事、
一體おりや實様は徳むてゐる、時に幸ひとめ、のときめはこねてゐる、跡に残つた小僧の其の次
郎吉、邪魔な御更奴、しめ殺さうかと思つたわ、味な物で、主といふ物は親より好む可なりものぢ
や、又太らう風つたら、じに組で撃口にならぬかと思つて、實様に育てさうからは、その慈悲藏、
畢つて、ふと相合の子、とても事に女房も相合にする合點、お種類振らずと、ムンと言やいの、そ
れを言ふふと慈悲藏が大事がる、此の母者に當るさふつ、しつやノと揉ましやれ、エ、まだ火
がぬきいと懸の意趣を、火氣にたたる事通者、持て餘してぞ見まにける、折ふし表に先走り、山本
勘助殿に居あつて、大徳正武田信玄公上人の、と案内に、思掛けなき夫婦が不審、仔細あらんと横
藏が相合、自ら家来人、一ハ、冥思寄らぬ大身のお入り、牢則には母も逢はれまい、慈悲藏はせ。
横藏是れはしたり、例やらいひノ、寐入つたらうな、風ひきやんなのと一問の障子、引き立て覽ふ表
より、勾ふ留木の高坂が、妻と知らせて堆高き、雪の懷稚子を、抱いて幾重の紫の庵、家来は先へ
と追ひ返し、行儀正しく打通る。訝しながら手突いて、信々公の御入りと思ひの外なる女中のお名

つちあつらと指さしてはいてばつかり、此の大將に其懐かたければ命も危し。其の兵領を續ける謀は甚悲哉、お前の心に有りさうな事、甲斐國へ味方に附いて、勇戦して守り育てうと思ふ心はござんせんか。此のママ衆との間に、コレ何處もかも知つた事を見やしやんて、道理でも有る、眞實の母御の懐を離れて、他人の手に何の育たう。夜は得寐せず、晝はうつゝ泣き涙入、涙顔のおかしき、ほんに見る目が悲しいこと、語らうちなり女房がござい、可愛や左様でござんてうこと、わつと泣き出す母親の、膝に目覺ししがみ付き、絶る乳房は一人にて、手の手怕の一面、儘ならぬことを恨みなれ。一間に母の聲高く、「ヨリヤノ、慈悲蔵、子供を師に思にかけて味方にせん」と、後藏い信をに、奉公して武士が立つまい。去りながら軍法奥義も傳はらず、家の苗跡を續け、氣がなくば、勝手次第にとまごだうに、言ひ捨て障子はたと指す。ハハはつと立ち上り、我が子を取つて引きはなし。須彌山濟海の大恩を受くれぼとて、母の思にはいつかな、信女に仕ふる事存じも寄らず、髮改まうす。ヨリヤ女房、一旦捨てた此の條に、見苦しい例はえ、縁に引かれて知行取つては末代までの名折、親子の縁をさつぱりと切つてしまへば、信女に思もなく義理もなし。是れ此の竹も其の本は、竹に雀と濡れぬ中、今御差等と成る時は、鳥の爲には怨敵、事によつたら親子兄弟、敵味方と成るも武士道。お返事は此の通り、稚子連れて早歸られよ」と、詞尖に言ひ放す。ハハ此の上は力なし、と

はい、歸つて御主人や夫に伺ふ詞さへ、なくして抱き立ち出づる。さうなう家来、一世の別れてゐて
マア、此の乳が一日香たしない。マア、膝下を男を引き連れて、枝折がひつしやの、夫にも心は焚く雪
中へ、朝足湯の子を抱き下り、國はなかり、遠り向へたるは戦、地に降ふは我軍の陣、神や悟て道
く竹の子、いないけ道に打寄せて、山本の氏を聞く思忠藏殿を、軍中の神と頼さんと、足れまで來
給ふ格な、さうも此の體では歸られず、是非味方に付くといふ一言を聞くまでは、此の乳のは其
元の門は立ち上らず、雪に凍るて死すまでも、腹に腹をしの思忠と待つ。大將の命助けうと殺さう
と御思案次第、といふ返答を頼み入る。さうもつをかけたる雪の軍、思ひを疑し居ても行く。マアをん
なる功はとたはなぬか。マアをん。門には誰もない、さし居てもさう赤い軍人、今情へ頼るとさ、
信太の思を受けたになつて、母の一言に古にさる。此の雪の外の、一丁でも出るの否や、大將の陣も
是れ限り。さう、頼みはの頼み、を、語る陣には我ながら、いかなる思忠殿が戦い、大將の陣の早も有
る思忠殿、我軍も情を知つては居るさ、陣の詞は我がため、さうさ言方に頼れた物、とともない。さ
うして元は元は元は元、さうも、と此の子を袖にしては、思忠への表の立たぬさ、マア陣には知めて
大事の事はなつたり。マア、一丁へ付く雪の中は、雪出つて是さういふ、思忠殿つてうらめさ、思忠殿
の縁をたつ、思忠殿は、此の思忠に思忠つてうらめさ、よたはなぬ。思忠に、マア、手を括つる

奴は有れど、親の詞は捨て難き、裏の敵へと踏みわける、雪より先に最愛子の、埋もれ死なん不便や
 、見合はす顔に降る涙、雪争ふ濡想、しるる、夫の惨影、いかに望みが有ればとて、天にも地に
 も一人子を、飽う惨たらう捨てられた、今の中にも氣の強い、置いて往ぬ程なり、お家に寝さして
 いんだがよい、可愛いわ、胸からうのに、紫との間を抱きたいと、任せぬつらさ次郎吉を、滑
 うそつと下に置き、もし足ながら空に下り、飛び出たにしよう、と、雪に濡れ、夫れがマア何と
 命が有る物、と、叫べんとすれど、鑓に、鎧の代りの真結びは、慘やつれなれど、雪に濡つて
 明かぬ、と、たいてい、も絶えぬ、風にうたてや次郎吉が、わつと泣く聲、ハハ悲しやと、又
 かけ戻り抱き上げて、雪やころゝ、六、歳やころゝん、こはそも何たる因果ぞや、此の子憎いもやなけ
 れども、我が手に乳が呑みたい、コレもとの間へ、寐入つて給い、と、心も空にかきくらし、
 又降り順る白雪に、外に泣く聲八寒地獄、劍を呑むより身に應へ、思はず知らず轉びおり、碎けよ破
 れよの念方に、外る、戸より身は先へ、コリヤほんよく、と、我が手を腕に抱きしめ、流涕こがれ
 泣く聲に、唐織木陰をつつと出で、一信を云を抱き上げ、乳房を含め参らすからは、慈悲藏は最早此方
 の味方、犬にしらせて愧ばせん、と勇んで館へ立ち歸る。ほつとお種も心付き、うろつく隙に何國よ
 り、懐劍もやうど峯松が肝先貫き息絶えたり、コハ何事と驚く中、次郎吉引立て横藏が、一間をさし

てか付入れば二ふ、扱は我が子に害せしむと、彌藏の所見せし、義理正情も是れを以て、敵を取り
いで置かうかばと、死體を車輪に懸け込んで、常にけ弱き女氣も、恨みに強き男氣、腹へ懸ふ忍び足
歩目も靴に近づきて、彌藏の邊ぞとて、古き岡の跡を過る、子故の間に白狐の、道を遠に見えわか
ず、なほは掘つてもあか、有らうやうはさげれど、廻り思ふ一心を惜み、又より探ぐる事もやと、
心に込めて一尺二尺、底は白狐の堀一井、掘んでおしとけられし、身と心の有るやらんと、又掘
ればは又一井、又掘りおしとけられし、前掘つてより打入り、是れ大相、諸品堀に掘る頃、一羽たらず
二羽三羽、集まり来るに、ハナハナ得たる、彌藏此處有る邊には鳥獸をなすといへり、又の夜は吉本の軍
師、此の所に三世を去り給ふ、一羽明人を獲られたる、六羽、皆の祐命の鳥、此の所に棲み置かれし
やらん。扱は我が子に害せしむと、彌藏の所見せし、義理正情も是れを以て、敵を取り
雪も散亂基、はつとなつたる中、彌藏は鳥、一羽に伏せ有る時は、所見せし、油
斷の端を踏み、跳さうとせかつとすの内の正、樹ぎに手合へ此の下を、より得て思ひ置、境
んで有る鳥の、一羽、風は吹くぬ、鳥は出ぬ、風にするわに、一羽、鳥、より得て思ひ置、境
しよ、一羽、鳥、より得て思ひ置、境しよ、一羽、鳥、より得て思ひ置、境しよ、一羽、鳥、より得て思ひ置、境
つこいさうは成りよすまい、吉本を獲ては鳥の思ひ置、一羽、鳥、より得て思ひ置、境しよ、一羽、鳥、より得て思ひ置、境

けと頭と頭、落花微塵の雪とんで、掘り出す箱の二人が争ひ、道と非道の二節を、滑つつ轉けつ纏
みあふ、はすみにはほと取り落し、池にさんぶと水煙、囀々羣鳥兄弟も、不思議と見とる、後より、
陣子ぞわかれと母の老女、兩人待て、兄弟共に武士と取り、主人を取るべき時節到来、雪の中の筭
を掘出したる慈悲藏、今こそ母が心に叶うた、又陣子を出かした人、其方は最前首ひつけた通り、
裏口四方に氣を付け、合點が二ハ、妻細承継仕なにと、驅け入る弟續藏は、池市の箱を引き
上げて、母の御前に差出せば、リノノ見、其方には別けてよい主を取らする、前も主人よりトされ
し、裏藏も更めせん、こ、しづノ、奥の白臺に、無紋の黒杯白小袖、袖に三方九寸五分、我が子の
前に直し置く、母看人こりや伺もや、いやコレ此の白襲束は母の物、それこそは冥土の公服、
只今その方が首打つて、身代りに立てるのぢやない、一ハ、誠相な事許り、此の首も身がはりと
は、それや、誰が、今日其方が主人と頼みし長尾三郎景勝公の御身がはり、置き及ぶ武田信玄、
越後謙信、室町の御所において、互に我が子の首討つて、心底を顯はさんと、愛する由、最前そちを
召し抱へんとて来られし景勝の面體、そちが顔にさも似たり、扱はと母が推量違はず、箱の中に残さ
れし此の一通に、委細の様子詳かに記されたり、主従と成るからは、命は君に捧けし物、武士の因果
と諦めて、潔う死んでくれ、「コレノノ、能う思うても見やしやれ、いかに主ちやとて、まだ知

行くと、これぬ中に、殺さうといふ様な胸撃へ主が有る。かゝるやういふ最う此の主従、とんと變改。」「イ
ヤさうに成るまい、日時諏訪の森に於いて、殺さるゝ、このか命、助け置かれし是勝の恩忘れはせま
い。其時、情は全身代りに立てた爲、智謀の間に懸りしとは知らざるか、恩を知りぬ人ではないぞ
う。此の邊にても此の家のであるは、其家の家主取替いて、一と過れば、此の如くするが、但し
は、手にかけうか、ヤア／＼何と／＼。」と詰めかけられ、無事此の目にさういふ、隙を見て逃げ出
す、口はつとと千裏動に、彼方にどつさり逃がたう、其手に及ばぬ話う思はせて、無引取ると
り早く、右の眼に突込んだり、此の如く、不意に、流るゝ、血を引く、一と、此の如く、此の如く、
よつて身代りに立てたなる、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、
つまい、今日只今、父が苗字をわけ、山本、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、
此の命、ヤア／＼、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、
一間の内、参り参り、」と悲蔵が、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、
て古瀬へ歸りし時、母に、密かに語、父、直し受けたる兄者人の命、現在の子を捨て、
否應いはさぬ、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、
残念、長く誹謗に、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、
「お、か／＼、誹謗づれが家

來に汝が分相席、身が主には釣り合はぬ。誠山本勘助が崇むる主人は、赤くも是利十三代の公。公は、是れへ誘ひ申されまじ。詞の下に高坂が妻の唐織、次郎吉を傳き申せば、山城親子、ハはつと許り飛び入り、恐れ入つたる許りなり。道中にとつかと直り、ヤア山城、只今打つたる此の手裏剣は、先年空閑の館にて、此の公達の御母殿の方を奪ひ取り、立ち退く折から、景勝日當に打ちかけたる我が小旗、只今我が手へ恒かに落手、山本の苗字を引興さんと軍學に心をこらす所に、武田信玄太神主、おれやつし只一人、密かに庵へ來らせ給ひ。早利の行末變束なし、汝我が力となつて事を謀れ。、名將の一言心地に徹し、ハ、ハ、畏れ奉る。と、即座の領掌、弓矢の誓ひ。「オ、其の時に此の母も、睡人ならずと思つたが、堀は武田信玄公と主従の契約仕やつたの。」「オ、ハ、小池に住ます、鶴は枯木に巢をくはす、智勇兼備の大將に、頼まれ申せし身の面目、直様都に馳せ上り、寢ふ時しも鶴の騒動、義晴公はあへなき御最期。ハツア爲方なし、懐胎の腹の方、人手には渡さじと、忍び入つて御家の白を諸共守り奉り、立ち退く節は八方に、提灯松明ある花の、都を跡に遠近の、雪の信濃路こ、かしこ、月の更科の片山里に、人しらす隠匿ふとは、さしもの母も御存じあるまい。」「しらなんだく、コレノさうして、御母殿の方の在所は何國、サ、サ、どうぢやノ。」「ハア申すも便なき事ながら、憂き事積る産後の悩み、多く此の世を去りたまふ、跡に残りしあの公

本朝二十四孝

の子供、軍法傳授の此の一卷、頂戴してと差し遣はば、勘助取つて押し戴き、「父の苗字を給はれば勘助が身の規模は立つ、母の氏をつぐ、弟直江が母の孝、其の徳によつて此の一卷は、その方へ下さるゝ、御恩を忘れず猶此の上、孝行怠る事なかれ、景勝の忠臣は、我々中々に徹せんれども、心得がたきは親謙信、君に引く道心ならば、汝も徹ふ心や如何に。」言ふに及ぶ、我が子も切つて二君に仕へぬ此の山城、兄とはいはざる敵味方、此の三君の恩を直、三合戦仕らん。」一、うちあらん出かす。我々主君に仕ふる甲斐の、天目山に奮闘め、出合ふ所は川中島、運に依じて越後の出城、諏訪の城まで押寄せ、さも日増しき勝負をせんす。」と、露んたりながら、假に一旦景勝に、寄けたる恩は何とノ。」一す、日月に譬へたる右の眼は越後へ進上、二心なき勇士の固め、母に與へし片足の下駄、景勝の志、持つるは武上の道ならず。」と、左の足にのつかと置き、おり立つ庭の高低も、道は歪み取り取の、直なる竹の根もとより、はつしと切つたる竹竿は、聖雲目出たき大將の、ささふは賢き御笑顔、眠れる花の死顔に、抱いてのぶつてすかしても、返らぬ昔唐土の、二十四孝の目のあたり、孟宗竹の笋は、雪ときえ行く胸の中、氷の上の魚を取る、それは王祥、是れは他生の縁と縁、黄金の釜より逢ひがたき、其の子寶を切り離す、弟の慈悲の胸懐と、兄が不孝の孝行は、我が目の本に一人の勇士、今に名高き山本氏、武田の家の礎と、事跡を世々に残しける。

第四

道行假言の女夫九

偽りの文字を分ければ人の爲、身の爲ならず懸ならず、心なれば襦衣が、亡き夫の名も髣髴に、
ともなる人も髣髴と、いうてまじある意味が、引れくばつて懸望、今日立ち出づる此の國も、かといし
ふ有りけり女子の所體、さうして帽子に髣髴、袖につけて憂鬱を、おつてはる船中の、今は花の
歸りて、船頭請うして行く道の、泊りくや宿をへ、船中物に夢の聲、命の聲は生草、詞の絶を
襦衣が、そも此の聲は、陸奥南部にありけり、船頭の家の名が、高田原にもちてまじ、その聲一
枝は、たゞ手を萬金にも、かへ懸る此の我が夫は世をうて、一國の世にやは木竹の流る川
川に、水浪の波が蚊蚋ともし、大層ならねば、ついでに事も片出合、船がまじい一言は、いには名聞の
細道へ、水行みずぬれたる道の、ついでには死土に葬る身は爰に、國花がやうに、花の香、國花
かやちりんと、ちりによむはる神心、依とみみりてうてなが期、進み人も指して、あながち初
とあだはに、浮名立つるも、はつてしや。今の我が身は申きに、戀を情とあれはこそ、青柳の葉
宮田の期、とかく浮世は伊勢の池菰、菰の葉をのほれとて、かはらぬ柳は夫の名と、あまへもは

ども、神通得たる白狐にて、狩人の手に及ぶまじき上、去るにまつて、一國の野狐を残り、自ら取らば、
 神通得たる退は畜生、萬一白狐を射留めければ、英人の褒美、其の旨まつと心得まつと、つと横柄に
 言ひ渡す。近習の侍、飯山郡人、おくれぼつに立ち對き、「某、刻卒の時を、つかまつ、住らんと引下り、統
 所に、高島の坂中にて、年ふる雄雄の狐を見出し、方に安きはけ、引ひかへし、中夜が隙に遠く入つ
 て、おくれめに、行方知れず。無念で、前住損ぜしと、聲を喚き分けて、獲てしに、狐に勝りし女の曲者
 生捕りに参上致す。」「コナ、女を生捕つたとは、必定敵方の粉れ者、幸へ、若身の刀試し、闘切りにして
 くれん、是より引け、お調へ下、引立て出づる小牡鹿、是れも大膽な女と見え、都賀の山はつと
 風。女好きの左衛門、大目くわつとよく見れば、戀ひ、おれたる腰丸八橋、其の儘抱き付きたい所、
 家來の手前と仁體作り、「お、郡人、いしくしたれた、より、女、近き寄つて身が熱を見、ナコレ
 村上おつ、おれを鼻うて逢々の所能う、おちやつたこうと、いふ所なれど、爰は主人の下屋敷、ア
 レ多くの家來共が、お合點か。コリヤ者共、此の女今夜身が寢間に引きする、轉身のたんびらものを
 もつて、ためしめん、寢所に土壇の用意急けやつ」と、片頬に瀧面、片頬に細目、「コリヤうぬらは何
 してをる、早く失せう、汝もうせい」と、叫び付け、邪魔を拂うて、「コレ戀人そもじの事を問けくれに
 うつら、いと戀ひ惚れ、待ちに待つた念が届いて、今日爰へおちやつたは、是れ福に諏訪明神の引合

負。」「オ、合點」と刃追取り、背の稜取り、すすく脇腹と立ち何へば、村土大目明いてから／＼と打交ひ、其の節者に立ちあがら、泣きが噴き出さるひ、身を叩きうつし武正、身に射しては、不意と言はうゝ意外者。察する所、其處は先達北條に心を寄する氣、武田も共に其時の味方となり、此の村土とも和睦して、諸信は信を亡はし、信の父武田も亡はさんとの頼みの使者、通ひにせむと村土に、思ふふこれと討ち合へ、武田の通り、御味方相ひ、武田の使者、お受けなれと下らば、我々までも大變にと、恐れ入つて逃げていけど、我が眼力違はざりしな、兩家の頼み聞き入れぬも武田の本意ならず、兩家の返答は皆な様々に武田の、可笑打物の勝負にて、勝つたる方へ北條村土共に吐方、幸ひ是れに由狩の可笑、手を、敵をつゝまじ、敵として、一対一の的は勝負返し、五尺の的を射せんす。ヤア／＼翌日、其、精進、女め、一、屈強の的、胸腹を射通せ、精進の心に思ひ知らせよ、女め引け」と言ふ間もなく、翌日直達、細腕、涙ながらに八橋も、泣く／＼引かれ立ち出づる。あれ見よ兩人、此の女は足利家の賤の方の、必八橋、我都にて見初め、折がな時がなと思ひし所に、今日思はずも此の村土が手に入れども難面い女、我が詞を背く故、泣きが勝負にて彼めを成敗、我が見る前で胸腹を射通せ」と、刃を杖につつ立ち上り、眼をくぼれば、高坂、越名、如何はせんと言踏ふにぞ、猶豫すれば味方はせぬ、如何に／＼と、聲荒らぐれば、兩端正、辭するに及ばず、

と譯はれて、おづ／＼八橋が、きも魂も身に添ひず、此の體見らよりほつと許り、袂を頸に押し
 當てて、そゝ前に俯ふばかりの二コリヤ八橋、俺に獻たふ奴原が、此の死にさるゝをよつく見たか」
 と尖笑引き抜き、どうど奴原ばし、女もおれが詞を背くと、まづ此の通り、いやでも應でも抱いて寝
 る、寢所へ來い」と引立て行く、奥は俄に家喧變動、庭の楓込へは、と、風に偏つて露閣の、火影
 に見れば圖書に、日鼻あり、朝顔の、あしたに咲いて夕には、露の命も懸たれば、俺よてんほ
 の東中著、珊瑚の珠の目を光らし、服にもつれて寄り添へば、村上ぎよつとし、「コリヤ何ぢや、フウ
 をこえた、今日山狩の狐狸、我に仇する憎い四つ足、目に物見せん。」と燭臺蹴飛ばし、此方へ來る
 縁側に、又によつほつりと石燈籠、火袋に顔まづくと、有明の月の肩、目元に色を夜目達目、笠に
 當むす手水鉢、やらじととむる格好の手、跡へ戻れば青天井が、くらりくる／＼、蛇の目むき出す
 轆轤目、聞いて縮めて、相合傘の袖と袖、雨や雪霜ふらばふれ／＼、濡らしはてどと一本の、足手纏
 ひとなり、瓢箪、瓢箪から駒下駄も、庭の飛石を、わた／＼、待合の半鐘のうなり、くわん／＼鎌子、
 刀掛地の角軸も、三幅對の竹に虎、囀けば風おこり、龍吟すれば雲起り、哭の怒つた大火鉢、日鼻し
 かめて這ひ寄れば、戸障子襖ぐわたり、遠の村上氣をうばはれ、女を小脇に引んだかへ、行け
 ども行かれず、戻れど戻さぬ妖怪に、刃を抜いて切り廻れど、只雲霧を三重切るごとく、腕もなまり

つたに、申し、私はお草履取の化弁でござります。」「つ、化か、信玄ではないぢやないで、あれノノノ、草履取の越後の謙信、通さじやないで、追ふを言むる家来共、」「止、止、昨日の有様、人の見る目も随分替へて、おれと比べれば漸うと、狂ひ伏してゐるにや、」「やあら不思議や、今まで和田の館の内、越前高取を利殺し、我ながらつゝに想ふ、おれも思ひしが、爰へはマゝどうして来た。」「サア昨日の山崎から、達子におなりなされ、一家中が一通、皆、饒までお迎へに参つてをります。」「ふ、そんなに俺が強かつたのは狐の輩、」「成程かのでござりませうかのとは、八橋や、やれ、慙しゆかしと煎れた悪人、手に手を取つて、足元を爪立て、ちよこノノノと棲立て、行かんとするを家来共、よつて、よつて、乗物に、助け乗されば、乗物参れに、はいノノノ、遠く送うたるに、鼓、はやして、達子の数取り返した、返したノ、お先手をふる達子の子、逢うてあてたき信濃路の、薄き原野に、い、い、い、我が故郷へ、信濃なる諏訪の湖、要害に、増えたる館城、長尾入道謙信は、代々越後の城主として、己が武勇の鋒先に、爰も切り取る諏訪の城、折たに立つる奥御殿は、義晴公の御幼君後室手弱女御前、共にお成りを設けの結構、大方ならす見えにけり、今日ぞ其の日と、慶元、忙がし中に立集まり、何と皆の家、去年からの御普請で、結構に建つた奥御殿は、武將様とやらの後室様の

お成りぢやねえ。私にはそんな事は煩い、此の館のお姫様、八重垣様の御覧、其の拵へかと思
うてゐた。」「オ、彼の人の言やる事わい。八重垣様に御許様のめつた勝頼様は、去年の秋御切腹、そ
れで其の勝頼様の姿を繪に寫し、お姫様が明けても暮れても、泣いて許りござるが、そなたの目に
かゝらぬか。今日の拵へは、今日の木の大將軍のお手様なり、其の御座敷、或常のお客とは違ふ。夫れ
で此の間より國々の名物をお求めなされと、今此の宿訪の洞に、涼が掛り、丹の津葉も叶は
ぬ故、何か厭い手づゝと、百人衆の心遣ひ、大層精進な御座敷に、急に入つて不意に
い様にと言ひつけ、貴客とは云ひながら、御座敷に御座敷、御座敷の事を頼むと云ふと、是れは又
人を衛ながらす様に、御座敷れたやら馴れんやら、今参り。私、御前方に引廻して貰はにやならぬ
と、傍輩中のおれそれも、中よく見ゆる中庭より、いきせき出づる草花が、今は姿も菊作り、花恥か
しき角額、縁先に小腰を出め、奥庭の花壇の菊、屈むを伸ばし、延びるを締め、枯葉一枚無い様に、
残らず手入れ仕り、漸う只今相しまふ」と、言ふ顔うつとり腰元中、「暫く見事好い、暫く見事に
手入れがある、菊の花はあやかり物、のしらもどうぞ彼の人のお手入れ、小春が笑ふに、
何が之程目言ひ堪へ、國へ行く御座敷、何れも立派な手な、かゝるあなたにお
別れ申してより、此の館へ入り込むわたし、何れも目言ひ堪へ、どうお礼に堪へずと、案じる中

に思ひも寄らず、菊作の言つて此の儘へ、お出でなされし勢頼さま、御思案でもあつてのことか。」
 一々、不審尤も、此の家の上長尾源信、一子景勝を討つても出さず、嗣へ義晴公の志、置松壽片、
 御母公諸共、今日此の筈に招く段、心得難く思ひし故、菊作りと成つて入り込む果、汝が役目は法
 性の由、未だ奪取する儀りなきや、濡衣如何に」と有りければ、「一々、其の由の事故に、奉公に出た
 私、微塵も油言は致さねど、何をいうとも用心感しく、夫れ故心に任せねど、お驚び過ぎしませう。
 今日の驚しと有つて、其の由を上段に飭らして候へば、今日を過ぎすお手に入れん。」「すりや其の由
 が奥の間に。」「ア、お聲が高い」と指し寄つて、囁き首肯く二人が相談、それと白洲へ立ち出づる、
 姿一癖ある親に二娘々よりや娘」と、呼ばれて悔み飛び退く濡衣、「一々、父様とした事が、あの人に花
 壇の事を言ひつけて居る所を、斷りこちに娘々と呼ぶ様な、あた不疑な不慮慮な。」「何ぢや斷りなし
 に娘と呼んだが不疑ぢや、こりや俺が思かつたわい。今度から用があつて呼ぶなら、サア娘、今呼ぶ
 ぞと先へ断る、ハ、ハ、ハ、こりや面髪、わりや花作の事が上手ぢやというて、昨日から雇はれて來てゐ
 るが、此の花畑は此の關兵衛が預り、今日のおなりのお鑿しに成る花故、取り分けて大事と思ひ、助
 に雇うた花作り、もうお成りに間はないが、のら許りかわいて居つて、それで仕事が出来るかよ。」と
 呵られて手をもぎ、一々や二才の花作ると違つて、不問手いれのして有る花壇故、何にも仕事はこ

[illegible]

行く。館の主長尾謙信、衣冠正して儲けの式禮、角立つ中にうと薫る、音らしとノ、女中の手早き、邊輝く銀乗物、見るより謙信謹んで、儼然花とやいはん奇代の御入來、冥加に餘る身の面目、直に其の儘奥御殿へ。と指圖に隨ひ乗物は、奥へ行く跡謙信も、續いて入らんとする所へ、暫く待つた長尾謙信、奥方よりの御上意あり。と呼ぼる聲、はつと平伏し頭を垂れ、待つ間程なく立派の骨柄、長袴の裾けはらし、上座にとつかと威儀を正し、「先づ以て今日は、御幼君松壽君、御母公共に入來の面目、忠懷に思はるべし。去るによつて母君より、貴殿への御上意餘の儀にあらず、先だつて申し渡せし子忌景勝の首、今に於て討つても出さず、事延引にせらる、段、必定野心に極まれば、御前において切腹を遂けらる、や、但し景勝の首、只今討つて出さる、や、返答次第計らふ旨有り、謙信いか。と上使の横柄、「こゝに思ひ寄らざる御上意」と、顔振り上げて、「ヤア汝は倅景勝」と驚く謙信、さあらぬ上使、「ヤア景勝にもてよ誰にもせよ、一旦倅を討つべしと契約ありしは、諸大名の真中、今において其の沙汰なく、弱へ本國に引籠り、底の知れざる親人の所存、ヤアサ謙信の心底と、人の疑ひ立ち申す。何故さつはりと我等が首、ヤアサ倅景勝の首討つて、心底は見せられぬ。サアく首討つか、但しは否か、有無の返答承らん、サアく何と」と、詰め寄れば、さすが名を得し謙信も、倅を倅が討手の上使、返答何と當惑の、口を噤んで見事にけり、「ヤア未練の心底、此の上は某爰に

「お腹」と、指添に手をかくれば、「ヤレ暫く必ず早まり給ふなり」と、肩をかけて花を御長崎、何か白
洲へ白菊の花、花携へて立ち出づれば、「ヤア汝等細きが知る事ならず、退去れやつ。」と景勝の、怒りに
あつとも隠せぬ間兵衛、「イヤトとして上の事、指し出でござりませぬぞ、最前よりあれにて様子
ば承れば、如何やら斯う木乃伊取が、木乃伊になる様な御上使様。可憎しき侍の首、切つて仕舞へ
ば再び活ぬ。又此の花に何切つても枯れる、ナ切つて生かすといふ傳授、お望みならは指し
上したい」と、何處やら調の「御意、聞いて謹言料を擧めム、切つて生けると言ふ白菊、御返し面
白し、間兵衛其の花望みん」重根花に上けさうが、花許りでは自由からぬ、それを言かす
は花作り、朝のお次になりませぬは、是れ一呼百響せ共々に、活ける傳授を御覧あれ。花作りの装作
御用がある、早うノ」と、調仁が呼ぶ「勤作作り」エ、けた、ましい事。」と、此の場の様子白洲の
内、いきせき出づる如く「ヤア汝は武田勝頼と、いふをとめて「ア、申し、それ御存なと物が
ない、何にもして白菊の花、其の活け様を能く覺えた此の花作り、人の振見て、我が振舞の第一
の傳授事、」花みるへ御所望なれば、何んがさつぱりと、申譯の立ちさうなものと、傳ひながら
親にめは存じます」と氣作が、身の上を白砂に、額摺り付け「うづる」ホ、通れの花作り、さう
に軍に召し抱へんが、わいの調仁に奉公で、花の活け様傳授せんや」ハイ成程、外の事なれど

せぬど、花一まきなら活かきうと殺さうと我等が得物、夫れを取得にあ抱へなされて下されうなら、望んでなりと御奉公仕たき御屋敷、「一ホ、出かした、うい奴、御上使への御返答申し上ぐるはあの養作、先づ夫れまでは暫しの御猶豫、頼に頼み存する」と、餘儀なき頼みに打首肯き、「火急の御上意川捨はならぬど、鹽尻峠に控へ居る、諸大名へ申し渡す仔細あれば、我は御處へ立ち赴かん、有無の返事は鹽尻まで、隙とらば直に此の城取り回まん」と追付有無の御返答、廻むる中花作も、次へ參つて衣服大小、「ハハ有り難し」と勇む養作、是勝は苦り切つたる鹽尻へ、別れてこゝは出でて行く。御見送りて關兵衛は、諸信の前に手をつかへ、「花作りの養作、合點行かぬと有せしが、あれが大方。」一ホ、紛ひもなき武田勝頼、それと見出せし花守關兵衛、下郎に都合はぬ中を器量の有る親仁其の性根を見込み改めて諸信が頼み入れたき仔細あり、我に頼まれ得せんや、返答聞かん。」とありければ、「是れは又改まつたお詞、元狩人の私、お見出しに預つた君の天恩、經ひぬの御用でも、いやとは申さぬ我等が魂。」一ホ、頼もしし、其の詞を聞く上は、何をか包まん是れ兄よ」としづしづ立つて一間の障子、開けば内に怪しき牢奥、關兵衛不思議と指し覗き、「牢の内には Personen らしき者も見えず、何やら見馴れぬ變つた物、そりやマア何でござります」と、尋ねに諸信威儀繕ひ、「未だ日本へ渡らざれば、汝等が知らぬは理、是れこそ鐵砲と名付けし飛道具。」一ム、其のまた鐵砲とやら

が、盗みでも致せしか、何の爲に此の牢へ。一、科は天下を望む教道、先づ以武將の御前へ、薩州
神島島の浪人、井上新左衛門と名乗り、此の鐵籠を越え上り、類なき重寶の重寶、道行の傳授を乞ふ
瞞し寄つて義晴公を二打りに、跡をくらまし其の場を逐電、草をわかつて草を搜せど、今に行方知れ
ざる所者、詮議の手筋は此の鐵籠、其所に残りありしが、則ち諸人同然なれば、此の如く禁牢まで、
日毎の拷問手を盡せど、義晴公を打つたる敵、今日まで自狀せざる不敵の鐵籠、只今より此の詮議、
汝に申し付くる間、火水を以て責めよ、なみ、越の所在を白狀せよと、鐵籠をわたりと投げつけ
ば、手に取り上げて來れ、爾一すけの私にお預めあるは、此の鐵籠とてなる責めいでござりますか、
是れは又思ひも寄らぬ、拷問も問狀も、並く人間なら、及ばずなら責めも致さう、輕管屋の責め
か、唐の火味竹見の様な物、責めいとは如神なり、あなた方の手にさへ合はぬ物、其の土利を相提手
りも。一、手が、り證據に其の鐵籠の蓋を、穿々世上に知る者なし、此の傳授を乞ふ者こそ
一、まゝのや何と御意なされます、此の鐵籠の蓋を穿々した者が、一、則ち武將を打つたる敵に
一スリやどうでも詮議の事、仕掛すまじき汝が、此の鐵籠に在りては、見込
んで頼むに違背は有るまじ、道義致すな問状一、討ち斬る大旨の、心算して入る給ふす、申し
申、我々風情にこんな役目、問題と事による、外へ御付けられい、と、跡を眺めて、一、未だ日

本へ渡らぬ鐵砲、遣ひ様を頼みし者が、義晴を打つたる敵、此の潮兵衛に詮議せよとは、ふ、合點の行かぬ譯信」と、諸手を組んで工夫の顔色よく、いや／＼、どう思案して見ても、我等には都合はぬ役目、やつぱり都合つた花の香、鼻嵐しの朝矢より、外には何にも白髪親仁、下り小室へ往て一休みこと、振り擔げたる鐵砲も、胸に一物有明の、月もる臥薪へ行く水の、流れと人の衰作が、姿見かはす長上下、悠々として一間を立ち出で、「我民間に育ち、人に面を見しられぬを幸ひに、花作りとなつて入り込みとは、姑君の御身の上には、暮し過ちやあらんかと、餘所ながら守護する果、それと悟つて抱しや、ハテ合點の行かぬこと差し難伏き、思案に案がる一間には、館の娘八重垣、許嫁ある勝頼の、切腹ありし其の日より、一間所に引籠り、牀に輪姿かけまくも、御経讀誦の鈴の音、此方も同じ松蟲の、鳴く音に袖も濡衣が、今日命日を弔ひの、位牌に向ひ手を合はせ、ひろい世界に誰あつて、お前の忌日命日を、告ふ人も情なや、父母の惡事も露しらす、お果てなされたお心を、思ひ出す程おいとし、嘸や未來は迷うてござらう、女房の濡衣が、心許りの此の手向け、千部萬部のお経ごと、思うて成佛して下さんせ、なむあみだ佛々々、」「誠に今日は霜月二十日、我が身がはりに相果てし勝頼が命日、暮れ行く月日も一年餘り、南無幽靈、出離生死、頼生菩提に「申し勝頼様、親と親との許嫁、有りし様子を聞くよりも、嫁入する日を待ち兼ねて、お前の姿を繪に書かし、見れば

見る程美しい、斯様姫御と御臥しの、身は御御前の果報ぞと、月にも花にも染み入る。繪像の傍で十
種酢の、煙も酒化となつたるか、趣向せうとてお姿を、繪に描かしてはせぬ物を、魂返す反逆否、
名畫の力も有るならは、可愛いと只一言の、お許か聞きにいふこと、繪像の傍に身を打ちふた、流
津御前見え給ふ。故のなき縁は八重垣難よな、我が名を辱ひし勝頼を、滅の夫と思ひ込み、弟ふ姫と
弟ふ御衣、不便といじむしとら、言はん方なき一人が心と不安涙に、おけるがごとく、我ながら不
安の御いさ、向かふ合はせ立ち上る。依にしたらはり御衣が中も製作情、合點が耳かねは我がのお
姿、どうした事でおの縁に、一つ、不審でも、はからずも御情に堪へられたる我御大小、一つと我も
衣紋付なら、上りの習い様まで、似たとは思ひやつはり其の儘、聞こふ今は信され是れなれば、思
ふ事もありなりと、御心しは別れを悲しむ狀、言ふべきやに我が心に、訣離かならぬ北のお姿、見る
に付て、お立ちのめ、死の輪廻に迷うたさうな、御救うれてはと伏し沈む。なる御腹れて一瞬には、
不審立ち高く、八重垣難、密に縁の御間とら、お姿と御ふ方もなく、やう我が夫が前傾様と、驚き立つ
心を押ししとて、止しうお果したさめし物、似たと思ふは心の迷ひ、繪像の手紙も恥かしとて、立ち
戻つてお合はせ、御腹難の鈴の音、勝頼正に御姿が、心を動して御姿なりはかなまの心なり、
歎くは、お去りなづも、定なき世と御姿よと、御むる御姿方には、心なる其の人の、若しや存

へおはすかと、思へば思はれなつかしく、又思はれは繪巻に、見くらへる程生寫し二價はせでやつは
 りほんなく、勝頼様ぢやないかいの、思はれ一問を走り出で、纏り付いて泣き給へば、はづと
 思へどさあちの風情、「こは思ひならざる御仰せ、我等眞作と申す花作り、漸う只今召し抱へられ、衣
 服大改めし西参者、勝頼とは思へなし、御免相あるな」と突き放せば、「ム、何といやる、今父上に
 抱へられし新参者、花作りの眞作とや、自らとした事が、組に能う似た顔のもの、昔しや夫れかと心
 の傾備、二人の面物かしらから、一服流衣、此の眞作とやらいふ人を、そなたは疾うから近付か
 ー。」「言やいの、知る人であらうかの。」「アノお姫様とした事が、たつた今見えたお人、何のマ
 ー私が「イヤ隠しやんな、今の素振、しのぶ總路といふ様な、可愛らしい申かいの。」と、思ひも
 ぶらぬ詞に聞かす、お姫様のおつしやる事わいの、人こそよれ、何のあなたに勿體ない。」「ム、
 勿體ないといやるからは、どうでも其方の知るべの人か。」「イヤ、エさうではなければ、大事のお主
 の目を掠め、忍び男の拵へるは、勿體ないと申す事でござります。」「ム、すりや知るべの人でなく、
 殿御でもない人なら、どうぞ今から自らを、かはぬがつてたもる様に、押しつけながら、嫌を、頼む
 は流衣様々。」と、夕日眩く顔に触、あてやかなりし其の風情、「す、お姫様とした事が、まだお子達と
 思ひの外、大それたあの眞作殿を。」「ア見初めたが意路の始め、後とも言はず今爰で。」「嫌せい

と仰存のか、我をね、ほんにお大名のお遊御とて、遊御はなほお懸の遊、品に寄つたらお取持致し
ませうが、「コレ／＼縋衣、必ず龜相いふまいぞ。」「ヤア何ともから、私が若さんで、お取持致すとい
物でもないが、眞實家から眞作殿に、御執心でござりますまいと、聞はれて驚もあらむ處、勤めする
身はいさしらず、眞御前のおられもない、眞御に惚れたといふ事が、眞御にいはれうかに「其のお
計に違ひなくば、何そ極かな眞家の眞様、それ見た上でお聞き。」「イ、それこそ心安い事、其の眞家
さへ書いたらば。」「イエ／＼それも此方に望みがある、私が守む眞家といふは、眞訪法性の眞家、そ
れが喜んで貰ひたい。」「ヤア何といやる、諏訪法性の眞家を、要ういたせといやるのは、眞はあなた
が眞家」と、言ふ口おさへて、「ヤア眞家を眞家では、眞家のない眞家は、眞家は眞家」
と、云ふ眞つれなく、打守り／＼許嫁許りにて、枕かほさぬ眞家中、お包みあるは眞家ならねと、同じ目
色の鳥翅、人目にそれとわからねど、眞と呼び又つゝ眞と呼ぶは、生あるならひをい、いかに眞家か
聞ればとて、思ふと思ふ眞家は、そも眞家であられうか、世に人にも思ふなる、眞家の上といひ
ながら、眞家眞家に眞家、つい眞家／＼とお包の上、明して眞家としてたへ、それと叶はぬこと
ならば、いつを眞家して／＼と、眞家付いたる眞家泣き、眞家眞家／＼あらねば、眞家眞家／＼聞きかけなき眞
家、いかに眞家にとて、眞家なき身は下下眞家、眞家の眞家目と仰りあり、とて眞家眞家／＼と笑き

放たば「スリヤ」の様に申しても、勝頼様では坐さぬか、ハ、二はつと許りに裏作が、指添逆手に取り給へば「こは御短慮」と言ひける濡衣「イヤ／＼放して置てな、勝頼様でも無い人に、藏れ事の恥かしや、心の穢れ繪像へ言ひ、どうも生きては居られぬ」と、また取り直すを猶も押し留め、「オ」道は武家のお姫様、天晴なるお志、其のお心を見るからは、勝頼様に逢はせませう、ソレそこにござる裏作様が、御推量に違はず、あれが實の勝頼様、ちやつとお逢ひなされませ。」と、突きやられては逃にも、初めの懐の百分一、聞えさせぬが種一杯、あとほかに抱き付き、つい濡初めに濡衣も、心どきつく折からに、父謙信の聲として「裏作はいづれにゐる、鹽尻への返答、時刻移る」と立ち出づれば、はつと裏作飛びしきり「御支度よくば直様参上」「ホ、委細の事は此の文箱に、片時も早く罷り越え」はつと領掌文箱携へ、鹽尻さして急ぎ行く。謙信跡を見送つて「ヤア／＼者共、用意よくば早來れ」と、仰せにはつと白洲智六郎原小文治、更科などの譜代の郎等、御前に進めば謙信男んで「今此の諏訪の湖に、冰閉づれば渡海は叶はず、鹽尻までは陸路の切所、油斷して不覺を取るな。」「ハア、畏まり奉る」と、勇み進んでかけり行く。跡に不審は八重垣頼「申し父上、ことごとしい今の有様、何事やらん。」と尋ねれば「ホ、あれこそは、武田勝頼討手の人數。」「何勝頼様を討手とよ、こはそも如何に何故に」と、驚く二人をはつたと腕め付け「諏訪法性の兜を、盗み出さん奴等

が巧み、物陰にて聞きたる故、勝頼に使者を遣付け、歸りを待って討ち取らんと、謀し合にせし討手の手配あり。一モイそんなら今の討手の者は、勝頼様を殺さん爲か、ハ、一いつと許りにどうど伏し。今日は何なる事なれば、過ぎよ給ひし我が夫に、再び逢ふは僅曇花と、恨んで置た物を、又も別れになる事に、何の因果ぞ情なや、父のお慈悲に命を、どうぞ助けて給はれし、くどき歎くに目もやらず。一々武田方の通し者、當き女と濡衣引立て、一戦には堪ぬる仔細ある、男へ失せう。」と小籠取り、情用捨てあら氣の大膽、帳幕深く入り給ふ。一思ひにや、焦れて思ひぬ、野邊の狐火小籠更けて、狐火の、狐火野邊の、野邊の狐火小籠更けて、煙を洩れくる風音は、君を傾けの奥靜寂、此方は正徳源ながら。一その東の間に侍候が、涙ふ咽泣る全身の上、あつといは勝頼様、かか入れもなき細惑心、船不便と思すなら、お命助けて候はせてたべ。と、身を打らふして歎きしが、いやいや泣いては居られぬや、追手の者より先へ廻り、郡根崎に此の事を、お知らせ申すが近江の、諏訪の洲島人に、渡りたのよ急かんに、小籠取りする甲斐なきと、かは出でしが、一々。一や、今朝に津越の山、舟の津越と所は山、山船を行きては女の足、何と追手に追ひ付かれう、知らずにも知らず、あつと見えぬに、するに如何なる身の因果。一、廻がほしい、其がほし

い、飛んで行きたい知らせたい、逢ひたい見たい。大徳の、千々に亂る、憂き思ひ、一千年百年泣き明し、涙に命絶ゆればとて、夫の爲にはなも成るまじ、此の上頼むは神佛」と、牀に祭りし法性の兜の前に手をつかへ、「此の御兜は諏訪明神より、武田家へ授け給はる御寶なれば、取りも直さず諏訪の御神、勝頼様の今の御體值、助け給へ救ひ給へ」と兜を取つて押し戴き、押し戴きし佛の、若しやは人の咎めんと、窺ひ下りる飛石傳ひ、崖の溜りの泉水に、映る月影怪しき姿、はつと驚き飛び退きしが、今のは體かに狐の姿、此の泉水に映りしは、ハテめんような」と、どきつく胸撫で下し、「こはく」ながらそろく」と、差し覗く池水に、映るは己が影許り、「只今此の水に映つた影は狐の姿、今また見れば我が佛の、幻といふ物か、但し迷ひの空日とやらか、ハテあやしや。」ととつおいつ、兜をそつと手に捧げ、覗けば又も白狐の形、水にあくく有明月、不思議に胸も満り江の、池の汀にすつくりと、眺め入りて立つたりしが、「誠や當國諏訪明神は、狐を以て使はしめと聞きつるが、明神の神體に等しき兜なれば、八百八狐付き添ひて、守護する奇瑞に疑ひなし。オ、それよ、思ひ出したり、湖に冰張り詰むれば、渡り初めする神の狐、其の足跡をしるべにて、心安う行き來ふ人馬、狐渡らぬ其の先に、渡れば水に溺るゝとは、人も知つたる諏訪の湖、縦ひ狐は渡らずとも、夫を思ふ念力に、神の力の加はる兜、勝頼様に返せとある、諏訪明神の御教へ、ハア、添や有り難や。」と、

血を取つて頭にかづけば、忽ち妻狐火の、五に燃え立ち彼所にも、飄る、妻は法性の、光を守護する
不思議の有様、此方の間には手弱女御前、始終の様子宜ふとも、いふ白朝の花の香、小屋にとつくと
開き衝が、付け廻しても神通力、花のまに／＼見えつ隠れつ神なる狐、南無三寶こそまごつ關兵衛、
ねらひの的は手弱女御前、どつさり響く鐵砲の、音を相圖に遠近より、眼に響く煙火鼓、龍調に打ち
立つれば、騷が八關兵衛廣庭に、王正の、ほどなく馳せ来る舞兵衛、我討ち取らんと舞いたり、
愉快しきうさい氣遣、此の世の暇取さん。」と、大刀するりと抜き放し、當るに任せ薙ぎ立て／＼、
御杖をうして、行く先の、間ごとくは轟々と、煙火消えて雪せおは、敵の面影消こさよけれ、鳥
帽子素胸ら忍び入る、時の用こそ大廣間、咎むる人も長前と、長崎に暇取し足に、御座の間近く廻ふ
關兵衛、あひしとまゝ、勢頭が、眼で三見をぬきの間、人こそあれと身を滾くれば、此方も餘くる後方
の間、がら空かつたる三郎景勝、やれ進みてかけ入るゝ、袖引さるれば手にうはた、下の腰帯
スバ曲者と用ひ付け見舞小手返し、ひらりと付け入る勢頭を、さんつたのと舞の當りに／＼と
蹴し／＼、蹴りぬ大驚しすゝし面、人を斬る五郎平、大將の御座近く、常朝の式に叩ひ申さす、名々
諸所の常朝、大めに致さるゝと、ほら多ぬ鶴にしづくくと、鶴舞はく行く所を、一サス／＼と、
住人僧徒入道通二、とゞまれやつ。」と聲かけられ、肝にこたへて、驚きもどろ、邊をきつと大音聲、「ヤ

ありふかりや、三十年來歸をくこなし、包み隠せし我が本名、齋藤道三と呼んだるは、そも何奴ぞ
 封鎖せん」と、廣縁先に枯木立、景勢勢儀前後をかこみ、逃げば切らんと詰めかゝる。後の懷さつと
 明け、武田の忠臣山本助、叛逆人の証言をとけんじと、悠然と立ち出づる。續いて近習諸大名、御
 殿廣間も燭臺に、一度に輝く燈の光、遁れん方こそなかりけれ。されどもあつとも臆てぬえせ者、「ヤ
 ア長尾諸信の此の城へ、日頃不和なる武田の家臣、山本助とやらんのさばり来るも心得ず、叛逆人
 の証言とは、誰が証言、それ聞かう」と一ト、四下下郎の分として、天下に仇する汝が本名、知つた
 る行状は此の一品、七星八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞ悲しき。此の裏おほまが有らう
 かな、諒訪明神の力石、出合うた横城、珍らしい對面するな。此の歌は汝が先祖、太田道灌が刻ね
 し一首、みの一つだになきぞかなしきとは、足利殿に攻め落され、美濃國を切り取られし其の鬱憤に
 て、美晴公を鐵砲にて、打ち奉る叛逆人の張本、美濃國の道三と、顯はす裏は身の破滅、最前打つ
 たる鐵砲の響、覺えし者は汝一人、我と我が身の自狀明白、あらがふな齊藤」と、大地を見よく諷の
 石火矢、三人中へ取り返のて、「何とノ」ときめ付くれれば、ほく／＼と打點頻き、「ホ、遣は武田の軍
 帥と、呼ばる、勸助よく見付けた、我が先祖道灌は、諸信の先祖、上杉が槍先にかゝつて死したる恨
 みの元は、足利の武將、たよつて殺さん其の爲に、北條氏時に賄賂し、心を合はせやす／＼と、義晴

けしも、我を見出す計略とは、今までしらす心の淺はか。最期に幾改むる此の世の差別、北條が城郭の案内は、某具に傳へようさん。元來相州小田原の城、根深うして高き、要害の名域なれば、城くは落つべからず、霞暗れたる時節を窺ひ、箱根山より見下せば、敵地の構へ能く知るべし。其の時に謙信が家の軍法、細作の犬を入れ置き、後より勸助これにと切つて出で、放火を相圖に甲斐越後、諸軍一度に矢先を揃へ、指し詰め引き詰め射るたらば、さしも堅固の城なりとも、直に乗り取り氏時が、首を巷に晒さんは、道三が老後の思ひ出、さうばく。」と引廻す、心も清き武士の、死しても残す名のほまれ、家の譽と法性の、今更を甲州へ、戻す兩家の確執も、納まる婚禮三々九度、勝色見する一橋の、色ある勝頼、勇ある景勝道三が、彼も懷みも晴れ渡る、諏訪の満歩渡り、夜もしの、めに明け渡る、甲斐と越後の兩將と、其の名を今に残しける。

第五

甲斐、越後、兩家の戦ひ、四度の軍術互角にて、勝負一時に決せんと、劔の刃音鬨の聲、山河も動く許りなり。かかる所へ北條氏時、村上左衛門義清、軍兵數多引連れて、暫しと石に腰打ちかけ、「コレ村上、某が思ひの通り、兩家の滅亡今此の時、なんと村上、味いでないか。」と、人喰馬に相

本館代印

には、御兩人共に國家の爲に此の軍、北條村上を討ち亡ぼさんとの謀、疾より知つて、景が、五百騎の軍を廻し、兩人共に早搦め捕つたり。さうして兩人、氏時村上を引かれよ。」と詞の中、武田四郎勝頼、長尾三郎景勝、兩人を引据ゑさせ、「天下を我が極惡人、思ひ知り。」と兩人を指し通し、凱歌上げて都入り、嫁入り國入り惡人退治、天一天上先勝の、二人の大將、二人の彈正、名を末代に山本氏、御代萬歳とぞいける。

高師直
編纂官
太平記忠臣講釋

近
松
半
二

高直 太平記忠臣講釋

第一

田中康立様の御遺勢、菅官高直通共、承物下馬の参りし、服となりて鎌倉御所、山仕倉庫の奥
向先、所狀まで申向盡、積込並べて控ふれば、頼師寺大郎左衛門尉をかけ、「屋中の目見えくるしか
るまじ、御前仰なすなむ」と、長閑立つれば立て出づる、時の出頭高武藏守師直、家来を連て、
一並く、此が通はいづれの家来ぞに、一、横井指物守、西野大次二介、いづれも此の長
官の役目、頼師傳授に預り、身の大慶足れに違ふ、頼師の御前参りながら、黄金百枚、並に
印、御受下す御儀には、有り難からん。」と相述べたる。是れに、頼師といひ、今日と申し、
の御儀、此の上へから別分と、お指圖まうさう、後刻營中にて貴意得んと、傳へてくりやれ。其の進
物は苦勞ながら、直に身が足敷へ精進しやれ、大儀なむとばかり、頼師は御儀に立ち歸る。一、
頼師寺殿御覽じながら、此の後の敬使歸り、大切の儀式格式を参したは、頼師一人、指圖を受くる
として、それの心付、斯うなうて叶はぬ所。其の中に第一の儀、頼師官、此の叙大の儀、

其の宣告高きと見えて、是れ程の大事を頼むに、或は桑酒千肴様の贈り物、師直を踏み付けた仕方。」
 「成程左様、地體彼奴が口頭から、仁義立が氣にくはぬ。殿中で大恥かせ、重ねての見せしめにな
 され。」其處はぬからぬ、それ故に何事も傳授致さず。ヤアあれ／＼、あれへ来るは鹽治と見えた。
 其許に先づ奇城、萬事は後程と。「然らば先へ」立ち別る、間もなく、伯州の城主、鹽治判官高貞、
 家来矢間と上郎に菓子折一紙取り持たせ、「表前お屋敷へ推参の所、御不快とある故氣遣はしく、今朝
 早速御見舞申せしに、早御登城、御氣分悪しきに御勤め、御苦勞至極。」と挨拶に、指し出す進物じろ
 りと、寶前殿へ托が上らいでも、お上の御用怠る様な師直ではござらぬ、菓子たべたければ手前
 も所持致す。左様の賄賂受けて、式法を御傳授致す師直と御覽じたか。「是れは／＼左様ではなけれ
 ども、諸事お引廻しに預れば、畢竟拙者は門弟、師を重んずる志許り、お氣に障らば御用捨なされ、
 此の度の役目、何卒首尾能く勤むる様に、御指圖下さるべし。例年の格式は、今日御對顔、明日お能
 あるべき、當年は格別の御沙汰、今日直にお能ある由、第一心得ぬは衣服の儀、烏帽子素袍著用致
 してよからうや。お能御配膳の爲には、熨斗目、長袴たるべきや。何れとも、御指圖布ひ奉る。此
 の儀如何仕らん、師直公々々々」と、いへど一言答へもなく、「ハア昨日我が君より仰せつけられし
 御用は、一つは是れよ。今一つは何やら、ま、夫れよ大事の御用、家来共早供せよ。」と、乗物に乗ら

んとすれば、「申し、只今御尊ね申した儀を」「ハテ、其の位の事は、尊ないでも大方知れて有る事さ。夫れ程不案内ならば、何故我前にも尊ねあさぬ。」「イヤ、其の爲にお屋敷へ参りしかど、御對面なされぬ故。」「ア、コレノ、何かと云ふ中、大切の御用が延引、家來共早急け。」と、詞にありもはいはいノ、乗物急がせ別れ行く。重太郎は血氣の若者、申し殿、役目を早に被ればとて、餘りの不禮、こりや師直が心に一物。」「ア、コリノ、ハ、危ない云々、我儘不禮は天性、此の役儀仕おはせぬまでは、たとひ脚をもちたてても、堪忍を守らねば初め難き大事の用、短氣の行跡仕るな。此の上は京城の上、折り入つて指圖を受けん。最早鞍馬も押入りの御限近し、いづれ來れに事を續行大名氣、駒に餘度是有用、早く御申す、……大御星利直親公、御の御家史白書院、上段の御室に寄御ある態と御に敷き給はす、敎使若城上より、御より、田代、御馬代、宣旨の御書へ給へば、謹んで御前ある。師直是れを受けとつて御鉢に納め置き、續いて院直女御の世情、勾當の内侍より、中高上束御献上、師直、下段の數屋より、判官々と呼ばはれども、答へなければ御發高。判官は仰して居召する、早來の御、判官々々」と、おひひに、呼び立てられ、御前判官、素服身附ずも取りあへず、ハ、ハ、と長たる一ハテ振々々、御前の御發、御官、攝家、内侍がの殿上、御前へ、御前へ、御前へ、早くノ、……ふ顔も、若り切つたる不禮無禮、諸上の手前の爲等より、君の御氣也如何ぞと、思ひ

入つたる役目の大事、救使は下程に事を改め、自分の御禮御挨拶、早御對前事終れば、殿上の間へ對座有る、溜りの間より出て来る、藥師寺がしたり顔、武州公出来ました。何が鹽治奴が、貴公のお指圖がないから、諸大名の装束を見て俄の難儀、烏帽子、素袍著替へる時の忙で態、それ故遅参で先づ一つ下首尾の初より一、二、三、是れから又仕様は段々、今日の御禮は例格の外儀の儀式、執儀へ撥する見る様だ、と、點頭きやく侍人の、巧みと知らぬ鹽治判官、それと二人が立つて行くやうな、武州殿、暫くして呼びとめ、救使方へ御進物、先だつて我等御使の由、未だ御沙汰是れなきや。一存じ申、左様の事を今頃に達ねて、事が済みますか。師直は御前の御用が多い、其許に言申して居る間がござらぬ」と、振切り奥へ行き過ぐる、跡がなだめ、ハテ心得は今日の振舞、事わづかしきは目頃の氣質と思ひしが、最前の詞といひ、全く我に恥辱を與へん結構と覺えたり。エ、一生の浮沈、何とせん」と無念に心かきぐる、折から藥師寺聲高く、「鹽治殿々々々、お能の場所へ何故お出でなされぬ、大廣間へ早くノ。」「ナニ救使には殿上の間に御休息と存ざしに、早お能が始まつたか」「始まつた投か、モヤ中入前に「ハッ是れはノ。」然らば衣服を改めて」「ハテ御用が有る。先づ早く」と、せつく詞の中の口、矢間が持てくる間もなく、「衣服は歸で、マアござれ。」と無理に引き立て走り行く。重太郎は心ならず、「エ、今少し遅かりし、お上のお首尾は如何ぞ」と、案じ煩ふ主

思ひ、奥を見やつて右つ左いつ、心を焦る書院先、思ひ有りけに判官は、廣間を下る後の横、ぐわら
りと明けて高師直「いかに作法をしらねばとて、お能の場所へ素馬烏帽子、ア、不調法千萬、微令身
共が傍に居たればこそ、敎使へ不禮、君への不届、それでは萬事思ひつらるゝ、その許の標な總理者
に烏帽子装束は、正真正正に駄賃馬に厩鞍置いた様なもの、暗まつしやいくゝ去りとは馬唐では有るわ
い」と、悪口聞き兼ね重太郎、反打ちかくれば、「コリヤくゝくゝ、身共が誤り有ればこそ、師直殿の
お示しなするに推参な若輩者、陪臣の來る所ではない、下り居らう」と腕め付くる。主も案案と堪忍
情、腹をさすつて立ち立つる「イヤ、はや仰せの通り不調法な判官、何卒此二節御授あつて、要領の役
目首尾能く相勤むるやうに、一ツア師直に知在はない、半分心は付け召され、早お罷り申入、御殿の
用意々々「アッ」とこたへも心でく、繼をおまふる長閑、腰置の高師直が、さめてくれんと言ふのす
み、胸の懸立七五三、用意に時こそうつりけれ、立てに御殿の御殿と、腰置判官高師直、長閑のしづ
しづと、給仕の膳部日八分、師直見るより、「コレと」持たつしやれ判官殿、こりや何ぢや。敎使の御
膳は三方、本膳の料理も進うて見ゆる、こりやコレ紅紫の間の御膳、殿上人の膳部、ハ、何々竟思手
萬「一ツア先達斯くの通り貴公より御指圖」ハチさて馬直、身共が何々其の標な重出のしで能い
物か。わが誤りの人に重る、爾以て不届至極、理言また人に物を言ふには、それ／＼の標なといふ

ものが有る、其の禮儀の備さへしらす、事知り自慢で、自分計らひにやらるゝから、最前の様な不調法、一度ならず、二度ならず、左様な事では所詮義理は動まらぬ。もう用事は無い立たつしやれ、早く歸つて休息めされ。」と、膳部を立たし打ち落し、席を蹴立ててかけ入つたり。料理も散亂、氣は狂亂、堪忍の二字全此處に家の御絶時來し、是來もたし是れぞなり、師直造らじと、胸を定め入ら給ふ。斯くとはしらす石堂右馬之丞、櫛の間の取持に、心を付くる年配役、等を折衝すに、一事こそと御殿の騒動、大名小名行き違ひ、殿中に口論あり、名々詰所を堅めよ」と、いふ聲次第に聞き傳へ、入り亂れたる騒ぎなり。大下馬先には、諸方より馳せ来る人馬の音、中にも鹽治の屋敷より、駆け著くる大星力彌、向うに石堂殿之助、馬を放し行き逢うたり。力彌ではないか。「經之助様、殿中の騒動いまだ誰とも相知り申さず、心許なきは主人の身の上。」「す、我も氣遣はしく、早馬にてかけ付けたれども、御門を打つて人を入れず、エ、羽がな欲しや。」と高桑地、遙かに見上り立つたる折から、御門開いて綱乗物、警固は石堂右馬之丞、さも嚴重に出で來たれば、「ヤア親人殿中の喧嘩は誰々、承つて著著きたし。」「ヤア騒がしい經之助、たとひ此の石堂が體に過ち有るも、お上にさへ虚事なければ驚く事少しもない。既に事治まつた上、立ち騒ぐは上への無禮、屋敷へ歸れ」と云ひ捨てて、乗物急がせ歸らるゝ。何國までも主人の供と、狂氣の如くかけ出づるは「ヤア

第二

堪忍の文字は貴賤の實なれども、時によつては止む事を醫治判官高貞、一時の短慮にて鎌倉にて御身の禍ひ、知らぬお國の御城内、家中集よりぎ、八つやら、舞うつ踊ひつ酒機嫌、小寺重平、竹森喜多八、庭の塚で武藝の闘ふ、其の争ひぞ君子なる。あたりくと天取か懸け聲、一手々々に敵實の射法、一寸一寸の悲けのより、心づかひに執矢なき、大星由良之助の内室、屋敷模様の、真素な家老のさかもじ風、腰元引連れ一間を出で、「是れはく小寺様竹森様、御酒宴の座敷を外して好い手な仕様、したが罪誼な御代に武藝のお心掛は御奇特。か、私も座敷で、彼方此方のお相をして、詞おほきは酒機嫌、お教しなされて下さりませ」と、家老の妻の顔もさす、詞を廻す養間は、實に大星の室家なり。」是れはお石様の悼み入つたる御挨拶、此の喜多八も、御酒が過ぎて酔ひさよしの稽古。私は常々一吸ひもたべねども、大星様のお饗しで、重平が腸は酒漬。」と、氣疎、忠義でも不忠でも、まさかの時でなければ、武士の腸穿鑿は切腹の時、不吉な事仰有れすと、サア／＼早う御座敷へ。」と、詞半ば奏者番「只今御家老の九大夫様、お金役三左衛門様御登城」と、訴ふれば、「オ其の通り申し上げう、竹森様小寺様」と、うち連れ奥に入る間もなく、相家老兼九大夫、家中では

あつく蔵社杯、のつし翌十日の人物年ばい、跡に續いて参役早野三左衛門、左衛門より入り來れば、粗
らせに出向ふ、家老鎌大兄由良之助、親戚の杯杯をわかに出て立ち、「是れはく九太夫殿、三左衛
門殿、早速の御意を御尋ね候。」と、一と一と御者より、御亭主役の由良之助殿、無心つかひ、早朝
より急坂致す苦み候へども、早定五郎は鎌倉へ参勤のお供、去るに依つて一人の孫めが、祖父を慕して
放し立てず、見れば又憎うもこうしず、漸うながはれまして同道を仕つた。「なる程九太夫殿の御
有る通り、三左衛門が早野平、不届こうつて殿の御意當なれど、家老にも思ひ出しする様子が不儀
ござい、度々腹心ではせし、此の間も申上通り、此の度年計の御役者、鎌倉、卯下向によつて、
殿様と挑井捨陣守様、豊後守の役目を蒙り給へ、殿の御意に候へば、此の家へ御参、此度御奉れとの御意下
り、去る十一日より十四日まで、豊後守の役目相替り候へば、今日一家山打寄置、殿様よりのお酒重
置の最中御役目にお成りの間、御意申、アレ諒ひます舞ひます。」と、由良之助御立上り、御意の
三人來り、馬は御城門に入替の人員に候へども、一と一とれば只今大手の御門に、凡そ三尺許りの蜂
の御有き、山蜂一匹御立上り、殿の御意を御尋ね候へども、殿の御意に候へども、山蜂を
刺し殺し聞へども、殿の御意に候へども、山蜂を刺し殺し聞へども、山蜂を刺し殺し聞へども、山蜂を
なりとて、羣集仕り候。」と申し上り、是れは不思議。」と兩人も、何と評する事もなく、由良

の助も蜂の戦ひ、胸に當れど左からぬ體、「それはあやしき事ならず、蜂の戦ひ、其の合戦、山林水邊には、有る事、蜂の事にて、尾に毒なきを蜂の頭とする、其の蜂小蜂に刺し殺されたるによつて、山蜂怨を報ふと見えたり。蜂は元來節義を守る蟲なれば、さぞあらん、これを思へば人として忠孝なきは彼の蜂に劣つたり。侍は猶以て、蜂こそはよき蟲」と、未然を察する由良之助、後に思ひ合はすれば、以こそ蜂の戦ひも、鹽冶の家に來て、其の前後としらねける。九大夫はにたゞ、笑ひ、「御家老の講釋承つて會得致した、したが、蟲も生有る有故、出頭をせぬみ、刺し殺した物である、さ、さ、さ。」「オ、おつしやる通り、人でも蟲でも心が無くは人に論におこぼす、一寸の蟲に五分の魂、さかく世界は蟲を死なすが武士の嗜み、サア九大夫殿、三左衛門殿、先づく奥へ。」「然らば左様仕らん、老人の遅參御免あれ、いざ三左衛門來られよ」と、うち連れてこた入りける。奥は祝儀の聲高く、諸君は千代まづ、と、壽を祝ひ納めても、胸をさまらぬ由良之助、蜂の戦ひ氣懸りと、工夫を廻らす時計の一間、辰巳角の櫓の遠見、あれたゞしく、一鐘倉より早打と見え、御城の馬場先を押し來り縁にと申し上ぐれば、吉岡いかにと由良之助、縁に立ち出で、今やくと待つ間程なく、數多の人歩、乗物手玉につきまゝもすたゞ息、白洲に乗物昇き居うれば、由良之助聲をかけ、「早打に來りしは俵力彌、女房參れ、息次に水一口、早く様子聞いたし、父の討に籠帯ながら、力彌白洲

におり立つて、「今日の早打は殿の御大事（おほじ）に違つと驚く由良之助、聲はり上げ、鎌倉より内事の早打來つたり、諸上の面々、參つて仔細を聞かれよ」と呼ばれば、酒宴の席も俄に散亂、茶早の竹森小寺其の外諸役人、追取り刀で駆け出で、仔細はいかにとせき立つれば、力彌息をつきあへず、さねば殿様饗應司の御役目、十一日より十四日まで、首尾能くお勤の道ばかり、白鳥院にて教答の儀式ある所、高師直執權の職に誇り、殿へ不續ありしと見え、殿中にて師直を町場に及び給へとも、雙方共に御存命、綱乗物にて御城より御前へと成り給ふ。夫れより直に馳せ参じ候故、御の仔細は存ぜず候。おひより、注進御座あるべし。」と色を變じて述べければ、数々居る諸上ははつと仰ぎ、是は力彌の傍により、「其方も嘸驚き、定めて心が變れうに、よう早打におぢやつたなう」と、背撫でさすりいたはれば、父は力彌をはつたと睨み、かかる主君の御大事に、何とて注進延引せし。不届な御方、我が目通りへは叶はぬ、立つてうせう。」と怒りの面色。ハハはつと許りに爲方も、力彌は案に相違して、しをより立つて入りにける。「是れは又心の無い父御のお呵り、我が子を盡しするではなけれど、町人であの年なれば、手跡の稽古最中、鎌倉より此の御方まで二百里餘り、九日半に來りしは、出かきをつたと契はなすれ、お呵りは、殿様の申聞いて、當惑故と存じます。凡そ大抵は御を頼み、お前が狼狽へなさるゝと一家中は聞、お氣を遣かに遣はせ」と諫める方を見向き合せ十二只方力彌

を注進しと呵りしは、彼殿の大事を聞くより、我々に告げしらさんと思ふ一念にて、二百里を五日半は世の常ならず、す、倅早かりし、出かしたりと褒美せば、張り詰めたる一心の釣緒、忽ち切れて命を失ふ。其の期に及んでは、耆婆遍鵠でもいつかな蘇生する事叶はず、去るにより、張り詰めたる心をたゆませぬ様に、扱こそ只今呵りし」と、聞くにお石も返答なく、物に馴れたる大星殿と、諸士も感ずる計りなり。九大夫真中に進み出で、「サゲいづれも鹽冶のお家の御大事、高下によらず祿を頂戴する者は、臍を堅めて分別所。雙方御存命と言ひながら、折といひ場所といひ、全く殿の御誤り、輕うて流罪、重うて切腹。夫れを思へば胸にせまつて、智慧分別も中々出ぬ。由良之助殿には、魂に餘計があつて、子息を御呵りは驚き入つたる大丈夫。何かといふ中、二番手の早打來らん、此の一左右がお家の決著、一家中の身の安否、何れも退座無用なり」と、いへば皆々息を詰め、二番手廻しと待ち居たる「す、九大夫殿のお詞御尤も、此の由良之助が存するは、御代穩かに治まり、武十も町人と同じく妻子を育み、世を高く臥せらうと思へば、降つて沛いたる殿の災。併し雙方お命に別儀なければ、御知行減少して、お國がへと思はるゝ。是れからは家老用人すべて一家中、大小を差しながら、御知持たすばなるまい。ア、思ふ様にはならぬ世界、か様な事とは存ぜず、今朝より亭主役にて、甚だ草臥れ、又早打の参るまで、不禮ながら暫く勢れを晴らし申さん。何れもは是れにごぞつて、御

評議を頼み入る。石も参つて介抱致さる。ア、これから十露盤評の日々、せ、すば成りますまい。と、身の圍まひを一向に、口にはいへど心には、殿、御身の納まりを、胸にとつくと思ひ込み、慙と見せたる大星が、所有を神も白書院、夫婦打連れ入りにける。九大夫跡を見送りて、「ア、侍の風上にも置かれぬ家老、主君の事は毛頭思はず、其の身の榮華を思ひ計るは、見せし果てる由良之助、被が詞を用るば、萬人の譏りを受けん。今にもせよ追つての注進又來らば、善惡によつて一家中の魂定まらば、未だ詞も終らぬ所へ、遠見の足輕かけ來り、二番手の早打と見、乗物二行押し立て参り候。と、聞くより皆々立ち上り、九大夫驚いたる顔色にて、「これ由良之助は何してゐる、かかる大事にべ、だ、」阿の御小僧く夫の口上、由良之助儀、殊の外尋ねまして、御酒たべてをりまする。早打で参つたらば、宜しう御評議。と、御内政、家老職が左様いらて何と巧がひる物ぞ。御内政諸共に、重平参つて同道しめされ、早う、とおどろく、使に是非なく由良之助、殿の御事に、胸の關所はふさかれと、通る物に酒許り、呑みすゑたれば一向に、心もすわり目も居われど、館に頼りて座敷に直り、何れも御苦勞、二番手の早打参る由、急度承知仕つたにと、早急きかける筈よりも、御引人歩がエ、ノ、ノ、體はひつたり汗雪、二抵の奥御白洲にとつきりし、下せば九大夫聲をかけ、只今の早打は、矢間重太郎と評定九郎など、九藏六郎を抹へ切つたりとも、跡の藏

全く、物の言にれぬ事あるまじ、早う注進、早う／＼と老人の氣にいら立ち、重太郎咽を潤し、濁みたる眼に涙を注ぎ、「先だつて力強の御注進に御聞きの通り、十一日敕使御到着の始めより、定九郎殿と某、殿のお傍に付き添ひ奉り、十四日敕答の時、兩人ながら配膳の御役に伺候の中、殿師直を刃傷に及び給ひ、御誤り極まり、御預けの筈にて、殿は其の夜御切腹しと、聞くよりはつと竝み居る諸士、水に離れし轍の魚、平伏し吐息を吐く許り、九大夫五體を顫はしながら、シテ／＼倅、御舍弟縫之助様、お家相續なさるゝか。」「されば彼方は御別條なく、石堂様に御入り、屋敷も即座に召し上げられ候し」と、いはせも果てず刀追取り、白洲に飛び下り定九郎が、髻を掴んでぐつと引き寄せ、「卑怯者臆病者、其の節縦ひ配膳の役なりとも、即座に驅け付け師直を討留め、何故殿の御憤りを晴らし奉らぬ。さなくんば鎌倉にて追腹を仕り、冥土の御供致さぬぞ。生き存へてのめ／＼と、どの頬さけて此の早打、エ、親まで武士を捨てさす倅、見るも中々穢はし。」と、老の腹立ち氣の張弓押取りてりう／＼、なぐり立てられ定九郎、「拙者も左様存ぜしかど、今生にて只一目、親人と御對面。」「未だぬかす、家を出る時妻子を忘れ、刃を取つて其の身を忘るゝとは、戰場へ赴く武士の心得。腐り切つたる根性な倅、御城内には暫時も叶はぬ、勘當ぢや出てうせう。長居せば手は見せぬ。」と、父の怒りに定九郎、顔も得上げず悄悄と、御門外へと出でて行く。始終を聞き居る重太郎、すん

ど立つて二腰抜き出し、由良之助の前に置き、「只今九大夫様のお詞をつく」と思ひ廻せば、重々の不忠者と有つて、某追腹を致したりとも、草葉の陰にて亡君の御心にも叶ふまじ。所詮武士を立てられねば、此の兩腰をお預け申し、此の後一つの功を立て、御所存に叶ふ事仕らば、元の武士にとり立て、偏に願ひ奉る」と、頭を下ぐれば由良之助、熱酔のとり、目、成程矢間それよから、中々武士は立てられまい、いはば臆病腰掛け侍、二腰はマ合合は、元の侍に成るまで、由良之助御預り申す。今より武士でもないその方、家中へ顔も合はされまい、何國へなりとも、勝手にお往きやれ。サア／＼行かれい重太郎、早く出て行け、おいきやれ」と、おこり上戸の怒り聲、矢間は返す詞もなく、しをわ出べるぞ不便なり。九大夫顔をうち守り、「かかるお家の一大事に、由良之助殿御酒が過ぎる。」「成程御酒たべ申した、併に殿が師直を切り給はぬ其の中が一大事、最早今様になるからは、一大事から遙か行き過ぎて、どうも跡へは歸られぬと存するから、貴共に酌して御評下さつたが、勿論酔ひは致さぬ。御評定承こう、慮外ながら急度承る。」「されば聞かると通り、御舍弟縫之助様は、石堂様へ御養子なれば別條なし。しかし此方の屋敷は、即座に召し上げられしこの事、定めて當城も明け渡せし有る御教書下ら。殿御存命の間、明け渡せと御言あらば是非なけれど、左無ければ此の城を枕として討死、夫れは主君の御無念も少しは晴れん。此評第一決せば、

しまた勘當の勘平に合力でもしめられたか、此の節なれば事を止し、言譯なくんば、國法に行はん。」
と、言ふにはつと三左衛門、紛失せしは我が誤りと、覺悟極めし顔色を、見て取る大星すぶくしな
がら、「ア、物覚えのない三左衛門、其の金子千兩は、去年何月やら、嚴島詣での時、拙者がお借り申
した。」「イヤ其の儀は三左衛門曾て覚えが。」「ない」と言はせぬ。帳面に付け落ちたる思ひ出して見
られよ。」と、我が身に被る大星の、心にしらねど三左衛門、情を感する許りなり。九大夫膝を立て直
し、「いかに家老なればとて、相役にも斷らず、千兩といふ金を私用に遣うて事濟むか。高祿取つて何
暗からぬ大星殿、其の金は何にしられた、承らう、サア／＼聞かう」と、詰め寄り／＼九大夫が、
覺た、いてねぢか、れば、「ア、左様になされた、埃が立つ。」「イヤサ一家中の鏡とみる貴殿と九大夫
借りたでは濟まされぬ。」「サア明白に申さう／＼、其の金子千兩は、或は彌山の花盛り、雨の徒然雪
の朝、室の揚屋で遣ひ果して退けました。」と、庫灰付かねば九大夫も、取つても付かぬ家老の身持、
日頃にはにぬ大星の、傾城狂ひの放埒に、顔を見合はせ呆る、諸士、見限り果つれば、九大夫もせ、
ら笑ひ、「主なしになると皆化が顯はるゝ。サア此の上は城を渡すか討死か評議をしめ、祿の高下に拘
はらず、残る十三萬九千兩、身が筋にて配分。」と、酔ひ潰れたる大星を、尻目にぐつと睨み付け、先
に進む九大夫、三左衛門は大星の、深き情を受けながら、一人跡へも残られず、是非なくうち連れ

立ち歸る。まだ闇やらぬ由良之助、人言ひつそと静まれば、「ハ、家中は下置しられたか。」と、矢間が大小膝元に引き寄せれば、中門の戸の隙より、由良之助の胸中を窺ふ矢間、腰より張り彌次が覗くとも、いこ白書院大廣間、見廻しく、「矢間はお家譜代の忠臣、是れ程の事に氣の付ぬ侍ではなけれど、九太夫が實氣を聞き我が身もさう南無を、某に預け出て行きしは、ムウ仔細あらん」と矢間が刀抜き放し、見れどもかはらぬ彼が刀、何でもないといと投げはふり、指添ぬけば腹切刀、鋒朱に染みたるは、不思議と目算技を見れば、我良と銘打つたる、鹽治のお家に御先祖より、傳はつたる九寸五分、「さ」は此の刀にて、御切腹をなされし。ハ、深き心の重太郎、殿の御血をええされし、腹切刀を某に渡らん爲で有つたよな」と、肝にこたふる矢間が忠義、奥と口とに窺ふ一人、由良之助は一心不亂、血に染る袴を、縫きもせず打ちまもり、殿の鬱憤察しやり、無念の涙はらへは、九疊六疊を絞り出す。扱こそ後に大星が、上君の仇を報うたる、根さとは斯くぞとぞ

第 二

は、きさの有りとは見えて隔たりし、同じく見る妻見の、鏡の影つらきより、我が妻に引き別れ、死すべき命若殿の、愛に引かれて無憂も、常しや歸るの二つを、身に花散らぬはよ御前、お務

には大星方輔、行儀は常に變らねど、ひき籠つたる單居の籠、いと寂しく見えにける。お石んとや
かに手をつかへ。世が世の時であらうば、花見遊山は愚か、一家中がうち寄つて、お能やら御酒宴
やら、おめでた揃へに引きかへて、御酒宴の暇なく、お心うかぬは道理なれど、却つてお身の爲
ならず。お氣晴らしに酒一つ、差し上げんと存じ、不調法なわたしが指圖、眞平お救も下さりませ。
と、言ふ口上の切り刻み、實にも家老の妻さかし。覺しき和方の心遣ひ、山良之助を始めとし、
主従と成るも深き因縁、判官様に別れし折から、共に自害と思ひしが、此の爲苦が可愛さゆゑ、一ま
づ圖へと大勢の、進めには非なく命を存へ、來た甲斐もなう我が夫の、日々日も過ぎたる内、お上屋
敷はいふに及ばず、此の屋敷も今日中に相渡せよとの仰せ。お受け申せし一家中、喜劇染む館も今日
限り、別れノ、にならんも知れず。せめて名残に主従の、懷なりともせんものと、思ふ折節其方の
深切、日出度いといふでもなし、誰彼といはうより、力彌を始め女子同士始めませう。と詞數、いは
での森の露涙、こほれかゝれる御物ごし、いざと汲みなす杯の、哀れいや増す千代八千代、名殘數
そふ春毎に、色取る花もいつしかに、散りや果てなん世の憂も、晴らさせ給へとりふに、酒宴半
ばも過ぎる頃、明くる澳の内外に、心を配る大星山良之助、謹んで頭を下け、こは珍らしき御催し、
爲若様にも御機嫌の好いお容顔、見奉つて拙者も安堵。一つ、山良之助、最前から待ち兼ねました。

は、立ち留まりし天川屋、聞くしらす此方には、よれつ纏れつ大星が、傍に寄り添ふかほよ花、思へば憎しと女房が、障子ばかり齧く一人、後にと別る、主従が、疵持つ是の裏傳ひ、入る間違しと窺ふ義平、切戸の響無二無三、言ひ破つてくれんと、驅け込む奥より暫くと、留むるお石が胸ぐら掴み「ヤア申し御家老の奥様、いかに殿がお果てなされたとして、有らう事が有るまい事か、三代相恩のお主様とせ、くわあふ根性で、家老職といはれますか。此の義平は町人なれども、大恩請けたお家の騒動、山良之助殿の分別も聞かうと思ひ、泳ぎつく様に思つて、遙々來た甲斐もなう、淺ましき館の態、一言も二言もない、判官様のところ申こそ御用達、もう是れからは義理もない、畜生の様な侍に、金取らるゝと思や腹が立つ、奥へ踏ん込み金の催促、残らず算用せにや置かぬし、腹立つ儘の眞實心、一寸、毛もぢやく、此方様の腹立ちに、返す詞の有るべきや。定めてお前の心にも女房とぐるになり、お主を掠める我々と、思はくも恥かしいが、露程もしるならば、何しに斯くといひませう、様子を聞いたに只今、とにも角にも白らが、夫の所存を聞くまでは、私に預けて下されと座はかはれども兩の手を、土にすり付け頼み泣く。「ハテこな様の男ぢやもの、問ふ事あらば直にお尋ね、義平許りは一人前、お金の算用せにや置かぬ」と、又驅け出す後より「義平殿先づ待たれよ、しづまられよ。」と呼びとゞめ、襖をうつと斧九大夫、刀片手に一間を立ち出で「最前よりの様子具に

承知致した。義事の値り尤もとは言ひながら、由良之助の誤りと、殿の御用金とは又格別、果し
聞き届けし上からは、その方が立つ様子の對面は迫付きつと仕上げて見しよ。イヤなにお石殿、其許は
奥へござつて、貝何事も知らぬ體、果しあては計ふふまじ」然らば夫の悪名も「サア何れを
此の胸に、ござれといはば先づ奥へ三はつと立つ足先の身のと、如何と心細い處、足すなく／＼入
りにける。とつくと見すまじ衆も夫、しつ／＼と庭におり、義平が手を取り押し詰し。又川原義平
は、武士ら及ばぬ魂と闘いては居れど、目前の役には立つまいと、今の今まで存せしが、一打つて
萬を知る、只今其鼓の一音で、心の内を見抜いた某、改めて其背へ、親み入れたき一通り、聞き届
ける御所存つ、聞いて安堵致したい。さう河原坂、越後の御恩うへにこれの責を負ひ親みなさうい
り。聞き届ける御所存とた、先づ「さういふ存」の通り、主君の御忌期間と其の儘安土のお供と、選
つて申すしかと、心算はぬ一家中、御忌日を送る所、地内から此の屋敷、今申中に相成ると願ひま
御法は。晝夜詰めたる室の内、君を取らるゝと思へば、無念に無念を並ぬる某、忠臣、君に仕つぬ
某、誰人にも見えぬ我一人、上使を侍る受け切願ひたす某の悲憤、親ふと申すは愛の事、更切
願致せし時、心より御親子の事、送らるる時の御身といふ、母と其元直を取つて、御介抱下
らば、夫の連ひうらくなし。お頼み申すは是れ御身、實に親み送るさうと、親より責め付くと

手を打ち、「船を入つた御心成、主君を大事と思召す、其の志心を見込んだうへは、お世話申さういであ
んと致さう、お願ひなされ船がましよ」「一々、お世話なされ下されうや」「天川屋義平は男、御
恩ある殿の奥様、指もつしは致しませぬ」「ついで、命し、其の一言を聞くうへは、我れ家中
の氣質を計らひ、何かの事をしめし合はせしむ。其の儀にはまだ外に、祖みたる仔細もあり、爰は端近次
の聞で、暫く休息観み入る」と、いふに吾とも門人の、敬はるゝほど備み入り、無禮は御免と九太夫
に、挨拶取り、「別れ行く。折もこと有れ、千崎小寺、庵か下つて手をつかへ」「承つて歸き入つた貴
殿の御思案、我々とてもまつ其の如く、死すべき時に死せざれば、死に勝る此の身の恥辱、上使を引
き受け潔う、腹仕るが亡君への忠我、九太夫殿にもよち相違はござるまい」「一々、某斯くと
一決すれば、此の學にいらぬ由良之助、いかにして春達まぬ。各の心成某と同心なれば、萬事
申すに及ばぬこと、此の上は由良之助に面談致せし上のこと」と、話の中の間押しひらき、「大星由良
之助用事あらば承らん」と、聽する色なく真中に、むすま坐したる兩家老、いづれ劣らぬ其の風情、
「イヤなに大星殿、此のたび殿の御最期、其計は無念には思さぬか、先づ此の儀が篤と承りたい。」「
「是れは又知れた事のお尋ね、我々始め一家中、御恩を受けたる殿の御最期、無念に存ぜいで何と致
さう。」「ア、いや、いや、御用金を配分し、何國へなりとも立ち退かんといはれし詞、反古にはなるま

い、ナヤそれでも主君へ忠義の誼かこゝへ、立つともなく、時へ奔りし娘の金子、母の背へ這こころり、我々が申し受ければ、亡君先祖の御ひ孫、長く之家の爲にはん爲こゝへ、御家もはさむつて、木まで思召し、御ひ孫は同じだが、思召の清平のめんく、七使を引き受け城を討に附れて、冥土のお供仕もんと、一決したる罪定ち、首級一人預けり、時日を待す娘の母はこゝへ、其の情は山さいで知れた事、御願致すも亡君のお志とはいひなかり、断らします御願成へ、不意と成るが心付のぬが、夫によつて惜しからぬ命を惜む由良の助、「ふ、それ程惜しい物でも、おぼよ御願のお望とあらばこゝへいふにや及ぶ主君の更方、「ナヤヤ主君の更方が、その先の親類、人は知らぬと思召れうが、三才兄ぬい、拙者の能力、何と御成はさるまいと、いつてはたさちつとも動です、御成見の上は包むに及ばず、更方の心を引き見んたら、時にのみも御相繼、貞女の邊も忘れ給はば、其の時御成見申さんと、思召に違ふ御成願、申し出たて手付不調式、御免蒙けしを、不忠不義との御成びは、九丈と説とる存ぞの御成、「ナヤ其の御成い、御成女の心を試すに、何故御成に違はれし、「ナヤ御成をこそは毛御成者、「御成ないとはいはれぬ御成、出の手に入りの更方のす跡、度重なりし文の面、あらはれ渡る此の一通、言譯あらば承らん、其の言譯、家中も氣はと御成言はば、目な御成で御成留る、其の御成に御成之助、御成を御成はす御成りしか、九

大夫に兩手をつき、「かほよ御前の色香に迷ひ、恐るべき主君を忘れ、御身を穢し勿體至極、隠し課
る罪科も、某一人引き受けて、腹仕るが何れもへ、武士の端なる申譯、首は何國にさらさると
も、此とも厭はぬ主君の詞、介錯頼み存すること、身を譲り願ひける。」と、切腹願はるゝは、侍
らしき性根が有つて恐るしう見えまする。代々御家老筋といひ、命許りは助けたけれども、心一致に
厭まる我々、いかにしても其の意得がたし。不義の悪名きつぱりと切腹召され、拙者介錯仕らん。
ヤア、誰か有る、附付け置きし用意の三方、早々是れへ」と九大夫が、詞にはつと大星力彌、父が
最期と白木の小四方、歩む聲の日八分、斧が前に直すれば、「コレは力彌、親の最期と聞き、心亂れて
兇相は有り中、氣を押ししづめ此の三方、サツレ山良之助殿へ早う／＼」「ヤア、下として親の
心知らずんば有る可からず、此の三方の置き所、微塵違へぬ父の寸志、お受け有れよ九大夫殿」と半
分言はせず、ヤア黙れ力彌、某に切腹とは何の擬言、赦しはせじ」と居丈高「ヤアききな、いはれな、
腹切刀を突き付けしは、鋒力彌が討らひならず、我より先へ其許に、切腹す、おる冥土の饞別。君御
存命の内よりも、兼て師直に心を通はし、金銀を以て媚ひ詔ひ、始終を窺ふ時も時、此の度主君の御
越度、落命ありし元の發りは高師直、さすれば貴殿もかかる罪科、明白たらんと思ふより、某竊か
に諸士を招き、まづかう／＼の物語、我は何にも知らぬ顔、只強慾の詞を立て、奥方に戀慕と見せ、

底意を擇る狙ひの的、よもやにつれば致すまいかと、言はれてきつくり鑑みぬ。一、くゝくゝ、我が罪を隠さんと、誠にやかに言ひならべても、其の手ではいかめしく、腰刀にいはすと其方から「イ、ヤめつたに腹は仕らぬ、詮議の絲口、御自分の御目」をける此の三方。「ム、此の三方を詮議の種とは、合點行かす。」と引きのくれば、「ヤアこりやこれ早野三左衛門が言、金紛失の言譯、腹切つて相果てしな。」相果の通り殿の御用金と云ふことされ、切實致して早野三左衛門が書き残せし、この第一通、讀んで譯有れ。」と、差し出す一通引つたくり、披見ば内に書き残した小箱、初故爰にと懐ちて、師直が定数の中其の小箱、初と覚えがござらうが。「ヤア何が何と」「何を金と云ふ給失の間、お金庫に落ち散りし其の小箱、初は是とも知れうる空聞、三左衛門が越度と成り、取替するより申すと、心一つの前勘定で、我にもしらさず相果てし跡、其の一通に譯したる小箱、よくよく見れば目録と有り、その中に記述するなどは、知々と讀むにせむ。吾輩も斯様なりと、思ひ詰めたる老人が、不便が最期を見るに付、師直が所持の腰刀、數回しきは外にない。心に懸けられこそ、一目見て驚きしは、言はねどそれと顯はれ且、但し其譯の筋有るか。」「サアそれは。よもや一句も有る」と、やはらに見ぬ。詞の餘、千崎彌五郎其立て直し、最も適ぬ範疇終に、尋常に變かるか、但し其八幡の御引たり。

人とはいひながら、縄打つは匹夫のわざ、一二を爭ふ家老職、此方より手をかけて、未練な成敗は仕らぬ、尋常に切腹あれ。遅いと主君へかゝなる不忠、腹めされ九大夫。」と、いへど答へも並み居る家中、「いひ譯無くば我々が、切腹を勧めうか、お望みならば打首かき首、勝手次第」と口々に、折り重なつたる手詰の場所、さしもの九大夫悪びれず、諸肌押しぬぎ物をもいはす刀逆手に取り直し、行手に突き立て引き廻す、手先をしつかと由良の助へ、尋常の御切腹、適れかうこそ有りたき物。しかし某が思ふ所存も有れば、暫しの苦痛お救し有れ。」と、刀抜き取り一間に向ひ、「奥方の仰せの通り九大夫切腹致せし間、御心慮安く思召せ。」と、申し上ぐれば、かほよ御前、お石引連れ立ち出でたまひ、「自ら許しかそなた衆の願ひの邪魔する大悪人、腹切らせしも由良の助の計らひ、國入の其の口より諜し合うたる心の割符、其方に擇る計畧の、底を見すかす主従が、互の胸は敵味方、いかに悪事をなすとても、お主の最期を儆ぶのみか、まだ其の上に我々が、身の上までも告げ知らす。コリヤ詞は主より天道の與へ給へる腹切刀、何と思ひ知つたか。」と怒りに交る御涙、お道理様やお石が介抱、脊撫で摩る許りなり。九大夫無念の顔振上げ、「一物有る由良の助が、我も底意を探る内、合點行かざる文の通路、仔細あらんと思ふ内、最前奥にて拾ひし文も、今思へば計畧の、綱に懸りし運の盡き、是れより外に言ひ聞かす事はない、早首打てよ大星。」と、無念に凝つたる眼でし。お次へ控へし天川

んと思ふ處に、此こゝに難がたなき人畜にんちくしやう生なず。へ、獄卒ごくそつとやいはん、魔王まわうとやいはん、見みるもいまはし、腹立はらだちや」と縁ゆかり板いたににじりつき、無念むねん涙なみだに暮くれければ、大星おほほし力ちから懈ゆるみ、父ちちが前まへに手てを支さへ、「其そのの御無念ごむねんを散ちするには、一時ひとときなりとも事ことを急いそぎ、敵師直てきしりちが、館たてへ込こみ入り、討うち取る手筈てづかが肝要かんよう」と聞きあへず、「なにさ／＼、進すすむに却さかつて退しりぞき易やすし、用心うしんきん厳きびしき高師直かうのもろなは、親おやくは有あるべからず。一ひとまづ屋敷やしきを上使じやうしに渡し、思おもひ／＼に國くにを立ち退のりき郡山科ぐんやまのきに住居すまひを定め、師直しりちを討うち密事ひそごとの段々だんだん、一味いまい徒黨たとうに堅かたまる人数にんずう、夜討ようちの編引ひんひき、其そのの場ばの用意ようい、見込みこんで頼たのむは義平ぎへい殿どの」。「や、其そのの義ぎは此こゝとも氣遣きづかひ有あるな。武具ぶぐは勿論もちろん、忍しのび装束しやうふく、小手こて、騎當きあて、御入用ごにようの色品いろしんはお受け申まうして仕立しだつるも、御恩ごおんを著おたる此この體ていに「お、實じつに至極しごくせし志こころざし、言ことはず語かたらぬ大星おほほしが、兼かねて夜討ようちと定めたる、其そのの姓名せいめいは明あきすとも、徒黨たとうの人数にんずうは四十餘人よじゅうにん、いろはの文字もじの合印がひいん、鎖帷子さゐし、弓ゆみ、鐵炮てつぱう、忍しのび入いるには槍やり操さく手て、めい／＼得物えきものを提ひきけ／＼、一度いちどの役やくと二度にどの驅かけ、先陣せんじん後陣こうじんと入り亂みだれ、本意ほんいを達たする我が胸むね中うち、他聞たをんを憚はかる一大事いちだいじも、九太夫くたふに聞きかさん爲ため、苦痛くつうさせしも主君しうくんの詞ことば、肝先かんさきに徹とへたか」と、目めの中突うちき武士ぶしの、忠義ちうぎの程ほどこそ勇々ゆうゆうしけれ。義平ぎへい源げんをおし隠かくし、「武士ぶしの鑑かんの由良ゆら之助のすけ様さま、私風情わたくしかぜが性根しやうこんを御覽ごらんじ、御用ごようの筋すぢを頼たのむとのお詞ことば、身みに取とつていか許ゆるり、御意ごいにあまえた事ことながら大星おほほし様さまへ頼たのひの品しな、御覽ごらんじて下さくださりませ」と、云いひつゝ、立たつて木陰こかげより、我が子この手てを引ひき氣きもちいそ／＼、「お願ねがひ申まうすは此この條じやう、一生しやうじふ我

が手に置きまして、何と斯うと商賣の約もなく、現こそ此の身で思つるとも、てゐて此奴を侍に仕立てたいと、及ばぬ望みも遺憾が、つきせぬ御恩は由良の助様、お願ひ申さん爲許り、遂々連れて参つた心、何事貴方のお手廻りで、お使ひなされ下さらば、軍が次第捕者が安堵一一、否々、かかる大事を打明けて、頼む程の果、殊に寵愛の一子、人言に取る望みはござらぬ、お心遣ひ御無用にと、見送す一句にうしろの義平、悔ひてしかうあらぬ御一一、其の誠有るお方と見込み、一生不通の養子分に、お貰ひなされ下さらせし一や我々は今日有つて明日をも知らぬ此の世の暇、申し受けて何の益一一、其の益なき養子なさら、も故に心を放すす功一二、尤もの一言、我が手にせよとは好い分別、いかにも地を貰ひしよ一一、一や貴方なうれ下うと、ハッをねて義平も御も御州、御用を聞くも深が義、養育相の奉る一一、心の内は人言と一思ひ定めし切願も、大事をもちよぬ哲言に、我が子の命授け出した、男一重福満の、賜されとこととられたる由良の助恩に、一重絶にすれぬし貴殿の魂、今こそ我を手本とし、敵御直を付けねらば、願ひ願ひ石の内に願ふと人、一はか仕損じ申すべきこと、詞にはつと我の義中、手負に無念の御情みなし、めうき功みに参れぬし、せめての悲願せ、御直を受けねらぬ知らぬの早打、是れ見ま一一、御取取の遺失一一、流が突き向ふを有れ、一様使意が詰り頭、原郷有御門、大義文書、御部御次郎、竹森直を八、思ふ

に馳せ來る三御計畧の通り、弁九大夫切腹見届け、満足致す」と、聲々に呼ばれば、「エ、一度ならず二度の後悔、相圖を待つたる一味の武士も、叔はうゐらが召捕つたか」「一オ、言ふにや及ぶ、其方に心を寄せし人非人、幾らす一間に溺め置き、汝が死出の導きせん、性根亂さず尋常に、最期を清く仕れ」と、馳せしめられても怯み我慢「我が首一つを儕等が、千萬石の加増と思ひ、介錯とよ」とどつたと半す「一、心得たり」と由良之助、ひらりとぬく間次の間に、早御上使の御入りと、知らずは館の名様、思へば無念とかけ出す諸武士、マレ暫くと止むる義平「御憤りは、理ながら、役目の御上使、無禮は却つて願ひの妨け」「一、實にも貴殿がいふ如く、屋敷を渡すは覺悟の前、しづまられよ」と制する大星、門出の弁九大夫が、我と自滅の血祭よし、やがて本意を達する瑞相、まつ此の通りと打す落す、不便と更にいふ人の、ないて返らぬ使者まうけ、御上使是れへ御通いと、たぐれ照らす燭臺も、かゝやく大星親と手が、心の内こそ、重連しき。

第四

無心より詞足らねば筆にて知らせ、文は懸路の橋となる、所も名にし白川は、懸岸、姿、足、道心遊民の隠れ家にて、月雪花に事かぬ風雅の里、門には琴の指南所、兵法初心の稽古場と、一行に書

いたる釣看板、表の處にはすつしりと、見懸けによりぬ御影石、石切鑿にてかつち／＼、ア、これこれ、此のこつぽが可愛らしい。其の目へ入つたら一生の、きずる縁のあまやかし、四五人づれにて脊脱の、金剛面の綱鼻緒を、片足々々に、「御師匠さん、明日又習ひにさんじようえ。お京さん如伺道はすえ、私やきぬん、今一べん、さらへて跡から参じよう、先へお往に。」それならばお師匠さん、明日参上、おさらばえ。」と、いへど御匠は口吃り、辭儀おれそれも仕形にて、まはらぬ舌を、／＼、あい／＼と一口二口、みな打連れて歸りける。「ア、此の五郎太も、毎日のつんでんころりには、とんと聞き飽いた。したがおれが石切の音もやかましごんしよ、ほんにやかましい次手に、は御様が戻らしやつて、居合藝に成つて、稽古場がはかすに有つたら、無雙直ちやとてやかましかる、いつ又女の兵法使ふは、今の所が何の様に成らうと、思へば思ふ程、よつ程をかしい物。」また五郎太殿のをかしい事、コン申しお師匠様、又お阿りなされぬ様に、稽古場歸いてさんじようえ。」と、つべこべお京は走りゆく。「ホンニどりや、のらかわくといはれぬ様に仕事せう。」と、立つをさんごの袂をひかへ、早速に動いはれず、用有り顔を、「お娘さん、何ぞ用がござんすか、ア、又動いふに哥中ぢやあら。」と言はれてはつとあからむ顔、總べればこそ、紅葉すつたる巻紙の、反古取り出し石塔の、漆屋を墨色にて、ごら／＼／＼と走り書。「フウ／＼、又晩に忍べかえ。わたしも内方の父御様の、石塔をお切りな

さるゝ手間に來たのがお前と私が縁の初め、毎日付飯で仕事すればとて、お前までを付飯にしたらば、宵に阿漕の召されたる、母は其の儘有りながらで、母御に綱をおろすのを、見付けられたら、オ、怖怖、そりや左様と、先度お前に借りました大枚の金、ひよつと知れたら大抵や、大方の事ぢや有るまい。わしや是れが苦になつて、案じて許り居ますぞ」と、いふにお組が愚念の、筆に云はすを読み下し、「つゝ／＼そんならお前が締預つて、銀の出し入れなさんすか、夫れならば氣遣ひない。したが話をする度に、かう紙を遣うてはたまらぬ。此の反古では大佛の、張りぬきせうとア、まゝよ、鬼の來ぬ間」と寄り添へば、何處やらお組も恥かしく、だきつくにさへ手もどもり、おづ／＼だいて可愛しとも、言ふよりはるか言はぬのは、かはひらしうていぢらしき。折から表へ破れ傘、古土瓶、鍋蓋、炮烙、缺徳利、加賀の古蓑、越中陣、香の物、漬櫻、だいのかたし／＼行燈に取りそへ、三四人、「ハア爰ちやさうな」と、門口から「ちつと物を探ねませう、内方に石屋の五郎太郎は居ませぬか」と、すつと入つて、「そりや居るわ。」「ヤアお家主様か。」「何ぢやお家主様か、わり様は／＼／＼、ようもようも斷りなしに、ぬつくりとよう夜抜け仕やつたの。コレ爰に居るは負せ方衆、皆打寄つて家内集めて見たればの、こちの家賃、米代、木代、味噌、油、其の外の買ひが、り物が三百五十匁、其の中へ道具屋の直打にして、錢百にはたるたらす。」「ア、さうぢや／＼、おれは醒が井の拵屋、石

屋の手間取が、不相應な研賃に、身を流す袴袴の空賃が二十五匁、今取ろ。」コレノ、此方の道具店にぶら付かして置いた、跡付野袴、此のどんごには似合はぬ、銀高一貫九白。」イヤ去ればかりぢやない、朝夕飯のかはりに命を繋いだ、八文盛りの温純蕎麥が、八十杯で六百餘り、今日中に持つて往ぬ。」イヤマア大法ぢや、家賃から取らねば誰かぬ。それにまだ木は買はずに、竹炭子を折つては焚き、大屋根の平瓦を捲つては大雨風呂、用事場の戸まで大盗人め。」と、近所へ響くわ、お聲、ア、これノ、ノ、ノ、私に爰の雇はれ人。この内で其の様にいうて貰うては、五郎太が駄賃、拜みまする拜みまゐる。」と手合はせども、「舌々いやぢやない。其の拜み例しに懲り果てた、代官所へ連れて行く。歩めノ。」と引立つる、袂にお銀が取り付いて、「ア、これ申し、ハ、腰の立つは道徳ぢやないど、ア、堪忍してノ。」と、心は言へど舌廻らず、一人うろ／＼氣を焦る古ハア美しい姫御が、何やら斷りいはいしやるさうだが、一つも譯が聞かぬ。「ア、これノ、皆様、お師匠様の留めてぢやない。」何ぢやお師匠様、そんなあの吃殿は、貴様の師匠か。「ア、弟子共は有内ぢやか、師匠共とは珍らしい。」ハ、聞かたわいの、叔は五郎太めかあの師匠をさういと女共にしをつたな。サアノ、此の内も係り合ひ、爰の戸障子外してなりと、金際取らにや置かぬ。」アアノ、よいわいな、コレお師匠様の斷り、口ではいいぬ。コレ此の書付、ア、何ぢや、母様の戻らしやんしたら、好い様にせ

う程に、やかましくいうて下さすな。シタリ、さつても能書かな、ぢやがよい手な事いうて誰しぢやないかや。そんなら母者が戻られてからめつきしやつき。」「サア夫れまではあの裏の兵法の稽古場へ、サアくお出で。」と連れて行く。跡に五郎太が吐息つき、「申しお組様、いかいお世話、母御様へ好い様に頼みます。」と仕事にかゝる石よりも、堅い後家風二つ鬚、立ち歸る我が家の内、「一、五郎太殿精が出ます、お組も稽古仕廻やつたか。」「ア、アイ。」とはいへど男の難儀、母に夫れとも言ひ兼ねて、書いて見せたは何事か、白川邊に目印の、門口に案内して、「劍術の御指南なさる、お禮様は御在宿成さるゝか。」「アイ成程私が主の禮、何の御用。」と尋ぬれば、「されば拙者は當所を勤めし浪人、北村傳治と申す者、劍術御指南と承り、仕官の望み有るに因つて、御教へに預らんため、二つには又藝道御試み有つて、息女を下されんと有る義承つて、只今參上仕る。」「是れはく、わたしが女の身を以て、劍術とは世渡りの爲許り、教へまするといふ事は、あられもない事。娘が事はお聞きもあらん、則ち是れに居まするがお組、親の慾目でか十人竝、蟲のわざやら舌の廻らぬ難病、夫れを御合點なされたら、存尺のびた一人娘、御相談はともかくも、ソレお京茶を上げましてたのいの。」と、互の挨拶おれそれの、間もなく又も入り来る、これも同じ浪人風、「お禮様お宿にごゐるか、身共は入間丑兵衛と申すもの。承れば御息女に、劍術銀練せしものを、塔にお取りなさるゝと承る。我等

少しばかり覺えあれば、娘御が申し受けたさに、俗正が谷邊より態々参つた。「オ、ようこそお出でなされし、只今も見えたれど、娘は格別、此の禮が葉を見まきにや、婿がねには、なうお組。」といへば、娘は石切と、見合はす目と目に、五郎太は領き、搦手をして、イヤ申し、私風情の下主下郎が申すは慮外がましけれども、只今お出での婿様は御兩人、何處かに存ぞねど、竹刀なりとも木太刀なりとも、一勝負なされた上、御縁組がよござりましょ。「オ、成程、母も左様思うて居ます、早速ながら御兩所のお手際、拜見致したい」と、いふに井兵衛、それよかり、どなたか存ぞねど、お相手に成り申さうかと、立つて北村傳治、身不肖ながらお相手に成り申さう。」と身繕ふ。五郎太は心得、木太刀真中に直置き、「憚りながら御兩所様、云々御勝負、何にもわたしは存ぜぬながら、兵法の豫意と申すは、一旦の勝は勝ならず、始終の勝を計要と云へば、未練な勝負を遊ばな」と、いふに井兵衛、目に角立て、イヤおのらが分際で、何様を、すつこんでけつかわい。イヤ左様におつしやりますな、私も去る人の囀に、聞きましたが、涓滴に釣せし其の中に、太公望といふ者が有つたと聞けば、何處の塵埃の其の中に、手者も有るまいとも申されませぬ。」と、聞いて傳治が一箇白い、さう言やわれも手が利くな、相手にならう、俺ならうと、隙を傳治が蹴かへせば、向うへしやんと畏まり、「何んなされやす、お二人勝負なされませぬ」と、いふをも聞かす井兵衛

が、首筋觸んでぐつと引立て、又振落せば後にしやんと、要らざる戯業なつれまうな。」「い、マ推参。」
 と兩人が、又立ち向ふを母は見より、「い、手竝は見えた、塔はしれた。」「い、しれたとは此の丑兵衛か。」「い、此の傳治でござうが。」「い、塔に取るのは此の五郎太。」「い、御術器量、敏が夫にす
 る人は、此方ならでないかいの。尤も丑兵衛殿の流儀は件の内、傳治殿は宅間流、いづれにおろかは
 なけりとも、わけて五郎太の流儀、今絶て知る人なき宅宮流、奥儀を覺し其の五郎太、此のお禮
 が塔がね。」「立聞いて二人の素股塔、つつはたかつたは下手の駒、井戸へ落した心地なり。」「丑兵衛殿。」「
 一傳治殿。」「お互に遺恨はござらぬ、馬鹿らしい花婿、とてもものに宅宮流の奥の手見よう。」「と兩方
 より駒ぐら取つて引立つれば、後へつま立て筋斗がへり、投げ付けられて二人の侍、生兵はふ／＼
 頬が赤ち、腰を抱へてしかみ頼。」「サント手練御覽じたか、まだ心元なくば、これから此の母が、眞
 剣を振舞ひませうか。」「い、さもう重々御難作で、痛み入つた。」と門口から逸足出して逃歸る。五郎
 太が手竝に借錢乞、家主先に聲ひ聲、家賃も命の有つてこそ、狐鼠々々ぬけて往ぬ所を、「コレ／＼待
 たつしやれ。」「ハ、お待ちましてござります。」「此方案は、此方の塔へ金儲便に來たのおやの。」「い
 エ何のお前、左様な者ぢやござりませぬ。」「い、さ／＼さう聞いた、今日から塔に定まろうへは、不埒
 な事は捨て置かれぬ、不肖ながらマ是れで料簡のつれ。」「と兩一步、品よく振く柳生流、二、是れ

10

お能書のうしよの散ちりらし書か、ちらと見付みつけたお組ぐみが絶たり氣き、脇わきからちよつと狀かたちの端はしはつと引取ひきとりさあらぬ顔かほ、
「エ、よう書く手てを持つて居ゐる人に、此この悪筆あくぴつを見みせるのは、恥はにかしいお顔かほ様さま、イヤ嫌きらむつない女房にようばう
共とも、我われが身みや、アノ眞實しんじつ俺おれが可愛かわいいか、但し憎にくいか聞ききたいこと、味あじな所ところへ紛まぎらせば、戀中こゝろなながら今
更さらに、改あらたまつたる初はつめ夫そ、恥はにかましように、可愛かわいいに、誰たれちやあるに「眞ほんおや」「う道みちに可愛かわいく、
一生いっせいの無心むしんか有ある、聞きいてたも」といふは外ほかの事ことぢやない、今日けふ夫婦ふうふに成なつた今夜こんや、其方そのちから已いに暇ひま
をたも、サ、憐れんりの筈はず、男おとこの方かたから、女房にようばうに去されたいでなければども、何なにを隠かくさう、先度さきど、和女わにょに無
心むしんいうて借かり受うけた百兩ひゃくらうの金かねは、おれが主人しゅじんと崇あがめる人に、差上さしあげた目見めみえ金かね、其そのの金かねの徳とくで、元もとの
武士ぶしに立返たちかへり、明日あすは東園とうえんへ下くだらねばならぬ時宜ときなり。此このの家いへに居ゐるは今宵こんや限り、暇ひま乞この其そのの書置かき置き、母人ははにん
へ渡わたしてたも、女房にようばうさ、ば」と立ちあがる。思おもひがけなき詞ことばにはつと、「イヤ、待まちつて、ソ、そ
りや、、ふざに、」と、驚おどろく許ゆるり口くちへは出いでず、もだつく胸むねのもつれ縁ゆかり、縁ゆかりにいはする恨うらみ言こと、
「いとし可愛かわいき方かた様に、見放みはなされんも白露しらつゆの、葉末ははえに結むすぶ憂うれき身みぞや、眞まにお前まえ故こなら子この目めの
若菜わかしほ君きみが爲ため、惜おししからざりし命いのちの中なか、我われが世帯よだてをも世話せわやかば、憾うらみしさは山々やまやま、二つには又また母様ははさまへ、
及およばすながら朝顔あさぎほの、夢許ゆきなる御孝行ごこうぎやう、それさへ捨てて行いかうとは、ソソリヤ聞きこえぬわいな、」
「成程なるほど々々、其そのの恨うらみはども、イヤもう俺おれも、此このの内うちの家督かどくを繼つぐが嫌きらではなけれど、今言いまいふ通り手

詰に成つた、思知らずとお義様の思ひしも氣の毒ながら、爰を能う人知れず。侍に成るからは、今日有つて明日無い命、死んだと思つて、東國へお遣りなされて下されと、お執成し申してたと。和女も外に好い婿取つて、もう俺が事はふつりと思ひ切りや。是れが一生の暇乞に成らうと知れぬ、母人へ能い様に、頼むくと言ひ捨てて、又立ち出づる夫の袂、お組は取り付き、つらう情なや、外の男と添ふ心なら、何の斯うして堅めをしましよ。私ぢやとて、マさんごら事を分けてのお詞を、應う聞くではなけれど、いかに男の癖ぢやとて、餘り難いこと々顔の、花柳かとは馴れと、泣いて口説くこそわかなけれ。隠居の間より母お禮、和妻に大い携へ、勘平が情に置き、此方様も浪人の果て、近頃侮れがましけれど、親子の印指引出、斯う縁を申んで置いて、改めて頼みにやうな御手有り、よもや違背は有るまいの。「何が叔母のお組、渡更太恩の義理有る御方、お組みとは知れない、此方よりもお願ひ申す仔細有り、先づ彼方のお組みから、一いふ御々わうは申されぬ、詞の昔が御誓言が聞きたい。」「ム、ム、」と勘平すんと立ち、裏紙包の古火小を提げ出で、袖締は切れたけれども、武士の影ぞと露様、斯くの通り」と丁々金打、心底見えた、其の頼みの仔細といふは敵が討つて貰ひたい、サ、助太刀がしてほしい。「ム、敵とは主の仇か、但し其の頼みは、一、敵が其には親の敵、母が仇には夫の敵。」「シ、其の敵は仲國の親し。」「ム、知つて有るさう、敵と云ふは伯

州鹽治判官の家來、大星由良之助おやわいのと、聞いて悔り、「ム、由良之助を敵と狙ふ人々の御由緒はな。」「サレハ由良之助と膝をならべし、斧九大夫が後家でござるわいの。殿御生害有りし後、一筋に忠臣の夫、城を枕に討死せんと、言ひ募つたを腹に持つて、卑儀未練な由良之助が、詰腹を切らせしと家來が屋敷へ歸つての辻進、其の時の口惜し、さぐに斯うとは思へども、伴定九郎は行方知れず、生中女の刃向ひ立て、大死をせんよりと、さぐく國を立ち退く日より、あはれ力に成る人がなと、轉々斬る甲斐有つて、見所有る此方の人柄、此の人こそと徒らを、破に致へてしかける意、用立つた百兩の金は、夫九大夫殿儀の金、則ち今日の五十日の禱に當り、成就したかの石塔、連合の石碑の前で、増舅の契約すれば、此方のためにも舅の敵、大星討つて未來の妄執、晴らして進めて下され。」こ、金の出所、娘の由緒、なわらりと知れて胸ぎつちり、頼みの先を打掛けられ、只うつとりと呆然、許り。「コレ増殿、返答ないは臆れが付いたが、増となり子となつて、今更もつとも引かしはせぬ。得心なければ三人共、差違へて死ぬる覺悟、サアくく、何とく。」「ア、これおせきなされな、ハチ餘り御念が入り過ぎろ。侍が金打して、變替する法が有らうか。」「ア、いかにも異りまし」た。「娘悦べ、早敵を討つた心がするわいの。」といそ／＼勇む折も折、表に足音とん／＼と、戸を打敲き、「御案内頼みませう。」何方よりと聞くる戸の、おとなと思しく白晝の、包みを先に兩手をつき

其の二腰、石碑の役目仰せつけられ下さるは、身に叶ひしことながら、此の上とても御情には、貴君
思召し立たられし、大望の連判に御加へ下され、東國の御と召連れられ下されなば、「アこれ
れ、由良之助に覚えなき大望などは、龜忽ばし申されな。それは冤も有れ、妨少よりお別れ申した
平殿、篤と面體拜見致さう、是れへく。しか様稚顔覚え有り、三左に取つてい似やう、何は
らず、由良之助が東國の供したいと有るが、其元には何の命を以て供にめらる。エ、イヤサ中
みて息のかひ、音聲五音の調子をはづれし死人を、供には連れられまい。たゞし命にかけかへ有つて
か、「ハア、御尤も千萬、いかにも拙者が命のかげかへ、是れ御覽ぜ」と取り出す、位牌にしろす逆
朱の文字、俗名早野勘平二十六歳、討死の光がけ仕、兩腕くわらりと血汐の紅、頼み切つたる
勘平が、自害を立ち聞く親子が悔り、うなづに切つても出られぬ時宜、様子いかにと窺ひる。由良
之助立ち寄つて、「しなしたる勘平、義臣の中に加はりたさに、御邊より調進せし金子、鹽冶の家の極
印有るは、是れ正しく斧九大夫が掠め取りし千兩の内の金子、不義の手より出でたる金、御用には立
てられず、それといはば勘平が志を無にする道理と、石碑料と名を付けて返進せしは、斯様の最期
をさせまい爲。去りながら、討死を常として、我が身の位牌を刻み置く程の魂、生きよといふとも
生きまじ。エ、あつたら、付を、せめて槍一本の主になさるる残念や、見事々々。」と一言が百萬石よ

身にこたへ、親三左衛門切腹も、用意を九太夫に盗まれたる故なれば、わが爲に仕出の敵、其の敵
の娘ともしらす、非道不忠の九太夫が一家となつて襲撃し、位牌に血汐の此の逆案、助平といふ名計
は敵討の御旗を御赦免願ひ奉るごと、いへど主人の御勘氣は、心一つに敗されず、只黙然たる後の
が、指迷はく手も見せばこそ、我と行くお祖が覺悟、母も道に武士の氣、驕がす由良から遠近に「常
の氣貫は知れんがも、死んだ夫に最良が付く、通算る由良の助旗を、九太夫敵の敵い、今の今まで思
うたは女の浅草、ひふんな増にならとやつた、助平殿がいしに候い、敵が死ぬれば不忠常の氣に足れ
まで、何卒血判の其の中へお記しなすれとせし、娘も母にお願いこそ、御旗をばすかにはせ、
思ひ入つたら親子の敵、不便す候にせ、御旗をばす九太夫がな候、敵も有る者の御旗こそは、御旗
で叶はぬ、」ハ、實にそよと氣の付く母、常に有りあふ勢りな候、刀を抜りしに、御旗一つと
めり候し、娘も増も助當ぢや、敵の縁に絡まれし、血筋絡筋、まつ此の縁に切り候なれば、すふり
はあかの他人の二人の者、他人よさらば。」と一言に、誠を立ることなりや、割つてはぬ眼は慈
み、二人とは出来ずれたる、しとしと二人がな候、舊しの名義は苦しかるまじ。」「イヤ、く
く、割つてはぬ眼で、先づ二人は、敵の助平太夫、間が當つて氣味のよいは、割つてはぬ
眼、」と、二人は向ひ、笑ふも泣くも眞實の、一つに落つる、刀の聲、刀の聲、刀の聲、手負、思へ

ば九太夫の仇、思ひしれやと石の面、念力通つて拜打ち、石の片割切り刺つたる、刃は正宗忠義の手の中、大星思はず聲を上げ、「忠臣蔵」助平、敵討の一番槍、血割清んだつと、有りければ、ハアはつと一度に悦びの、心あるあばがつくと、同じ其上の友手鳥、無常の風に引取る息、あはればかなや、重うだめなき。

第五

道行人目の重經

半太夫戀の種誰が何時の世に蒔き初めて、情の實生咲きしより、いと不可愛の花盛り、男盛り色盛り遊びかうじて酔となり、寝のとれたる石堂に、繋がる縁や難之助、戀のはじめを浮橋に、つい仇認め誠となつて、ほんの女夫になりたいて、思ふ思ひも儘ならず、任せて事の積りては、何の儘も浮氣同士、たゞ思はずも死神に、誘はれ行ふぞはかなけれ。人日つ、みを二人連、共に手に手を鳥邊野の、露ときえんと浮橋が、死出の下著は白無垢や、上に鶏頭の伊達模様、中著緋紗襷に黒襦子の帯、年は十七初花の、雨にしをる、立姿 男も對のはで小袖にて、裳ほら／＼ア、定めなき、二十一期の色盛りをば、戀と情に身を捨草の、野邊は菜種の花盛り、蝶よ小蝶よ菜にとまれ、せめて暫しは

手にとりて、手銅は、夫婦とあり、番付になれぬと男婦、二世の固めの酒事は、それ覚え
てか文字にて、後の月見に逢ひ初め見初め、いとらしい殿御ぢやと、思ひ初めたが縁のはし、わし
も其の時それ其方の、可愛といふは如何したものか、問やつた時にこれかうと、抱き付いたれば嬉し
けに、互に締めつ締められて、腰のまいそと誓詞の固め、それがかうじて此の間に、死出の田長や純
讀の鳥と、後れ先たつ鳥とあり、其土の地の割となる。地に幾やし親鳥の、寛春は無いにけに、見
送る程に見送る程と、中に聲ひかゝる煙火か、いや其ことは良辰星、有き、願らば身の土を、言傳も
かな傳もかな、食も早更けとしんくんと、下、清水の煙の散、見づ此處に北南、八坂の境にやくと、
死にに有くのには、命知らず、悪徳な者と、人さんが笑はんしても、大事にいか、そりや可愛の
とやない憎いのや、新めの時から逢はれて、北野清水の煙、悪い煙に、煙はて、歩みをはこ
びし甲斐もなく、今死める身のはかなうと、こぼす涙は遠い邊の、草葉をひたす静かなり。男も涙
にくれたから、夫婦は二世と聞くれば、あの世では此方へと、最期をいそぐ死出の煙、雲があ
るぬか無常の煙、明日はふたりのいそぐ煙、いつて煙と云ふのは、冥土は六つの世にて、成ふ
まいそで遠はし、いと心細い煙、いそぐ煙、いそぐ煙、いそぐ煙、いそぐ煙、いそぐ煙、いそぐ煙、
らばつと煙々の、煙に染し我々は、早雲の山鳥、四方つと、煙々の、足邊山に、さききにけりてよ

うふう日那出来ました、おふたり共に今の身ぶり、たまたた物ぢやござりませぬ。白湯のかはりに御酒一つ、コレ中居共、お銚子持て、先づお杯を早うぐ。申し旦那、お二人の道行にすつて付けたわたくしが後見、何とお氣に入りましたか。さうす、あの取廻しでは、本舞臺へ遣つても、まんだら呵られもしまいよ、出かしたく。それはさうと、これほどの大出来に、この治郎右衛門は何して居る。」

「ほんにそれよ、道行に取紛れ、とん忘れてをりました、曾我の六太の治郎右衛門、一はつと答へて立出づる、身には帷子の思ひつき、元氣に見せる顔付も、さながら寒いと知られたり。藝子春野が二上り調子、治郎右衛門様のきつい元氣、寒々うな顔付は、さつき夏気味、汗入れたがよいわいな、と、頻ぐ春野が扇の手、おつとおおへて、いよいよ旦那へ申し上げます、長只今の道行上、おやりのなされた所、嵐三郎は扱置き、中々いらひ人少しもなし、すつと上でござる。扱浮橋様、嚴い隠し藝が、お前をつき出しの新造様とは思はれませぬ。」と、響められる程恥かしく、顔は上氣の室の枡、すつと胸中取つてをります。山姥久とお上り申しましたよ。」「ア、悪い口合、押へもせうか。」「そこらでおあひ。」と亭主がすつと、呑んで讀んだる花柳御。姫御お北はとほくと、是れは餘り生ききや、亭主がきつと押へましょ。」おましょの時の鉢の木は、鉢の木の金比羅大権現、大権現の赤人田子の浦、田子の浦太鼓の音聞けば、音聞けば元が凡大なり、凡夫なりしたる子安貝、アアとせ

立つ、悦びについちふと、春野主頼はるのすねと人形にんぎやうによそへ「わしとおまへが其の中へ、出雲いづもの神かみとんと約束すれば、つい新枕しんまくら、里に戀すれば浮世ぢやえ、トやつた物ぢや。是れもやつぱりお二人の、中を祝せし我等が願作がんさく、出かしたと思召さば、浮橋うしほ様の身請より、此の太夫の身請から」皆までいふな吞込んだ。」これと指圖しづに挾箱はさばこ、言はぬ色なる山吹やまぶきの、花も實もある武士ぶしの、まつしり百兩ひやうりやう「スリ、此の金子を私に。」「オ、太夫が身の代、何かと其方が心遣ひ、右と左に二人の君達、奥でわつさ酒にせう。」「コリヤ能うござりませう。酔ひざめかしてわしも如何やら寒なつた、お前さまの其の羽織はおり、カ、ヂヤ脱いでやれ、貰うてやれ、次手にちよつと腰こしの物、これも暫しはかしへ。東西、此の義は首尾しゆびよう仕繰しおせましてござります。」「てんからく打たぬ間に、人形が百兩、機關師きかんしは、竹田近江たけだ ちかえや、治郎右衛門ぢやうゑもん、又臺まただいを飾りかへてお目にかけます。」「思おもひには、如何した花はなの咲く事ぞ、身みにぞ知らる、憂うれや辛からや何と旦那御覽だんなごらんしましたか、大座敷には馬鹿者ばかものの縫ぬい之助のすけ一人、山良やまらの助親のすけおや子は未だ参らぬ體に見えまする。鹽治えんやが弟縫おとうぬいの之助のすけに心を寄する大星親おほほしおや子、何にもせよ、某それしが爲には親おやの敵、今宵けふの中に親子諸共打ちはなして。」「ヤア聲が高い、道々も申す加く、此の度京都へ罷り登りし其の様子は、師直殿しりちかを付け狙ふも計り難し。其の目附めつけに登りし某なれども、鹽治えんやが家中の顔を見知らず、それ故に定九郎殿じやうくわうだまを身が家來に仕立て、事の様子の窺ふ所に、一向に呆れ果てたる馬鹿者共、

此の上は用心と縁戚もいらす。只心憎きは其の浮橋、曉之助にうつ惚れ、身は座敷にも寄の付かず、
此方へ身請の相談、彼奴に請出さしては、老師寺が武士立たせと、思へ、詰める今も只今、浮橋めを
此方へ身請して、曉之助に鼻明す某が方別、都にて人馬集を盡すこと、一々二鎌倉、告けしらせ
ば、物堅い石堂、助常するは定物、さすれば某某の通り、浮橋も我が手に入る。彼これ以て好
い手番ひ、旨い／＼と兩人が、曉の中へ亭主が高聲「是れはく、曉助寺様、大分とは遅い御座、
今宵は社大御様の御饗面で、歌舞伎やら様もあら、たまつと御座りござりませぬ。我々此に集集集は
あの通り、先づ二階へと亭主が案内「／＼／＼く定半、其方に勝手に戻り、歌舞伎見物とせよ、
お見てことゝ有るまい、ナリ／＼とつゝあるも、見物する亭主、徳兵衛様に足せ、やめてくれや
れに、ア、好い時分にお知らせ申しまとよ、とて曉助寺様には先づお入りのこと。知らぬ亭主が曉助
己が心の勝手目、別れてこそは入りにけれ。人目にされど御ひなさ、奥目に早く大早方御、尺八殿に
指折も、立派に見ゆる其の御から、饗面なしに買ひたぬる、曉助を常に一人、車には／＼とて、
御髪、句晩々を此の甲へ、精も氣概に地ひ詰る、愛に若い青のたい襟に、アア此の尺八が結むたい
かに／＼、其の甲下駄を貰ふかい／＼と、望みなら貸してもやらう、如何とて借つて見やんす
そと／＼斯うするに後から肩取つてしめあぐる／＼とやら／＼とてお入、男に腰を付く御する

のぢや、慮外者のしに授け付くる。隙さき眞顔眼つづし、開いて捻る小手がへし、又起き上るを、踏みする蹴する、さそくの力彌。「さつても手ひどい馬鹿めぢや。」と、口は達者に足腰を、撫でつゝすりつ逃け歸る。始終見すまし治郎右衛門、「サツト見て居た力彌様、其の身振りを見たからは、今夜の狂言氣づかひなし、曾我五郎の役相魔、角髪は直に有り、旦那も待ち兼ね我々も迷惑、サアお出で。」と、無理に引つぱる治郎右衛門、堅い生まれも親の孫、奥へ入るさの月ならで、花と見紛ふ浮橋が、跡に付きそふ亭主才兵衛、「只今申す通り、二階のお客がお前に強い執心、此の間からお通ひ有れど、ちよつともお貸しなされぬは、餘りきついなされ様、是非に今宵は暫しでも。」サア、コレと兵衛様、敷しておくれ。知つての通り身請の相談、殊に揚々詰の内外の客へ貸しに往ては、體様へどうも立たぬ、言うてもおくれな。」「小夜嵐とはお胸慾、お隙は取らぬ、サアちよつと。」「サ、くど。」「亭主。」「ハ、ハ、ハ、夫れへ参ります。」と、言ひつゝ上る障子の内、心ならざる浮橋に、わざと間かする薬師寺、「ム、日柄の内は貸す事ならぬとな、コリヤ尤も。そんなら直に身請の相談。」「夫れも先だつて此方へ手附金二百兩、それとも身請がお望みならば。」「何にもいふな、此方は直に身請金、いか程なりとも只今渡す。それでも身請は出来まいか。」「何が扱ノ、金子さへお渡しあいば浮橋様はお前の奥様。」「然らば萬事其方が働き、金と證文引きがへに親方を呼びにやれ。」「ハ、ハ、ハ、お氣遣ひなされま

すな、追付古右衛門「申さぬ、申さぬかるな。」「法師寺様。」「亭主きつと返事を待つてゐる。」
「きぬん、に、明日晴々ならに、江戸間へ轉此の年の旅情、可なり。」「お願ひに、言ふに言はぬ
跡金の潤は雨、今宵の雨に潤はば、是非此身請は變幻者、世をめぐらぬわが身は、さう思
ひ起しても、殿様ごときは、木葉より外はなし、城の御座る所の、有り合ふお世話をさるべ
マアく待つたと治郎右衛門「イヤく放して下さんせ。」「オ、お道理く、可愛と思ふ男の
ゑ、死ぬると思ひ詰めたお前の心。したが何ほおぼしたる、城の事さう言ふ川を、さう思
句面白も何にもない。逢ひたうても逢はれぬ、お前の心、城の事さう言ふ川を、さう思
けれど、其の間を辛抱。」「聞ては、お前の心、城の事さう言ふ川を、さう思
さうといふに、無分別の心、さういふ間かそ、今更で、さういふ極樂へ、道が何ほ有ると
思はし、經にさへ十萬億と有る、一里を十萬億積んだ要する、一日に十里づつ、お前にして、
日數に積つて見ると、日本四倍より、神武天皇の御分からきて、今に千五百、一萬、二萬、三萬、
此の御中り入用、而して、御座る御座る御座る、見ると十萬八千御座る、御座る御座る、御座る御座る、
萬五千五百貫、通し、思はし、經にさへ十萬億と有る、一里を十萬億積んだ要する、一日に十里づつ、
ぬ。此の十分一有れば、世に結集、御座る御座る、思はし、經にさへ十萬億と有る、一里を十萬億積んだ要する、一日に十里づつ、

又人にも相談といふ事も有る、死なうと云へ思ひ詰めたらその様にしても縫之助様に添はれる。今の様な事は、ふつたり言はぬがよいそえ」と、又どういはぬ程の意見。「お志は嬌しいけれど、知つての通り二階の客が身受の都合。」「サアノ、何にもいふまい、まだ揚け詰めのお前の體、それを彼がへやつては此所の大きな名折れ、氣遣ひがするな、泣く事はない。治郎右衛門は男ぢや、二百兩の手附の上、私が最前貰うた百兩、これを渡して二十日の日付して見せる。」「私ぢやわいの、酒でも飲んで氣を越かに、斯ういふ中も心せく、旦那の傍へ、サア早う、往て來ませう」と、逸姿に、飛ぶが如くにかかり行く。跡見送つて浮橋が、涙の顔を振り上げて一人の心は極々の、中にも厚い志、死んでも忘れぬノ、こと、只伏し拜む泣き、奥は仕組の食討會我、在装素袍も其の儘に、立ち出づる縫之助、泣顔見せじと反らさぬ顔、力囀も聞いて立ち出れば、藝子中居が口々に「力囀様が五郎の役はすつて付けた好い見物、サアノ、素袍、廻馬帽子」と、あいノ、勸むる真最中、鎌倉よりの早使、渡邊作太夫、息つぎあへすつと入り、石堂右馬之丞様の御息、縫之助様へ御對面したき由、誰ぞお取次」と相述べれば、中居が胸より「サア、笑止ひがらしい侍が、縫様は夏にござるを知りもせず、御用有らば直々に」と、聞くよりはつと手を支へ、コレ岩殿、縫之助様、此のお姿は何事のござります。親殿右馬之丞様より急ぎのお使、此の文箱。」と指し出せば、手に取り上げ、披きもやら

すにこゝろ笑ひ、「汝其方は仕あはす者、結構なところへお便にお出でなされて、我々の狂言お目にか
ける。爰に居るは大星方圓、器量によいが初心者、ふ、由良之助が病氣でなくば見てたいな。」といふ
イヤ相殿、見ますれば御酒機嫌さうな、先のお心をとおしめ有つて、其の御狀とくと御振見あらぬま
せう。」一見などというて、親仁も寂然、さらば對面致さうことを時じめ切つておし置き、一、期當の事、
續々に及ばぬ仕舞々々、さういふこんな事で有らうと思つた。其元と逢々の所、老足のきつい御
苦勞、熱帯にして一つ飲め、御手持てゝ、「さう、いやとく暫く、また申し上げたき付御有り、御女
中方は先づ美へ、ハ、さういふといはば先づ美へ」と、此を付けられ浮腫も、心狭して美の聞へ、些ば
らばらと立つて行く。其元が由良之助殿の御手息方圓殿、此の度元圓の御有り、内通を以て思ひ様に
申し越し、聞き結てならぬ大坂の御立役、大坂故にこそ此の大車。何事か心留められ、御助安御款
宛有るやうの取計らひは力強殿、若松様を主君と思ひ、再び家を離れ木の輪、我は老木の花と置き、香
を遠はてや人と來ん。早おさらば」と一言の、詞のめこそ其の中、思ひ残して歸りける。「さういふ
れてさうばさした、おび酒に思ひ合はう、り酒と来い」と立ち上る、腰をひかへて、龍之助様、御立
願ひとはや御勘當を言われ、美へて御本望でござりませう。」といふ。池井方圓、由良之助が言、我々
の年月、兒の御立願ひ自んと思ふ心より、親人の御立受けたる此の體、藝文の思は御立大坂、深き計畧

大星が、一、徒黨にかたまる義士、其の姓名は知らねども、我も人数に加はりなば、少しは義氣がりと成り、無念を散する我が所存、力彌如何と有りければ、其の計畧と存ぜし故、我をせけ置く忍びの守護、今そ本望、其ながら徒黨の人数の其の内に、あへたらしき侍は早野勘平、連判には加へしかど、是非に及ばず無慙の殉死、此の姓名を其の儘に、早野勘平光興と、今より御名を改められ、一、連判疑ひなれと、水をなめる鯨舌は、實に大星が子なりけり。小陰に立ち聞く定九郎、見合はす力彌が顔と顔、奥へと知らする此方の目づかひ、吞込む若殿様之助、言ひ合はしたる夜討曾我、五郎來れと互の狂言、心は跡に奥へ行く。力彌殿久しいの、見忘れとさつしやるまい、定九郎でござる。ハテ貴殿には御器用千萬、草摺引の、夜討のと、徒黨の人数を驅り集め、面白い狂言事、此の定九郎も其の人数に入れて、假合の名も改め、親の敵の討ちやうは、やつ此のやうと、切り付くるを、飛びしきつてしつかと受け止め、「お嬢ねなうても此方から、御傳授せうと存ぜし所」と打ち合ひ切り合ひ切り結ぶ、互に手練の其の中へ、戻りかゝりし治郎右衛門、悔り仰天一力彌様、こは何事。」とおどぶるふ。「ヤア治郎右衛門、邊に氣を付け、物音紛らせ合點か。」「はつ。」とはいへど、膝わな／＼、心得たりと有りあふ太鼓、打てどひやいの拍子ぬけ、切りあふ鐙音ばつしばし、拍子木取つて後見の、役目も相應狂言の、程よく刀打ちおとされ、うんとこのつけに反り返る。此の物音に藥

六つ、七條の、相場屋の手が合せて、数分取つた。六條の、御堂下向の御門が、十徳控へて、
「コレ申し、出かけや、遊んでおくれんか。」「イヤ、俺は隠居して、席破りもう過ぎた。振袖
を着た少さい娘、いかに世業なればとて、突き付け賣りで銭儲けは、おいらが宗旨のおふく様に書い
て有る、あなかしこ、南無阿彌陀佛」と、ちよ／＼止り、伏見屋の萬藏が、鼓片手に米袋、
かたけて歸るを、萬藏ををりと、呼べば存込早合點「イヤ舞ひますでござりませう。」と聲はり
上げ、萬藏に御萬藏、ありけう有りける新玉の、べれんがべれ／＼、べん／＼、べれ／＼、べん
のべつとこさ、べれん／＼、べん／＼、べん／＼、舞はんせぢやない、買はんせぢやないア。」ア、
こりや此方は惣縁ぢやの、ハテ旦那衆と思うたれば惣縁。あでも憂敷のない顔で、一日あたふた舞
あうて、儲け溜めた此の錢を、もつもへせしやうと仕らる、は、藏にのぶとう陵むけ。こんな所に
べれんがべれ／＼、べん、べん／＼、べれん／＼、べん／＼、やべらつこうより早ういぬんが、徳若
に御萬藏」と、袋かたけて逃げかへれば、「けたいの悪い者萬藏。」と、叱く折から、跡へ肩臂いかつい
風、氣儘淨瑠璃出次第に、貞光は信濃國碓井の生まれ、綱は武藏の三田の者、さて公時は伊豆國とは
申せども、生所も知れず宿なしと、みす／＼見えるからぞめき「ホウ今夜は隙かお百、遊んでやらう
かい。」「惡口許りいはずとち、有るなら遊んで。」「わりやおれを見立てたな、コリヤわいらを買ふ程

端しやうと、梓ひ這入る市屋の内、太鼓社の起き臥し、是れも世に任む身かや。客もおもふも
 刻様にてうちとお願ひ申したいと、申すは別の事ならず。私には夫の有る身、井の爲に旅行き、年
 寄られた御脚の長々の煩ひに、一人の子が重い宿宿、貧しい難しに二人の介抱、失れ故わたりも此の
 勤め、何とも申し兼ねたに、何ぞ枕をかばうすと、親子四人助かる程に、お情願ひ上げます」と、
 頭も得上げずとやうに上げ、涙と共に頼むに、客もおろろろ目をするて、さう、ひるふな所へ来て、
 悲しい暗闇きまいた。幸ひこゝに持ちあはせた金一歩、不足にあうかどうとして、是れで二人の病
 人々、介抱してやらつしやれ。施病も山を上げ兼ねるなら、有り合はせた一角、あすの夜持つて來ま
 せう」と、金を渡せば押し戴き、「お客様此の御恩」と、手を合はすれば、「これ、これ、禮には及
 ばぬ。俺も少さい子が有る故、身につまされて進める金、今夜は雪も降る程に、早う往んで施病子に
 乳をのましてやらつしやれ」と、つど／＼に心を付け、金やりながら手も握らず、涙も流して歸りけ
 る。おひきは番屋を門送り、金押し戴き伏し拜む。向うへと／＼くゝる親に、懐すつしあ好い客と
 傍へ立ち寄り、「コレ申し親仁様、此と遊んで下さりませ」と、いへばしく／＼泣き出し、「ア、此方は
 好い氣ぢやなら、年にこそよれ色所ぢやないわいの。僕に入つたのは錢銀ではない、是れ見さしや
 れ、乳のない子寶ぢや」と、涙す、つて「聞いて下され、此の坊主はおれが孫で、此の月が誕生日、

別れ、ねんねこや／＼、ねんねこね、こゝと立ち歸る。御手洗の水の流れと人の身は、浮きぬ沈みつ
様々に、くだはれ／＼下はれさせし、河原傳ひに來る非人、人絶え待つてそろ／＼と、紙の印は爰こ
そと、これ土に埋んだら、以前の狀相掘り出して、面桶の底へ手早くも、鉄追取つて掘り返す。河原
の砂も身にかゝらぬ、おりゑが見るともしたんだる薦包、埋み隠すを盗んだ金と見るおりゑ、小屋の
内より出る總縁に、驚く非人は素知らぬ振、「下んせ／＼、くだはりませう」と、面桶かたけてのつさの
さ、河原を上へと行き過ぎる。また一しきり降る雪に、濡れしはたれて浮橋も、こけつ轉びつ走り著
き、「申し／＼、見りや皆様も此の河原で、勤めなうる、女中さうな。わたしは祇園町邊で、浮橋とい
ふ勤めの身、様子有つて内を出で、跡より追手のかゝる者、見付けられたら死ぬる覺悟、お前方の情
にて、かけを隠してくださいせし／＼の提灯が、わしを尋ぬる人さうな、皆様頼みます。」
と、言ふより外は涙なり。よし／＼氣遣ひさしやんすな、勤めする身は相互、わしら二人がかく
まひましょ、何處がよからう如何せう。」と、言ふ間程なくおひ／＼に、かけ来る祇園の茶屋入方、提
灯さん手に、「コレ色達、今爰へ年比は十八九の女郎、色は紫、江戸棲の著物著て、此の道筋を來な
んだか。」「いゝ／＼宵から爰に居れど、そんな女子はお君殿、さつきにから見やせぬな。」「はてめん
ような、どうでも爰へ今來た筈。」と、傍に隠れて居るごとく、白雪踏み立て男共、「コリヤ／＼此の普

靖場が氣づきいな。と、司馬先に見多の態、足肩まで捜せんと、奥には見ゆぬと逃げ出つねば、お方は亭主にぬき、掛りコシテお前の方、あの小屋はわしらが賣所、斷りなしに家賃として、お前では清まらぬ、勤めに高い低いはないぞ。と、押な御實して居ながら、苦界する者讀さんか、それでわしらが立ちまてぬ。と、白粉のへける程顔ふくもしてねるか、さうこれば七と斷つた、氣の毒く儘に斷るぬはおいらが不念、オコシテ、不足にはあられねど、二人の中へ逃げ廻り、こゝろといんで殺ておくれ。オオ是れからは高瀬の方を、導ねて見よう。とさう連れ、御草を西へと斷り行く。うさつておひやいな、い後に懸して置いたに、さうそれ共、お方が背から鎌懸さんには好い化合、お前も仕合、サア愛へ。と、いへを浮橋、身は海津に懸り懸え、寒う知さに顔ひける。と、懸こんとこ、わしらに仕付けた勤めでさへ、此の雪ではたまらぬ。と、小屋の太尉を取川と、火煙からノノ吹き付けて、松梅ならぬ白人に、焚火をあてる深切を、お前浮橋番小屋より、さうノノ出て顔と顔。サアお前はおのゝ様。と、さう仰しやるはおむつ様、是れはさう焚火打も泊して、顔も得上げ袖覆ふ。と、お前が近付きさうな。と、アイ久しう逢はぬお方、ちつと焼したい事も有り、お百様、停たさう。と、下さんせ。と、そんなと先へおのゝ様、又明日の晩、さらば。と、鼻狀飄うて歸りける。人絶えすれば浮橋は、おのゝ様が棲へさし寄つて。と、何のう言はうやら、聞きたいは父様の御所氣、母様は長々の

お氣投ひで、お勢はなされぬ。太市は定めし悪き住つて、お前のお世話」と、かきたくる程間ひかくれば、二人皆様は變なれど、かはつたはお前の身の上、屋敷奉公と思うたに、こりやどうでござんす。」「さうと、様の長の御氣、兄重太郎様は、お國の騷動からお歸りもなされず、お前も兼々知つての通り、常に不自由な其の上に、幕代の何のとして、いかぬ世帯を見の悲し」と、様には深く慰し、母様と合して、祇園町へ勅奉公、私は親身、お前は現在兄様といふ殿御持ながら、見れば、しい河原の勤め、と、さうや母様は、知つてござつてななる、のか」と、問はれておりえは差箱向き、恥かしいと悲しさと、しほし詞もなかりしか。祖父様は長の憤ひ、搦てて加へて太市郎は重い痼瘡、祖母様一人うめノ、と、世話なさる、がいとほしく、ほんにさうしいことながら、祖母様も此のりえも毎食々々帶しめて、寐に食は數も限りもござんせぬ。あんまり見る目が悲しきに、夫へ立たぬと思ひながら、帶を解かぬか私が潔白、太市が痼瘡の因込めに、祇園参りと偽つて、毎晩々々此の河原へ、身は汗さなど心を汗し、僅かなおあしを貰ひ溜め、貧苦を凌ぐわたしが心、推量して下さんせ。いと、餅をも立てずしめ泣きに、歎けば共に浮橋も、身の悲しさを數へ立て、手に手を取つて諸共に、涙の袖は賀茂川の、猶も流れの身とならん。浮橋漸う涙をと、あゝわたしも不思議に殿様の御弟御、統之助様に不圖馴れ初め、言ひかはせし事までも、反古と成つて逢はれぬ品、それ故に若殿

第七

昔は馬に鞍馬口、今は妻子の飼料も、かつノ成りし素浪人、矢間喜内が老病、重きが上に痘瘡子の、熱のさし引き腕白も、常よりいと、いぢらしく、近所の見舞、相借屋の洗濯婆様、頼赤き猿廻しの丹兵衛、茜屋のお内儀まで、紅絹の衾付賑しし、どなたもノ、いかいお世話。」「す、婆様うれしかろ、始めの間は悪い腫物で皆きつう案じたが、此方物。神様も機嫌よう今日でお立ち、コレノ、又神様もこんな不自由な所に、長居は成るまい。」「アノ喜内殿も長い病氣、ありや貧乏神の神送りせずば癒るまい。知行取の果ておやとて、此の様に無商賣では済じまいぞや。寧ろあの痘瘡子連れて橋の上へでも出やしやつたら、よい知行に有り付かうに。」「ア、丹兵衛様の滅相な、おる様といふがせいな頼御が控へておや、サアノもう歸りましよ。」「オ、左様ぞう、コレ婆様、痘瘡兒舞の玩弄びに、必ず捨てすと人形屋へ卸して、小遣の足しにさつしやれ」と、念頃ぶりに氣を付けて、皆々打連れ立ち歸る。賀茂川も、いちの小川も月やどる、流れは同じ二人連、おるゑは門口指覗き「嬉しや誰もないさうな、サアござんせ」と、手を取りしが立ちどまり「おむつ様頼むことが有るわいな、わたしは昨夜祇園様へ参るというて出たほどに、アノ七條の河原に居たといふ事、舅御や、母様には、

必ず言うて下さるな。」「さう、ほんに私も頼むか有る、浦風御浪人の後、一文字屋へ賣られ、
浮橋といふことは、母様一人の御料簡、物かたい爺様には、深く隠して是れ方々の奉分といふてござん
す、必ず沙汰なしに。」「と、そりや合點も、しるが處指なら、調付きなら、其のひらしてらるゝ、
つい尾の出うな事ぢやぞえ。」「さう、其處にぬかち事ぢやない、爺様に違ふなら、前の様に續分
堅う三つ指と、思つて居ながら、郭の廊が移つたは思はれ。」「其の思ひしがとぞ。」「さう、さ
わといふ下から、日が滑つて、さ、笑止と、笑ひ絶ふ花の口、堅く閉ぢたる障子の内、しほふき
の聲諸共に父の喜内枕を上げ、御更りやつた、御前が滑つて居つらうに、早く歸りは仕やらいで、
「アイ左様思つて心せく過、おなつ標に出合ひ、何やかの、置く箱で。」「何や、おなつ標が戻つた、それ
れ久しや、何處に居るそ。」「はい、是れに居ります、又様、喜内様、お氣もち御前お歸ひに参じまして
ござりますんでござんす。」「と、折目弱なる武家格好も、何處やらと目をよめる、障間を替り母は
立ち出で、さうおむつ、なんとしておちつた。」「さう、母様餘り驚かしに、勤めの中を測と、
「さう、星敷の勤めの中を、勤めうて参りました。」「一歳迄々々、其々の勤めてゐるに、お氣は、お氣
散ちやと聞いたが、つい其の様に能う出られたの。」「髪形美たう正派なを見るに、おはけても心の苦勞が
おもひやらん。」「聞けば御女と地立つて戻りやつたけなが、這て今違つたか。」「さう、昨夜浦風で、

「さ、コレおむつ様、いかにも變らぬ無事な顔を見たも、毎晩わしの日參する、祇園様のお引合はせ。」「オ、それノ、祇園様のお社で、それはノ、難儀な事が有つてな。」「ム、難儀な事とは、悪者いでもおはれてか。」「イエエイナ、ありやおむつ様の言ひ様が惡さ、難儀といふはな、道中で俄雨、イヤ雨ではない俄雪でナ。」「アイノ、其の雪にうてはならず、隠れう所はなし、幸ひの材木でもない、鳥井の陰に、お前が日參してござんした、いかにお世帯で、どうやらかうやら、御恩は乾度忘れとぞ。」「ア、コレ私への御挨拶より、父様の傍へ行て、ソレ行儀な屋敷の式作法を、お咄しなされ。」と、氣を付けられ、「ハイ取つて居まする、誠に久々のお疾ひに、殊なうおやつれも遊ばさず、御機嫌よいお顔を拜し、せいもん悅ばしう存じまする。」と述べければ、喜内何の氣も付かず「同じ屋敷奉公ならば、先君のお傍仕へもさせんす物、お家は没落、我は長病にて行歩叶はず、倅重太郎、何國に吟ひ居る事やら。未だしも老の樂しみは、孫の太市、疱瘡も山上け仕廻うたれば、大役濟んだ出かしたな。見やれ賢い目元でないか、遣侍の子とて、疱瘡の中でも、浦島や、お山人形のぬかつた物は入嫌ひ、公平の人の形の赤いは腫物の藥、適れ功の兵に、成り兼ねぬ利口者。」と、子よりも孫に餘念なき。「す、かはいさうに、したが今年は痘がよいけな、好い時美しい仕事やつたの。」「ほんにマアおりる様、此の様な疱瘡子の有るのに、毎晩々々能う日參なぞんすなう。」「又かいな、そん

渡お暇を。二親を頼り長の月日、嘸女房も心遣ひ、過分々々。一常に交りぬ夫の顔色、機嫌能いのも
疵持つ足の、裏ではいかに案じ居る。喜内膝行りし縣立て直ち、一ム、奉公の口有つて、知行に有り
付いたとな。イヤ重太郎、女は二人の夫を持たず、母は二人の主に住ふを、人非人と卑しむ事、
母の胎内を出づるより、腸にしみ込んで有る事、わりや忘れたな。其の根性とはならず、妻子を捨
て、親を捨て、再び家にも歸らぬは、通れ俵は武士なりと、心の自慢、親の病氣の見舞に來たさへ、
不覺者と思ひしに、二君に注ぐて、其の腐つた魂の、大小をひけるかしに來たか。此の喜内はな、
貧苦にはなつても、重代の具足は質にも入れず、口惜しや、行歩自由ならば、吉主の御無念を晴ら
さん物と、牙をかねて口を送る。寔に芳つた大腰ぬけ、對面も是れまで。女ならば密夫同然、身の穢
れた犬畜生、長居せば手打にする。いと、老い怒りの一筋も、若し我が事を知つてかと、女房が胸も二
つ玉、はたと立て切る一間の中、思案を極め重太郎、「お暇申す。」と立ちあがり、「コレ待つてたも、な
んほ親でも今の悪口、腹の立つは道理々々。もぎだうなは日頃の氣質、そなたの有付きも孝行の爲
ぢや物、あ、いはしやつても底心に、何の悪う思はしやろ。何事も料簡台され。」「イヤサ拙者も急の
御用、隙取れば主人へ不忠、罷り歸る。此の後は、最早お目にもかゝらまい。」「ハテ氣の短い、急ぎ
の用なら留めはせまいが、わりない無心が有るわいの、其方が他國めさつた後は、何を活計に世を渡

らう、おだてました、道具詰包も賣の標は、新うゝ文の信札や、乳をす抱へて人に届はれ、去ればそれは憂き艱難、目でいふ様な事ぢやない。喜内殿の病氣の上に、母が重病、人知れず無事で、仕立てにやらぬ頃ひに、常の薬のど受さへ、石で手詰り、買ひ物、服、席には有合はことゝら、親子の中では、銀の、熱心はさうやらおむね惜はれ、なう娘女に、さう、餘計な事ではなし、さうやとて、何のいふかござりませう。と、いふを打直しうへて候、コリ、例といふ、是御前人の詞句と聞くと、親子の縁はさう切れに有あれ、しが結重、思ひなさん、いふより胆散のさす、一顧も負い事ならぬ。論しや今日といふ今日、厄介を拂うてゐるつばり、義理、さういふ一顧も、いふに其にも疎くねた。さう、驚く事は、何の付合、聞かぬは、聞かぬで、武がめ、たれ、娘女に聞かぬ聞く事ないこと、うりはひ付かねば母親は、泣打りながら、うとれは又、思ひ切り、むと父親へ不足は有らうが、何の計が有る。左様いはずと、結重、何卒、一日足置なさん、娘女止前、いひ、氣の付かね、と、様子自愛の氣を盡んで、涙片手に夫の傍、水の出廻へ、いひ、花や、花と、う、唐の追従も、身を許す、同じ、顔面、取付く品もないと、さう、結重、さうに相付、其の、治で、見た許り、愛想なければ、畏うしきに、コレ太事、又様が戻つてぢやない。と、抱かれたかゝり、なは抱かれたうても、父様は、抱きつゝしやん。と、背の立たぬといはしやん。と、なはど、無

とは思はねど、胸中苦しい女の一手一つで、お富婆のお一人に、御不自由な目かましともなう、色々様
 様に身を碎くは、大概お前も、推量してくれたがよい。身に曇りない言辭がしたうでも、どうもなら
 ぬ、實が立つたら堪忍して、友中は可愛うないいな。お前許し出せし、子は風流でも構はずか、
 辛い、貧苦を少し下し、思ひ遣ひがあるならば、三つ四つの事はある、一車は輕くて別々の、煙の代に
 と被仰つて、お前借しうも有るまいに、餘り悪い愛想つて、左様難面にお前でも、此の子が親
 と思へばこそ、毎晩熱の盡すにも、父様呼んで泣くわいの。口と馴れた、父神の傍へ行く、母が死
 言してたも。」と、押しやれば這ひ下りて、「父様なう。」と縋り付く、恩愛血筋の一醉に、名座の縁に
 切り付けらるゝ如くにて、確石の様なる重太郎、涙をこたへ兼ねけるか、氣を取り直し突きのけて、
 「親の事さへ思はねば、おして母が事何とも思はぬ、縁切つて仕舞うたおは、薦被らうが親をうか、
 此方に構はぬ事。くどう言ふな。」と腕め付くる。母は興さめ、「コリヤ重太郎、其も、今までは、又
 とな、お前者と思つたが、貧しい親を見誤つて、一人豪華にする氣ぢやな。見遣へた道しらず、
 浪人すれば其の様に、さもししい心に成る物か、お前の通り親子でない、勝手次第に出て行きをれ。子
 と思はねば恨みはないが、天道の御憎しめで、身の行末が思はるゝ、さ、淺ましい人でなし。」と、煙
 管打ち付け聲頭はし、「アノ畜生に構はすと、如此方おぢや。」と許りにて、恨み泣く／＼立つて行く。

かく、其の丈夫な魂では、敵師直を討ち損する事あらじ。す、夫れで、我が子なれ、天晴忠臣出かしたり、忠義の旅の餞別せん。と、懷中より金子取り出し、「コリヤ此の金は、王君御生害と聞くより、すぐに彼の地へかけ付けんと、旅の用意に貯へしが、計らずと病差發り、空しく引き續み有りながら、此の年月の貧苦にて、縦ひかつゝ死するとも、忠義の金には手をかけまじと、女房類に隠した路金、御用に立ちやれ。」と投げ出せば、重太郎飛び退去り、「ハ、ア割符を合はす忠義は一體、拙者も爰に五十兩、此の金は大星殿より配分の用金、私事には遣はれずと、母にも難面くもてなせしが、父の心を誂められし、其の金子を申し受け、肌身に付くれば親人も、敵討の御供ぞや。又此の金子は御老體へ、拙者が寸志の置土産、倅が追善佛果の爲、お頼み申し奉る。扱もく武士の、義理程つらき物はなし。連判の侍小寺、大鷲、拙者なんど、彼の師直に好み有る薬師寺が城中へ、或は日雇ひ、乞食に身をやつし、鎌倉の様子聞き續ひ、大星殿へ日毎の内通、親妻子にも語らじと、誓紙の手前母人にも、包みし段は眞平御免、大事に抱へて故郷へ歸る、不覺者と最前の御意見、肝に銘ぜし故、手にかかし倅は主君の追腹、未來の先陣よくしたな。追付敵を討ち課せ、直様切腹仕り、冥土より吉左右を申し上けう親父様。」と、必ず待つて居申す。と、親子手に手を取り組んで、思はず知らずはら／＼と、嬉し涙の暇乞、障子の中にもわつと泣く、聲に悔り立ち退けば、「なう重太郎、

な房子に、隠す大事、母、出まいと思つたれど、おれが自害したつたわいの。死如に一日暇を、を
ね釋の事は不忠にも、わしや成るまいと思つたす。おれつゝ雲へぼと一人して、歩いて出でたる亡體に
着き残したる薄曇草、浮橋取り上げ涙ながら、父様御極へ申上候しなり。先だち候は、不忠に候へ
ど、夫の心成立ち聞き致した、相ひは曉れて此の身の申上立ち候く、是れもあつたが、おれ等の爲、後と
しい文君の世渡りご「さうそんな親父殿の介病に、曉し。辻君の勤めまで仕やつたかい」さう「一仕
衆の人に合力を受け、肌身は汗らす候へど、夫の恥ひを受け、是れのみ成ひの様に成り方。わい
てかなしきは太市郎、腹痛と落口に成り、悦ぶ甲斐なきわかれに「さう、這様、片見有るす」とも
て、何の生きて居る心がある、おれいさなり。さう「今朝買つて歸り候でん」此の曲調、精神に御
座候、父様の業の病におまけなされ下さね候。一つ顔の切れし、おれが、坊主、御病に御憂が召置
候が、心が、おれに、御極、死體に覺えて御極を頼み上げなり。御介抱申す人なく、御不自由の疑
いお許り悲しめれども、一時「早く冥土の御極へ、夫の心成申上さるを願ひに相果て候。重太郎
殿へは面目なすに、何事も書き残さず候。めでたくわしらの終りまで、夫に立つる眞實の、父と知
るまい親女を、一日夫婦の思ひしなり、辻君とまで身みちして、おれも里にさうし可成り、おれに
死體に抱き付き、前後不要に取ります。落口を押し扶は、主人の爲なれに、さう、御成と成る非人と

成り、立君に成る心違ひ。簡程の忠臣重太郎を、手に持つた此の祖父、我もあつても悲しうない、死んでの跡の名こそ惜しけれ。祝うてめでたう別れの杯、お宴をつゞやれにと取り上げて、奥歯漏れくる諸聲。實に名を惜しむ取旨、誰も斯くこそ有るべけれ。あら優しの我が子や、健氣やと泣かぬ顔する父親の、莞爾顔も此の世の名残。ハ、ア仰せにや及ぶべき、我が子の絆しを切つたれば、心の鐵石十倍増し、主君の敵の其の上に、妻の敵子の敵、一時に討つ門出と、思へば心にいでる有りし假令天地をかけるとも、念方通つて師直が、首提げんは歸く内、早おつらと立ち上る。つとうおいきやるか。一躰めでたう、吉左五々々々。其の吉左右は可愛子が、命を捨てに行く旅路、冥土の案内は彌と孫、三途の川を急ぐらん。かはい。見やる野邊送り、今朝は祝ひし神送り、門に捨てたる親々々、涙の種の笑ひ顔、しをれ勇んで三途出でて行く。

第八

藏の内の財は朽つる事有り、朽つる事なき身の内の、する在所に引籠り、由良之助が身の置き所、都離れし山科に、世間構はぬ我儘暮し、只儉約を第一は、石に根繼の藏普請、自身手傳ふ壁塗の、左官が泥鏝へ指しつける、土によごれし仁體は、始末なりける物好なり。折から戻る一子力彌、父が前

に手をつけ、日の暮れるまで御膳出され、寝静まり、最早お休みなされませう。……あ、意手殿お歸
なされたか。ア、氣味利かぬ和郎では有るわい、日暮成の仕来はなつとなりと、這の進して置く
が明日の爲、今時分に休むえ、今日の仕事はついだれ限り。日一坪仕度すこ、先廻りにそれか延び
え、明日とて一日の手間が違ふ。……さう傍へ氣が附かぬと、物ことに費えが多い。……斯うはいふ
御左官殿、今日は是れ限り、明日は又疾うから御出して貰ひませう。……然らば左様に致しませうに
と、足代とんと飛びゐるればア、……腹の減つた上を、其の様にせよと一頓ある、減るがに情はぬ
が、大喧が附ない。……つくと云ひか附ぬ、……さうなる朝の此方既に致しませうかい。……如何様其
が飯もよからうが、……は作同く、其の作對にして貰ひたい。……つとく、……是れは……に、
かゝるぬ事を言はうより、……登下見定に……、……白雲を……、……いふ……と左官は御手へ
由良之助の頼みともに、落の散る道具取りかた言はぬ人日、……とある御上人、……必ます時さへ足
の、……かゝる身分を渡すの、……今は足より身のかゝるさ、……寺岡平右衛門が……、……我が手の引きお
つあつと、……御膳附いて庭の西、……御ひきのけに手を……、……貴方は……由良之助様でござりますか、……つひ
にお目見せ仕した事にはござりませぬと、お聞き及び……、……は……、……足願ひを
りました、……足願ひを……と申す貴の女房、……座でござりませうと、……御いふ事言と思ひながら、……

足輕平右衛門、よ、そのやすつと南方、北國へお重脚にいかれた、其の足輕の平右衛門が、「ハイ、ハイ、左様でござります。」「ム、其の又お内儀や子供衆が、何の用で我等が生へ。」「ハイ、参じましたはお願ひの筋。夫平右衛門参られまして御訴訟申さる、當てござれど、長々の病氣、それ故女房の私か、名代のお願ひ。」「と、半分聞かす、ア、やれ、今日は尊厳れた。」「又と今日の大王が、ア、ア、リ、十露盤」と取り寄せてしやに構へ、扱方官が二人、大王が一人、此の作料が此方殿で三匁づ、此れが三人で三々が九匁よ。あいら三人して一日に何ほ喰はうぞ、二升は喰ふかい、是れを八十匁の米にして二升の代が二八匁六分。又汁に焚く味噌の代が十五匁、葉が八匁のめぐるを五つ切りにして、一切が一匁六分づ。是れも三人で三匁、三六匁八分、四匁八分ぢやなまつて是れも五匁よ。扱又葉物から香の物、鹽、茶、畧値にしても一日に二十六七匁要らうか、ア、二十七匁とせ。其の上へ味噌の代が十五匁、めぐるが五匁、よて四十七匁、是れを十五匁の相場にして、銀に直せば五十三五、一七か七、四十二、一四が四と、銀目にして七分一厘、爰へ一匁六分の米代と、九匁の作料、合はして見れば、ア、都合十一匁二分一厘。儲けろ事なしに、今日もこれ程の物入。」「お取込みの中へ心もない事ながら申さねば叶はぬこと、何卒お聞きなされて。」「ワリヤ、力彌、そちに言ひつけた下京の家質の相談、彌、極めて歸りしか。」「ア、其の儀に付いて今朝より、彼の方へ参り、段々相談仕

立たせ、衣紋續ひ、待つ間程なく押し開く切戸口、間中聞せしめた同音は、のさばり来る御間宅兵
 衛、此方は禮儀のおれをせも、頼でしらの、上座に坐せば、由良之助悉勉に「先づ以て這路の御上
 使、御苦勞至極」と手をつけば、一千里萬里も生命なれば是非なけれど、使者の苦勞を思ひやつて
 格様の挨拶が有るは満足なれど、其處の邊へ氣の付かぬ奴がござんす。承れば由良之助殿には、主
 人師直公へ奉公がしたいとやら、又お出入がしたいとやら、先だつて京都にござる義師寺殿より申し
 憑られしか、いつこや腹切つてくたばつた鹽治判官、家國共に滅亡したや、主人が所爲なんぞとい
 て、付け狙ふ奴も有る由、畢竟由良殿は、判官の家老職、如何にしても誠にからず、此の實否を糺せ
 よと主人の言ひつけ、彌其の義に相違なきや、返答いかに、承らんにと、臂張りかけて上使の權
 柄。「コレハ、御七もなる御上使の一通り、先だつて義師寺様へ申せし通り、判官殿の短氣散、我々
 までが婿浪人、此の様に引き籠りて罷り有れば、友持輩が折節参り、敵を討つて亡君へ備へうの、師
 直の屋敷へ押寄らうのと、何ぞ命にかけ換へも有るやうに、それは、頼と返答に困り入る。義師寺
 様へ右のお咄し、我等侍を相止め、少々の財へもござれば、其の利徳を以て渡世いたしたい。又師
 直様京都のお買物、何に當ら、我等に仰せくだされば、随分下直に買ひ廻して指上げん。さすれば御
 奉公、お出入も同然なれば、敵討性根のない事、おのづから世間へも知れる。」「ホ、主人師直公の

耳へも入らば、心を軟しめ心の離れども、忽に「さう」と言ふ。此で有らうがな。」「是れは又さうい
御座る、此の山良之助殿が所存さうらば、左様に見送さるゝ。謀も致さるゝが、安角傳にさんじ
果て、榮師寺様へお願ひの成手、ちよつとお明申した通り、通つて奉告く、お出入り望み。果、榮師
の土使に知らうとは、夢以て存せぬ事。強角十條のお秘成し、宜しう願ふことする。さう、聞かぬ。家
のさばり歸すなりや何と言はるゝ、敵討つ切付はないう。其の事ごとく、敵討といふは、無武士の事と
思ふ。お願を町へ出張を貰ひ求め、頼こども仰せぬ。更なる物成の時はねことう。其の極な頼伏るゝ、家来
に持つに下も頼めば、暇申を仰せぬ。さういひまごねさつて、おまが主人に敵たふとは、いふはや
い痛いせんさく、其の詞を言ひなつて所、いふ。さうなると切腹に申せられたけり。さう、其の日は
去年三月十五日、検視を引受け受けた。置前官、頼に下つた。さう、其の夜所に押直り、土使傳へおれ
これも、時刻や過さんと頼衣柳ね。三つ取つて押し置き、九つ九つが通手に取り、通手へお返さ
てさうで、右手へさりと、と引寄せし、腰をさしとせとあしけに、返すこと。頼を討たぬとさん白
して、背中に通つて忘られて、頼判官、讃州にて、人海屋敷の一念にまつて、死を好くと言ひし如
く、生きたは死にほれ、死にほれとておのろけさ。それから頼は死、頼もなれり。敵討つ氣
はないか。口惜しうも、無念にも思はぬか。さう、頼合つない。頼成が、頼にたてこ、頼は頼の事、頼は

公へ奉公出入思ひも寄らぬ、叶はぬ事」と、にべなき地煙草盆、前に引き寄せ空うそぶく。こなたは態とそしらの風情、「御上使の御退屈、誰ぞお茶持つて来い」と呼ぶ聲に、はつとり彌が持ち出づる、濃いと薄いの中茶碗、上使の傍に差置きて、其の身は次へ立つて行く。不調法な倅が手前、澀くとも一服お氣遣うじ」と、澀茶の挨拶澀々頬、舌でござる、拙者茶は嫌ひ。其方へやりやれ」と突き遣ふ茶碗、拍子にこぼれる一步の山吹、悔しながら、そつと取り上げ、イヤハハ結構なお茶でござる、由良之助殿のお好み、御子息のお手前、イヤモどうとも斯うとも、拙者元來茶が好きでござる。其の好きを知つての御馳走、御發明、扱々結構なお茶、銘は何と申す、大方眞金か、宇治の名物眞のはれ山吹と申すのか、ハ、ハ、ハ、ハ。「イヤモすんど素茶でござれども、お好きなれば何服なりと。」「アノ是れを何服もかへますか、これはノ、忝い」と、手早に包む山吹の、鷹金よりは鷹の爪、掴み頼張の蓋、イヤなに由良之助殿、主人師直、京都の川事、萬端御苦勞ながら、只今よ貴公お世話下されぬか。」「これはハ、忝い、前もつて望む某、早速望み叶ふといふら、偏に御上使の御料簡。ハ、何のハ。拙者逢々参つたは、貴公の所存を試し、彌々變なきに於ては、京都の用事何か貴公と謀し合はせとの言ひつけ、併し元は判官の家來なれば是れぞと申す功をお立てなされ。其の功さへ立つならば、貴公の望みも叶ふといふ物、ナ御得心が参つたか」と、圓う言うても袴の肩

衣、角引き立てたる御間頼、めけめなき御目面、
「無いといふのか、討たつしやれ、
判官が後家顔世、一子爲若、此の邊に隠れ住むよし、此の
兩人が首、身共が目通りで討たつしやれ」とい
は古下の惣念忌むお流、半は隠れては御前合の
後日の仇、返答で第此の場は立たせぬ、
高曲輪の厚蓋物、目八分に持ち出づる、力強
見ふるより居住居、
「お悪ふに召上らねて下さるなら、
山吹更丁また、ドレ／＼ほんにお菓子だ、
子で大好物でござる、判官から何までお心の付いた、
出良殿、
居らば、判官も切腹には及ばぬ、
好みな高な、ふくも盛らなんだ故此の成り行き、
それに違うたなされ方。コリヤ其元の御子息な、
父御に似て御器用磨、
ぶまい、斯うなされ、判官の一子爲若許りお討ちなされ、
れまい、
息の御手前、何れも御馳走に預らん、
それは格別、
今申した通り、
夜半の鐘をきくと、
爲若が

首ぶき切つて渡せ、急度申しつけたぞ。力彌殿御案内、由良之助殿、後刻々々」と一人し、呑みこ
 む慾は井戸茶碗、菓子くわしの器うはらうてと兩の手に、銀次第では主の首、討ち兼ねまじき大忠臣、いかつがましく
 奥に入り、始終の相手口先で、いうて居られぬ爲若の、噂にさすが由良の口、ふてがる一聞そつと
 明け、おつ／＼出づる以前の女房、遙か此方に手をつかへ、「何やらかやらお事多い御中へ、又申し上
 けまうもお氣の毒様ながら、最前も申します通り、夫平右衛門長々の病氣故、障りを願ひず、足輕風
 情のな房子が、押付けての御願ひ、お聞きなされて下さらば、有り難う存じます。」と、思ひ入つたる
 其の風情。「ム、合點參らぬは、つひに逢うた事もない平右衛門、其のお内儀、わづ／＼と此の山科を
 尋ね、由良之助に願ひとは、上、聞えた、夫の病氣と有れば、人參代などといふ合力の願ひか。イヤ
 モ有り合はしさへ致さうなら、用立てても進ぜなければ、今では我等逼迫の身の上、少々貸した銀は
 戻らず、利銀はおこさず、此の間まで天川屋の義平が子を養子に貰うて置いたれど、喰はす事が大儀
 な故、是れも堺へ戻す程の身代。イヤモウ中々如在には存ぜねど、無いが有りやう、無い所に長居せ
 うより、又いづれへ成りとお頼み有れ。」と、挨拶そこ／＼立ち上れば、「マア／＼お待ちなされて下さ
 りませ、さもし御奉公は致せども、左様な御願ひに參る様な私共でもござりませぬ、それが貴方へ
 御願ひは、鎌倉の御供、敵討の御人数に、「ア、これ／＼いかに女子ぢやとて、大それた事言ふ人、

1. The first group of people who are interested in the results of the study are the researchers themselves. They want to know if the study was successful in achieving its objectives and if the results are consistent with their expectations.

のお願ひ、由良之助様に申して呉れ、現在より女房に、手を合はしての夫の頼み。病は難が頼みにて、本復もござりませうが、敵討の御供は、生々歸らぬ死出の旅、それ知りつゝも女房の身で、此のお願ひに参る親子、憚りながら御推もじ遣はせられ、夫が望み、お叶へなされて下さりませ。コレ平吉共々お願ひ申すまいの。と、親子額を骨に付け、涙と俱に願ひける。コレ、其の様に額を付けると、新しい聲が油だらけに成る。始め、始末を知らぬお内儀、コレ始末なされ。始末して小銀が延びると、きつう命が大切に成つて、敵討たうなぞと言ふ、無分別は出来ぬ物ぢや。そしてマゝ見る所が、美しい御面相、そもじのやうな美しい女房を捨て、死なうと言ふは第一が不心中。其の様な水くさい男に、一生つれづれより、何と思召す、我等今では裸の身分、ナント、心に隠れてくれる氣はないか、どうぢやないか。」と差寄つて、ひつたり濡れる俄、濡寄りなき女房が、身をちゝめてぞ居たりしか、ホ、ノ、ノ、あなた様とした事が、いかにお願い有ればとて、わたしら風情をお相手に、御酒狂でもなさう、御座興も事に寄る。「イヤ座興でない、眞實、女房は有つたけれど國に置き去り、今ではもう朝々の寢所の上け下し、誰仕てくれるものもない仕合。そもじさへ得心したまへば、今から茲のお内儀様、銀も有る、田地も有る、そもじが惣とさへ言や、其の子も跡取り、何とぞ、憎うは有るまいか。」と、しなだれか、れば取つて突き退け、「いやでござります、汚し

ても源泉の水を香ます、され輕靈華に露すとも、大感有る御下人を忘れ果てたるお侍、さういふ心と露知らず、又よで来たが悔しいわいの、口惜しいわいの。かういふ所に長居する親身の穢れ、サア古虫いふと置ち上れば、ア、コレ、何は、注なうと思つても、入口には判やらびんと錠下し錠に我等が所持杖をば、めつたには花なぬわい、ア、其の様に願立てすと、又分別もしたがい、ア、今夜はまだ阿、色事は寢る時分から、夜が更けると、自然と寂しく眠つて来て、そこやら味な氣に流る物、それまで我等の間で暫くして寝て待たう。色よい夜事を夜半まで、待つて居る。そと夕月の、流るを流る流水に、故き家はは更涼き、眞押し明け入りにける。跡見違つて女房が、出ると出らぬぬの鳥、逢ふにやうなうたがしな。ア、此方許りはさういふ心で有らうとは思はなんだに、見さず果てたといはつた、夢逃げい御宿。其の標な果実を御持ち遊ばた、唯や草葉の陰からも、不甲斐なしと眺めむとも、思召されんおいとす。と、しばし涙に暮ねけるが、ア、ア、泣いて居る。酒をぬ、かういふ所にうかつく感ぜれば、どんな煩い目を見ようも知ぬ、アア平古おれや。と文の上も、足にてぬらりと弓の轡を、ア、ア、ア、その力まで忘れて行く、はなにたわいのなしといひやが、例がかういふ御根ちやうの、眠つてゐるなには道理、と、手に取り上げて打らまなりと、竹の力といへど、抜き取すは一所無き、野に心をくれも由良之助殿、此の力の御口を抜きおけ、其の儘爰に

拵て置かれには、ム、心有つてか、ハア不思議な一と、目を放ちぬ刀の鯉口、思案の小口、寒がら胸に幾世の思ひ、「ソレ最前の土使心元なく、忍んで様子立ち聞きせしが、判官様の忘れ篋、爲若様の首討てと有る土使の難題、退引きならぬ手詰の場所、爲若様の年常好に似たる我が子、お身がはりに立つる所存、さながらそれとも得言はず、色でしかけて色よい返事夜半まで、夜半の鐘は土使の刻限扶き差しならぬ刀の鯉口宣けしは、此の子を切つてお身がはりに、立ていといふ心で有つたか、ハアア。」はつと刀の判じ物、つけて涙の種となる。「ム、斯くまでお主を大切に思ふ由良之助様、敵討つ所存がなうて何とせう、足輕風情の我々なれば疑ひ有るはしも、さうぢや、此の平吉を、お身がはりに殺すならば、夫が願ひも叶ふといふ物、ソレさうぢや。」と刀取り上げて、見れば頑足もない者の、稚な遊びに餘念なき、顔見て何と殺されう。案じた疱瘡もした物を、いかに夫の爲ぢやとて、親の手にかけ殺すしほ、救しいかなる因果ぞと、忍び涙にくれけるが、漸うに涙をおさへ、「コリヤ平吉、爰へおぢやノ、いふ事有り」と何氣なく「マア悦びや、父様の病も癒る願ひが叶うて來た。コレ何で有らうとの、私がする様に成つて居やるとの、扱ひ出かした愛い奴と、父様が譽めさつしやる程に、私が教へる様に成つて居やや。」「アイそんなら父様が出かしたと譽めてかや。」「オ、譽めてぢやノ。」サアノ、母様がする様に、コレ斯う西の方に向うて、斯う兩の手を合はして目を塞いで、なむあみ

た舞ならあふだ舞、御主様の御爲、父様の爲ちや舞にの、どうを物様嘆み上げますといふとの、それは有り難い結構な所へ行く程に、能うお念佛を申しやや、「イヤ俺や一人行く事は厭ぢや、母様と一所に往こ。」「何の汝一人やらうぞいやい、父様も遣付行かんや、母も又其の跡から行くわい、何にもいうてくれな、聞く程にが指の裏にさしこしやうとけ、歌に哀れを打ちよせと、母ははつと心付き、南無三寶早九つ、時や過ぎん。」と胸撫で下し、我が子の胸に立ち廻り、南無阿彌陀佛と繰り返す、又は山良之助、其の手を取つて、さうさ、色よい息事満足、得心なればさうさ、改めと、小娘におい込められれば、愛惜しながら今更に、如何と云ふ一問をひらき、「ヤアく九つの鐘は響いた、馬を御乗取らう、早く渡せと云ふ者上さ、其の上は下手はしり人、さう、重箱を改め山良之助、首の器を差しおけば、はつと驚き顔を見せ、割してここに書ふればさう、何だ、首割つたか、さ、又首のはさき身代りぢやないか、いで首を割いて置つて、器の裏を引き開ければ、首には有りで百兩包、見るより宅兵衛高笑ひ、「ハ、くくくこりや最期は情で、又御間で頼むのか、イヤさう此のうまいか、首割の目盛り、誰かこゝろと取つてはは捨し、野官の種を殺さなければ、誰かこゝろない、主人へ敵たふさぐ程、いで此の廻り早打にては遊ばし、駆け出す宅兵衛やさ、さう打つたる手渡の手渡、岩間にはつとと流る、

血汐、息まず引き抜き打ちかへす、小柄を片手にしつかと受け留め、「オ、寺岡平右衛門、天晴忠臣心底見えた、何が何と。」「ホ、此の山科に引き籠り長久を計る某、敵を討つや討たざるや、誠の性根を糺さん爲、現在我が子の命まで、投げ出したる心の誠、高知を戴く我々が及ばざる忠臣義士、ホホ出かされたり、頼もしし此の上何か憚らぬ、徒黨の人数一味連判、是れ見られよ」と懷中より、手早に取りだし連判狀、小柄の血汐をしつかとすり付け、足輕寺岡平右衛門、一味同心の血判清んだぞ。」「ハア、ハア／＼、有り難しく、女房悦べ／＼、敵討の御供が叶つた。」「オ、嬉しうござんしよ、嬉しうござんしよこちの人。」と、手の舞ひ足の踏み所、袴衣裳もかなぐり／＼、今ぞ寺岡平右衛門と、遙か下つてかつつくばふ。由良之助力彌を呼び、平吉を誘はせ、「亡君御存生の砌は、國鎌倉と隔たれば、一度の對面せざる其元、あつたらしき忠臣を足輕風情になし置きしは、眼有らざるわが誤り。御主君の手を取つて、御引合はせ下されしか、今日の參會祝著とも満足とも、いかで此の上有るべきぞ。祿を申さば某とは九牛が一毛なれども、忠義は拔羣勝れし其元、由良之助上座は憚り、いざ先づ是れへ。」と誠有る、武士の詞に平右衛門、猶も白洲に身を掘り埋み、「コハ有り難き御詞、仰せられます通り、國隔たればお目見えも致さぬ拙者め、殊に殿様御切腹の折からは、北國へ参り、道にて様子承り、悔り直様夜を日につぎ、かけ戻つたれば早明屋敷、御家來中うちり

おのぼらう。是れは又ふたたる事だと、御門前で腰も膝もどつかひ脱げ、直にとん腹かつさばかう
とは存じましたれど、いさ／＼お國には、御家老由良之助様も有る事なれば、宜しい御相談も有りさ
うな物だと、それを樂しみに漕う宿まで歸りましたれど、高が足輕風情の拙者め、是れぞと思ふ功で
もなくば、中々御評議にも加へられまい。何卒よい仕様はと、存ずる折柄、師直が所替へ、新たに建
てる屋敷の結構、此の案内を知るならば、それが功に成りさうな物だと、傳手に傳手を求め、漕う師
直へ奉公には出まじとれど、新参者故心を許さず、安閑と勤むる中、此方様のお身の上、田地を求め
藏を建て、中々蔵の所有存はない。剩へ敵師直へ出入りまでを願はるゝとの風聞實か虚か心ならず。
萬一實ならば、師直より先に討つて仕廻ふが、よき追善と存じ、及ばずながら此方様の御所存を探ら
ん爲、直様屋敷の殿を捨て、妻子と共に上京致し、今日の此のくだら、倅め一人投げ出した許り
に、大切な御人数に如へらるゝといひ、由良之助様の御家老の御説、平石萬石の御首領に任ぜられ
此の平石御門の身に當り、其加ないや有り難い。然し此の先突張り急ぐ、何ぞもお説がこ
ざりませぬ。」と、すゝめられれば女房の北、是れまでつひにお目見と致さぬ我が身、平石御門と御知
りの有りは「へい、尤もの不審、師直よりの上役と語り、右様の御腹其の座の模様、大層遠く聞、其
より、語る上使の目の内濕み、前に憤懣を顯はせしは、いさ／＼にあらす味方の御氣、お察しらぬ志臣

と云ふ内、コレ此の平吉と上使の顔、隠しても隠されぬ其の儘の堂々し、さては寺岡平右衛門と、ナコレ某が目付け所。「ハア、連れなら御眼力、又平右衛門とお存じの上、多くの金子を給はりし。」「オ、それこそ一味の輩へ、造はす支度の入用、明て亡君御賦の御金。」「然らば首の器物に入れられたる一包、是れも割賦の内なるや。」「オ、其の金、邊に落ち散らん、たづね出して見られよ。」と、詞にはつと夫婦して、尋ねるかす一包、このと女房が差し出す、夫が取つて打寄り、「ム、俗者寺岡平右衛門、佛單の偽と書かれしは。」「オ、一味の人数四十餘人、首尾よく敵討ち課でば、一人も残らず皆追腹、其元とても其の通り、亡き跡の問ひ弔ひ、此の平吉が餓ゑぬ様に、コレ御内証しつか、と御受納有れ。」と、勇氣挽ぬぬ目の内にも、恩愛の別れ思ひやり、ほろりと零す一雫、夫婦目と目を見合はして、残る方なき御厚恩、有りがた涙身に餘り、はつと人地に倒れ伏し、只伏し拜ひ許りなり。一本、暫時の慰へに勇氣をくじく我が誤り、此の山科に有つては、何かの手つがひ心に任ず、是れより直に鎌倉へ發足し、萬事の手配りあるの地で致さん。ヤヤ、力彌、諸士の面々、用意よくば出立致さん。「はつ。」と答へて立ち出づるは、大王左宮とやつせしめい、千鶴彌五郎、磯合十郎、竹森喜多八、原郷右衛門、力彌も共に旅立ち。寺岡見るより氣ちぞく、オ、オ、各様お頼もしい。申しお煙管や煙草入はござりまするか、お荷物がござりますたら、一つに致して拙者のが、

引續いで参りましたでござります。千崎様、河右衛門様、サ、さなたもく、お傍さしい。お草鞋を打つて上げませう、得ては足をくふ物。申しノ、喜多八様、ソレお合符に埃が。塵打、塵ひ料直し、人を頼むの追従は、真れにも又いざらしし。由良之助心を察し、寺崎右衛門、只今より百石の御加増。一エ、一エ、役儀も改め御近習は、いづれも同列同格。一エ、リヤ、百石の御知行下され、侍に御引き上げ下されるか。一ト、御座らず御足存れ。一はつと許りに寺間が、天へ上る心地して、いさふ立ちたる門山の役び、おは名残を蒙り、惜しむる更目にも、御加増の平吉が、手を引き共に二つか、矢作心の直し。諸士の心も一様に、涙を懸す由良之助、心願の聲高く、「サ、サ、見られが、白服、使に願はれ、花屋のせうば、母は、妹に利有りと存じ、今の大さい其の氣にあたるは、時の吉右衛門先よし、勇んで門出。と大星が、暫後に雲に、吉右衛門、山、川、萬里にひるよりし、いるはの文字は四十七、其の字頭と下の比に、名残を残し、名残を残して、三童行く雲の、

第九

一、苦しくば手の上、い、たつて工手へは辭儀をいだし、御間の品、おのれと言はす。大星、

夫れでも白狀致さぬか。」昨夜お召しに預りしより、責めに懸る此の體、高のしれた町人風情、武具馬具はいふに及ばず、鎧帷子飛道具、拵へう様もなし、いか程拷問なさるゝとも。」「存ぜぬと申すより外にはないか。ヤアノ、宿屋の町人、三文字金房是れへ參れ。コリヤノ、怖いことはない、其方が訴へし通り、繼隔子と名附けし、忍び第一の道具、是れなる義平が頼みにより、拵へ遣はしたに相違はないか。」「ハイ密かに致しくれとの頼み、成程と申しましたれど、餘り心得ぬ道具に付き、後日のお咎めを恐れましての御訴へ。」「一、夫れさへ聞けば外に用なし、立てノ。ヤイ義平最早叶はぬ、此の上に包むが否や、海と責、敷責、帝日と言ふ責めにかくるか、それでも汝隠しとぐるかサアノ、どうぢや。」「斯く露顯致せし上は、何偽りを申しましょ。去りながら、又賣先により、隠すも秘密の商人の代物、賣つたり買つたり、其の中で過ぎて行く家内の者、それ不思議とて御詮議に逢ひ、いか程拷問なさるゝとも、打明けて申す時は、此の後私が商賣の妨け。ハテ商ひ故に責めらるゝ此の體、お望み次第。」と言ひはなせば、「エ、憎いうぬが頼魂、論は無益、そいつ釣れ。」「はつ。」と立ち寄り縛めの、繩をたぐつて廣庭の、松の立木を拷木に取り、吐さにや斯うと釣り上げて、何とノと釣繩を、上げつ下しつ責めせつてうゝ。義平は覺えあらくれし、氣も魂も亂るれど、いはぬ苦痛を片頬に笑み、「イヤモ一旦存ぜぬと申し出した舌三寸、引き抜かれても申さぬ。」と、立てぬく意地の武士の意

地、治郎左衛門蜂荒らけ、此のまゝ、責めては吐すまい、女房階を是れへ召し寄せ、目の前で責めるならば、うぬが苦しみにこたへ兼ね、女房かぬかすは治定のツゝ義平が首めを救し、女房階を連れ來れ」と、差圖に下す釣鐘も、ゆるめど放さぬ設儀の御、來る間置くと大廣間、頼はしむの火鉢にかゝり、待つ間程なく女房お圓、かゝる責苦としらぬ手ぶ、御念他愛も持て遣へ給ふ、引き寄せ來る白洲の内、變る夫の覺き姿三日とも見えず、わづと許りに泣き出す、手は止まれ買替く、父様なぞに縛られしやつた、母様解いて下され」と、父に取付付き泣く御、抱きしめうに、手に叶はず、泣くなく、お圓一はい、目に男つ涙はら／＼と、哀れをとりお治郎左衛門より女、今汝を召し寄せしは、義平めお願されて、揃へつた申道其、いろ／＼と責め問へ、白晝でも胸骨骨、女房の身として、知らぬといふ事は有るまい、包ます社々と親め付ける、はつと涙の手をつかへ、おる咎めの有らうとは、ゆめ／＼存せぬ夫の身の上、お上へおもて齋齋をせろし巧み事、政さう様はなけれども、生得堅い主の氣質、未練な言譯致まゐると、一筋な心故、お疑ひも受けたる不意、夫の知らぬ一大事、私が知らぬ様となし、たゞ此の上のお情には、罪を赦したくせまゝに「黙止りあらう、議へ置きし先きより、訴人したるをぬらぬ身の上、左様吐し、また明日見えて、言はしてくれらう、お家來共、彼奴が身中の虫に下障を囃らしたるも油を流し込め、幾き目を見てもよい

狀は致すまい。日を追つて吟味を遂げ、其の上に鎌倉の蛇度御沙汰に行はん。」イヤ石堂殿、今宵は
 御邊の役目といへど、今小童奴がさぶらひの手と吐した、それこそ詮議の種にと、由松が首筋掴ん
 でぐつと引き寄せ、「ヤイ義平、おのれ吐さねは、此殿が難儀。退答次第、コレ此の火箸の焼鐵、サア
 どうぢや、サア何と、レボといふと、由松が坊主天窓に燒き印、見るにたへ家根はのび餘尺も
 ない其の節、前日見せる其の手間で、殺す物なら一思ひ、其の寸も私りて殺しや、殺しやぐ。」
 といひ罷す。義平は爰で魂の亂れ目そとくししぼる。「望みなら此の通り」と、直に振り上げ
 らるゝ、激くはすみ手の廻り、急所にやあたりけん「ヤヤこりや坊主めは死つたか、なんと
 致さう石堂殿にと、手持不沙汰に見えにける、狂氣のごとく母親は、ヤレ由松よ、可愛や、可愛
 やなア、よう情たらしう殺つれた、我が子の敵衆師寺殿、喰ひ付いと此の恨。こゝれ、可愛
 平殿、お前は悲しうないかいなう。今日を際になろはしか、何時にない胸白は、蟲がしらして持つ
 て來た、人形所か親にさへ、別るゝ事ともしらぬ手は、賽河原で只一人、噓や迷はん不便や」と、
 涙の限り聲限り、泣かぬ我平は泣くよりも、五臓六腑に沁み渡り、猶も心は鐵石の、所存は面にあら
 はせり。「ヤアつくにも立たぬ噓言、ソレ義平夫婦を牢屋へ引け。」石堂暫しと押しとめ、此の吟味は
 只今より某一人、越度有る御自分に、義平が詮議はさせられぬ。「ヤア越度とい何か越度。」「オ申

け合はせかけ合はせ、片山源太かけやの大槌、竹森喜多八、大鷲文吾、智畧の大竹打ちかたけ、剣を亂さず立ち出づる、立川甚兵衛、須田五郎、奥出、同野、川瀬の一黨、半り手挟みたる、村橋傳治、遠松新六、杉野、小寺、堀井のめい／＼、中に二階真先かけ、早野勘平光興と、名乗るは石堂經之助、鐵鎧獅子鉢巻も、日立つ取形、繪長刀、續いて寺岡平右衛門、案内知つたる館の内、原郷右衛門、大泉源平、いろはの印真先に、由良之助下知して曰く、「食討の大事は味方の變、女意に千々真はせそ。我々は裏門より、相残る人々は、表門より込み入り／＼、對ふ者は討つて捨て、逃ぐる者に日なかけそ。案内知つたる寺岡を、先に押し立て入り込んで、天川の聲忘るゝな。」と、由良之助に下知せられ、館の内を睥み付け、天よ川よとかけ詞、相岡の館を吹き合はせ、我も／＼と一同に、込み入り込み入る。三重館の内、スハ夜討ぞと仰天し、狼狽へ廻る裸身の、鎧を著たる後向、叩穿くやら小手著るやら、陰徳微塵の裏衣、味方は手疵もおはさる達者、敵は油斷を付け込まれ、叶はじものと逃ぐるも有り、提灯松明星の如く、晝かと許り、三重疑はる。死物狂ひの働きに、雜兵残らず逃げ散れば取るべき首はたゞ一つ、師直を取り逃すなど、四方八方驕り立つれど、行方知れねば千崎、小寺、是れ程に據しても、師直が所在知れざるは、早先だつて逃げ延びしと覺えたり。我々が武運の盡き、神明佛陀に見放されしか、エ、口惜しや殘念や、何面目に存命へん、何れも切腹々々」と、皆々一度に

座を占むれば、ヤレ早まるな」と山良之助、制し兼ねたる折これ有れ、矢間重太郎、師直を引立て出で、「ヤメノ、いづれも、業部屋に隠れしを、見付け出して生擒ひし」と、聞くまゝの人はいき／＼と、早速に兩を得たるが如く、山良之助、師直に打向ひ、「諸君の我を御館へ踏んこみしは、主人の仇を報じたさ、尋常に御首を給はるべし。」と相違ふれば、師直ませ笑ひ、「ハ、ハ、ハ、雀共が嘴つたり、此の師直に刃は立たぬ、猪狐すな」と搦打ちに、切り付くるを引外し、大星も一旦の禮儀も言はず主君の仇、年月ねらひし恨みの刀一ツ／＼といづれも一本刀づゝこと、浮木に進べる官能のごとく、三千年にあられども、心を盡し義を盡せし、胸も晴れ行く闇の夜に、月の出てたる如くにて、わづと許りに竊し泣き、理せめて道理なり。山良之助涙をおろし「是れより真に光明寺へ参り、巴川の磨石碑へ、皆々墓古々ごと、詞にハッテ立あかれば、大星輝かにコナク照す、其方は磨古々はぬ。」とハ何故ぞきこえ、亡君御存命の内、御助當有りし早野勘平、某人情によつて君の敵は討たせしめ、御墓所にて焼香するは、此の位のはやのかんべいごへんいしらぬひのすけ、生き續つて家相續なるも、御養父の遺志のとどひ、先君の御菩提にも、此の上められたと、大星が情の詞に耳無く、むかしかへぬの助け、死に止まるも孝行、道は一箇二箇中、導引く雲の明燈、其の夢さむる夢も、有りし次第、白洲の内、奥庭あたりの川原、二、三、四五、五六、七八、九十、百、千、萬、人々

敵の館へ忍び入り、師直を討ち取りしと、まづ、見しは正夢か、ハテ不思議なと、思案に心暮ろし過ぎ、鎌倉よりのお来脚に、おける寺岡平右衛門、アア義平殿か、俺はつしやれ、由良の助様大望成就、師直を討ち取つた知らせのお使に、アア奴は只今見し夢は、神の御告げなりつるかこと、ごくごく小踊り、俺がふぞ道理なき義平重ねて、この館の主石堂殿、拙者をいたはれ様々に、せめておのぶる御情、御恩に此の時と、奥にむかひ居るは上は、天川屋義平、只今白昼仕る。と、詞に奥より出る、石堂も喜悅の眉、薬師寺講共立ち出づれば、身不由の果、かゝる大事を頼まれしは、定めて御存じあそばされん、鹽治判官の御内にて、大星由良の助義平殿と、詞に薬師寺僧のせしが、一、能うぬかした、由良の助が主の敵を付け狙ふ心底、師直殿へ訴へんと、詞に寺岡、アヤ申し、薬師寺様とやら、拙者は寺岡平右衛門と申して、鹽治が家来、主人の仇を報はんと、一味徒黨の四十七人、師直が首討ち取り、義平殿へ知らせの使に、アア何と云ふ、スリヤ師直殿は討たれたふと、則ち大星殿より石堂様へ此の御状にと、渡せば受取り納むる石堂、薬師寺一人むくりをにやし、一、日陰者と狀通すれば、石堂とても通されぬと、討つてかゝるを引つばつし、庭へはつたと踏み落せば、心得たりと平右衛門、ひらりと見えし刀の稻疋、首は遙かに飛び散つた。一、手柄々々と石馬之丞、義平は白狀をせし故に、出牢仰せつけらるゝと、詞にはつと天川屋、返す

去すも御情、報せん様は今の世に、残れる鑑忠臣に、人の鏡の義平が心、武士の鏡の大星が、照の輝
きし天下に、来世にこれと書き残す。

太平記忠臣講釋

太平記忠臣講釋

關取千兩帳

近松半

關取千兩幟 舞負附二枚楯

第一

別れの跡のふり返、く、こんくわいの涙なるらん、あ、是れは此の處に住居いたす古狐でござる、爰にある者の、然が、何時の頃よりを狐を討ち初め、面白と思つてか、討る程に、我々が、我々を討り廻つて、果をも視へども、さつとと消滅致さぬ所で、驕りに舞を食ふに出でうへもござらぬ、是に彼が前安坊主に、白藏主と申すかゝるさう、此の白藏主の申する、事は、あまたかゝる事を、彼の者が承引致す所で、今日は白藏主に仕合せ見をいへし、討り止せと申すて、他はたかと存する、先づ世の觀望の許へ行つばやと思ひ、此の驕りも我が古穴を立ち出でて、ノ、是に添せて行く程に、氣配の許に驚きにけり、急ぐ間、驕師の許に書いてござる、誠に驚き、大の綱は地の一つの取得でござる、大を好いて細ふならば、中を我等知きの書り付く事も叶ふまい、といふ、大の聲、さうで存つたもの、えいさゝをうづめた、えつ家内をこそ、物まゝ、家内を、表に向かうと存る、家内誰ぞ、とたたでござる、え、白藏主様、サ、愚僧でおりやう、こゝになら、家内を

しに通りはなされいで、夜中に何と思つてお出でなされました。只今参つたは、別の事でもない、おと其方に意見のしたい事あつて参つた。御意見とござるなら、いか様のことなりとも承りませう。先づ奥へお通りなされませい。イヤノ、思ふ仔細がある所で、奥へは通るまい是れにて申さう。聞けばそなたは狐を釣る上り、イヤノ、や左様の事は存じませぬ。なかくさしよしそ、寺へ来る人毎に、アレあの狸の殿こそ狐を釣れ、人にさへ意見をいふものが、あれが目にかゝらぬかと、人ごとに云はせらるゝ、よもや偽りではおりやるまい。御存じの上は、隠しませう様はござらぬ。此の間狐を一つ釣りましたが、面白う存じて、釣る程にノ、七八疋も釣つたでござらう。ム、シテ狐を釣つて何におしやる。皮は引つぱいで引敷に致します、身は料理して食べます、骨は骨髄に賣ります。ム、聞いてさへ身が震はる。彼の狐と云ふ者は、執心の恐ろしい物ぢや、此の後は断然止らしませう。なにがさて此方の御意見でござる程に、此の後断然釣りとまゐりますでござらう。なんぢや止らう。夫れなら爰に、狐の執心の恐ろしい物語がある、讀つて聞かうか、アとても釣り止るまいならいかぬものかい。イヤ断然とまゐませう、お聞かしなされませい。夫れなら其の牀几をおくりや。畏まりました。た、お牀几。此の物語を聞いてのち、釣りふつつりとお止りやれや。畏まりました。抑狐は、神にてぞおはします。天竺にては八潮の宮、唐土にては更衣の宮、我が朝にては、稻荷五社の大明神に申

すも、皆是れ狐なり。ハア。又皇羽院の御時、王親衛と申して、寛仁天皇の女にさ上皇のありしが、彼を王親衛と申す仔細は、四角八方より其の姿を見るに、異女にき現にきなり。思して王には表表なき物なればとて、王親衛とぞ召されける。つてある時清涼殿にて御歌合ありし時、いその歌くなる大風吹き来り、禁中の燎火一燈も曉らさ清えぬ。其のとき皇親衛が身より光を出し、王親に申すに及ばず、御庭の盡望の歌とて閑なく見た。後、帝其の光に驚き給ふと、忽ち御懐とならさ給ふ。貴勢高僧を呼び申され、いふく御前御懐へとて、更に其の懐なし。更に安が御時と申す時より召され給はせて御覽すれば、姿成なり、世切に考へ申す様、是れは狐に天親衛が所爲たり、親衛の女に狐なり。天皇にては親衛より狐の御、天皇にては親衛の女にうしろまつて所とて腹を腹し、今又日本に帝王を取り奉らんと、王親に近づく。かかる執心の悪しき者なれば、あす御伏あつて然るべしと、御て親衛を召して五坂の御り、親衛の姿を御覧へば、大母にそたまり兼ね、下野國、郡田野の原に落ちて行く。こくない通化の者なれば、疎かにしては叶はじと、三浦之介、上野之介に仰せつけらる。兩介承つて下野國郡田野に参して、百日の大蛇と稱しと聞ける。百日の大蛇にければ、大蛇なる三三尾の古蛇にわ出づるを、一の蛇に三浦之介、二の蛇に上野之介、三つと射る。得たりやとて参りて下り、蛇を以て蛇を害す。蛇、此の由を聞申しければ、吾い御懐も

忽ち御平癒あり、國も治まり太平の御代となる。猶も其の執心大石となつて、人を取る事數しらず。爰地を走る獸、空をかける翅まで、地に落ち懸る殺生を致す石なればとて、殺生石とは名付けたなり。爰に女翁といへる僧、彼の石に向つて喝す。汝元來殺生石とうせきれいしやう、何れの所よりか來り何れの所にか去ると、拂手を取つて三ッ打つ。打たれて此の石割れしより、猶も人を取るぞかし。かかる執心の恐ろしき者なれば、此の後釣りふつとお止まり有れかしと思ひすよ。恐ろしい物語を承りました。此の物語を聞いては、狐を釣らう物ではござらぬ、此ののも斷然と釣り止りませう。夫れは嬉しい、夫れなら其の狐を釣る輪廻とやらがあらう、夫れをお捨てやれ。お歸りなされたら捨てまいやう。いやといへば、其の道具を見たら、釣りたい心も出う、身其が見る前でとつととお捨てやれ。畏まりました、是れでござる。う、微らにしやう、とつととお捨てやれ。捨てましてござる。何ぢや捨てた、ハア、う、能うお捨てやつたなう、意見を申すにお聞きやらすば、腹が立たうに、得心めされて満足致した。奥へ通り、子供にも逢ふなれども、清められてから參らう。冤も角もなされませい。其方も又些と寺へお出やれ、何も馳走はなけれども、昆布に山椒、良い茶を申さう。其のお茶が何よりでござる。ア、お出でやれとは申したれども、何も馳走は申さぬ、昆布に山椒をまいて、ハア茶許り申さう。ようお出でなされました。アお出でやれと申したれども、何も馳走は申さぬ、昆布に

大は、禰共、禰、引舟押し拭ふ、汗は流れて泉派の、後の出端の衣裝をちやつと、ア、おきやく、もう狂言所ぢやないと、禰が胸倉引据ゑて、「お前様は、能うもく、あんな悪性なくれますな」「コ、コレ、何いふのぢやないの、エ、新住の京が事か、さしてもない事を、情氣はひゐりと仕やいの、」「イエ、何のそんな事言や致しませぬ、京大坂での色事なら未だしも、遠い近江の彦根とやら、いふも屋敷の女中様が、お前に逢はしてくれいとて、あちら座敷に待つて居る、私は知らぬふりて、袖之姿に問はしたれば、禰三様に國で深う言ひかはしたと、あつかましい言ひ様、ナウ百合。」「アイノ、あの通り、お前の悪性に違ひはない、何と見えがござりませうがな。」「ム、有るでもなし無いでもなし、彦根は親共から御用を聞く家、去年お國へ往た時に、三島彌太夫といふ人の娘、お才といふのにツイちよつと。」「其のちよつとが癖の悪い」と、口舌の半ば、狂言半ば、「皆旦那々々、どうでござります、肝心の所間が抜けてらりに成りた、太夫様こりや何事。」「コレ善九郎かうぢやわいな」と叫く引舟、「イヤア我折れ、叔は旦那が釣狐ぢやない、釣娘。」「サイナ女子を化かす男狐。」「おれも狐の面目ない、嘘こんくわいでござりませう。」「エ、口合所かいな、妾は情氣しはせぬが、マアどうせうと思召す。」「ハテどうというて、往なして仕舞ふ分のこと、したが、おれに逢はずば往ぬまい、ちよつと逢うて好い加減に駄して往なさう、善九郎爰へ呼んで来い。」「コリヤノ、太夫が事

トされ、太夫も彼方へ、「イヤ錦木は安に置け。」イヤ申し、今日は禮三が揚けた太夫、郭の貸し借りは格別、お前の慰みにはなりませぬ、構はずと往きやノ」と、追ひやる跡にむつと顔、「町人と武士が買論しても済まぬ事、先だつて錦木は、親方左衛門方へ、手附金渡し置いたれば、今日明日には身受して、身共が女房、何程きんき張つても部屋住の禮三、極づき立ては叶はぬ事」と、悪口明いて次の間から、手代の善九郎、「お侍様、此方も百兩といふ手附、くつわへ渡した使は拙者。若旦那、彼言はれては立ちませぬ、今日中に身受して見たいな。」成らぬ事ノ、七百兩の金がなくては、太夫が身受はならぬわい、吹きや飛ぶ様な身上で、何としてノ」と、當てこすられて若氣の禮三、無念ながらも有り合はさぬ、兼て始終を一間の中、「金子御用になて申さう、禮三殿」と呼びかけて、しづ／＼出づる其の勿體、「お前は江州の村岡團右衛門様。」、「御用に付いて参り申した、様子あれで承つたか、お手前こりや立つまい。只今太夫を身受めされ、今其方に有り合はさぬ金子、團右衛門が貸し申す。」と、家來に持たせし挾箱、取り出す五百兩、「エ、イそんなら其の金お貸し下さるか。」、「オ、サ念の爲借證文。」「ハハ、忝い、サアノ」太夫主は此方の物の深き惠みの硯箱、墨黒々と書判に、證文認め差し出せば、「コレ九平太様、コレ此方の旦那は五百兩や七百兩は、啞あする度に、ぶつ／＼と吹き出る。ドリヤ太夫主の身請金、親方へ渡して來うか」と、金も財布

にひけらかし、郭をさして行くあとには、九平太はぐつともいはず。三は氣味よく、「ナント部屋住の勢ひ御覽じな、お氣にはさへな。算用の知れてある御知行で、天長などは受出されぬ、キヤお侍。」と當て返す。折から中間かつくばひ、「左右衛門様へ、お星敷より急の御使と差し出されし封押し切つて讀み終り、「氣の毒な事が有る、」と云ひ、「今の金子返してくれ。」「エ、只今お貸しなされた其の金を、返せとは。」「イ、ありや、殿の御用金、只今の體情を見、暫くの間には武士の情、今相役より金子急入用と申し越したれば、延引すると身共は切敷、背中に敷、」と云ひ、「鬼してたもれさ。」「いやと申し、」と云ひ、「つねのやへ遣はした金、今戻すことに成り御覽じ。」「イ、身は無難は言はぬぞよ、此の語文に、何時な立とも返却と云うには解りか、」と云ひ、「この間まで、信濃文を反古にして、殿の金子を横取りぢやな。」「イ、申し、」と云ひ、「何の左様を言ふか、」と云ひ、「おう此の上は蔵屋敷へひつ立てて、相役の手前、垢をぬく、憎い奴、」と云ひ、「用てする九平太、」と云ひ、「おひきだ其の金で、受出し自慢措きあかれと、」と云ひ、「人が足下に蹴飛ばして、」と云ひ、「やうせうと云ひ立てて、」と云ひ、「と、聲をかけて立ち出づるは、」と云ひ、「三が親父、何時の間にか」と、いへど見ゆかず、團右衛門が前に手をつき、作が不測法、此の頭には免られ、何事も御計聞くと、久々に持たす千兩箱蓋追取つて五百兩、御返進と差し置けと、「」と云ひ、「丁重の仕方、」と云ひ、「やうせうて叶はぬ答。」と云ひ、「久にも堅固で重

覺。金子相違ない上は、急の御用、罷り歸る。と、旅箱に取り納め、「そこなお侍、おさらば。」と、互に黙禮目遣ひに、様子ある顔九平太ら、邸座敷へ立つて行く。心が、りに親錦木、お才も歸る小庭先、聞くととも知らず親浄久、「ヤ、禮三、此の親が年々淋げ溜めた身上、金銀は親の身の膏、其の膏を始末する事を知らねば、終には金銀の冥加に盡きる。金は町人の寶物、芝居の狂言でも、三種の神器といふ寶物の事はづかりで、一日座中があたふたする。其の大切な寶物を、色狂ひに遣ひ果す癡呆者、今日も町の奉會に、西照庵へ往たれば、東座敷の樓に書いて有つた落書、コレ是れ見い」と取り出す、懷のまくり相合傘に、大坂屋錦木、鶴屋の禮三、是れ見た時の町の衆の手前、餘り腹が立つて引きまくつて戻つた。まだ其の傍に、誰や彼や書いてあつた。ハア何とやら、い、岸本屋お艶として其の傍に、相人は替者殿かして、慶子と書いて在つたわい。コリヤ子供はかせぬてんがう、子供の口の端にまでかゝる様な事をして、鶴屋の名跡が立てられうか。勘當おや、立つて行け」と、父の腹立身にこたへ、思はず知らず錦木も、科人は私と、お才も共に轉び出で、泣いて詫する許りなり。きよろきよろ眼に善九郎、「禮三様々々々、只今くつわへ持つて往て、今の小判を明けて見たれば、コレ此の通りの夜様、こりやマアどうでござります。」「ヤア何ちや寶金や、ハアめんような。近江の屋敷で、村岡團右衛門といふ知行取が、寶金を遣はう様はない。」と、親子の不審お才が不審、「アノ村岡

國右衛門が雲へ来たか。」「さういふ、さういふ、其の國右衛門は既に狀を付けて、父様へ貰ひかけ
聞き入れないを意氣に持ち、聞許にせうとの工みか施され、賜られが御當受けた其の日、一所に國右
衛門とお國を追放。」「や、そんなら被奴はお掛ひ者が。」「さういふ、其の後で職様の御前長光のお力
失、是れも大方國右衛門が御駕。」「さういふ、今の事も聞かれたが、情此の儘で置かうかと、願は出す
禮三が向うより。」「其れ御お待ちなされ」と、名乗るは高き吉川三郎吉、池川の名物角海、私は角力
の御初めで、浮浪から只今、聞いた所が常備の雇りと通うて、世のある仕事、つい請願はなりますま
いか、并々當つてお國の身の上、御禮は聞。」「さういふ、又にも増にも、只一人の毛子もいひ、世
界に金遣ふ者がなければ、金儲ける者もない。」「金儲は悪い物、世にひんたて、財宝とは御礼聞
てござりますと、さうならお氣に障らうけれど、土地の者でもないに、さうした事をか職に御禮聞。」「お國
の御思ひめから、大事の苦見、此の儘の事で御當と信、いつとも消老老がと思ひます。私を御礼
して下さる氣なら、一番此の證書は聞いて下んを、御禮聞。」「さういふ、大きな事で御禮聞。」「おどない所が
御取なり。」「汗入手を打つ。」「次郎様というてたもつた、常は御禮聞。」「さういふ、御禮聞になると、結
んで御禮する者は、子代にもない。御禮聞。」「さういふ、此の御禮聞はとうも救されぬ。」「といふ御禮聞は此の御禮聞、
御禮聞。」「さういふ、近江の屋敷の物語、二島國太夫殿の御女、岸氏の室中津川御禮聞へ嫁入する者の人、御

び逢うた禮三が悪縁、斯う驅落して來たれば、國へ放せば直に手打。というてお出入の屋敷の娘御、不義合點で、俺が子の禮三に添はしては、御家中へ如何も顔が出されぬ。かういふ事は知らいで、息子が夜泊り日泊りは、新町の太夫故、いつそ身請してやつたら、結句しまりが出来るであろ。聞いた様子が、此のお山と、眞實船二を可愛がつてくれるけな。高が千兩までのこと、給銀の高い乳母置いたと思うて、身受の宛に持つて來た、隠居金の千兩、まだ五百兩残つてある。是れで済むなら金立てて、女房になと妾になと、他人の事はおりやかまはねど、棺桶へ片足踏込んで、究竟な倅を、久離切らねばならぬとは、思へば悪い入面」と、十徳の袖顔にあて、泣き倒れたる親心、禮三も不孝の悔み泣き、女郎も共に有り難涙。善九郎がけらく笑ひ、「結構な親旦那の御料簡、そんなら其の金、錦木が身の代、只令親方へ、私持つて参じましょ。」「イヤ、こりや其方は頼まど、此の使は岩川。」「デモ最初から手附打つた使も私。」「サア夫れぢやによつて猶やられぬ、善九郎隙やつたぞ。」「エエ。」「イヤ悔りすな、覺えのある事、よう禮三をたはけ者に仕上げたな。未々は番頭脇にもしてやらうと、思ひの外の不忠者、引負萬事書き立てて、お上へ願へば首の無い奴。隙出すを有り難いと、出て失せをらう。」ときめ付くる。白藏主の正兵に、尼の出た大和の善九郎狐、掻き消すごとく逃げ失せる。傍の財布に岩川が「金子しつかり受取りました。禮三様、錦木様、お二人の身の上は、次郎

吉が命にかけて、ちやがおも様とやらも、禮二様に女夫の約束、男は一人、女中は二人、一つに束ねて世話もなるまい。ハ、どうせう」と行き當る。つぎの座敷の中から取つて、「其の女中預りましょ」
「ム、うういふは何處から、女中の聲ぢやが此の子と近付のお人か。」と、近付ではないけれど、岩川の預り憎い女中様、千井川の吉兵衛が女房、よつが預つて歸りたい。「誠に三島彌次様、大坂の蔵屋敷お勤めの時、お目撃せられた吉兵衛殿、其の彌次様の奥御、世話せねばならぬ方」。「氏神様へ参つた次、立ち寄つた此の奥御殿、幸ひの所へ来合はせたり、明神様のお引合はせ、お七様の身の上、どうぞ私に世話さして下さんぜ、頼みまする。」と差し當る、頼むの聲はけいけい、頼むは天満千井川、隠れ内儀の手取な、と、うれしや、よい、良人が出来たぞ。吉兵衛殿に聞くれば信か、い、そしてまあ病氣はよごんすか。」「此の間は大分よくなりました。」「い、今や結構い、あの人が出やしやれぬと、思ふも、片時も、おれた様で、二、三、早う本復しられまう様と。頼むを、新つて居やんす。」「い、もう此方の人もお前の親切、いなかへ、い、い、秋の力に岩川と取りたいと、力んで許り居られます。」と、片屋かはれどかはらぬ交際、岩川盛貞の親三郎、い、俺が頼むの千井川に、世話頼むのは口惜しい。」「コリヤヤイ、勘當の身になつて、相撲取の盛貞所か、汝が大の蔵屋敷を受けねば立たぬ様になつたわい。頼まにやならぬ二人の衆、今までの様に岩川々々と澤山にいふ事ならぬぞ。」

ア、是れもいふ世話、何事も皆後生苦惱、なんままだノ、一散珠に涙を繰り交せて、しをく歸る
 途程に、二人は顔とも財とも、心許りの暇乞、只伏し拜む親子の別れ、引き違へて何所かは、くつわ
 や左衛門、幸ひ好い、歸本太夫が身受金、ソレ五百兩」と投げ出せば、「コリヤ忝い」受取の一
 札さういふ、と唐き、差し出せば岩川が、押し聞き見て不審顔、「五百兩受取り、残つて二百兩
 とは何、こつちや、ハハハ太夫の身の代は七百兩、まだ二百兩足りませぬ」「イヤそりや手附に二百
 兩、善五郎が持つて往た筈」「けもない事ノ、慥かな鶴屋の禮三様、其のお顔が手附ぢやと思つて
 二百兩が一兩も取つた覚えござりませぬ、今聞きや御勘當とやら、跡金の濟むまでは、跡金は連れて
 歸ります」と、手を取れば引きはなし「今日一日は揚の女郎、指もござす事ならぬ、明日の朝迎へに
 おこした、跡金は此の岩川が吞込んでゐる。若旦那、スリマ元れも善九郎めが、思ひ違へば何奴
 も、皆共謀と見える」「サア取分け憎いは九平太め。岩川頼む、最前の仕返し、ぶつてノ、ぶち殺し
 てたもう」「サアノ、よごんす。コレくつわや殿、此方様往にしなに鄭座敷の九平太様を、爰へ呼んで
 貰ひましょ。したが私が顔は出し憎い、此の仕返しはお前にす。怖い事は何にもない、岩川が押へ
 てゐること、火越の擔取つてのけ、蒲團すつぽり聞取の、體を直に構なり「何でも危うなつた時は、
 火越の傍へ連れお出で。」と、いへば吞込む禮三郎、みな邪魔にならくれたノ、是れからおれが

100
22
-1-
113
114

「あ、岩川様御無心が有る、お才様をおともするは、此方の人吉兵衛殿になりかはつてあづかる私、女でも男の名代、お前の其の魂を、わたしに貸して下さんせ。」「イヤ是れは。」「サアお前の方に入る脇指、若し夫れが用に立つた時は、お前は下手人、錦木様や神三様の跡のお世話は誰がするえ。殊にお前ばかり目立つに、早う遠者になりたいたと、養生する吉兵衛殿、お前に若しもの事が有つたら、此方の人も病が重る、大事の命爰で捨てる所ぢや有るまい。」未々お二人見解ける心のかたりに、其の魂此の吉兵衛が預りましよ。」「ム、あやまりやんした、吉兵衛殿に岩川が魂、確乎と預けます。」「エ、添い、さう聞き届けて下さんした。」いよくかはらぬ二人が魂、見届けた神三が證人、西はお才、東は錦木、御無事でよいのと、本妻妾、池田の關取、難波の名取、勝負は秋の相撲まで、おさらば、さらば三重と別れ行く。

第二

芝居は南、米市は北、相撲に能の常舞臺、堀江々と國々へ、鳴り響きたる岩川が、角力の内は夫婦連、爰に堀江の假住居、見世は初日の飾り物、半紙、毛氈、煙草盆、羽織、脇指、取りまはし、酒は杉ぼへ米俵、よその軒端を假初も、賑々しくご見えにける。一擧、積んだの見事、何ぢや、羽織、脇

指、米も有る、えらい儲り込みやの。いや又二三年こつちの角力に、歳多に負けた事のない岩川、したが今度の角力には、千羽川が病氣散、はすむまいと思うたが、思ひの外きついはずみ。「ソリヤ其の筈、勸進元の顔の好いの、江戸が、九州が獲らすなり、岩川といふ、最原の強い力の強い、あんな男を持つ者の顔が見たい。」と、妻が、内を覗いて高々と、夫の甥女婿とは、出合頭に聞くうれしさ。顔に少しは紅桔梗の、前庭の朝顔暖簾、上げてによつて、「北野屋七兵衛でござります。」「是れは、島の内の七兵衛様、能うお出で、さういふ夏へ、に打通り、我まきついはずみやう、千羽川が、島に、どう育らうと思うたが近年の大入、今日は大方夏の關取が、取らしやるで有らうと思つて、見物に來た序ながら、見物役になりましたが、關取はもう往て御座りましたか。」「イエイエ今日は叶はぬ用事に付き、つい近所まで参られましたが、さう戻つてござんさう。」「マアほんにいつぞやは、いかい世話で、後物を振りと見物致しましてさうござります。いつでも島の内の祭は、俄かどうで賑やかな事、私等は佐州首談、物見だけいと、ここはこちのに叱られます。」「イヤモこちらの方も門がざわつくばつかりで、奉公人が動かねば、野心の高ひが少ない。」「イヤ斯ういふ中に遅なつたら入られまい、關取へ好い様に頼みます。」と、座を立上れば、さういふ、お茶なりとて、「遅いと好い場がござります。」と、後援をこゝろ歸りける。關中の最

員に肩も岩川か、鐵が鐵陀多右衛門と、打連れ歸る我が家の内へ、此方の人、戻らんやんしたか、
 陀多右衛門様も能うお出で、初日からまたお目にかゝるやぬが、きつい大人でお目出たうござりま
 す。」「ア、そのや樂しみてござんす、兒物の足が早きに、そろ／＼行かうと出かけた道で、岩川に逢う
 たによつて、天れでちよつと寄りました。」「夫れはマア、能うこそお出でしたか、まだ漸うと今
 の先、薄太鼓を打ち出しました、マア緩りとお茶成りとも、と、會津に汲み出す花香よ、心の花香
 ぞ愛想有る。」「ヨリヤ女房共、留守の内へ今日の角力割は持つてこなんだか。」「ア、エ、まだ何にも持
 つては。」「ハテ、跨の明かぬ、今まで知れぬは、何ぞもめでも有るか、いの陀多右衛門。」「ア、おれも初
 日に鈍な角力取つたによつて、何でも今日ほと思つてゐるが、誰と合はすぞ、相手によつては魂膽も
 亡夫として見にやならぬ。いつそ行て聞いて來うかい。」「ハテ、まあ好ござんすわいな、其の内には持
 つて來う。幸ひ買つた肴も有る、主と一所に飯上つて行かしやんで、ドレ拵へう」と錦褌、かけま
 く神にあらねども、菩薩廻りの女房は、勝手へ立つて入りにけり。」「岩川様お宿にござりますか、新町
 の大坂屋から参りました、左右衛門申します、錦木太夫が身受の跡金、今日中に遣はされませぬと、
 こちらに身受の客衆がござります故、其の方へ相談致します。お前のお顔を立てまして、今日中は待
 ちます、明日に成つたら、此方へ太夫をやります程に、其の時にむむの無い様に、念を入れいと申

された」と、言ひ捨て彼は立ち歸れば、「其の身受、外へさしては岩川が立つ物かし」と、歸け
出すを「ッリッ」岩川、其の身受の譯も其の客と、此の鐵が鐵が知つてゐる程に、マア行かすとも
よいわいやい」「ム、すりや、其の身受の相をわれが能う知つてゐるか。其の身受の客といふは「
「イヤ外でもない私ぢや、オ、此の鐵が鐵陀多右衛門ぢや程に、マア左様足つて置いやい」と、彼に
こつとも歸つて立ち、鐵陀多でてのさざめく鐵の音、聞きた、こりや九平太が居るや。尤も彼が眞に
は、太事にかけにやならぬ人ぢや、安を候う間き分けてくれ。あの鐵木人太は、おれが親方の鐵三
殿とは、きつう深い中ぢや、其の鐵木殿、親の恩賞まで受けられた事、こりや言はいても知つてゐる
事、其處にはよと取つてはつて、五平太といふ金まで渡し、親金の二百兩半取する其の内に、人太殿
を鉄の手へ渡しては何う。岩川が頭を立たぬ。わが身の中へ入つたこと辛い、因事そつちの身受を、
じやめる様に言ひ懸してたまるまいか。鐵が鐵、マア鐵陀多といふと謂ふ下は、事を分けたる一言を、
鼻でろしらふ惡者作りニ、此の身受はどうやうと聞かうや、おれが僕もオ、われが親方様によて
やうというたら、鉄手はよからうか否ぢや。わりのや東海庵で、九平と鐵を言ひ目に合はれた様ぢや、
オ強いこつちや、其の件返しを頼られてゐる此の鐵が鐵、人だにえうい事いふをいふ、マア、すりや
其の時の事が根柢にはつて、夫れ般身法の秘傳するのを「マア罪難するとは何のこつちや、マアヤ

錦木が身受は金づくぢやぞよ、僅か二百兩許りの跡金を、團子の咽に詰つた様に、ぎつちかはと呟へえ頼かくとは違ふ、七百兩といふ金を、かゝりに出して身受けするのぢや。「成程尤もぢや、冤角めいめい親方を、大事に思ふから起る事ぢや、何と斯うしてたもらぬか、俺を九平太様へ連れて往て、貴方の胸の晴れる様に、撲たしなれとさして、身受は此方へうしてたも。わがみの言やる通り、金づくの事なれば、今日中に跡金さへ出来れば、頼む事も何にもなければ、サちつと急に出来難い。しも在所へ言うてやつたら、王座の出来る事もあらうが、親共の耳へ入れとむない、夫れでわがみを頼むのぢや。又身受仕やつてからが、とても太夫が九平太様の女房にやならぬ。すりや畢竟が費えといふ物ぢや。「黙れやい、太夫が随はうが随ふまいが、それにや構はぬ。九平太様には金がたんと有るによつて、其の金でわいらが頼をはり廻すのぢや。「サイノ、金で頼をはらずとも、此の岩川をどうなりと、腹の瘻の様に、身受は此方へさしてたら、コレ一生の頼みぢや、思にも著よりコレ手を下ける鐵が鐸。」と、頭を疊にすり付けて、頼む心をうつなけれ。「ム、そんなら何か、踏まれでも撲たれても、言分ないといふのか。「イヤモ聞き分けてさへたもれば、縦ひ此の身は如何成つても。「コレヤ相談が面白いわい、九平太様の名代に、マアちよつと斯うせうかい。」と、立ち蹴にどうぞ踏み飛ばし、「何ぢや、何びこ／＼するのぢや、わりやたつた今言分ないと言うたぞよ。但し言分が

有るのか。」「いや何の言分がある物で、さういふ何う成りと心任せに、」と、其の智ちや意海軍での意圖返し、わがや九平は様々斬うくとはした、さう斬う踏んだか、と弱みを付け込む厄病の、幾も頭も引きしやなくなり、さいなむ折から表へ、いきさき、」と今日の相撲場できりこす、さう追付上候入ちや程に、早うお出でなされまこと、書付はの込め立ち歸れば、肥多右衛門押し殺さへ何ちや、鐵が鐵に岩川、ふ、すりや今日は岩川と鐵が鐵、ふ、さ見い、我と汝とが相撲をやといふ、ふ、時と時、折を折、わがひと我が友合とは、ハと氣味合ふことちや新二、いふる心に一果案、さうやわねと池田の岩川といはれては、圖々一名の通つた者、又あふと大蛇のお陰へ、縁に鐵は初めてなれば此の相撲しくじるか最後、決持鐵はちや、すりの足れた人ながら、さう岩川は、九平は極め代に、也海軍の仕返ししたれば、此の岩川は斷んで有る、又鐵が身を受ける無きおれ次第、さ、此の鐵が鐵心次第、さ、水心有ねは魚心有り、眼む新も恨まれる者、さう今昔の相撲仕廻うては、其の上の事にさうぬい、われも随分神佛でも叩き廻して、おめに勝つやうにせよ、んたが可愛や、それを取つたら骨身が碎けて、通ねては旅路の事はならぬとさうとさうと頭取赤を頼んで、取り預へて貰うてさうと、取らぬ方が勝ちやあふと大蛇とんに取つて見ようと思ふなら、魚心有ねは赤心有る、岩川土俵で逢はう」と強い詞の何處やらに、味な鐵が引きする岩路、さうわづかしてさ出でて行く、跡に岩川の手を

組み、思案にくれて居たりしか、段々日限の切れた跡金、彼方が催促するも九平太が皆所爲、上から鐵が獄を抱き込んで、彼方の身受を延ばして貰うより外はない、と言うても一筋縄では往かぬ奴に抱き込む仕様は、ふ、太夫が身寄におれ次第、魚心有れば水心有り、ふ、こりや今日の相撲を、ふつてやらざ成るまいわいの。ソレく、彼れ我れが立ち合ふこそ幸ひ、美しう振つてやり、彼奴に勝て護つて置いて、其の上で退引きさせず、蟬が近道上分別、といへ名取の鐵が籠、何う魂胆してなりとも、投げ殺つにやならぬ相撲、いかに一生懸命の、大事の相撲を金故に、ふつてやる岩川が、心の内のせつなさ徹ち、摩利支天にも見放され、相撲更加につきたのかと、思ひ廻せば廻す程、空恐ろしさ口惜しさ、思はふ拳を握り詰め、身を顫はして男泣き、始終立ち間く女房が、涙隠して「す、此方の人としたことが、先刻にから飯拵へて待つて居るのに、寢で上るか奥へするるか。」と、何氣なければ素知らぬ顔「イヤモ飯なら喰ひたうない、ふ、二角力から呼びに来た、ドレ行て來う。」と立ち上れば「そんならもう行かしやんすか、コレ岩川殿、ソレ髪がきつう亂けて有るぞえ。人中へ見苦しい結うて上げう。」と取り出す櫛箱「イヤ結うて居たら隙が入る、つい撫で付けて置いてたも。」「す、お前もこんな髪して、行かしやんした事はないが、いつその事何もかもうて聞かして下さんせぬか。」「や言へとは何を。」「サイナお前の心のナ、それ縫れ髪、撫で付けて置かうより、寧ろさつぱりいは

四
二
十
一
九

ぬ一と、怨み涙に時移り、早追々の呼使、「申し土俵入でござります、早うお出でなされませ、ちやつとちやつと」に岩川が、しをノとして立ち上れば、「もうお前は行かしやんすか」「土鐵が鐵を抱き込んで、上面の通りいきや格別、若しも行かねば絶體絶命、これが暇にならうも知れぬ、さらば」と許り一聲を、跡に残して出でて行く、「コレまあ待つて岩川殿、只一言いひたい事」と、見れども跡は雲霞一ッリヤ斯うしては居られぬ所、夫の命にか、はる勝負、わしも是れから相撲場へ」と、帶引きしめて夫の跡、慕うてこそは、意行く空に、響く櫓のとうからと、打ち仕廻うたる太鼓より、鳴り渡つたる岩川と鐵が鐵との相撲割、表につたり貼り紙も、はりさく木戸口押し合ひへし合ひ、早土俵入事終り、相撲の数々取り盡し、中人前ぞ勇ましき「東西々々、道頓堀家右衛門町、北野屋七兵衛様急用でござります、一寸木戸までお出でなされませ」と、又も呼び出す相撲の名乗、入れかへノ、勝負も、今一番とノ日に連れて、西は岩川々々、東は鐵が鐵ノ、と名乗り上げられ、しこ踏み鳴らす鐵が鐵、此方は猶もしよけ鳥の、しをノ、上る土俵の上、すは千番に一番の、相撲と力む幾萬人、しづまり返つて見物す。片屋岩川々々、片屋鐵が鐵ノ、せくまいノ、せかずと顔を見合はせて、やつと引いたる行司の團扇、直に付け入る鐵が鐵、すつと兩腕指し返ます。元來覺悟の岩川が、既に危く見えたる所へ、進上金子二百兩、岩川様景風ふりと、聞くよりぐつと岩川が、始めの氣色何處へや

一ツし太夫、通々も言ふ通り、わが身の身受の跡を故、岩川の女房が勤め奉公すると聞く、代りに其方々北野屋へやらうとは思つてゐるが、郭と違つて、いかう勤め憎いといふ事おやぞや、」「す、體二様とした事が、義理より辛い勤めは有るまい、お前や私が身の上まで、段々世品に成りながら、おとは様に勤めさしては、どうよあ義理が立つものぞ。是非とも代る此の身の上、交出れぬ先ぢやと思や、わが身一つとつとも厭はぬしと、言ふも涙に聲ももろゝ、道理ぢやゝ、何を言ふも皆わし故。日外に右衛門めに衝られた金の事、詮議をせうにも肝心の、團右衛門が行方は知れず、何もかも身にかゝる頼儀の果ては、一足づゝに消えて行かすば成るまい」と、我が身は暗き闇の夜に、光る眼も蛇目傘、向うにすつくと鐵が鐵、ア好い所で錦木太夫、岩川奴に負けた意趣晴らし、汝を是れから連れていて、九平太様へ手渡しすりや、一廉金に成る仕事、サアノ、失せい」と引立つる「ヤイ鐵が鐵錦木は體三が身受けして、今ではおれが女房、其の女房を連れて往て、金にせうとは盗人同然、われを代官所へ連れて行く、サア失せをれ」と、引つはつてもちつとも動かす「エ、毛二才め何ひろぐ、うぬに引つはられて行く間、此の手は如何して居ようと思ふ。馬鹿つくさずと太夫を渡せ、いやといふが最期、幸ひ邊に人もなし、手短うばらすぞよ。」「す、縦ひ此の身はどの様に成つても、太夫を遣つては岩川へ言譯立たぬ。」「ヤア其の岩川が猶けたいぢや、疫病神で敵の汝、渡さによ斯うぢや。」と

白刃と白刃、稻村陰に渡ふ曲者、あやなき闇の黒装束、だんびら提げ後より、助くる加勢の減多切り、三が所爲と思ひ込み、切り込む深田の泥まぶれ、猶ふも掛る雨曇り、足もしどろに胸の間、憎しと思ふ一念り、剣さくさく、曲者が、威す足音、三郎、又も怖氣の身もわな／＼、心さ／＼に千鳥足、こけつ轉びつ逃げ歸るゝとつくと見詰まし探り寄り、智の刀一剱り、觸る足元落ちたる鞋、納めた思案の向うへ、提灯、暫く忍ぶ身の廻り、雨具に構ふ立派の侍、家來を先に來る道筋、落ちたは何と手に取り上げ、明しを持ってと提灯の、燈影に見付くる邊の血汐、切り倒されし大男、さうこりや身が屋敷の抱への相撲鐵が贏、何にも心得すゝと内改め、紙入より取り出す一通、詮議の種と聞く間讀む間稻妻の、提灯ばつたり曲者は、跡をくらまし、落ちて行く。

第四

昔は西に根津が關、今は東に内川の、關も物かは磯に見る、なみ／＼にては大坂の、關はゆるさぬ場所に、類名取の千羽川、其の川風にもまれては、四つにも組まん柳腰、如在内儀の世話に成り、おすはさいつころよりも、爰に假仕み假染の、縁を鶴屋の禮三郎、合はせ骨牌のかかる島、有るなし知らぬさま育ち、丁稚でもない相撲取の、ひよこと見えるうそ／＼、前髪門口から、藤繩半右衛門申しま

と指、破面等入相は、見など見なく、悪作の、うそく人親、姿太振、小氣味惡こに、三郎、一レ誰
 ちり人が、と朝日、は、夕朝、夜朝の、神様株が伸し上り、こりや花々しい勝負でござんすの、
 ドレ一資本して来うか。内儀は、五十兩貸して下られ、貸しても借る、貸さずにねだ切引つたくる
 のぢや、と、春のともきはぬ、朝草、煙草どぶと、いやがらす。およつは、騒ぐ、色も、ム、金が借
 りたい、安い事や、の五十兩なと、五百兩なと、何はなと貸さうが、こな様、誰ぢや。つひに見た事もな
 い、すべない人にもしきなかも、貸しては、此方の人になたぬ。此の女中様と合はせ、背牌のあぢやら
 事、勝負事の何のと、人聞きの悪い。こつきの威嚇、喰ふのぢやない、出直さんせ。」と取りあへず、
 いなめ上るな、御法度の勝負事を、商賣にする證據には、俺が影を見て、隠れをつた男め、ちらりと
 見てもさす物ぢやないわい。街裏借手にするのぢやない、更の亭主は何といふ、亭主に逢はう亭主に
 逢はう。と、此方の方は、髪を病んで久しう寝て居らる、殊に今日は、終日でそんな事聞かすと、忽ち
 大熱、そりや止しにして下さんせ。」黙れやい、病氣ならてこのほんや、せいといふ、赦しが有るか。
 出さるにや、爰へ引きすり出す。と、ア、これ、夫れば、つかりは堪忍して、コレ拜みます。」と詫びる
 程、何ぢや有らうと、亭主めを、代官所へ引きすりて行くのぢや、出され。」と猶聲高、病家の一聞
 洩れ聞え、おおよつ、俺に逢ふといふのは、誰ぢや、ドレ出て逢はう。」といふ聲も、病に屈せぬ大男

幸ひ爰に聞半蓋、イヤ／＼／＼、この爲の爪鉤が様に、ばた付いては面割な、寧ろ爰へ」と體の下、幸ひ當欄のあなかしこ、にがらぬ思案の極樂落し、跡踏みしめて立ち直り、「マ、是れで片付いた、あゝして置いたら此方の儘、禮三様も何やかや、定めて意地も有るけれど、翌は日に立つよあ晩の事、一或程々々、とつと是れで胸が暗れた、今夜中に岩川に、鳥渡逢はねばならぬ譯、行て来ませう」と立ち出づるう申し、お前の脇指はどうなつた。「マ、マそれは、「ござりませぬか、御勘當のお身の上は、猶以て世間へ外聞、何故丸腰でござります。」と、いふに返事も差しつゝり、行き當る顔尻目にどろり「大方諸事を頼んで、貴物にお入れなされたで有る。あの脇指は、親御からの御秘藏ぢやけな、すりや見知りの有る一腰。何處から何う廻つて、ひまつとひまんな所で手に入れたら、お前許りか親御のお名の出ること。實は身の指合はせ、金へ有れば買はれる道具で、一太切、まして親御の血を分けて譲り受けた、お前の身は猶大切。何處へお出でなされうとも、必す命を大事にして聊爾な事なされまうな。斯う言や聽らしけれど、前方はしみんと、物言うても下されなんだが、お才様の縁に連れて、今では次郎同然に、懇にしてくさるお前ぢやによつて此の御意見、悪う聞いて下さりますな、御合點かえ。早うお歸りなされませ。」と、明けて天れとは々閉暮、口にはねど過分さな、拜むが諸事の禮三郎、心残して出でて行く「申し、お早うえ」と口の中、まだ夫とは言ひ兼ね

る、おはこ娘の家は顔、まれば、母付成らした人を、もう一生は産はれぬ様に、何でございませうの。尤も錦木といふ色か有れど、還らぬ故に願はくまでござつたお前、氣遣ひすまい吉兵衛が添はします、とむいふ物の、お前には許嫁のお前、丹波の御家中津田南助様、まだ嫁に切らせぬぞと、萬一先から大取まで許嫁すまい物でない。妻縁が外へ出しますな。それこそそのやうな様よりお前の事、今とつくりと養生して、秋の相親から出にやならぬ大事の體な、ちつと好いと、月代舞へて氣立立てが悪いわいな。今日は又舞ひはなや、寒けの寒め内御前でも苦く居やしません。何んがすやら、お立のせゐ先に、下駄はいて歩かれる物ない。なんは煩うてゐる、増取なとすりや氣合が好うなと、おいらが内に寄す居ると、真直に罵入れを被で、氣が立つて一掃したい。そんならどうなと轉手にさんで、何でも俺が言ふ事は聞かんぞめ。一、相親取に、女房のいふこと、誰かめが好いのぢやないかと、さういふ詞を聞取の、中のとさうとせられける。昔も此邊まで御屋敷の、紋が提灯目印を、おね家たるさぬの式。さう井川の吉兵衛様は此方がござい。何れでございます。一、やあしうない者、在宿ならは御急得たし、手紙が事は津田南助と申す言。一、さういふ御急得、その丹波の御家中、一いふにも左様。一、是れはさあ時と時、南助様ちやといふ。一、相合す時より聞くと、心半端平助の、みだりな御小屏風に、押してござい。有るの御し、御急になつては行

通れば、素知らぬ顔に手をついて、吉兵衛とようすは私、津田庵助様と申すは、つひに承りませぬが何用有つてか、能うこそお出で、私も療を病みまして、見苦しい商家、無禮は御免お茶上げませいと、落付いて、腰をするたる心の配り、「成程存じ召されぬ筈、手前初めて参つたは、ちとお身に尋ねたい事有つて。其の仔細は、身共が屋敷丹波の抱へ儀が鐵といふ者、一昨夜難波裏にて切り殺され、何者の業とも知れ申さぬ、此の儘に差置いては國の恥辱、若しは相撲の意趣切りのか、御身の商賣體なれば、知れまい物でもないと存じて」「ハハハ夫れでお出でなされたか、そりやもう憚りながら、強い御料筋違ひ、マッ第一負けても勝つても、相撲に意趣といふ事は、ない事でござります。殊に此の仲間で、喧嘩事が嚴い法度。又思召しても御覽じませ、相撲取が我儘に、喧嘩を好いて致さうなら世界に人種はござりませぬ」「ム、尤も、然らば今一つ尋ねたいは、お手前は近江の屋敷三島彌太夫に出入りすると、其の娘お才を女房に申し受けうと契約した兩助。然る所お才には、不義の男有つて勘當せし由、今にも顔を見合はすれば侍の意地、眞二つに打ち放さねばならぬ時宜。彼不義の男は、鶴屋の禮三と聞いた許り、つひに顔を見知らず、こりやお手前存じて居ぬか」「ハ、ノ、ノ、ノ、様々の事をお尋ね、相撲取と申す者は、大坂中の町人衆、皆彼方からは御存じなれど、此方に一々覺えませぬ。山伏の内へ來た様に、ちとお黠りでござりますか。」と、なほ押強う押しかこふ、屏風に女

房が胸ひやく、力あばいと身つゝ、古兵衛もはつと許り、「お侍様御救されませ、例の癖で俄の寒け、女房共羽織々々」と、身に引つけて、何處へ彼ら包み廻せし氣投ひ、顔も一曲朱槍の一腰居士衣の兩のさん切髪、古兵衛殿お宿にござるな、勇氣な這方と見受け、ちよ御無心に参つた者。拙者元は由緒の武士、浪人の世渡り、そと政した頼南指南、面目ないが尾羽を枯らし、差換への一腰賣りに参つた、例と求めて下されまいか」と、脇差前に指し置けば、是れはよみ餘蘊ない仰有様、御浪人のお睹み、定めて天晴お道具でござりませうが、町人の宿には宿に小判、人切の寓存でねば、町お買ふ様がない。……其の脇差許りは、此方が買ひつしやれにござるまじ。拵へは利にござるよ、心を算と目利して、お買ひなされて下されい。……心の目利は、私と不勝手なれど、左様ならば、ドレ、ちよと拜見」と我かゝる。……其の意込に顔白ひつしつゝ、三ナニと其の心を見ては、外の手へは、造られまいかい、イヤの。……替つた處に有つた脇差、……と、出所は氣に取らるゝ、氣に入つた買ひまじ。……其の脇差、雨助が買ひ申さう。……いつかお参成りませぬ、古兵衛殿買ひました。……代金になつて千兩の折紙。……三ナニ金がなくば買取りとしま、其の脇差は是れ美に。……と、小屏風くわらゝと引き廻しては、……ア何とする。……ア、町物のおはりに、女中其の小袖、此の脇に有つては、事の暇に成りさうな物、申改めず此の儘で買に取りたい。……ア、その半端は。……いやな

千兩、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

んだも、和女を連れて往なう許りぢや。俺はわれに惚れて居る、われは惣三に惚れて居る。定めていやで有らうけれど、斯う鱧が見入れてからは逃けてもにがさぬ、否でも應でも抱いて寢る。爰へおぢや」「アイ」「ハテおぢやいなう。」「アイ」「エ、とつともう悪いときに。」「あれエノ。」「も女聲、
「なんほ呼んでも吉兵衛は、爰らには居ぬわい。叶はぬ事ぢや、枕直して抱かれてぬい」と、根強う仕込む大蛇眼、逃さぬ門口吉兵衛が、戻りか、つて戸を叩けば、内に物音吹き消す行燈、明かぬは不思議と表から、踏み碎く戸の破れ口、互に探る暗紛れ、闇は黒白なし摺れ違ふ、手に觸つたる帯の端、すつはと切つて團右衛門、跡を暗まし逃げ失せたり。「吉兵衛様か。」「お才様か。」「帯解きひろけて、コリヤ何ぢや、手に残つたる男の帶。ム、エ、此方様はノ、禮二殿に添はさうと思ふ、吉兵衛をかはにして、こりや外に忍び男が出来たの、徒女郎、人でなし。」「サアノ、ノ、道理ぢやノ、此の言譯はおよつ様、出て下さんせ。」に、ぐわたく戸棚、錠捻ぢ切つて引き明くれば、「此方の人、運かつたわいの、最前の浪人が、わしを縛つてお才様に、無體の戀慕。」「ヤアノ、ノ、そんなら彼の浪人は兼て話の。」「アイ村岡團右衛門。」「叔こそ知れた、程は行くまい、此の道筋。」「詮議の近道逸參に跡を慕うて、三重迫うて行く。

第五

天満大川一飛びに、南のにつれ寺町筋、直には行かぬ圓石衛門、うねくる野道邊筋、真一文字に
 「オ、イノ、伴龍殿。」と呼んだは誰ぞや。「オ、吉兵衛でござんす。」是れは、大方彼の脇差の
 返事、金子才覺出来ましたか。「オ、其の約束の金子の代り、其元に買うて貰いたいのが有つて。」
 「ム、スリで脇差の體に、ソリ、まあ何をして是れと差出す體の體、ハ、ハ、ハ、伴龍殿、是れ許りは
 此方が買はにや成るまいかの。」「ム、如何にも買はうまい。」ハ、ハ、ハ、體は千兩、此方の胸に貯へた、惡
 事の算用受取ろかい。「オ、何にも覺えない」と振切つて行く朱輪の鑰、しつかと取つて、車轂
 な伴龍、代物を見て返事もせず、こりや何處へ行く。「オ、其の代物所望にない持つて歸れ。」といつ
 かないつかぬ、しかけた出入は互の命、其方へ賣るかこつちへ買ふか、三寸組板巧の口ばれ目、一放
 ぜ。「放さぬに強氣と不敵、手練の當身にうんと許り、土地の癖に身にかゝり、足踏もつる其の
 隙に逃けてもどつこい逃さぬ。」ハ、ハ、ハ、伴龍は急の用事、退いて通せと、かけ出す、向うへ
 廻つて又取り付き、彼奴も一世の大事の奥の手、圓石衛門の伴龍に、一寸ひかぬ男の體、右へかは
 せば右に立ち、左へぬければ引き戻す、互に大洋たら、おろ、腹に、かへ、ふら、ふら、投げて

も踏んでも放さばこそ、さしもの手者もて餘し、一度にどつかり地響きに、一息ほつとあぐみし面
色一掬々丈夫な魂な男、凡そ劍術一道には、誰こはい者なけれども、お手前が土性骨には伴龍も叶
はぬ。畢竟が元は此方から、仕懸けた出入の鵬鷲返し、是れで五分々々といふ物。其方の脇指のこと
も、此方の帯の詮議も、口外へ出さねば濟む事、もう料簡して歸りやれる。それともに聞き分けなけ
りや、手跡は全見の通り、此の度は吉兵衛、わが命がないぞよ。もう是れ限りでサア／＼歸れ／＼。」
と、言ひ捨て立ち上れば、「イヤ／＼、天満の吉兵衛が出入しかけて、病犬の棒に逢うた様に、逃げ
吠えにしては立たぬわい。殊に相手は劍術師、ぶたれてすご／＼戻つたというて、どう此の顔が出さ
れうぞい、もう何もかも外の出入は取り置いて、こなたに打たれた此の顔を立てにやならぬ。猶金輪
際付き過ぎて、此方を殺すか、おれが殺されるか、二つ一つぢや。命は始めから投げ出して有るわい
の、サア／＼／＼殺して下あれ、殺してもらを。」と、胸打ちたき、赦さん氣色はなかりけり。「ム、
成程尤もぢや、お手前を殺せば、身も下手人、何の益に立たぬ事に、互に命を果す道理。併し身共に
打たれて、此の儘に歸つては男が立つまい。何と命を捨てずとも、男の立つ仕様はないかい。」「一札
が貰ひたい。」「ヤ。」「イヤサ町人出入は、高が相手を誤らしてさへ戻れば、何處へ出ても男は立つ。
命が惜しくば伴龍、誤り證文書いゝ貰はうかい。」「ム、ばて味いなせりふに成つたな。投げられて、

誤り證文取るとは、神代の昔から聞かぬ事ぢやない、それで腹の癒るこゝない、何うなりとせうわい。」
「左様無うては叶ふまい、サアちやつくと書かれい。」と腰の矢立ちも磨き込み、十三夜の月明り、
心の曇り墨黒に、誤り證文件の如し、澤田伴龍と、書き認め差し出せば、懷より取り出し、合は
ず證據の一通、一筆、墨色筆法紛ひもない同筆、御約束の通り備前長光の刀、追付指はし可申候、一
原九平太殿、村岡圍右衛門より。」「ア其の状は。」と取り付くを、一當あてて尻引突け、また立ちか
かる伴龍が、腕首ちつとも働かせず、刀の盜賊圍右衛門、九平太方へ長光の刀賣つてくれいと頼みの
状、使に立つた鐵が獄、死骸の傍に落して有つた汝が手跡、此の手と比べて見たい許りに、投げられ
てやつたのを、誠と思ふが汝が天命。西國江戸方の關取と揉んで來た此の體、うぬらは小指にも足る
物かい。お才殿の戀の意趣。禮三を殺して仕廻ひたがる巧みの一々、ひつ括つて屋敷へ連れ行き、何
も彼も白状さす。覺悟せい。」と、睨め付ければ、破れかぶれと村岡が、差し込む腕、合點し、飛いでど
うぞ車投げ、朱鞘の腰引つたくれれば、それ遣つてはとしがみ付く、ひはらをはたし置の當、うんと
鉤る、其のひまに、月に兎く刃の光、鉤の影物は、お才殿の咄に違はず、まろく是れが備前長
光、へい、忝し／＼と、おし戴き押し戴く。所の大勢物音に、暗嘩々々と立ちあがり、一、二、三、
端ちつても當方が最期、爲さならぬ。千羽川の吉兵衛が、暗嘩の立引見物せい。此奴は投々證文の

有る奴、連れて往んで活を入れ、しごいて存分言はせにやらぬ。天満まで付いて来て、立引の譯見で置け」と、腰にほつ込む長光の、刀の詮議伴龍が、帯の前がはわが帯に、しつかと握る證跡は、隠れ紛ひも大坂に、男の生粹關取の、天満をさしてぞ

第 六

中居衆々々々、中のしやぎり打ちやんで、全座付が始まつた、棧敷は西の二三の續き、東の五の下孫の出共に、五組のお客様方へさう申しや、火鉢は好いか煙草盆と、喚けば奥より中居のお品走り出で、「す、庄七殿喧しい、しやぎり打ち切つたも知つて居る。それでお出でと言ふけれど、これ藤江は何故來ぬ。あれほど約束して置くに、不參が有つてはならぬというて、最一度せきに」といふ中に、奥より出づる長崎客、刀提は「コリヤ／＼中居、顔見世見るとて一人は見られぬ、呼びにやつた女郎は來るか。」「サアお前の仰しやる新造様は、奥に來て居さんす錦さんと、是れにごさんす桂さん、跡の女郎様方は、皆前からの知れた顔。錦さんは曲輪からお出でたが、若し西でのお馴染かえ。」「いや西にも東にも近づきはなけれども、身共がのぞむ女郎は、是れまで勤めした者ならず。」「そんなら錦さんでもなし。」「エ、愚圖々々と隙がある、藝子はまだか、何故急に呼びにやらぬ。」と、ぼち／＼

はざる山出し炭、憤り散らせば、「御せよ、最う／＼安へ」といふ間もなく、里に名代の藝子の藤江、いきせきと来る上り口、「そりや藤江さん遅かつた、座敷はらん、御機嫌直すお習者はお前、マアお薬箱から上げませう」「マゝ／＼、今日は北の葉七平で、きよのこゝだ蕨野、蛇のやうな、藝子様に引きとめられて酔うたわいな」「マゝ藤江といふは其元か、持ち兼ねた／＼、墨絵の名人と有る、サア／＼見たい、三味線が聞きたい、尺八が所望、舞が見たい」「マゝ、せしな。其のやうに一時に如何なるものぢやないか」「マゝ、なんは藤江さんぢやなくて、そりや最う八人藝の座頭でなければ、いかにぬこと」「この中居共は、身共が言ふ事一つも用ゐる。拙者が所望する事、何故事難する」「マゝ、これ叱りないな、其の様にむしやくしやと云ふ腹には、紅葉かなかすコノレ／＼、それ、あまべとお問致しました」「マゝ、錦し、藤江さん能う来ておくれた」「マゝ、桂さんの御機嫌痛み入りとぞ。錦さんは如何ぢやないか」「マゝ、足れもいんまに、れしいなづしぢやわいな」「そんなら又お寄が、やしきしもしぢぢやあろ」「何の事ぢや、長崎でも何かの病者、こりやおん共が事請ゐのぢやないか。いづう心に障るわい。」「なんの左様ではないわいな。とかく座敷で可いば、餘所の可愛い色事暗、幽生も長であろ」「此奴、三味線は弾かず、影繪は見えず、踊りばせず、長であろとは、身共が鼻毛でも笑ふのか」「其の長とは何のこゝろ。」「マゝ、夫れよな、且長やれ／＼、花のお江戸は兩國橋とつ、白い手拭

横長であろ、長の因縁かくの通り、とほしやれノ、」「問ひましよノ、」「何なと問はしやれ、」「お客はお客に」「はんこでござんす。」「藝子はノ、」「ば、様ノ、」「中居はノ、」「か、この色ごと、よいこのノ、頼政は、朝を替留めて御様嬪を、直す藤江が口車、打連れ奥へぞ入りにける。行燈居限る時分より、忍ぶ徳三が戀の書、錦が揚けは是代屋の、瀬戸半ばに寫ふ素振、内を覗いて小手招き目早く見付くる中居のおさか、門口へ走り出で、」「徳三様、お前のお出では合點、錦さんも私が所へ今日出初め、御用が有るならわたしが呼ば、」「お入り。」「と、取持ちぶり、」「お、其の事でちよつと來た、今夜逢はねばならぬ事、爰の客は一原九平太で有らうがの。あれには逢はれぬ、首尾を見て此の文を、錦にそつと渡してたも。」「と、背中をびつしやり、頼む者よめたのもしきは、さすが所に住めばなり。」「徳三は門を辟き、忍ぶに目立つ大提灯、北よりと書く嶺原より、起つ子這ふ手に嘲められて否にはあらぬ岩川も、心いきせき足代屋の、門で見合はす顔と顔、」「や、徳三様ぢやないか。」「す、治郎か、お前を尋ねて漸う爰まで。」「聞きや錦さん來てぢやけな。」「ア、其の事は隠して居るに。」「されば錦様を斯うせまい爲、私が心を盡したも水の泡、彼の人に勤めさしては、俺が顔が立ちませぬ。」「「サ、ノ、尤もぢやノ、あれも長う勤めさすでもない。」「其の魂膽が猶氣遣ひ、是非今夜は連れて往ぬ、お前もごんせ。」「と手を取れば、」「イヤ其の客といふは、日外の一原九平太、おれが往てはむべか

しい、どうぞ應^{おこ}れて行きたいが、」「夫^それならわし^が仕^し儀^ぎが有^ある」と、幣^{へい}尺^{しち}合^あはぬ長^{なが}持^{もち}籠^{かご}、人^{ひと}目^めを包^{つつ}む
黒^{くろ}綿^{わた}繻^す、頭^{づつ}巾^{きん}も額^{かぶ}へすつほりと、さながら假^{かり}著^{ちやく}と見^みえにける。「……お出^でで」と、門^{かど}口^{ぐち}へすつと入^い
れば、座^ざ敷^{しき}廻^{まわ}りの庄^{やう}七^{しち}二^にやれ珍^{めづ}らしい關^{かん}取^と様^{やう}、三^{さん}樓^{ろう}お出^ででぬので、南^{なん}風^{ふう}も吹^ふかぬがまじ、「吹^ふ竹^{ちく}ぼこ
そ出^でて來^きやんした、客^{きやく}衆^{しゆ}一^{いっ}人^{にん}連^{れん}れて來^きた、何^{なん}處^{どこ}ぞ座^ざ敷^{しき}が明^あいて有^あるが、」「ア、小^{せう}座^ざ敷^{しき}が明^あいてござり
ます、……是^{これ}れへ、まゐお上^{あが}り、」お供^{とも}ほどこへちや、「……」供^{とも}は芝^{しば}居^いへつたに、「へい、い
申し、あなたは何^{なん}方^{かた}でござりますと、聞^きはれて早速^{さつそく}の出^でぬ岩^{いわ}川^{がわ}、」とあれは江^え戸^こ方^{かた}の關^{かん}取^と家^けぢや、
「ア、是^{これ}は法^{はふ}話^わかと思^{おも}うた、して彼^あ方^{かた}のお名^なは何^{なん}と申^{まを}します、」ア、貴^き様^{やう}、此^こは關^{かん}取^と知^ちぬか、リ
リと氣^き味^みい、おれが太^{たい}閼^{くわ}の里^り見^み山^{さん}ぢやれ、……、いつやら此^この關^{かん}取^とが、彼^あ方^{かた}の手^ての紙^しを拜^{はい}
つてお出^ででなされたが、おテ見^みると聞^きくとちやな、「……」ア、惣^{そう}別^{べつ}相^{さう}摸^も取^とは著^{しやく}顯^{けん}りがする、おれで、
練^{れん}になつて、まほしおかしやると土^ど俵^{へう}、はい、……、見^みてたいな」と暴^{はつ}動^{どう}なさぬ相^{さう}摸^も取^と、とられてこの
こい庄^{やう}七^{しち}が、崎^{さき}廻^{まわ}りの有^ある源^{げん}太^{たい}様^{やう}、我^{われ}等^らは三^{さん}品^{しん}直^{ちく}遊^{ゆう}段^{だん}、迷^{まよ}子^し即^{すく}ち里^り見^み山^{さん}、能^{のう}、信^{しん}た事^{こと}ぢやと打^う笑^{わら}ひ、
うち連^{れん}れぬ軟^{なん}、浮^うれ行^ゆく、今^{いま}宵^よにこゝで睡^ね木^ぎが、練^{れん}と義^ぎ理^りとに引^ひかされて、二^に度^どの如^{ごと}く、角^{かく}の鳥^{とり}、座^ざ
敷^{しき}はつして御^お手^て口^{ぐち}、這^わひ出^でる、……、陰^{かげ}から膝^{ひざ}江^えが走^{はし}り出^でて、……、關^{かん}さん、關^{かん}君^{くん}のいた、お
が疑^ぎの託^{たく}け、最^{さい}ア座^ざ敷^{しき}がなかつた故^{ゆゑ}、大^{だい}事^じにかひて待^{まち}つて居^ゐた、……、亮^{りやう}爾^に又^{また}お知^ちこと、お出^です、

に飛び立つ思ひ、「コリヤまあ誰が持つて來たえ。やつぱり直に禮三様。」門口覗いて、是れはしたりと尋ぬる中に、小座敷より頭巾羽織で立ち出づれば、はつと悔り立ち寄つて、「ヤアお前は何時の間に。」
「コレく藤江主、若し次郎が尋ねたら、此の狀渡して先へ往んだと言うて下んせ。」
「そりや禮三様取つて居る。」
「わしも奥から尋ねてなら。」
「そこらわしが左平次で。」
くろめる中に奥より、「藤江藤江。」
「ア、何處へ隠つう。」
「所も幸ひ蒲團にくるく、衡立の、障子くわらりと一原九平太。」
藤江、「ア、何處に何して居る。」
「イエ爰に顔見世行きで、臺所に人氣がない故張番してをりまする。」
「ハテ實氣な者ぢやなあ、鐘めがをらぬ故、夫れを尋ねに爰へ來た、新町から南まで、附け廻はつて惚れぬく九平太、夫れと同じ様に附き廻ふ蟲が有つてと、叶はぬ物は金銀といふ物におさへられ、蟲めが動きも這ひも得せぬ、氣味のよい事ぢやないか、」
藤江、其の金の有る黄金蟲より金が舞うて泣く蟲が其處邊にをらう。」
立ち寄るを、「チアントザン、」
鐘に恨みが數々ござる、初夜の鐘を撞く時は、是生滅法と響くなり、後夜の鐘をつく時は、寂滅爲樂とコレ何ぢやぞいな。」
「イヤ此の衡立の内へ。」
「ア、滅相な、コリヤ私が商賣の景繪の樂屋、見せることはならぬぞえ。」
「フウ衡立の景繪見たい、火を赫と燈して見せい。」
「ハイ、お目にかけまする景繪の始まり、餘り近いと見えが悪い、必ず樂屋を覗くまいぞ。」
斯う火を燈して致しまするが、梅が枝の無間の鐘。」
「其の歌おれが

「謳うてやろ。」二八十六で文付けられて、二九の十八でつい其の心「人の心もしらいで、面白さうに飄ひくつさる。」「おれが飄ぶが氣にいらぬか。」「コレ間がぬけるわいな、ま、それよ、奥へ行くは錦様ぢやないか。」どれ／＼何處にと立ち上れば、火を吹き消して、「もう仕舞、アア是れぢやわつさり、お品殿、おさが殿、香ひ直さうでは有るまいか。」「よかろ／＼」と、無理やりに、押し立て装へ連れて行く。此の間にもやつと小座敷へ、取様に相應な、相手は手取の錦島、騎手對氣の土俵入、化粧紙まで氣を付ける、行司役やら頭取やら、存中の元けた古禮古、調子合ふたる三味線の、身に引きかけるぞ頼母しき「中居共々々々、錦は何處へ、此の九半太が目をぬいて、勘當受けたならすめを取り連れて、汝が懸の申立か、此の小座敷が勘當い」と立たんとするを、ア、申し、お前は誰うてこそののか。一後の様なこと酒で酔ふ様な俺ぢやないで、アア誂高に仰しやるので。なんで彼處に人が居よ。」一す、居るか居るか此の羽織にと引つたくなり、屏風ぐわたりと引き開くれば、奥にはあらで太前髪、江戸張の銀煙管、煙輪を吹き窓囀き、くつ／＼と吹き出せば、さしもの九半太惘り仰天俄に目をする千鳥足「是れは、龜田千萬、酒を食べ過して、思はざる不訓法、御免なれ／＼。」一いや最う苦しいござりませぬ。」一「アア／＼お氣に障つたら眞平々々。」一「ア助當と受けさせず、元來人様に蟲と言はれた事もなし、又蟲で有らう理窟もなし、アアそんな物ぢやござんせぬか。」一左様とら

「いや最う安へ見えなす」といふに錦は、「次郎吉様、まだ話したい事がある。後に／＼」と行く跡へ程なく出て来る田舎客「是れは／＼珍らしい。」二、立ち出づる顔見て憐れ、「うエ、お前は浄久様。」「アアこれ／＼、常住急な所でお目にかゝつた故、見忘れも尤も。變つた所で變つた形、好い年して頼成買ひに來た親父、其の女郎は北野屋から出る新造。此方衆夫婦の志が、あんなり忝きに、外の客には買はずまい、俺が身受する心で、今來て様子を開けば、動めて居るは頼成。買ひたい女郎は安には居ず、此の金もいらぬ物、勘當した符めに金やらう害もなし。」コレ次郎殿、花に貰うて下さぬか。一扱はそんなら此の金で。」「いや／＼おれは何にも知らぬ田舎大衆、おれが事より彼奴等が、息災で居る様に、朝々斬る此の数珠の力にも、叶はぬ物は國の掟、其が獄が殺されたら、國右衛門が業とはいへど、喧嘩の相人はやつぱり座。町人が人を殺しては、是いか疾いか風の前の燈火、爰らにふまひしてやつたら、淺ましい死をしをらうと、夜の目も合はぬ因果な長生、古來稀なる大盡客、どのほが可愛ければこそ、厚かましい此の厚疊。何事も次郎吉殿、頭に免じて頼みます」と、立ち上れば「そんなら最うお歸りなされますか」と、庭へ送りの駕の者「次郎殿づらば」何事も言はぬ色なる山吹色に、融殘して立ち歸る。親の情は身にしのど、人を殺せし罪科は、遁れぬ體三郎身の覺悟、奥より中居が走り出で、「わしや先刻にから出たうても、咄がしゆんでひかへて居た、體三様からお聞

「此の文、藤江様から頼まれた。」と、開いて見るより「是れはしたり、何時の間に往な
しやつた、エ、読ばす事が有るに、イヤとの間も斯うして居られぬ。わしや北野屋へ往て来る間、
錦様に此の様子戻つてから咄しましよ、つい行て来う」と岩川は、やび勇み出でて行く。錦は文を見
るよりも、有るにもあられず走り出で、忍ぶ禮三を見付けしより「エ、お前は聞えませぬ、何でわた
しを振り捨てて、死ぬる覺悟の此の言ひおき。」と、言ふ口おさへる折こそあれ、藤江は三味線持ちな
から「コレ錦さん、誰ぞ来るなら知らして上ぎよ。」と、座敷紛らす三味太鼓、「す、やかましくうて、一
つも咄がならぬわいな。」ヲツト心得すぢかひ身、合はす調子の締調べ、「アイノ、それ錦さん、呼ぶ
わいな。」ちやつと吹き消す燈火の、紛れに脱ける禮三郎、外からびつしやり暇ど、はなれぬおもひ胸
の中、闇の錦も諸共に、脱けて出る氣を吞込む藤江、二階から見る九平太が、鬼の目をぬくらがり
に、潛戸ぐわらり、「ハイお尋ねなさる、は二三軒西でござります、能うお出でなされました。」

第七

町の名も、鰻谷とて長堀を、少し南へ入口も、間口も狭き裏貸屋、かつて鶴屋の禮三郎と、名前は
有れど外を家、留主は郷の須賀市が、見る目は無うて嗅ぐ鼻と、聞き耳立つる門の口、葬禮灰りの往

種ため付け、我が家へ歸る禮三郎、「須賀市精御苦勞々々々」「お歸りなされたか、きつう
遅ござりましたな」「さればいた、他宗の葬禮といふ物は、隙が入つて悪い物、外なれば行かぬけ
ど、家主の葬禮に、さながら病氣も遣はれず、せう事なしに行きとした。そつやせうと留主の内に
も來はしましたんたか」「來た段でござりませぬ。道頓堀の北野屋の者ぢやというて、三四人の聲
がして、押入を明ける音、其處邊内をもんど返して往なれましたが、あのやうに如何した事でござ
りますか」「サア如何した事やら、あそここの奉公人が關落したとて、今朝から夫れて丁と三度、私がし
た事の様に迷惑な事でござんす。此の奉公人も何處に行つてけつかんやら、寧ろ返へうで上ると、
是れ駐わしも案じぬ。「よしやうしや」此の御、引きしやとるやら引き切るやら、見ぬ座頭
が「イヤもう日暮さうな、内にまた精古人が待つて居られう、どお申しましよ」用が有るなら、
何時なりとお呼ぶなされませ。と、我が持持を協會にして、とくく歸へ立ち歸る。跡に「がづつ
くりと」一個いふ通り、尋ねに來るならは、内は首尾能う出た物が、如何して今まで坐ぬ事」と案じに
暮れる。其の間、いと一物憂き一つ、無常は難所、こころくと、石と金との相性が、あらば火葬
る火簀箱、付木に付けて行燈に、燈す火影の明り宵、入口の石と金との、さうな案じの跡には、
稽古の音々高々。浮名をながす江川、流れに流る捨小箱、つながら縁は是非となつ、徳助の

か母波屋の、更に通ひのかねごとも、昨日も今日の飛鳥川「アノ歌は古手屋八郎兵衛、友達の香具屋を戀の意趣で切つたといふが、又腹も立たうかい。蝶よ花よと樂しみに、思つた色を盗まれては。是れを思へば錦木めも、昨夜内を出ながら、今に於て來ぬからは外に心が。エ、左様いふ根性とも知らず、親にも身にもなへたのが、口惜しいわい、無念なわい。一、妬みの銅研ぎ立てて、我と身を裂く鰻谷、堺筋より半町も、錦が尋ね夜の道、濱邊も果てし長堀の、人目を包む頼冠り、しめる門の戸叩き「辛爾ながら、禮三様の所は内方がござりませぬか。」と尋ぬる聲は錦木かと、出でんとせしが、「誰ぢや／＼、そんな人は此方ぢやござんせぬ、何處ぞ脇を尋ねさつしやれ。」「左様言はしやんすは禮三様ぢやないかいな、コレ私ぢや、わしぢやわいな、ちやつと明けて下さんせ。」「何ぢや、私ぢや、す、どうで驚か驚か、爪の長い猿松め、猫め、畜生め、エ、おのれは／＼、憎やな。」今宵のうちにやつきの／＼切り殺し、浮世の夢を絞聲の、鯉口寛け落しざし、早初夜の鐘指折つて、「コレイナ明けてくれんのかいな、人が見付けりや悪いわいな、コレ禮三様、何が腹が立つぞいな、／＼。口舌所ぢやござんすまい、昨夜の揚子は足代屋の、出られぬ内を漸うと、藤江様の情にて、出る事は出てもお前の内、爰とも知らず／＼と、尋ぬる内に夜は明ける、どうも仕様は中橋の、知るべの方に今日の目の、暮れるを逢瀬と待ち兼ねて、尋ね迷うて來た物を、聞えぬわいな。禮三様、思ふに違ふお

詞にと、言ふ間も疑ひぐわらりと聞き二す、そんな事とは知らず、昨夜約束した通り、二人一所に死ぬる覺悟で、先へ戻つて待つて居れど、わが身がおぢやらず、内よりは一度三度、家探しに来る上、飄落したに違ひはないが、今まで愛へ来ぬからは、如何で外に心が有つて、おれをすつほりつたかと、腹が立つて恨んで居たが、今のお聞いて、「疑ひは晴れたかえ」といふ、其の心底を聞く上は、アマア上りやうと入口の、戸をびつしやうと滑り込む、今言つた中、心にかゝるは其の知るべの方から、若し知ればしまいかの、「いふやうをりや、氣遣ひして下さんな、もし又そこから知れてから、明日まで待たぬ私が命、お前の覺悟は如何ぞいふ」と、怒めか、もし女郎花、涙は膝に賣く路の、いづれ葉なく見事にけり、「何の夫れに急押す事、岩川や千井川殿が、種々と心を盡して下さるれど、昨夜わがみにいふ通り、鐵が鎌を殺したる此の通り、すりやどうで生きて居られぬ身の上、が兎角心にかゝるは親父様のことはかり、夫れで吉兵衛殿や、岩川へ頼みの書置、愛で死んではおのの上塗り、大坂の町を離れて、濱の寺まで行て死なう、用意がよくはり、おぢやうと、手を取れば押し留め、アマア待つて下さんせ。」と、待つていふやうは、心でも變つたか、「何の心を變りませう、さうさう左様ではなけれど、お前と夫婦に成りたいと、思ふを勤めの掣しみに、蘇した申渡りなす、命やせつて今宵の半時を、千年も添ひし心にて、ほんの男ぢや女房ぢやと、徹底く眞似て水波む真似、世

帶する襦袢して死んだら、未來の迷ひに有るまい。」と、さすが女のくどくど、いふも涙に紅
 の、錦あやなす諸袖に、いと魚添ふばかりなり。」と、むち／＼、左様思やるなら、わしも共々手傳
 ふ程に、飯しかけて焚いてたも、幸ひ今日は親父様の誕生日。ア、是れとでは不孝の仕續け、せめて
 女夫が煮笑きして、陰の膳なと据ゑるなら、夫れが此の世のお暇と、涙隠して押入の、米取り出
 しててがへし、洗ふ衛まへしらの米、しなく下りるはしり元、とぎ流したる白水は、顔に懸とろ
 白粉の、解けて涙の炊ぎ水、夫は燃す釜の下へ申し旦那さん、飯盛るものが有るかいな。」と、あの
 人はせはしない、まだ出来ませぬうちから、ソレ押入に茶漬茶碗が一つ有る。「アイ」といふまゝ、取
 り出す、錦模様の染付も一、穢な、ヨリヤマア何時洗うたよ、おやいな、ほんにやもめといふ者は
 あた白墮落な」というて見る、心が眞の女夫ごと。「ソレ飯が焦け臭いぞえ。」オット合點、燃え杭を消
 やす此の身も消ゆる身と、いへば錦も顔見合はせ、又も涙に咽びしが、「ア、我ながら愚癡な事、ソレ
 あらいけのさめぬ内、釜から直に盛つてたも。」と、机の上に白紙を、敷いて供へる陰の膳。「御誕生日
 の御祝儀日出度う上つて下さりませ。親父様母人様、是れまで一日お心休める事もなく、親に先だつ
 不孝者、其の上様な死も致しませぬ。憎い奴と思召し、必ず泣いて下さりますな。此のうへに歎きを
 かけ、お身のいたみにもならうかと、夫れが悲しうござります。」と、夫が歎けば妻は猶「わしも在所

に二人の父さん、年寄といひ日は見えす、去年祭に見えた時も、練物に出るわたしが、髪切つたと聞
いてさへ、あられぬ姿と泣かしやんした其の時、イエ／＼、無事で居りやこそ此の様に、お健な顔を
見ますと、諫めた私が先だつて、刃にかゝり死んだ事、在所へ知れたら嘘や嘘、歎きの程が思はれ
て、悲しいわいのと伏しまるふ、心の内ぞ遣る瀬なき。せめて名残に一筆と、硯に向ひ書る程の、
こゝとや誰も招かぬど、まだ盡き果てぬ親子の縁、錦が親の手を引いて、そゝ／＼花野屋七兵衛が、
戸をほと／＼と打ちたゞき、七兵衛でござります、ちよつと明けてしやつて下さりませといふ聲聞
いて二人は恠り、そのや親方がちよ、どうせうぞ、まあ交へなと這入つて居やと、水鏡は無禮に押
入の、押入打返せと三郎、俄に作る最悪な聲、ちよちよ、ちよ寝ました、一々七兵衛でござります、
御無心ながらちよつとお明けたされて下さりませ、と言ふに存と、不承々々、戸口開くれば、ア
ア是れはもうお休みなされましたか、一々誰ぞと思へば七兵衛殿、ア、夜夜申見ましたのは、定めて錦
木が、「ア、申し／＼今夜は揚げでござります、コレ安に居られますは、錦木が親父殿で、そゝ／＼
何も驚きなされませす事は、此の親父殿は目が見えませぬ、其の見たぬ目をして、娘が錦が見たいとい
うて、日の暮れに見えましたれど、錦木は揚げで内には居す、折悪う今夜は病人が入院有つて、此の
親父殿をなさす事がござります、夫れで近比御無心様ながら、今夜一夜さ、何半親父殿を、お初め

内に寐^もして貰^{もら}ひましよと存^{ぞん}し、ハイそれで連れて参^{まゐ}りました。」と、聞^きいてはつとは思^{おも}へども、氣取^{きど}られまいと素^す知らぬ顔^{かほ}こそ、易^{やす}い事^{こと}、幾^{いく}日^かなりとも泊^{とど}めて下さ^{くだ}りますが、やレノ、嬉^{うれ}しや。」「サアサア親^{おや}仁^に殿^{どの}上^あしやれ。オット危^{あや}い、とほノ、んふまい、ドレノ、手^てを引^ひいて進^{しん}ぜう。」「ハイノ、親^{おや}方^{なた}様^{さま}、段々^{だんだん}お慮^{りよく}外^{がい}様^{さま}でござります、ア、何^{なん}方^{なた}様^{さま}ちや存^{ぞん}じませぬが赦^{ゆる}さしやつて。アイ今^{こん}晩^{ばん}はおやかましうござりましよ。」と、怖^{おそ}々^々するに禮^{れい}三^{さん}郎^{ろう}、「イヤノ、其^その様^{よう}に氣^きをばらすと、ゆるりとしてござりませ。」「ハイ。」「いやコレ親^{おや}仁^に殿^{どの}、貴^{あな}方^{なた}はすつとお心^{こころ}安^{やす}い程^{ほど}にゆるりと思^{おも}うて。」「ハイノ、アアいかにお世^せ話^わさまでござりまするな。」「ンノノ。」「いや申し、然^{しか}らば私^{わたくし}は。モ歸^{かへ}りましよ。御^ご面^{めん}倒^{たい}ながらお頼^{たの}み申し上げます、長^{なが}居^ゐしたらどうやら、重^{おも}井^ゐ筒^{つつ}の火^ひ燵^{だん}の段^{だん}が。イヤ禮^{れい}三^{さん}様^{さま}ちよつとちよつと、あれまでお目^めに掛^かりまをう。」と、作^とひ表^{おもて}へ立^たち出^いづる。マアお前^{まへ}にお覺^さげますことが有^ある、叔^こ錦^{しん}が立^{たて}金^{きん}は受^う取^けつましてござります。」「ム、そりやマア何^{なん}處^{どこ}から。」「イヤ岩^い川^{がわ}殿^{どの}から受^う取^けつて清^すんで有^ある事^{こと}は知^しらず、昨^{ゆう}夜^やから見^みぬ錦^{しん}、それでこれ此^この年^{とし}季^き證^{しやう}文^{もん}を、お前^{まへ}へ渡^{わた}さうと思^{おも}うて持^もつて参^{まゐ}りました。立^{たて}金^{きん}が清^すんだからは如何^{いか}せうと、お前^{まへ}方^{なた}の心^{こころ}の儘^{まま}ぢや程^{ほど}にサア、死^しないでも濟^すむ事^{こと}なら、というて止^とめても鐵^{てつ}の、綱^{あみ}の中^{なか}へ入^{はい}つても、死^し神^{じん}といふ物^{もの}が付^ついては人^{にん}間^{げん}の力^{ちから}にや及^{およ}ばぬ。私^{わし}も北^{きた}野^の七^{しち}兵^{へい}衛^ゑといはれて、島^{しま}の内^{うち}で顔^{かほ}の賣^うれた者^{もの}、人^{ひと}の命^{いのち}を取^とりとめる事^{こと}なら、縱^{たと}ひ立^{たて}金^{きん}取^とらいで

も、奉公人に涙もかけぬ、意にも著せぬが、彼の親仁殿、爰へ連れて來たの許りは思ひにきせねば、レ目の見えぬ人が、うろつかしやるのを見ては、いかな氣の強い死神でも思ひとまらにや成らぬや。ナ申し、必ず／＼禮三様、是れ云はうばづかりに。イヤもうお暇申します。ウ／＼親仁殿、往にさぞや。」「お親方様、お歸りなされますか、そんなら申し、夜の内でも御が歸りましたら、御りながら知らせなされて、一時なと早う御が見たうござります。」イヤ、それやそれや、屋敷次第知らせませう、禮三様、早うお休みなされませ。」と、櫛を殘す情の密實、切りはなれよ親方に、別れて禮三も内に入る。其の間も侍たす有難押し退け、震んで出づるを禮三がと止め、逢うては悪いと仕影と身振、布圍を口に押し當て／＼、泣聲懸す心づかり、此方は何の氣もけかず、申しは那様。」「イヤ、何ぞ進ませうか。」「イヤモウ何時でございませう。」「さればもう四つ半にも成りませうか。」「運道ないて、定めてお草臥れ、どれ寢所をして進ませう。」「イヤ、申し／＼、御勿體ない構はしやつてござりますな。遠い道を探りまうて参りますら、殿に逢はうと思ふ業々、情じうて／＼、寐たにて中々目も合ふこつちやござりませぬ。」「申し／＼何時でござりませうな、今夜はむしろに我が長い、ア、早く夜が明けてほしい、ちやつと逢ひたい。」「ござ、今宵は御の命と、知らず明けるを待ち兼ねる、親の心ぞ哀れなる。魂は御體なき内と、書き残したる親和、筆取りおされはいと。猶、涙

にむせぶ泣聲を、隠す體に咳拂ひ、「レントマア親仁様、袖の振り合はせも他生の縁とやらで、斯うした若い者の、お年寄を泊めますれば、わたしはもう親と思つてをります程に、お前も子の所へ來たと思つて、心安うなされて下さりませ。」是れはマア勿體ない事おしやまして下さります。お前様方に其の様に、結構にいはれる親仁めぢやございませぬ。在所者なり日は見えず、したが今日を喰ひ兼ねは致しませぬ、その喰ひ兼ねぬも娘が陰、マア聞かしやつて下さりませ、十年許り跡までは、長柄村でどもかうとした百姓でござりましたが、ふつと目を煩ひまして、身上有り切り打込んでさうとう言に成つて、途方にくれて居りました所を、今北野屋にをります姉が、新町へ勤め奉公に參つてくれまして、其の給銀を莊屋殿へ預け、月々の利足を取つて、夫れで私が樂々と喰はれるやうに成りました、眞に彼の様な孝行な娘は世界中には有るまいと思ひ出す度には、旦那様涙が零れて嬉しうござりました。夫れで一日成りと早う勤めを引かしたいと存じましても日は見えず、錢儲けの術は知らず、思ひ付いて去年から按摩取を致します。コリヤ私が身の冥加、是れも娘が顔の汗れる事ぢやと思つて、あれには隠してをります。や眞に些と肩揉んで上げましかい。「ハイ、そりや添うござりますすが、そんなりや御苦勞ながら、肩よりは此の手を、コレナ此の手をお前のお手で、ぶつと握つて下さりませ。」と錦木が手を持ち添へて、出せば此方も指し寄つて、「ア、お手が痛みますか、お安い事、揉んで

上げさせうとち、ドレノ、お手を、デモ制かな尋常な、丁度女のやうなお手おや程にの。」イヤナニ
親に様、例とマア人といふ物は何時知れず、老少不定と申しますれば、かういふ私が明日死ぬのやら
知れぬ命。若し死んだら、是れが此の世の暇をにも成りませう程に、手先をおつと。ア、旦那様に
んけな事いはしやりますわいの、其の様におつしやりますと、心細うて成るこつちやござりませぬ。
地體此の間は、夢見が悪うて案じてをります上、大坂の茶臼山で心中が有つた、イヤ太左衛門橋では
切つたの、彼處では突いたのと聞く度々に胸がひやく、もし締めではないか知らぬと、それで案じ
て参りましたが、親方様の健々とおつしやるので、ア、縮とやと落付いては参りますれど、ア、今お
つしやる老少不定、ひよつと姉が煩うて、私より先へ死んだら、この親は如何ぞうと思ひますれば、
俄に悲しう成つて来て、御救されて下さりませと、涙を拭ふ紙の、海老親手の契りかと、物いひ
たさと悲しさに、姉は胸も張り裂く思ひ、布圍に喰ひ付きしがみ付き、朝顔涙に伏し沈む、心と思ひ
やられた。三三三をつけ、はつと三三三が氣もさうろ、書置ひとつに手ばしかく、「申し親に様、
私は此の世がござりますは、更けましたけれど、ちよつと近所まで注ぎさうとす程に、もし留守の
中京飛脚が来ましたら、此の状役して下さいと、いふ申御を引立つて、更に近所立つ足ら、
なく、三三三にいさなはれ、出づる口は死出の門、是れが親手の別れの涙、思へば親に保る兼ね、

わつと許りに泣く聲の、血筋の肝に徹てや、「今のは慥かに姉が聲、コリヤ娘よ、何處に居るぞいやい。親方の詞といひ、先刻にからの様子と言ひ、何で親に隠れるのぢや、姉よくく。」と立ち上れど、方角もなき日なし鳥、壁にぶつたり行堂はぐわらり、二人も探り大取の、町は生死の堺筋、涙ながらに三重廻り行く。

第八

道行闇路の町續き

無夢にだに、見し夢さへも死出の夢、覺めては何時か此の婆婆へ、歸らぬ道も夜嵐や、吹く風寒く身にぞしむ、往來まぼらの軒のつま、結びとめたる下がへの、主よ女房と只一夜、それが未來の晴れ小袖、綾も錦がうら苦き、二世と契りし禮三郎、今宵限りの命ぞと、書き残したる藻鹽草、ほんに誓紙の數よりも、手を取りかはし行く先は、あの世この世の堺筋、歩めど道も抄らぬ、跡には親の枯れ残る、老木の老の逆様に、順慶町も空事や、私とお前が憂き事の、あだな契りを米屋町、本町筋の軒深く、思ひ初めたる中なれば、煙ともせず諸共に、埋まばなどか安土町、男も同じ二世三世、生まれかはりて又爰へ、親の便りを備後町、永き未來を瓦町、かく成り果つる我々は、いつの因果を身にう

けて、共に憂き目に淡路町、俺むは愚癡と平野町、とは思へたら棄つる身を、咎めてはゆる大の聲、
道修町筋過ぎ行けば、早真夜半の月代の、空恐ろしく行き悩む、しばしは爰に伏見町、高麗橋の果て
までも、共にぞ連れん去りながら、所詮此の身は人殺し、一所に死ぬれば親々へ、不孝の罪も恐ろし
し。そなたは生きて亡き跡を、頼むとばかり曇り聲、錦は涙の顔を上げ、生きるとも死ぬるとも、二
人一所と言ひかはし、今の辛さをあの世にて、閻の咄の樂しみと、思うて居るに胸慙な、大事のく
父様に、換へて可愛しいお前の事、忘れうとすれど猶更に、思ひ切るにも切られぬは、如何した結ぶ
の神様が、結ばしやんした縁ぢややら、いふに言はねぬ駕取の、香ひ離れぬ中ちやもの、お前に別れ
てそもやそも、何と存へ居られうぞ、共に殺して下さんと、頼む付いたる俵の泣き、道理々々と撫
でさする、顔は涙の横しづき、戀故に降る露時雨、爰や彼處に立ちとまり、浮世小路の縁薄く、水の
あはれや大川を、越えて急ぐは後の世の、縁を祈りて寺町や、今ぞ誠の女夫婦、人目つゝのやうや
うと、濱の寺にぞ著きにける。

第九

錦、覺悟はよいかと共き歎し、既に最期と見せける折から、露右衛門九平太に繩をかけて、千

井川、諸共驅け來る跡より、津田兩助、淨久お才を作ひ來り、まだ生きて居てくれたかと、親の悦び
兩助も、一團右衛門が白狀にて、彼奴等が悪事明白、鐵が嶽は九平太と馴れ合うて、殿のお金を盗んだ
盜賊、禮二に科なき御政道」と、聞いて岩川、次郎吉吉兵衛、「世話甲斐有つて重疊、何かに付けて兩
助様のお庇／＼、猶此の上は御木妻はお才様、お妾は錦木様。」「成程々々、先づ囚人引立てよ。」と、
兩助が配にて、家に羽を伸す鶴屋の禮三、池田の關取、天滿の關取、千雨々々二幟、其の名を難波
に上りにけり。

傾城阿波の鳴門

近

松

半

二

傾城阿波の鳴門

153

事の七賢、無類、匠師、元康、角養、王史、山崎、河原忠、に相立つて、陣山の標、長林村に
集合あり、種々の通達たのしけれ。船風、各に好むなりと云ふ、船づき舟のこゝろな、ある頭目、氣
色やな、吾れ、麻に纏ひ仕る、麻がは細い枝葉といへども、生かち替に事か難し、舟中に酒を飲めて吐
きこゝふ、病者と爲つてこの世に、船の一日したる不毛不産、さうして、船中の、酒のすばさを
早て飲用、船中酒室には、酒殿の、おやんはんらんんと、さういふもの、こゝろにいゝ、ひんび
みあじつゝ、はいりすべいかと云ふといふ、言いてゐる、此二頭目的あるべき事ではあるが
衆門「う、又つかひです、香や美へは結りの、神に酒の一越り、乾か酒の酒りぶり、ムテ、オ
イ、ロマ、ヤツトセイヨイ／＼、ウ、キウ、ムテ、ヤツトセイヨイ／＼、ゴウ、チエイ、ハマ、ヤツ
トセイヨイ／＼、こんな調が日本にあつた、吾方は信濃の御中、一更を取り出せば、六人立ち寄り
さら／＼うつ／＼押し進み、立ち別れた信濃には、尾張殿の船をも引、麻八百の起りと笑ふに、また

尾張殿の馬門

舟禿、ばら／＼と走り寄り、太夫「階廣す、エ、憎」と、捻り擲かれあいたしこ。是れは七賢けん
 によらない、赦せ／＼。」と、逃げ廻れば、亭主九八押しへだて、も「ア、申し高尾様、お恨みは御尤
 も、是れは一番我等が貰へ」と、いへども太夫は、太夫「イエ／＼、此の間から心のたけを書いた文、
 一ツに纏いで座八百つといまのしだら、私や腹が立つわいなア。」九「オ、太夫すのが省道理、私
 とてはナニに彌。」三「ア、私共俱に。」と立ちか、れば、積廣「ア、コリヤ待て／＼、わしは眞實に思
 へども、此の末社の賢人共が、おだてかけての口拍子、祭の俄、下稽古、もう七賢人取り置いて、中
 直に奥座敷で酒にせう、堪忍しや」といふに太夫は嬉しさの、笑顔に取り付く牽頭持、お新井「ア、
 御機嫌が直つたぞ九八様。」九「いかにも／＼、東助、西助、佐渡七、辨助、大助、合點か。」と判持「合
 點おや／＼、旦那太夫すお先へ／＼。」手を引き合ひて先に立つ。跡に皆々聲揃へ、七賢人おや、西樂
 人おや、俄おや／＼／＼。」と騒ぎ立ててぞ奥座敷、郭驥ふ大紋口、機嫌も吉原巴屋に、居続け遊び
 の大名客、玉木衛門之助が大騒ぎ、美麗輝く燭臺の、火影眩き有様は、喜見城ともいひつべし。大
 名風も打ち碎け、菱衛門もしどけなく、太夫末社を引き連れて、皆々座敷に入り来り、衛門「ア、
 是れから酒にせう。」ソレお鏡子お杯、中居の政が會釋こぼしてつぎかくれば、衛門「サ、サ、サ、サ、
 い酌、にくさも憎し、助けてくれ。」ソリヤ太將の御無理が出た、したが憎けれど、助けて上げい。」

こゝ、無息にすつと呑み自慢、二ノけなやつと引受けて、
呑んで指す杯、菊尾取り上げ下戸の氣さんし、ちよつと受け、
中直の杯は滑んだれど、
おれどもお慮るからに指しか、れば次の間より、
換押し明けいか物作り一腰はつ込み、胸に一物邪みづら、
いつさくと入れば、たいこ持ち氣味悪く、
魔敷の典も覺めにはり、衛門之助歩幅、
おれん、マアその方は何者なぞに、此の野郎めは、
此の座敷へは何用あつて踏み込んだ、サアく仔細を語れ、
氣色よく見れば、圓八は、
ぼ、おれらも客、揚屋の座敷の間をする事は、
門之助推し、おつとおさへる中、
が、買みもせうに聞かうとは、お、すかん、
横間から指し出すと、だまて去らでござんて、
横間に、今の跡をいふと聞かう、
をまだ其の上、
おれらも客、揚屋の座敷の間をする事は、
門之助推し、おつとおさへる中、
が、買みもせうに聞かうとは、お、すかん、
横間から指し出すと、だまて去らでござんて、
横間に、今の跡をいふと聞かう、
をまだ其の上、

らぬ故、けふ此の座敷へしかけたは、太夫を買ひに來たのぢや、かう團八が云ひ出すからは、金輪際
 貰ひぬく。衛門殿、下あれ／＼貰うた。」と、腕まくりする豎横綱、竝み居る者もあぶ／＼と、手に汗
 握るばかりなり。衛門之助詞を和け、「ハテ思ひ寄らぬことを聞く、なる程太夫に夫れ程執心ならば、
 其方に遣はさうといひたいが、ヤアならぬ。身が寵愛の此の女、殊に身受も今日相濟み、今晚身が屋
 敷へ連れ歸る、だれに何ぞや、下郎の分際で、身が座敷へ踏込む慮外者、生け置かぬ奴れども、遊
 興の妨けにもなれば今は敷す、叶はぬ願ひ早歸れ。」と、きつと答ふる鷹返し、團八イヤ歸るまい、
 是非太夫を買はにやいなぬ。」と、聞くより中居はむしやくしや腹、仲置「コレ夫れは餘り長であらう、
 貴方のお慈悲有り難いと思つて、早ういなんぞ、おたいやらしいあの顔わい。」と、恥ぢしめられても
 蛙の面、卑／＼さういへばもう腕つく。サア衛門、くれる氣か全一言いへ聞かう。」と、場所のあしきを
 付け込んで、喧嘩じかけの面魂、たいこの左渡七押し隔て、在邊上、サア、申し／＼團八様、最前から
 旦那の仰有る事を、打消して仰しやるは、きつい御無理。かう座敷が白けては、私が商賣たいこ持も
 上つたり、御機嫌直して一つ上つて、お歸りなされて下さりませ。」と、詫びる程猶付け上り、團八「そ
 りや何ほ／＼く、うぬらが知つた事でない、似合つた様にすつ込んでけつかれ。」と、立蹴にかゝる足首
 捕へ、在邊上ハテ聞き分のないお方、何ほたいこ持ちやとて同じ人間、お前のお脚でけらうとは、そ

りや餘りお胴慾、足元のあかい内、此のお胸の満足な中に、早うお歸りなされませう」と、足首しつか
といたむれば、顔を擧めて、團八「アイタ、こりや痛いかな、おのりやこりや手向ひをひろく
な」佐七「イヤ手向ひぢやない、足向ひぢや。」團八「アイタ、こりや、たいこ持に似合はぬ、こりや手
どいめに合はしをつた、モウ堪忍がならぬわ。」と、すはと抜いて切りかける、腕首つかんで捻り上げ
る。佐七「最前から詞甘い中に歸れば、こんないたいのに合はさぬ、御名を出されぬ遊里のお慈悲、
腰骨に覺えたか」と、蹴飛ばす早業向うへ輕業、間拍子もよいこ持、頓作もよき男なり。團八漸
う起きあがり、腰をかゝへて、團八「アイタ、こりや又ふくりんかされたな、五分の有るやつなわ
ど、料簡して去らばでこますわ。已腰骨に、よう覺えたぞ、必ず覚えてはつかれ」と、もんか、連
者な物は口目玉、痛みノゝもにらみ付け、足を引き寄り歸りける。おと。佐七出かしたノゝ。た
いこ持に似合はぬ働き、そこは見上げた者ぢやない。佐七「ハ、いやもうこれ、何時からの、ほで輕業
が過ぎての此の身分、今のお役に立つと申すも、其は身助くる種な不仕合と、申す様なものでござ
りまする。」團八「いかにもノゝ、コリヤ當座の慶美。」と、山吹色を投げ出す。團八「有の難し」と、氣は
ば、團八「エ、埒もない奴がうせをつて興があらた、氣をかへて離座敷で呑み直さう。」團八「そのやこ
そ旦那の御出でぢや、中居衆頼むぞ。」とシンコイノゝ、亭主が喋るは、シンコイノゝ、うち連れてこそ

入りにけり。既に其の口も黄昏に、人顔聞き樹木のかけ、切戸をそつと押し開けて、忍び來るは以前、
 の團八、跡に續いて定九郎、内の様子を見廻す所に、時分を窺ひ奥よりそつと佐渡七が、傍に氣配り
 立ち出でて、三人見合はす點頭き指し足、庭の邊に立ち止り、定九郎小聲になり、定九郎コリヤ佐渡
 七、そちも知るとは、小野田郡兵衛殿に頼まれて、衛門之助殿を殺す契約、然る所此の開より此の
 郭へ居續けり大騒ぎ、聞くを幸ひ其方を頼み置いたれども、吉左右心許なく、此の團八を最前入り込
 んだか、何として殺して仕舞はぬ、様子いかゞと尋ねれば、佐渡七も招り寄つて、佐渡七成程御
 頼み故昨日より座敷を勤め、仕舞せられれば大金、殺すに油斷は致さねども、晝夜共に末社を集めて大
 騒ぎ、附々が多ければ只今までも延引。したが、又どして衛門之助殿を殺してお仕舞ひなさるゝ、様
 子が篤く承りたう存じます。定九郎、成程不審むも、衛門之助一國の主として、酒宴遊興に長
 じ身持放埒、然に其の款知れず。夫れのみならず國中の殊嬢をかり集め、或は後家狩などと金
 銀を賣し、様々と奢るを極め、所詮生け置いては我々が望みも叶はず、郡兵衛殿と申し合はせ、密か
 に殺す思案、仔細といふは此の通りと、我が身の態をもとに、云ひならべてぞ物語る。佐渡七はう
 ち點頭き、佐渡七「ふん夫れで様子が知れました。したが最前團八様見えたれども、あの手ぢやいかぬ
 と思うたゆゑ、實事仕を見しらかしたりや吞込んで、投げられさんした其のぎばの甘さ、イヤアウシ

居の敵役として金ぢやくし、譽めれば國に榮り、一イヤ下地有る、富島の是居も一年働いて、ハ、ハ、ハ。「卷七」援衛門之助も今夜中にいぬる様子、殺して仕舞ふ思案はなにか。思案あつて忍び入つた。「卷七」ム、シテ、其の御思案はなにか。定九郎が高い、此の定九郎が極上々の金魚をひひ、手水鉢に移し入れ、定九郎「リヤ此の様に持つ能き金魚なれども、殺す思案はナレかうし懐中より藥取り出し、水に注ぎばはいかに、働く魚も忽ちに、色を變じて死してけり。二人の首は泉れ鉢、一ハテ南妙「卷七」シテ此の藥は「定九郎」是れこそ其の御主が傳ふる毒藥、此の藥を酒に入れ、衛門之助に吞ませ、殺して仕舞へば手間御人から、時し仕舞ふ物でもな、關八は大門口に待伏して、衛門之助が歸るを待つて只一打ち、又「定九郎」は出口で討ち取る、兩方通すの思案、一、関くより關八、關八できた。然らば佐渡七能い吉左衛門待つて居る。」ハハハ。關八は、大門口へ出て行く。定九郎「コリヤ佐渡七、此の妙藥はそちが持参で、ナ合點がな、渡せば受取、お氣遣ひなれますな、今宵の中に「定九郎」、でかした。身共が顔を合はしては後日の邪變、身は屋敷へ罷り歸る、随分ぬかるなりおれらば、うらば「手水鉢」極め、定九郎切戸口より立ち歸る。跡に佐渡七一王夫、奥を窺ふ其の折柄、變へ來るは衛門之助、おれら佐渡七は、

勝手へ急ぎ行く跡へ、奥に本社を留め置いて、高雄伴ひ、衛門之助は立ち出でて、衛門「コレ太夫、今奥でとつくりと話した通り、其かと腹ふれ寝られぬといふ譯は、肌身を放す所持してゐるやうな大切な一品、其の譯さへ納まらば、ハテ其の時はどうなりとも。合點がいたか。」太夫「アイ、とつくりと合點が参りました、忝うござんす。」と、何か人がしめやかに、話す間に佐渡七が、鍔子杯持つて出で、佐渡七「コリヤ旦那が悪い、私等をおまきのかばやき、太夫すとお二人甘いな。甘い次手に何と爰で、一つ上りませぬか。」と、口は諸白心の惡酒、酔はしかけてぞ進むれば、衛門「す、是れはようど氣が付いた、サア一つ呑もうかい、サア一つ注け。」さらばお酌と注ぎかくれば一つ受け、なにか思案し、衛門「イヤ／＼、素直に呑んでは面白くない、サア一拵せう。」佐渡七「ハテマア一つ上つてから、跡で一拵致しませう。」衛門「イヤ／＼どうやら呑むに拍子がない、サア／＼是非に一拵。」といふに違背も何のその、迫付けて呑まさんと、佐渡七「サア参りませう。」衛門「ロマ、チエ、ハマ、おつと三拵サア勝ちや、佐渡七呑め。」といはれて悔り、佐渡七「エ、アノ、此の酒を私に。」衛門「オオに負けたりや知れた事。」「ア、イエ／＼減相な、是れを呑んでたまる物でござりますか。」衛門「ムン、すみやよう呑まぬおやまで其の筈／＼。コリヤ佐渡七、此の酒には毒藥が入れてあらうがな。」と、星をさされて、佐渡七「何と。」衛門「イヤ知るまいと思ふか、最後の物語みな聞いた、遁れぬ所覺悟せい。」

仕舞うた、見顯はしたれば百年日、ミウ是非に及ばぬ。「と相口引抜き突きかくれば、衛門之助身を変し、刃物も取り縁より下へ飄落せば、コリヤ時は此と佐渡七は、息も切戸にかけ出で、逸散にこそ逃けて行く。此の物音に亭主末社ばら／＼と走り出で、様子を聞くより郭の見せしめと、追廻け行くを、衛門「コリヤ待て／＼、詮議の有る氣なれども、身がぞんずる旨あれば逃ければ、何もかもおれが心に取つてゐる／＼。併し太夫が身受は甘中に相濟み、此所に長居は無用、亭主太夫を連れて来る歸らう」と、いふに九八瀬り出で、太夫は名残惜しう存じまする去りながら、此間から大騒ぎ、世上での取りさた、申し管船の御耳へもはひつた様な時、いか様もうお歸りなされたらようござりまうの、衛門「さうてもいぬる心、太夫おちや／＼立ち上れば、太夫「そんなら旦那、又近々に御來臨な、松の位太夫様、随分お健で／＼と、たい／＼仲居も口々に、名残を惜した暇乞、高尾も俱に盡きせぬ思ひ、太夫「お前方も御無事で、一輪樂涙の餘の露、衛門之助氣をかへて、皆も随分まで居い、又月見には、太夫を連れて大騒ぎ、太夫「大風にはいはい／＼と亭主がそ／＼と、太夫「コレ／＼たい／＼家、大門目まで七賢人の、囃しでお供はコリヤ／＼からう、太夫「お立ち／＼と浮れ立つ、皆々打連れ騒ぎ行く、所は名におふ大門目、出口の梅夜風の氣、亂れ騒ぎし折に、團八は宵よりも、佐渡七が知らせをば、今や／＼待つ所に、息を切つて佐渡七は

命からく逃れ来れば、團八「ヤア佐渡七か、宵からぼつと待つ退屈、首尾はどうかや」佐渡七「ア、イヤモウ首尾さんく、思ひの外手強いやつ、まだ其の上に客に刃向ふ大それた浪藉者、郭中への見せしめと、私が宿を叩き上げ、方々と詮議する。モウ爰には居られぬ、こなんの宿に隠れて居る、あとは貴様のお働き頼むく。」と云ひ捨てて、足早にこそ走り行く。團八「エ、埒もない、よい／＼何でも俺が一手情。」と、固唾を呑んで大門の、傍に忍び待ち居たり。斯くとも知らずうてんつてん、唐襲の音の囀り物、先にしづく昇き出す、俄練物七賢人、待ち設けたる團八が、駕を目充の手練手裏劍、目充達へす打ち込めば、「スハ浪藉者遁すな。」と、呼ばはる聲に團八は、しすましたりと逸散に、跡をも見ずして逃げ失せたり。かくと聞くより高尾は慌て走り寄り、高尾「ナウかなしやな衛門様、お心はいかゞぞ」と、駕の左右を引き上げて、見れば内には著替の風呂敷、是れはと驚く後より、衛門「衛門之助は爰に居る。」と、賢人の出立にて、ぬつと出づれば又悔み、高尾「ヤアお前はそこにてござつたか」と、悦ぶなかにも不審顔、高尾「オ、合點の行かぬは尤も／＼、宵に來りし團八と佐渡七兩人云ひ合はせ、我を討たん面魂、我が歸るを待伏し、かかる浪藉あらんと思ひ、そなたを跡から、駕の中なほ我等が身代り。」漢の紀信が計畧、今は憚る人もなし、我が身は駕にうち乗つて、太夫を先に道中や、郭をぬけし籠の鳥、跡に残りし友千鳥、大鳥大名大門口、別れてこそは、三重 歸りけれ。

第二

櫻井主膳と表札を打たねど其の名隠れなき、阿波の一城主玉木衛門之助殿譜代の侍、主従共に武藏野の、月も忠義に目もふれぬ、堅い屋敷の内庭に、掃除は得手のやつこらさ、打つ水玉の露程も、陰日向なく見えにける。立ち切る一間着をひて、立ち出づる女房間の戸、華美な好まぬ襦袢、寒心もとよやかに、御膳の、庭の掃除は又半儀内、日蓮の勤め怠りなく二人共大儀々々、殊に夫は昨日より管領職の御召しにて、今において歸りもなく、御用の筋は知られども、その氣遣ふ事も有るまい、歸られ次第用事もあらん、せめて暫しの内なりとて、部屋へ往て休息しや、早う／＼と下都／＼しからば御免しと兩人は、勝手へこそ立立つて行く。取次役の婢どもは／＼と走り出で、第一「申し／＼奥様、前方お館に勤められし中間の十郎兵衛殿、何やらお歸ひの儀あるとて、お次に控へて居られます。」間の戸、なにより十郎兵衛がわしに逢ひたいとな、何はともあれ受へ呼びや、早う早う／＼に御ども、其の儘立つて入り来る、館の住居かはらぬと、歸る姿の十郎兵衛、頗る身の細くなき、身すほふしに足る。第二「す、珍らしや十郎兵衛、事中間とは云ひながら、主膳殿の心に叶ひ、立つにも居るにも十郎兵衛と、情が怨となる世の中、連合の氣に背き國を出やつてもう六年、

顔は見すとも便りでも聞きたいとは思へども、夫の氣質を計りかね、案じ暮せし其方の身の上、お伺も無事で出来た事も、息災であるかいのにと、残る方なき關の戸が、尋ねも深き三世の縁、身にしみ渡る十郎兵衛、涙とともに兩手をつき、上臈「奥様の仰せの如く、見る影もなき私を人らしく思召し、重々厚き旦那の御恩、報ぜん事も淺ましや、酒に犯され郡兵衛殿の家來と口論の上、手疵負はせし拙者があやまり、縛り首にあふべき所、暗嘩兩成敗とあつて兩人共に御追放、己やれ今一度、何卒旦那のお爲になり、御勘當の詫びせんと、思へど叶はぬ足手纏ひ、三つに成る娘をば國許の母に預け、女房連れて大坂の、知己を求めて五六年、憂き世渡りは致せども、御主人のお身の上拜まぬ日とてはござりませぬ。女房めが申すには、お赦しの出るまではお國へは入る事叶はず、承れば今年は此の地にお渡り遊ばさるゝ、折を見合はせ勵氣の願ひ、平に是非にと諫められ、心は先へ飛び立てど、はひりかねたるお屋敷の、御門前に一時餘り佇む中に門番衆が、咎めを機會に漸うと、昔の誤り今の身に、思ひ當りし此の身の上、叶はぬまでも御赦免の、詫びの綱手は奥様のお情お慈悲。」と許りにて、先非を悔みし男泣き、心を不便と思ひやり、關の戸す、其の悔みは道理々々、今日其方が來たこそ幸ひ、よい時分に呼び出さう、最早歸りに間も有るまい、次で待ちやや。」といふ間なき、旦那の歸りと下部が聲、知らせ眩き奥庭へ、いそ／＼立つて入りにける。早立ち歸る櫻井主膳、常には酌まぬ杯の、廻

隔てて、さう並けなく入り来る、顔も詞も苦々しく、さう「コレサ關の戸殿、只今勝手主膳殿はと尋ねれば、障にござんと承つたが、手前が参つたと聞いて、最早おはつし召されたかな。」と、是れは父あられもない、お珍らしいお前のお下り、よろこびこそすれ何のあなたに隠れましよ、よりながら聞くるに聞なき夏い夜の、勢れを暫し奥の間に。ソレ女子ども、郡兵衛様の御出でと、主膳殿へお知らせ申しや、早う／＼」の内よりも、主膳「櫻井主膳、それへ参つて御對面申さん」と、よからぬ中も前に出さず、上下改め一間を出で、主膳「是れは／＼、お下りの噂もなければ、思ひよらるる今の對面、いつ見ても御無事さうで先へは重畳」主膳「アイヤ主膳殿にも堅固の體、我とても衛門之助殿の定老といへど、殿様なしの田舎住居、貴殿はそれに引きかへて、花のお江戸の家老殿、御主人のお膝元と云ひ、跡継ぎとおお敬しめで、御夫婦共にきつい若やど、イヤハヤお羨ましく存する。」と「是れは郡兵衛殿の、女夫のものを情氣さうでか。サア／＼是れへ、まづ是れへ。」と、合はぬ王合を聞に合はせて、持ち長すれば圖に乗つて、遠慮會障も高上り、櫻井主膳威儀續ひ、主膳「最前主人に御意得たれど、その許のお噂もなかりしが、到着召されたはいつ何時、シテ殿には御對面済みましたか。」と「ア、いや／＼、國元を出ましてより昨日まで十日の道中、思ひがけなう参つたのは、ちと折入つて其許へ、相談致されば叶はぬのゑ、未だ主人にも對面逢けず、参りがけに山口定九郎殿へ立ち寄

り、直様是れへ参りし所、貴殿のお顔を見受けぬから無難は眞平。」主膳是れは又痛み入る、用事と有らばゆるりつと、打ちくつろいでお物言。コレ關の戸、早いが貴殿ついちよつと一種一貫申し付きやれ。」關の戸はんに私とした事が、最前より取り給れお茶さへも上げませす、お救しなされ。」と立ち上る。」「アいや奥方お心遣ひ無用々々、茶も酒も所望になし。しかし主膳殿の志、無下に致すも本意ならず、とこそ御雜作に預り次手、只一色の肴には、主膳殿のお手際、すつぱりと切腹めこれ、夫れを肴に、感謝まう、奥方早く御用意。」と聞きもあへず腰立てなほし、關より申し主膳には、「何科おつて親切のちや、免忍事おつしやつたら、お國の家老とはいはしませぬぞ。」と一々女房黙れ、殿舎いかに家の事あるとも、部兵衛殿の指圖を受け腹を切る果ならず、腹に又切腹とあれば家の大事、左様の大事を舌に申し出でた其の仔細は、二間ふに及ぶぬこなたの胸に覚えある。年度の異り、御先祖より代々つゞく、浪風立たざる家筋なりとも、主膳といふ馬鹿付にたらされ、毎日の裏の郭通ひ、菅原家の沙汰大方ならず、御主人には出門との噂、聞くとも其の儘此の家へ来たは、貴殿の口からいばさんため、サア有ややうに白状々々。」主膳ハ、何事かと存じたれば、イヤモ其の義あればお心遣ひ無用にめされ、微塵いさ、い覚えなき郭通ひの御とり沙汰、手前の殿の名を借つて名を借りし給れ者、尋ね出す其の間、五十月一日迄を乞ひ掛け、やすらかに事を納め、主人を

供をし、某に切腹せよとは何の豪言。」
 某「キ、夫れ程の儀知行米を戴く代り、生まれ子でも申し上
 けうが、告しまた其の尋ねる奴が其許の手に入らぬ時は。」
 主「念に及ばぬ切腹致す。」
 某「ム、貴殿
 が腹をあされば、衛門之助様の御身が晴れますかな、イヤサ濟むと思はれ今爰で、切腹を見届けませ
 う。」
 聞の月「イヤ郡兵衛様お控へなされ、イヤ申し主膳様、お二人の争ひを、聞けば聞く程良ならぬ、
 主人の御事お前の身の上一」
 主「よし、様子知らねば道理々々、知りやる通り某急のお召しと聞くや
 否、取る物も取りあへず、屋敷を出る其の折から、主人も俱に御前へ参るべしと重ねて向ふ使者の
 口上、途中にて出合ひ頭、直様主君の御供申し、承りし其の趣、衛門之助其の身の徳を甲に著て、
 日々の奢りはいふに及ばず、利へ吉原の郭へ入り込み、毎日毎夜の藝盡し、又ある時は時ならぬ、
 月雪花の催しにて、名ある太夫も我々と馴染重ねて手に手を取り、屋敷の内も郭同然、武士に合は
 る三鼓太鼓、曳かして大名の家名を下すは何故ぞ、早く言譯致されよと、尋ねの内も立板に、水を
 流せる上人の返答、十が九つ其の座にて申譯は立ちたれども、衛門之助と云ひふらし、訴へ出でたる
 上なれば、其の名を付けたる紛れ者、五十日の日延べの内、某急度吟味を遂け、主君の言譯致さん
 と遮つて頼むしかば、早速に相叶ひ我は夫れより吉原へ馬鹿になつて窺ふ所、衛門之助といひふらし
 上もなき大騒ぎにて、立ち歸つたる残念至極、イデ追ひかけんと思ひしが、イヤ／＼一旦此の場の陣

を引き、ゆゑに詮議すば、捕へ難しと思ふから、我も是れより身持放埒、主人の爲の遊興は、毒を以て毒を消す、主膳が極めし藪の内、連ねそふものにも深く包み、情弱に見せし、詮議の第一「
第一、主膳殿おかれ、潔白らしい蘭の如き、管領よりの仰せの通り、御門之跡殿を誅し、
高尾といへる太夫を身受けしたるもこの計らひ、伏く存じてをる某に、うはぬんのりの突きつけ
實、其の手では行かぬ、もうよい加減にいうて仕置やれ」といふ、左程實主御主人を、御誅せしとい
ふ「
第二、健かな證據見せせう、山口定九郎殿、最前の女是れへ同道のされ、早うく「一長ふ
つた」と定九郎、つれ立つ姿振袖の、打ちかけ模様外ならぬ、實にも郭の風俗と、物ふかなき其の解
ひ、主膳殿見られたか、今日足れへくる道すがら此の者に出で合ひし所、主膳様のお屋敷へと尋
ぬる餘り、様子を廻れば右の段々、山口殿諸共に同道したる此の女、何と覺えがござらうか」とい
ふ存じまへに、捕者此の江戸表に張り留めど、吉原へ参つたは夜半の初め、細城にもて何にもせ
よ、手前毛細近付ではござらぬ「
第三、もうでござんす」「
第四、申し女中様、是れに居らる
るは是が夫、腰弁主膳と申しませうが、お前の尋ぬる心宛は、どこへお出でなさるゝえ」と、問はれて
高尾もうちにつくり、三つにおちもちいたてねばお細見知らう様もなし、お名は違はぬ主膳様、
私はお成の御主人御門様に受出されし高尾と申すものでござんすか、御問様のおつしやるには、屋敷

の内は人目あり、櫻井主膳と名を云うて、何ぢやあらうとそこへ行け、委細は次で師からと、教への道もそこや先、尋ね迷ひし折からに、あなた方のお目にかゝり、尋ねるや否、無體に私を駕にのせ、連れて見えた此のお屋敷、わたしや何にも知らぬ事、悪い所はよい様に取ひなれ頼み上げます」と、聲さへしどけなまのけれ、櫻井不思議の顔色にて、主膳、心得ぬ高尾の詞、我を自光に入り込ませしは、某に通達を付け、切腹させんすたくみごと。コリヤノ女房、詮議ある高尾太夫、奥へ伴ひいたはり置き、賜はる日延べの今日より、其の曲者を尋ね出し、主人は勿論此の身の言譯、さつぱり仕上げてお目にかけう、山口わせい」と立ちあがる。定九郎「イヤさうは得致さぬ、拙者貴殿の組下とはいへど、疑ひかゝりし其元なれば、屋敷の内より外へとては、一寸も動かさぬ、それが互に身の潔白。何と郡兵衛殿、左様ではござらぬか」「中々左様、縦ひ貴殿がいか様に尋ねられても、左様の大事を仕出す奴、めつたにお手には入りますまい。いらぬ事に骨折つて、膝で後悔なされうより、身が前で切腹々々、彌主人に料なくんば、誤らない儀を申し上げ、家を立つるは拙者が役目」「彌井」「イヤ申し、夫が詮議致さうと、承つて立ち歸つた、御前の指圖に進變はあるまい。さすれば吟味も此方から尋ねいだす、此の役目十郎兵衛、おぢや」と關の戸が、指圖にはつと立ち出づる、心勇みのひらく眉、彌井「イヤナウ十郎兵衛、聞きやる通りの品なれば、主膳殿になりかはり、殿の名を衛りし

曲者、一時も早く許議仕出し、夫に手渡しする氣はないか。」十郎何れも最前より、始終の様子承り、出づるにも主人の情、お前様のお情で、結構な役目をたははる、此の勢ひに一計謀、拙者にお任せ下されこと、聞きもあらせす、さうだまりあがらう、郡兵衛が前とも怪しう、誰か教して此の家へうけたうぬは元國元で、身が家来に手紙を負はせ着ぶち致す所を、是れなる主膳がぬべりこつべり、命助かる其のかはり、一生脚は切り込まぬと、潔白らしいうて置いて、内誰で噂にやり、此の詮議さうなごとはのぶといひ、家来、侍の禮儀も知らぬ、大岡前の己等は、庭の小園で尼をふり廻し、拾扶持喰らふがよい役にと、あくまで悪目こらへかね、短氣の十郎兵衛立ち草を、押ふる目づかひ、ハハはつとしづまる軀身へ付け込みし恨める、さう乾かへて立ちかゝるは、此の郡兵衛に刃向ふのか、慮外なやつ。」と傍なる茶碗、眞顔砕けと打ち付ければ、眉間に當つて流る、血汐、胸もこらふる無念の顔色、さう云ふ分あはれぬかして見よ、刀腰差さすやつならば、よもや三分有んといふと、いへど主膳も理の當然、はたとふさがる、圓の口も、何と聞かん様もなし、折から下向かぬわたゝしく、下京郡の主人藤屋伊左衛門と申す者、御前儀の手が、あつて、おれ等へ許議も申し次に持へ置ある、通し申さんやと伺へば、さうも、何にも上と下儀の手筋と有るならは、遠慮に及ばぬ是れへ通せ、圓の口は先づ奥へ、高尾太夫を同道仕やれ、十郎兵衛も早歸れ、御當としてまゐ

内、願ひに来るにまゝある事、咎めに及ばぬそちが身の上。用事あらば重ねて聞かう、早々立て」とどこやらに、こもる詞の締括り、すこ／＼立つて行く姿、見やる女房も奥の間へ、しをれし枝におく露の、身ぞ知られて咲く花は、名にし藤屋の伊左衛門、馴れし屋敷も改めて白洲にこそは畏まる。主膳珍らしや伊左衛門、耳の無事は語るに及ばず、まづ何は差置き詮議の手が、り、殿の災難此の身の難儀、いはすとも能く知つたり。シテ其方が手が、りとは、いか様の筋なるぞ、はやくいへ／＼。伊左ハアイヤモお氣遣ひ遊ばすな、其のお尋者が知れました。」主膳「何尋ぬるものが知れたとは、シテ其の者の有所は何國、假名實名何と／＼。」伊左「イヤ外までもなく、葭原狂ひに殿様のお名を汚せし大罪人は、則ち私でござります。」と、思ひがけなき詞に不審、一ばい晴れぬ小野田郡兵衛、大口明いて高笑ひ、御座ハハ様々の奴がうせて、大切な詮議の腰折り、ヤア／＼佐渡平、アレ引き立て。と呼ばれば、はつと答へて立ち出づる、顔は互に見て憫り、伊左ヤア、ヤアわりや葭原で詰問の佐渡七、じやがの南八と云ひ合はせ、此の伊左衛門を殺さんとせし其方が、こゝへはどうして、其の形は。」といはれてぎつくり郡兵衛が、知らず目の内呑みこむ奴。佐渡平「ヤア素町人の慮外千萬、一合取つても武士の家来、詰問とやら鼓とやら、ない名を付くるうぬは何やつ、見た事もない毛二才め、主人の御意ぢや、きり／＼立たう。」伊左「ム、アノお侍の御家来なら、猶以て詮議がある。」佐渡平「ヤ

ア御言いはすとうせをれ」と、肩口取つてひき立つる。櫻井主膳「暫し」と留め、主殿の名を御りしと、申し出でたる大切の御人、其の儘にして次へて」主膳様控へ召され、主君の御意は背かれど、其元の指圖は受けぬ」主膳「やゝおのれ申間風情の様をして詞を返す處外者、早く立つてうせをれ」と、はつしと授ける火入のてそく、頼にへつたけ石根も、榮まる血汐は十郎兵衛が、返しと知らぬ短氣の奴、刃の鯉口留むる郡兵衛、一佐渡平下れ、疵は受けても苦しくない、定九郎殿と諸共に歸れ、何もかも此の胸に、お、お、お無念をこころへ旅宿へ歸れ、お、お、おおやと申して是れが」郡兵衛「ハテ歸れといはば早うせうと、きつて歸すは主従の、頼の一向向う様、固り押しぬては立ち歸る、櫻井跡を打見やり、置さず、伊左衛門、そこ一人が業にあらぬまい、何者に頼まれ、包ます間せ」と頼かに、聞ける、をんばににじり寄り、お「隠して、隠されませぬ、元の奔りは頼家の、名さへ色ある高尾とて、振袖なれど天晴な、碧星懸れど太夫様、一寸見初めてそれよりほ、夢とてお現にも、只忘れぬ其の面よし、お、お、お出す様達とて、任せぬ此の身は町人なり、高尾とてよ頼に、お、お、お夫と名がつきや大名通具、町人風情かいお頼に、金銀積んでん怪我な事、買ふ事ならぬが郭の枝、叶はぬ事に骨折らすと、儘よと思へど儘ならぬ、想は曲輪心の外と、思ひ付いたる大名出立玉木御殿の助縁とて、お、お、おせし上からは、手前におふは親指の間、是れより外に露いさ、か申し上ぐ

る詞なし。一時もはやく成敗なされ、御不審か、りし申譯、偏に頼み奉る。と、命を塵と投げ出し、
 た、領城狂ひの白狀は、様子ありけに見えにける。郡兵衛一々聞きすよし、郡兵衛「ム、さうぬかしや違
 ひもあるまい、暫しも主君を苦しめし、其の首刎れて埒明けう」と立ち上るを、主膳「先づく暫く、
 彼が成敗を貴殿にさしては、此の主膳は何を以て申し聞き仕らん、差圖を受けし拙者もさし置き、其
 元が手附にして、又もや我に誤り付け、追ひ失はん御所存か」。郡「イヤサさうでは、主膳「ないと思
 さば暫しがうち、奥へござつて休息めされ。彼にちとくと覺悟させ、せめては念佛の一遍も、唱へさ
 するが未來の爲」。郡「ハ、どうなりと勝手に召され、暫く奥で相待つ中、ぶち落して仕廻はれよ」
 と理非を糾さず殺したがろ、詞の意地は夕霧に、叶はぬ戀の意趣晴らし、爰で持ち込み立つて行く。
 とは知らずして櫻井主膳、主膳「身を失ふも戀とはいへど、惚れた許りに輕々と、一命捨つる其方なら
 す、御恩ある殿様の御難儀と聞き付けて、科なき其の身に拵へし科人となる志、御主人にも嘆御満
 足、併し此の度の事許りは、誠の科人の知るゝまでは」。伊「ハ、疑ひ深い主膳様、惚れた印は互の誓
 紙、高尾の方から送りし起請、是れ見て給べ」と懷より取り出し渡す紙包、其の儘取つておし聞く、
 内は白紙に巻き添へし、小柄を取つて見て恟り、主膳「や、此の小柄こそ先殿の、お胤を懷せしお盛
 へ、後の印と給はりし、三疋獅子に家の定紋」。伊「サ、惚れたと申すはその小柄」。主膳「ム、シテ是

れを所持せしお方は。」伊左「先だつてこの屋敷へ、御入りありし高尾様、早々足元へ御出で。」と、呼ばれてはつと關の戸が、傳き申す先殿の、頼も今更改まる、主従共に深切の、嬉し涙に父の恩、貴を思ひ忍び泣き、主膳威儀を改めて、主「先殿御死去の御より、お前様のお行方を、諸所方々を尋ねられたも、今まで知れざる主人の御胤。」伊左「サア私もお噂を承つてをります故、惚れたと申すも其の小柄葎原に置きましては、お家の取替と存するから、惚れて、惚れぬいた、太夫の身受け、大名の名を街つたる入譯、くどういはねど主膳様、御得心なされたら、一時も早く御成敗、ハッ死んでしまへば事済み。」とつばひした男ぶり、懸れ浪花の夕暮と、香の漂れと蝶々の、花に散りかぶ中ならん。櫻井主膳感じ入り、「殿のお胤を葎原にて、傾城遊女と云ひふらうは、家老を助むる我々の罪、其の誤りを随したる具方なれば、助け置きたき者なれども、郡兵衛を始めとし、高尾様を先殿のお胤と云ふ事、我が口より露顯して、上へはどうも打明けられぬ。さすれば御前で受けあうた、紛れものの証議を正し、主人の明りを立つるか第一。不便ながらも伊左衛門、重悟ぞよ」と言ひ伏せど、心は健氣と感ずる涙、頼も涙の顔ふり上げ、一帯は群かねど自らは、情を受けし伊左衛門、只一言の禮もなく、又わし故に殺すとは、餘り氣強いどうぞマア、あの人の命を助けかには此の高尾、とても一度は葎原に、濡れし此の身を今となり、大名のお意様と、ふつづきいうて下さんな。やつぱり仕付け

た道中が、見や晴しい。」と、どこやらにこもる涙は一筋に、落ちて流れの身にぞ知る、連に殿の御胤と、昔撫でさする關の戸が、又も涙にくれ合ひ時、主膳「ヤア／＼伊左衛門、最期を知らず暮六つの、兼ての覺悟與庭へ、我も用意。」と立ち上り、壺を伴ひ入りにける。待ちに待ちたる小野田郡兵衛、刀拵け奥より立ち出で、第一是れは内室、主膳殿には、伊左衛門めが首打ちめされたか何とでござる。イヤサ關の戸殿、人に許り物いほし、なぜ御返答めされぬ。」と、重ねかけたる一間の内、響く太刀音。關の戸が、胸に徹ふる夫が聲、主膳「科人伊左衛門が首、不便には存すれど殿の名を汚つたるお家の爲の大罪人、御覽なされ。」と首桶の、蓋押し明けて指し出す。伊左衛門には似ても似ぬ、主膳「コリヤ何者の首、伊左衛門はと、なんと召された。」主膳「お、驚きは理、此の首こそは佐渡平に方人したる競組の團八と申す者、褒美のわけ目貫はんと僅かな金に目かくれて、異ひに來たは此奴が不運、思ひ計つて某が、裏より通して此の通り。」主膳「何がなんし。」主膳「す、知るまいと思召すが、最前歸つた佐渡平め、伊左衛門と顔見合はすが否や、互に驚く其の座の模様、聞き合はすれば葦原で、殿と思つて切り込んだれば、伊左衛門より大事の科人の。」主膳「ヤア黙り召され、佐渡平めは國元より、召連れた身共が家來。」主膳「イ、ヤさうは言はさぬ、夜前此の地へ到著召された其許、其の父家來の佐渡平が、伊左衛門とは何國で顔を見受けましたな。」主膳「サア夫れば。」主膳「たつて争ひ召さるゝと、

追ひ返された奴が代り、御自分にも詮議が懸り、切腹召されずばなりませんまい、そこを存じて此の所へ、折幸ひな此の首を、藤屋伊左衛門と名を記し、日の次第書き顯はし、鈴の森にて獄門にかけ、死骸は則ち京都の親元へ、送り届くる上からは、伊左衛門は死にたるに同然、助けて殺す者が取遣、違變ござらば此の首の、科を顯はし申上げうか。」「番兵「サア夫れは。」「主膳「何と違背はござるまい。」と事を納める主膳が情、小庭に聞かざる伊左衛門、しをくとし一手あつかへ、伊左「お志は有りけれど、苦し難物と此の事が、お上へ知れれば御身の難儀。」主膳「ホ、其の事は少しも氣遣ひなし、お咎めあらば汝が次第申し聞きは胸にある。とは云ひながら伊左衛門、胸にも成敗したる身の、此の後幾年存へても、藤屋伊左衛門と名乗るか否や、其の附こそは見過しなす、打つて捨てるが様の一、高尾太夫が身の上は、果地かに預つたれば、こちらが頼みし親元へ、急度殺してくれんず。」と、餘所を憚る表向き、許補だかへ立ち上り、主膳其衛門も其の儀傳前へ、御苦勞なからと挨拶に、送答しかなのむしやくしや腹、當り眼に角立てて、那英「ヤア家来も伊左衛門めをはい、」と、呼ばはる鮮も割竹の、情用捨ちあらしに、追ひ送られて伊左衛門、名許り請えて生き残る、姿形ふ親里へ、立ち寄る事も落の千鳥、泣く言不便と見送る夫婦、急事と一言も、いふにいはれぬ間の口が、今ぞひらくる櫻井の、色争ひ難波湖、名も夕暮に逢取や、知るべの方へと、行く雲の、

第三

下總と、渡せる橋は兩國の、國境をば名に呼びし、橋のあいりも見えわかず、簀降りしきる夕立の篠を亂せる雨の足、夜目にもそれと蛇の目傘、えならぬ工みの二人連、兩國橋にさし蒐る。定九郎レサ佐渡平、郡兵衛殿の頼みにより、譯し合はせし今宵の手番ひ、主膳が歸るは此の道筋、有舞を云はさしたつた一討ち。佐渡平「ア、定九郎様聲が高い、モ私も腹からの町人でもなく、刀さす譯も知つてをりよしたが、兩親に見放され、せう事なしの衆頼持、郡兵衛殿の目に入つて一大事を頼まれ、已やれ此の役目仕負てくれんすと、思ふに違ふ葭原のしたら、殿ではなうて伊左衛門、南無三失策してのけたと、思ひの外咎めもなく、佐渡七を其の儘に佐渡平といふ不申間、が是れといふも郡兵衛様のおかけ、お禮には主膳めをすつぱり殺して丁うたら。」定九郎「オ、云ふにや及ぶ上分別、某櫻井が組下とはいへど、國元にありし時郡兵衛殿に心を寄せ、兼て主膳が預り居る殿の重寶國次の刀、人知れず盗み取り渡し置いたる今日まで、盗まれしと云ふ評議もなく彼是もつて心得がたし、彼奴が心底問ふに及ばず殺すが近道合點か。」佐渡平「氣遣ひ有るな。」と兩人が、點頭きく其の内に、雨もをやめば傘領け、今や遅しと待ちゐたる。かくとや様子知らねども、蟲が知らすか十郎兵衛は、主人の歸

分様に刺んでなりともお二人の御存分、さ、手向ひ致さぬ、コレノノ十郎兵衛が心の内をおもひやり、せめては武士の忠義をば、コレ立てさせて下され。」と投げ出す命主のため、塵とも思はぬ兩人が、手引き袖引き膝を衝き、忠義の胸の眞實心、思ひやら程殊勝なれ。九郎兵衛十郎兵衛主膳が代りに汝を殺したる其方の勝手はふからうが、夫れでは此方の上面が悪い、汝が主に忠義を盡せば俺も又主の云ひつけ、手向ひせずと尋常に臺座から放り出せやい。」佐義平「さうござん、主膳が替りに死にたがる汝から、ノ仕舞うてやろかい。」十郎「サ、サ、其の段は尤もなれども、始めから云ふ通り、手前が命を捨てる替り、オコレどうぞ主膳様のお命を。」定九郎「マアならぬわい。」十郎「アならぬ所を聞き入れるが武士の情ぢや。申し定九郎様、是れ佐義平殿、十郎兵衛が手を合はして、一生に一度の頼み、是れ拜みます頼みます、申しノ是れ申し頼みますノノ。」定九郎「エ、暗し、いい、頼みますノ、暗中で駕籠昇く様に、何に願ひても、其様事聞く耳持たぬ、埒の明かぬこと云はうよりとつと早う斃れ。」と、蹴上ける足首確と取り、十郎「ム、スリヤどの様に云うても御主人を。」定九郎「サ、くどい。」十郎「ム、さう云や此方も百年めぢや、主人の仇となる儕等、コリヤもう此方から生けては置かれぬわい。」定九郎「コリヤ面白い、さうぬかしや身が有つて相手に仕よい忠義立てに死にたくば望みに任せ殺してやる、定九郎が刀の引違受けて冥途へつつ走れ。」と、切り込

わ刀を、酒を、銀元を、佐渡平が、同じ袂の稻妻や、夜も降るくる雨につれ、空も閃く稲妻の、
光を、十郎兵衛が、一人を相手に根柢の目覺しが、傷きに、定九郎佐渡平連支度、何國を
常と正體も、轉けつ頼むところへ、起上る定九郎が、脇腹でつと次の刃、はふり、進出を佐
渡平が、肩先丁と切り下され、うんと許りに割れ伏す、肝先ぐつと止めの刀、空鳴れ渡る橋の上、
見付けける主膳に見合はす顔、十馬ヤ、お旦那には、何事か、お旦那に思へば、十郎兵衛、見
れば人をあやめし體口論なるか、いかにく。」十馬ハツアを、内即座の通り、郡兵衛の頼みによ
り、定九郎佐渡平と申し合はす、此所に潜伏すし、お旦那を、お旦那を、お旦那を、お旦那を、
人共に、この通り、只今、お旦那を、お旦那を、お旦那を、お旦那を、お旦那を、お旦那を、
左衛門が、お旦那を、お旦那を、お旦那を、お旦那を、お旦那を、お旦那を、
し其の佐渡平、引捉へて、白状せんと思ふに、思ふに、思ふに、思ふに、思ふに、思ふに、
し其の残念や、お旦那を、お旦那を、お旦那を、お旦那を、お旦那を、お旦那を、
前様のお命が、お旦那を、お旦那を、お旦那を、お旦那を、お旦那を、お旦那を、
氣の毒の種にも、お旦那を、お旦那を、お旦那を、お旦那を、お旦那を、お旦那を、

命ひ取り、突込つっこきんとせし所、櫻井おうせいが奮ふるし、「押し止め、此この儘死しぬるは夫死おに同然どうぜん、今の命いのちを存ぞん
 命いのちへて一つの功こうへ立つるならは、助かんたう敵たう敵たうして元の主従しうじう、そこへ心こころは付つかざるか狼狽うろたへ者の。」と撻もぎ取と
 る刀かたな、十三じふさんスリ、私が一命いのちを、賜たまひ下さる御主人ごしゆじんのお心こころは。」と、主従しうじうとなる事ことも深ふかき因縁いんえん、武ぶ
 上の義理ぎりにて捨てたる其方そのほう、功こうのたて様やうまつく聞きけ、殿とのの重寶ちゆうほう國次くにつぐの刀かたな、代々だいたい下くだる我が家筋いへすぢ、過すぎつ
 ら霜しも月つき二十六じふに夜や、綱つなの目付めつけと一家中いっかちゆう招まねき寄よせたる其その夜よより、紛失ふんじつして有所あり知しれず、慥たしかにこれと推す
 量りやうはしつれども、是れといふべき證據くわんこもなく、忍しのびやかに詰あつ議ぎせんと、思おもふ折せから小野田おのの郡兵衛ぐんべゐ佐渡さど
 平ひらに申し付け、殿とのを害がいせんせし嫌惡人きらふにん、今打聞いまうちあけぬも國次くにつぐの、刀かたなの有所ありを聞きいた上うへと、手延てのびにせ
 しは主膳しゆでんが越度こゑど、今更いまさら云いうと返かへらぬ事こと、刀かたななるは十郎兵衛じうべゐ萬恩まんおんを思おもひなば、命いのちにかへて刀かたなの証議せうぎ、
 それも長ながうは延のばされず、三月三日しがつにちは殿とのの誕生たにじう、勸かぎる吉事きつじに外ほかれては櫻井おうせいが家の大事だいじと有あつて、我わが
 手てでは吟味ぎんみもならず、主持しうもたぬ身の氣きさしは誰憚たればらず詮議せんぎせよ。此この役目やくめさへ仕課しおほせなば、以前いぜんに
 變かはらぬ主従しうじうの、約束やうさくせぬ證據しゆごぞ」と、一腰いっしやう脱だついて指しし出でせば、其その儘取ままつて押おし戴いたき、「盡じんきぬ主君しゆきみの
 御一言ごいちげん、徹てつへくし四十四しじゆしの、竹々はけ々は碎くだくるとも、誓うはひ取とつたる刀かたなの有所あり、詮議せんぎの手始てはじめ御覽ごらんあれ。」
 と、いたれ伏ふしたる定九郎ていくらうが、懷中くわいちゆうさがせば紙入かみいれに、暗たしなむ金子きんすは千郎兵衛せんらうべゐが、肌はだにしつかと用意よういの路ろ
 金かね、す、ヤレ侍しやうべ十郎兵衛じうべゐ、金子きんすは愚おろか鼎りやう一本いっぽん、取とり掠かすめては忠義ちうぎにあらぬ。」と、「」がハア御意ごいではこ

「お方は存じませねど、お歴々のお女中さま、御用あらば先づ／＼あれへ」と、詞にこなたは打通り、おら「つひに逢はねば不審は尤も去りながら、氣遣ひのさる者ならず、わし事は阿州の家中、安松數馬が女房号といふ者」と、聞いておまきが手をつかへ、お「是れは／＼思ひも寄らぬ、夫三郎右衛門存生の時は、殿様の御用を聞き、數馬様にもお目かけられ、お心やうお屋敷へも毎度お出入、御厚恩に預つた數馬様の奥方様、當地へお越しは夢にもぞんぜず、不睡だらけも女中の身、お救しあそばして下さりませ。コレ庄九郎そなたなりしも袴羽織」と、いふふとめて、お「其の儘／＼、此の度殿の御用に付き、夫數馬も藏屋敷まで罷り登る、幸ひの事と思ひ夫へ願うて京内参り、いはば忍びの事なれば、姫はしたも遠慮いたし、今日は町方見物のついでがてら、身まかれし三郎右衛門は、念頃の有つた故、立ち寄つたも夫の指圖、必ず／＼心遣ひは無用ぞ」と、いふ内用意の袂箱、明けて家來がそれ／＼に、直す手土産目録書、戴く手代が押し開き、手代「羽二重一疋おまき殿、白縮緬一巻御息女へ、郡内緞一反支配の手代へ、其の外家内へ金子千疋」と、お「是れはまあ／＼お冥加もない、家内の者までつど／＼のお心付け、お禮申しや庄九郎。」「庄九郎「ハイ／＼有り難う存じます、私は此の家の番頭でござります、御用もござらばお心置きなう。」「おま「あよりと申せば爰は端近、オ、それそれ見苦しくとも奥の間へ暫くお越し下さりませ、いざ御案内」とす、められ、おら「然らば暫時お茶

にした程足に實がいり、其の草臥れで寝た間ばかり、夫れより外に忘れる隙はござりませぬ。名を呼んでさへ日本國が一所へ寄るやうなには、顔見て是れがたまる物か、コレ御覽じませ、天狗の面を風呂敷に包んだやうでどうもならぬ」と抱き付き、しなだるゝ手を挽ぎ放し、お吉、これ／＼又してもあた猥らしい裏はしい、私には厭とした云號の殿御が有るぞや、あぢやらも手合も事による。重ねて仕ゐると鼻様にいふぞや」と、此ぢしゐられても構はぬ厚皮、九郎、云號々々といはしやりますが、其の云號の男とはそりやア誰でござります。お吉、ハテ知れた事、京に隠れるのな、藤屋の伊左衛門様、庄九郎「ハ、こゝりやをかしい、其の伊左衛門殿は死なしやつたとの世間での噂、それをお前も能く知つて居てから。よし又伊左衛門殿が生きて居やしやるにもよ、可愛さうに庄九郎が思ひ詰めて居るものを、見捨てて直に嫁入るは、大身代の伊左様と、榮耀かしたさぢや皆戀ぢやと、お前様を惡ういふぞや。お主様を惡ういはしては、第一番頭の顔が汗れる、悪い事はいはぬ、私がする様に成りなされ、こんなよい首尾又とない」と厭がるお辻を抱きしめ、しなだれ廻る真中へ、いつの間にやら別家の手代助右衛門。お吉、よい所へようおぢやつた」と悦ぶお辻。庄九郎は折角入つた居風呂の、底のぬけたる如くなり。それと悟れど助右衛門、態と何氣のない顔付、助吉「是れはお辻さん庄九郎二人ながら爰に何してござります」と、いふ娘が涙聲、お吉コレ助右衛門聞いてたも、

あの庄九郎が猥らしい、わ、をなぶりくつさる。」といふを打消し、庄九郎「ア、申し、私やなんにもいや致しませぬ、お前が芝居話をして聞かせと仰しやる故、三五郎と金作が色事を一寸仕形で話したばかり、イヤそりやさうと助右衛門殿、こなたは京へ登つたと聞いたが、いつの間に戻らしやつた。」助右「ホ、夕夜舟に戻つたが、それに付いてお家様に二日に懸りたい、どこにごさうぞい。」庄九郎「イヤお家様は奥にぢや、用が有なら呼んで来う。」と、いふを此の場の立込に、潮の目配と仕形にて、必ず何にもいふまいと、娘を寄め番頭は、奥の間にこゝろ入りにけり。跡はしらけて暫くは、挨拶もなき後の方、おま「ホ、助右衛門戻りやつたか、大儀で有つた」と母親は、庄九郎諸親奥より立ち出で、おま「先刻から聲がした故、速達はうと思つたれど、今日は珍らしい阿波の御家中、安松敷馬様の奥方様、大坂御見物の序なが、お尋ねに預つて、御挨拶やらお伽やら久しぶりの屋敷付合ひ。」助右「夫れは思ひも寄らぬ珍客、定めて何かとお心遣ひ。まあ早速申しませうは、京都の様、藤屋の家の騒動、伊左衛門様の事は御病死と、又生きてござるとも、取り／＼の風聞にて慥かな事は知れ申さず。」と聞いて娘も母親も、又今更の憂き思ひ、傍に差出る庄九郎「イヤ伊左衛門殿の事なら聞き合はすに及ばぬ、死なれたが本とも、根元根本偽りなしの大誠病死といふは皆謬で、眞の事は阿波の殿の名を衒り、何か江戸の吉原で太夫、湯け詰め、段々名りの戯えが過ぎて十二月、豊應、夏雪降りの

恨をしたとやらが江戸中の大評判、其のほくろ阿波殿へかゝつて、それで伊左衛門殿は阿波の屋敷で
成敗に遭はれたを、一家衆が隠して病死にして仕廻うたとは、大坂中に誰知らぬ者がない。さうい
事は、身のお辻様をやらなんだが大きな仕合、此の上は結納を戻してつづはりと、他人に成つてお仕
廻ひなされませ。誰かつて居たらどんな難儀に掛らうと知りぬ。お辻様は一人子、事なれば、内へ婿
取つたかよこつたりす。さう、どこに安らに良い婿がありさうな物ぢやない、己が勝手へ引きかけて
云ひ廻すとはしらぬ母、お母、いか様是れは庄九郎の云やる通り、世間の取沙汰も悪い伊左衛門殿、
殊に生きたとも死んだともしれぬ人に便々々と繼がつて居ようより、結納を戻してさつぱりと、婿返
の縁切るが上分別」と、母の詞に悲しむ娘、お母、さうや囃様何いはしやんす、常々お前の御意見に、
女子は其の身一生に、殿御は一人持つ物ぞ、夫と定まる其の人に、女郎妾の色狂ひ、腹の立つ事あら
うとも、情氣嫉妬の氣を持つた、随分夫を大切に、もしも不縁で去られても、又嫁人のせぬ物と云は
しやんしたを私や忘れぬ。縦ひ枕は交さずとも、云別すりや定まる殿御、其の夫故との様な難儀災難
有るとても、娘故ちやと諷めて、必ずく夫婦の縁切つてばし下さんすな。若し死なしやんしたが誠
なら、わたしや此の儘尼に成る、外の殿御は厭々」と、誠を守る娘氣に、母も冤角を涙ぐむ。助右衛
門も目をしばたゝき、助右衛門、御辻様ようおつしやりました、人の誠はこんな時が肝心、伊左衛門様

此の金と、私が部屋へやの此の戸棚こへ、置おき忘わすれう様ようはなけれど、三度さんど尋たづねて人ひとに聞きへ、念おもひの爲ためぢや、藏くらの戸棚こを違ちがへて見みよう」とふと立ち上ある。お弓ゆきは藏くらまでもなし其の金かねは、やはりそこそこに」と聲こゑかけて立ち出でづる數馬かずうまが女房にようばう、庄九郎しやうくわうが尖聲とがりこゑ、お弓ゆき、藏くらへ行くに及およばぬ、其の金かねがそこそこに有あるとは。して五百兩いほひゃうの金かねは何處どこへもござりふすな」と言いひ、外ぐわいまでもなし、そこそこか出でした五百兩いほひゃうが則すなはち戸棚こに有あつた金かね。お弓ゆき、何ぢや、是れが戸棚こに有あつたのぢや。コレこは是れは、私が在所ざいしよへ云いつてやつて取とり寄よせたに在ある、大それた戸棚こに有あつたとは、おんたら臭くさい馬鹿ばか盡つくすな。お弓ゆき、在所ざいしよといふ所ところが所ところは、在ある、但馬たにまの豐岡とよおか。お弓ゆき、豐岡とよおかの道程みちほどは大坂おさかから四十里しよ餘あまりり、日數ひかずにして幾日程いくひほどに往いつて戻もどるゝぞ。お弓ゆき、レレば急いそいで往いつても行き戻もどりでは八日程はちほどか、らうか。お弓ゆき、最前さいぜんから様子ようすを聞きくゝ、結むすぶて戻もどるゝ戻もどすまいと譯ひやく義ぎの有あつたは今日けふの事こと、大それたに八日も掛かるそぢが、在所ざいしよへどうして金かねを取とりにやつた。お弓ゆき、伊左衛門いざゑもんとわらの死しなる、事ことを、そこそこや前まえどからよう知しつて、それで其の金かね取とり寄よせたか。お弓ゆき、横道者わうだちものめが、お弓ゆき、盗ぬすんだ様子ようす有ありやうに白狀はくじやうせい。ことさめ付けられ、ぎつちりつまれど怯おそまぬ惡者わるもの。庄九郎しやうくわう、ハハ、變かはつた所ところへ出でしやばつて、變かはつた世話せわをやく女中ぢやうちゆう。一體伊左衛門いざゑもんといふ奴やつはどら打うちちのお太將おたいしやう、大坂おさかへ來きては新町しんまちの夕霧ゆふきりといふ太夫たふに罷かゐ、幾日いくにちも、居ゐ續つけの馬鹿ばか者もの、そんな呆癡だいちに大事だいじの總御そうごを添そはしては、未まだかつまらぬと思おもつて、大それたで疾とうから取とり寄よせて置おいた金かねぢや

やが、夫れが何とした人間きの悪い、盗人ぢやの自吐せいのとは、又私が盗んだといふには、何ぞ能
かな證據でも有るか。」二三、證據は我が胸の内に、僅かに見える有る盗人、一、こりや
をかしいわい、私が胸の中に有る證據、夫れが安へ出して貰いたいな。かうなつてはわしを身請れや
や、侍の女房ぢやと一連應はない、さうすりや胸の證據が出る、仕様が悪いと教うぬと、胸の
かゝる庄九郎が、小蛇ぐつと片手に取上げて、流しに紙を取り出し、一ハレ、助右新聞とやら、
其の内証と」と授けや紙入おし聞き見れば内には錠一つ、食部が行かぬと戸開の錠に合はして見れ
ばしつくり合點つ、一「コレは此の爵が腰に放さぬそりや合點つ、」流しに「と某れは」
お母は胸の手に紙入を上げ、一「五上の體氣が秋は」爲、主の食を盗んだおれが某れといふべしねども、
此奴が心はさうでない。大枚の金を盗み取り、僧に上座した顔で、夫れから登り入る其のお室を女房
にして、身代を丸取りにせうといふ罪を犯す番頭様、此の内には何が有るまいと、錠一つを其の
手付くれば、銀の錠は母親の、一「門火に手を取らるゝ思知らずの横道者、」と、おれは出でうらう、こ
いはれて何と庄九郎、正に「エ、あなふの悪い業事つての目だ、情儀其の悪くはつたが、」と、
タ、サ、いたいおごんは都の町で、待ちておれ、三日へらす、頼をしめて出でて行く、跡見返
て母に手をつき、一「あなふ様のお蔭にて、不時の難儀を越え、仕合、盗人ぢやつとおお申しや」

「さうに私とした事が最前から御挨拶も。お蔭で煩い病の根ぬけ、お勢も休めにナア。鳴門の……」
「それノ、奥の間へお供して、無事實なそなたの琴でお慰みなす。」
「夫れは段々心遣ひ、もうお
暇と存すれど、左様ならば今暫し、御馳走に預りませう。」
「座を立ち上り、娘の手を取り、お言、驚き
入つたに此の息女、真々雨夫に見えぬ致へを守る志、器量こいひ真心といひ、武士の妻にも有る
まゝ育ち。」
「手を醫められて母親の、心いそノ、」
「コレ助右衛門、増殿へ戻すは、元ノ所へ入
れ、おきや。」
「おきや、そんならどうでも此の金を。」
「ハテ變改するも娘が可愛さ、先づこゝへ戻きにや
ならぬ大事の金、戸棚へ入れて奥の間へ、いざ御越し。」
「母、娘伴ひ奥へ入りにけり。」
「跡に残つて助
右衛門、金取り納め、草履、煙管相手に獨言一日比から義理を立て人を憐む母親の氣質、夫れに似合
はぬ結納の印、戻して變改せうと有るは義理も構はぬ御料簡、また娘御の心はきつい物ぢや。どんな
難儀がかゝつても、一旦定めた男なれば、外の男は持たぬとは、丁度忠臣蔵の小浪が様な心ぢやの。」
「ア、どうぞ此の云を、變改ささぬ仕様が有りさうな物ぢやが」と、心一つにとつ置いて、案じる此
方彼方には、客饗應しの琴の音、重扇の風薫る、匂ひを傳ふ薦、忘れぬ人は今更に、さらぬ別れ
いしやらどけも、結ばぬ岩田帯、助「アレつい弾かしやる琴の味でもとかく夫をしたふ唱歌、若
し伊左衛門様の病死が本のことなら、いとしやあの子は氣遣ひにかなならしやるであらう。ア、どうし

てなにと夫婦にしてしんぜたい。」と、思案小首も驚きし、日の目眩き深淵後、浪人と思はれて尾羽を
枯らせし身の廻り、案内もなく打通り、更へ星三郎右衛門とは安ん、在宿ならば御意得たい」と
聞いて居る助右衛門、星三郎となたかは存せぬ、波三郎右衛門常は足れでござれと、旦那は死
去仕り、則ち我等支配の手代、御用ござれば私に」と、無慮にあらへば、更へ、支配人を有る
ば亭主同然、救しめされ」と上座に坐り、更へ御意得たい事別儀でない、見らる、通り我等は尾羽
を枯らせし浪人者、細細の者の取持にて、無州の大名へ召抱へられ、近々出陣す筈なれと、何
を言ふても此の風情、身の廻り何れの拵へ、少々金手入用に付き、此の家へ無心に参つたのと、暫く
の内取り盡へて殺れられうと、身分にあらずと御願に、いへし此方は御儀者、何れも是れは近北お
氣の毒なことながら、只今も申す通り、旦那相果て支配人の氣、金銀の事は心に任せて事ながら、御
浪人は御出世の筋と有れば、無下にならぬと申すはまい、其の事は御意得たい事でございます
と一々儲かに五言兩、我れ存有るに身分、めで相成むと、いふに此方はさうもして、御申し
五百兩と仰しやるは、小判の事でございませう、更へ、波三郎小判九百兩、いはば御儀を、家柄を見
かけて参つた、相立てておくりやれ」といふを打ちけし、更へ、申し、もう御意得なれとすな、大
抵物には御儀有る物、御浪人の御無心よく、有らうと察し、二歩か三歩か高き一兩とで六ら私に

料簡で、思ひの外口にさへ頬張る金高、今通塞の此の卒屋、家内の諸色賣代なしとも何として出来ぬ金、埒の明かぬ事に際どらずと、又外々へ御出でなされと、すつかりいへど動かぬ浪人、主人「イヤ、外々へ参る所存なれば、おし付けて是れへに参らぬ、家柄と云ひ金の有る事も存じて参つた。畢竟見ずしらすの我等なれば、街りとも思はれうが、高の知れた金の事、街られたと思つて當分用違つてくわかれ。」助馬「さうなればぬ、街られるも川立つも金が有つての上の事、盗人街りの用心に無、程慥かな事はなない。」主人「すりやどう有つても。」助馬「ハテ七くどい無いと云ふの。」主人「ハテ是非に及ばぬ、此の上はちとお座敷を隠し申す。」と居直つて、肌くつめけ差添するりと抜き放し、腹切る用意は強請の元頂、夫れとはしらぬ正直者、助馬「ア、申し、こりや何事をなされます。」主人「イヤ、放しやれ。」所詮無心を聞きと、けねは春公の望みも叶はぬ、此の儘一生浪人せうより、切腹して相果つる。」助馬「夫れは御短氣まゝ。」と、止むることには、障子を聞き、お弓は何か繪圖取り出し、引合はす姿繪に、割符を合はす浪人者、扱こそ是れと心に笑み、さあらぬ體にて、助右衛門「助右衛門」と呼ばれてはつとは云ひながら、爰も氣遣ひ立ち兼ねて、助馬「ア、申し御浪人様、必ず早まつて下さいますな、又料簡もござりませう。」と漸う窮めて隔ての襖、開けばお弓が小聲に成り、「一都始終残らず是れにてきいたるか、あの浪人は阿波十郎兵衛といふ海賊、わかしの石川左右衛門にも

劣らぬ盗賊、夫れ故五右衛門の銀十郎と署名する山、仔細あつて此の如く繪圖を取つて尋ね捜す、此の度夫の上坂も殿よりの上意にて、彼を捕へる爲の事、今日計らずも此の司が廻り逢うたも、數馬殿に手柄させいと天の賜、ハア、赤や橘しやう、家來にいひつけ召捕らん」と、勇み立つを押しとめ、御三成程左様なことを疾風の神で敵とやらで、近頃氣味のよいことながら、爰の内でお縛りなされししたら掛合ひに成つて、若し親方が難儀致す様な事は御座りませうといふこと、氣遣ひがれば、お月「いか様なう、この内で召捕らば掛合ひの筋は通れぬ、夫れを度うて懐情盡員の沙汰もなす、銀十郎を召捕つたは斯様々々、明白に致へ言上せにやならぬ、其の時に掛合ひ、後家御をへ召さるゝは定のもの、又其の上に病人の口書次第でとんと難儀かかゝるやう、そこを思へば近比氣の毒、というて手に入つたあの十郎兵衛、見過しては来へ立たず、召捕つゝに此の家の懸、ハアどうしたらよからう」と、思案の體に助右衛門、何りややと左様な掛合ひでお國へなど召され、女の方事なり難儀千萬、何とかう遊ばしませんか、如何にと致し、あの浪人を去なします、斯く御家來衆に言ひつけて門でお縛りなされませぬが、スリヤ私の親方にはかけ構ひは無いと申す者、一と度程尤も、併し大抵の奴でなければ、自由に此の家を去ぬといぞや。」助右「イヤモそりや致し様がござりませ、何で有らうと云ふのが申す通り金貸しでいなします、ハ此の家を去つて捕れたれば、御家來衆

が縛りなされますか、そこでは金も此方へお戻りなされてくだされれば、難儀も掛らず済むといふもの。」「ム、でかした通れ上分別、然らば其の旨申し付けん」と家來を密かに小手招き、お弓、汝等は裏道より表へ廻り、コリヤかうく」と聞き黙く相圖の手配り、助右衛門は何氣なく勝手へ出で、お弓申し御浪人様迷惑千萬、御無心、私の心では済まぬ故、女儀ながら親方に相談致したれば、お侍様の命に代へての事無下にいやしいはれまい、よい様に計らへし有る故、仰せの通り五百兩御用立てませう程に、御出世次第急度御返済下されますか」と、いふにこなたもの刃物を納め、お弓然らば拙者が望みの通り聞き届けて下されうか、是れはノ、過分至極」と、お弓ハテお命に及ぶ事、手前も逼迫儀なれどお取りかへ申します」と、戸を開いて以前の金、包みながらの五百兩渡せば取つて押戴き、お弓拙者が命助なる恩義、生々世々忘れは置かぬ、心も掛けば早お暇、左様ならばござりませうか。」「お禮に申して。」「さらばノ」と金取つて懐中へ、表をきして立ち出づる。待ち設けたるお弓が家來、家來こりや捕つたわ」と左右より寄るを蹴倒しもんどり打たす、手練の曲者持て蘇家の來が鈍きに兼ねるお弓、小徳を帯に確乎と、挾箱より用意の捕縄、表へそつと竊ひ足、お弓阿波の十郎兵衛遇せぬ」と、夕日に西へ入身の備へ、イヤヤあよこぞた」とほくしの柔術、互に度取り表目、助右衛門があぶノ、二心を配る氣を配る、お弓をちやうど眞のあて、逃はく曲者のがさじと、たに

ろく足を踏みしめ、跡をしたらうて行く道は、大川筋の遺傳ひ、かけくる浪人追ひくるお弓、人なき所に立ちどまり、お弓「こちの人。」十郎「女房共、そんなと首尾好う出かしたく。五百兩といふ仕事、思ひの外心安う手に入つて有り難い」と財布取り出し数く後へ、いつの間にやら庄九郎、一「や様子は聞いた御妻め、よう先にはえらいめに遭はしたな。御共を引つくり、代官所へ引いて行く、覺悟しをれ。」といはせも立てず引き抜いて大袈裟切り、どつり響く暮六つの、かね懐へ夫連、行方しらな。重なりにけり。

第五

坊主南無あみだ、抑當寺の御本尊目剥の如來と申し奉るは、人皇二十六代武烈天皇意逆無道の王様にて渡り給ふ。其の時に此の如來出現ましめて御怒り給ひ、兩眼を剥かせ給へば、武烈天皇は眼をまにし給ひしより目剥如來と號し奉る。かかる尊き御佛なれば、此の攝州寺の如來に女房給ふ。一度拜する輩は、惡事災難を免れ、時花病取りつく事したはず、また盜賊が這入らん。女房は、眼み殺し給ふ。如來の尊像でござる。此の度序に御開帳はござれども、又御開帳に稀なる御事でござる。信を取つて拜を有られせう。此の月には三條小鍛冶が打つた名劔、義経公よりの

御寄附でござる、とく二拜なされい。追付開帳に聞えなければ、賽銭を上げて御縁を結ばれませう。」と、縁起坊主の口車、老若男女押し合ひ合ひ、奇瑞も取り／＼聞き傳へ、お百度参りの數取りや、押ける散錢ばら／＼、早開帳の鉦の音、戸帳も下る七ッ過ぎ、思ひ／＼に願籠めて、皆散り／＼に立ち歸る。二人の弟子はぼつと顔、鐘坊・ナント・覺坊、此の間に無上やたらに夥しい参詣、此の如來の奇瑞には、根性の悪い者は眼を剝いて睨ましやるの、お請けが有ると座頭の眼が明いた、膝行が立つたのと、世上で専らの取沙汰、そこで我等が出鱈目の縁起、なんと味やつたで有らうがなし」

と覺坊「いかにも貴僧の云やる通り、今まで何の役にも立たぬ如來ぢやと思つて居たは、こちとらが根性の悪いの、是れまで貧乏な此の寺、和尚も俄に福僧になられて、今夜彼のお梵妻が見える筈。此の様に賽銭の上る時にしこだめて、買梵妻で樂しまうぢや有るまいか。」と鐘坊「コリヤよからう。」とそ、り立ち、天窓擲いて悦ぶ所へ、奥より和尚立ち出でて、和尚「コリヤと覺坊鐘坊、もう日も暮れか、るに何をのらくら、賽銭集めて仕舞はぬかと、嘲られてとつばかけ、賽銭箱をうち明けて、手ん手につなぐ數珠の實の、數は八貫蓮葉に、浮む小玉や包み銀、一つに集めて、和尚「ホ、昨日よりは銀納が多い、モウ日も暮るれば彼の者が来るであらう。鈍才は爰掃き出し火を點せ、才覺坊は此の錢銀、納戸の内へ運んでたも。」と、打連れてこそ入りにける。既に其の日も黄昏や、身の置き所なき花の、

傾城の波の鳴り

和「アイヤもう、かう解け合ふからは云つて置かねばならぬ、拙僧が寺號は尊正寺、尊名は正清と云ふ様に、まう覺えて居たが能いぞや」
 和「アイノ、そんならお前のかへ名は正清様、いかにも正の字は正しく、清は清いといふ證據」
 和「そもじの名は」
 正「アイ正貞と申します」
 正は正しい、貞は貞女の貞の字でござんす。おまへの名は正清様」
 和「そもじは正貞、ハテ思ひ合つた名ぢやなう。」
 と、坊上天宮をかし合はせ、抱き付いたる有様は、蔓を絡みて出来もよき、西瓜を見るか如くなり。
 和「先づ／＼御氣に入つて大悅致す、仲人は宵の程、最早お暇申しませう」と、淨慶は庭に下り、ひよろり／＼立ち歸る。
 和「サアノ、餘程夜が更けた、おすはとうから起きねばならぬ、門をしめて火の用心、正貞おぢや」と手を引いて、和尚は一問へ入りにけり
 跡に鈍才覺坊、羨ましけにながめやり、地「ひよんな氣になつた、夜が更けたらば抜けそならぬ才覺坊」
 才覺「オ、おれと體がしやきばつて來た、蟲養ひに抱かれて寢ようか」
 鈍才「す、抱かれて寢るけれど、此方も愚僧も同じ身の上、エ、こんな事知つたらば、去年落した前髪が、どちらに有つてもよいものを、ア、任せぬが世のならひ、サアノ、寢よう」と、帶解きひろけ抱き付き、寢るより早き高野、早更け渡る夜嵐に水も寐入りし丑三頃、皆一樣の忍び頭巾、先に進むは闇の黒八、ばつたり道七、跡に控へし大男、大だら腰に名も高き阿波十郎兵衛、夜盜の一族呟き點頭き、黒八道八腰の段平引き抜いて、手練の早業敷垣

一重、音もなんなく切り破り、一人はそつと忍び入り、門を窺ふ門の戸を、開けば十郎兵衛し、
と、指圖に随ひ兩人は、差足拔足納戸の内へ忍び入り、銀箱かますを引抱へ、沿うに和尚は聲を
「ヤレ盗人よ」といふ聲に、二人の弟子は飛び上り、わつと裸で闘ぶるひ、黒八道七觀み付け、
あた喧しい、おどほね立てると僧等が爲にならぬぞ、押し黙つてけつかれと、つかうど聲に和尚も
わなく、安ど大事と闘をする、お馬や命しらすの盗人めら、此の寺へ盗みに這入るといふは、僧
等が大きな不覺。安を何所ぢやと思ふ、コリ、安は寺町尊正寺ぢやぞふ、ふくも本尊は奇瑞の有
る日割の如來、諸人羣集をなすをしらぬか。わいらが標な盗人共が這入り錢銀を盗んで往かうとする
を、アノ如來様がお日玉を割かしやると、忽ち其の體がさうく、ぐにやぐに、絆じて死ぬ
るぞよ。そんなめに合はぬ中に、盗んだ物を置いて、死言をして早う去に居らうと、
喧しいわい、アノぬかした面わいなう、おいらが手に入つた物を返すといふは、ア、如來が驚嘆に
なつて、泥龜屋をする時節に返してこよう、
よ、よい、コリヤノ兩僧、此の上は如來様の力を借らねばならぬ、僧等も俱に黙さうと押し、
かにも合點と裸身に、手巾鉢巻したノ坊、和尚も俱に黙さうと押し、
朝に尊き佛は多けれども、中にもこの日割様、一に意地の悪い氣、二に實心、三に三々なめに合は

[illegible]

之承どうおやう」（おのづから）太夫さんは、顔で頭がふらつくとして、私先へ（おのづから）「コレハしため、そ
んなれば此の子も此の手、聞きまして居たが好いわいの、手鞠はかりついでるよと、最一走り呼びま
しておちや。コレ／＼これいなう、ま、聲一アア、夫れでも手鞠がわんや面白。」とん／＼／＼走
り行く。太夫「イヤ又夕霧様もきついさしましやう、旦那江戸へお出でなされた、半年もお通ひなかつ
たに、此の頃久しぶりのお歸り、隨石のやうにいつ付いて、こころさうな時、叔は磯原で「お樂し
み、少しひざりつ筋と見えたる」エさうおちないぞ、佳吉屋の阿波のお客、身前の尊で起つた
瀬、どうぞ伊州様の方へ、ちやつと身受さなさいと、こちらの旦那は氣をいれて、京の藤屋の手
代衆に逢うて、金一降り受りて来ると、それで一昨京上りの伊州様を、舟を新門は俺に迎して
本家へ行たか、氣味は利いたが、親共は悪い顔で旦那が帰ひ、お更つて居るにやよいが、旦那、旦那、
そんな先折おつしやるな、大事の祝儀日、神様へ早うお祝儀へとし、二人申さん凡に、重なり
合うてござん様には「一アア、喜八下手や、足れから太夫旦那一白きやう、白取りは俺の役、お澤
さん、お徳さん、二人を助の木太夫、旦那様しす買ひしよ。」とユウ／＼／＼、此方の婿やわ
妻や色めが、紅の襦をしんどろもんどろかして、しんどろいと、腹をやりししたを助、さう今や
太夫「旦那は金持、人太は親共、我等は宇賀持、喜八は好持、中層は浪死か、お澤が尻間、悪戯さん

すなお徳かやきと、逢ひの長持、もち込み取り込む吉慶吉田や、うらば是れからぞんざいらく、さ
 ん、いらく」と舌鼓、うち連れ奥へ舞を舞く。苦界の中の樂しみに、勤めと色と、葉の、音に聞え
 し全盛と、名に々霧の立姿、雲の筆にさへ、舞書きなう人越後町、しどけ媚く袖舞の、あとに身
 代破れ編笠、紙子の朝夕の、煙も其の日の貰ひ喰ひ、舞お情に舞もさう太夫様、申し太夫様
 と、舞いて郭の揚や町、遣人が見付けて走り付き、舞を振も此の乞食殿は、伊勢参り道か何そ
 の様に、太夫様の脛へ汗い装で、悉皆花畑の鳥おどし、見なりの悪い、退いて貰ふとつかうどに、
 ひ舞つくも、打ち守り、々々「コレなう、はしたなう叱らぬがよい、心ありけな物貰ひ、紙子姿は舞
 果て、昔はどんなお方やら、おいとしほや」と美しい、詞に取付き、舞「さす名にしおふ太夫様、
 お見立ての通り其の以前は、分相魔の花もやつて参りました。かうした風體の者を結構な御挨拶、あ
 んまり有り難うて、物貰ひます所おやない、なんとお禮の申し様も此の身分、さうしい物おやが程の
 志、どうぞお受け下さりませ」と、貰ひ溜めの錢一文、破れ屋に差し出せば、人々、汗な、太夫
 様ありや氣遣や、相手にならすと、さすお出でと、いへど諸へす錢取り上げ、々々、縹子縹編が戀
 はせず、身には縹子縹をかけうと、心に縹が著たいとは、昔の粹な女郎衆の詞、御念もじのお禮、お
 う存じます。」舞「そんならお受けなされてくだりますか、え、有り難い、其のお情にあまえ

借りは女郎の儘、したが其の姿では宿の思はく、コレ染之丞、幸ひ伊州さんの替衣裳、召し換へて連れてましておぢや、私や奥へ行て居るぞや。」「アイ」と禿が長持の、夜具に添へたる大盡小袖、著かへさすがの遣人は呆れ、「いかに羽ぎきの女郎さんぢやてて、物好きも好い加減、太夫様を乞食に借すとは、大に御羅喉がす様な首索、櫻のお客へ知れぬ先に、早う戻して貰ひましょそや。」夕霧さんの禿來、染之丞々々々、錢一文の太夫様呼びましょ、やあ。」と、喚いてひんしやん出でてゆくとかくする間に取り繕ふ、破れ紙子は時の間に、忽ちかはる舂模様、髪撫で付けつ撫でさすられ、物貰ひは夢見た心地、有り難過ぎて身はがち／＼。太四郎喜八飛んで出で、大目黒やつちやお出で、初対面の判官様、北か南か判と見た眼は違はぬ。」と、そやし立てられ冷汗ながら、「す、南とち／＼、所は長町や南堺筋九丁目。」喜八「へえそれが貴方の御本家かい。」喜八「す、本卦當封うらやさんの筋向ひ。」太四郎「ハ、、そりやお下屋敷であろ、頭からお廻りは、もつとちやうでござりましょ。」禿「サ其のお長とは我等相住み。」太四郎「したり、あなたのお姿を、お長様と申しますか。」禿「サア夫れはおれに好う懷いて、戻ると尾を振つて手をくれる、布圍の習りに抱いて寢ると、温うてよい物ぢやが、時々足をねぶるには困るてや。」「エ、いやらしいお契りぢやな、さうした色樣ありながら、此の郭へお出かけは、洒落木の金毘羅大盡さま、先づお通り。」と、そり立て、足元にころり、太四郎「」

リや何ぢや、うそ誠い米袋、乞食が爰へ来う様はないが、捨てて仕まへ」と門の口、横置ア、勿體ない大事の物、一握りを大體では呉れぬぞい。」と云ふ二ツリ、きつい、害いと見せる悪口落は、是れもちよはくりぢやんかぬかい。」物置「ヤ、貴様も此方の町から出たが、まづ罷下地があるわい。」と、素性顯はす歩きぶり、されども此の人夜はくれども晝見えず、どうやらしつんだ諸ぢや、思へど知らぬ牽頭持、且邪上ぢやし付いて行く。素振見付けた伊左衛門、一人小腰の立ちつ居つ、生頼城の四つ足め、乞食にさへ惚れるからは、遣り續ひなしの助兵衛女郎、放されたが侮しい、あれなら身清の仕人さへ有れば、何所へでもうでるで有る、引きすり出して踏まうか、夫れもあんまり野暮ぢや。どうぞ降らしい頼打ちの仕様が、有りさうなものぢや。と、格氣の仕様に手を組んで、上夫山半ばお澤が走つ、。「申し、所住の詞衆のお侍様、お前様にははうとて、氣相變へて見えたわいな。同じか違はせましとわな、それで一寸知らしますこと、いひ捨て出づれば、何の侍、怖い事敵もない、逢うてこそさう強ひ事、云うては見たわ、無、御客、壁かに意地悪の部兵衛、色気の伊左衛門、ヨリヤ違はれぬ、隠れう所も、何のその、夕暮が色づき掛つ部兵衛、いづその事せりふせうか、イヤさうしては、どうせうな、太夫が佳境も見たり、破るに及んで見ん、と短い心を長持の底に納めて忍び居る。上の女、おぼろゝ間です、部兵衛が高呼ばはり、部兵衛「伊

左衛門の太ふりめ、三ヶの津おかまひの身を持つて、大坂の郭がふひ、夕霧が蟲になつて、又つ氣を
洒落臭い、爰へ引き出さ仕様が有る。家人「どの様に仰有つても、伊左衛門様は爰にいらつて、那方うへへ引
隠すと汝等が爲にならぬ。よい、家捜して國迄へ引きさつて行く、案内、い」と、そこら傍觀
み廻して入る跡へ、亭主吉田屋喜左衛門、船上りの合羽がけ、喜當太四郎喜八來て居るか。「太四郎」す
「喜左衛門」も、待つて居る。京の首尾はどうか、かね請取つておかへりか。今も今、阿波の
客が僻おこして、伊左衛門様に直に逢はうと、一遍三階まで家さがしすれど、面妖な伊左様が、いつ
の間に何所へやら、とんと姿が見えせぬ、マア早う金の顔が見たい。」と、氣おひ蒐つて尋ねれば、
喜當なんぢや伊左衛門様が見えぬか、そりやこそな、なむ阿彌陀ノ。太四郎ア、忘々しいなん
ぢやぞいの、まあ伊左様に逢はしたい、お澤殿最一度尋ねて。喜「コリヤノ、もう尋ねるに及ば
ぬ伊左様は死にやつた。違ひなし正眞事ぢや、藤屋の本家へ尋ねていて、様子に聞けば伊左衛門
様は、此の夏江戸の店で死なしやつた。しかも大名の名を銜つたほくで、成敗に合はしやつたと、早
速店からいうて來て、とうに體見の葬禮、今日石塔を立てる日ぢや、坊様が經やら百萬遍やら、始
めて會うた御隠居が、私提へて泣かつしやる。コレ戒名も書いて貰うて來た、好色院釋客美男信士、
たつた今まで姿の見えたは、夕霧様に心が残つて、逢ひにごつた幽靈に極まつた、悲しや跡の月か

しなから思へば、波に、もうよごります。二、喧嘩はうらうと住吉屋で酒に酔う、お身の痛
みに懸草で、懸草酒もよごらんしよ。三、チキチ、タホ、、、、チキ／＼、チン、瓢箪ち
や瓢箪ちや。」とお留守になつた留守居の腰、押し立ててこそは出て行く。駒の時間、夕霧は、禿に
鑢子杯もたせ、タ具手の悪い、古こへはづしてぞ、未長う固いの杯、一、お上り遊ばせと、客あ
しらひの喜して、心は何にた、う紙、伽羅の薫に咽返る、情氣の薄浅間山、藤屋にそつと長
持の、二人が有様見るとも知らず、書此の様な思ひがけない、有り難い事はござりませぬ。コリ
まあほん／＼にお前様を、抱いて寝るのでござりませぬ。一、ク、サレハイ、お前の望み聞き入れた
其の代りに、又わたしに願ひがある。二、一、サ、何なりと承りましよ。一、サ、願ひといふは、
私を抱いて寝ずに抱いて寝て下さる。三、かういへば願ふとも思ふうで有らうが、神様かけてさう
おやない、藤屋の伊左衛門様とは、ついたちがやないわいな、誓紙より堅い瓦の心、任せぬは勤め
の身。此の間外へ身受の納束、伊州様も部屋住の、急に才覺出来ぬ中、若し外へ定つたら、此の夕霧
は生きては居ぬ。夫れほど心底立てる身で、お前に抱かれて寝ようというたは、貧しいお方の志を
立てるも一つ、眞實はお前様と寝たといはば、袖乞に肌ふれた女郎と、郭でばつと噂にふり、客の落
ちるがわしや楽しみ、身請の沙汰もやむ道理。此方から頼んでござして、憶れて貰つたい所を、よ

う惚れて下さへした。此の上の御無心には、杯許りて料簡して、違はす違うた分にして、面内許りの色になつて下さんせ。夕霧が命一つ助けるはお前の心、一生思に著ませう。とを食を升む兩の手に、落ちて流れの涙なる。つくろ、聞いて顔ふり上げ、眞天大膽、必ず其の詞を遣へず、伊左衛門の事を、一生見捨てて下さるなや。一、もう言は、やんまりや、お前の心も。一、いかにも、誰も聞いて居はせぬか。と、見廻す後の長持にニヤと伊左衛門様か。助右衛門か。はつと顔の紫ひつしやり、おニコし申し、隠れしやます事はない、伊左衛門様のことには付いては、夕霧殿に恨みも有る一通り、わしは今嬌の縁屋の手代、親方の娘お津様は、藤屋へ嫁入つしやる筈、親御同士は言野東、結納の金子百兩を、盗賊に取られたは、此の助右衛門様一人のあやまり、藤屋への言許に、私がでに周當受けて、其の強引に大荷やみ、少々の小遣其賣り喰ひ、たうとう長町の真屋住居、途中で伊左衛門様のお目にかかり、江戸のしだらのお嘲し、果の本家へは、立寄る事ならぬと良ねなお姿、いはば親方の増様、己が爲にもは嘲殺、々々ノと内にお供して、頼ない世帯を知らしたは、氣兼ねさるゝも氣の毒と、極分貧乏を隠して居れば、助右衛門、佐が大阪へ来たは、夕霧に逢ひたさなれど、此の寒い装で郭へは行けぬ、衣裳の老を喰むにとある。お津様の事をお津様に思はしめるならと、小腹は立てど、ア、しどのないがよい来りやと、古手屋を許諾して、居付居る一食さかと、

思へば幾夜さもく。適内にござると、本見るとて、小買の油に燈心を、十筋も入れて夜明し。晝になると氣が重い、食が味ないと言はつしやるも無理ではない、諺うたひの寄米を喰ひながら、高砂屋の羊羹をとてこいの、其の間にはとつけない、金四五十兩借つて呉れいのと、撮んだやうに言はつしやる。郭の贅に入るかね、お辻様の仇になる夕霧殿、とはいへ誠の心底なら、本妻妾もあるならひ、慾でするのか眞實か、こゝ様の性根を、試して見るど食の色事、紙子室に情をかける、聲が入つた女郎の意氣地、なぶましやつたも無理ぢやない。いふは管ぢやが、最前のわしが姿の通り、紙子替た伊左衛門様と、随分添ひつけ其の上でお辻様の身の上も、見捨てぬ様に頼みます。おほこな娘の一筋に、貴方をこがれて、秋の頃よりぶら／＼と、今に煩うてござるけな。それ程に思ひ詰めつしやつた心根がいとしさ、袖之中で、茶屋遣ひの仕送りするも、矢張お辻様へする奉公、かいの廻らぬせんの話り、噂を伏見の泥町へ身賣、三つになる坊主めが、乳に離れて／＼と、泣寐人に寐をる顔見れば、浮世の義理と諒めても、涙がこほれます。」と、歎けば道理と夕霧も、「お辻さまに義理立てて、思ひ切らうと思ふ程、どうも切られぬ、こらへて。」と、同じ思ひをかき口説く、心のたけは塵紙と、のべの幾重を染めにけり。二人が誠肝にしみ、衣裳櫃の蓋押し開け、大盡妻引きかへて、以前の紙子身にまとひ、すぐく出づる伊左衛門、伊三助右衛門、夕霧、おれ故段々の心遣ひ、何にもいは

ぬ、諸事この交で推量しや」と、いふに一人は顔見合ふて、「魔術といひながら、半前屋の旦那殿の是れがそれの果てかいの。」夕暮此のお姿見ては、アイ、一倍思ひ得切らぬ。一層五というて、五百兩といふ金がなければ、外への身請の極まるお身一つ、太夫が身請は身どきがする。」と障子ぐわらりと田舎大衆、はつと驚き立ちのけば、十郎「イヤサ、何方へもにがしはせぬ。身請の金子は百兩。則ち亭主喜左衛門、親方の相對濟んだれば、夕暮が身は身が儘、身うちへしたれば、武士の言分は立つ、乞食に身の穢れた傾城、侍の妻にはならぬ。蟬出れ其の節は、乞食めに報謝にくれる、勝手次第に連れて行け。」財布其一儘役に出せば、夕暮「お金を下され、身請して添はせよ有る、いなたなれ。此のやうな、お慈悲深いと顔見合ひ、無言でいふは江戸の浪人、何れもぢやない。」と、いかに其の通り、胸つたふに膝城から、血たへ、船納の即、其の時藤屋へ返させては、お辻殿と伊左衛門の縁切れる、其の離縁をうたふは、髪と切つた五百兩、則ち夕暮が身請金、今伊左衛門へ返解れば、夕暮の算用はまゐの。夕暮「おれもやつぱりお情、アよう荷つて下さりました。有り難い。浪人様へお礼、今伊左衛門、見れば見知り、世間で阿波十郎兵衛殿、一層、阿波の客に近付はるまい、此一殿は上人、井土前殿の地、手打になされた伊左衛門が、爰に居よう様はない。殿の御座の節、又名の書名して浪人に。」

「誰は、心で集めても尋められぬが世の説、そこを察して世話するは、人の心になり替つての思返し。」
金銀の貢ぎは盗賊の一徳、此の左右衛門の銀十郎が受けとつた、死んでしまふた伊左衛門、科の帳面
さらりと消ゆる、吉田屋の幽霊客、夕霧大夫も世間晴れて、幽霊殿と未來かけて樂しみ召さう。こゝ、粹
な舞きも主人のかはり、割符を阿波の銀十郎は、仁義正しき盛人なり、次の間より喜左衛門、氣の毒
さうにおどろく出で、第一最前から何れも残らず聞いて居ましたが、去りとは思ひかけもない、お
前様があつ、噂のお盗人様でござりますか。お名を聞いて肝玉が顫り返り、胴顫ひが出ましたが、人
には添うて見いぢや、段々聞けばさすがに大きい御商賣をなさる、程あつて、譯の立つた粹様。いや
又、此方のお客も揃ひも揃うた、一人は幽霊一人は門立、一人は大それたお客様。賢と、夕霧様の身
代、貴方の方から出ました金を、親方へ渡しよして、ひよつと跡でほくは来やしまいかな。上様、なに
さななき、五右衛門の銀十郎、假令明日召捕られ、いか體の責めにあはうとても、同類もいふ男ぢや
ない、勿論お手前達に難儀かけてよいものか。主人の御用達するまでは大事の體、手足の付いて有る
間は、めつたに捕へられもせぬ男、氣遣ひせずと金渡して、親方に落着かせいさ。亭主けふの世話代
有り合ひの金子、取つておきやれ。」と打つ露も、氣味悪さうに、毒「ハイ、いやもう是れには及びま
せぬ、あなたに納めて置かしやつて。」上様ハテよいわざ、どうで是れからせきノ、來申す。「大れ

てに大坂の、まぢくなりし世の噂、若しも此の世におはせずば、長き未來へ嫁入り、思ひ詰めても振袖に、涙片敷く手枕に、馴れし家居を立ち出でて、現の闇に迷ひ行く、心の内ぞやるせなき。戀風や、其の扇屋の金山と、名に立ち登る夕霧が、降りみ降らすみ空情、あはぬ客衆は幾夜きか裏の頼被り、深いと人も赦し色、ゆかり藤屋の伊左衛門、忍ぶとすれど古の、花は嵐に落ち果てし、身の行末と定めなき、水の流れのうき苦海、紋日々々の八文字、禿立から生花の、水上け初めし昔より、可愛男にたゞ一人、外の客衆へ空言の、誓紙の鳥後朝に、泣かすも熊野の御罰かや。過ぎし口舌は古田屋の、二階座敷の揚の客、それをひそりの廻り氣な、萬才傾城置いてくれ、見ると厭にましき、心の腐つた客萬才、よく客にごまんさい、今日立ち歸るあしたより、外の色と仕かへけるは、誠に日出たう候ひける。タ「そりや何いはん。伊州さん、此の夕霧をこな様は、まだ傾城と申うてか、去年の冬から凡一年、二年越しに音信なく、それが喜じて癪の種、煎藥と煉藥と、鍼の力で漸うと、命繋いでゐたものを、愛想づかしは何事。」一と、泣くは女郎のお定まり、客に逢うての空涙、雨の如くに降らす故、たいふと是れを名付けたり。」タ「アレまだ酷い事許り、癪が盡なら是れ見て。」と、ちつと取る手にさすが又、いなにはあらぬ引舟の、綱が機轉の一つ夜具、後は互にいふ事も、何の可愛が高ぞかし。同じ戀路の迷ひ道、お辻は見るより走り寄り、其、なう伊左衛門様かいの。」と、其のよ、

縁に浮く露の、たまに逢うてもそれごとくは、得も々霧が氣をかねて、くつひに見しらぬ女申様、いつくの誰。」とよそのめけば、目覺えがないとは餘りぞや、親と親とのいひ名付け、嫁といふ名は有りながら、袖も得詰りず此の儘で、尼になれとのお心が、夫れも誰ゆゑ川竹の、つれなき霧に隔てられ、水に數書く浮れ舟、焦れ死なとは願ひ。」と、うき年月の溜涙、早汲み取りし徳の徳、夕お辻様とは貴方か、おいとしほいともお道理とも、かうした定まる奥様の、私故とも思さうが、ほんに哲父お二人の、申を隔つる心はない。それ許りに辻さんの、お氣の廻りのまね詞、そも逢ひかゝる船めから、女房はないと間に合ひな、今更退くにも退かれぬは、いとらしいが南ぢやと、堪忍し、さかき口説き、ながら袂の妻と妻、町と郭の品かはり、色は愛らぬ一筋や二筋城の眞實、誰か知らぬいひ。「コチャ眞實殿御に思はれて、色里の一夜は勤めがして見たい。一夜の情も、つらさ思しぞ可愛さの、義理と義理とに絡まれて、藤屋も心ばらぬの、一村を驚かす、人を人と忍ぶ身は、そこよ木陰を尋ねわび、走れど跡へ夢心、覺めては虚空、泣き言ばかりや寝らん。夢の浮世に借駕籠の、殿家の夢や結ぶらん。丁やも權よ、旦那殿はきつい魔はれ、さうさ、さうさ起つう」と、駕籠のたれを引き上げ、申し、「さうさ起つう、ふつと目覺す伊左衛門、走れ出れば引き止め、丁ア、申し、どこへお出でなすれます。」と、言ふにはつと心付き、お、さうさ、さうさお辻

と云ふ言が言氣の始、扱は夢で有つたか。と、ほつし溜息つく許り、二人の駕籠は合點行かず、丁、エ聞え、コリヤ夢がな見やしやりとしたものであらう。サア申し、極の長町裏、毘沙門でござります。一併、す、いかい大儀でござつた、ソレ駕籠賃。一丁、ハイ、ハイ、そんならお静かにお出でなされませう、また住古参りの節は、お乗りなされて下さりませ。サア、ハイ、こい。と駕籠昇き上げ、別れてこそに歸りける。かかる所へ息急ぎ、とつぱ性の武太六、それを見らふハット許り、笠傾けて行かんとする。武太六「コリヤ伊左衛門、俺を見て逃けろしは横著者。われに逢はうと思つて、今長町に行く所、よい所で出つくはした。取るかへた銀いま受取らう、サア渡せ。」件、成程御七も去りながら、昨日も狀で申した通り、今と云うては調はぬ、どうぞ明日中。」武太六「ヤア黙れ、コリヤ一昨日というた日限が切れたぞよ、われも昔は藤屋の伊左衛門と云ふ大身代、今素寒貧になつて、別家の手代が貰いでは呉れませけれど、都度々々には云ひ難い、身分におつて人用な銀、男と見込んで頼みますと、手を滑つて頼んだ故取りかへた五十兩、係人の夕露めと、汝が申に遣うた銀、半時も待つ事ならぬ。サア今渡せ。」件「サア今というては。」武太六「無いとぬかすのか、此方にも急に人用なことがあつた、サア今戻せ待つ事ならぬ。」件「ソリヤ餘り無理といふ物。」武太六「何が無理ぢや何が無理ぢや、金借りてまだ其の上に無理と云はうが猶ならぬ、是非戻さずに代官所へ、サア、こい。」と

路に居るに、少しなりとも助右衛門の、世話を助けうと思ふ故に此の始末、假初ながら五十兩と云ふ金、又もや此方に苦勞をかけ、もしや難儀になるまいか。」と、涙ぐめば、十郎「ハテお前をお世話するはお主への恩がへし、御禮には及びませぬ、明日の晩まで受けあつた詞は金庫、お氣遣ひなされますな。モウ追付日と暮れば早うお歸り。」伊左「そんなら今の金の事は。」一ハ「よござります、何

もも私任で、おつらぶ。」と銀十郎、玉造へと立ち歸る。跡見送りて伊左衛門、母、頼母しい郎兵衛殿、こ、手合はせて後影、拜む心の細道傳ひ、罪とが防ぐ永品の、珠数も涙に管内、伊左「ヤアお弓殿。」お弓「伊左衛門様、見れば、思へしも寄らぬ、此の間は暫くお目に。」伊左

ればされど、逢はぬが先と只今、銀十郎殿にもお目に懸り、また我の息に差詰めた金の才覚、お弓殿の手前も氣の毒。」お弓「オ、あの仰有る事わいの、お世話致さにならぬおまへ、それは少しも氣はねど、たゞ氣が、りは其の身の上、ハア如何がな。」と目に溜まる、涙隠せば伊左衛門、伊左「お弓殿、見ればそまじは涙ぐみ、顔の色もきつう悪いが、心持でも悪いか。」と、尋ねにお弓はうち萎れ、包あども色外に顯はる、お弓「お話し申すも就かしき夫の身の上、幸ひ傍に人もなし、私が病の元、コレはれを見て下さりませ。」と上着の肩を脱ぎければ、下には淨土の五條袈裟、懸けしは如何にと伊左衛門、猶も不審は晴れやらす。かかる所へ鈍土坊、前化廻りの戻りかけ、何事やらんと立ち聞くと

「サア何と云ふがくしい、最前様子は極かに聞いた、いつぞや寺へ盗みにうせに倍が夫、其の時盗んだ打敷を、袈裟にかけたが慥かに證據、サア隠してもモウ廻れん、サアうせをれ。」と立ち寄る鈍者、心得お向が早足の柔術、シヤ獲れ者にて取り付く挿入、右と左へ剣を返され、また取りつくを向うつき、體は疲むお向が早業、前へつり投付けくれば、後へつり戻され、身をかい沈んで眞倒、一度に、お向が機軸、砂を掘んで投げかくれば、眼に入つてお向は、狼狽へ廻る暗紡れ、長町泊りの弾き語り、替女がとほく行きあたり、かつばと轉べばしてつたと、折り重なつて大勢が、押ふる隙間結しや、足早にこそ 三重。

第八

よしあしを、何と浪花の町はづれ、玉造に身を隠す、阿波の十郎兵衛本名かくし、銀十郎と表は浪人、内證は人ほそれとも白波の、夜のかせぎの道ならぬ、身の行末そ是非もなき、人の名を、神と呼ぶる、其の神は、京の吉田の神帳に、入つた神かや人らぬのか、野暮とも見えぬ悪するほう、とつば株の武太六が、蚤取り眼に暖簾押し上げ、武太銀十郎内、用があつて違ひに来た。」、いふ聲聞、女房立ち出で、さ「さ、武太六様かようお出で、又しう違はぬがさ御無事。」、「イヤコレ

な、今日中に戻さうと、約束の通り受取りに來たのもや。今渡に受取らう、厭と言や其の證文で、直に代官所へお願ひ申す、が、汝やでんへは出られぬ身分ぢやあらうかな」と病つかすは疫病の、神と名の付く奇特なり。其のハテ暗しい、日暮までは今日の内、大か上面も出來てゐる、是れから直に先へ行て、才覺と來る程に、大儀ながら晩方來いと、聞いては連強うと得いはず、武太六「ハ晩方までなりや待つてやろ、其の代り暮六んと打つと、直に受取りに來る程に、其の時になつてからならぬなどと、根太切のはつた所で、三どつは打たれた様に、がつくりやうのぢやないかよ、今度違へば直に代官」銀十「ア春込んでゐる、最一度行たら慥かに上面の出來る金、汝も去ぬなら連れだとかいごと、云ひつゝ、出づる袂を控へ、其の様に慥かにいうて、何ぞ當のある事か、又違へば氣の毒な、まあ二三日も云ひのべて」武太六「イヤならぬ、二三日の事は扱おき、半時も待つ事ならぬ、アアノ、こい」と立ち立つる。武太六伴ひ十郎兵衛、我家を出でて行く跡へ、引き違つて息急きと、飛脚と見えて草鞋がけ、内を覗いて、驚申し此の狀届けます」と投げ出す。通女房取り上げ表書に、女房銀十郎殿へ急用と書いた許りで下の名は、飛脚内儀様覺えがござりまするか、私も人傳に、事託つて参りましたれど、必ず先へ直々に、念入れて申されましたが、内方へくる狀かな」と念を入るれば、女房「ア、成程々々、下の名はなけれども、表書の手は慥かに此方に見知りがござん

禮に御報謝と、いふまじし國針り、三ツモリをらしい順禮衆、ドレノ報謝進ぜうと、船に
 しらせの志、言「ア、有り難うござります」と、言ふ物ごしらから爪外れ、可愛らしい娘の手、
 「定めて連衆は祖御達、國は何國」と尋ねられ、言「ア、國は阿波の徳島でござります」と言「ム
 ムなんぢや徳島、振舞われはさう願ひしい、わしが生まれるも阿波の徳島。そして父様や母様と、一所
 に順禮するのにか、言「ア、エノ、其の父様や母様に逢ひたさ故、それで私一人西國するのでござ
 ります」と、聞いてどうやら氣に懸る、お母は顔も傍に寄り、言「ム、父様や母様に逢ひたさに西國
 するとは、どうした譯ぢや、それが聞きたい」と、其の親達の名は何といふぞいの」言「ア、ど
 うした譯ぢや知らぬが、三つの年に、父様や母様も、私を祖母様に預けて、何所へやら行かしやんし
 たけれど、それでわたしは祖母様の世話になつて居たけれど、どうぞ父様や母様に逢ひたい願ひたい、
 それで方々と尋ねてあるものでござります。父様の名は阿波の上郎兵衛、母様はお母と申します」と
 と、聞いて聞いてお母が取り付き、言「コレノ、ア、父様は上郎兵衛、母様はお母と申します」と
 れて、祖母様に育てられて居たとはいふ疑ひもない我が娘と、見れば見る程離顔、見覚えのある顔の黒
 子、ヤレ我が子が懐かしやと、言はんとせしが、待つてしばし、夫婦は今もとらるゝ命、元より覺悟
 の身なれども、親子といはば此の子にまで、如何な愛目がかゝらうやら、それを思へばなま中に、名

や逢いたい」と、わづ、泣き出す娘より、見る母親はたまりかね、さうす、道理ぢや、可愛やいぢらしや」と、我を忘れて抱き付き、前後正體なけししが、是れほど親をしたふ子を、何と此の儘去なせれう、いつそ打明け名乗らうか。イヤノ、それでは此の手も同じ罪、其の時の悲しさを、思ひ廻せば去なすが爲と、さうす、段々の様子を聞き、我が身の様に思はれて、悲しいとも情ないとも、いふにいはれぬ事ながら、冤角命が物種、まめでさへ居りや、又逢はれまい物でもない。コレ仕付けぬ旅に身を痛め、煩ひでも出りや悪い。何所をしやうどに尋ねうより、其の祖母様の方へいんで居るとの、追付父様や母様が逢ひに行てぢや程に、悪いことはいはぬ、思ひ直して是れから直に國へ去んで、随分まめで親達の、尋ねて行かしやるを待つて居るのがよいぞや」と、宥め贖すを聞き分けて、無言、アイヤ、示うござります、お前が其の様に言うて、泣いて下さりますによつて、どうやら母様のやうに思はれて、私や爰が去にとむない。どんな事なと致しませう程に、申し御家様、お前の傍にいつまでも、私を置いて下さりませ。」お馬、エ、悲しい事を云ひ出して又泣かすのかいの。先にからわしも手の様に思つて、爰に置きたい去なしとむないと、様々思ひ廻せども、爰に置いてはどうも爲にならぬ事があるによつて、それで難面う去なすのぢや程に、聞き分けて去んだがよいぞや。」と、言ひつつ内へ針箱の、底を探して豆板の、まめなを悦ぶ饂飩と、紙に包んで持つて出で、お馬、コレ何ほ獨り

旅でも、たとと錢さへありや泊める。僅かなれども志、此の銀を路銀にして、早う國へ去にや、必ず頼うてばし給んな」と、銀を渡せば押し戻し、無二嬉しうござんすれど、銀は小判といふ物を澤山持つてをります。そんなりやもう参じます、忝うござります」と、泣くく立つを引寄せ、おら「それはさうでも是れはわしが志」と、無理に持ちして摩打拂ひ、コレもう去にやるか、名残が惜しい、別れとわない、コレ今一度顔を」と引き寄せて、見れば見る程胸をきり、離れ難き憂き思ひ、それと知らねど誠の血筋、名残惜しさに振返り、何所を如何して尋ねたら、父様や母様に、逢はれる事ぞ。逢はしてたゞ、南無大悲、觀音様、父母の惠も深き寺川寺、佛の誓ひもかな。泣くく別れ行く跡を、見送りく伸び上り、今一度此方向いてたも。折角長の海山越え難して憧れ尋ぬるいと上り、不思議と逢ひは逢ひながら、名乗るや大なる母が氣は、どの様に有らうと思ふ、狂氣半分、半分は、死んで居るわいの、まだ長生のある子をば親故路頭に立たすかと、其の儘そこにとどふし、消え入るばかり歎きながら、起き直つて涙をおさへ、さう思ひ諦めても、今別れては又逢ふ事はならぬ身の上、離れ難儀がかゝるばかり、又其の時は夫の思案。程は行くまい追付いて、連れて戻らうさうぢやく。上、子に逢ふ、道に親子の別れ道、跡を慕うて幸ね行く。既に其の日も人相の、おのの上面も引き違ひ、我が家へ戻る十郎兵衛が、親の手の手を

引いて、「『女房ども戻つたぞ。』と、内へはひつて見廻しく、「こりや日暮紛れに火も點さず、何處へ行た。」と眩きく、行燈ともし煙草盆、さけてどつきり高胡座、十郎「コレそこな手、爰へおぢや。今戻る迫筋を、ソレを食共が寄り集まり、汝身を剣いで銀取らうとぬかしてをるを聞いた故、夫れでおれが連れて戻つたが、汝身や銀でも持つて居るか。」十郎「ハ、よその伯母様に貰うて持つて居りまする。」十郎「二、何がそんな事を悪者共がかんばつて、オ、危い事、そして其の銀はどれ程有るぞ、ドレ伯父に見しや。」十郎「アイ、是れ程ござんす。」と貰うた銀を差し出せば、十郎「ム、こりや小玉が五十匁ばかり、もう外には銀はないか。」十郎「イエまた小判といふ物がふたんとござんす。」十郎「何ぢや小判が澤山有る、アノ小判が。てもマア夫れはよい物を持つてゐるやろ。コレ此の邊は用心がわるいによつて、其の様に銀持つて居ると、今の様に人に取られて仕舞ふ。ドレ伯父が預つてやらう、爰へ出しや。」と、武太六に約束の、足しにもなるかしの正面、黙しかくれど合點せず、十郎「イエイエ、此の小判の財布には、大事の物が包んで有る程に、人に見せたと祖母様が言はしめられたによつて、誰にもやる事成りません。」と、大事にする程難見たく、脅して見んと目を瞞らし、十郎「其の様に隠すと爲にならぬぞよ、痛めさせぬ内ちやつと伯父に預けておきや。」十郎「それでも大事の銀ぢやもの。」十郎「サア、大事の銀ぢやによつて、持つて居ると爲にならぬ、片意地いはずと預けておきや。」

と、いふ程怖がる子供心、「こんな所に居る事や。」と、逃れ出づる首筋引綱めは、又コレ怖い
怖い」と泣き出す。ナツコリヤ暗しい、近所へ聞える、聲が高い」と、口へ手をあて、又コレ
怖い事はない。有りやうは、私もちつと闇の人の事が有るによつての、何は疑ふるか知らぬ、二三
日預けてたもや。其の内には又拵へて戻さう程に、まあそれまではこの間にゐるつと運命しや、
又親吉様へも伯父が連れて参る。あ、よい子ぢや、聞き分けて。さちやつと替へた。と、両手並
をばがつくと、そこへ其の備極る、「ナツコリヤ、何とした、りうした。」と、言へさ。更
に物言はず、息も通はぬ即死のありさま、又ナツコリヤ、コリヤ、目があつた、ナツコリヤ、
娘やい、と、呼び生は、口を閉ぢ、コリヤ、氣付も水も、うけはねはつと滑りに、はいま
う、ナツコリヤ、「おきてさ。おじと口へ手を當てたが、思はず息を止め、夫れで死んだか。」と、さちやマ
ノ不便にと許さず、果てたる折からに、表へ聞ゆる足音は、女房ならんと無暗で死ね、つゝ、ふ他ひを
いきさきと、戻のお母、ナツコリヤ、ここの人屋つてか、ナツコリヤ、ちつと行て尋ねて、ナツコリヤ、せき切る
人屋、ナツコリヤ、白、跡先もいはず、「何ぞ尋ねて。」と、ナツコリヤ、お母の顔で、何に嫌した
娘のおつるが、不思議と爰へ来たわいの。」と、ナツコリヤ、何ぞ、娘が来たとは、そりや母や人と一瞬にか
どうして来たぞ。」と、ナツコリヤ、おつる二人でござんする。様子をいへば長い事、不思議に思ふと知つ

た故、飛び付く様に思つたれど、悲しい事はお前も私も、お尋ねの身分なれば、今知れぬ身の罪科を、河にも知らぬ娘にまで、俱に難儀をかけうかと、わざと親子の名乗もせず、氣強う言つて此の内を、去なした事はいなしだが、跡で思へば思ふ程、どうも捨てて置かれぬ故、直に跡から尋ねに行たれど、影も形も知れぬ故、お前と手分けして尋ねうと思つて戻つた。リヤあやつと行て尋ねて。」と聞くや聞かずに、上「イヤ白痴め、どんな事が有るとて、俺にも知らさず追ひ去なすは、鬼でもそんな勘惑な事はせぬわい、イヤ斯う言つては居られぬ」と、かけ出でしが、上「コリマをして幾歳許りで如何な苦物苦て居るぞ。」お馬知れた事、年は九つ、中形の振袖に、笈掛かけて。上馬何ぢや、アノ笈掛かけて。お馬アイ笈掛も二親の有る子ぢやによつて、兩方は茜染。上馬アノ茜染に巾形。上「アイノキイはつと、肝に焼鐵刺さる、心地。お馬エ、コレ隙が入る程心が濟まぬ、お前は跡からわしや先へ」と、いひ捨てかけ出すお馬を留め、上「コリヤもう尋ねすと止しにせぬ、娘は疾うから戻つて居る。」お馬戻つて居るとは、そりやどこに。」上馬ソレそこの布圍の内に、よう寐入つて居るわい。」と、言ふに不審も立竊の、布圍を明けて顔見るより、お馬「す、ほんとに娘ぢや、オ、嬉しや嬉しや。お前もこんな事なら疾うからさうと言つたがよい、人に息急揉まして、エ、嗜ましやんせ。」と恨みながらも氣はいそ／＼、お馬「何とマア見やしやんしたか、大きうならうがな、そしてまあ滅相な、

如何に草臥れて居ればとて、からけも下さず、箕搦も懸けたなり、トしく帯解いて緩りと、口を
ぶらで母が添乳」と、箕搦はべし帯とくろく、見れば手足も冷き渡り、息も通はぬ娘の死體。――
アコ「こゝろは娘は死んで居る、どうして死んだか」として」――餘りの事に涙も出ず、立つたれ居たり夫
の傍、――「あの娘は、ト、ト、ト、どうして死んだ。お前様子知つてござあらう、サアいうて腹かして置
かして」と、氣も取りのほす有様を、見るに脾肉も離る、切なさ――「其も、道理ぢや尤もぢや、様子
というたら因果づく、先に内へ戻る道、其の娘が鉦を拵つて居るを、非人ともかよう知つて、取るの
はぐいさ聞いた故、可哀仕にも連れて戻り、様子も聞けば知る有る故、少々なりとも武太六に返す工
面、――三日貸してくれと、壽をいへ」と子爵の事、御山さすう泣き喚く、逆問の間は氣の毒に、
「いひあおるべたが、息が詰つて、リ、其の様に死んで仕舞うた、――いぢめといふ事したと、餘所の
様に思うたか、夫れが娘で有つたとは、物の相いか因縁事、リ、リ、――替へてぬねる左様」と、聞く程
身も世もあらぬ悲しき――「そんならお前が殺さしやうしたか、ハ、トと控も是非もぢや情なす
と、母は死體を抱き上げ、トと娘、これほど似て親々をもう尋ねて来てたつたの、其も氣で病人は
なし、野に寝た山に寝たり、怖いことや悲しい事と、父様や母様に、違ひなき故といやつた時は、
悲しうてノ、身節も肺も破ける様に有つたれど、そこらとつとを拍して、置てもいはず去なれば

の、わがみが可愛さばかり。其の時留めておいたらば、かういふ事は有るまいに、去なした故の此の、間違ひ。夫れから起つた事なれば、殺さじやつたも私が業、コレ堪忍してたもや／＼。年はいかで遙々の、道々厭はず苦勞して、親を尋ねる孝行娘、親は夫れには引替へて、酷う難面う追ひ返し、まだ其の上に親の手で、殺すといふはア、何事ぞ。別れにいやつた順禮歌、父母の恵みも深き粉川寺、どこに是れが恵みが深い、こんな酷い親々が、廣い唐にも天竺にも、最一人と有る物か。」と、死骸の顔に我が顔を、押し當て／＼抱きしめ、泣涕こがれ伏し沈む。銀十郎も後悔の、涙五臓を絞りしが、いうて返らぬ事ながら、金の有る事得しらずば、かういふ事は有るまいもの、金が敵の死骸の懐、探して財布取り出し、中改むれば金三兩、十郎「コリヤ是れ僅かの金、いかい事も有る様に、思違ひがやつぱり因果。」と、いひつ、引き出す財布の内。十郎「十郎兵衛殿夫婦の衆へ、ム、コレ、書いたは正しう母の筆」と、封押し切つてよむ文體、わざ／＼認め送り、國を立退かれし其の日より、案じ暮すは互に親子の愛著にて、浮世の中の習ひなれば、諄う筆には記さず候。第一に申したきは、日外申し越されし國次の刀、郡兵衛に心を付けて密かに手筋を求め、詮議致し候處、則ち郡兵衛盜み取り所持致し候段、慥かに聞き出し候故、早速詮議と思ひ候へども、女子の身で慥かの事を仕出し、却つて妨げに成つてはと差控へ、其許の在處を尋ね詮議させんと、孫のおつる諸共に、旅の用意致し候

内、這れぬ無常の風に誘はれ、力及ばず身罷り候故、書き残し申し候。十郎「や、り、母人、お果てなうか」といふ。ム、此の一通届き次第早々國へ立ち歸り、國次の力を収束し、立身出世を草葉の陰より、いかに待ち望む。十郎「りやあの郡兵衛やが何爲で、し、母人の御最期を念主と云ひながら、有り難きは刀の在處、是れと申すも母の御恩、ハア、忝し嬉しや。」と成すの申すを、聞いてお母の節を上へ、いふ。十郎「様様の御最期、一日の介抱もせずに別る、不孝な様、お母の其のお文、私にも讀ませて下さんせ。」と、一通取つて涙ながら、外に申す事はなく候へり。と、随分々々大事に育給はるべく候。是れは、御用書に、向ふよう書き置かれ、第一に遺物が手利にて、箱綴の衣裳まで、手際よく行きて候なり。教へ置きなう。是れ并に祖母が自慢に候まよ、對面の後には立て御覽なされ、夫婦ながら譽めてやつて給はるべく候。お弓「オ、ば、様の冥加ない、常々お蟲持にて、桑山がより利き候哉、たんと持たせり候き候まよ、もし蟲でござつたならば、此の子の年の數程、御存せしなうべく候、いととうとうと、大切に育てて頂上せうべく。是れ御大事にば、様の、育て上げて下さしたものの、思へば、胸惑な、惜しや悲しやいぢらしや」と又も正體なうける。と、いづまで言うても盡きぬ教ふ、刀の在處聞れる上は、彼の地

へ下り言託へんじと、勇む折から表の方、俄に騒ぐ人聲足音、十郎兵衛きつと心付き、十郎「コリヤコリヤ女房、あの物音は必定捕手に違ひない、何百人取捲くとも、刃を我が手に入れぬ内は、切つて切つて切り抜ける」と娘の死骸引抱かへ、泣き入る女房を引立て、一間の内へ入りける。程なく來たる捕手の大勢、ヤア盗賊の銀十郎本名は阿波の十郎兵衛、此所に隠れ住む由、武太六が訴人によつて召捕に向うたし、尋常に縄掛けと聲々いへど言せぬは、一風をくらうて逃げのびたか、家内錢らず打墮て、人数は半分裏道へ、廻れ」といふ下家、天井戸障子佛壇戸棚、粉もなく碌く壁下地、隙間も漏らさぬ大勢の、捕手相手に十郎兵衛が、大亂髮に働くを、我組み止めんと追取り巻き差し付ける松明の火花を散らして挑みしが、十郎兵衛一人に切り捲られ、皆蜘蛛の子の散り／＼に逃げ行く隙間に女房が、此の間にちやつと十郎兵衛殿、「一、合點」と騙け出でしが、立ちとゞまつて、十郎「コリヤ女房、娘が死骸は何とした」と「馬そりや氣遣ひござんぬ、コレ此の通り」と死骸の上へ、落ち散る戸障子積み重ね、松明の火を差し付けて、人手に渡さぬ火葬の營み、南無阿彌陀佛と合はす手も、別れ別れて、重立ち出づる。

第九

之助を調伏がして貰へたい。」と、おの神主人衛門之助殿を、調伏へつくる、お心は「あ、シ
 へ聲が低い、成程驚きは理、某存する旨あれども、衛門之助殿が有つては後日の難儀事やかまし
 い、そこを存じて此の密に成就せば立身出世、貴殿とても悪しからず、身の納まりは此の胸に、仔細
 は斯くの通りぞ」と、語ればはくノ一打黙頭き、お氣遣ひなされと、某が前方にて七日
 の内に落座す、有法奇特は我が珠數先、お心安く思召せ」と、聞いてはくノ一小顫りし、是れホ、
 頼母しん、富屋の施物」と一包み被さる取つて押し戴き、「お志の此の施物、受納致すと取
 り納め、心も急げば、様お暇」部兵衛、一時も早く立ち歸り萬事の用意を、早くノ、必ず
 人に悟られぬ様。」と、「イヤ、そのとも氣遣ひ遊ばすべし」と、人の嫌味も尋の態に、香込むに身
 の上と、知らぬが陰陽師、別れてこそは立ち歸る、折から家來が、お璋様、十郎兵
 衛向うの茶見世で見受けましたが、此所へ参るは必定、いか計り申さん」と、聞きもあらせず、
 部兵衛、よくも知らぬ、昔の問影隠し、許し寄つて召捕らん、此方へきたれと部兵衛は、家來
 引き連れ何ひ居る、斯くとはいふや十郎兵衛、母の報知に随ひて、此の程よりも立ち歸る心當てどは
 部兵衛に、頼る術のとつ置いつ、思案上夫の後より、十郎兵衛やらぬと雙方から、取り付く家來を
 引捕へ、何の苦もなく右左、踏み付け、王立、小野田部兵衛聲をかけ、部兵衛、十郎兵衛、江戸

とこのときめ付けろ。おのが盗みし刀の詮議、非道ながらも差當る、言證何とせん方も、無念を慄へ大小搜け出し、主膳、徹庵聊か二心なき證據は、則ち家來十郎兵衛、召捕り渡せし我なれども、兎ひ掛りし此の主膳、武士を捨てたる我が魂、お預け申す上からは、郡兵衛殿のお心任せ。萬一す、よい覺悟、ソレ侍中、主膳を奥へ引立て。と、下知に隨ひば、と、取り捲く家來の先に立つ、爽けき空の月影も、暫しは曇る胸の間、是非もなく、立つて行く。跡見送つて郡兵衛が、聞く此方の一間には、高尾を假の庫敷室、兼とは著き胡の香の、妻は花も及びなき。郡兵衛コレサ君、なぜ浮々とし給はぬ、我等其許に執心から上手助に申し付け、漸う此の頃連れ歸り、押籠め置くは人目々遠慮、能い返事さへし給はば、誰憚らず直に奥様、望みお叶へ抱かれて寢るか。萬一、い、この様に仰有つても、何の益なき此の身の七、尼ともなして給はらば、生々世々の御慈悲」と手を合はすれば、萬一ソリすならぬ、慙なればこそ此の様に、人の目顔を忍びの一間、打開ければ其の通り、たつて厭といふが否や、愛目を見するが、サ夫れでも厭かに、萬一、縦ひ愛目にあふとても是れ許りは赦して給へ、かう言ふが憎いと思はば等そ手にかけ一と思ひ。萬一、イ、ヤ夫れもならぬ、惚れた程又憎くも百倍、返事さす思案を見せう。ヤアノ、上手助科人の銀十郎、早く是れへ引き出せ。と、聲に従ひ廻取に引立てられて十郎兵衛、刀の詮議爰彼處、尋みる當ても白浪の、科を身にしる愛き縦目、見合はす十郎兵

衛高尾が、高尾「ヤ、お前、兄様、上郎兵衛様、爰へは如何して其の題目」と、驚き寄る。高尾「しつ
かと押へ、一、面白、兄弟なれば猶以て解でも解でも抱いて寝ろ、よい橋渡しが出来てきた、
結ぶの神の引きあはせ」と、しづく。立つて庭に下り、高尾「ヤ、上郎兵衛、今朝程も尋ねる通り、何
利有つて身が家來佐渡平に手にかけて。其の上山日定九郎まで、殺したも俺が業、其の許ぬか、何
と何と」高尾「これは又しつこいお尋ね、主膳様を待伏して、殺さんとせし佐渡平兩人、ぶち放した
は主君の爲」高尾「ハテ結構、御主人に、忠義を盡す家來も主も御主人、上郎兵衛、ヤ、ヤ、ヤ、もう上郎兵衛様、抽
者は主人に財當受け、狼に盡きたる人なり、我が名に付てぞ御主人には何れもつて、御呼ばはり。」
高尾「、御主膳は刀の、先、此の家に出ぬ、汝も其が同類なり、白狀するは、一方の
錯、題目に指込、」サア何と何と人の問状に、一、いつながら品星が思ひ、那、苦しくは白
狀せい。高尾「高尾、此の責めが目に見えぬか、ア情も苦痛が助かりなくば、尋ねる事、早く聞き
出せ。コレ若し聞いて許さずと、兄が死ななく見給へ、戀の返事と白狀、聞かぬ内はいつまで
も責道具の品をかへ、水責火責、一、痛なから早く返答せ。」と怨と情を一、の、聞かぬ内は人の身
苦しめ、見るに堪へ兼ね譯を上げ、お前も武士の身でないか、情といふ字を言いてから、生しは長
れも知るぞかし、餘り難儀、御怒、と、泣き焦るれば、高尾「無情」とは其方の事、俺が心に堪へば其

在（い）の小男（こなん）、責（せ）めは叔置（しやくぢ）き科（と）も見遁（みぬ）す、何（なん）と憎（にく）うは有（あ）るまいが、「一（いち）サイヤ、夫（そ）れ程（ほど）までに私（わたし）が事（こと）、思（おも）うて下さ（くだ）るお志（こころ）無下（むげ）にするではなけれども、私（わたし）が身（み）で儘（まま）ならぬ、もう此（こ）の上（うへ）は兄様（あにさま）次第（だい）、ハテどうなりと。」と跡云（あと）ひさし、傍見（わきみ）する程（ほど）猶（なほ）ぞつと、郡兵（ぐんへい）「ム、よい／＼、さういや此方（こなた）も思案（しあん）を替（か）へ、得心（とくしん）心（しん）づくで抱（かか）いて寝（ね）る、仕やうは斯（か）うぢや。」と十郎兵衛（じゅうらへい）が、縛（ばく）めほどき、郡兵（ぐんへい）「コリヤ高尾（たかお）、誰（だれ）か誠（まこと）か知（し）らぬぞ、今（いま）の詞（ことば）に取り付（つ）いて、暫（しば）しは緩（ゆる）める兄（あに）が成敗（せいばい）、嬉（うれ）しいと思（おも）つるなら十郎兵衛（じゅうらへい）に返事（へんじ）しや、ヤイ十郎兵衛（じゅうらへい）、現在（げんざい）其方（そのかた）は科人（とくにん）なれど、戀（こひ）は曲者（まがもの）惚（ほ）れぬいた高尾（たかお）が兄（あに）、主膳（しゅたん）が難儀（がんぎ）を身（み）に引（ひ）き受け、そちが替（か）りに成（な）りたくば、高尾（たかお）を口説（くちど）いて抱（かか）かして寝（ね）ぞと、此（こ）の役目（やくめ）仕果（しおほ）せるまで汝（わ）が體（からだ）は汝（わ）に預（あづか）ける。繩（なや）の解（と）けしを幸（さい）ひに逃（にが）け隠（かく）れても逃（にが）しはせぬ、千里（せんり）の野邊（のへ）も獄屋（ごくや）の内（うち）、高尾（たかお）も兄（あに）が助（たす）けたくば暮（く）る。繩（なや）の解（と）けしを幸（さい）ひに逃（にが）け隠（かく）れても逃（にが）しはせぬ、千里（せんり）の野邊（のへ）も獄屋（ごくや）の内（うち）、高尾（たかお）も兄（あに）が助（たす）けたくば暮（く）る。合限（あひかぎ）りに返事（へんじ）せい。兩人（りうにん）共に郡兵衛（ぐんべい）が暫（しば）しの用捨（ようし）は惚（ほ）れたが因果（いんぐわ）、とつくりと思案（しあん）して色（いろ）よい返事（へんじ）を待（まち）つて居（ゐ）る。聞（き）き入れぬ其（その）の時（とき）は兄（あに）も妹（いも）も驚（おど）り殺（ころ）し、生死（しめい）二つは一つの返事（へんじ）奥（おく）で待（まち）つぞ。」と郡兵衛（ぐんべい）は色故（いろゆゑ）にふる雨夜（あめよ）の室（むろ）、見（み）分け兼ね（かね）たる胸（むね）の内（うち）、心残（こころのこ）して入（い）りにける。とつくと見（み）すまじ小聲（こゑ）になり、十郎（じゅうら）申し高尾（たかお）様（さま）、刀詮議（かたせんぎ）の爲（ため）ちやとて、現在（げんざい）お主（しう）の御息女（ごきよめ）様（さま）、御家來（ごけらい）の郡兵衛（ぐんべい）に様付（さまづ）けなさるゝのみならず、中間風情（ちゅうかんふうせい）の妹（いも）と怪我（けが）に申（まう）すも勿體（もったい）ない、御赦（おやめ）しなされて下さ（くだ）りませ。」高尾（たかお）「オ、あの言（い）ひやる事（こと）わいの、今日（けふ）其方（そのかた）の人（ひと）も返（こ）みを待（まち）つて居（ゐ）るも今（いま）の始末（しまつ）、そんな事（こと）氣（き）にかけずと、冤角（えんかく）大事（だいじ）は刀（かたな）の

有所、どうぞして今宵の内に二、三、サ、拙者も左様存するから、利半かしの手廻りをと思ふに幸ひ
郡兵衛が、貴方に惚れたがよい手廻り、心得難きは彼奴が大小、惚を叫べるお顔にて蒲團の隅に御
覧なされ、拵へは違ふとも、もし國次に極まらば中心は則ち亂れぬ、御は金にて庭草に萌ひ交ふ蝶の
影物あり、實正夫れに極まらば透を穿む手筈を遣はせて、私は其の間奴部屋に身を隠し、善悪二つを行
つてをります。」三、成程々々、肌は馴れぬと郡兵衛に假の懸路も力の役目、取り返さば上臈と安
堵、其方に知らず心の縁起、花は櫻木人は武士と、中に勝れし名に寄せて、知らず相留め奥庭に、今
を盛りの櫻花、此の水筋へ流すべし、其の時必ず合點か、一、心得ました」と立ち上り、水筋清き
我が身をも、暫しは隠れ陣更の、忍びてこそは別れ行く、早稲束の葉てより、惚る、君が善悪の、取
事如何と郡兵衛が、出づるも知らず此方には、只とつ度いつの思案より、外は例にも参れ、あつてと
味、後付、見れば見る程暖かぬ、返事はどうかと云ふ聲に、思はず胸が立ち退く所二おつと通
しは往らぬ、最前いうた約束の、かねは聞いたか返事が聞かぬ、一人爰に居るから、郡兵衛が
得心さ、大方抱かれて寝る氣がやみぬ、一、無の、サアおちや寝ようにと、我一人、立ち立てる
る身の幸さ、何と答へんかたまき、色に心の一大事、控して見んと思ふから、高屋を膝に抱き上げ、
「斯うした所は正真正正天女を抱いたも同じ事、さうならぬ」と抱き付いて、中に就つたる郡兵衛

が刀を密と、那兵「コリヤ何する、エ、イヤサリ」捉へて何とする。「何」とは那兵衛様、私が事はふつづと思ひ切つて下さりませ、其の代りには今爰で尼法師と姿を變へ、一生殿御に肌觸れぬがお前の詞を立つる道理、夫れでわたしは此の刀」と、又取りかゝるを引き離し、那兵「さうぬかしやふつと思ひ切る其の情、十郎兵衛は云ふに及ばず、情も共に目に物見せん。ア、ア、上手助、此の女が裏の樹木に猿繫ぎ、又此の腰は主膳が大小、詮議済むまで汝に預くる。高尾を早く引立てい。」一異まつたこと荒氣なく、小腕取つて埃へ行く。かかる折節、海藏院切戸間近く入り來り、彼のお頼みの一大事、殿も調伏の御祈禱も七日に滿する今宵なれば、お頼み申した祈禱料唯今どうぞと皆まで云はさず、那兵「ヤレ音高し人や聞く、何かの體は跡より通達、折悪しければ先づ歸りやれ。」然らばお暇、必ずお禮を手取り早う、サ合點も眼で知らし、點頭しやく衣の袖、人を助くる體もなく、巧みは百八煩惱の、珠數の數を繰り返し別れてこそは歸りける。奥庭は咲き爛れたる櫻花、詠めにあかぬ泉水の、水は澄めども濁り江の、高尾は無残や櫻木に締め摘まれし轉々、今ぞ生死の境かと、涙の顔を振り上げて、高尾「斯う言ふ事とは露知らず、噯十郎兵衛が待つて居やう。何卒此の事つちよつと知らせん事も情なや、此の身は櫻に摘められ刀の在處も得知らず、元より主膳の掬はれぬ助くる事も心に任せぬ、それも何故此の繼目、エ、誰ぞ解いてくれぬかい、エ、どうぞ切れぬ

か解けぬ。と、身を揉みおせる氣はせざる、心も空に散りノ、と、残りの雪も身につもり、思ひ重なる花の泣き。」「と、郡兵衛の人でなし、みずノ刀を盗みながら、目なる者を罪に沈め、其の身ばかりが立つものか、物の報いはたつた今、思ひ知らずで置かうか。」と恨みの涙はら、と、花は散りノ、泉水の、流れにふつと心付き、」「と、さうおつ、相違に泣き櫻花、已と獨り流るゝは神傷のおりこと、及び勇む折からに、花を相違に十郎兵衛、首尾は如何にと前接の、案へをそつと差し置き、見て南りの縛り通、言ふ十郎兵衛、言ふ「高尾様、この題目は如何あること、解けどことけぬ涙、當に何故とは郡兵衛が逃れ叶へぬ見付しめと、締め附まね一身に叶はす、今や泣いて居たわい。」と、御尤も、從ひ如何様にも思召しても女儀のお手で解いてなす。此の上は意がお前様を取持ち顔で欺すに手なし、仕損ぜぬ私次第になされませう。と、伴ひ入らんとする様、とつこいやりぬぐと、奴の上手助、お且郡兵衛さんとして、妹でもないやつを兄弟とは心得ぬ、此の首主人に申し上ぐる、待つておれよ。と騙け出すや、河の苦もなく引揃ひ、傍なる井口へ通達、是れで氣づかひ内證つ、入替知らねばさうお出で、と、聞く障子の内には郡兵衛、言ふ「十郎兵衛、縛り置いた其の女誰が放して汝を解いた。」」「と、深い障子はぞんじませぬ、私が解いたはあなれのお母さん、此の妹は上げませうと、おもうてそれで解いたのでござります。」「と、さう、さう其方が得心でせう。

か。」一「成程々々、得心の上に異小付けて、只いつまでもお前様の女房、此の十郎兵衛は兄ぢやない仲人から、御用も有らば澤山にお遣ひなされて下さりませ。」一「一すりや身共が女房と云、夫れは重疊、望み叶ひし上からは高尾が兄の十郎兵衛、我が爲に言はば小舅、親しき一家となるからは、小舅殿へ頼みの印。」真向碎けと欺し打ち、心得はつしと水手桶、十郎「コリヤお前何なされます、一家中は御心安う、斯様にお氣を張らしやますと、我等いかう迷惑千萬、平に納めて置かれい。」と、拂へば付け込む郡兵衛が、突き手の内屈せぬ十郎兵衛、閃りと交す身の捻り、鎗も付け入る間もなく、庭の飛石磨ぎ上げ、受ける白刃の轉業隨妻、目早く高尾が取り上げる。刀は正しく國次。」と云はせも果てず郡兵衛が「夫れ見付けたら生けては置かぬ。」と、又切る刀かい、潛つて確乎と取り、十郎殿の重寶見出さう爲捕へられた十郎兵衛、高尾様と云ひ合はせ兄弟と言うたも諺、誠は先殿監物様の御胤。」と聞いて驚く許りなり。一間の内より櫻井主膳、主膳「土手助、刀」「はつ。」と答へて奥庭より、出づる奴はつと飛び退り、悦び敬ふ許りなり。主膳「サ、郡兵衛殿、最早通れぬ貴殿のたくみ、包ますも明されよ。」と、たくみの裏道掘り返され、叶はぬ所と性根を据ゑ、一ム、叔は土手助めも、主膳が家來で有つたよふ。顯はれし上からは隠すに及ばぬ、出頭の其方を、科に取つて落さへ爲、いかにも國次の

刀に盗み置いた、戻して仕まへば事は済む。是れよりほか云ひ聞かす事はない、刀を持つて早歸れ。」
主膳「い、刀の事より大それた貴殿の王み、大祿を戴きながら、何恨みあつて殿を調伏。」とたまれ
主膳、其のこそこそ遺恨有り、殿に恨みは毛頭なし、さいふ汝が證據ばし。」主膳「ホ、其の證人は是れ
に有り。」と、海藏院に繩をかけ、引つて出づる伊左衛門、もう百年めと郡兵衛が、切ら込む刀、身
を交して、腕首掴み、主膳一重々の極悪人、それ繩打て。」と櫻井が、引擔いで頭顱割、起き上る間も十
郎兵衛が、押へてかくる縛めは、心地よくこそ見えにける。「オ、出来したく。盗み取られし國
次の刀もろとも、二人の國人成敗は、殿のお指圖、伊左衛門様は此の度の御婚禮、お目出度の祝儀と
して、町人ながらも御扶持頂戴。それお規模に以前の如く、葺屋の家を取り立つる、家々女房は絆屋
お辻、夕露は妾分、相續する事なかれ。」と、詞にはつと勇み立ち、昔に歸る伊左衛門、簀子姿も引き
かへて、古郷へ飾る錦の袂、變らぬ國々木繁昌、治まる道も無の花、情の月は武藏のや、名にし高尾
が傾城姿、今國入りのお姫様、道中賑々日本、北きせぬ御代こそ目出度けれ。

傾城阿波の鳴門 終

神靈矢口渡

編

内

鬼

外

神靈矢口渡

第

[illegible]

汝を討手に遣はすべしと是れなる清忠の奏聞、此の事救問あらん爲と、いと濃やかなる詔、義興はつと袖かき合はせ、同じ清和の流れにて、一門ながら朝敵の首領といひ、父の仇にて候へば、尊氏を亡候さんと晝夜軍慮を廻らせども、彼が勢ひ四海を覆ひ、味方小勢の此の時節、軍を出し候はんは謀なきに似たり。義興退いて考ふるに、彼が執權畠山入道道誓、高師直師安にも、劣らざる奸曲我儘、已に親しき輩には功なきに所領を與へ、疎き者は忠臣をも退ける。是れを懲む者多ければ、足利家内亂を生ぜん事遠かるべからず。其の時節を考へて、補正儀と心を合はせ、京鎌倉を亡候らんは義興が方寸に候。天の時至らざるに、只今義興討つて出でなば、御勢少なき皇居の守護、心元なく候。」と敕答あれば、坊門清忠、「ヤ、迂り遠き義興が軍慮、足利家の内亂を待つて、謀をなさんとは」とは相手の誤ひを待たんとて端の歩兵をつく下手象徴、差當つたる理に叶はす。先んずる時は人を制し、後る、時は制せらるゝの本文、片時も早く討つて出で、尊氏を亡候せよ。」と、横紙破りの一言を聞き流して義興公、「ハ、詩歌管絃は殿上の御遊び、軍の事は武門の職。百戰百勝つも善の善たる物ならず、謀を帷幕の内にと廻らし、勝つ事を千里の外に決するは、身不肖なれども義興が軍慮の奥儀。當時守護の武士少なき皇居を捨て軍を出さば、義興が京都の軍勢、襲ひ吞らんは必定、其の本亂るゝ御大事。此の儀は是非に御無用」と、いはせも立てず坊門清忠、「ハ、過いなり義興、官

軍少なきに聞かれども、和田、楠を始めとして、皇居の守人いくらも有、汝一人居らんとて、御味
方事缺くべき。ム、聞えたく、軍慮にかこつけ尻込みするは、軍が怖いおそろしいか、申仕未練
の臆病者。コリヤ繪言は汗の如し、違背すれば違救の科、討手に行くか但しはいやか、なんぞと
とせつ、己が工みを押隠し、救定ごかしのきめ壓狀、義興公にすゝかぬ。軍慮の妨は天
下の仇、引き降して只一討。」と、立寄りしが待て暫し、禁裏の騒ぎ君への恐れ、去りながら時即至ら
ぬ。今度の手、拙き負けをなすならば、先祖の名を家の恥。父義貞、祖父義助、叔親子が跡を遺ひ
潔く討死し、末代に名を穢さじと、思ひ定めて御前に向ひ、「救定の一言、畏まりたる、夫れについ
て一つの願ひ、先祖頼光より傳はりし、水破兵破の二つの矢、代々源家の里貫たる故、父義貞も持て
し、山死の其の後北國より差し上げしを、大内に留め給ふよし、何と申し給はる様、奏聞願ひ。本
る。」と、思ひ込んで願ふにぞ、清忠卿せうら笑ひ、「ヤア鹿忽なり義興、おくも二筋の矢は貴山が遺
椒花女より、汝が先祖頼光へ、夢中に授けし希代の重寶、代々源氏の棟梁たる者、是れを所持し、汝が
父義貞は左中將に任じ、總軍の大將たる故、矢を所持しても苦しからず。汝は清く左兵衛佐に、昇殿
の叶はず、あくちも切れぬ分際で、矢を望まんとは不敵々々、及ばぬ願ひ。」とやり込められ、こたへ
にこたへる義興公、無念の顔血をそゞぎ、思ひ詰めたる其の有様、軍慮何とか思しけん、隆實卿を

近く召され、しかくの敕定有れば、ハット答へて隆資卿、玉座に飾りし二つの矢、恭しく携へて、階近くおり立ち給ひ、「切なる汝が望みに任せ、二つの矢を下し給はる、有り難く頂戴せよ。」と渡し給へば義興公、「ハ、はつ。」と飛び退り、「家の面目身の冥加、此の上や候べき。」と歡び給へば清忠は不承々々の佛頂面、君は二人が胸の内、元來知らせ給はねば、「早く斬敵討ち亡ぼし、宸襟休め奉。」と、御座まつとおりければ、諸卿各退出あり。義興公は討死と思ひ定めし御覺悟、是れぞ内裏の見納めと、名残り惜しけに見返りく、猛き心も打萎れ、靜々御門にさしかゐる。おもひも寄らぬ落し穴、踏み込み給ふ頭の上、丈に等しき大石の、どうど落つるを身を固め、兩手にしつかと落け留めて、「エイヤホン。」と飛び上り、「ア、ラ心得ぬ此の有様、此の穴へ踏み込めば、とんの拍子に此の石の、上より落つる仕掛の工み。扱は此の義興を、なき者にせん爲に、衆人共の計らひよな、ハアをこがましや傍いたや。縦ひいかなる磐石たりとも、義興が爲には塊同然、去りながらかかる非常の此の石を、内裏に置かんと穢らはし。」と、兩手をずつと差しのべて、築地の外へ投げ給ふ。表に控へし伏勢の、天衛の上へ落ち懸れば、何かは以て堪るべき、壓しに打たれて十餘人、微塵になつて死んでけり。残りし者共身の毛立ち、天狗の所爲か魔の業か、怖や、と一同に、跡をも見ずして逃げ歸る。凡人ならぬ勇猛り、末世に新田大明神と拜まれ給ふも三頭、行末は誰が膚ふれん紅の花、

[illegible]

らうと申しやる、サアわつさりと酒にしよう。「中居半銚子」と立ち騒げば、おひ／＼出づる仲居ども、さつきにいうてやむなほつた、江戸兵衛様が来なほつた、追付こへ見えるぞ／＼。部では幾子と名づけ、東では頼らふ時も頼子のすんとして又しきは、大者と而の藍こび茶、物好したる袖紐も引かば纏ばん其の風情、義理交はる／＼と、不思議ごうに顔打眺め、「おりや江戸兵衛」というた故、男前者かと思つて居たりや、ヨリヤ美しい頼子だ。「サア、あの子は、此中江戸から登りなほつて、どうもいからすべいと、まだ詞が直らぬさかいで、有る名は呼ばいで、江戸兵衛様と仇名許り呼ぶわいな。」と、夫れで聞きた、サ申し旦那、同じ兵衛でも少しの事で、助兵衛でなうて仕合でござれます。「サアきついでうしき。」とわつちや此の間意いして、まだ勝手をしらないから江戸詞を言ひやすによ、餘り笑つてくれなごゑな。「サア、おれも上州の新田で育つた故、京の詞はなほけて悪い。」ならうなら太夫なども、江戸の詞にしてほしい。「サア、お前の折々さう言はんさうかいで、私と此の間頼子さんに江戸詞を書ひやんした、稽古にいうて見やんせう。」と、江戸兵衛が胸ぐら取つて、「コレ、主や詰りんせんよ、わつちが方を打つちやつて、此中も丁子屋のみな鶴様の所へいかんしたを、子供が見付けんしたわ。」見なんしアノまじめな顔わい、本にあつかましい、餘り馬鹿らしい有りいすによ。サ、サ、サ、恥かしと袖覆へば、「ハ、ハ、ハ、ヨリヤ太夫さん出来ました、どうもいへ

ぬこを、り立ち、一度にとつと打笑ふ。小吉も五作も面白く、「イヤ、明日の殺さうさう
まをぬ、閉口次手に此の癖で、江戸役者の聲色を、うかがはぬ、江戸兵衛様輝いて下さんせ。」是
れもお江戸に隠れなき、市川團十郎で申しとしよ。市川團三升でいい。ア、ヨササ、いいもせ
ぬ聲色置きにしろ。「南無三寶又付けた、折角使ひ掛けた所をとめられ、喧嘩にたればよいが」と
天狗をかけた仲居、お玉、申し江戸兵衛様お前、申言ひなはつた、きやんとおち、やんとおち、喰
ひ行く様な喧嘩の身振が見たわい。一す、又身かへ久しい。んだよ、私を恥かさいによ、さ、
さうな事はきつと流して。さうな事が、喧嘩をきくと口々に、堂々ばつて身振へ、子供氣其
の市取つてくれな。正しく間二五作が嫌ひの、市川三升して喧嘩の肩長、東西を此の癖で意と江
戸との喧嘩の身を教し分けとす、御前様御に御一顧さうとせら、其の時の朝顔が左様に、理管で枕を
かち、さう、さう。上方の出入さう、市川をかちつて、草履下駄にこけいふ身ぶり、おつな御殿
を出して、さう、若いめ、お玉、市川まで出て置かひしよ、おもと下に見て下されと、此の癖な
まだるい癖で目の短い時の間に、お玉によ、江戸の喧嘩は、市川をおち打た懸けて、かち肩を力とせ
て、何のこんだはつつけめ、人かたにしかつた、うぬが嫌ひな御心遣は鼻穴へ花散らすけて、何で
も安賣十文目下駄にたてくれ、い、忌ましい愛さうなれ、さ、さ、さ、こんな勘だ。三打笑へば、

皆一同に打ちこけて、興を催す許りなり。駈ぎの中に仲居がさいばい、「とかうする内夜が更けた、エウお休み」といふ鹽に、「然らば旦那明日、太夫様江戸兵衛様。」「オ、皆大儀だ歸つて休め。」「そんならもういなんすかえ。」「アイわつちもお暇お玉殿や三統箱頼んますによ。」「オ、皆様ようお出でたさばへ。」「アレ小吉様の又戯談、悪事なさるな。」「うゑなは妙義の鄰なり、おなりの宮へ参らうか、らうかかうかい物案し、あんじ宜しう頼みやすと、どよめき連れて立ち歸れば、義孝公も一間の内淫樂の牀に入り給ふ。一間の内よりぶつつかは、面影らし坊主客どいつも此奴も初會だと思つて、餘り難くし上る、モウ來るか」と賣れぬ根附を見る様に、布團の上に待ちぼうけ、いま／＼しい」と言ひつ、傍見廻しく、相圖のしはぶき二つ三つ。跡より出づる竹澤監物秀時、江田判官景連、あり合ふ術を携へ、出で、「先づく是れへ」と招すれば、おめす隠せず褥の上、どつかと居りし入道、尊氏公の執權職、畠山入道道誓とは言はねど顔に黒はれたり。兩人に近く指し寄り、「家内もふせり、娼妓共も寢させ置き間を隔てたる此の座敷、とくとお談じ申し上げん。」「オ、兼てより此の入道天下に望みある故に、坊門清忠と心を合はせ、新田足利威を争ひ、合戦に及ぶ様に絲を引かせ、桶親子義貞なんども、此の圖をはづさせ、憤らせて討死させ、尊氏一人に成つたれば、折を見合はせ刺し殺し清忠を王位に即け、此の入道將軍驅、お手前二人を兩執權と思へども、南朝にある新田義興、

親にも勝る大にものはもの、彼奴が此の世に有る内は中々大望思ひもたらす、彼の楠を湊川へ無理に追ひやつた其の格で、尊氏退時の敕定ごかし、じれさせて討死つるか、それまでもなく討ち取るかとか様の計畧。「サアそこを存じて此の判官、清忠殿としめし合はせ、南朝へ忍び込み、きやつが内裏を出づる時、門の上に大石を上げ置き、下には落とし穴を仕掛け、踏めば上から落ちる様に、工夫を以て拵へ置きしに、アお聞きなされ、兼て義興大力にて二十五六人ありとの噂故、三十人にて拵うかねる大石を、あたまの上から落とし懸けしに、宙にて請け留め、親へ手鞠か小石を投げる様に、築地の外へ投げ出し、此の判官が伏撃し三人まで打ち殺され、近年の大しくじり。」「イヤ／＼そんな事では参るまい、此の監物が思ひつきには弟の義岑め、此の郭へ入り込めしこそすひ、きつから取り入れ一思案。」「オ、其の事は此の入道も油断なく、一人の家來を牢頭仕立てて付置いたり、一ハア此の監物は義岑が用が、臺と申す、郎たらし込まん色々の諸り物、様々に拵へても此奴も賢き女にて、義岑に心中立て、むざと大事も問さず、旁以て其の用を其の上水兵衛の矢は、武運の守りとなる故に、尊氏公も御懸望、これも義興が手に入れば、兎角北方が皆／＼かた／＼ハハハハがな。」と三人が慾惡ぶ道の思案取りノ、横手を打つて皆津監物へ有るぞノ上分別、果は親入道より新田方の幕下に屬し、方々にて手前も有るしが、義貞討死の其の後は、入道及の御世話にて、尊

氏公へ富仕へ、それからの思ひつきに「ム、然らば篤と一間にて、示合はさんいさ此方へ」と三人は、うち連れ奥へ入りにける。思ひ／＼の夢結ぶ、座敷々々子の刻過ぎ、一間を出づる義孝公、「ナウ臺其の竹澤監物とやらはどうして其方を其の様に」「サナ死んだ娘と私が顔が生寫し、娘ぢやと思ふとて、紋目其の外氣を付けて様々の贈り物」とくにもお前へいふ筈なれど、尊氏方の人なれば、どんな方便も計られすと、今までお耳へ入りませなんだ」「ム、今時の人心むさど氣は緩されず」と話しの半ば一間の内、はつたばた付く物音人音、先づ／＼こちらと義孝公障子の陰に立ち忍ぶ、透間もなく入道遁哲、懷觸持ちし竹澤が腕捻ぢ上へ怒りの大聲、「我をたらしで進所へ引出し、寢首かかんすは、ム、憎い奴」と捻ぢ伏すれば、竹澤無念の齒がみえなし、「汝か首を土産にして昔の好み新田方へ、奉公と王みしに其の方便の願はせしは、ム、残念」と一廻き返るを、刃物もど取り、入道が縁よりどろどろ踏み落し、判官心得たりと刀の背打ち、背も砕けとぶら居うら。竹澤息もたえ、手に手足を蹴き七轉八倒、入道聲懸け「よい／＼一思ひに殺さんより、世上の見こらし逆藏、其の松に括し付け、夜明けの上成敗せん」「イカニモ左様」と判官が、ぐつと締め上げ狼狽ぎ「夜明けぬ内にいざお歸り、泥坊めは此の通へ縛つて置けば氣遣なし、仕置は家來に言付けん、イナ歸らう」と兩人は、したる顔にて出でて行く。始終忍んで立ち聞く臺、手觸撫へ走り出で、庭に飛びおり漸うと、縛め解

が鼓も幸すあり。新田左兵衛義興公、今日出陣の肥頭鷹形打つた。五枚、緋織の御簪長衣有つて、脇
 御侍、同じく富常太一郎義岑、色着事、若狭の、花の姿やか、神供には竹澤龍物、其
 の名家の子に幸まで萬燈の火に照したる、露の金物、光、實にも、しく見えにける。我興仰は出
 くる、は、いかにが、此の鹿嶋故足利軍氏、討ち亡はした。教養なれども、必生今度の一戦は、はか
 ばり、利に有るまじ。岡の外は武將の下、軍の事は軍に任せて、時節の来るを待ち候へと、色々
 諫め申せども、義興には劣りし器量、卑性主權と清忠が悪口、遂つて諫の言聽するに似たり。先祖
 の名まで、無念で、天運本だ至らすとも、正八幡の御利益、源氏を守りましと、此の宮中に
 あのと、神慮を仰ぐ萬燈は、神の恵みを頭に載き、一戰に討ち亡ほし、宸祿安んじ奉らば、や
 ア、ア、二監物、汝は新參ながら武藏國の産と聞く、敵地の案内よく知らん、此の度の先陣は汝たるべ
 し、猶も忠勤勤むべし。と、仰すに監物頭を下け、「ハア、有り難。御詞、新參の某、大役仰せ付けら
 る、段、武士の面目身の木望、君の武勇に聞きおちして、脚腰立たぬ足利勢、味方は一致の逸の武者、
 只一搦に踏み破る味方の勝利疑ひなし、片時も早く御出陣。と、萬幸一度に預け、皆に勇気の御大
 將、イザ神前へ御暇、賽しの拍堂の、音があらぬか砂塵、はつと吹き来る風に連れ、一度に消ゆる
 燈籠の、音とこ闇の神の告げ。道に残る一燈の、光は薄き武運かと、駒に當りし義興公、所詮勝利

我々を思ふるならば、其の端に暮らん彼等が上へ、我に替つて君を守護し、必ず忠勤意なるな。天の命を思ふ有り、若しも運命盡きて身は戰場に曝すとも、名は末代に輝かさん、汝は都へ立ち歸り時節を待つて、消えたる火影のごとく、源の、氏の光を輝かせ。南朝世々の忠臣と末代に武名を上げよ、此の詞を思ふは未來永々助當ぞと必死に定む。武士の、口には言はず心に、是れ全生の別れなり、もしもゆゑ、しき御大將、恩愛離別の日の内に、満つる涙の伏勢を、防ぎ智謀はなかりけり。義孝も勘當の重き詞に爲方も、涙を押へて二ハ、て其まへ奉り、髣髴は時の遅なれば、驚ひ敗軍ありとて、必ず短處に思ふまゝ、日出たく陣陣待ちあゝる。一ハ、聞き入れ有つて満足々々、今汝にあたへ置く、二筋の矢、心の固り、二海馬の名を取るな。サア、面々馬塚八郎重虎は軍勢催促に遣はし、此の所にばあまねど、かゝる下知を傳へたれば、おひく跡よりかけつけんぞ出陣。と御堂の内、引き出すお召しの白髪毛に、ゆかりのそば、義孝は見上り見下す血筋の別れ、武士の寒気を吹きあらず、無常の嵐寒なり、親子の思ひ桶が、名は磐石と堅めたる、義心に劣らぬ義興公、蹄泥立たる露の胸、雫の星と輝ける鞍足の、跡に隨ふ諸軍勢、飛ぶが如くにかけり行く。跡に義孝沁々と、肝に微なる同胞の、別れに心しるゝと、影見ゆるまで伸び上り、見送る影も痕の手の、次第々々に遠ざかれれば、涙を含んで立つたる折から、思ひがけなき宮居の陰、そつと上つたる

外八文字、一文宇、所にやんだお前の出陣、松ぼりの我ら、敵の日本に討つてゐる密手の大將太夫様、四方を取り巻く此の遣子、籠網に打つ太鼓持、廣げる指の置杭、薙茂木酒肴、兵銀のコレノモノ、此の提督様の御目、跡駈に吞まけう、堅い突のお林入り、コト門出の笑本、作り物や乾物、何にはちがふ、生動物をお目にかけん、サマシ、お出で無理由に、適に朝の色道、女のよれる神がきに、是非なく引かれ入給ふ、竊に一人はしたり顔、「この彼の一物、引つたくつて主人へ渡さば、奥庭はすつし、色男でも測ひ義理、あつ立ては事の破れ」と慕ふ覗いて、「うまいぞ」、例の大酒のみをつき、マノ鎖れに奪ひ取らん、汝は勢に眼を配れ」「す、サ合點首尾よくだよ」と、小吉は墓へ歸には五作、四方に氣配り忍び足、なんなく朝矢盗み取り、小吉が小聲に「上首は々々々、見れさへ取れば義理の、ぶち殺すは手間入るや、片時早く主人へ手渡しサアこい。」と、逸足出してかけり行く。俄に驛草の内、かけ出づる義理に、取め付き縛る臺も俱に、引き摺られて放さばこそ「コレノ、申し殿様、氣相かへてコリヤ何事、何ぞ夢でも御らうじたか、コレ氣を鎮めてくださんせ」。「サア何事とは、兄義興より預りし大切の二筋矢、思ひも密らぬ紛失。かねて倉氏懇望と聞き、敵方へ奪はれては、味方の不吉我が越度、是上への申譯にと、差添抜く手に取る付く臺ニイッテ放せ、マア待つて下さなせ、サ、道理ぢやない、

ど動かばこそ、にこ／＼ほやく打笑ひ、「ム、ハ、ハ、ハ、蛆蟲めらがほでてんかう、新田の御内に隠れなき、四天王と呼ばれたる條、伊賀守が嫡子八郎車虎、此の手足はえ抜きの、大佛柱を齧鼠、動かぬ事いかぬ事、助けたとて殺したとて、高の知れたる下請共、早く此の場をなくたれ、」と云々下臈とは推参なり、新田入道の鄭等石原丹治逸見傳吾、姿を覆し義容を、高ち取る方便の牽頭、一はい喰はてて考うた御矢、上人へ渡せば新田の滅亡、廣言吐く前髪首、さらへ落せしと切の込む刀、南拳の一振り、「一、ううめをせしより助けぬ、御矢の盜賊觀念、」と一振りふつて打ち付けられ、ッし遁なると下知の下、とつと馳せ寄る轉人原、引つつかんで是人様、はらりとと重投けちらす、無法不敵の石原逸見、透を伺ひ切り棄る、身をかはして鐵拳、素頭ひつしやり石原葉鎌元けあたま、みづんに碎け逸見傳吾、一度に息はたんにけり、「一、氣味よし心地よし、御矢の在處は鳥山、都に有らば一大事、かくし様子も若殿の、御身の上も憂東なし、一先館へこイヤ／＼、先づ我が君に追付いて事の次第を申し上げ、思案ぞあらん。」あら金の、土砂踏み立つる猛虎の驅けり、獅子奮迅の勢ひは、實にも鳥山の十六騎、其の腕一の勇士のす、父も父たり子も子たり、二代の忠臣傳塚が、武勇を代々に傳へける。

第二

月の名所を引きかへて、愛やかしの新渡、矢張りふか手原、霧にほたる武蔵野の、空物連の
 氣色かた。新田左兵衛左義興公、救命もだし難ければ全度のお願は、羽衣と黒澤柳のしほ立、馳せ逃
 ふ馬廻太刀の御音天地に響き、目を招く鳴が響ひ、山を抜く項村が如く、矢ににほひでとさるべ
 き、怯ます去らぬ戦ひに、さしも多勢の鎌倉勢、色めき立つて見えにける。追ひ来る敵を喰ひ喰ひん
 と、鎌倉の侍大將、江田判官景連家の子郎重初逢を討ひ、太刀抜きにこそ思ひ向ひ、手を碎いたる
 働きに、終つたつたる官軍も、少しはけしきある所に、さきよりけり。江田判官景連はこれに有
 り、一喝ばはつて、判官目懸け討つ二龍れば、家來は主を討たず、と、駆けぬがなる竹原が、細柳
 盡に討ちあらば、叶はぬ敵と逃げものを、踏ふにやれしと見つかはれく其の邊に、江田判官逃う
 と逃げたつて、味方を松原に、歸來して居る處へ、取つ二急ぎ竹原勢、敵に駆け付くれば、判官
 も駆け討ち下すはつしと渡り合ひ、暫しの戦ひはあひしが、雙方よりあきらみと捨て、手にむんと引
 組んで、さうむくと揉み合ひしが、俗見も聞きあきらみ、戦打ち聞ひ小聲にたり、と判官殿其の
 以來は、「コレバ、敵軍方と闘たれば、互に普通の取り遣り許さる」と、其許の手都合は二、い

むらくばつと逃けて行く。「ヤア數にもたぬ薩兵共、うぬらを目撃ける義賊ならず、イテ摩氏に見
参。」と、果り出さんとし給へば、馬は俄に高嶺を、打てどあふれど進まねば「ム、扱は、此の義みに
伏勢ありと覺えたり、シヤ何程の事あらん。」と、進まぬ馬をあふり立て、驅け出し給ふ後より、案に
違はぬ武者一人、鎧の上に蓑打掛け、頭を隠せしなだう市、馳せ行く馬の尾柙を掴んで引きさら
せば「ヤア推参なる曲者、討ち放さんには及ばぬ、此の義賊がまつたる馬を引き留めんとはしをらし
し、ならば手前を留めて見よ」と、一鞭當てて驅け出す。馬は駿足、人はずき、踏み出す足直さう
どろどろ、馬は金切かきとどろどろ、互の掛聲障子の音、簞笥に響く武裝の音、また枯れ枝の音、
芒刺當り郎花、亂れ散りてそ、並もみ合ひしが、此奴もしれ青蹈みとゞ、此つ引かれつ下ふ内、
頭巾は脱けて見合はす、其方は我が家来由良兵車助信忠、ム、其の意を得ざる今の振舞。南瀬
六郎と其方は、我が家の攻めをよみて、故郷田の城へ、其の意を得たるに、城へうち居
て來たる人ならず、今吾氏を討つた人、と、取り出し其の義賊が、鞍馬より馬を引つての
後、馬に返答「よし」と、以ての外の御恩に、兵庫助は義賊の姿を見上げ思はずも、はなはと
と涙を流し「君救命を蒙り給ひ、大將たる御恩にて、其たの勇を好まじ給ひ、かく輕きしき御振舞、
下すの勇は其の勇に勝て」と申す事、申す事にて、御恩に、都て此の度の軍の様子、目を

進の趣にし、とくと思案を廻らすに、日比の軍慮に違はせ給へば、必定今度の御出陣は、討死との御覺悟と、睨んだ眼に違ひは有らじ。是非御留め申さんと、御館には六郎を残し置き、密かに來つて様子伺ひ、御所存とくと見定めたり。御氣に障る事有りともし、恥を忍び身をこらし、年を重ね日を積まねば大功はなし。一旦の御怒めに御身を失ひ給ひなば、誰有つて天子を守護し、朝敵を亡ぼして、公家一統の代となさん、情なき我が君と、或は怒り或は歎き、詞をつくし理をせむれば、義興公も内裏の首尾、我が胸中をうち明けて、物語らんかいや、彼にうち明け語りなば、行く先へ付き經ひ諄のんは必定、所詮決し覺悟なれば、止めらるゝも六かしと、さあらぬ體にて、一々一々信忠、夫れは皆汝が廻り氣、討死の覺悟とは、思ふも寄らぬ一言、日に餘る敵の大勢、士卒の心を勵まさんと、手をおろしたる我が働き。一々一々、いか程に御意有つても、此の兵庫が有る内は、一騎立ちの御働きは金輪際お止め申す。敵陣は此の兵庫か、一當當てて御目にかけん、君は暫く御休息」と、裏腕を捨てていつさへに、敵陣さしてかけり行く。大將の御座所を窺はれて味方の軍勢、非彈正を始めとして、おひ／＼に駆け來り、一息はつとつぐ所へ、己が王みを押し隠す惡には智慧の竹澤監物、首三級引提け來り、實檢に備ふれば、大將御覽じ、ホ、監物、數度の高名手拵手拵、軍の様子はおんとく、一々一々頃日數日の戦ひにて、勝つに乗つたる御勢に、兵庫が荒手差

加はり、手ひとき味方の軍配に、勞れ果てたる鎌倉勢、尊氏を始めとして鎌倉さして逃はのびたり。
此の處に乗つて責め討ち給はば、敵の大勢皆殺し」とに心を懸け、勸めの詞。此方は、固より討死と、
覺悟極めし軍なれば、いつの時を期すべきぞ。天下の爲には敵、我が爲には我が敵を、討た
ずんば再び生きては歸るゝと、いざ追ひかけ陣觸れよと、勇に勇んで乗り出し給ふ所より、
あひ来るは山良兵衛助信忠、かくと見るより引揚げし、敵の首段は捨てて、智づかる作事と取り、「コ
レ殿、最前も此の兵庫が、詞を盡し申し上計に、まだ御合點が有りませぬか、一、夜間しき御所存
目比に計りし御振舞、天壁が見えぬ様な、一、見取は、尊氏なれども、鎌倉へ引き籠らば中々容易く責
め難し、一、先故郷へ歸らせ給ひ、英氣を養ひ時運を見て、討つて出で給ふは萬全の計」と、お馬の口
をひき返せば、さきにせいたる御大將、故てととあせれども、此方は手強き忠義の一騎、と、敵を
な。」と義興公、陣扇にて兵庫が顔、目鼻を分かす丁々々、打てと擲はと放さばこそ、と、出陣の先を
折り、味方の英氣を挫く曲者、敵の、味方の心か、勘當ちやそこ立ちされ、主従の縁を限り、と、
扇を顔へ投げ付け給へば、一、御勘當とはお情ない、何國までも御頼め」と、又も進める所にて、敵
飛ばし／＼煽りて立て、諸軍一度に進み行く。跡に兵庫はあきれ果て、留りても留るゝ御勘當、こゝ
是非もなき次第や」とどつかと半して男泣き、さび御勘當なるとも、追つては御勘當のこと、立ち上

る折こそ有れ、さつと吹き来る。其の葉土石を巻き上げ、傍に捨てたる陣扇、俱に虚空へ吹き上げれば、其軍は急度眼を付け、アッ心得ぬ此の有様、捨て置かれし陣扇、土石とともに吹き上げしは、我がれの御身の上、善か悪か何にもせよ、弱の行方を見届はん」と、跡をしたらうて三重行く空の、上野國新田義實公の山城といつぱ、上は嵯峨の山嶺き、松の古木の枝たれて、雲なき龍かと疑はれ、下は崖岸待つて、晴れぬ虹と誤たる。肩には矢間透もなく、聖軌道茂木引き渡し、要害堅固に見えにける。比しも、小春中空や、味方の旗の十竹に敵を木の葉と吹きさらす、武藏野の勝軍御壽き有る。しと、御臺所筑波御前まだ三歳の意壽丸、乳母が膝にいたいけ。お傍の女中立ちはり敵に、ち栗鼠斗昆、鏝子取りノ、持ち運ぶ。お家の室老由良兵庫助信忠が妻の湊、一子友千代を乳母に抱かせ手づから捧げる島臺も、君を祝する鶴鶴に、矢竹心の味方の手前、松に寄せたる御壽き御前に直ししとやかに、「御壽軍の御視儀お目出度く存じます」と申し上ぐれば御臺所、湊が毎日の出仕大儀々々、殊にけふは勝軍の祝儀とて心の付いた上物、是れまで日毎の注進に、一度も悪い沙汰もなく、十一分の味方の勝、殊に一騎當千の兵庫助も跡から加勢。氣遣ふ事になけれども、諄々思ふは女の常、若しや深入りし給はんかと、よければ、ようこそ案じられる。「イエ、そこはぬからぬ私か夫、勝つて兜の緒を締める御用心させませんと、跡から参る程なれば、殿様のお身の上夫の事に案

じはなけれど、私が弟の御殿へ郎、まだ年若く氣受者、仕掛し、看らうかと、足許許りが心算に
「イヤノ、八郎が手柄の様子、よくよく委しう聞いて置かう。御殿へ御参り有る家の西犬主、伊賀守
か子程有ると、一家中の御め津汰、まゝ、まゝ弟をもちつた、それ見や友、我が家の氣文、聞いて
も御説よりは人情に見えぬわいの、兩親の血筋何方へ頼るべきか、此の若き能い片腕に、頼る女
なき御機嫌に、一ハア有り難いお詞木に夫れまゝ、御家中の内儀御親中申し上げて、お次に持て
居られます、一ハ、それは皆大儀を、是れ一廻きりの御詞に、お侍女中の軍機にて、一家中の
嘘、連れ御前へ立ち出で、思ひの思ひ、考へて置かう。御殿へ、お参り有る家の西犬主、伊賀守
つと聞きおかし、首をさへへの尉と使、左の御口御氣に直任、御殿へ、お参り有る家の西犬主、伊賀守
の戸隔つる聲の響に、聽て、お梅の作、御色見させ、御殿へ、お参り有る家の西犬主、伊賀守
鈴、言はねと傳き、御殿へ、お参り有る家の西犬主、伊賀守
四郎、まゝ、御殿へ、お参り有る家の西犬主、伊賀守
門の裏、お参り有る家の西犬主、伊賀守
先ず、お参り有る家の西犬主、伊賀守
七郎、お参り有る家の西犬主、伊賀守

大敵を、釣り寄せて打出の小龍、市河五郎が勇力をしめぬる夜の諸言は、つかも内儀の名もおつが
 とて、家中名うゝ御孫つとり者、其の外お家宛近の女房、儀儀なく、皆それゝ捧持物、廣聞せよ
 しとて、御孫、勝軍の御壽きお日出度う存じますと、一度に聞く口紅や、つらりと就ぶ御は、
 染井の御壽き鳥の花、此間の紅葉に胡枝花寺を一つに寄せたる如くにて、花々しくぞ見えにける。御
 妻は御孫、うんはしく、「何れも揃う、綺麗な事、愛では皆も氣が詰らう、奥へいてのありつと、酒で
 も呑んで給やいの、女千代も寝たさうな、乳母も共に、「二つお詞に、ハート一度に羣鳥の、立つや姿の
 柳渡、かいとりの御長廊下、ぞ、めき連れて入る跡へ、是れぞお留守の要石、動かぬ胸の緒折れ、南
 瀬六郎宗澄出仕の上とさけやかに、金作りの大小も直石お家の家を職と、言はねどしるき其の人品、
 しつ／＼と打通り、「先、以て今日は、勝軍の御親直、恐れ主様、と相違ふれば、「一、六郎も近うと、
 兵庫が行きやつて其の後は、軍の知らせはまだないか、「ハ、相役の兵庫助申し上ぐべき仔細有つて
 軍の場所まで参りしかど、未だ便りも是れなし」と尊取り／＼なる所へ、取次の女中立ち出でて、「武
 藏野の軍場より、兵庫殿の歸られし」と、いふ間程なく、立ち歸る由良兵庫助信忠、續る書替の黒草
 紙、着詰りたる胸板や、軍出立を其の儘に、しを／＼として立ち出でしが、御座を見るより、ハアハ
 ツとばかりに両手をつき、指し附いて詞なし。心なれば女房、「思ひの外早いお歸り、そして常

ならぬ御願持、御臺様のお案じ、どういふ譯かついぢよつと、申し上げたがよいわいな。」と、せけば
せく程部託類二河を女の小さし出た、御達言がお氣に障り此の兵庫を御勘當、御出馬のお供もがなは
す、なる面さけて歸つたわやい。「エ、御勘當とはどういふ譯、何れあつて」と驚く女房、御臺所も
御不審類、六郎は指り寄つて「御達言の其の仔細は」「サレバ、勝つに乘つたる御大將、竹澤が勸
めにて鎌倉を責め落さんと逸り切つたる御出陣、其の意を得ざる御振舞」と申す詞と終らぬ所へ、間
近く聞ゆる響の音、コハ何事と見る所に御付進と呼ばはるゝ表御前に馬乗り捨て、後家八郎重虎、
鎧に立つ矢薙毛と折り掛け、眞一文字にかけ付けしが、いゝと許りに息切し悶絶すれば、眞は駆け寄り
「コレ、氣を慥かに持つてたら、八郎が」と呼び生ける。六郎は聲高く、日頃の勇氣に似
合はぬ振舞、後れたるか八郎、卑怯なり重虎」と呼ばはる譯の通じてや、むつくと起され、「サウ嬉
しや氣が付いたか」と悦ぶ様取つて突け退けとつかと生し、深手に弱る八郎ならぬと、心をあらし
打に、悶絶せしか口惜しや」と、齒がみをなせば六郎は詰めかけ、「様子にいかん、何となく」
「されば、我が君には、武藏野の御出馬より、勇みに勇な味方の勢、攻められ、乗け打ち、鎌倉
さして責め寄せる。兼て計りし竹澤監當、江田御官と心を合はせ、矢口の渡の身底に、穴を、開け
のみを差し、今や遅しと待つそこは、夢にも、いさや白薙毛の、眼に鞭打ち我が君は、硝子に先たち

は我はて、彼の御首に召し給ふ。お供に随ふ武士は、世利田大島、井彈止土肥市河を始めとして主従
 總か一騎、雲々蜂にて押し出す。固より名高き玉川の、餘所の時雨に水かさ増し、矢を射る如き川
 中に、傳て仕組の舟子共怪我のふりにて櫂を取り落し、舟底の鑿を抜き、水中へ飛び入り、行
 がしらす。わたり行く。わかつの岸には江田判官、こゝたには竹澤監物、伏勢どつと押し寄せて、射る
 矢は、舟内には水、縦ひ翅の有らばとて、遁れ難なき御有様、天鷹を欺く我が君も、叶はじと思しけ
 ん。御覽ぐ間もあら無念やと、怒りの御聲諸共に、終に敢へなく御生害、十人の人々も、思ひく
 腹かき切り、そこはかとなく成り行けば、おひ／＼馳せ付く味方の軍勢、大將失せ給ふ上は、生
 き命へて何かせんと、敵陣へ駆け入り、人も残らず討死。と、聞くよりハツト人々は、餘りの
 事に詞も出でず呆れ果てたる許りなり。一間の内には家中の妻女、聞くに堪へ兼ね聲を上げ一度にわ
 つと泣き出す。八郎は息つぎあへず、「此の事お知らせ申さんと、暫時の命ながらへて、君のお供に後
 れたり、何れもさらば。」といふより早く咽笛をぐつと貫き息たえたり。湊は死骸に取り付いて、「コレ
 八郎、殿様の御遺言、お尋ね遊ばす御用も有らうに早まつた此の最期、コレなう／＼」と纏り付き、
 彼方此方を思ひやりかつはと伏して泣き居たる。御臺所は茫然と、歎きに心空蟬のむねけの如く坐
 し、漸く心や付いたりけん。悄々と立ち上り、乳母が膝に居眠りし若君を抱き取り、コレ

けれども大將の子、とつくりとよう聞きやや、父上は敵の虜にはかなくお成りなされたわいの、母も一所に行く程に、そなたは早う大きう成り、敵を討つて父上の修羅の恨みを晴らしてたも。官軍の總大將義貞様の孫君、浦和源氏の嫡流と生える、果報は有りながら、二人の親に別々なば、誰を使りに成人せん、母が歎きも父上の最期も夢のすやうと、しらぬ床頭といちらもやと抱きしめ、落つる涙と泣聲に、御目をさまし若君はいやぢやう、聞かぬ、赤かほしいと、是臺の、舟に取付くわえはくも、歎ある臺の其中で、此の身がほしいとは臺の中に果て給ふ、父上慰しといふ事を、自然と盡す知らてたか。思へば、浅く、場所も多きに船の内、前後の縁に取り寄かれ、水に溺れて御生害、此の世からなる地獄の責め、御神念口惜しか、さうと云ふに、た今まで親むす、めく此の式を、向と聞くさへ恨しい、七神の高み、別に別れ例をせん、鶴龜の千代萬代離は離か隔り、高砂仕の江州生、然にも夫婦は有る物を、果敢て我が身をさすの世の中や、親ひは却つて道標事、此の鳥臺も思ひし、取つて渡けはり押さ、物狂にしき風情にて、は海にわ伏も給ふ。六郎も然ふり上、此の度山笠合、其の意旨すは思ひしかと、道にて渡り、ふんまでは、思ひ置ね御衆、目の明し渡を清るに、潮人共これを捕ひ、腰を以て磔をかた、川中に至る北、腰落して断絶け、水中にて失ひた、方々に等しき首浮が謀、果御供するな

らば仕様模様も有るべきに、エ、しなしたり目惜しや。二無念の拳手の裏へ、爪も通らん風情にて、涙の玉のはら／＼、空にしられぬ村時雨、餘所の見る目も哀れなり。一間の方には女中の聲々、「御家中の内方達、君の御最後面々の夫の別れを悲しみて皆々自害致されし。」と聞いて驚く御臺所は心付き、「ハッ死に置れたりさらばぞ。」と守りを抜き放し、自害と見れば涙は押し留め、「す、悲しいはお道理ながら、今お果て遊ばしては、若君様のお身の上。」「イヤ／＼最早かう成る御連の末、生きてうき目を見んよりは死なせてたも。」と宜ふを六郎刃物もど取つて、「エ、御知慮なる御振舞、お家の事も若君の事も、忘れての御生害ならば御勝手次第。」と呵られて「スリヤ死ぬるにさへも死なれぬは、しよく／＼因果の此の身か。」と歎けば海も諸共に「お道理様や。」と許りにて又騰々と泣き居たる。かかる歎きの折こそあれ、物見の軍兵かけ來り、「我々遠見致せし所、遙か向うに高煙、數多の軍勢此の城へ押し寄せると相見えたり、御用心候へ。」と言ひ捨てて又引き返す。うハそもいかにと御驚き、兩人騒がす、「扱こそ／＼、竹澤が軍勢共押し寄すると覺えたり、先づ／＼奥へ御入り。」と涙が介抱、漸うと一間の内へ入り給ふ。六郎は心せき、「ナニ兵庫殿、固より無勢の此の城へ、勝ち誇つたる竹澤が大軍を引受ける、貴殿の軍慮は何とでござる。」「イヤ先づ、貴殿の御工夫は。」「此の六郎が存するには我が君の弔ひ軍、命限り敵を防ぎ、叶はぬ時は城を枕、討死する外思案はござらぬ。」シテ又貴殿

の御思案は。」此の兵庫が存するにば、寧は衆に敵すべからず、及ばぬ事に大死せんより、兜を脱ぎ旗を巻いて、敵へ降るより外はござらまい。」ム、何敵方へ降参とは氣が違つたか狼狽へたか。「イヤ氣も違はず狼狽へも致さねども、所詮叶はぬ腕立てせんより、降参するが當世かと存する、貴殿も篤と分別有るに落著く程猶ぞ立つ六郎、分別も絲瓜もいらぬ、身は八裂きにならとて、二件に住ふる六郎ならず。一ハ、夫れは近頃着氣の至り、管仲は敵へ降り、霸王の助けと成りし例。」ヤア生温き毛書人の引事、今敵へ降つては御家吉吉の御身の上、未來の寸君へ、その面きけて御目見えすべきぞ。卑怯未練の畜生傳、詞に及まらぬ身の穢れ、汝がやうなる懸判者は、牛馬程の尾を振つて、鎌倉武士に犬つゝばい、雖ども斬つて命を懸けしと、黒目たら六郎は腕立てして入りに。何思ひけん兵庫助さんど立つて身推し、突き込んで入らんとす。出合は處に女房、漸く最前かゝり合ひの間に居たが、眞實お前は敵方へ、降参なされるお心かえに。一ハ、くどい、後氏がへ、降参の手土産、御臺を引引けて連れて行く、邪魔ひかぬと突き寄はすを、起き直つてしかみせき、中に呆れて物の言はぬ、大事の、お主様御尊儀の此の詩節、命限のお方に改めはせて。一ハ、科なき義を勘當、讀め用ゐすに。一ハ、と、殺され馬鹿大將、新田の家にあいが盡きた、勘當請けたらや主でもなく家來でなし。一ハ、御勘當請けたらとて、是れまで代々御知行に

て、育てられたお前の體、何はともあれ是れまでに、一方ならぬ御好ハ、コレ思案しかへて下さりませ。」と、夫思ひの眞實心取り付き歎けば、「エ、あのノ、と邪魔ひろぐ」と、突き退け廻ね退け行かんとす。裾を押へてコレ待たしやんせ、縦ひ連れそふ夫にもせよ、お上の大事にやかへられぬ、さういふ汗藏のお心なら、夫とて用捨はない。「サテ細事は是とこそ、放せ。」といや放さぬ」としがみ付く。と、面倒なと取つて組み伏せ、用意の早縄手ばしかく縁柱に括り付け、「汝が夫を見限れば此方にも飽き果てた、夫婦の縁も是れ限り、女房去つ」とと睨み付け、一間の内へ入りにける。跡見送りて、女房は胸までせきくろうき涙一けふはいかなる悪日ぞや、殿様には不慮の御最期、只一人の弟を殺し、頼みに思ふ夫には去られ、割へ此の縄目、かういふ因果な身の上が、又と世に有らうか。」とくどき立てノ、どうど倒れて泣き沈む。大手の方には敵の大勢、四方を取り巻き貫太鼓、鬨をどつとど上げにける。海はすつくり立ち上り、一瞬は敵の寄せたるか、御臺腰六郎殿、エ、此の縛め解いて欲しいナ、チエ恨めしい我が夫、女ながらもお家の大事、みま／＼眺めて居られうか。」と命限り根限り起きつ轉んぶ身を跳き、岩をも通す女の一念、縄にすらる、栢の柱、陰陽激して火を生じ、繩は燃え切れどつきりと、こけても打つても厭はばこそ、有り難しといつさんに奥をさしてぞ走り行く。程なく寄ぜ来る敵の大將竹澤監物秀時、眞先に躍り出で「鬼神と呼ばれたる義興さへ討ち取れば

城の奴原者殺し、一人も通さず討ち取れりと込み入らんとする所へ、降参々々と呼ばはつて、立ち出づる兵庫助、竹澤見らより、心得ぬ降参、其の手をたへる監物ならず。一ハ、其のお疑ひ御尤も、論より證據手引きして、此の城を奪取らせ、捕者が心底見せ申うた。一ハ、其の詞に相違なくば尊氏公へ申し上げ、恩賞に望みに任せんがら、降人の法なればツレ家來共、一合點にと兵庫一人を取り囲み返もあらす。亂れ入る。漢は身がたにかへんとく、長刀小脇にかけ込んで、御臺所を先に立て、透間を見て落さんて心を配る向うより、竹澤が家の手筈目兵太、大勢引具しどつと押し寄寄、コレ通すなと下知すれば、心得たりと女房がくも手かくなはし。丈草、追立てられて敵の大勢、逸足出して逃行くを遁さじやうじと追うて行く。跡に御臺に、一ハ、おぶく、長追、無川とある内、後へ廻つて毎日兵太、してやつたりと追ひつゝ、遠よりせせせと歸る。斯くと見るより漢が早業長刀に、血と一瞬に兵太が首、こけりと落ちて死んでけり。一ハ、申ひ御臺様、昔君様は六郎殿がお供申せば氣遣ひない、裏道より早う。一ハ、御臺の手を引き進参に、いづれもなく落ちて行く。南瀬六郎宗澄は徳壽丸をかき抱き、上に腹帯しつゝなとしめ、半身引提け眼を配り、素肌ながら一ハ、一ハ、誠は金石鐵の、たてつゝ首をもち氣の若武者、取り巻く士卒を龜鶴とも、思ひ心の大丈夫、しんづゝと落ちて行く。一間の内より高聲に、一ハ、六郎、命許おは助けてくれん、徳

毒丸を置いて行け」と、呼びかけられて六郎は、きつと後を見返れて、一間の障子をつと聞き、林凡にかゝりて竹澤監物、此方には由良兵庫、殿衆に身をわたれ、采配追取りいふ。いかにいかにしき其の影相、六郎は幽がゑをなし、きつと新田代々の此の域を、朝敵の跡にせられ、坂道不道の愚人原に、乗取られ、は残念す日惜しやア。あはれ若君のお供でなくば、うらみ助は聞くべきか、命冥加な盗賊共、徳森君は六郎が懐に入れ奉れば、千騎萬騎のお供も同然、通おつ聞い、早通せ」と、かくまひに廣言し、明日もふらず出て行く。いかにア、者共、六郎のな道なると、下知に隨ふ諸軍勢、右往左往に取り巻くを、棲まざるに切り結び安をせんこと。戦へば、敵の大勢堪りかたし、どらに成つて引き退く。いかにア、穢し返せ」と呼ばはつて、火雷神の荒れたる勢ひ、流石の二人も底氣味悪く、奥をさして逃げ入れば、いかにア、卑怯至極の醜態めら、目に物見せん」と、騙し寄りしが、振るかへつて、いかにア、天にも地にもかけがへなき若君の御供せん、いかにア、此の隙にと立ち出づる、手前、いかにア、大勢が、又むら／＼と追取り巻く。いかにア、性懲りもなき蚊蜻蛉めら」と、當るを幸ひ切り立てられ、多勢を頼みの難兵ども、一度にばつと迷ひあつたり。六郎も數ヶ所の深手、踏みしめ、いかにア、迫り行く。城内には諸軍勢どつと上けたる凱歌を、聞くも無念と立ちどまりしが、いかにア、いかにア、いかにア、まづ此の場を立ち去つて、行方知れざる義岑公、御家門脇屋義治公和出備を始めて、官軍一隊に

第三

心を合はせ、若しを守り立てて時節を市つて本意を達せ、今の恥辱をすゝかんと、無念なからしめて行く。阿牛をすけし通雲が、長坂原の戦ひに、をきく方とぬ其の音相、古今國帯の忠臣やこゝ、感ぜぬ者こそあらけれ。

東路を歩き下りの街道に、武蔵相模の國境、生・草の足休め、能く谷・米の間、たゞの
旅人の馬を賣り、安に大湯・大屋が町、所名さへ、新田坂、日米の道程を得ては、おれも下り
わたり、野村もなごに「いざさ七二調までこゝろとしよ」といふ。川崎とてね、おれもあつた。川崎
までは心許ない、鎌倉山泊りと見たまする。「ヨリヤア」大船だ、わりや金のより四しめたまふ。こ
ういふといふ、サアおたふく、鯛は松の木葉に白、泣く聲に似たりけり。いふなり、天れ
ても今朝立の際にこそと一言なすやつた、有難ば地土約束しにけれ。他方御一はせなしたじ二人
をさして手組が、イヤおれで思ひ出した、愛いおを後立といふけた、確乎申し、「イヤおれ
もさ、此の取にけりて多つう現れがこころまふ。お話し申しましかか。」「イヤ／＼夫れ聞いてる
なんぢのくなる、あれ／＼熊の如くしつゝ過ぎ、いまだ某代捕ら」と一襲、眞理づゝ持つて這片持別

れ別々に急ぎ行く。又も往來の街道筋町おらが殿様はナア、姫路をとりやるナ、そこで姫路が繁昌するとは、ナアエほてつばらめ高が十二三貫目の荷を附けながら、埒の明かぬ畜生めと、鳴り喚く雷聲、馬の上から湊は聲かけ、「コレ馬士殿私は馬にはじめて乗つた、落ちうかと思つて怖うて／＼どうもならぬ、静かな程此方の勝手、殊に竹輿に召したは大切な私が御主人、ちつとの間も離れては氣遣ひ、此の竹輿の衆はどうぞやぞいなう。」「す、氣遣ひはござりませぬ、東海道五十三次は言ふに及ばず、奥街道までを股にかけて居る此の長藏、私が吞込んだ仕事、アレ／＼もう爰へ見える、ま、いま早うせやかれヤアイ。」と、どやけば跡からいきせきと、登り坂道にた山竹輿の雲助共、肩も頭もちぐはぐに、漸うと追付いて、「ヤイ／＼寐言よ、早う／＼と汝に馬と人間を一つだと思ふかやい、けふは餘り貰ひがなきに、新町の宿外れに晝寐して居たが、何うするも錢儲けだと、願西と言ひ合はせて新町から戸塚まで百五十の駄賃、かう急いでは立場で一はいせにやならない、ナア願西のす、おつとしてゐると寒い故荷を持つてあた、まるのだ。」「長藏汝が雇ひぢやが、何と旦那に頼うて一杯飲ませい。」「す、サ何にもいふな爰が泊りぢや、これ／＼六兵衛殿お泊りのお客を乗せて來た。」と、呼ぶに亭主が走り出で、「サア／＼是れへ。」と店先へ湊を馬より抱き下せば、「オ、思ひの外早い來様、跡の宿から三里には近い、そウ爰が戸塚とやらいふかえ。」「サイヤ爰は。」といふを打消す寐言の長藏、ヤコレ

成程々々こゝが戸塚の宿、御亭主」と目で知らすれば、亭主も然る者、「いかにも爰が戸塚でござります、そしてお連は。」と、連といふは私が主人、サア／＼是れへ。」と、かき寄せさせ、いゝ御出でと介抱に、義興の御臺筑波御前、ならぬ旅に身もやつれ、立ち出で給ふ御姿、薬屋の軒に二月の、磨かれ出づる其の風情、長藏は現をどかし、「何と二人共に見たか。旅妻れでもあの器量、旅籠屋のふんばり共とは、御羅止話程違つて美しいもではないか、あんな物を抱いて寝る男めは憎い奴ぢやないかいやい。」と、長藏わりや何は所の名ぢやとていらぬ焼餅だ。そしてつま外れといひ物腰といひ、先づお前がにどわへ行かしやります。」と、問はれて演が、「イヤ我々は武蔵の青頼みしお方の御前氣故、御前へ湯治に参る者。」と云ひ紛らし、「コレ主の、奥へ参つても、からずばおの一間。」成程々々御念には及ばぬ、サア／＼是れへ。」と、亭主が案内、湊も詞そこ、一間の内へ入る跡に、願西は大矢、レノノ草臥れたく、コリヤ長藏わりや爰を戸塚だとして女を欺し、爰に留めたは何ぞ旨い仕事があるか、他人にせすと半口のせぬかナア野中よ。」「オ、それ／＼戸塚まで行くを爰で仕舞ふ仕事故、だまつては居たが何ぞ是れには譯が有らう聞かせいやい。」「イヤ、高がかうだ、あの竹腰にまつて来た女に我輩首たけ、供といふも女の事、今宵中に一太刀言はせた思入れ、夫れで戸塚に入り込みの旅人、峠山立ててと遠慮のないやうに、此の立場の空助宿を、戸

塚の宿だと欺して連れて來たのだ、何と智慧かノ、と、白惚のだみそは鼻に懸はれたり。願西手を打ち、「扱もしたも、慧の智慧は又格別、おれは又あの供の女久ぶりの女犯肉食。」「フウわれも其の心か、サア二人ながら相談はきまつたノ、」「さうや野中よわらや何とする。」「イヤおりや女より一ばいやつてぐつと寐たい。」「そんなら前祝ひに一杯づゝ、」がもめる、サアこい、と、山も見えざるそら祝ひ、實に長はんの常飲みや、咽をならして入りにけり。御痛はしや筑波御前、見るもいぶせき藥やの軒、漆は障子押し明けて、「暫く是れにて旅の憂さはらさせ給へ。」進むれば、御臺は思ひの顔を上げ、二十の湊白らが身の上程、世にあぢきない物はなし、二世と連添ふ我が夫は思ひ設けぬ御最期、いと可愛い我が子には生き別れ、惜しからぬ命ながらへしも、何卒徳壽を世に立てんと、夫れを頼みに此の艱難、其方のいかい心遣ひ、あかぬ別れを忠義にかへ、男勝りのかひなく、長の旅路の介抱、若し煩ひでも仕やうかと、思ひ過して悲しい」と跡は涙に詞さへ、曇りがちなる御顔ばせ、俱に悲しき涙を隠し、是れはマアお心強い其の様に思召して長の旅がなりませうか、義治様へお前を手渡しするまでは、めつたに風も引く事ぢやござりませぬ。私が夫兵庫助、思ひも寄らぬ二心故、夫を捨ててお前のお供、また南瀬六郎殿は若君を御介抱、何卒尋ね逢うたなら仕様模様もござりませう、暫しの間のお艱難、必ずきなく思召さぬが能うござります」と口には云へど心には、是れが新

田の奥方のお有様かと打ちしをれ、見かばす顔の花曇り、上見ぬ驚や、寝息ささんときき、
の長蔵、願西が二人連にて奥より立ち出で、「若し女中様様お夢れでございませう」と、いふに悔し泣
顔隠し、「そなたはさつきの二人の衆、何ぞ用ばし有つての事が」「アイ用といへば用の様な物、ア
願西が「一、あつとお前方にアノアノ、コノアノ、長蔵おれに許り言はすと汝といへり」「ハ
マアあたゝま役もつわれからいへ」「アわれからいへり、二人共に言ひにくい
といふは、酒でも飲みたい故置をくれといふ事が」「アアと云ふ事もよござんしよ、がらふつと
御無心がござります」「アア父外に無心とは」「アイお大事の物では有るけれど、お二人ながらア
わしら二人を今宵一夜抱いて寝て、乳を飲ませて下さるませ」「アア川原一人お跡になさる
はいかい功德でござります、跡にも先にもたつた人、どうぞ取らせやうござんせ」と、思
ひがけなき一言に、御臺はさういふ詞もなく、さつとこぼれの胸懷ひ、涙も潤いて腕の驚く驚く押
しつめ、胸を見せりと膝立て直してアア身のほどしらぬ處外者、女子ぢやと思つてなぶつたらあ
てが違ふ、長い髪を女の身で主人の介抱せざるやうなる物か、殊にむづかしした武士の妻、今一
いふと救さぬと、突き詞に長蔵は「一、何と聞いたかこはい事だないかい、さう言ひ出
やりやこつちも意地。言ひ懸つた色事、コレよう聞かしやれ、万様の事と載して置めなは俺が思ひを

ります、まめくくくく息災延命にようお守りなされて下さりませ、ホ、ホ、ホ。」ばふノ急ぎ出
でて行く。車扱其の次へ出てくるは、是れは戸塚の名代物、言はねど皆々御存じの、狸の響西鼓にあ
らぬた、き鉦、撞木杖つき漸々と表をさして出でて行く。次は差詰め、野中の松、「アノ私
は元角力
好き、アノ角力と言ふものはさう事もないもの、大きにけがを致しました、夫れでも角力取るなら
う、エイノノ。」何の事たこいつは。汝はコリヤ氣遣な、エ、役にも立たぬ奴等に隙取つ
た。併し只今申し渡した、南瀬六郎見付け次第搦め取つて此の官藏が旅宿へ連れ來れ、裏美は望み次
第、ヤア百姓ども次の宿へ案内せよ、早うく。」と言ひ渡し、皆々引連れ急ぎ行く。跡に長轡一人
笑ひ、「何と聞いたか二人の者、さつきに跡の松原でかんばつて置いた金の蔓、裏美は分け取り奥でと
つくり相談せう、サアこい。」と三人は、打連れ奥に入りけり。既に其の日も入相の、鐘の響も
おのづから、寂滅爲樂も山の空、願ふは彌陀の誓願力、六十六部廻國に姿を畧す南瀬六郎、忠義は重
き笈の中、錫杖つくく立ちどまり、「實に春の日の長きといへど、急がぬ旅のあてどなし、日が暮
れうが夜が明けうが、高が野宿の此の身の上、暫くつかれを晴らさん。」と、笈をおろして傍なる、榜
示杭うち詠め、「フウ何々是れより東武藏國、是れより西相模國、扱は爰こそ武藏相模の國境」と、四
かを見廻し笈の戸を、明けて四つの稚子は、義興の若君徳壽丸、「サア誰もをりませぬ、御心よう御遊

び。」と、道の邊の花折り取り、「爰までござれ此の花しんじふ、サア／＼御出で。」と膝に乗せ、撫でつ
さすりつ六郎が、機嫌取り／＼道野邊の、草に露吸ふ蝶々、夢ともわかぬ稚子の、餘念は更になか
りけり。せめては是れへと榜示杭、引き抜いて押し直し、若君を抱きのせ御顔熟々打守り、目にもる
涙押隠し、「果報はいみじく源氏の正統、新田義興公の公達と産まれ給へども、足利尊氏に世をせばめ
られ、織かの笈に御身を隠し、お乳の人にも傳にも付添ふ者は某一人、かく淺ましき御身の上、弓矢
神にも天道にも、分離されしか残念や。」と、拳を握り齒がみをなし、無念の涙にしづみしが、去りな
がら稚けれども源家の公達、此の六郎が申すこと能くお聞きなされや。今御足の下なる榜示杭は、武
藏相模兩國の境杭、尊氏は相模國鎌倉に居構ふれば、時に取つての足利尊氏、武藏國に今故竹澤監
物が領分、二人が軍勢踏み破り、武藏相模を一時に、踏み踏へたまふべき前表、夫れを觀せし我が寸
志、追付尊氏討ち亡ほし、日出度き御代に、おさん。」と、喜び悦び折こそあれ、いつの間にかは寐言
の長藏、南無三寶と若君を手早く抱き入れ、あふたしめる兩方より、同じく西野中の、一
人一時に追取り参き、中にも若君の長藏が、一六部殿、行き暮したる追取りや御報謝に配り、一
一安心安い事ながら、此方も人の情を受けて通る修行の身、財へとしては更になし、一、半分言はせ
ず、「ヤア財へが有るとても、高の知れた六部の路金、大金になる其の實が貰ひたい。」と、此の笈が

欲しいとは、コリで常の盜賊で有るまい、早速やらうと言ひたけなど、マアならぬ。「ヤア甘ういへば付き上る、どうで直ではいかぬ、二人共合點か、合點と兩方から、組み付く首筋引綱み右と左へもんどり打たせ、森音が透さず後より、確乎と抱くを腰車、面倒なる青蠅めら、此の世の敵を取らせんと、偏に仕込みし刀引き抜き切り拂ふ。此方は刀物叶はんと、見世の道具の手に當り、森音がたばこ箱、投げ付け、打ち付け、切り拂ひ切り拂ふ。此の下に野中の松、此の世の枝葉は枯れうせたり。願西も手は負ひぬ、長藏有り合ふ庵丁追取り立ち向へる。手練の六郎、叶はじと持つたる出刃を投げ付くればあやまたす、六郎が膝の口へずつばと立つ。よろ／＼とたじろく中、何處ともなく逃げうせたり。六郎は齒がみをなし、「エ、討ちもらせしか口惜しや」と、庵丁抜き捨て下着の裾、引き襲いて確と巻き取りにがせしは残念なれと、大事の／＼岩石の御身の上が大切と、痛手に屈せず踏みしめ／＼、歩めどちが／＼足曳の、山坂に氣を春の夜の、そこともわかぬ官團に、連り行くこそ、三重是非なけれ。由良兵庫助信忠は二張の弓も引きかたの、竹澤が推舉にて尊氏卿へ宮仕へ、新たに所領賜はめて不義の富貴の失れごととも、しらぬ我が身の程々谷や、戸塚の宿に鄰りたる、所の名づへ吉田村、傍に目立つ一構へ手を盡したる物好の、庭に泉水築山の木々の梢を漏れ出づる、臘月夜に映ろひし、櫻が枝の白妙も浮べる雲とや詠むらん。鎌倉よりの召しに依りて主

にこと、皆打連れて入りにけり。館の主兵庫助信忠、江田判官景連を同道にて、立ち歸る我が家の内、「イヤ先づあれへ」と賓主の禮、上座に直つて江田判官「先づ以て今日は御前の首尾も上々吉」此の判官も去年の冬、さしも手強き新田義興、手もぬらさず討ち取りしは、莫大の勲功と、尊氏公御感の餘り、相模半國を賜はり此の上もなき悦び。貴殿は固より義興が舊臣、お疑ひも有らんかと思ひの外お取り立て」「ハハ御意の通り、此の兵庫助新田の家を見限り足利家へ降参、當時かやうの活計も貴公と竹澤殿のお取成し、御芳志の程言語には述べられず」と、媚び諂ひの挨拶に、判官猶も近く差し寄り、「夫れに付け義興が弟義孝又倅徳壽丸、今に於て行方知れず、少しにても手が、り有らば、古主とて用捨召されな」「ハハイヤ其の御念には及ばぬ事、死に損ひの新田の一類、捻り殺すに手間隙いらす。夫れはさうと判官殿、今宵も最早初夜過ぎなれば、見苦しくとも奥の間で、夜と共にお物語」「イヤ拙者も急ぎの道、先づ今晚は御暇申さう」「ハテ扱夫れは残念千萬。」「イヤ我等領分より鎌倉の往來に丁度よい中休み、以後は一寸々と御尋ねまうさう、然らば其の内おさらば。」と、家來引連れ判官は、己が館へ立ち歸る。世を浮草のよるべなき、義興の御臺筑波御前湊一人を、結力にて、しらぬ夜道をとほくと、門外に辿り付き、「道踏み迷ひし旅の女、一夜の御宿。」といふ聲の、ほの間のれば内には不審、手觸携へ歩み寄り互に見合はす顔と顔、思ひがけなき悔りに兵庫は流石面ぶ

せ、入らんとするを女房は、つか／＼立ち寄つて、胸づくし取つて引握るニコレ愛人てなし殿、落
人と成り給ふ御奉様の此のお姿、鷹木望でござんせうなう、お前の心一つにて様々の御想難、けふま
でお命續きしは、まだしも神佛の控へ綱。世を忍ぶ旅なれば、何かに付けて不自由がら、御奉様のお
足の痛み、此の家作もの結構さ、一夜の無心と来て見れば、どうかお前の内さうな。かかる暮しで有
りながらお上の事も女房の事も、忘れ果てたる無得心、義理知らず通しらす。意見いふもよしみ
だけ、どうぞ本心に立歸り、お家の御先途見届けて、是れまでの恥を雪ぎ、元の安夫に成つてたべ
憎い／＼と日比の恨み、已れぬと思うて居たが顔見れば種々、心が味に成つて来て恨みも消え自分
一。友千代は息災な流石風など引きはせぬか、かういふ暮しでござるおらは、申しお内儀様を
呼びやなされぬかいな。何卒いうて聞かせて下さねと頼む様でも女氣の、とどけ源にくれ居たり
御索も消え顔を上し、殿様には不慮の御最期、頼みに思ふそなたさ。尊氏へ降参、徳壽を連れて立ち
退きし六郎が行方知れねば、そこへ愛やと導いても行く先々が敵の中、東の住屋叶はねば、鶴屋義治
殿を頼みにして上方へ志し、迷ひ来たるも盡きて奇縁。おらは旅につかれ果て、更き所なき處
の身の、消えなば消えぬも可も、よきに頼むと許りにて、跡は詞もないやうなり。いかに
き御有様、お力にと申したいが、ならぬ。昔は昔今は是利家の祿を食む此の兵庫、新田がの落人側

め捕る筈なれども、女儀の事なりや料簡して、見遁いて進ぜう、足木の明い申とつとごこれ。」とに
べなき詞、女房は猶せき上け、「聞けば聞く程愛想つかし、コレ飼ひ養ふ犬も主を知り、尾を振つ
てそばえる物を、犬に劣つた人畜生、サア御臺様お立ち遊ばせ、行き著き次第に参じませう。」「オ、
時世につる、人心、是非もなき世の有様」と、しを／＼として立ち給へば、心よくは言ひながら、
流石女の跡や先、姿顔作つて傍に寄り、コレ兵庫殿言ひ懸りに言ひはいうたが、アレ御臺様のお足の
痛み、殊に夜更けて一歩も、お歩ひはなされまい。座敷にならずば軒の下、木部屋になりしもたつ
た一夜か、一イヤならぬ。「そんなら何卒友千代に、ちよつと逢はせて。」「猶ならぬ、夫婦でなけれ
ば子でもなし、とつととうせう。」とあらけなき、詞に湊は身を震はし、「へエ御臺様のお供でなくば、
喰ひ付いても此の恨み、人に報いが有る物か、覺えてござれ。」と見返り／＼、御臺所の御手を引き、
す／＼として出でて行く、心ぞ思ひやられたり。されば其の幹振る時は枝葉全からずとかや、南瀬
六郎宗澄は數多の追手を切り抜けて、忠義一圖に若君を漸う脊に笈の内、深手に弱る足たじ／＼、此
の家を日常によろほひ來り、「行き暮せし旅人なるが盜賊に出合ひ難儀至極、お家を見懸けお頼み申す
御匿まひ下されよ。」と、内へはひれば、「サア其方は南瀬六郎。」一ム、人非人の由良兵庫、ハレおもひ
がけなき對面ぢやナア。愚人に向ひ詞なし、サア／＼勝負。」と、詰めかくれば、「ハ、ハ、ハ、血迷うたる

か六郎。」一々存外の謠言所詮助かぬ我が命、己が首を冥土の土産に「ム、」、血迷うたとはその事、サ、ト尊氏公の御威勢見たか。唐土天然はいさしらす、日本の地に在りては、いか程遁れ隠るゝとも、袋の物を探るに等しく終には尋ね出されん、そこを計つて此の兵庫、手廻に降参し、廉の知行を取れば、ヨリ此の通り豊かの暮し、彼の精進といふ處は、己が首を頼みにして中に向ふまつ其の如く、汝が武勇を頼みにして、鎌倉へ引かんとは浅はかな目論、大きな物に吞まれ、長い物には巻かれるといふ事の通り、緩ひいか程働いても、御威勢にて取り囲めば、行く先々の行旅、其の上には其の深手、手向は東にない。一ツア道知らずかたまり、凡そ成つて全がらんより、巨と成つて砕けよと古人の余言、身は醜になつても、汝がこそ孝不義、恩を忘るゝ六郎を「す。」一々、其の理窟は聞えたが、今某を討ち果さば、それ其の腹の内なる徳壽丸、誰有て介抱するぞ、一とつくひと分別せよと、星を差したる一言に「一ツアさうで遁れぬ御命、但しは悪善に融け、かくまひ申す所存なるかに。」一々、かくまふ程なりや鎌倉へ降参にせぬわい。既まじもせず、本心にも返らねども、高しられた事際一匹、鎌倉殿の害にもならねば、見遁してやる分の事う。」「ム、しかと見遁してくれうや。」尉其懐に入ら時は獵人も足利を取らず。「一ツア、命惜しむにあらねども、御一門は皆ありんく、我々公の御旨が知れず、郡田の家、御勤筋取り給ふに三書許

り、人切の御命見進してさへ下さるれば、御恩は忘れぬ、とて手を合はして拜み申す。このだんを見まじし近寄つて、只一討ちと切り付くるを、腰がす解に一つかと請け「ム、ム、ム、ム」としても及ばぬほどでんがう、其の手では参るまい。去りながら木にも音にも心響くは落人のならひ、疑ひは尤も至極コリヤ見通すといふ其の證據」と、刀のこひ口抜きかけし、丁々々と金打し「深手の上に氣をもちますと、おくの一間で養生お仕やれ」へエ天にくままり地にぬき足、思慮分別も愚に返り、かくなり下る我が身の上、弓矢の冥加につきたるか」と、くらむ心を取直し、心ふらねどせぬくも、奥の一間にたどり行く。程もあらせず討手の大勢、ぼら／＼／＼と亂れ入り、矢ぶすま作つて追取り巻く。「コハ何故のらうせき」と言はせも果てず捕手の頭「新田の小沢徳壽丸南瀬六郎を付け込んだり、御渡し有れ」との、しれば、人数の中より馬士の、雜言の長藏ぬつと出で「コ、親方、金に成る代物を焼断坂で取りながし、追手の衆の手に餘ぬば、どうで俺が手ぎはにやおへないと、見えかくわに付けて来て、奥へ入つたをとつくりと見て置いた、四の五のなしに渡さつしやれ／＼」わたせ／＼と大勢が、すきもあらせず詰めかける。折もこそ有れ表の方、上使なりと呼ばはつて、入り来る竹澤監物、「ヤア家来共龜忽の振舞、皆引け／＼」と、追ひ退け上座に通れば「ム、思ひがけなき御上使と」。「ホ、上使の趣餘の儀ならず、南瀬六郎徳壽丸、最前道にて討ちもらせしを追ひ／＼の注進、尊氏公問召

され、元來古主の事なれば、兵庫が心算計をたし、吟味するに、戦命、早打にてかけ替はらに、衆の如く畏戦かくし置く條まぎれなと。昔のよきまふや、また首討つて用さるゝや手短の一日きなと。返答いかによと問ひかくれば、兵庫は何といらへもなく、傍に有る合ふ町矢處取り、さうきりと引き、ほり、一間を日常に切つて飲めばあやまたず、はつしと手こたへ重けぶかと、但に様子踏みにづし、朱になつて南龍六郎、マア車輪至極の表裏者、あまき詞に我々欺き、飛道具にてしと前とはき愚かしく、是れ式のへろく、笑、町筋を前手に立つとも何程の事有らん。類を以て友とする奸佞無智の愚人輩、一々首をならべんと、無二無三に切つてかゝる。心得たりと兵庫助、逃げつ流しつ上段下段、突き入刀筋こたはし手負、心算やたげにはやれと、切り込た刃をうけはつし、左のかたさき切り付けられ、かつはと伏せば、と泣き、新井の取り兵庫がさき、射つくと起きてな郎が、やうじと起るや又一大刀、うんとこのつぎにそり返るや、はむあもつち若君の首をこに打つ落し、暗使の敵にまじ置けば、竹澤につくと文を合み、かゝて知つたあき殿の心算、疑ふ所はないと人、後青丸が頭骨を見しらる此の箇所、宛見にかゝる爲、遅く見知りし者や有る様用と。といふ筈に、以前の場とあつとほり出で、首をうつと見込み、今は通にて見付け、敵に相違はござつたせぬと。是れにて萬事相済んだり、會氏公、申し上げな候難助様、裏方は直つて御沙汰

あらんと立ちあがれば、「ハア何分に御前宜しく、近比御苦勞千萬」と、互のあいさつ竹澤監物首
取持たせ立ち歸る。此の家のさわざ、若君の御身の上と聞くにも、有るにもあらぬ御臺所、湊が
介抱漸々と遙より引つかへし、走つてつゝ氣は狂亂「德壽はいかゞ」「若君様、六郎殿はいづく
に。」と、うろくきよろ／＼、兵庫にばつたりム、コリヤ何ちや、德壽丸にあひたいか、逢ひたく
ば、逢はせてやらう。」と投げ出すは、首なき死骸、一人ははつと氣も轉倒、「ハリヤもう若君は殺され
たか、ハハ何とぞ悲しや」と、死骸に取り付き泣き沈む。湊は身軀ひはかみをなち、「ハハ果ても蛇
とも魔王とも、名の付け様のない悪人。コレ申し御臺様、所詮いうても返らぬ事、ハハお覺悟遣はし
ませ。」「オ、いふにや及ぶ。」と用意の懷劍、兩方より突き掛る。「ハハ及ばぬちよこさいひろくな。」と
腕首纏んで突き飛ばせば、又突き掛る一念力、あしらひ兼ねてや兵庫之助、一間をさして逃げ入つた
り「ハハア逃ぐんとて逃さうか。」と、飛び込む懷の小陰より、麻言の長藏跳り出で、「こんなことと有ら
う」と跡に残つた甲斐あつて、重ね／＼はうひの種、此の趣を注進。」と、言ひ捨ててかけ出す。後の
障子のすき間より、はつと打つたる手裏劍に、ぎやつと許りに息絶えたり。コハ何者の仕業ぞと、
見やる一間に聲高く、官軍の御大將、新田左兵衛佐義興公の御嫡男、德壽君御安體にて渡らせ給ふ、
御安堵あれ。」と呼ばはつて、傳き出づる兵庫之助、見るより二人は夢に夢「ハハ、德壽丸は存命へて

か。「若君様にてましますと」と、抱き取つたは煎豆に花の笑顔のこころしを、見る目さくく、嬉し
さは、何に替へん方となく、女将はつと心付き、「若君様を助けるとは思ひかけなきお前の忠義、察か
し深い方便でがなごらんぞう」と、お前竹澤とやらに首切つて渡したは、何人の手でござんしたと
「お、其れこそは倅友千代。」「ヤアスリヤ此の死骸が我が子か、ハア、はつと許りにとうと伏し、前
後不覺に泣き出す。御臺所も御涙。我が身の上に引代へて、夫婦の心恨思ひやる、いかに主の爲めや
とて、我が子を殺して此の若を助けてくれる志、家来ではなく氏神とも神の魂とも、今更に禮は詞に
盡さず、そしてマ、いつの間、友千代と取代へて此の子を助けた其の謝が、「ト、其の仔細は六
郎が申し上げる」と起き直れば、思ひかけなく又取り、「マ、殺されたと思ひし其が、一、二、三、此の六
郎は兼てより、命を捨てての謀。」「マ、忠義は變らぬ此の兵庫、善忠二つに引き分れし一通り、御
物語り、其も我が君義興公、朝敵を亡はせよと、教印を頭に戴き、必死と定めし御出陣、續く兵六萬
餘、敵は名におもふ足利軍兵、随ふ軍勢十萬餘騎、兩陣互に挑み戦ふ、さんもに廣き武藏野の、草
より出て三草に入ら、望しき諒のに引きかへて、月に縁有る司成や、射る矢亂れて篠、枯野の草を
踏み越へ、軍に集ある源氏と源氏、天下分目の晴軍、組ん、知まれつ討つ討にれつ、矢叫びの
音、修羅の街に響く、元來猛き御大將足つとつと、數、度の軍、さしもの源氏軍に、

倉きして引き退く。唐にも乗るべき御勢ひ、竹澤が勧めにて、跡より追つかけ討ち取らん、続けや續けと乗り出し給ふ。」「其の勝軍が我が夫の、御身の仇で有つたわいの。」「いゝ／＼、いか程はやらせ給ふとも、無理に御留め申しなば。」「イヤそこに加在の有るべきか、抜目なき兵庫殿様々お諫め申されても、勝つに乗つたる御大將、御承りまします、いさむるを曲事とて御勵當。」「オ、主從殿の即とて授け付け給ひしコレ此の屈、跡にて見れば御書置、朝廷には佞人多く君をまどはし奉り我が謀を用ゐるれば、思ふ軍の圖をばし、見苦しき負けをせば、我のみならず先組へ對し、新田の名字を汀さんより、いさぎよく討死せん。汝は跡に生き残り、六郎と心を合はせ、倅を守り立てくれよと有り。コレ細々との御筆さみ。様々御諫め申せども、聞き入れ給はぬ日比の御氣質、力及ばずと／＼と、羽なき鳥の心地にて、是非なく古郷へ立ち歸り、思案の間もなく竹澤と、江田判官が謀計にて、矢口のあわときえ給ふ、名ある家の子郎等は、こと／＼く討死し、守りがたき新田の城、落城に及びなば若君の御行が、草を分つてきがすは必定、とやせんかくやと火急の思案。昔唐土趙の國に、程嬰杵臼といふ二人の臣下、主の孤を助けんと、敵を計りし故事を、思ひ出して相談極め。」「オ、若君と取代へて、立ち退いたるは此の六郎。」「つゝ、我は敵へ裏返り、ひそかに若君御養育。」「夫れとはしらず御臺様、燒野の雉子良の鶴、子故に迷ふ御旅づかれ、最前入らせ給ひし時、わざと

つれなくもてなせしも、若しや敵へもせんかと、思ひ過しは若君の、御身の爲と思召し、御用捨なさ
れくださるべし。と、始終くはしき物語、はじめてあかす木心の、智畧のほどぞ類なき。仔細を聞い
て人々の、うたがひ晴れても晴れやらぬ、涙は流をあらそへり。六郎は生を困め、落ちたる刀取り上
けて、腹にぐつと突き立つる一コハ何故の生害ごと驚きまがれば、につこと笑ひ「ハハ心よや始しや
なア、助かり難き若君のお命助け奉り、御堂へお渡し申せば、思ひ置く事へちんもなし。我が命
ながらへては、邪智深き鎌倉武士、兵庫殿を疑はば、若君の御身の大事、殊に數ヶ所の此の手にて、
助かるべきいはれなし。かねて落城の折柄、友千代を殺させて敵に油斷させんと、約束にて立ち過
きしが、いかに忠義といへばとて、一人の我が子をつき出して、我に懸した兵庫殿の心恨を、思ひ計
つて惜しからん、命をかばひか々に身を忍び、そこを父の責め責め、落人の身の心に任せず、東西
分かぬ稚子の、穢うれば泣き出すやんちや蟬、敵の取湯や更黄煎で、だましよかして漕うと、なつく
琵琶いぢらしむ。我を親とも乳母とも、起きふしの上は下にも、伯父よとしたりへりも、我のぬ
きめはいづとて、乳を搾つて泣き出し、母アアといふ時は、子も母の身も甘味に二たへ、母が
し親の心では、我の目も合はす疑ふらん。どうぞ手改しせんものと、聞くこゝたは有所の聞き出し、
忍べ来る道通手に出合ひ、去年の深手に不自由のからだ、又ぞや深手を負ひながら、何とそなたに

一日見せ、其の上はともかくもと此の家へ通り付きしかど、師より慕ふ不敵の曲者、きとられては一大事と、夫れ故にしめん、と、顔も見せざる残念さ、と、語るを聞いて女房は「不便の者やいぢらしや、久しう連添ふ夫婦の中、予のない事を告にやんで、地義よたふ湯治よと、様々の心遣ひ。夫にかゝして佛神に、立願祈願の效有つて、やうう産んだ女千代也。疤痕はしからして取れば、最早藥をわと食んで、袴著寺入り讀物は、何から何うして斯うしてと、案じて居たも、皆むだごし。三つや四つで死ぬるなら、生まぬがましで有つたか」と、誰も涙に取ら亂し、きえ入る許りに泣き沈む。兵庫はわごと聲はけまし、「とくにも死すべき倅が命、けふまでもながらへしは、まだしもの仕合。泣くな女房目比に似ぬ卑怯者、ユ、未練至極」としかられて、女房はなほしやくり上げ「お役に立つて死する命、合點つくなら泣きもせまい、思ひ切り様も有らうけれど、お前一人の料簡で、私には露もらさず、殺して置いて今になつて、卑怯な泣くな未練なとは、いかに男のかうけちやとて、わが儘いふも事による、精いわいの」と打伏して、又さめめと泣き居たる「アイヤ其の恨みは去る事ながら、お家の密事、天下の大事、女童に打明ける兵庫ならず、とはいふもののいかに計畧なればとて、朋友の六郎に手をおぼせ、久しぶりで逢うた倅をもぎ取つて、只一討ち。知らぬ汝の歎きより、我が手と知りつゝ、手にかける、其の時の心の内、コリヤどの様にあらうと思ふぞやい。アイヤ何六郎殿忠義

といへば海軍といひ、末頼もしき若武者も、やみ／＼と先だてて、此の兵庫は生き存命への卑怯とさ
みして下づるな。一、いや死は一旦にんて安し、跡に残つて若君を守り立つる汝の大役、死するに
まづる千辛萬苦、其の上一人の秘藏をこゝに、二代相恩のおまの爲には、我が子を殺すも「オ、
サ身」捨てるも、そのほこりとも思はねども、君を守り立て朝敵を亡はして、天下の善しみを安んぜ
んと思ひ、事も告ぐた事。時に逢はねば名勝も、仇に過ぎ行く老練の、笑口の渡でやみ／＼と、悪人
原があるとき方便に討たおさせ給ひしは、お家の不運か、南朝の衰ふべき時なるか、是罪に及ばぬ兵
庫殿。一、郎殿、断念々々として手を取り組み、忠臣救世の潜め湖、天に通はる河、兎も切れて流る
ふた、御身はむき返り、我が子を抱き命を返つる、かから家来の命ながら、御座掛り我が夫の、
御身の上の悲しや」と、通すし事まで思ひ出し、悲嘆の御にまを給ふ。六郎は目を見開き、一、後め
たり狼狽へたり、死する所はたかふとも、我が一念は亡れの御跡したる春らん、さうばりしてさ
ゑの下、一、の鎖をかき切つて、おつと伏し急ぎたり。其に泣く、我が子の死體をかき抱き、と
なふる。向は監督の舟、生死の岸にはこのうの、流れを渡る三、瀬川、おがけいお先だつてさうす
は、無常の風の瀬川、おにこととはる作用、かたる存世に瀬川、兵庫がくの瀬川と、死ししと氣
深川の、ふかき忠義の胸の中、おがき立てたる瀬川、瀬川瀬川とさる瀬川、御座掛は我が子に

寄らす藍染川、六郎が魂魄は主君の跡を大井川、其の源のにござなき、君に住ふる武士の、やたけ心ぞ頼もしき。

第四

道行比翼の袖

白王か、何ぞと人の問ひし時、露と答へん落人の、身に添ふものは影ばかり、夫れさへ月の人のぬれど、二人は本の二人にて、けふ立ち初めし袂衣、きるに切られぬ縁の縁、結ぶの神の神かけて、二世も三世もまだ先の世も、かはらぬ中の義峯は、過ぎし八幡の難儀より、しるべの方に漸うと、臺諸共忍ぶ身の、しのぶとすれど忍ばれず、まだ夜をこめて鳥が鳴く、東の方へとたどり行く、心の内ぞたよりなき。二人が中はつき出しの、其の日に呼んで呉竹の、ふしぎな縁で天津ざと、昔日の端に唄はれて、カハサ互に上る坂の下、人目の關も龜田の、しやうの悪いは男のならひ、見せかけ許り石薬師、女郎に苦はない物と、見やしやんしたは間違ひの、かういふ事になるみ淵、おまへも捨てて岡崎と、思へばわたしも藤川の、もつれ合ひたる胸の内、うち明けていやあか坂の、なんぼ源氏の太將で、御威勢に惚れやせぬわいな。器量吉田の二かはめ、下さまの事しらすかの、あらひ上げたる殿

振に、深うほまりし濱松の、素振を見付けられまいと、誓紙を隠す袋井の、契りを、二世と掛川や、金谷せぬとはいひ詞、いはぬ島田の亂れ髪、人目に心沖津川、由緒たゞしき御身にて、此の有様は何事と、思ひ廻せば廻す程、腹の立つのは女の癖、顔つくふくと、三島より、蘆花箱根の山こえて、いつかはときに大磯と、うち渡ぐむ許りなり。義母公も諸共に、しるゑ、心とり直し、大事を抱へし我が身なれば、鎌倉へ忍び込み、再び御矢を取りかへすか、見上の敵を討つか、二つに一つ何れにも、助かりがたき我が命、其方は都へ立ち歸り、亡き跡とうてくれゝと、跡は詞も涙なり。臺ははつとでき上けて、世々餘りぢや關懸な、今更いふではなけれども、勤めの身にて勤めをば、離れて送ふは勤めせぬ、人よりは又百そう倍、料簡枯句懸念に成り、思ひない事に教も立ち、口舌いふたつあつたり、あちら向いても張弱く、ついた拍子に下駄も、踏うちとけて付つたりと、抱きしめたる睦言に、かはい／＼の明烏、盡きぬ高につく風の、ならう事ならぬの明けぬ、國に生まれていつまでも、抱かれてねやの瞭白く、おきわかれても落し春の、暖る思ひの十才笥、井筒顔を含はさねば、生きて居ぬ氣を知りながら、暖い心と許りにて、暖むけいては中々に、離れがたなき花より、橋も漸う打濕ぎて、ひらに／＼と平塚や、藤永むる藤澤に、前のおちやれが許々に、東男に都の立郎、いきと情を一つに寄せて、色で丸めた藤の山、薄で見ると一宿らしい、そりやあんなに遠過ぎ

る。武藏野の月吉野の櫻、景と風情を一つに寄せて、雪で丸めた富士の山、噂聞かへうらやまし、そりや餘り強過ぎる。温ふ一ふし聞き捨て、急けば道もとつかはと、古郷も近き程ヶ谷と、思へばいとマ二つ文字、半の角文字直な文字、讀み盡されぬかな川に溜り通り、著き給ふ。歸妙頂祇地藏尊、轉迦のふくくを瞻念し、惡趣に出現し給ひて、衆生の苦患を導けり。鉦鼓の聲も幽かなる、生麥村の離れ家に、住めば都と現染に、浮世を捨てし道心者、たそがれ前の看經は、殊勝にも又物取し、大海は塵をえらばす不淨にも、日は照る國の公や、持て餘したるあぶれ者、ぶつたくりの萬八が、ゆがみ捻れた繩のれん、頭で閉けてすつと這入り、「コレ道念殿、看經もモウよさつしやれ」と、いへど應へも一心不亂、應以此功德平等施一切、發菩提心往生安樂ちやん／＼と、鉦打をさめ續明しめし、「ホ、萬八様お出でなされませ。」一イヤ坊樣精が出るよ、したが先の知れぬ後生願ふより、施澤鬼がおんぞうでもおろかい。「ハイ其のかんぞうとやらせがきとやらをもざるとは、何の事でござりませど。」一イヤコンとほけた顔せずと、俺は大乗打明けて仕舞はしやれ。「デモ一向に存じませぬ。」「ハテやほなわろぢやの、俺は圍ひ者の相談に寺方へ出入る故よう覺えて居ります、おんぞうとは鐵の事だが、宗旨によつてしゆきんとも又鉢巻ともいふけな。せがきとは結の事、又結を普賢といふ事は法華經とやら、二十八とやら片假名とやら柿瓜とやらで、八宗を兼學せにや一々は知られぬ事だ

けて置かつしやれ、癪癪を試すにはまた豆喰はしやついられる、身の代はこなたと山制り、なんと甘
いか甘いか」と、己一人が呑込んで、需手で菓のぶつたり、世に萬八といふ事は、此の男より始ま
りける。追念は無氣まじめ、ハナさて御前はとんだ事、明るけりや月食だと思つて、起きてゐながら
寐言いはしやる。一人住みの此の庵室、飄落者とやら女子とやら、其様事は存じまてぬ。一そんなら
こなたは細らなにか、しらなけりや、是非がない、必ず後悔さつしやるな」と、苦を放してじろく
と、そこら傍を見廻し、立ち歸る。マレ／＼とんだ男が有る物だ」と言ひつゝ、立つて一本、冬
の日は短かい、話する間にもう暮れた」と、表を遙かに眺めやり、内へ這入つてあたふたと、門の
戸しめてせど口の、稻荷の社の扉を開けば、内より出づる義岑公、臺らともに情れ顔。マア／＼こち
へ」と内へ伴ひ、たつた一枚嚙みの、掛川莞筵をさらりと敷き、遙か下つて手を支へ、思へば盡きぬ
御縁とて、昨日不思議に御目に懸り御供申しは申しながら、世を忍ぶ御身なれば、人の見る目を憚れ
ども、見る影もなき此の庵室、忍ばせ申す所もなく、幸ひとアノ稻荷様は、此の村の鎮守にて、預り
の此の道念、外からいらいてもござりませねば、神は見通し稻荷様へ、御詫び申して暫しの隠れ家、
嚙御氣詰り御究屈。いかに世の末なればとて、義貞様の御公達、義岑様とも有らう御身が、此の有様
は何事ぞ」と、零す涙に義岑公「思ひがけなき其方の世話、何角に付けて心遣ひ、過分至極」と宣へ

「眞に不思議の御縁にて、見すしらすの私まで、いかにお世話」とばかりにて、惜る。婆海堂の、
明をおびたる風情なり。イイイイ其のお縁には及びませぬ、私はお願を能く存じて居ますれど、
未々の者なれば御見知りも過はしますまい。兄御様に附添うて、武蔵野の御合戦、其日の夜の御最期ま
で始終御供に参りし者、其の御縁御目にかけんと、佛壇の下に隠れて取り出す一包、内に御
は白木の箱、蓋を開いて有り合はす、物干竿を手ばしかく、きりくしやんと押し立つれば、外に類
の中黒は、初ふ方なきお家の白黒、壁に立て掛け相違ひ、御事を所持する此の功土は、元來お家の
御前時、久助と申す者にて、身は輕けれど、神代の御家來。矢口でござるでござる、其の無念さ自
惜して、其途のお供と川端へ、唯だかたき寄つたれど、御先祖より傳はりし火切の此の御前、敵の手
へは渡すまじ。一先古郷へ持ち歸り、若君はへ寄し上せて、其の傳死んでくれうと殿様の御最期を、
見捨ててすぐく歸りましたや、情なやお家はじび城は敵に襲取られたと、聞いた時のほいほい
し。已むれ故の中へ踏ん込んで、一人なりとも切り殺し、死んで仕舞ふと思ひながら、
弟御のお前様の、お行方を尋ね出し、御紙をお渡し申さんと、此の通り姿をかへ、上方へと思つても
差當つて路金はなし、行方知れぬと聞くからは世間も少と云まつたら、古郷の方へ御出で有らんと、
此の所に住居して託鉢するも海道筋、待ちに待つた申葉あつて、昨日不思議にお目に参りましたは、

私が存念が相いたか、有り難やと思へば、嬉しくて、昨夜もろく／＼夜も寐られず、嬉し涙で此の正月、名主殿からしてくれた、布子を涙で絞りました」と涙り上げた泣聲は、奇特にも又哀れなり。義岑公はから手水、御璽を取つて押し敷き、「此の璽を見るに付け、討死なされし兄上の、最期の御無念思ひやる、思へば／＼八幡にて、我を残させ給ひしも、生き存へて家を襲けと、言はぬ計りの御情、夫れに引きかへ義岑は若氣の至りの不行跡、遊所より付け込めし竹澤が計畧の元を挫き、皆我故、手こそおろさね兄上を殺せしも同じ事、其の天罰にて此の艱難、御救されて下さりませ」と、歎けば臺は躍り上り、「敵の方便にたられ、とやかう言うたが種となり、兄御様の神最期の悪人を引き入れし科人は此の臺、御璽の手前も恥かしい、罰當りの我が身をば願殺し給へ」と打ちふして、又さめ／＼と泣き居たる。道念は目をすり赤め、「言うても泣いても返らぬ事、此の上にはお前様は家を襲すが御孝行、私はかういふ身の上、是れより諸方を修行して、他力をかつて我が君を一社の神に祝はん」と、思ひ立つたる道念が、志願は今に傳はりて新田の社建立と、たえぞぬ修行を頼もしき。かかる折しも、萬八が勤めに一度に寄り来る百姓共、内にはハット驚く道念、義岑公は手はしかく御璽を取つて懷中し、又も隠る、稻荷の社、表の方には無二無三戸を破壊つて一時に、どつと遁入れば、「ヤァ何奴なれば狼藉」と言はせも果てず、「コレお坊、此の萬八が相談に乗らぬからはお觸の有つ

た鵜落者、引轉つゝ連れて行く、軍は何處へこかしをつた、面かざし、と捕み付く。ううはせぬと道念が、有り合ふ精力を追取つて切つて掛れば、百姓ども御免々々を逃に往くを助を助うて追うて行く。萬八は小戻りし、針を日懸け立も寄つて、扉を叩けんとする所へ取つて直で道念が、精力有り上けし勢ひに、コリヤ叶はぬと萬八が、一散に逃けて行く。難もつらじと追馳けんが、半邊より立ち歸り、扉を開き二人を呼び出し、今の取等が歸る内、此の道より落ち歸へり、と、助めに足半より我寄合、幸も用意をこころに、常所もなしに落ちて行く。道念助を見送り、社の門へそと這入り、扉を立つら難もなく、おひ／＼歸る百姓共、萬八も一度に落ち合ひ、一／＼社の裏手に在裏は見て置いた。さつきにもいふ通り、何でも角でも二つに割り、半分はこゝろとてやる、半分の難だ、皆こい／＼と立て掛り、扉開いて引き出せば、黒い顔はなく道念が、狐の面を引被りすつくと、立つたる有様に、ワイと驚く百姓共、萬八も惘りはいまう、道念は作の腰、うんぬが恨憎たやれと聲荷大神の御神託謀んで、うけたまはし、と、横着びこん／＼狐の身ぶり、百姓共は身の毛立ち、只ハア／＼と許りにて、一度に扉を連にすり抜け、尻もつゝてひれ伏せば、仕済ましたりと圖に乗る道念、汝等が心を試さんと、假に女の姿と化し、此の所へ來りしに、如態無儀の百姓めら、文編、稻荷の神の御前にて、川を越えし踏み暴し、思ひ知らさん思ひ知れ、とはつたと説き口を、而て漸く見えぬ

ども、ふんぢがつたる勢ひに、恐れ慄く百姓共、ア、申しノ、夫れは餘りお胴慾様、私等は露塵程も曲つた心はござりませぬ、此の萬八が頼む故願はれて参つて許り、御免なされて下さりませ」と口口詫げれば、ア、そんなら此の以後落人など搦め捕るとは言はぬか。「何が扱ノ」「夫れなれば赦して取らす」「ハア有り難うござります、此のお禮には小豆飯」「イヤまだ有るノ、此の庵の道念が託鉢に出た時、通れと言はずにたんと入れるか」「何が扱ノ、大狐みに入ませう」「夫れなれば赦して取らす、此の萬八めは大悪人、非汝常陸の抜け参りの小娘を勾引し、神奈川へ飯盛に賣つた事覺えてゐるか」「南無三寶是れは委しうよう御存じ、其の時は博奕に負けせう事なしの出来心、微塵も慙では致しませぬ、お赦しなされて下さりませ」「イヤまだ有るノ、イセ守伊勢原の百姓が、御年貢納めに出る所を、おこはにかけて船へ乗せ、五十兩負けさせた其の言譯は少ともあるまい」「ア、悲しや夫れまでを御存じか、さう知られてはお堪ひやない」「まだあるノ、鄰の借助が房州へ綱網にいた留主で、噂を汝がちよろまかし孕ませたまで知つてゐる」「コレハ扱きつい見通し、イヤモ一言もござりませぬ」「ヤイ、百姓共」「ハア」「聞く通りの大悪人、萬八めが村に居る故ソコデ此の村が繁昌せぬ、村境から追放する、俺に付いて引立て来れ」「ハア畏まつたこと百姓共萬八を壓狀づくめ、道念は神前の幣帛取つて先に立ち、大狐み面非る、打撃りの萬八は、コイノ、慾

卷之六

舟は氣の毒顔、「コレ六藏人聞きの悪い父様の時、よしてたまれ。」と制する折からどやくと、しつかり候兵衛三上十次、からのびん助三人連、親分は内にかと揚り口から大胡牀、「昔様ようお出でなさんした。」と、お舟が愛想の貴益二父様はまだ甚癖、御用が有るなら起しませう。」と、いふ聲聞いて一間より欠まじくらム、今そこへ行て逢ふべし。」と、ゆるぎ出でたる主の頼兵衛、雪を欺く白髪に、朱を染いだるしか面、強慾無道の眼ざし、八尺掛けの大廣袖、紙子仕たての伊達羽織、どつかと坐して、皆揃つてよう来た、して仕合はどうだぞやい。「どうかう所ぢやごんせぬ、持つて立つた大失敗、三人ながら此中の元手、すつぱり負けて仕舞ひました、面目もなき仕合。」ともぢかはすれば、ム、ソリヤごんせぬ目に合うた。えい、負ける時がなければ勝つ事もない道理、少と許り負けたとて、補鍋匠が華鯨を請合うた様に、騒ぐ事たないわい。今一勝負やつて見ろ、コリヤ娘よソレ板廚の金を出してやれ。「アイ板廚を明けるにも及びませぬ、先に品川の兵五郎様と青山の萬九郎様が見えて、日外借りの金ぢやとて、持つて来てでござんす故、つい掛硯の引出へ。」ム、そんなら出してやるべし。」と、引出明けて、幸ひ爰に六包ある、一人前二百兩で足りずばもあつと貸さうか。」といふに、三人肝をつぶし、「カント聞いたか。」「オイヤイヤ凡そ金持ち多けれど、つがもないはした錢か何ぞの様に、掛硯にも六百兩、日出度いといふも程が有る。」「アレバ昔からない物は金と化物と

いへども、化物はまたも出ようが、今時ない物は錢金、折々氣ばらしに芝居を見て、近年は淨瑠璃
でもへ、何ぞといや金のない事、餘り音な此の時節、有る所にはから澤山、マアどうすれば此の様に
減多に金が出来まするぞ、話して聞かして下うれと、いへば頼兵衛煙管こち／＼、一々
が悪いから、出来る金も出来ないわい、塵が積つて山といへど、積る内には又吹き散る、二文四文が
や埒や明かない、出世せうなら相場が象山博奕は勿論、是れも近年はこすいさうで能や鴨もか、
故、此の頼兵衛が思付く、其の鎌倉で第元の太將、足利家氏と謀反勝負の義農殿が、暗雲の高つは
武藏野の野將で太將負、元手の強い尊氏様も根こんでいぶち散けて、リリヤ一季切り替へると鎌倉
へ益がへ、何れ破れかぶれの義農、已に命を擲け長半、鎌倉へ仕掛けの博奕、手にねない首尾にな
つたを、鼻つはりの竹澤監物殿、かす取の江川物官殿から、此の親父へ人をよこして、寺をして
くれなと思つて、どうぞ地蔵してくれと、色々とお頼み、ハテ後生こそ頼まなければ、人の縁に
成る事だ、おやが甘口ではいけないと、水銀奴からの思ひで、箱の底を割り抜いて、六藏めにあふ
を引かせ、一番ごつきりで義農の、川中ぐわんと言はせた其の御褒美に、此の頼兵衛、尊氏様の
尻持で、大名に成る筈なれど、夫れでは結局氣かつたや、好きな博奕が打たれやせぬ、大名けんとな
しにして、矢張たべ付けなぶつかけの、改守がよこさるると申し上計たりや、そんなら何なと

望めとある。そこでお金をした、か請けて、其物を元手に大勝負、勝つ程にける程に、持丸長者とは俺が事。かう普請をやらかして、書を忘れない様にと、アレアノ通り牀の間に襦や蓑を飾り物、出世の因縁かくの通り。と懸るにぞ、二人は不審晴れ一夫れで闘えた、そんなら俺も一思案、何ぞあてずつほうにやつて見よかい。チヤグリの技かうにも船はなし、是れから坪風をくり抜いて、硝子入れてやらいどうナウ銃兵衛。「イヤ／＼夫れよりも俺が望みは、愛なお娘の舟底が割り抜いて進ぜたいサア／＼お暇其の内。」と皆々うち連れ立ち歸る。道引違へて走り来る村の小底がすつと這入り、「申し頼兵衛様、お尋ね者の事に付いて、竹澤様から御用がある、莊屋殿まで只今一寸。」「ム、お尋ね者とは知れた事、新田方の落人、御評議であんべい。夫れなら行くにや及ばない、どちらから来ても此の渡を渡らにやならぬ一筋道、かねて竹澤様と謀し合はて、新田方の落人が若し此の所へ来るが最期、相圖の烽火を上げると村々で法螺を吹けば、竹澤様から捕手が出る、若しも己が方で搦め取るか討ち取るか、加勢に及ばぬといふ知らせには、アノ亭座敷の上に吊した太鼓を打てば、村々で取り圍んだが皆ちる約束、莊屋どのが大きな面で、どう参つたかう参つた、鄰の婆さま茶を参つたと、むだ許りいうで有ろ。」「イヤなにか様子は知りませぬが、呼んでこいとの言ひつけ。」「そんなら一寸行つてやらう、ヤイ六藏、若しも落人哭いやつが見えたら、烽火と太鼓の手都合を忘れろな。」と、腰に大だら

共に、しばし涙にくれ給ふ。臺も俱に涙聲「す、お歎きは御尤も、早う新田へお歸りあり、御一門をかたひて、御矢の詮議兄御様の敵をお討ち遊ばせ」と、諫むる詞に義興公「見ればわたりにもなし、道にて聞けば此の家が、渡守の内とかや、頼んで見ん。」と門口に歩み寄り「頼みませうく」と宣へば、奥より走つて娘のお舟「何の御用。」と立ち出づれば、義興公しとやかに「川のむかうへ参る者、舟の無心」と宣へば、顔つく／＼と打守り「いゝ／＼舟はいくらも有るけれど、落人の詮議で日暮れては出しませぬ、其の上にお前の様な美しい殿御には、貸す事は、猶なりませぬ」と、顔に見とれてうつとりと心の内は焼きがらの、胸をこがせる薄煙、いとと思ひ懸香のどうぞ留めたき下心、渡して下さりませ。」「イエ／＼どう有つてもなりませぬ、宿屋がなくば私の内に、泊りなかつたがよいわいな。」「ソリヤとめて下されうか。」「留めいで何といたしませう。」「夫れは近比、希い連の女が持病の瘡、さいはひのよい足やすめ、臺こちへ」と呼び入るれば、「ム、スリヤあなたはおつれさまかえ、エ、にくらしい。」とびんとする。臺はゑしやくし「旅づかれの私ら、お留めなさつて下さるとは、忝うござんする。」「アイお前もお連れなら、お止りなさんせ。サア申し、見ぐるしけれどアノおくの亭座敷がよい見はらし、あれでゆゑりとお足休め。」「しからば左様。」と義興公、臺諸共うち連れ

て奥の一間に入り給ふ。跡打ちながめ娘のお舟「ごんに美しいといはうか、可愛らしいといはうか、とても女に生まるゝなら、あんな殿御とそうて見たい。夫れはさうとあの女中、兄弟なりやよいが、もし夫婦なら、わしや何とせうどうせう」と、おほこ娘の一筋に、思ひみだるゝ緑芒、ほにあらはれて見えにける。義孝公は一間を立ち出で「申し／＼お女中、つれの女が棄たばら、お湯の無心。」と宣へば、娘はハット手をもぢく「申したびのおかた様へ、お前にちつと御無心がござんする。」コレハしたり、かうおせわになるからは、何なりとも御迷惑なう「アアアア」連々女中さんは、妹御でござんすわ、お内儀さんでござんすわえ」是れは叔かはつた事に御念が入る「アアアお妹御ならようござんすが、若し御夫婦なら、こつちにおつと高きおわけがござんする。アア成程あの女は私の妹、久々の病氣ゆゑ、保養がてら浅草の観音様へ、連れてうんけい致しとする。」アア、精しや精しや、それ聞いたらもう何もかも入りませぬ、お前どうぞ私に内に、十日も二十日も十年も百年も、とうとうござれて下さりませ。したが私らが様々田舎者は、相手になるもおいやで有らうけれど、エエもうづんと、私に許り物言はせ、コレイサ／＼、こちらゐて下さんせ」と、右より左と付け廻す、琥珀の塵や磁石の針、棒も不粹も一様に、迷ふが上の迷ひなり。義孝公は氣の毒う「思ひがけなきお宿の無心、いかにお世話に成りますること、入らんとし給ふ無心かへ、アアアア餘りでござんする、

是れ程思ひ詰めたものを、返事のないはお馴染、何は田舎生まねでも、惚れたが因果惚れられたか、ふしようと思つて下さんせ。日陰の木々も花さけば、岩のはづきのたまり水、すめばすむ世の思ひ出に、叶へてやらうとつい一口、いうてくれたがよいわいなと、通り付いたる袖袂、さばらで落つる玉笹の、あられもないが懸踏なり。義岑公も稻舟の、いなにもあらず、ム、夫れ程までに思つて下さるお志、さら／＼仇には思ひませぬ。」と、ぢつとしめたる手の内は、戀のじやうまへ情の要たがひに抱きつき草の、うつろひやすき色緑の、ぬれの糸口綻び口、すひ付き引付きしめ付けて、はなれ難なきふぜいなり。時にふしぎや義岑公、娘もともに色かはり、ハット身震ひ忽ちに、どつかと倒れ息絶えたり。音におどろきかけ出る臺「コリヤ何事。」とよろたへながら、柄杓の水を口うつし、介抱しても呼びいけても、其の效さらにせんかたも、思ひついたる氣てんの臺「扱は娘の色香にまよひ、心の穢れ御簾の、咎めなるか。」と手を清め、義岑公の懷へ、手をさし入れてくだんの御簾、さつとひらけばたちまちに、二人は夢の覺めたる心地、表の方には六藏が、戻りかゝつて窺ひ足、義岑公あたりを見廻し、「此の家に泊りてうかゝひ見れば、家業ににぎる普請の結構、様子といひ場所といひ、かた／＼もつて心得すと、娘が戀慕を幸ひに、とひおとさんと思ひし故、近よれば今のしだら、しさいぞ有らん此の家の内。」と、御簾を取つて巻き納め、「臺きたれ」と引きつれて、奥の一間に入らたま

ふ。跡にしよんほりほいなけに、何と詞もなけ首し、たづきもしらぬ海中に、程なきお舟が物思ひ、打ちしをれてご居たりける。表に控へし六藏は、木部屋にかくせし一腰ほつ込み、「アノ竈を持つからは、まがひなき新田の落人、相圖ののろしを上げうか、イヤ／＼討手を引きうけ、討たせえは手がならす、拔憲けし掬め取つて褒美の金、俺一人でせしめてくれん、うまい／＼」とうなづき／＼、おくを目がけてかけ入るを、立ちふさがつて娘のお舟、「コレ六藏、あなたはおくの娘人を、何とせうと思やるぞ。」「イヤ何とはしれた事、さつきに庵と見て置いた、中黒の旗持つからは新田の落人、義岸にちがひはない。去年親方と相闘して、身定をくりぬいて、義典を殺す時は、命がけの事手傳はせ、御褒美をもらふ時は、親方一人であつた、まゐ、此の六藏はおちやつびい、出物に成つて今に此のさま。其の弟の義岸、此の度はおれが生捕つて、御褒美であつた、まゐ、おれも出世をせにやならぬ、邪魔なさるややお主とて用捨はない。」と、とめてもとまらぬその勢ひ、一間に立ち聞け義典、娘は一つに戀のじやま、拂はん物と思案を定め、「す、無理にそなたをとめはせぬが、何様いうては相手は武士、若し仕損じまい物でもない。僅かのはうびに目がくれて、私が言ふ事聞かぬからは、是れまで何のかのといやつたは、みな諺かや」といはれて悔り、さううまきは参るまい。」「イヤナウ、そなたアノ奥の男めに氣がある故、おれを留めうといふ謀、さううまきは参るまい。」「イヤナウ、そなた

の心を見たと上と思つてゐた故、是れまでは返事もせなんだが、夫れともに疑はるなら、そなたの勝手にしたがよい」と、ぴんとすねられ六藏は、悪寒發熱あたまたにゆけ、「コイツハエイワイノ、夫れならおまへは、此の六藏が性根を見た其の上では、きまつてくれるといふ腹か。」「サイノ、そなたがおれと夫婦になりや、父様のために子ぢやないか、親子の間にぬけがけして、一人の手箱にするにやおよばぬ」と、様は莊屋殿へ行つてなれば、とくと相談した上で、どうともしたがよからう。」と、口へ出まかせ間に合ひを、いうて水棹や詞の楫、わたり舟と六藏は、のせかけられてふはと乗り、「コリヤ近年にないよい目が出たわい。そんならわしは莊屋へいて、親方を連れてこよう、奥のやつらをなさぬやう、氣を付け給へ女房。」と、延びた鼻毛のとちめんほう、振り廻してぞ出でて行く。しすましたりと門の戸の、かけてとつかはと、一間の内へ入りにける。かくて時刻も久方の、空さえ渡る冬の夜の、二十日るなかの月出でて、遠寺の鐘のかうくと、常に流る、川水も、いともすき門口の、一羣茂る藪のなか、ぬつと出でたる主の頼兵衛、時分はよしと呼子のふえ、囀の陰より卜人の六藏、頼兵衛小聲に、「コリヤ六藏、娘が目を覺し邪魔ひろけばひち面倒。物音のせぬやうにおれ一人で忍び入らん、手前は表に氣を付けて、もし逃げ出でば討ち取れよ。」「オット合點。」とうなづき囁き六藏は、元の小陰に身をしのぶ。頼兵衛は門の戸を、引けどしやくれど明かされば、大だら引抜き壁

切りつけ、はひれば吹き込む川風に、燈火きえて眞闇、勝手おほえし我が内も、慾に心くらくされ、忍べばいと身も重く、牀はぢく／＼足音の、耳へはひれば立ち寄り、一息ほつと次の間へ、またもふみ出すあしの下、びつ／＼やり碎ける煙草盆。エ、どらくさいと心では、怒りながらををつとなけ、機にはつたりあいたしこ、なんなく忍ぶ亭座敷、障子の上へ二足三足、そそ／＼／＼、きやつも名におふ義興が、一族なればこは者と、心でうなづきそつとおれ、下屋へ廻つて探りよれ、闇にも光るだんびらを、扶いて突き込む二階のいた、上にはワット鳴ざる聲。してやつたかゝ刃物引き抜き血おしのごひ、二階の障子かけ上り、障子蹴放し月影に、夜著引きまくり見て悔ひ／＼／＼、おれや望か、おれか」と驚きたから一乳母と女中はい／＼へやつた、有りやうに聞かす／＼／＼と、目をむき出し怒りの大聲、娘は顔をつれ／＼と、恨／＼／＼に打ち込みがめ／＼申しと、様、浮世に生れた人ごとに、慾を知らぬはなけれども、お前のやうにこりかたまり、誰とも法ともめきまへず、人は死なうが倒れうが、我さへよければかまはぬぞ、身勝手許しの強慾非道、有りう事を源氏の大將、義興様をたばかつて、わづ／＼と殺したる、其の天罰が我が子に報い、宵にとまりし旅のお方、義興様とはつたしらす、可愛らしい殿ぶりに、恥かしながら心のまよひ、おそばへ寄ればおたのしみ御眞の咎め、義興様の御怒りにて間違せしも、さうとはしらぬ燈路の闇、さいぜん六蔵を追ひ出し、一間へ忍び様を

と云けきしに、義母様のおつしやるには、兄を殺せし頼兵衛が娘ゆゑ、此の世でそふ事ならねども、親と一所でないといふ、一つの功を立つるなら、未來で添はうとおつしやつた、其の一言がわしや嬉しい、此の内にお出で有つてはお身の上も心許なく、委細の詳をうち明けて、月の出ぬ間を幸ひに、船にておとし参らせし」と、聞くより頼兵衛おだんだふみ、娘がもとより引つつかみ、「エ、おのれはおのれは大層千萬な、見事ならぬ男めに惚れくさつて、親の大事を他人にうち明け、手に入れた代物を、どうも／＼落しをつた、道しらす、罰あたり、につくい奴。」と、拳を振り上げ丁々々々、手負の上の打擲に、娘はいきもたえん／＼に、「エ、罰當り道しらすといふ事、お前も兄事御存じか。つね々々、不埒な勝負さき、あまつさへ恐ろしいわるだくみが仕たらいで、たつた一人の娘のこひ人、ころさうといふ悪心から、現在我が手を手にかける、あんまり非道ぢやどうよくぢや。死ぬる我が身はいとはねども、跡にのこつたお前の身の上、案じ過ぎがせらるゝ。」と恨みなけければ、「エ、やくにも立たぬまひごと、落人を取りにがして此の親が立つものか。」と、突き退けはね退け行かんとす。娘は袖にしがみ付き、「意見いうても歎いても、聞き入れ給はぬ無得心、母様がござるなら、仕様模様もあらうもの、何をいうても身一つに、思ひつめたる義母様、此の世でそはれぬ悪縁と、聞けば聞くほどなほ戀しく、お手にかゝつて死んだなら、親と一つでないといふ、言譯立てばみらいにて、いとし殿御にあ

はれうかと、上れを頼み二つに候、一人の娘が先だてば、一念無常もし給ひて、お心も消らうかと、
はかない事を頼みにて、覺悟きはめて死にまする。威かはいと思ふならお心を離し、義母様を助け
てたべ、頼みまするにとくときなて、リット許りに伏し沈み、血潮にわらふ奥の涙、ふびんといふ
も愚かなり。頼兵衛はせ、も笑ひ、此の年まで仕こんだ根性、柳邊相衆が元氣して、あやまり論文書
かうというても、いつかなしくひるがへすね、相副をさだめた義母の取りにがしては、竹澤様へや
くそくの顔が立たぬと、威を取つてつきとばし、二歳をいけおし川邊に、仕懸けし烽火に火さちの
早業、火を焦る突の光、かたて川邊の村より、人を驚むる音響ふき立、さう驚か其の右様、
娘は苦しき身にあたり、何れより木枯にて取り變れ給ひなば、同じとお前もなづきと、火にあこ
がれ地にひれ伏し、正體涙のひとより、思ひつゝある一思案、上なる大鼓に響つと威を掛け、此
のたいこを打つときは生得なしと心得て、村の御おこめさうと、威を聞いたが火のあたへ、こぞぞ
殿様へ心中の、女の情と一筋に、思ひつゝある心の鼓、よろしく足を踏みしめと、やうく威を
振り上げて、打たんとしても手はとつかず、ひびき上りてはふろく、又威を直つてとひ上り、ど
んと一鼓かづはとふす。おとにおどろきかけ來た威、それ打たせてよいと、抱きとむる威、
き込はれのけあらそふ内、身がらに山をら頼兵衛が、つなぐのふに威のつて威を押し立てて、清

ぞいだす。上には娘が身をあせり、「コレナウ／＼。」と聲かぎり、呼ばど呼ばど叫はねば、又もや撥をふ上ける。おつとよかきとうしろより、ばち引つたくる六藏が、わざと引きぬき切り付けられ、欄干より真逆様川へさるる水煙、上には娘がせんかたも、落ちたるうすを振り上げて、あつたむしやうに打つ太鼓、響きにあらそふ頼兵衛は、ろを押し立ててさういさつさ、手錠に寝まぬ六藏が、日ごろに馴れし水練に、早瀬のなみを事ともせず、找手を切つて立ちおよぎ、娘は死出のだんまつま、夫をしたふ執著心、蛇とも成るべき日高の川、ひれふる山の悲しみも、是れにはいかでまさるべき。跡は間違にゐる太鼓、遙かにへだたる川向う、頼兵衛は腕限り、何なく舟をのり付けて、陸へ飛びおちかけ出す、堤の陰より高聲に、「ヤ／＼新田小太郎義岑是れにあり、匹夫め待て。」とよびかけられ、頼兵衛は立ちどまれば、すつくと立つて義岑公。現在の兄の敵、見のがすべき奴ならねど、どうで助けぬおのれが命、娘がせつなる志にめで、さんじの命助けしに、おつかけきたる不敵者、モウ敵されず。」と抜きはなせば、「ヤア飛んで火に入る夏の蟲、名乗つて出たは百年め。」と、渡り合うて丁々はつし、何とかしけん頼兵衛が、つまづく所を義岑公、付け入つて取つて組みふせ、首をかゝんとする所へ、臺を引つさけ六藏が、「サア義岑、親方殺さば此の女、たゞ一思ひ。」としめ付ける。ハット驚くたるみを見、持ちかへして頼兵衛が、踏むやら蹴るやら、叩くやら、「コリヤ六藏、娘が敵の二人の奴

ぬ乗の「ヤア／＼者ども、頓兵衛にいひつけおきし、相圖の太鼓の聞えしは、落人といけど」と、
まてども／＼沙汰せぬは、仕損ぜしと覺えたり。おつかけて討ちとめん、急げつと下知すれば、
鱈をおし立ててえいさつき、川のなかばにのり出す。不思議にはかに風おこり、川波逆立ちかきく
もり、空に雷電霹靂すさまじくもまた怖ろしし。數多の家來を始めとして、水主樹取色をかひ、不敵
の竹澤すこしもひるます、魛につつ立ち上り「ヤア卑怯なり者ども、此の川にて去年の冬、義興あ
ゝ殺せし故、恨みをなすと覺えたり。シヤなにほどの事あらん」と、虚空をにらんで立ちたる所に、
空中より霹靂高く「ヤア／＼竹澤監物秀時たしかに聞け、汝が術にほろびたる、新田左兵衛佐義興が、
一念こゝにあらはれて、恨みをなさん思ひしれ」と、呼ばはる霹靂の下よりも、小山の如く波立て、
ふねをゆり居るゆりおみせば、廣言吐きし竹澤も、左衛門のな／＼霹靂色、なほも吹き来る暴風、船は
碎けてとびちれば、あまたの家來一時に、底の藻屑となりける。なかにも強氣の竹澤が、波をくま
つておよぎ行く、うへより黒雲おほひかゝり、甲冑をたいたる義興公の御姿、馬上ゆゑしく出立つ
て、御手ぬのべて竹澤が、頭を掴むと見えけるが、二つにさつと引き裂いて「今こそ怨み晴れたり」と
と、いふ聲ともに船中にて、亡び失せたる十騎の魂、君を守護してあり／＼と空中に顯はるれば、
雷もしづまり浪風も、治まる御代の末までも、運をまもりの御神徳、十騎の宮ともろともに、あふが

ね給ふぞ有り難き。

第五

新田左兵衛佐義典公、怒りの一念止む時なく、鎌倉六波羅の南にて、新馬数度に及びければ、御怒りなだめんと、矢口の村に社を建て、けふ迄官と聞き傳へ、參詣禁じたましにける。華表がこの人拂ひ、敎使のお入りとぞ、めけば、新田小太郎義典公、駿東政成の出で給ふ。氏庫助は忠孝丸をかちつきて、隠居正しくひかへ居る。親なく敎使西條大内左衛門尉、とうけの噂につかて給ひ、こゝへいらしし義尊、それなるは酒造丸なる。親も義典の御通、鎌倉六波羅の南にて親の御心をこゝし、し、義氏義典おそれなれ、南に新田和藤とのひ、天下太平に治より萬民安堵の思ひをいふし、全く義典が神威の徳、古今に類なき忠臣と、いひのん姓に美しう、新田大明神と崇むべし、又孝義丸は新田の城を給はり、父が本願安堵すべし、義尊は少將に任官し昇殿を許し給はる、氏庫助は忠孝丸南に六郎が御義、叔父に渡し其だ感じ思召さる、義尊よりしく沙汰有るべし、との御通、なほ忠孝丸勸むべしと、聞いて兩人有り難、義尊公遣んで「うふ有り難き敎使、此の上ながらいふ事、奉聞願ひ奉る」と、敎答あれば氏庫助、義氏公の執事山田賢清忠孝丸と心を合はせ、天下を平ん

工みにて、親しき一家の新田足利争亂に及びし段、彼等が悪事顯はれ兩家御和睦の印とて、鎌倉より兩人に繩をかけ引き渡されて候なり、夫れく。」とありければ、ハットいらへて道念が、下知に隨ふ守護の武士、二人の繩つき引き附す折こそあれ、思ひがけなき後の方、隅をどつとぞ上げにける。コハ何事と見る所、江田判官景連手の者引きぐし追取り卷き、ソレ遁すたと下知すれば、心得兵庫は若君の道念に抱かせて、當るを幸ひなきあらせば、わら／＼ばつと逃げたるを、遁さじやらじと追うて行く。其の隙に江田判官、二人の繩付助けん、立ち寄る所にふしぎやな、華表の笠木落ち、り、清忠景連鼎山壓しに打たれて一時に、みぢんになつて死んでけり。コハ不思議なる神徳と救使も感涙、義忠公兵庫助を始めとして、有り合ふ人々下部まで、ハット許りに三拜九拜、實に著き靈驗は、響き響きに應ずることく、水清ければ月やどろ、諸國成就長久の、君と神との道直に、榮のる御代こそ目出度けれ。

十三種
新編

妹脊山婦女庭訓

近

松

半

二

十三鐘
絹懸柳

妹脊山婦女庭訓

第一

畏くも知らしめず、敷津八洲の三瀬、智たりにたり英勇の、利朝四夷を制し、和を治む和歌の道、八つ
の耳ふり立てて、小男鹿の聲強高く、曲れるを直きに直し、操久しき君臣國、榮枯交皇の、
寶祚傳へて三十九代、天智天皇の宮居なす、奈良の都の冬未立、日の本の聖主たる、君萬乗の御身に
に、難き言の御惱み、天地に日をうしなふごとく、堂上堂下是れを痛み、時々の評議もほかならず
玉座の左は蘇我の蝦夷大臣、政務を預る所に憂ひ、我意偏慢たる其の勢ひ、右の座には安倍中納言行
主、庭上の勳臣には、大判事清澄、守護の武功を立烏帽子、東屋の熱もたさかた、同じく此方に蝦
夷が家臣、宮越玄蕃、其の外百官百司の面々、威儀を正して伺候ある。蝦夷電然と上笏し、改め
て言ふに及ばぬど、帝旨とならせ給ひ、神例古實日々の政務、日ごと給ふ事能はず、老身の此の
夷、悉く是れを計らふ、座入鹿の大臣は、刑牀に引き籠り、又進み出でて力となるべき鎌足の大臣に
は、假初にも虚病を構へ、行事を捨てて引き込む料簡、疾くより帝へ奏聞遂け、一日は鎌足を呼び出

り厚ければ、説を正すに遠慮はならぬ。只今貴卿に見する物有り、彌藤次参れ。」と呼ばれば、あつと答へて荒巻彌藤次、一つの箱を携へ出で、御前に直し引き退る。蝦夷件の箱打開き、「九日以前、春日の社壇へ、何者とも知れず、奉納の此の一箱、中には一つの鑑を入れ、男子誕生平天下と書き付けたり。其方の娘采女は、斯くの如く君に傳き、誰およぼぬ寵愛、男子誕生あば、鎌足殿は自然と外戚、平天下と書き添へたるは、四海を乗取る心の祈願、鑑は鎌足の家の寶、外に類のない重寶。其の影の鑑を箱に打たせ、奉納ありしは餘人でない、覺えないとはいはれまい、サア返答あれ鎌足殿。」と、思ひも寄らぬ印の鑑、數多の公卿呆れ果て、口を閉ぢてぞ居たりける。鎌足大臣思慮を定め、「此の身に取つて且以て覺えなければ、目下疑はしき影の鑑、反逆の者あつて、我を罪に落さん結構。此の惡黨を見出すまでは、申し分けても詮なきこと、我は暫く禁裏を避け、何れへなむと居せん。」

「ホ、ウ其の身のあかり立つまでは、何れへ成りと疊居あれ、ソレノハハ蕃、彌藤次、門前へ送り出せ、早うく。」に采女の局「何故申分を遊ばさぬ、コレなう申し父上。」と、歎きを諫める中納言、耳にもかける鎌足大臣、徐々歩み出で給へば、蝦夷を始め數多の諸卿、早退散とたつかう、武勇掬まぬ清澄も、覆へる雲に是非なくも、心の聊の控へ綱、荒巻、宮越、素袍の袖、肩臂はつて歸館の警固、利きを隠せる鎌足は、心に謀る七重八重、馴れし九重振り捨てて、何處の空やはかりなき、後の榮え

泰山山女座圖

き、雛鳥でも大鳥でも、ア、あなたの吹矢を持つて、くつしやもと射なさるのぢや。マ、此の筒をちよつと握つて御覧じませ、どの様な所へでも、心よう届きさうな、長い物でござります。」と、滑稽交りの意の橋、岩木にあらぬ清船も、につこり笑顔相惚れに、下行く水のこぼれ口、掬ひ上げて桔梗が横枝、ア、申し御家人様、早う舟の明くやうに、思ひのたけをおつしやりませ。」何をマアいやるや、ついに送り見ぬあのお方へ、どうマア直にいはれうぞ、わしや駄かしい」と袖覆ふ、折から社の境内より、襲来が家来富殿女様、槍共箱いかめしく、代参の戻りがけ、此の場の體を見るやいな、供に制して挨拶、腰打ちかけ一窺ひ居るの、斯くとも知らず、姫小菊、コレ申し、前髪のお侍様、私が方の御家人様、申したい事が有れど、恥かしうござりますけな、幸ひな此の吹矢筒、話に聞いた嘶き竹、どうぞ聞いて上げまして」と、耳と口とへあてがうて、かう此の中を私が持ち、取りも直さず磯役、雛鳥は筒へ手を、思ひ有いたけ一口に、いへばこなたは耳で受け、うち領いて返り言、可愛らしこと通じ合ひ、互に嬉しう馳紅葉、女主人従夢現、姫どもは氣を利かし、二人を牀几へ押しやれば、扇を聞き寄り添うて、口と口とを鴛鴦の、ひつたり抱き付く此方には、ぐわつたりどつきり挨拶、こけ落ちるやら槍持に、槍をこかして立騒ぐ。清船もうち驚き、牀几を退けば富殿女様、起き上つて砂打ち拂ひ、マア久我之助殿、よつ程に味やらん、マ、其處な相手は、過ぎつる頃、和果てし

は宰の娘、リヤ興がゐる、リヤ興は能い所へ用ゐられたこと、聞いて二人は又悔り、又、我は家藏の息女なるか——お前は大事事様の御子息、久我之助様か——と、過ぎたれし其方の父、大宰の小貳と我が父とは、故有つて遺恨有る家、其の息女とは夢にも知らず、只今の體たらし、——をんならお前に添ふ事はなれりまでのぬか、ハア、いばつとばかりにはや涙、富越は聞き流り、リヤ興兩人は早ちえちとつたよな——「ア、いやこれ、必ず免相いふれな、遺恨有る家とも知りず、最後の時、内、同じ本凡に重宿の——ム、なる程、今以明記り、それならそれにして貰かうか、一體此の處所には果が大沈心、それ故に要に申し受けたこと、方ねて主人一羽ひ貰ふ——ハア、今まで御事は、御ひ御恨な事有らうと思ふ、此の故心に備へば、其處はいつと神渡する——先程は——きつ、御恨、御は御恨の召使が御と申す者でござんす、——此の——浮世の——、又其處の御を主人といはる、——、御深いお方の御神に、——意地わるの衆衆様、其の御家集の心意地わる、此方の御衆人を御にせうとはす、笑止と打ち笑へば、立善のめ付け、——、其め、其の過言覚えてをれ、是れから御に御所へ馳せ行き、——入の様子を御れ廻り、何れも此奴も身の上——、御け出すを御元ども、御に持つ——、御し、今の體にいうたのは、お前様のお心を引いて見ち、——、止まなれがでは有るわい——、ハア、身がいふやうに取持つか、——取持たいでよいものかいな——、それなれば神助する、リヤ興

恋が眞實に應といふが、ソレ最前ちらと見て置いた、吹矢筒の囁き竹で聞きたいく。「振も目早い
 お方ではあるぞ、お望みの通り、囁き竹で御返事を聞かしませう、サア／＼耳へおあてなされ。しすッ
 ト心得吹矢筒、耳に押し當て居合腰、サアどうか／＼、二／＼申し難鳥様よいお返事を早う仰有わ
 ア、／＼申し申し難鳥様、おかしがつてでござります、ちつとの間お目をふさいで。」オ、／＼成程
 成程夫れも合點。」と眞赤いな、顔に似合はぬ成佛眼、小菊は心得有り合ふ吹矢、顔へ差し込め口押
 し當て、ふつと吹けば宮越が耳へくつさり、アイタ、／＼、／＼、こりや如何しなる。」と狼狽へる、其
 の間に難鳥打連れ立ち、館へそこは逃げ歸る。／＼藩は吹矢抜き取つて、堪忍ならずと追つかくるを、
 久我之助押し留め、／＼高が女の戯れ事、彼はいふ程却つて耽溺しと、宥むる此方の岨道より、
 數多の侍走り付き、清船殿是れにござるか、方々とお尋ね申した、先刻采女の局様、禁庭の御殿を
 駆け出で、いづくともなく行方知れず。貴殿事は采女様の傳き役、早々お知らせ申する。」と、聞いて
 驚く久我之助、何采女様御行方知れすとや、ム、何にもせよ程は有るまじ、貴殿方は是れより直に、
 所々の出口を吟味あれ、我は山手を詮議致さん。」「ホ、聞き捨てならぬ采女の出奔、蝦夷公へ注進せ
 ん。」と、／＼藩諸共數多の侍、出口の方へ急ぎ行く。跡に清船只一人、ハ、心得ず。」と一思案、胸も
 しどろに入相の、山手をさして歩み行く。向うより來る人音に、身を除けてやり過せば、さもやごと

なき内裏上臈、心も室に歩み行く、袖を控へて、采女様でござりますか。」「ヤア久我之助か。」「ハア
貝今、組下の辻連あつて、采女様には御殿を脱け出で、御行方知れまゝと申すが、如何なる御所有あつ
ての事」と、問はれて辛き物語り、其方も聞き及ばれん、蘇我の蝦夷威勢に付こり、わが娘橘姫を
后に立てんと豫ての望み。わらは君に思はれ参らせ、夜の御殿草の亭、暫ともお傍を離れぬ猶も。父
鐘足様をも説言して、大内を運させ、何方にお渡りありとも、此の身へ害しなす。わらはが傳き参
らう程、帝様のお身の仇、誠ある入鹿の大臣、父蝦夷の諫め兼ね、引き籠り給ふ由、それ故父の隠家
を尋ね求め、身を隠し姿をかへる身の望み、只見遁しに頼りぞ。と、津は涙にくれ給ふ。ハ、此の身
は傳きの役目、れど、後日の難儀少しも懸はす、御身の爲また第一は天子の御時、成程落し参らせん
が、諸士ども、方々手配り致せば、村口を御供申し、請つてお通し申さる。先づ、是れをお召し
れ。」と、件の蓑笠させ参らせ、いたはり出づる出口の方、又も天晴是言して、以前の武士ども走り付
き、宵闇紛れ透し見て、久我之助殿いまだ是れにか、出口々々吟味せしか、お島の行方知れず。」「
本拙者は山路吟味の上、コレ是れに居る百姓が怪しき人見付けし津道、いまだそれとは極めねど、大
がに采女の品、我は是れより此の土民に、案内さまで吟味を添ぐる、各は此の、急いで東へ春間
あれ。」「ホ、畏まり候。」と、皆々勇み大内へ、北方は憂身隠れ莫、密に海の方を下、清き心の清船

も、共にしてゐて、行く空は、九重の、榮えに輝く一隅へ、三條の御所と持て囀す、蘇我の蝦夷が
 廣館、雪見の亭を設けの座、女小姓を肉屑風、奢りに隙間中庭の、陰を導ぶすべからぬ雪、冷さこらへ
 主命の重き役目と宮越の器、跡に荒巻彌藤次が、臺に乘せたる雪人形、各機嫌を伺ひける。女中達
 日々に、是れは、御雨所のいかに骨折、殊に此の雪細工、兔の耳がきつい手際、一、枝折殿の言
 はりゐる通り、中帯姿の此の人数、綺麗な事ぢやないかいなう」と、奥のそやされて兩人は、大人
 なくも出かし顔、蝦夷莞爾とうち笑へ給ひ、木々審、彌藤次、出来た、一、酌取れ」と餘念
 く、廻る、杯、養ひ、盡きぬ泉の底はかと、案内もなく廣庭傳ひ、入り来る二人の僧、彌藤次見咎め
 「ヤアノ、雨僧、何用あつて罷り通る、御前なるぞ」ときめ付ければ、一、我々は御領分に往職致す
 文聖寺、八乗寺、佛法歸依の入鹿は、今日行法の満願の日なれば、拜禮に伺候を、罷り通る」と奥
 庭へ、入らんとするを蝦夷は認め付け、ヤア人らさる入鹿が佛三昧、うぬも其の組下か、悉くも
 日の本の、神の守護ある我が館、奥の亭へ通らんなどとは、其の身をしらぬ賣僧ども、首を竝ぶる覺
 悟せよ。」と、氣色變れば、一、申しお前様が佛嫌ひとは、夢三寶存せぬ事、命はお助け下さりませ
 ア、是れも又お嫌ひか存じませぬと、拜みまする。」と手を合はせ、身をふるはして青さめ顔、木々、首
 引渡いてくれんすなれど、取るに足らぬづくにふめら、コレ々落彌藤次、雨僧が衣を剥ぎ、月代を奴

めよ、愚僧は父、八乗寺の八を取り、八藏と付けてこまそ。ハレかはつたことになつた。文七殿。」
「ホ、こりや、マア日出度うなつたわい、こなたもそんなら今から八藏殿。」
「ム、ハ、くく。」と
やくたい坊、が藩藏次追立てて、門外さして出でて行く。折から夫の廣間口、取次の書侍まかり出で、大判事の子息清船、召しに應じて参上。」と、呼ばはる聲に入り来る久我之助清船、器量骨柄武氣備はる、中に儒美の長上下、禮儀正しく座に著けば、蝦夷大臣進み寄り、珍らしし久我之助、便を立てしに早速の來、喜ねたき事別儀でなし。帝愛橋をかけ給ふ采女の局は鎌足が娘。此の頃内裏を脱け出で入水せしと聞きつるが、其方は采女が付人、實否を聞きたく呼び寄せたり。噂のとほり違ひはないか。「仰せの通り采女殿には、世をはかなく思ひ取り、猿澤の池へ入水ありしが、我傳きの役目なれば、野邊の送り營み参らせ、いまだ二日を過ぎず」と、詳かに答ふれば、「さこそ、親鎌足が整居を悲しひ、淺ましい采女が成行き、その方付人の越度となり、親大判事に勘當を受けたと聞く。さあらば主も親もなき身、夫れに何ぞや、嚴めしく禮服を著飾つて、我が日通りへ出でたるは、心得難き汝が心底。」
「ハ、御不審の段御尤も、親もなく主君もなく、獨り立ちの私、若輩ながら蝦夷公へ奉公の儀願ひ上げたく、君と敬ふ此の禮服。」と、心に探りの一思案、まことしやかに相述べれば、「ホ、ホ、此の蝦夷を頼み、奉公の望みとや、若輩者の神妙々々。我も望む所なれど、その方が父大判事

に、汝が勘當赦さずて、親子共、臣下となさん。」「コハ仰せとも存せず、親人判事が氣貫として、一旦申し出せし事、爾ら鐵石心、勘當も赦さず、元より二君に住へぬ所有。二と、其の口開き大判事、蝦夷が幕下に附けて見せう。」「ホ、御手柄に如何やうとも、親清澄得心救さば、其の上、なほ仕合、所詮私一人の奉公が相叶はずば、とや角申して公なき事、先にお殿」と禮儀をなし、裏庭におり立て、徐々歩む向うの方、豫て言ひつけ置いたりけん、玄蕃彌次郎立ち出でて、前後を圍ふ二士立ち、ソレと蝦夷が下知に連れ、兩人一度に切り付くるを、身を沈めば雙方の、刃は合打ち、さしつたりと開いて又も横揃へ、車輪の如きけ込り鋒先、清澄心掛、左右の兩元らつかと開り、蝦夷の胸を刺るか、刺さるに足籠の手向は、「ホ、不審はしも、其方が武藝の誠み、兩人にさすは、いか、天晴。天晴。」「コハいかのしき御尋ね、尋ねの私なれば腕たのしき覺えなまし、就此の上は手練の極め、重ねて御覽に入れますぞう」と、雙方を突き放せば、歸へしうつて兩人が、又も切り込む刃とり、庭の飛石エイウンと、請ければ御殿の天井より、怪しく下る飛網に、清澄は度重を配り、「ササササ」の試み、飛網のお相手がおどろきならは驚き、角も、さう驚き入つたる御手柄、見届けましたと雙方、刃は稍に飛石も、元へ直せば御殿の網、棟太迄に懸れける。久我之助さうらした事、親史公試みの鋒先を、受け留めた今の帯石、用を放るゝと下る鐵網、元のごとく石を置けば、網も懸れて其の體

なし、ハテむづかしい御要害。」と、驚わる一言きつくと、漸の試み毛を吹いて、髪をくろめした。
 頼一「大切の此の要害、其方は身内同然、見えて置くも存心と、敵になづける詞の艶ハ、此の清
 漸も武士の端、只今如きの御手配り、決して他言は仕らぬ、御氣遣ひ御無用。」と、暇ようして久我
 の之助、左右に目配り悠々と、表裏して立ち歸る。跡に蝦夷は溜息の、一間の横押し明けて、入寛大
 臣の妹橘姫、あとに續いてどの方、房に心奥の開は、今日の酒宴にかけ合はぬ、鐘の響も身に
 入らず、御機嫌いかと兩手をつき、御酒宴の半ばながら、貴方様へ御願ひ、夫入鹿大臣には、秋
 頃より一雨に、綿の道に入り給ひ、奥の亭へ引き籠り、一つの棺を地中に埋め、丁度今日が吉日、
 入相の鐘を限り、定に入り給ふと聞く、何に譬へん此の身の悲しさ、何と便りがある物ぞ。少しは
 思ひやり給ひ、お諫めなされて下さむ。」と、涙先だつ唧と言、同じ歎きを橘姫、何卒御兄上様、
 通世の思したち留まり給ふお願ひ。」と、一つ思ひを二人して、いふをうち消す父大宰「ア聞きたく
 もない入鹿のか沙汰、今此の蝦夷が直勢に次ぎ、何不足なき棠花を捨て、佛法といふ天竺外道の術に
 歸依し、奥庭へ引き籠り、晝夜わかたす無名誦誦、此の世にあつて益なき座、土へなりとも定へな
 りとも、入り次第にして置きめせ、復最前から鐘が鳴る、ハ、忌はしい不孝者、娘も娘も重ねて言ふ
 まい、一ハ一ハ、いやまだ不吉な泣聲、此の酒宴を妨ぐるハ、一ハイエノ、まうし、何のマア御遊興を

妨けませう、その例にも申しませぬ、涙も雪しは致しとて、御教され下されと、船に降り行くしほり雪、思ひは胸に泳みこん、橋頭引き取つて、申し女様、一見上人殿様の事、申す者はござれませぬ、御機嫌を直されて、別荘で御酒宴を――あ、娘より言ふた、是れよりは異聞を替へ、再會を催さん、お蔭で御儀次も奥へ来ると、終日の嵐も風の程、此所を取つて、一間へ移さるにけり。橋頭心でその父上のあの老氣實、何程お蔭に遊ばすとも、お聞かされは有るまい。是れよりは北の橋、大内へ急ぎ参り、何卒見上り直儀、人定を先より結び、可成昇殿有る様に、暖簾のお局へお細申す心せしと、力付くればその方が二階面に入直儀、今日を此日の入定と、生き別れの船が身、別に船に乗りながら、暖簾にお局を、知事だに中々に、栗山の門を閉し、抱いたかはることさへも、泣いて暮して参りませと、ひと涙を友千鳥、同じ姓に露崎、遠くがふと思ひなり、船は波を打ち揺ひつゝ、お局は道ばすな、靴を脱ぎの事なれば、一刺も穿る由は入内へ――それは一入御苦勞なから、――是れは――致つた、要とても同じ事、ソレに、大内へある用意せよ。見えつて聞かぬが、興味物となつた、白頭巾よりお小姑、直に力付け合せて、味方をして、見送つて、味方送つてあり、方、何うすくなき身の上を、誰か実にも、船の内、暖簾がが叶ふところ、お局はめづる氣質、それと知りつゝ、恨みしく、お局の親切を、お局の誠とあかしく、思ひ續けて見たり、木

草の枯葉眺めても、猶いやましの無常心、夫の命も今日限り、涙は胸にふり積る、雪かき集めかき寄せて、冰る手先、後世の爲、束ね丸めて五輪の形、此の世の名は入鹿大臣、頓生菩提と手を合はせ、心の廻向せざりくる、聲も憚るしめ泣きに、哀れはかなき風情なり。それに引きかへ奥の間は、地下を寫しの三味線に、なまめく歌の聲すえて、肌花はちつても春は咲く、消えて返らぬ其の雪にさへ、劣る憂身は消えもせて、あんまりといはうか、心ないといはうか、現在子といひ、親といひ、けふを限りの命ぞと、悲しむ事を聞き捨てに、捨てた浮世に斯うして居れば、仇名龍田の流れの錦、エ、心ない此の中で、雪見の酒宴所かい。テノ鏡の打ち納めが、入鹿様の御臨終、夫をさきだて何樂しむ、我も一所に此の雪と、共に未來の道づれと、上著を脱ぎば墨染の、むきよりつもる廣庭の、雪に座をしめ合掌し、此の儒愛に埋もれて、死なんと誓ふ真心は、天に通じて降りしきる、膝も涙も白妙に、色香盛りの黒髪も、八十路の姥と疑はる、恩愛血筋に屈託せぬ、蝦夷大臣一間を出で、一顧めどの方、まだそこに泣いてゐるか、ハチ叔々ごくにも立たぬ、馬鹿者の入鹿が事を苦に病み、物ずきな雪なぶり、もう打違つて、こゝへ来て火に當りやれ。「アノ胸慾な仰有り事、夫は定に入り給ふに、そもやまあ妻の身で、褥の上に居られませうか、雪に凍えて死ぬるのが、せめてもの夫婦の誠」「ハチ貞節な心底、其の實心を聞いてお身に問ひたい事が有る。笹入鹿が入定は、佛法信仰許りで有るまい、様

子無うては叶はぬ筈、親子に増る夫婦の中、夫の心知つて居よう、イヤ、何ぞ密かに聞いた事があらうがな。其の仔細が聞きたい、我強うは言ふものの、實は不便な子の命、様子によつて入生を止める、思案あるまいともいはれぬ、どうぢやく。」と脇道から、猫撫聲も氣味悪き「イヤ、エ親御様さへ御存じない事、何の私を知つて居ませう、去りながら瞞目から、存じますは、夫々原様のお覺悟は、お前様のお心が知れぬ故かと存じます。」「ハ、ノノノ、蝦夷が心は全降る白雲、一日に見えて有る潔白、ア其の雪に埋もれては上から見えぬ塵芥、心の底がどうも静けぬ、入鹿が性根聞きたい。」「イヤ申し、常に夫が申さるゝは、内大臣鎌足と父蝦夷は、國に二つの柱同然、一つが折ても我々が、お爲にならずと物言ひ、其々大事の鎌足は道を違ひ用になつたには、深い様子の有りさうな事ハ知れたこと、此の蝦夷は忠臣、衆人の鎌足をほつ下したは天下の爲、我が昔のお爲ぢやわい。」「エノ、鎌足はに罪ない事は、世上の人が能う知つてをりまする。威嚇を請ふ筋でござかしら」と、世の人の譏りは耳に入鹿様、それが積つてあのお覺悟、一人の榮花を極めんとて譏りも願ひ給はぬ、蝦夷様のお心さへ改めて下されなば、入定も止まり給はん。夫の生死は父御様の心次第、嬪子不便と思召し、お聞き入れ下さりませ。夫婦が命はねども、お心が直らねば、お前もののねぬ危い命、君の御恩を受けながら、上善の位を奪ふ、御謀反のおぼし立ちでござりませうがな。」「

様の御聞にて、お身に報うが悲しきに、わらはが御意見、悪心を止まつてたゞ蝦夷様」と、男を思ひ
夫を思ひ、合はす兩手にはら／＼と、涙深山の瀧なせり。始終とつくと蝦夷大臣、「モウよい、すりや
我が大望、残らず入鹿に聞えたよな、さう有らうと思うた」氣遣ひすな、其方達が望みの通りにして
くれうが、まだ尋ぬる事がある、めどの方騎下駄直せ」と、刀提持庭の面、若しや得心有磯海、底
は白洲に危むは遣ひ、「近うよりやり」「ハイ／＼」と立ち寄る日先へ氷の刃、ハツと破て退き「皇御
様、そんならどうでも、思ひ止まるお心はござりませぬな、」「馬鹿盡すな女め、天下を取らば肉身の
入鹿、譲りくれんと思ひの外、道立てする降には、もう構はぬ、思ひ立つた大望、一度萬乗の位に昇
る此の蝦夷、エ、膽甲斐なき性根と知らず、入鹿に渡した連判狀、汝が有り所知つて居よう」「イエ
イエ、御謀反のわけは聞いたれど、連判とやらは、」「吐すな、」「大事を聞いた女、ことに安倍
行主が娘、麻詮生けて置かれぬ奴、いうても殺す、いはいでも殺す、其の一卷こゝへ出せば、苦痛さ
すに一思ひ、あらがふと鬨り殺し、」「ア／＼何と」と付け廻す、通れがたに肩先すつはり、突き込
む蝦夷が突き鋒先、手負は大地にこけながら、蹴上ける白砂雲煙、手に渡さじと懷中の、一卷火鉢に
燃え立つ炎、嵐に連れて烈々と、やりしも聞える鐘太鼓、「ヤア訝しき攻鼓、連判狀を焼き捨てしは、
我が大望を挫いたる、不孝の入鹿夫婦の奴ばら、大事を敵に洩らせしな、憎い女め思ひ知れ。」と、足

名印。さしもの蝦夷も舌に、ハットばかり驚く面色。見られしか蝦夷殿、我が増の入寢大座
 此の一巻を帝へ捧げ、諫めても承引なき父が逆心、子として是れを露はす事、不孝の罪莫大なり。昔恩にかへる道なければ、叔母に達するなり。我は祖父馬子が意をつぎ、佛法に歸依しければ、運世
 の外なしと、引き籠りめさるれども、我が娘めどの方、謀に命を捨てて、最前焼き捨てし質物の連
 判状は、誠に逆心あるかなきか知らずの烽火、貴殿の口より謀反の次第、最前既に白狀の上、最早陳
 する詞はあらじ、ナントく、「ときめ付けられ、一句一答詞なく、只黙然たるばかりなり。大判事さ
 し心得、三方に腹切刀、蝦夷が前に指し置けば、行主立ち寄り、傍なる雪人形手に取り上げ、「コレ兄
 られよ、愚かなる言へなれど、此の束帶の雪人形、其の形をなすと雖も、火に當れば忽ち水、其の人
 にあらざる逆心、消え果つるは天の御詞、せめて最期は此の雪の如く、潔く生害あれど、諫め
 詞を耳にも入れず、無念に堅まる雪人形、傍なる火鉢の炎の上、掴み碎けば水煙、肌押しくつろ腹
 切刀、腹に突き立て怒りの眼中、「エ、無念口惜しや、仕込みに仕込みし我が大望、現在の倅入鹿が手
 より洩れたるは、我が運命の盡きる所、さりながら此の蝦夷世を去らば、見よ、忽ち天地は常闇、
 不具者の帝を始め月卿雲客思ひ知れ」と、きり／＼と引き廻す、大刀取る後に大判事、はつしと落す
 首諸共、矢一つ來つて行主の、胸板射抜き敢なき最期、こはそまいかにと悔み仰天、途方にくれて立

ちよとへば、「アア清澄、必ず驚く事なけれど」と、聲かけて一間の横、一人の武士に引掛はせ、奥山の岩間陰、靜々いづる入鹿大臣、髪おどろに麻衣、さもすつましき有髪の僧形、大に事きよべとして、「アア入定ありし入鹿公、不思議の對面いぶかし」と立ち寄れば、實にも、さも有らん、不審の一條語つて聞かせん。父親中年を重ね、救逆の企て有れど、其の器小さくして、中々大望なり難し。爰を以て此の入鹿、表には仁を飾り、父の惡事を疎める筈、佛法歸依と引き寄、宿を給ひ數多の公卿、父親友に心を付け、油斷の間を行法の、奥山より禁庭の寶藏へ隠れ遁、土を掘り石を穿て、妙計遣はす思ひ入り、疾くより評定よりしに遣はす、神龍洞窟失ひ給へど、裏書の寶藏は、實々と手に入つたり。父が命裏に命、春の野に見捨てしは、此の時を得つ。然、ありんか多し。御殿に響く唸の聲、扱はと驚く大判事、各々御前次、可に矢張り取りかゝるは、大に驚れて、馬鹿者の男行主、御前に手にかけた、其方に我が御存なれば、味方に付けは其のこほり、否と云はば其の同然、アア勝手次第に返事せよ」と、大に惡不迫の入鹿が自勝、爰そ大判の大判事、心を定めて低頭せず、一時を得給ふ大臣に、いかでか違背申すべき、我が君と仰き奉ること、申し上げればにつこと笑ひ、一歩、還しと入、御前には此の入鹿、天地の間にかくる物、誰か敢て對ふ難いなし、今日より我こそは萬葉の上たり。アアいまはしの黒衣、いでや衣服を改めんと、呼ばに聲に數多の官女、手ん

手に著せる綾綱、立ち直つて大音聲、「清澄は皇居の案内、玄尊彌藤大殿せよ。」是れより袂裏へ隠て向ひ、帝を始め月轉雲客、残る寶の所在を責め問ひ、翻みひいで心の儘、中門のほとりへ丸が車を進め、官人ども來れやつと、驛に隨ひ數多の武官、列を正して先備へ、玄尊足駄を奉れば、ひらりとおり立つ男の姿、心も雪雲に高足駄、門出の音楽雄然と、又も降り來る雪の空、心得供奉のみさぶらひ、船長の御傘差しかくれば、六つの花瓣ひら／＼雪、威風凛々押ふ雪、深き思惑の大判事、前後のそなへ嚴かに、御車はつと時めきて、内裏をさして出でて行く。

第二

山又山も都路は、心に連れて奥深き、名も猿澤の池にさへ、波立つ世こそ愛かりける。此方の道よりたどり來る、山働きの狩人ども、打連れだちて立ち留り、「コレ丸右衛門、こちらが仲間の芝六が、此の間から夜狩して、好い代物付け出した。それでおいらを助けの願ひ、葛籠山から、山城境へ入り込んで居るとのこと、今夜はぐつと働いてやらにやなるまい。」「さう、さう聞けても暮れても俺らが相人は、猪武者五六疋射とめてやつて、ぐつと囊矢を貰はう、キア／＼行かう。」と世渡りに、追はる、獵師山も見ず、足を早めて急ぎ行く。世の憂さは、尊き卑きうじ魂の、空隠れせし思ひ人、采女

龐大臣が忠心に事顯はれ、安倍行主を便にたてて、今日事を糾すにおよぶ、いまだ歸り來らねど、蝦夷が自殺は目下、鎌足内裏を避けし事も、悔むに甲斐なき有様ぞ。今より元の淡海、再び忠勤勸むべし」と、さも有り難き免許の敕諭、淡海初め付々も、皆位びん奉する所へ、禁庭の勤番使、御車の御跡慕ひ、息つぎあへず馳せ参じ、「王上これに渡御なる事、漸う相知れ御注進、今日蘇我の蝦夷館へ行主公敕使として大判事を召し連れられ、彼等叛逆吟味の所、速かに白狀あつて、蝦夷は其の座に切腹あり清浄是れを介錯す。然る所行法に取り籠つたる入鹿大臣寶藏へ忍び入り、霞雲の御劍を奪ひ取り、誠は親蝦夷に越え、王位を望む大惡人、行主も忽ち手につけ、禁庭へ馳せ込んだり。是れに支へる公卿の面々、或は蹴殺し切り倒し、上を下へと逃げさまよひ、さしちに廣き禁裏の内、人種も盡きん許り、猶も追々注進。」と、呼ばはり捨てて立ち歸る。皆々はつと驚きに、わきて帝の御歎き「如何なる天の咎めぞや、思ひ計らぬ入鹿の惡心、我四海の主として、臥所さへなき身となるは、淺ましき境界。」と、歎かせ給ふを淡海は「御心弱き御仰せ。」と、勇める中に思慮を廻らし、竊かに官女の耳に口、申し合はせて車に向ひ「思ひがけなき只今の注進、是れより馳せ付け遠見を致し、安否を言上申さん。」と、出で行く振の儀りも、當日の君の御心地を、休むる衛此方なる、木影に暫し名む中、取り取りいさめ奉る。暫くあつて淡海は、急ぎ歸りし足音して、御車近く息をつぎ「只今遠見致し

所、諸國の軍勢蜂の如く、禁庭へ馳せ参り、さしもに猛き大鹿大臣、直に逃げ候へば、忽ち内裏は騒
かなり、早人御など候へ」と、誠にやかに相違ふれば、主上は安堵の御思ひ、御説きは限りなし
淡海は官女を制し、急いで還御と先に立ち、腰を取りて舍人役、押して行方は何處とも、京定のなき
室勇み、豪踏み分けて、進み行く。山手の道より親手達、爰に名高き狩人芝六、羽矢手揃みいつき
せき、人絶えの本影に立ち留まり、時を密め、一より三作、此の間から食の狩、是れは後世の表向、
つとめ、勢子共、山手谷々々をこかけ廻す、此の物音の騒ぎに紛れ、案て其方に言ひつはた、彼の爪黒
といふ女鹿は、千正が中に一疋、そを取りたい許りで此の様に言を折る。其の念力が通つたのみ、す
ノ葛籠山の向うの谷合、見付け得た其の爪黒、一ノ猪狩の廻廻で、はつ立したる鹿にて、山手の山を
越すに必定、其方ははなから谷へ廻り、勢子は螺鈿打のぬらさ、件の鹿を追ひ出せしめ、心
得ました、しなは是れ父様、追ひ出すは安い事ぢや、腰をきるは何のほど、お前の身に難儀が出来
ては、母様や私が身は如何しとせうのと程々に、後之家なる賢しきは、孝行見えて不便な事とて
氣の刺い事をいふ、それ知られてはまる物か、もし知られたらば百年め、動かかな事するもの、此の
身の榮耀を望むではない、所詮此の狩人の責、人間にする業ぢやない。せめてわいには狩人のこと
ともなく、侍にせう許りぢや。浦が身に氣づかひはない様は、さうとく早う行候へ、おれに別つて

籠の方、台點かぬかるな。」心得たこと、譯し合はせて親と子が、道は二筋引き別れ、山路をさして
ぞ二重急ぎ行く。谷山峯に輝かず、數の松明螺鈿の、露につる、刻卒の聲、松の嵐もさす。スハ好
き時分し芝六は、弓矢つがうて籠の方、木陰に隠れ待つ所へ、猪を狩り出す山路の騒ぎ、共に驚き驅
け来る鹿、件の爪黒饅たりやつと、切つて放す矢あやまたず、鹿の嘶跳びきて、其の儘其處へ倒れ伏
す。三作はかけ寄けて、「爺様射とあさつしやつたか。」「シイ聲が高い、よ、首尾能う仕留めた。」「エ
爺様、如何やら怖うなりました。」身を顫はして涙聲。「ハテ／＼くど／＼し氣遣ひすな、人の兄
中歸れば済す。」と、驚見廻し心を配り、鹿引つかたけ親子づれ、宿りをさしてぞ三重立ち歸る。三
笠が本の雨舎り、烈しき嵐吹き越して、君が御遊の御車は、此の蘆家に止まりし、獵師芝六が佗住
居、妻のお難もまめやかに、仕へ参らす大君の、供御のしかけの米粒を、選むも女中の手すこみに、
紐の前垂、緋の袴、うち交りても女子同士、つい馴れ安きならひなり。「ホシニいか様、上々様といふ
ものは、此の様に一粒々々米を選び、是れはちつと色が黒い、是れは角が缺けたのと、皆選り出して
上げます米は二粒か三粒、神様より大切な土善の主様、斯うなうてはならぬ筈。是れを思へば勿體な
い、王様に上げる供御を踏む確、踏めば足が腫れう。」といへば、女中が、何のいな、上様でも肝心
の時はやつぱり白がお好きでな、勿體ないと此方から、遠慮すれば、けつかして、下馬緩忘と、お阿

りなさる。」と、笑ひ綻ぶ障子の中、しをたれた家のしよけつばさ、しよんほりと立ち出で、「ナウく
上臈達、夜も早初更に及びしに、夕御膳の供御、何として遅なはる、膳番は何處に居る、怠りなり。」
と聞らる、一、一、一、お公家様方とした者が、やつは立禁裏の格式で、何のや、藏師の内に、是れ
な仰山な膳番とやらがあるものか、彼方方には御存じない。貧乏世帯と云ふ物は、何もかもたつた一
人、むつくり起きると庭の前、庭の膳番は仕丁の役、お清所の飯袋を皮、輪の出し入れの付役、きん
と仕廻しまうて家る所がお膳様、百人前する事なら、手の廻らぬは御膳番にせよ。此のまた此方の工
様は、悪い事ぢやないや、山や仕廻る御膳番、お膳番に大風出敷、お膳番に付いた、お膳番の
の我が家の門「驛今戻つた。」と内に入り、「コレハ、大切な御膳番、お膳番に付いた、お膳番の
もお前が、在所の山車見るやうな、その大膳お膳番、にやあ、お膳番に付いた、お膳番の
一つ家でも、誰が見まい物ぢやない。お膳番の年中、お膳番の様に、其の長い物を、此の狭い門で引
きすつたら、踞踏んで轉けさつしやろ。夫れでコレ、奈良の町でよい流れ買うてきた、サア／＼是れ
を召し替へて、風呂敷解いて取り出し、着てお膳番の子たち、あれ昨日の膳番、在りか、お膳番の
膳、御膳番の幸田帯、根から組合はぬ御膳番、お膳番の膳番、お膳番の膳番、お膳番の膳番、
お膳番は、お膳番の膳番、此方が髪も町風に、島田とつらに結び直し、お膳番の膳番、お膳番の膳番、

在所の鼻の風俗は、憚りながら私に傳授「ア、こりや鼻、上様の御膳はまだか、何れも様も、嘸御空
腹にござりませう。」「イヤ／＼心遣ひ無用々々、常さへ御安泰なれば、臣等が事に苦しからす。」と、
殿上人も世に連れて、食客の身の氣の毒顔。「イヤ／＼何は尋常に仰しやても、内裏様も喰はにや立た
ぬ、思ひなしか昨日から、あつきりお顔が細つた。」鼻マアちやつと、握り飯なとして上さい。」と、亭
主は如才内證の、鹿をくろめて入る所へ、腰に帳面ぶら／＼爰へ、郡山の鵜耒屋、「内方にごんすか。」
「す、新右衛門様、能うお出でたれど、折悪う今日ほ。」「オットお内儀、又留守といふのか。」晦日に
來ると、いつでも朝から内に居ぬ故、今日は留守を言はさぬ様に氣をかへて、朔日に仕かけた。拂は
ぬ癖に、節季に書出し何故おこさぬと、小みづがいやさに、コレ持つて來た此の書付、去年の尻残り
が六十六文二分五厘、何時まで釣り付けるのぢや、ふづくられて居ぬ男ぢや。サア／＼／＼全拂や、
全受取らう。」と、傍書がす聲高く、大納言押しとめ、「ヤコ下々の者、いとほしたなき争ひかな、し
づまれよや」と、有りければ、「ア貴様何ぢや、ハア手の筋見る人か、コレ茶一つ汲んで下あれ。」「ア
減相な、あなた方は大事なお客。」「何ぢや、米代も拂はずにあんなけない人取り込んで、まだ米を
驅るのぢやの。」コレ喰ひ潰し達、おれが喚くが無理か、此の書出しソレ見やしやれ。」「ム、此の切紙
は色紙の形、扱は教か。」と、つく／＼眺め「ハテ珍らしき五つ文字、書出し、一つ米代、六十六つ、

去年の霜月、殘る銀。是れは懲款とも思はれず。一々懲も懲、借議乞ひや。何にせよ下々には
優しくは三十一文字を刳ねしな。一々、三十や四十の端を錢ちやないわいの、貴様もか、あうどなら
よう聞かしやれ。爰の足六は盗人ぢや、かういふが無念なら、一々金拂へ。かうに言ふもの、こゝ
噂衆、こゝさんの心次第で、一々結構な料簡があるに。薄い足六に、百日近う仕送つたは、しや
りから付け入つて、貴様の舍利塔、疾うから念かけて居るに、しやりとては罰禁を。留守の定なら、
コレどうぞと、ひつたのと抱き付けば。一々、是れ何ぞしやんす、主が内に居やしやんすぞと。一々
一々内に居るから罪受取らうわいと。一々、留守ぢやないな。一留守ならちよつととと、又取り替
く、片筋觸して板間にどつたり、撫りしなから負けぬ顔。一々足六、大に頼内に居ながら、よう留守
つかふな、一々来代受取めかい。一「一々来代は渡してあるご。一々の判時渡した。一々、新太の代三
百日の内、六十六加引いて、跡が二百三十四加。つちへ全額取らう。一々、夫はは。一々一々全渡せ、
一々一々一々一と詰めかけられ、どつたり詰つた入口、ひつしやり、門からしめて、留守ぢや、密来代
も来代も、違はるへてねば取りやりなし、留守は五分を々、算用書だつと、お留守になつた體の骨
あがく引きすり逃げ歸る。安は地下に落ちながら、心の官位有近衛の中納言御、すなへくと立ち
出で。一々秋、政常卿、君にも、益々恩顧のでなく御渡り、是れといふと足六は涙切、鹿の目の御

難を遁れ、此の家に匿れ奉れども、計らざる入奥が亂、帝の御耳に達しては、彌憐愍も重く、
 何事も包み隠し、只太平の容にしてなし、御目宜ひさせ給ふを幸ひ、此の荒屋をばり珠璣の御殿の
 中と、偽り懸し参らする我々の氣苦勞、此の上ながら御悟りなき様に。と、詞半ばの微聲、出御なり
 と、皆御の、聲誑共に押し聞くる、あかり障子の御格子に、御幃はしつ天皇は、此の膳が家とは夢に
 だに、白平調の膳の傍、御に玉坐なれば、各々と公卿連、成流を止して待置ある。配膳の奥
 侍、御菜の局、四方の御蓋、平戸棧の茶椀、土器、其の儘に、さがる御膳を、漆御押しと二膳、
 貴の御膳少しばかり召し上られ、今夕の供御はお手も付かず、此の儘下けよと教諭せ、授け御膳
 が御膳櫃に叶はぬか、無調法な、御膳番の大隅大吹師、急度申し付けたんと、立上人とする、
 一々漆海、さな心ためそよ、膳番の者の罪ならず、兩眼くらき洞の上、采女が別れの歎きに沈
 思へばせんさ心の迷ひ、不徳の昔と憂しまん亮かしきま。こ、は常寧殿とな、夫れに詰むは禮々
 ぞ二ハハ大御言兼候、右大輝政常、其の外参議、中將、少將、百官、百司、錢らす参内仕る。
 御目だに明らかたらば、遠方の御幸はならずとも、此の内裏の中にも、見所は様々、其の障子の
 繪表には、側に鳳凰見事な彩色、上段の繪は竹林の七賢、また清原殿の圖より、奥の間の四系、彩
 戸には蓋に鷹、雪に梅、種々色々の名甚名案、毎日見ても飽かぬ御殿、夫れに初春にもあらざるに、

六

り、御日も聞き給ひけるは、誠に目度う候ひける。昔の京は難波の京、中い京と申すは、志智幸崎の松の色、かはりし物は、我々が身の有様、君はかはらせ給ふなり、千年の齢奉る、忠臣の柱は月晴雲客、日本の柱は日天子、三本の柱は左近右近の花橘、四本の柱は紫宸殿、五本の柱は五畿内安全八重九重の内までも、治まり靡く君が代の、千代に八千代を小石の、親ひ盡き申すにぞ、甚だ敬感おはしまし、いしくも祝しつる物かな、誰かある祿取らせよ、管絃絳竹も祝儀に同じ、今日の舞樂も事終れば、百官百司も退出あれ、朕も夜の御殿に入らん。思へば我は斯くの如く、錦繡羅綾の内に坐し民の艱苦を露しらす、徳なうして榮華に耽る、神の照覺勿體なやとて、御身の事は知り給はず、民を憐む御詞、各顔を見合はせて、額に涙の天が下、暫し入御なし奉る。芝六跡にさし寄つて、「仰せ付けられた彼の爪黒の女鹿、近邊の山々草ねても、扱ふない物、是れまでつゞに見當らす。漸く昨日見付け出し、念ふう射とめ、乳の下に血汐を絞つ、壺に認め置きおした。」と、大儀々々、正に天の用に立つる、得難き鹿の手に入る事、偏におことが忠義の働き。父内大臣鎌足、疾より入鹿が亂み察し、罪なくして身退き、興福寺の後なる山上に取る籠り、天皇御惱めのお救ひ百日の行ひ、則ち今日が満願の終り、帝此の案に在す事、先達知らせなれば、明曉、六つの鐘を限りに、密かに是れへ來らるべし。其の時こそ其の方が勸氣も赦免、改めて元の家來、か上と郎利繼に「ハッコハ有り難

し奈し、この年月の念願成就、浮木の龜とも倭景華とも、此の上ながら満足公へ、お執成、御奉
る。「必ず氣遣ひ致すな」と、主従水魚の中臣氏、土に生ひても穢れなき貴屋の御殿へ入りにつけ
様子立ち聞く女房の、嬉しい中の心懸り、草臥れさんふと立ち寄り、「さう、此方の人、私やお
前に聞ひたい事、今朝の事に、さう聞かしやんぞ。嫌い流度を知りながら、春日の牝鹿を射殺した者
があるとして、厳しい吟味がござんすね、さうもやとは思へど、萬一鹿州でお成すなと、そんな事にはな
いかい」と、室間ひかけるも大思ふ、しかる牝鹿は鹿の鳴くについで、「うー、うー」と、遠く、奈良の
邊は、赤くても知つて居る鹿の法度、石壁話に重なる事を知つて、殺す白鹿があるのか、したが腹を
いふは言ふ事、一體しがない筈なれば、さう殺すに當はる事にと、さう謝らんとす。さうあるが、
鹿手まだら、雪見酒、氣が染山で、一杯は、鹿の鳴くやうな女中、所々を聞ても聞きやうぬ、細
おきへて人のにけり。村のふるきを表から、うー、うー、鹿の鳴くやうな聲、鹿の鳴くやうな聲、
極まつた。友吟味して訴人したら、御褒め下さる、と、お鹿を捕つた。花屋敷まで早くさういふ、
言ひ捨て歸る高緯は、小耳にはつと三作を、前し細腰、身の上に、説話が、さうどうせうと、得心
のやうしくも、重寶家じ作住の、手習文庫、續々雙蝶、筆くじらと何やらん、七ついろはの清書文章
掻き授しやの腕白弟、三ッ、兄様さづきの箱下されや、くれふと、さうさうと、引つたくる。

のしんは惜にくからず、夫それもやらうがコレ松すまつ、兄あにが頼たのむ事こと聞きこいて給たまるか、此この狀じやうも持つて、
 大だいはなから興きやう福ふく寺じの門かどを擲ないて、車くるまへ差さし上げますというて渡わたして來きてたも、「ム、そしたら何なんぞ
 道ちんぐ下くだうのか。」つづるとも、「後ちんには春日かすがの野のの火ひ打うち焼やき買かうてやう。」また誰うそ、欺だますのぢやないかやと
 「イヤ、く、眞實ほんまぢや。」とそんな合あ合あつて、注ちて來こう」と、さかざる、ひも、さかざるも、年としよ賢かみ
 き形かたち松まつが、狀ふところ、漢かんにらふか、走り、見み送おくる兄あにが書かき殘のこす、筆ふでの命いのち毛け器き用ようなが、仇あだと白しら地ぢの神かみならぬ、
 折なもこそ有あれひそくと、衣きぬに龜かめ捕と手ての付つき、ソレとかけ聲こゑかけ入いつて、騙かけ行いくおくよう騙かけ出だ
 る足しふ六む侍まつつた、こゝや人の内うちへ、理こと不ふ盡じんに數かず千せん萬まん、ム、聞きこえたお前まへ方は、鹿か奉ほう行ぎやうのお手て下くだぢ
 やな、「一ひと、此この家の内うちに吟ぎん味みあつて、人い鹿か大だい王わうより誰なん誰なんの役やく人じん、汝われが内うちに匿かくまひ置おいた者ものあるべ
 し眞ま直ちやうに白はく狀じやう。」と、かきこか、れど何なんとせや、ハ何なんの事ことかと思おもつたり、私わしぢやとて、貧びん乏ぼうな貧かち人う
 ても、相あ應おうの返こたひは致いたさいでは、それ御ご吟ぎん味みとは、お役やく人じんに聞きこ合あひませぬ、即すなはち出でなれ侍まつ。
 大だいはな、既すでに置おいたはお尋たづねの天皇てんわう、竝ならひに鎌かま足たりが倅せがれ淡たん海かい、是ぜ非ひあらがへば此この通とと、傍はたに
 合あ合あふく作さくを、取とつて引ひき寄よせ指さし付つくる、切きは駒こまにさし當あたる人ひと買か取とられ、「ハア、ム、ム、」
 大だい何なんとと詰しめめかけられ、「先まづノ、お待まちちとされい、如何いかにも申まう譯わけ致いたしませうが、爰こゝではどうも申まう
 さねず、大だい莊じやう屋ゐの方かたまで参まゐり、白はく狀じやう致いたしませう。」ム、然しからば早はやく、大だい歩あめ、ハハ、ハハ、

「さ、三作、わいや戸をしめて、事に氣を付けいゝ言へ、いざお役人。」と打連れて、毒蛇の口の一思案、心は跡に出でて行く。一聞に様子から聞く淺海、婦々と呼び出し、之が心底、患臣無二と思ひしが、心に絆されて大事を察し、今の行跡、時間と及ばば、慥かに内助。どうも天草、長く集には置きまされず、今宵の中に山越えに、お供して立ち退かん、皆々密かに用意々々。我は難と之が、結りを待つて一詮議」と、無元くつめは立ちまゐるべやうと。お供もたされて下さりまして、お供は「出て手をつかへ、お願ひもする事なれど、あれ程にまで思ひつめ、御助を救さねうと、心を碎くも宜し、中々内状致す様な、未練な心でない事は、私存して下さる。一先歸りをお望みなり。其、一割額なことが有れば、一天の君にはお供の、夫とは言はす私から切がけをして、其の時こそ心算。明て時は今宵一、御りながら、私に、お供になされて下さるまで、一、貴に一命をさし出し、願ふ、親の老太郎、とはいつながらとも水も、我が大君の物なれど、今は貴女にも心算が、此の時、すにいはば用拾はるる、御成へ來つて迄事、待つこと心算で、貴女は、威を降すのつゝ、一、反故にせし、聞に合致、貴女集のなる中、待て心算三作も、寺に安する折に、興福寺、衆徒異人、先になつたるに候、しるし、門目指し、親をさす、貴人は、お供、捕つたといふ、否、應言はす三作を、取つて引きたて用意は、お願ひなり、

「何事、大事の手をどうするのぢや。」と、麿は春日のつかはしめ、殺した者に古より、大垣の刑に行ふ大法。」とエ、其の御評議は聞えたが、狩人も多い中、其の吟味はなされいで、此の一人が知つた様にあんまりな當推、但し證據でもござりますか。」ハ、證據なくて名を指さうか、其の卒が所爲といふ事、健かな訴人ありて明白。」と、其の訴人したは何所の奴ちや、宛えもない無實をいふ奴、切り刻んでも飽き足らぬ、其の訴人め、サア爰へ出してお見せなされ。」と、訴人に此の卒、現在の弟が辻進、よもや相違はあるまい」と、聞いて悔れ、「コレノ、ほん、吾情はさつきにから何所へ往て居やつた。」と「ア、わしや此の状もつて、あの坊様の内へ往て、連れだつてもどつた。」と、いふに怪しと引取つて、讀む度々に、胸どき／＼何ぢや、お尋ねの鹿を殺し候者は、私兄の三伴に違ひござなく候。そんなら此の書付を。」と「ア、わしが持つて往た。サ、兄さん眞下され、饑饉欲し。」と頑足なき。」とエ、何いふぢや、つつともう性もない子供のいふ事、取り上げて下さりますな。」と三伴、何のそなたが其の様な、法度を破つてたまる物か、サアちやつと言譯しやいの。」と、つき出せば、顔ふり上げ、「いかにも弟が訴人の通り、鹿殺しは私でござります。」と「コレノ、其方は氣が上つたか、狼狽へる所ぢやないぞや。」と「イ、エ狼狽へはしませぬ、私が手にした事、覺えのない狩人の、中間の衆に吟味が懸り、ひよつとどうした人達へで、爺様の難儀にならうも知れぬ、夫れ

が悲しき尋常（じんじょう）に名乗つて出ます。常々（じょうじょう）お前の（まへ）正し（ただし）にも、今の（いま）銘標（めいひょう）は其理（そのり）ある親（おや）や程（ほど）に、たほ大切（たいせつ）に孝行（かうぎやう）にせいと、ソレ言（い）はしやつたを、私（わし）や能（よ）う死（し）んで居（ゐ）ますわいの。わしが親男（おやこ）にあうた時（とき）で、端（は）様の（さま）泣（な）かしやねぬ様（さま）に、京（きやう）の町（まち）へ奉（まも）つたといふて置（お）いて下（くだ）され。是（こ）れからには杉松（すぎまつ）を私（わし）と二人（ふたり）前（まへ）可愛（めい）がつてや。鹿（しか）や菟（う）の命（いのち）を取（と）れば、どうで末（すゑ）は斯（か）うならん、せつてあれ一人（ひとり）は、特（か）りとして下（くだ）さるゝ、そればつかりを頼（たの）みます。さらばでござと相（あ）さまに、親（おや）の仇（かた）に謝（あやま）り、引（ひ）受（う）ける氣（き）の立（た）派（は）りな、思（おも）ひ合（あ）はせて、ハアはつと、今（いま）未（み）練（れん）などの様（さま）も、あんなに怪（あや）しき事（こと）ないにござり、親（おや）さん、健（けん）直（ちか）なといはるか、産（う）んだ手（て）なから親（おや）かしい。我（わが）理（り）ある様（さま）の親（おや）さん、私（わし）とさだ事を（こと）申（まを）すに、大（お）人（ひと）も及（およ）ばぬ義理（ぎり）は、一生（いっしやう）の智（ち）察（さつ）も海（うみ）も、十（じゅう）二年（ねん）につまなかり、こんな子（こ）を産（う）つた親（おや）さん、ひはるのたいたい稀（まれ）な子（こ）を、世（よ）に人（ひと）稱（な）なる大（お）人（ひと）の、土（つち）の中（なか）へ生（な）まされ、而（しか）して親（おや）さん、なんは親（おや）世（よ）の責（せき）重（おも）く、除（よ）けぬ東（あづま）野（の）の十（じゅう）く、なんはうでも親（おや）さん、く、く、と、我（わが）子（こ）にもしつかとしかみ付（つ）き、涙（なみだ）の淵（ふち）に、い、いと、喰（く）ひと、縛（くわ）り置（お）くや、取（と）り置（お）く人（ひと）に、返（かへ）り置（お）く。今（いま）内（うち）中（ちゆう）は、中（ちゆう）の事（こと）、聞（き）くつゝ聞（き）くつゝを相（あ）聞（き）に、山（やま）本（もと）の土（つち）中（ちゆう）を掘（ほ）つて、お前（まへ）の親（おや）さん、長（なが）七（しち）つゝ、もう一（いち）度（ど）、相（あ）聞（き）移（うつ）るゝと、引（ひ）立つるゝやう相（あ）聞（き）な、いはば奇（き）生（せい）一（いち）疋（びつ）を、殺（ころ）した事（こと）を、お前（まへ）の、御（ご）親（おや）さん、及（およ）ばぬ、御（ご）出（で）家（け）のお縁（ゆかり）悲（かな）しには、どうぞ助（たす）けて下（くだ）さるゝ。叶（かな）ぬ事（こと）ならぬ中（ちゆう）、何（なん）も一（いち）に埋（う）めて、取り

付く島も、缺の岸、源に漂ふうかれ船、繩目の綱は親子の別れ、見返る姿、霧霞、飛ぶが如くに引立て行く。母は正體腰もぬけ、一ヤレ三作よ待つてくれ、思へば、今日の日は、我が身一人の悪日か。由緒正しい武士の手を、一生狩人山腰に、朽ち果てさする許りかは、所の法に行はれ、非業の死は殺生の、罰か報いか悲しや」と、土邊にぐわばと身を打ち付け、蟬をはかりの俵れ泣き、悲へを拂ふ玉帝いかな大事も好物に、酔うてはころり六が、機嫌上戸のちろろ、戻り一ヤア女性是れに在するか、此の冷えるに地邊に轉りば、契は貴様も酔ひ醒しか。久しぶりの色事、ドレ抱いてやろう」と、手を取れば一ヤア此方の人か、ハア悲しや。「南無三、きやつ泣き上戸、我等は悲しうても笑ふ、貴様は日出度い事にも泣く、一ヤアこんな嬉しい折から、祝うて一つ泣き給へ」と、餘念他愛も泣顔を、見せじと妻も氣をとり直し、泣くノ、笑顔繕ひて一ホニ又何處でやらきつい機嫌で戻らしやんした、左様してマア最前の、捕人の侍、取り巻かれてござんした、其のしまひはどう付いたえ。」一サレバサレバ、そこをぬかつて能い物か、此の能う廻る舌を以て、立板に水を流す如く、頼と匿まひませぬにて、すつぱりと言ひ抜けて戻つた。雨降つて地固まると、是れからは猶あなただ様も、帯紐といてお匿まひ申しよいといふ物ぢや、サそぢやないか。ヤお天子様の御機嫌はどうぢや、マアノ、憤びや、今日の日天様が、がぐれ様にならしやりましたらこそ、斯ういふ内へお成りなされて下さるといふは

有り難いといはうか、添いといはうか、日出たいといはうか、嬉しいといはうか、是れが世に
居られうか。十左衛門やないか、また嬉しい事があるわ。明日の朝六つがこんと鳴ると、鎌足様は安
へてござる、そこで助常御殿される番、淡海殿の清合ひぢや、日頃の難ひ所ふは明日の朝で歸して身
ひに、香酒屋叩き起して、御神酒五合供へた、エ、添いとい。コリ坊主、あすから元の侍に
なつて我にも大小ござすぞよし。兄は例所に居る、三作五作とさくは我々親く妻の苦しみ、エ
一作はお面の戻りが遅る、一人殿にむくといふて「エ、矢のうちに何所へ落相な、もう御師はさ
さぬ、蔵の月取りに仕立てるわ、あすの夜が明け次第。エ、もうそろそろ。月がけるぞ、月世の雲が
見えるぞ、う、立り難いぞ、早う朝六つ鳴つて下さる。道程、頼みとす」と。勤心夫が空を見
つ、朝く表も寢表、夜間は我が子の夜間時、どうぞ此の夜が百年、明けすにあつてくれかしと、胸
の千両の色々に、嬉しいう六つ悲しいも、六つ無量の物思ひ。お、おりや最う今夜は、あやうと元日
を待つ心地、世間は寝て待て、もとの間いねつもう、功主に俺が朝に、と、こつほり候る。御
り、早とろくの草臥れ寐入り、何にも知らぬ雪ひ降、夫れというた。三作が、心こむく。夫の
命、夫れと悲し、我が子も可愛し、心は千々に鳴る。親を、はや置きいたす。南無三寶アノ
蓮の、数に結まる子の壽助、一つの命を二つに分け、最ひ親への孝行心、實りてやつて下されと、言

ふもいはれぬ女房が、心の苦痛三つ四つ、重ねて響く隙先は、斧鑕に打たる、心地、五體五つに、
つの世の、報いをこゝに修羅の鐘、打ち切る六つは、まゝ知死期かと、わつと叫ぶは一時に、布團の
中も龜の涙、露入り伏したる種子の、咽ぶ聲にぬたる刃、マア杉臥をむごたらしい、酔ひ狂ひか
亂心の」と、涙もいつそ泉涸へて、咽へ流るゝ呆れ泣き、是六居直つて鎌を上げ、「中將湊海公へ申し
上げ、女上太郎が心底を御疑ひ遊ばされ、最前の捕人は、捕者が心を引き見給ふ鎌足公の間者と、
氣に付きたがら情ない、人質に心迷ひ、輔以て御疑ひを兼ねたれば、天子も爰には置き給はじ。冥
加に叶ひ、一天の君を置き申す身の大慶も水の泡、勘當御免もなき時は、生きても死しても返らぬ
心外、筆を切つても他言致さぬ魂を、今改めて御覽に入るゝ。コリヤ女房、張り詰めた太郎が義心
大事の心底見せ振うたは、三作といふ其方の連子、元は桑籬勝と云ふ樂官の女房、蝦夷の義にてつづ
れた家、力になつて下されと、頼まれての後妻。義理のある子が柳になつて、鎌足公に根性を見下け
られたが口惜しさに、指し殺したは、二人が中に出生した此の杉松、科はなけれど主人の面晴、塵に
なつてと酔うた顔、酒ではなうて劍を呑む、侍の義理が敵ちやと思ひ諦め、坊主がかほりに随分兄
を、可愛がつてやりやいの」と、どうど坐して泣きければ、「サウコレたれ程に思うて下さる、其の兄
の三作は、鹿殺しの科人になつて、縛られて行たわいな。」マア／＼／＼／＼、すりや俺が科を身に

引受け、名をうけて往たが、を殺し、と、狂氣の如く駆け出す、両手の岩壁に、太郎暫しと雖有り、内大臣鎌足は、神事の禮服に小忌衣、心算の寛袖が香の、匂ひ残る采女の御方、手に捧いだる内侍所、悠然と出で給ひ、女上人郎心氣儘かに見附けたり。我敵の氣を遁げ、能所なから守護する采女、一日にても其方が、御願をせしは満ち忠義、大鹿が心をかけたる采女、久我之助に言ひ含め、瀬川の池に入水として、此の瀬川寺の山麓に、鎌足諸共隠れ住み、今日計らず我が師、大垣の酒に目くら、不思議に同助かつたり、三作孫れと仰せのした、上下改めしつゝと、携へ持ちし寶印箱、開けて我が子の無事を知、また生きて居てくれたがごと、驚き喜ばなきた鎌足は二りも不審尤も。天皇御備の新りの近、天の岩戸の古例を引き、天照大神に祈誓をかけ、昨日の御禰する今日、争ひあはき神の力、則ちの地に掘り穿つ土中に、怪しき光輝、能くく見れば先年失せさせ給ひたる内侍所、神無の御宿、大鹿が父親孝大鹿、疾より謀叛の思さして、埋み隠せんとす所の寶、細はれ出でしは是れまに、神間の助、たまふ三作が命、今改めて鎌足が二代の忠臣、さるながら機を殺せし昨日の處、同じ血縁の弟が、死骸を埋み、神間の、表を立てて善徳の爲、印の石の基の上に、突鐘一字は鎌足、以て建立せんと、聞せば今に處の、六つに死したる七つ上の、歌合はして十、機ひ、首にぞ哀れ残りける。鎌足思ひ、此の八咫の御鏡は、天照御神の、御姿を宣せし御止

體、勿體なくも殿吏大臣、穢れし土中に埋め置く、其の故にこそ一天の御影を曇らせ、御日旨ひさせ給ひしも、日月の鏡曇りし故、我が行法の今日に當つて、御鏡出でさせたまふ事、常闇の世の岩戸を開き、天照神と天皇の御對面の時至れり、出御せう」と奏聞の、聲に應じて淡海公、御手を取つて立ち出づる。折から向ふ鏡の光、朝日の影に輝きて、忽ち御日も開らかに、「さう僕かしの帝様、采女是れに」と走り寄り、互にゆかしき物語り、御意中も恐れあり、「アア、太郎、汝が射たる玉黒の鹿は入鹿が調伏にて、頼て太平萬乗の御代しろし召す、暫くも民間に落ち給ひしは、天より地中に落ちたまふ、是れぞ稀なる天智帝、御日も將に秋の田の、刈穂の庭の假御殿、木の丸殿に准へて、今日出陣の城郭に、惡魔追伏興福寺は、我が藤原の氏の寺、いづや是れより臨幸」と先をはらつて鎌足、威風凛々編言の汗が涙の露にぬれ、草葉に置ける芝六が、妻戀ふ雛子や子故の闇、明けてもくらき六つ七つ、十一、十二、十三鐘の、古跡を今に傳へける。

第 二

奈良の都の八重九重、禁裏守護の太宰の館、入鹿公のお成りとして、ご、めき渡る奥女中、荒牧彌藤次一間を出で、「ッリヤ仕丁共、今日は入鹿公、御日出度の御悦びに、奈良の町へ入り込みの諸職人、

商人、藝者に受領を下されんと、救護、相談めたる衆人とも、一人づ、呼び出せにほつと答へて立ち出づる、縣めしかや諸人に、司を結んでそれらに、國名を付けし烏帽子子の、始めに掛けし烏帽子屋が、身を立烏帽子御前は、三大層のお召しとて、高き位や烏帽子、十二の冠式は、烏帽子屋なれば平七を、頭平と受領なされける。あとへ出でては烏帽子に向ひ、無難次第と見づ。其方は神職な、神職ならば何故、吉田へ参つて受領を受けぬ。「ア、拙者は奥島の事柄な、當年は辛卯の年、祟り年とござあつて、奥島の御寶殿より、てへかゝるない光物が飛び出で、神の屋が八文字に描け神馬の四足にも汗をかくてござる。神官、神主、是れを戴き、御勅を捧げて七座の勅。時にお説きの御託宣に、氏子ともお下居様にしやうを知らして、むづかきをするであらと、人の命でも手廻り次第、打ち殺して其の目を潰け。わくわくし、地の底より震はして、宋は下直に鼓は鳴ううしてやゝとの御託宣でござる。無上禮法、經兵衛、諸兵衛、諸兵衛、神ひ船へ、清めて船ふと、しやべりける。扱は汝事柄なよ。向後そちか受領に候、口松の参出の御佐平次と、あるせし跡へはつともしや、言はねと手足無かり、鍛冶屋の本世の業、てんからり、こゝろ、てんろりからりと相違に、打つて打物、元が神川の雄物なれば、備前の字とや名にしあふ、櫻に色香取り交せて、手品やさし多拍板、京の水色よい染めし、紙の茶小紋に見初めて染めて、削うてしやうくら紙の茶小紋、今女必ずしやい

の、松葉小紋の戸明けて門に、ちつとやつて下ん「シテ汝は伊勢か熊野か。」「イヤ私は伊勢比丘尼で」

「夫れならば比丘尼の司。」「お兩なんどと岩桶の、釋作りのどつちやう聲。」「アイ俺は攝州西成の郡上福

島の船乗でございます。」「夫れならば大名の船歌、上つ方には珍らしからん、諷へ／＼の聲につれ

唄エヤつるつ、共、いつきやなう來てな、小側に立ちより見て有れば、おんめんもとはころり、ころ

りんなころ／＼共、ころろがしやりかの、しやなりんがちよろよ、けんれんばまたのいよ／＼、ほ

ん／＼わが枝や、／＼は葉も、イヨエ榮えやはんは葉も、ろやんはいよ、イヨエさらへ。諷ひ納めし船

歌に、彌藤次は聞き入つて、「オ、出來した／＼、此の後は其方を、船の頭となすべし。」と、言ひしよ

り、名を船頭と名付けしあとへ道心者、風呂敷肩にひよつか／＼、「コリヤ／＼汝、所化ならば土人

尙になりたい望みか。」「イヤ／＼愚僧は願人坊主、寺號をお許し下りませ。」「ム、願人とは何の宗

旨。」「されば八宗九宗をもれ、二季の彼岸は鐘太鼓で、町々を六齋念佛、お日にかけう／＼と風呂敷よ

り、取り出し始める太鼓の拍子、唄やあんやうりうしく、なつてんりうたん金銀花咲いた、銀杏、

金柑、楊梅、寒梅、瓢箪、鳳仙花、やあん鐵仙花々々、梅、沈丁、芙蓉、林檎、長春、半夏草

エ、スエ／＼りよ、エ、スエスリヨこんりやう、エマス、リヨ、こんりやうこん、しんこんりやう、

こんしん／＼、こす／＼／＼いしせほろみとすと、打ち納め、叔爺前の施餓鬼には、鉢鉢／＼と打

ち鳴らし、法界の施餓鬼々々と六字誦、七月二十四日には、地藏菩薩を育たら負ひ、一つや二つ三つや四つ、十より内へ嬰子は、小石拾うて塔を積み、一重つんでは四の爲、二重積んでは郷里兄弟、我が身の爲と廻向する、庚申にはと、打つて、庚申の代待ち、叔父に赤前垂を腰に巻き、住吉詣、四社のお前で扇を拾うた、扇めでたや末繁昌、住吉様の岸の瀬松めでたうよ、白かなかねのへてなう、櫻にかけて、よねくはかるせきのと、せんといやさらばくエ、桶りしへば彌次も「是れはしんとい宗旨おやな、向後はその方を、祝山西方寺と、寺見をお話となさん、ぞいハア有難し忝し」と、袖ひ勇む春駒は、首の下たぐく、春の初めに、春駒なと、夢に見てさへ好いと言申す、とウくくくく、三吉乗つたか、右の袂に三七二夜、左の袂に三七二夜、南の方合はせて六七六夜、ドクくくくく、勇ハ舞うたる春駒が、釋の政もきつばいと、能い男ども友禪の伊達下着を一つ、横目つかうて白洲につくばい、私は堺の素人浄瑠璃、三右衛門と申す者、政太夫は播磨、若太夫は越前、筑前大和と受領致す、是れは大坂の名人藝、私は太夫様を下さるに有難うございませう」「二、浄瑠璃を語るとな、幸ひく、奥女中も聞きたがる、無間の鐘を所望々々」「是れは迷惑、私はちやり聲で、唄ふ事は参りませぬ」「いかぬを足華に」と佛威の所望、迷惑ながら聲張り上げ、テ、アノノ、アノノ、石にもせよ、金にもせよ、志す所は無間の鐘、其の金安にと三

百兩、深山下しに山吹の、花吹きちらす破聲にて、語れば寂も怖い聲、最後の茶籠屋と一處に置いた
ら能からうと、哄と笑ひを催せり。一興々々面白し、梅が枝は、諸木に先だち吹く花なれば、三
右衛門も向後は、暖太夫と改むべし」と、仰せにはつと驚びて、お禮申せば残りし受領、又明日と言
ひ渡し、何れも白洲を立ち出づる。召しに應じて大判事清澄、袴の裏積も角菱ある、不和なる中の定
高が屋敷、互にそと白書院、日禮もせず突つと通り、入鹿公の御座の間へ、「誰ぞ案内仕れ」と言ひ
括てて行かんとす。定高聲かけ、「先づ暫く、珍らしや大判事殿、太宰の小貳が跡目を預る妾が屋敷、
挨拶もなくお通りは、女と思ひ侮つてか、但し武家の禮儀御存じなくば、少と御傳授申さうか。」と、
詞の非太刀搦捌き、騒がぬ清澄空喘き、「小貳存生より、領地の遺恨に依り、此の屋敷の内へは、今
口まで足踏みもせぬ大判事、入鹿公のお召しに寄つて参つたを、敕諭を重ねる故、皇居の間へ出
仕の心、女童に用なければ、挨拶する口は持たぬ。」「イヤ夫れなれば猶もつて、今日入鹿様お成り
なれば、大内も固然、大判事に御疑ひの事あつて、此の定高に吟味致せとの敕諭、此の詮議済まぬ
内は、一寺も御前へは叶はぬ、お控へなされ清澄殿。」「ム、ハテ、珍らしき事を聞く、君御詮議の筋
あらば、拾非違使に仰せて、拷問あらんに何の御遠慮、元來御疑ひ蒙るべき覺えなし。生緩き女の吟
味、受ける様な清澄でない、お身、見事詮議して見るか。」「す、太宰の後家此の定高が、訖度詮

議して見せう。」「イヤ小頼な、其處退いて早通。」「罪めな」と根に持つ遣遣、互に折れぬ色水の柳、松の間の擁押し聞かて、出御成ると警備の、警に二人も成びしより、恐れ入つたる許りなり。入鹿の大臣宛然と、上段の舞より遙かに見下し、ササ大判事、本町より案内せよと、敎使を立つるに甚だの遅参。マレ見よ、今日は午の上刻。流星南に出でて、花に揺するは、萬葉の伎に即く九の星、夫れ程の事知らぬ大判事でなし。但し、入鹿に仕へるが不足と思ひ、身を動か入下る、頼朝より。」ときめ付くれば、「ヨハ切腹とも覺えず、今一死四生、君の御下。通するとは云ひながら、いまだ殘黨、先帝に心を毒する異あつて、帝都を屈ふ折から、我々が御増に伊藤に、西國南海の戦事にて、大事の切所、司を振り、矢尻を唐くに駈なれば、思はざる遅参。其の上は臣第一の御事に、何事の御難ひ。」と、知りなくぞ申しける。ササ、其の仔細といつば、先帝の妾、采女の間を、元め賢妃に定めんと、行方を尋ね求める所、流星の池へ入水せし由、いかにしても合點行かず、射する所采女の在處は、大判事其方がよく知らうと云ふと、思ひがけなき疑ひに、清澄不審の言を聞か、ヨハ、御案内せざる儀、其の采女の御事は、流星の池に折身ありしとは、誰知らぬ事と云ふに、我々が知り得ざしなどは、何を自當の御難せなるぞと云ふと云々とはいはね、流が久我之助は、采女が附人なるや、其の親たる其方なれば、よく知らぬとは云はれまし、ササ、眞直に内方せよ。陳するに於ては許り

ふべき旨あり。」「イヤなう大判事殿、お聞きありしか、妾に仰せ付けられし詮議とは此の事、覺えが有らば申されよ。」と、言はせも立てず、「イヤ黙り召つて、女の差し出る所でなし。」「イヤ、救詮を受けての詮議なれば、救答の有無に依つて、其の座はちつとも立たしはせぬ。」と、膝立て直し詰め寄つて、雙方挑み争うたり。入鹿大臣大目明き、「ハ、ハ、ハ、イヤ巧んだり拵へたり、定高が領分、大和の妹山、清澄が領地、紀の國春山、鄰國境目の論により、互に確執せしとに表の見せかけ、内々には申し合はせ、古主の帝へ心を通はす汝等と、我が眼力に違ひはせじ。さすれば天皇、采女は、兩家の中に隠し置かんと知れざる故、大判事が詮議を申し付けた定高、コリヤ其方にも疑ひはかゝるぞよ。」「是れは又君の救詮、とも覺えませぬ、夫小貳より、中惡しき大判事殿、何故申し合はせうやうもなし、私にまでお疑ひは恐れながら。」「言ふな女め、左程音信不通の中なるに、大判事が倅久我之助、其方が娘難鳥と、密通致し居るは如何に、イヤ知るまじと思ふか、倅どもが縁に繋がれたる汝等なれば、兩方共に吟味は遅れぬ、何と肝に徹へうがごと、あくまで邪智の一言に、何思ひけん大判事、席を蹴立てて行かんとす。隙さす定高が、刀の鐔をむんと取り、「コレ待ち給へ清澄殿、氣相かへてコリヤ何處へ。」「何處へとは、親々が不和なる中を存じながら、忍び逢ふ倅が不所存。引捕へて吟味せねば、子供が縁を幸ひに、和睦せしと言はれては、我が家の恥辱となる。」「すそりや此方もおなじこ

と、一日武士の意地、今更中が直りたい許りに、彼に態と不義させしと、世上の人に蔑せられては、過ぎぬき給ふ夫へ立たぬ、妾も共に」と牽引き上げ、驛を出す二人をばたと眺め、私の趣意に立ち驟ぐ尾籠やつ、汝らが洋の不義を吟味はせぬ、我が噂あるは采女が花嫁、それ何れかななりと早く言へ、伺とく。一いず津が仲間はいず知らず、采女殿の儀は存て言えず、我が嗣に偏りあらば、可僧神の御前を請けん」と、刀すりりと抜き放し、刀と金打し、虎の上にも驚かひあらば、何れの時なりとも、サア逆ばせ」と、どつかと坐す、妾とても小気が妻、家に携へてて、殿は置さばぬ、大直責に逢ふとても、知る由事は存じまぬと詞に、いひ致す、然らば采女が詮議は追つて、先へ汝が、而晴なれば、殿はぬといふ事自に、定高は難い人、西さでと、又大御用と云ふに、に相逢なくば、久我之助より、朕が自通りの出願さす、此其の旨心得る」と、何かな様な常葉の難題、二人は嗣にすつくと、第一も尊になかりし、作つて詞を聞へ、聞く有り難き助成を、百の手傳が逆背致さば、一い、言ふにや及ぶと妾なり、而は聞く聞の、一葉の取り、得心すれば、花、背くに妾は忍むに、我が誠意の處にあて、よつて此の通りと云、はつと自ら花散舞、はつと許に親を、心と共に散舞たり、舞もみよの大音聲、一い、御主人、早く参れ、依は百里照の目直を以て、香具山の絶頂より、蛇虎は見る有り、一い、御人よつく問は、

若し少しでも用捨式さば、兩家は没收、從類までも絶やするぞ、性根を定め、はや行け。と、せき立てつ詭意に親々の、思ひは千々の胸の中、見えぬ面にも忠と我を、張り詰めた氣のたゆみなく、打連れてこそ出でて行く。誠に秦の趙王が、馬と戦く小男鹿の、大鹿の風勢ぞ類なき。かかる所へ中門より、おひらく、驚け入る騎武者、薄汗流と呼ははつて、御白洲に頭を下し、河内國に武智郡司安彦、先帝に味方をして大鳥の翼に籠りしを、官軍破らす馳せ向ひ、敵を攻め付け一晝夜に落城、大相に安曇の文次宗秀、常陸の邊に陣を取り、南部を攻める其の結構、馳せ向うて馳せしに、味方の官軍利を失ひ残らず敗北仕る。と、息つき致へす言上すれば一ハ、
、物數ならぬ逆徒の奴輩、朕馳せ向うて徵虜にせんぞよ、其の松王が龍馬に勝れし希代の名馬、吉野の牧より狩り出したる、其の馬引けしと、廣庭へ引き出させ、棚より、ひらりと打乗り、名馬の勇み、手難かいくり、しとノ、ノ、響の音はりん／＼りん、騎言誰か背くべき、大地狭しと馬上の勢ひ、刻む蹄も街の御、いぞふれ、やつと出陣の、駒を早めて三重驅けり行く。古の神代の昔山跡の、國は都の始めにて、妹春の始め山々の、中を流る、吉野川、鹿と芥も花の山、實に遊ぶ歌人の、言の葉草の捨て所、妹山は、大家の小栗國人の領地にて、川へ見越し山下鎮、春山の方は、大判事清澄の領内、子息清龍日外より、爰に勲氣の山往居、伴ふ物は葉立ち鳥、雀と我と只二つ、経讀む鳥の音と澄みて、心細くも哀れなり。頃は彌生の初

あつた、此方の亭には雛鳥の、氣を癒めの雛祭、桃の餅の供へもの、萩の鹽蔵總の、小菊結便が配膳の、腰もすうはれ春風に、梅の楊枝はし近く、「オウ小菊いつものお雛は、御殿でお祭りなされるれど、姫様のお装置で、此の山峯の假座敷、谷川を見晴らし、櫻の見飽き、雛様も一入お雛が晴れてよからうの。此方も追つつけ好い御持つたら、當住あの様についついて居たら嬉しかる。」「フウ桂便の何言やるやら、何ほ女夫並んで居ても、あの様に行儀に異まつて許り居て、手を振ることさへならぬ、窮屈な契のはいや。野心の寝る時は、離れくゝの箱の中、思ひの絶える間は有るまい」と、仇目々も雛鳥の、胸にあたりの人目せく、幸い感路の其の中に、親とくは言ふより、御中不和の間と成り、違ふ事さへも片締の、結ばれとけぬ我が思ひ、思しゆかしい清和様、此の山の東方にと、聞いたを便り母様へ、お願ひ申して此の假屋、御前が見たさの出養生、夏までは来たれども山と山とが領分の境の川に隔てられ、物いひ交す事さへも、ならぬ我が身の儘ならぬ、今は申々思ひの種、寧ろ隔てて戀ひ作ぶる、逢はれぬ昔がましぞかしと、切なる思ひかきくどき、或はば共に逢ども、「お道理でござります、眞にひよんな色事で、御同士の紀伊國大和、御領分のすり合ひで、お二人の親御様はすれすれ、雛様と久我様の、妹君の中を引き分ける、妹山、春山、頼もしくも御法度で、只此の川一つつい渡られさうな物、小菊感路はして見やらぬかに、す、波相な、此の谷川の逆落し、紀州浦へ一つ

てきに、流れて住たら鯨の餌食。したか申し難鳥様、お前の病氣をお案じなされ、此の假屋へ出養生
 させなされたは、餘所ながら久我様に、お前を遣はす後室様の件なお捌き、女夫にして下さりませと
 直にお願ひ遊ばしたち、よもや否とは岩瀬の、渡ることこそならまとも、せめて遠目にお妾をこと、
 障子ぐわらりと縁端に、覗きこほる、腰元共、久我之助はうつゝと、父の行末身の上を、守らせ給
 へと心中に、念彼觀音の經杭、案じ入りのたる顔容、手に取る様に「さうあれ、」机にたれて久
 我様の物思はしいお顔持、お頼がなおりつらん、エ、お傍へ行きたい、コレ爰に居るわいな」と、
 いへど招けど谷川の、漲る音に紛れてや、聞えぬつらさ、「エ、しんき、此方が思ふ様にもない、コレ
 此方や向いて見たがよい」と、あせるお傍に氣の付々「眞に夫れよ、口ではれぬ心の丈、兼て認め
 奥山の、鹿の巻筆封じ文、戀し小石に拵り添へ、女の念の通ぜよ」と、祈願をこめて打つ様、からり
 と川に落流津、波にまかれて流れ行くこと、どんな、心の念は届いても、女力の届かねば、思うた
 ばかり片便り、返事を松浦佐用庵の、石になりとも成りたい」と、平伏す山の甲斐もなき。久我之助
 川に目をつけ、「何處よりか水中に、打つたる石は重けれど、速巻く水の勢ひに、沈みもやらす流る、
 は、エ、重き君も、入鹿と云ふ逆臣の、水の勢ひには敵對がたき時代の習ひ、夫れを知つて暫しの中
 敵に従ふ父大判事殿の心、善か悪かを三つ栢、水に沈めば願ひ叶はず、浮む時は願成就、吉野を徹

の御蔵川、大神宮へ朝拜せんと、柏の若葉摘み取つて、谷を傳ひに來の面、見やる女中が「申し申し、今の小石が居いたか、久我様が川へ下りなすゝ、あの岩角の折曲りが、川端がいつて狭い、幸ひよい逢瀬」と、いふに尋しき雛鳥の、飛び立つ許り振袖も、薫もほら／＼散らす、折から風に散る花の、櫻が中の立姿、しどけ雛鳥と顔合なく、いふ久我様が、なつかしきこと、いふに思はす清船、一、雛鳥無事でと顔と顔、見合はす許り遠隔の、心ばかりが抱き合ひ、我が親をきたてり、甲と清船は、私とお前に逢ひたさに、胸氣といふ立ち、夏までは來て居れど、親の許りの車垣に、忍んで通ふ事は、左様も難し、年に一度は七夕の、逢瀬はあるに此の様に、お顔見ながら逢ふ事の、ならぬは何の報いぞや、妹春の山の中を隔つ、野川に、柏の、顔はあか／＼と目を見やり、明、清船、梅あらば、早渡りたきゆかしさを、胸に包み、道草々々、我々心は雀も立ち、此の川の法度敷きは、種々の不許りでない、今人鹿世を取つて君臣上下心々、鄰國近邊と懸ち、親しみあふば徒黨の企てあらんかと、互に通路を禁めて、船を留めたる此の川は、自分ながら親類と同然、企てにあらな／＼又逢ふことあるべきぞ、今流したる水の柏、流に、とれて浮みしは、心の明かりなりとて、人鹿が控へしければ、我々世上の御方にて、此の山更の隠れ住み、心の邊に「風の、日は同じども雛鳥の、雲首を慕ふ身の上を、思ひやうとれる雛鳥」と、他ならぬ世を恨み泣き、「又逢ふ事あらうと

は、別るゝ時の拾遺、縦ひ未來の父様に、御勘當受くるを、私やお前の女房ぢや、とても叶はぬ浮世なら、法度を取つて此の川の、早瀬の夜も眠ふまじ、何國如何なる方へなと、連れて退いて下さんせ。私はそこへ行きまふ。と腕に預び込む川岸に、閑草に驚き留むる腰元、「イヤノ、放しや」と泣き入る娘、「ヤン現慮より難鳥、山川の此の早瀬、水練を得たる者だに波り難き此の難所、忽ち命を失ふのみか、母後室に救きをかけ、我にも彌憎しき懸る、科を重ねる道理、必ず早まり召されな」と、制する詞一筋に、おもひ詰めたる女氣も、今更弱る折こそあれ、「大判事清澄様御入りなり」と、しらする聲、はつと驚き久我之助、歸るや名残、押しとむるも、我が身を我が身の儘にす、「コレなう待つて。」の聲許り、「後室様御出で。」と、告ぐる下郎に爲方も、なくノ、魔の打差れ、登る坂さへ別れ路は、万難所を行く心地、空にしられぬ花雲り、花を歩めど武士の、心の輪廻刀して、削るが如き物思ひ、思ひ逢瀬の中を襲く、川邊傳ひに大判事清澄、此方の岸より太宰の後室定高にそれと通分の、石と意地とを回ひ合ふ、川を隔てて、「大判事様、御役目御苦勞に存じます。」と、聲響を掻取りの、夫の速、救さぬ式禮、清澄も一押し、「早かりし定高殿、御前を下るも一時、参る所も一つなれども、此の存山は身が領分、妹山は其許の御支配。川向ひの喧嘩とやら、観み合せて目を送る此の年月、心解けるか解けぬかは、今日の役目の落去次第、二つ一つの敕命、狼狽へた捌きめあるな。」と、向くし

やつゝ街道、脇へかはして、仰せのとほり、入喜様の御詔意は、お互に子供の身の上、受合うては歸りながら、身腹は分けても、心は別々。若しあつと申さぬとき、マアお前にはどうせうと思召す。「知れた事。御前で承つた通り、首打ち放す分の事さ。不所存な体はあつても益なく、さうて事かけず、身の中の腐りは、殺いで捨てるが跡の養子。畢竟親の子の名を付けるは人間の私、天地から見る時は、同じ世界に涌いた蟲、別に不便とは存じ申さぬ。」ハテきつい思し切り、私に又いかう料間が違ひます。女子の未嫁な心からは、我が子が可愛うてなませぬ。其のかはりに、お前のお子息様の事は眞實何とも存じませぬ。只大切な貴方の娘、忝い鹿様のお聲の懸つた身の幸ひ、縦ひ如何申さうとも、母が頼め入内させ、お后様と多くの人に、驚ひ傳かさうと、思へば此の様な嬉しい事はござりませぬ、さ、さ、さ。」と空笑ひ。「ム、シテ又得心せぬ時は。」「ハテそりやもう且非に及ばぬ、枝ぶり悪い欄干は、切つて欄干を致さねば、太宰の家が立ちませぬ。」「さうさう、切つてしまふ。此方の体とても得心すれば、身の出世、家柄、貴方が此の一枝、川へ流すの如きもの、ながらに流るゝは古来有。花は散らして枝許に漂るゝならは、絶命とおもはれよ。」「さう、此方の一枝、娘の命活花、散らさぬやうに養ひて置く。さうして、今一時の難境は、貴方の國境は生死の時、返りて貴方に使つて、遺恨に遺恨を重くせず、さうして、貴方を流して、中吉野川と

落ち合ふ、先づ其れまでは雙方の領分、お捌きを待つて存ります」と、詞づつ親と親、山と山、路分れても、替らぬ紀の路恩愛の、胸は胸に埋ちみし、庵の内に別れ入る。玄派に言ひは放しても、定かに知らぬ子の心、覺束なくも呼子鳥、娘々と谷の口には、音なふ初音羅鳥も、母の機嫌をさし足に「母様ようぞ、今日はお日出度う存じます」と、武家の行儀の三つ指に、堅い程猶親子の親しみ、才能う飾りが出来ました、今日は其方の顔持ちも、よさうで一人目出たい、母も祝うて獻じ、此の花供へて、幾年になつても、雛祭は嬉しいうもの、女子ども何なりと、娘が氣に合ふ遊びをして、随分と勇めてくれ」と、いつに勝れし後室の、機嫌は訴ふの好い出し、今のをちつと乗り出して、御覽じまさと腰元に、腰押されても免や角と、いひせ、くれの連れ髪「イヤなう羅鳥、吞たけ延びた娘を、親の傍に引き付けて置くは、結句病の種、夫れで急に思案を極め、和女によい殿御を持たす、嫁入さすが嬉しいか、エ、ハテ氣遣ひ仕方な、可變娘の一生を任す夫、和女の氣に入らぬ男を、何の母が持たさうぞ、ナア腰元ども」「ハイ、左様でござります、御氣の通つた後室様、嫁入の先は大方今の、焦るゝ君でござりませう」と、押し推當てども得手勝手、誰にも縁を組紐に、胸は眞紅の塞がる箱、取り出し、妹背をならぶ雛の日は、嫁入の吉日、此の箱の主は極まる殿御、雛の御膳で夫定め、「コレ和女の夫と云ふは、誰あらう、入鹿大臣様ぢやわいの」「エ、そんなら私に嫁入さす

卷之二

夫れでこそ貞女なれ、馴れぬ雪居の宮仕へ、武家の娘と笑はれな。今日より内裏上臈の、髪も改め、べらかし、朝うて母が結び直してやりましよ。と、いそ／＼立ち立ちながら、娘の心あらひやり、別れて櫛のほかなさも、解きほどかれぬ憂き思ひ、重き春山の櫛の内、父か前に請入て、久我之助が心底、聞召し分けられ、切腹御赦免下さること、身に取つていか許り大慶な極いと、手をつけば、黙然たる大判事、奥うお潤む目を聞き、「今朝入鹿大臣、此の大判事を召し出し、先帝寵愛の采女、身を投けたりと偽り、其方が倅久我之助、人知らぬ方へ落としやりしに極まれば、必定、汝らが方に匿まひあるべしとの難題。元來知らぬ大判事、よく／＼思へば、采女の御難をさげん爲、鎮澤の池に入水の體にもてなして、密かに落し参らせしは、中々久我之助が智慧でない、鎌足公の指圖を受けての計らひと、知つたる身も今日が始め。親にも隠し包みしは、大事を洩らす心金の打。若輩者には神妙の仕方、ハ、ア出かしたりと思ふに付け、邪智深き入鹿、久我之助が降参せば、命を助けん連れ来れと、情の詞に釣り寄せて、拷問にかけん謀。責め殺さるゝ苦しきより、切腹さすれば、采女の言議の根を斷つ大功。天下の主の御爲には、何倅の一人など葎に生ふる草一本、引きぬくよりも瑣細な事と、涙一滴こぼさぬは武士の表、子の可愛うない者が、凡そ生ある物にあらうか。餘り健氣な手に馳づて、親が介錯してくれる、侍の綺羅を飾り、いかめしく横たへし大小、倅が首を切る月とは、五十

年来知らざりしと、老の悔みに清瀬も、親の慈悲心有り難涙二筋二つ有るならば、君には死して忠義を立て、父には生きて養育の、御恩を送り申さん、今生の残念はれ一つと、頭を見上げ見下して、わつと平伏す親子の感、此方の亭には母儀室、さうく目出度い、和女の名の雛鳥を、其の儘の内裏雛、装束の付け様も、此の女雛と見合はせて、さうく早うと有りければ、雛のしげにうち守り、女夫一對何時までも、添ひ連れること願ひ、思ふお人に引き離され、初聚しるの女御后、夫の組の十二重、雛の姿も恨めしと、取つて打ち付け雛板に、こゝろと落ちし女雛の首、驚く母の胸板に、必死と僅まる雛の命、包めどせうくるじらく涙、娘入内さまというには隔ち、先づ此の雛に片切つて渡すのぢやないなうと、そんならほんたうに親女をさして下さりですか、と、赤い有り難いにと、伏し拜む手を取つて、その入内さまに死ぬるひを、女雛に曉しがる、雛の心しらいでなうか、あつと受けても目害して、死ぬる愛情は知りながら、其方の死ぬる事聞いたら、思ひ合ふに久我之助、共に自害召されうと知れぬとせめて一人は助けたさ、一見得心もたにして、母が手づから解いた髪は、下げ髪ぢやない、成敗のかき上げ髪、介錯の支障なないの、高いも卑いも御前、の、夫といふは只一人、親にはい玉の雛、何の思も曉しかみ、説きこさせね、心許うに久我之助が宿の妻と思つて死にた、と、是れ程に思ふ中、一日半が添はしものとす、實の両原へあるかいのこと、

引き寄せ、雛鳥も、膝に取り付き抱き付き、赤々と啼しさと、逢うて別る、名残の涙、一つに落ちる二つ瀬川、川を隔てて清緒が、最期の観念思ひれず、焼刃直なる魂の、九寸五分取り直し、腹に貫つと突き立つる「ヤレ暫く引き廻すな、覺悟の切腹せく事はない、コリヤ雲土の血脈、讀みさしの無量品、親が讀誦する間、一生の名残、女が面一目見て何故死なぬ」「い、存じも寄らず、此の最期に及んで、左程狼狽へた未練な性根はござりませぬさながら、今はの際の御願ひ、私相果てしと聞かば、義理に繋かれ雛鳥も、共に生害と申すべし。さある時は、太宰の家も斷絶、暫くの間ながら、切腹の儀はお隠しなされ、降参承知致せし體に、後室方へお知らせあらば、女も得心仕り、入内致せば渠が爲、不義の汚名は受けたれども、是れぞ色に迷はぬ潔白」「オ、出かし、能く氣が付いた。年來立てぬく武士の意地、不和な中程義理深し、命を捨つるは天下の爲、助くるは又家の爲、氣遣ひせすと最期を清う、花は三吉町侍の、手下になれ」と潔く、いへど心に亂れ咲き、あたら櫻の若者を、ちらす惜しさと不便さと、小枝にそ、ぐ血の涙、落して波間に流れ行く。夫れとも知らず悦ぶ雛鳥「アレノ、花が流るゝは、嬉しや久我様のお身に恙のないしるし、私は雲土へ参じます、千年も萬年も御無事で長生遊ばして、未來で添うて下さんせ」と、心でいふが暇乞「思ひ置く事、言ひ置く事、もう何にもござんせぬ、片時も早う。サア母様、切つてノ、一と身を惜しまぬ、我が子の

覺悟に醒まされ、胸を定めて取り上げれど、刀は常に續け付く如く、離れかねたる血筋の繼、今切り
殺す難易を、無事としらする返事の儀、同じく川に浮ぶれば、刀は離れや、是れを離れ入内の知ら
せ、久我之助が心の安堵、采女の方の御在處は、最前申し上ぐる通り、此の世に心残のな、御持
ながら御介錯に「アア」と母様切つていの、未練にごさへ付懐こと、泣かぬ顔するにあらし、刀
持つ手も大勢石、思ひは同じ大物事、子より親の四苦八苦、命もあきらみ、目もあきらみ、アア左
様おや、早西に入る日輪は、娘がぬ迎へ、彌陀の東迎、西方諸土へ尋ね給へ、南無阿彌陀佛と願を
願ひて、思ひ切つたる首諸共、わつと泣き答ふる所、肝に徹して大物事、刀がら外と落ちたる所、
「アア彌陀が首割つたか」「久我様は親切つてか」「アアアアななり」と、どうとせし、情なく泣くも
一時に、果れて何もなかりし、情ありて定見を上げ入道と仰へ給ひし、此の機は、御機嫌受
取の下つれど、理はばる學を吹き送る、風の業内に大物事、駄馬の姿改めて、衣紋結ひしづく
と、おりとつ川邊の柳腰、娘の首をかき抱き大物事、わけては肝にも申しませぬ、御子息の御命
は、どうとせし甲斐もない、あへない有様、お氣様の心も痛く泣いて居ります、此の世に離れ
ぬ御命、思ひ合つたが故の因果、此方の娘も、泣きたいと思ひ死、御持不意に許します、是れ
て久我之助殿の思ひる中に、此の首を其方へお渡し申すが、胸を離れりさす心、この上なく、離れ大

和壇は犯伊賀、妹背の山の中に落つる、吉野の川の水杯、櫻のはやしの大詰臺、日出度う祝言さしませうわい。」「そんなら是れまでの心もとけて。」「ハチ互に體同士。」「エ、忝い。」と悦ぶも跡の祭、眞に存たけ延びた者を、何時までも子供に思ふ様に、思つて暮すは親の憤ひ、甘やかした雛の道具、一人子を殺して何にせう、跡に置く程涙の種、腰元ども其の一式、残らず川へ流れ澤原、未來へ送る嫁入道具、行器、長持、大張子、小袖簞笥の幾帳も、而ながら居るならば、一世一度の贈物、五丁七丁結く程、美々しうせんと樂しみに、思ふた事は引きかへて、赤になつたる水葬禮、大名の子の嫁入に、乗物さへも中々に、記念も仇の爪夢に、首取り乗する弘誓の船、あなたの岸より彼の岸に、流る血汐清船が、今際の客顔見る親の、口に祝言心の謬名、千秋萬歳の千箱の玉の緒も切れて、今はあへなき此の死顔へ生きて居る中此の様に、婿よ嫁よと言ふならば、いか許り悦ばんに、領分の遺恨より、意地に意地を立て通す、其の上重なる入鹿の疑ひ、中直るにも直られぬ、義理になつたが二人が不運、あれ程思ひ詰めた誓、何の入鹿に従はう、とても死なねばならぬ子供、一時に殺したは、未來で早う漆はしてやりたき。」「言ひ合はさねど後室にも、是れまで不和な大事事を、姫と思召せばこそ、倅に立てて、一人の娘、オ、よくこそお手にかけられし、過分に存する定高殿。」「ア、勿體ない、其のお禮は彼方此方、不束な娘故、大事のお子を御切腹、器量筋目も勝れた殿御、夫に持つた果

第四

引いた、お、引いた、オット女月七日例年の、水を新井に繰返す、釣瓶の綱も三輪の里、酒高賣の世移屋が、身過ぎの水の内井戸を、わけて祝ひの賑しき「サアノ、清んだ」と取りノ、に、御酒は、本銀へ物、皆々汗を入れにける。主の母は嫌口より、はこぶ用意の酒肴、いつにないじやノ、機嫌、近所の衆、どなたも大儀でござんした、嘉例の通り酒盛して、暮れるまであつくりと、遊んでいんで下さんせ。コレ土左衛門さん、年かきにお前から、酒始めて下さんせ。「ア、又難作な、止しにさんせいで、俺らが相借屋で手傳ふのも、年中爰の井戸の水をつかふ恩返し、なう五洲兵衛左様ぢやないか」「ア、さうともノ、氣をはつて貰ては舊ない、是れからは常もの通り、賑やかに遊びましょ。サ、野平藤六、賑ごぞやノ。」「ホンニそれは左様と、コレ内儀さん、見れば爰にも寺屋の様に、七夕様が祭つてあるな。」「サアノ、マア見て下さんせ、爰だてないと思はんしよが、こちの娘の「アお三郎、何やら星様に願ひがあるとして彼のやうに、内で祭も色々の供へ物、ままた世界ぢやないかいな。」「ア、そりやマア奇特なこつちや、そして此のお娘は留守かえ。」「アイ小さい時往た寺子屋へ、七夕に呼ばれました。」「サアノ、一つ飲んで下さんせ。」「ヤイ子太郎、酌をしをらぬか、どやや

ねと御意の通り」と、我が家へ入るを告ぐが、「さ、これ／＼、さう持たんで、けふはコレ迄の
 井戸がへ、相傳屋が寄つて居るのに、こゝに様許り来すに居て、交際が済むのかえ、但しはおいらを潰
 すのか」と、頭寄臺前に来馬は胸り、上唇口に兩手をつき、「是れは／＼、お頭を見れば皆合璧のお方
 が、この井戸がへり下り、骨もつて私存せり。是れと申すも不案内から、先づの作法を存せし、
 段々の実説、是非御教免下され。」と、壁に額すり付ける。「ア、これ／＼、又仔細らしい事は、そ
 いの、い、勝手を知らにやしよことがない、糾紛せいなら夫れで済む、此方も一番いうた跡は、そ
 いごごはなやわいの。此の土左衛門が吞へこんだ／＼」然らば貫下様のお執成しで、全様に御教
 訓なされた上は、そのいごごととやら申す、御遺恨はござりませぬかに「サアもうよい言はんすな、
 叔父らは餘程酔うて居る、これからは腐例の騒ぎぢや、調子が合はいで面白ない、此の石できつと
 やらんで。」一ハ、悉うはござりますが、私一満もたばませぬ。「オットそしたら勝手次第、サア
 是れからが騒ぎの趣向、此の土左衛門に烏帽子屋敷、五洲兵衛に子種の手太郎、しめて四人の大踊り
 三味線太鼓は野平藤六、よい／＼、求馬様も合點か。」「スリヤ私にも其の踊を。」「オオイノこな様は
 此の借屋での新面、蟻踊らにやならぬわい、音頭も俺が二役ぢや。」「音頭ヤア千代の始めの一踊り、先
 つは松坂こえたえ、松坂こえたやつさ、踊はありや／＼ハッハヨイヤサ、烏帽子屋敷はもじ／＼と、

手持不沙汰に搦鳥帽子、ヤツト云、この頃の柳さび、ひつ立鳥帽子と折りかけた、ヤツトサ、風折
鳥帽子見てもして、紙糊鳥帽子と歸るゝ、ヤツト云、家主も兵衛いづきでま、いかに嘉例の祝ひ
でも、餘り騒ぎがかさ高なと、門目から露筋に、喚いてはひれど、いかな事、耳へ入れず、ヤツト
サ、ソレサマサ、多分長瀬叶はず、とゞくに、叫ぶ調子拍子つき、ヤツト云、此の家主を始にし
て、酒を飲めとも言にはこそ、ヤツト云、已算許り飲み喰らひ、近頃情けはぬ人過ぎ、ヤツト云、此
れ程いつでも聞き入れにや、家明けつけろか合點が、ヤツト云、合點その、是れを来で見よかしといふ。
お家主良しと云、頗る拍子の酔ひ惚道、夢中になつて立ち廻る。家主縁にとほみとなりつて、おそた
いとこい祝ふ、たうとう俺まで夢中にした。夢境内にや、地獄にいゝゝ、いふ御問いて地のよりいふ
まこれはヤアお家主様が、アノ子太郎様、此方がお出でなされたなら、初はおれに知らせをくれといふ
アニ言はなすべから、おのお家主様も、いふまゝで同じ様に廻つてあつた物に、又づけくといふ何かが
ある。サアア、申し、なんぞ御用でござりますか、い、川もとろ、大事の用、其のお借一帳とあれ
だが、入鹿様の言付けで、コレ御呈といふ和郎の息子、決断、方々流浪して居るのを、それを足付は
出した大金、利でんとエ取方へござれ、とつてりと這うて歸らせ、オアそれ一つと云ふ、いふ一冊ハ
ハイ、く、そしてなお前へ参りませう、ヤメテ、子太郎、オア、いふいふしらなべて来た、と云ふ

が暮れたやうな、火も消して見世明けい、用心に氣を付けい。又此の娘は寺屋から戻りが遅い、ソレ
 酒宴が来たら置き出せ、源人が来たら泊はかつてやりをれ」と、氣の急ぐ儘に間違ひだらけ、打連ね
 てこそ出でて行く。日と共に營々ほろ人相の、四方の市廛戸鎖し時、子太郎跡を打ち見やり、娘を上
 け、表の戸、夜の間へをここにと、此方の邊より歩みよる、振の節の香やことなき、面を隠す組か
 づき、藤白川の怪姿、窺ふ内に郷の軒、知らせのしはぶき主の求馬「今宵はどうして早かりし、ア
 リア此方へ」と其の跡は、言はず語らず手を取つて、戸口立て寄を入る跡に、子太郎は不審顔、郷の
 門口耳をあて、聞き済まして立ち戻り、「何でも郷の烏帽子奴は、おれとは違うて、よつほど優しい色事
 師ぢやない、彼奴が見事な烏帽子で、アノ代物占めをると聞えたり。こちのお嬢に聞かせたら、大抵の
 ことぢやあるまい、エ、はし早い奴ではあること、はく所へ娘のお三輪、寺子屋戻り足早に、門口這
 入れば、お三輪さん戻らんしたか、アノ事ぢやノ、ノ、太事ぢやノ、一す、彼の人わいの、
 何ぢやない、私に憐れさしやつたわいの」「さしやつたわいの、さしやつたわいの所かいの、コレお
 前に忠義をいうて聞かす」「忠義とは何の事ぢやないの。」「エ、忠義とは忠臣の事ぢやないの。」「其
 の忠臣は知つて居るがの、夫れがどうぞしたかや。」「其の忠臣は、アノ郷の烏帽子奴がな。」「郷
 の烏帽子とは、ム、求馬様の事かいの。」「一す、求馬々々、其の求馬の姿からおこつた事、こちの内儀

様は、家主殿へ用が有つて、いかしやつた其の跡へ、何ぢやかしらぬが、眞白な絹をかつぎ、幽霊か
と思うたら美しいけん妻が、鄰の門口こと／＼と叩いた。そしたら求馬様がつつと出て、よう早う來
たナアと、手に手を取つて内へはひつたり夫れから俺がちつとして聞いて居たら、コレこちへ雇ふ男
どもが、朝の間に酒桶洗ふやうに、シー／＼といふ音がした、どうでもありや求馬様が、竹影で擦る
と見えるわいな、サントおこめ様、コリマだまつて居られまいが「ふ、そんな何といやる、求
馬さんの所へ、美しい女中様が見えて、其の女中様を連れ立てて、はひらしやんしたと言やるのか。」
「イイこゝ」そりや、合點のいか事、幸ひか、様も留守なれば、其方往て求馬様を、安へ連れて戻
つてた。サント合點、香込だ、と、走り出でて鄰の門、破れる許りに打ちた、き、コレ求馬様
の酒屋から使に來た、今が猶んだら、印判持つてこへせ、と、口から出次第、求馬は驚り、何
やらんと立ち出づれば、物をらひはす「マア、其方へ」と無理やりに、手を引連れて我が家の内、
夫れと見ろより嫁のおく輪、口にはねど赤らむ顔、求馬様お尋なされたか「是れはア、お二
輪様、お屋にお出でなす、たけな」と、庭に味な果付き、子太郎が手つ取つて、俺が横にさう
是れまで、さうへ何かの立てのきつても、愛して我ら絆を通し、夜食の扶持にあつたが、兩人とも
後に逢はう、と、酒桶を走り入りける。跡に二人はつぎはなく、おは子守の氣に、思ひ詰めた

る一と筋を、言はうとすれば胸せまり、「今千太郎に聞いたれば、美しい女中様が、宵からお前へ来てぢやけな、定めてそれは隠し妻、是れまでお前と私が中、逢ふ事さへもたま／＼に、千年も萬年も、かはらぬ契りとおつしやつた、その約束は偽りか。浮世の譯も辨へぬ、在所育ちのわたしでも、いひかはした事忘れはせぬ、あんまりむごいこと取り付いて、涙さきだつ恨み言、「是れは思ひも寄らぬ疑ひ、成程女中は来て居るが、あれはツレ春日の平子殿、其の連合の禰宜殿の、烏帽子を脱へに見えたのぢや、美女はおろか、いかな天女が影向あつても、外へ散る心はない、和歌三神を誓ひにかけ、偽りは申さぬ。」と、時の間に合ひ落著かせば、有繋おほ子の解けやすく、「神様まで誓言に、夫れでわたしも落著いた、必ず變つて下さんすな。」と、立ち上つて七夕に、供へ祭りし二つの緒環、持ち出でて前に置き、「わたしは寺屋へ往た時に、お師匠様に聞いて置いた、殿御の心の變らぬやうに、星様を祈るには、白い糸赤い糸、緒環に針を付け、結び合はせて祭るとやら」「す、夫れが則ち、願ひの糸の乞巧針。」「ム、お前も能う知つてぢやナア、白い糸は殿御と定め、女子の方は赤い糸、それでわたしも此の願籠め、寺屋で見た本の中に、心をかけし女の歌、ア、何とやらす、それよ、戀ひ渡る思ひは千々に結ばれて、幾夜願ひの糸の緒環。」「ホ、其の男の返しには、逢ひ見ての後も願ひの糸筋を、よそへ觀すな君が緒環。」「アイノ、さうでござんした、何時までもかはらぬしるし、赤い糸をお前に渡

し、白い絲を私が持ち、契りもながき願ひの絲に夫婦の約束星合に、體ならぬ諸環を、千代の媒介
取りかはし、肌につき合ふわりなき赤祿、求馬が内より以前の女、歩み出でてこなたの門口、歸の鳥
帽子折返は、こなたへ来てござるかな、救さつしやれ」と内へ入る。妾に求馬は手持不渉、お二輪
は何い氣も付かず、「ア、彼方が今のお人か。」「オオノ、それノ、神子様ぢや、それで薄衣皆でござ
る。ナア申し、お前様は、アノお連合様の、烏帽子を脱へにお出でなされましたのぢや、左様で
ござりませうがな。」「ア、さうでござります。」と、袴から包む調の絹を漏る、月の笑顔をひん
とみ、二コレ申し求馬様、アノ女中はお下婢か何人でござります。」「ア、是れは此の清星の裏御二
ム、其のママの裏御と、最前から久しい間、何の用がござりよした。」と、問はれて求馬は答へも
なく、うじつく素振見て取るお二輪、「ア、申し、神子様とやらいふ女中様、人をマアお下婢かの何
のと、ひつこなした物の言ひ様、求馬様にはア、私が用がたふんござらん。」お前のお世面にはな
るまいし、構うて下さんすな。」「ア、是れははしたない、其の様に言はしやつて、其文字の用
を聞く、求馬様ぢやないわいなう、アとお歸り、と手を取れば、お二輪が隔て、「イエくく、わ
たしが未だ用が有る、往なす事は成りませぬ。」と、ア妾には置きは、邪魔とぞとぞ通しや、
と、手を引つ立て立ち出づれば、イヤ放さじとお二輪もまた、あなたへ引けばこなたへ引く、清も清

に感れる際、袖ふり袖ふり分け姿、戀を争ふ其の折から、いさせき戻るこの家の母、一々求馬殿、此方には川が有る、何處へも遣る事ならぬ、動くまいと身構へに、何かは知らず白組の、髪は外へと出で行くを、とめる求馬に又すがら、娘を押し分け母親は、求馬やらむと引きとめ、繋ぐ手と手を櫂の、風に揉まる、争ひに、千太郎立ち出で見まはして、これ幸ひと母親の、帯に縋り掛つた、縋先を袖の唇口に、結び付け納戸へ連れて入る。此方は互に感ひ慕ひ、姿亂る、事百合の、手を握りきれば一時に、亂れて走るを母親が、遣らじと追へば繁多繩、りきむ拍子に唇口抜け、酒は龍津瀬横りはいまう、三人門へ遅れじと、同じ思ひを跡や先、道をしたうて

道行戀のをたまふ

吉戸隠れし神様は、誰と寝して常闇の、夜々毎に通ひては、又歸るこの道もせぬも、夫れも何故戀故に、變る、所體耽かしと、佛隠す薄衣に、包めど香り橘麝、思はぬ人を思ひ侘び、心いたけをくどけども、つれなき松の下紅葉、焦れて絶えん玉の緒も、殿故ならば捨草も、暫しはいこふ芝村の、賤の男が、明置き手拭で、忍び／＼の出逢ひ妻、晩にござらば、ナコレのんやほんにさ、背門の櫛の木、枝こえて、連理を契る言の葉は、それも戀中こゝはまた、寄申村よ一森の、長者が跡と名にひき、釜が口をも出離れて、歩むに暗き吳竹の、茂れる申を、分ける行けば、葉毎の露がほろ／

と、ほろ、打つなる鎌子の聲、思ひ比べていとかなは、心ほそのに立ちあつくす、憎や案山子に嫉さるる、我が姿にまた仏ちて、はつと立ち行く羽風につれて、ちのちのちるや柳木、流る、水に樹ぬれて物思へとや帶と付の、里義よし自らに、終に一度の情さへ、ないし身を知る涙雨、布留の社の御前の影か、松の木の間にちちくくんと、見まつ隠れつ歸るさの、跡を承馬が登り来て、互にはたと行き合ひ、星の光に顔と顔、や、戀人が河故に、又えて跡を追ひ鳥は、よしや柳の契りをも、叶へてやろとお心ごと、胸にはいへと詞にけ、おんはゆ風の袖几帳、成程切なる心さし、肩に思はじきかなから、左様、こから、廻路にて、武をば何と鳥羽玉の、幾許なる通ひ路は、いとふしななり名所を、問いたる上はこなたより、二世の聖めは朝ふ事、明さされたよと只言に、と流れて道にも恥かし、あてあまれる浮身の上、語るにつとき葛城の、夢の白雲あるそとも、もだかみたるさる娘の女と、思つて深い疑ひの、雲をはらして前もか、思ひとはりして給はらば、どんな仰せを背き、い、假し草菓の露霜と、消えても何と恨やせぬ、これ程思ふに別戀な、とけぬお前の心は、あんなに結ぶの神様を、朝と通した咎めかや、つれなの君やと恨みわね、思ひ亂る、傳はけ、夫れとおと二處は走りぬへ、中を隔てて立つ橋、立ち退く鉄引きと、あ、い、問えませぬ承馬様、そ、そ、氣の多い悪作な、そとや二人が馴れ初めは、始めて三輪の過ぎし夜に、東越しの月の佛は、お公家様やら、侍様やら、知

きあれ彌藤次殿、我が君此の殿へ御移り見え、物の音近く聞え申す、「いか様左様」と威儀つゝ、
 ひ嚴重にこそひかへ居る。花に暮し月に明し、酒池の遊びに酔ひつかれ、御殿々々の通ひ路も、数多
 の官女が道樂に、君の機嫌を鳥甲、調ぶる笛や、簫筆策、太鼓の音も鶏徳に、己が不徳をおし登る、
 綾織の深縁、蜀錦の褥の上、わんすと坐せし有様は、實に類なき榮華の殿、々々彌藤次頭をさし、「先
 だつて朝上雲客達より、君の壽を祝し申されし數の鳥臺、ソレ女中方、叙覽に供へられし、
 答へて持ち出づる、思ひくの飾物、何がな君が壽を、祝ふ鶴龜松竹の、影は千尋の深縁、松と鶴
 龜合はせて見れば、一萬二千の齡を君に、譲り壽く逢葉山。扱又次の鳥臺は、朝の帝の安、假の情
 の菊草、實に寵愛の色菊や、葉毎を染めし其の筆の、命毛長さ八百歳、老いせぬや／＼、葉の名も
 菊の酒、酌めども盡きぬ泉の壺、殿上人の方々より、御祝儀なりと相述ぶる。一入興に入鹿が悦び、
 「オ、百司百官より、下萬民に至るまで、我が在位長かれと願ふ事、名々が身の冥加なれば、猶萬歳
 を唱へよ。」と高慢我慢の詔、はつと兩人階下に平伏し、「我々は申すに及ばず民百姓も、野に手を
 拍つて舞ひ樂しむ、誠に戸ごごぬ御代と申すは、今此の時に候。」と、歳多に追從狸々、人影に
 見惚れ官女達、「コレ／＼此の程々が手に持つた、酌杯も取り外し、壺には誠の造酒を湛へて、是れで
 御酒宴始めうか。」「いか様大れは能い御慰め、サア／＼早う」と取り／＼に、手まづ遮る杯の、廻れ

やめぐれ萬代も、盡きじ盡きせぬ歡樂の、興を催す。其の所へ、「物まう頼みませう」とどつちやう
峰巒巒頭の大男、御殿間近くほか／＼／＼、著たる木綿の長社袴、潮しやきばつて立跨かり、
「エ、入鹿殿は爰ぢやな、内になら逢はして下んせ」と、木で鼻括るむくつけ詞、富越、荒巻、目に
角立て、「マア何奴なれば、君の御前とも憚らぬ馬鹿者め、退去りをらう」ときめ付くる。「イヤ俺や、
難波の浦の鑓七といふ頼引でござんすが、何時やらから此方の方へ、宿替してござんしたお公家殿、鎌き
りの大臣から、解はれて来た使でござんす」と、いふを遙かに見下す入鹿、「ハハハ心得ぬ、其の鎌足めは
首陽山の昔を學び、跡を隠せしと聞きしに、叔は難波の浦に有りけるよな。普天の下率土の濱、王地
にあらずる所なれば、今日まで飢えにも飽まず、健闘にをりしは我が恵みならずや。夫れを思はば
疾にも参り思を斷すべきの理、使を立てしは誠意なり」と、それ、俺が願つた事がいひ、斯う見た
所が、よつ程短氣者ちやわいの。解し喧嘩はこなんの様につつきでわくのか徳ちや、鎌きり一丁は言
ひかゝりて、てつばつて見ようと思はれたさうなが叶はぬや、どうぞ俺に往て挨拶してくれてて、
夫れは／＼きつい弱りいひ、大概な事なら、最う甘んじてやらんぜ。然中は何て心安立て、間違
ひが有るものぢやてなう。コレ中直り叩ちやてて、きつ一升あこされた」と、刃の穂緒にぶら／＼
と、結びし徳利盃度目を付け、「いまだ日本へ渡らぬ兵器、唐土に有りて聞くと、此道具の類なるか。何に

もせよ、怪しき物を所持せしごよ、旁油斷致すなと、眉を蹙めて身構へたり。「エ、とつけもないとつくりと見やんせ、酒ぢや／＼。コレ其處なお手代衆、早うコレ、それ進ぜさんせ。」「イ、ヤ善悪しれざる鎌足より差し上げし酒ならば、毒藥仕込みあらんもしれず、奉ること罷りならぬ。」「エ、まはすわ／＼、どれ俺が毒味してやろ、茶碗はないかい、そんなら赦さんせ、直やりぢや。」と、言ひつゝ、徳利の口から口へ、よい酒ぢやになあ、是れを飲まぬといふ事があるかしらぬ。」と、振つて見て、「ヤ、ヤア南無三、皆飲んでしもた、エ、ひよんな事してのけた。ヤコレひよつと鎌殿に逢はんしよと儘、おれが飲んだと云はずに、よう屈いたと禮いうて下んせや。」と、我武者な様でも正直者、眞面目になつて氣の毒顔「ア、まだ何やら言傳つて來たが、落しはせぬか。」と、懷探し「オットあるわの。サア是れ見やんせ」と一通を、渡せば彌藤次押し披き「ナエ／＼我不肖たるによつて、暫く心を惑はすと雖も、今一天四海、御手の内に落ち入る事、正しく天の譲り給ふ萬乗の御位、入鹿公に背くは、天に背くに同じと、先非を悔いて、爰に降参を乞ふ者なり。今より臣下に屬するの印、君の齡を東方朝にたとへ、此の桃花酒を以て御壽を祝し奉る。内大臣藤原鎌足、謹んで申す。」と讀み上げ「ハ、、なまくら者の鎌足め、臣下とならんなどとは、イヤしら／＼しき偽り奴。」「何ぢや、鎌殿を驚つきとは、何ぞ慥かな證據がごんすか。」「ヤア小怜しき證據呼ばはり、彼が心腹いうて聞か

さう。「一ドレ聞きましたか。」「先づ此の人鹿を、東方朔に賢へたるが野心の證據。」「そのや又なじよに。」「オ、昔漢の武帝が代に、東方朔といへる奴、三千年に一度實を作る機を、二度盗んで喰らひし故九千年の齡を保つ。此に百の縁をかたどり、百敷百官を手に入れし人鹿を、盗人なりといはぬばかりの底巧み、僧い奴」と居士高、「イヤノ、そのや無理ぢやノ。」「イヤ蛆蟲め、何を知つて小癩奴。」「イヤ何にも知らんけど、代りになつて来た俺ぢやによつて、一番いふのぢや。」「イヤ、鎌足が代りならば、是れをも代りに試みよ」と傍たる烏秦押取つて、肩間へはつしと打ち替くる。秦は微塵に飛び散れど、胸とも動かす。好い加減にだ、けりしやれ、其の巨拂ひの代物、東方朔とやらに賢へたというて、業わかすのか、年に百らんとこそ書いておこしやつたれ、盗人と書いてぢやないぞや。それに其方から、色々な講釋を付けて盗人穿鑿、知つた同士はすゝしいとやらで、盗人の覺えがあるかして今の投げ打ち。オ、此方は正直な人さんぢや、世間の噂、見ると聞くで大きな違ひ、マアそんな盗人と鎌どんを、愚には俺がすまいわいの。仁體にも似合はぬ事さすの、よもや左様ぢや有らまいがの、但し覺えがごんすか、イヤ左様かいの。」と、女官だらけも現はば理窟二軒何でござる。」とやり込むれば、兎智の人鹿も苦笑ひ、「ハテ口がしこく言ひ曲けしな、ういやつ出かした。其の裏美には、鎌足が實否を正すまで、汝は人質、最早籠中の鳥同然、歸る事はならぬと思へ。」ヤヤ

「ア、コレく俺を質に取らしやると、著物や道具と違うて、代物が飯喰ふぞや、併しあの業腹では抵で喰はしをるまい。オ、空腹に今の酒で餘程酔いが來たわい、ドリヤ何處でなと一寐入り、やつてこまそ。」と伸び上り、「エ、腰が重い筈よ此の大小、らつしもない物さしておこしてあた面倒な。」と縁板へ、ぐわたりと鳴るは相圖かと、突き出す槍は篠薄、構はす轉り替枕、不敵なりける男なり。御所より外へ喚き出でぬ、若き兒達が入りかはり、男兒に來る愛想には、お茶よお菓子よ煙草盆、銚子土器持つて出で「コレそこな人は何御用で、お召寄せ有りしはしらねど、さぞ待ち久しう氣もつきさう、九獻一つ」とさし置けば、體寢返り腹這ひに、頬杖つくくうも眺め「フン貴様達は誰ぢや。」「オ、我々は上様の、身近く召さるゝ女ども。」「何ぢや短い女子ぢや、ドレく、成程どれも是れも能う煮込んだ者ぢや。汝らは爰な食焚ぢやな、テモけうな前垂してゐるな。」「エ、つかもないさればみ事、私らを問やる其方の名は。」「オ、鱧。」「何鱧とは。」「ハテ商賣の夜網に出りや、沖でも磯でも行き當りに、よう寐る故に、鱧七といふ漁師々々。」「ヤア料紙とは、何ぞ書いてたものか、それならば、必ず繪や歌はいやぢやぞや。今難波津で持て囃す、歌舞伎芝居の其の中でも、よう聞き及んだ文七や八藏の紋ならば、書いて欲しい。」としどもなき、櫻の局摺り寄つて「さうして下々は、皆其方

綠香山女

と、ちよつとでもごはるかいな、腰骨踏み折り、疝氣の蟲と生別れさすぞ。ヤコレ家來どもさん、わ
る様達も、其の鳥威し放すが最期、取綱まへて首引き抜き、片はしからぬたにするぞ。ヤどりや俺か
ら先へ行きやんしよ」と事もと思はぬ大膽者、胸の強弓矢鏑を、引き明けてこそ入りにける。半來次さ
れば戀する身ぞ辛や、出づるも入るも忍ぶ草、露踏み分けて摘姫、すご／＼歸る對の屋の、障子に
ばらり打つ様、ソリヤお歸りのしらせぞ」と、各庭に集ひ下り、枝折開いて入れ参らせ「おいとし
やおいとしや、御所のお庭の内きへも、竟にお拾ひなされぬに、戀なればこそ徒歩跳、嚙朝露でお潤
もぬれん、小襦に召させかへん」と立ち寄つて、「ヤアお振袖に付いてある、此の紅の絲不審」と、
手繰りたぐればくる／＼と、絲に寄る身はき、がにの、雪居の庭へ引かれ來る、主はゆかしの「ヤア
求馬様か。」ハハはつと驚く姫よりも、騒ぎさめく局達「奴も見事引き寄せた、七年物の戀人様か、
能うこそお入り遊ばした、サア／＼此方へ。」と手を取れば、「イヤ手前はつい道通り、此の緒環を拾ひ
上げるや否、臧多に引かれまるつた者、何にも存せぬお敷し」と、出づる向うを立ち寒き「エ、手の
悪いなされやう、私に御遠慮は、内々のお話なら、どりやお次へ」と立つて行く。姫はとかうの詞
なく、さし俯向いて思案の求馬「フン此の御所の姫と有れば、聞くにおよばず入鹿の妹橘殿」と、
言はれてはつと駒せまり、「入鹿が妹と知り給はば、よもお情はあるまいと、隠し包みし甲斐もなう、

御存じ有りしお前こそ、藤原の淡海様。」と、言ふ口ちやくと袂に覆ひ、「女なれど敵方に、我が名を知れば一大事、不便なれども助け難し。」「成程お道理仰も、生きて居る程思ひの種、お手にかゝるがせめての本望。かういふ内もお姿や、お顔を見れば難題が残る、サア、役して下さんせ。」と、刃を待つたる覺悟の合掌、「心底見えたが談夫婦と成りたくば、一つの功を立てられよ。」一つの功を立てよとは。「サ、入鹿が盗み取つたるこそ、三種の神器の其の一つ、十姫の御清尊ひ返して渡されば、望みの通り二世の契約、得心なければ叶はぬ縁。」「サア是非もなや、悪人にもせよ兄上の、目を揉むるに思しらす、とあつてお望み叶へねば、夫婦と思ふ義理立たず、思にも思は捨てられぬ、二つの道にからまれし、此の身はいかなる報いせ」と、思ひ歎きて在せしが、「サ、左様ぢや、親にもせよ、兄にもせよ、我が悪人の身と言ひ、第一は天子の爲、命にかけて仕舞せう。」「サ、出かされたり、シテ又知らせの相觸は何と。」「今宵御遊の舞に事寄せ、寶劍尊ひお渡し申さん、笛や鼓の音をしるべ、奥の草までお忍びあれ。」「然らば我は此の所に、暮るゝを暫し待ち合はさん、必ず首尾よう。」「合點でござんす。」が若し見付けられ殺されたら、是れが此の世のお顔の兄納め、假令死んでも夫婦ぢやと、仰しやつて下さりませ。」「サ、運命掛く事願はれ、其の場で空しく成るとても、じん未來際かはらぬ夫婦。」「サ、赤い鳩しや」と、抱きしめたる意匠の、香ひし

詞縁の綱、引き別れてぞ忍ばるゝ。迷ひはぐれしかた轡、草の靡くをしるべにて、いきせきおゝ轡は走り入りニエ、此の緒環の締めが、切れくさつた許りで、道からとんと見失うた、さうながら、爰より外に家はなし、大方此の内へはひつたに違ひはない。エ、誰ぞ来よかし聞ひたや」と、兄遣る先よりお下婢が、被眉深にしやなくと、豆腐箱提け歩み来る。申し／＼と呼びかくれば、オット呑込みはや合點、す、お清所尋ねるのなら、其處をこちらへ斯う廻つて、そつちやの方をあちらへ取り、あちらの方をこちらへ取り、右の方へ入つて、左の方を真直に、胸目もふらず、めつたやたらにすつと行きや。」「イエ／＼私が見つめるのは、お清殿とやらではござんせぬ、年の頃は二十三四で、色白にくつきりとした、好い男は参りませなんだかえ。」「す、／＼／＼来たけな／＼、夫れはお姫様の戀男ぢやけなの。三輪の里から跡追うて來た所を、何がお局達が引捕へ、有無を言はせず御寢所へ、ぐつと押し込み、上から布團をかぶせかけ／＼、ア、／＼宵の中内證の御祝言が有る筈と、暮れぬ内から騒いでぢや。エ、けなり、ちとまで、内太股がぶき／＼と、卯月あたりの弾け豆、豆腐の御用が急ぐに。」と、しやべり廻つて出でて行く。「サア／＼ひよんな事が出来て來た、ほんに／＼、油斷も陳もなるこつちやない。大それた人の男を盗みくさつて、何ぢやいしこらしい内祝言ぢや、餘りな踏み付けやう。よい／＼、其の代り何處に居ようと尋ね出し、求馬様と手を引いて、是れ見よかしにいんで

退けるが腹いせぢや。」と、行かんとせしが、「イヤ／＼はしたない者ぢやと、ひよつと愛想をつかされ
たら、と言つて此の儘に、見捨てて是れが如何往なれう、と、如何せうぞ」と心も空、登る階長廊
下、往來ふ女中見咎めて、一人がとまれば二人立ち、三人四人いつの間に、友呼ぶ千鳥むら／＼と、
爰かしこから寄りたかり、「つひし見馴れぬ女子ぢやが、其方はマア誰ぢや何者ぢや。」「ハイ／＼イヤ
私は内かたの、オ、それよ。さつきのお清殿は寺友達、奉公に出られてから、久しう逢はぬなつかし
さ、ちよつと見舞に寄りましたら、是れはマア／＼よう來た、上れ茶を呑め、さうして煙草呑め、ア
ノお上にはあた減相な、御祝言が有ると、聞けば聞く程涙がこほれて、あたお目出度い事ぢやけなの
ほんに内方の様な能い衆の御祝言は、何の様な物ぢや、已やれ、拜んでなりと腹擦よと、浮々爰まで
参りました。何卒お前方のお心で、増様をちよつと、拜まして貰うたら、おうござりする」と言
ふ顔も、恨み色なる紫の、ゆかりの女と早悟り、罵つてやろと、目引き袖引き、「マア／＼其方は仕合
な、斯ういふ折に参り合ひ、お座敷拜むといふ事は、女の身では手柄者。したが此方等が吞込んで、
お座敷へは出すものの、何そささずばなるまいに、何と昔様、寧ろこの事、此の者に酌取らそではある
まいか。」「よからう／＼。」「ア、申し其の酌とやらは。」「オ、何の又其方達が知つてよい物か、今爰
で教へてやろ。幸ひ爰に御酒宴の銚子島臺、有り合はせの、増君様には「菓の局、梅の局は嫁君役、

綾子は介添侍女郎」と櫻の局が指圖して、いやがるお三輪に長柄の鉈子、持たせ持ち添へ、「マア杯は三つ重ぬ、頼君へ二度ついで、左へ二足。コレ立つのぢや、エ、何ぢやいの、うか／＼さすと能う覚えや。三度目ついで頼君へ、コレ酒がこほれるわいなう、不調法な。是れからか亂酒謠ひ物、是れも嗜みなければならぬ、マア四海浪なと諷やいの」「エ、」「エ、とは舌か、そんなら増様拜ます事はマアならぬ、それがいやなら早う諷や」と、せつき立てられ是れがマア、何と、萬千秋萬歳の千兩の玉の血の涙、聲詰らせてないじやくり、「す、めでたう哀れに出来ました、色直しにはんなりと、梅が枝でも落組でも、サア／＼聞きたい所望ぢや／＼。」「エ、あられもない事おつしやりませ、山家育ちの藪鷺、ほう法華經も片言許り、上り下りの仇口や、馬士の唄なら聞いても居よう、もう何事もお赦しなされ、サ早う其の増様に。」「サア増様が見たくば、早う諷や、馬士の唄なら面白からう、次手に振も立つて仕や、いやならこつちも成りませぬ、歸りや／＼」と引き出され、「サア／＼い、何のいやと申しませう。」「サそんなら諷や。」「アイ／＼諷ひまする」と、泣く／＼も、涙にしほる振袖は、鞭よ手綱よ立ち上り、雁竹にサ、雀はナア、品よくとまるサ、とめてサ、とまらぬサ、色の道かいな、ア、ヨ、エ、愛なほてつ腹めと、此のやうに申しまするとうち伏せば、皆々一度に手を打つて、「奴ちきつい暗い事、よい慰みで我々が、ほてつ腹までよれました、馬士殿大儀」と言ひ捨てて、

行くを驚き、「コレ申し、私のもとに」と取りすがれど、ふり放されてがはと轉け、寝ながら竊にしがみ付き、引きずられて聲を上げ、「なう皆様お情ない、どうぞ私も御一所に、連れてござつて下さりませ、お慈悲／＼」と手を合はせ、拜み廻るを擲きのけ、おしつこ、とても及ばぬ戀争ひ、お様様と張り合ふとは、叶はぬ事ぢや置いてたも、大膽女のしつけをせう」と、耳を引くやら説明けより、手を指し入れてこそざるやら、振りつ叩いつ突き倒し、「サア／＼是れで姫様の情氣の名代納まつた、彌めでたい御祝言、三國一ぢや、壻を取りました、しやん／＼、しやんと清んだ」とうち笑ひ、局々へ入る跡は、前後正體泣き倒れ、暫し消え入り居たりしが「エ、馴染ぢやわいの／＼、男は取られ其の上に、まだ此の様に恥かかれ、何と堪へて居られうぞ、思へば／＼無情い男、憎いは此の家の女めに、見かへられた日惜しい」と、袖も袂も喰ひ裂き／＼、亂れ心の亂れ髪、口に喰ひし身を震はせ「エ、如ましや腹立ちや、おれ御寒々々寐ちううか」と、寒心もあら／＼しく、かけ行く向うに以前の使者一、其方も魔仕に出たのぢやな、もう斯うなつたら誰が出て、構はぬ／＼そこ退きや」と、袖すり抜けてかけ入る御、しつかと踏まへ「ヨリヤ待て女／＼」と待たぬこ、放しつ、放しや放しやと身を離く、堪へんて氷の刃、脇腹ぐつと差し通せば、うゝとのつばに倒れ伏す、刃抜き捨て邊を窺ひ目を配る、奥は豊かに音楽の、調子も秋の哀れなる。お三輪はむづくと起き返り、「扱

は嬪が言ひつけぢやな、エ、憐たらしい。恨みはこれからある物を、却つてそこから殺さる、心は
 卑か蛇かいやい。オ、殺さば殺せ一念の、生きかはり死にかはり、付き纏うて此の恨み、晴らさいで
 置かうか、思ひ知れや。と奥の方、睨み詰めたる眼尻も、叫ぶ聲音もうはがれて、さういたはしき其
 の有様、じろりと見やり、「女悦べそれでこそ、天晴高家の北の方、命捨てたる故により、汝が思ふ御
 方の手柄となり、入鹿を亡ぼす術の一つ、オ、出かしたなア。」何と、賤しい此の身を北の方とは
 「ホ、オ其方が語らひ申せし方は、忝くも中臣の長男淡海公。」エ、シテ又私が死ぬるのが、いとし
 いお方の手柄になつて、入鹿を亡ぼす術とはえ。」「ホ、、、其の譯語らんよく聞け、彼が父たる蘇
 我の蝦夷、齡傾く頃までも一子なきを憂へ、時の博士に占はせ、白き牝鹿の生血を取り母に與へし其
 の驗、健かなる男子出生、鹿の生血胎内に入るを以て入鹿と號く。去るによつて、彼奴が心を置か
 には、爪黒の鹿の血潮と、疑著の相ある女の生血、是れを混じて此の笛に、灌ぎかけて調ぶる時は、
 實に秋鹿の妻戀ふごとく、自然と鹿の性質顯はれ、色音を感じて正體なし。其の虚を計つて寶劍を、
 過ちなく奪ひ返さん、鎌足公の御計畧。物陰より窺ひ見るに、疑著の相ある汝なれば、不便ながら手
 にかけし。と、件の笛の穴に、たばしる血潮受け灌ぎく、今こそ揃ふ此の幻術、此の笛こそは入
 鹿を操ぐ水串ならん。ハ、有り難や。」と押戴き、勇み立つたる其の骨柄、けに藤原の御内にて、金

輪五郎全國と、鍛へに鍛へし忠臣なり、「なう冥加なや勿體なや、いかなる縁で賤の女が、左様したお
方と暫しでも、枕かはした身の果報、あなたのお爲に成る事なら、死んでも嬉しい。忝い。」とはいふ
物の今一度、何卒お顔が拜みたい、縦ひ此の世は縁薄くとも、未來は添うて給はわ。」と這ひ廻る手に
緒環の、「此の主様には逢はれぬか、どうぞ尋ねて求馬様、もう目が見えぬ懐かしい、戀し／＼。」とい
ひ死に、思ひの魂の締切れし、緒環塚と今の世まで、嗚り響きたる横笛堂の、因縁かくと哀れなり。
今國不便彌増しに、とめて葬り得せんと、春にお二輪が亡骸を、おひ／＼馳で来る荒醜ども、曲者
やらぬと取り卷いたり。見向きもやらず悠々と、凡帳の綾袖引きちぢり、死骸とともに我が五體、く
るくるしつかと引き結び、「死人を取り置く我等こそ、先づ出来あひの坊主役、十念授けてこまうに
も、都度々々には邪魔らしや、一度にかためて授くるが、奴らが爲には百年め、いざ来いやつ。」と力
士立ち、「やア廣言なる骨佛」と、前後左右より十文字、槍先揃へて突き出す、ひらり早業、すつかり
素槍、ほぐれる片鎌踏み落せば、後を把棒しつかと取り、後をねらふは不敵奴、左様に甘うはさすま
たも、引つたくつて打ち折つたり。手取りにせよと、どつと寄る、當るを平ひ砂石の如くはり飛ばさ
れ、逃げ行く奴原餘さじと、奥深くこそ、一歩行く先の、御殿々々に銀燭を、掲ぐる目張綾錦、紅葉の
殿の御簾巻き上げ、妹姫の今様を、遊覽せんと入鹿大臣「やア女原、そこ達、砲が殿へ参り、用意

よくば始めよと言ひ來れよ、早う／＼といらたての、使重なる樓に、橘姫は今宵こそ、よき折
 烏帽子水干の、衣紋もはでの舞の袖、櫓垣の影より淡海公、弓矢つがうて忍び寄る。目當は入鹿が胸
 先へ、羽響き高く切つて放す。苦もなく掴んで大音聲、「ヤア宿直はなきか早參れ」承ると、彌藤次を
 藩、走りかゝつて打ちかくる。心得たりと切り結ぶ、姫は寶劔振袖に、おし隠す間も阿修羅の如く、
 樓目がけ廻り來る入鹿、支へ隔つる官女ども、はらり／＼と投げ落し、飛び乗つて掻い掴む。遁れ
 め所と橘姫、寶劔下へ投げ捨つれば、取り得る淡海支へる兩人、打ち合ひ／＼いどみ行く。見ろに
 ハアノ、我が身も、驚に捉られし雛鶴の、爲方涙顫ひ聲、「オ、無お腹が立ちませう、其のお怒りをさ
 せますも、皆自らが淫らから、赦して給はれ兄上。」と、歎き詫びるをはつたと蹶やり、「ハ、鉛刀
 に等しきなまくら物、こと／＼しく籠め置きしは、劔を餌に天皇始め、鎌足親子もおびき寄せ、幕殺
 しにする此の計畧、誠の劔を安々と、きやつら如きに奪はれんや。」「エ、スリヤ今の劔は偽りとな。」
 「オ、我が帶せしこそ十握の劔。」扱はと立ち寄る肩先を、抜く手も見せず丁ど切る。折柄吹き出す笛
 の音に、聞き入る入鹿は酔へるがごとく、勇氣碎けてかつばと伏せば、不思議や劔は拳をはなれ、忽ち
 ち化したる龍の形、雲にうねり雨をさそうて舞ひ下り、松の梢をさら／＼／＼、さつと飛び入る御溝
 の水、白浪さわぎだう／＼と、ゆすりあふる、悽まじさ。橘姫は手疵も忘れ目成り詰めしが、「オ、

それよ、怪しと思ふ心より、龍とも蛇とも見のれども、正しき十握の御綱ならずや。親ひ誠の悪龍なりとも、何か恐れん夫の爲、聴にかゝり死ぬるとも、厭はぬ、再びもとの寶劍と、願はれ給へ」と心願し、ひらりと飛び込む水煙、さか立つ浪に打ち立てられ、遙かに流れゆく、枯枝に取り付く身は浮草、たゞよひながら開近く寄れば、金龍頭をふり返し、紅花の舌をひらき、ひらめく背鱗を鳴らし、浪間を分ければ續いてわけ、潜れば潜り沈めば沈み、命限りと追ひ廻せば、又も虚空に立ちのぼる。此方も岸にかけあがれど、叶はぬ思ひ身をみせり、足もなる雲行を、目常こそは慕ひ行く。次第に更くる夜風に、帆は飄揚着込を著し、女太郎御綱にて、懐かしく入る結聲、官軍廻へ足空、薄雲の野衣に、帆は飄揚着込を著し、女太郎御綱にて、懐かしく入る結聲、二人の敵を討ちとめて立ち出づる浪海空、金龍互御綱を捕へ、女太郎御綱にて、懐かしく入る結聲、稀代の此の箇、唯し十握の御綱の敵は、一々、氣遣ふ致すな、最中我が手に入つたること、其の仔細は御てより、徒黨を集むるかたはひ山、絶頂によち登れば、黒雲底に覆ひかゝり、一つの金龍、我か岸に落つるや否や、十握の御綱と願はれます、今よりは彼の山を龍岳と號くべしと、聞ても高き多武の峯、此の大匠の靈巖なり。女上太郎す、み出で、いかに大匠、女上太郎す、家なりながら、王位を犯す天罰、只今歸すと知らざるや、見参やつては呼はれたり、親ひ誠の悪龍なり

を、くわつと見ひらきうなり聲「ヤア事々しや鎌足、我に刃向はんなんどとは、鶏卵をもつて、岩石にあたらんとするより危き巧み、目に物見せてくれんす」と、はるかかの樓より飛びおりたり。女上太郎、金輪五郎、雙方より引包んで切りかくる。ちつとも怯まぬ勇猛力、弓手にたぎ捨て、馬手にかなぐり、追ひ立てゝ追ひ廻し、鎌足日がけ飛びかゝる。驥がす神鏡手にこゝけ、入鹿が頭に指し向け給へば、鏡に寫る降魔の相、和光のきらめき眼も眩み、勢ひ絶えてたじゝゝ、隙を窺ふ勇氣の兩人、腰の番ひをしつかと組む。シヤ面倒なと兩手に提げ、打ち付けゝ膝に引ひき動かす。鎌足後につつと寄り、神通奇代の焼録に、水も溜らず搔き切つたる、首は其の儘虚空に上り、火焰をくわつと吐きかけゝ、飛鳥のごとく翔け廻る、一念のぼとこ現るしき。淡海きつと見、目に映ふる重獸品、忽ち治まる朝敵の、しけきが本を打ち拂ふ、鎌足の徳劔の徳、實に譽れある藤原氏、花の紐解く橘姫、誠をてらす神鏡は、神のおかけの尊くも、嘆思へば伊勢とお二輪が菩提、曉の緒環解言を、くり返したる言の葉を末に傳へし物語り。

第五

逆徒凶賊直に退き、年盡き新たに春の空、都を江州志賀に移され、今ぞ長閑けき大内山、主上の

徹慮安らかに、猶奥深き玉簾や、中央の座には中臣内大臣鎌足卿、同じく淡海義士、面々、玄上太郎利綱、一手三作諸共に、清涼殿に居並べば、鎌足の大臣は治國の褒祿沙汰ありて、「入鹿が妹、橘姫、親兄にかへ忠義の貞節、豐代姫と名を改め、淡海が宿の妻と、我が君の敕諭なり。また大判事清澄は、暫く敵の臣下となり、四海を治むる智謀の勞、詞にも述べがたし。向後武官の司とし、三作を養子となし、志賀之助清次と名乗るべし。」其の外に太宰の後室金輪五郎を始めとし、各大祿賜はりて、主上を初め一座の勇み。かかる所へ金輪五郎、殘黨を搦め取り、凱歌を稱へ入り來れば、故人となりし清船雛鳥、兩人が追福に、妹春の山と變れども、變らぬ志賀の山櫻、供養絶えせぬ花の塚、譽れを世々の香に匂ふ、をり吉川波春の風、幣帛もて祓ふ國の富、市中屋敷と所せき、月の遠近松の半ば、二月の夕暖かに、坂東南海穀、民は至善平らかに、秋に米夏に麥、まづも浮める形、千代の竝松洛陽に、文作青き若みどり、惠徳の安満願の、神は伊勢又春日に八幡、一の恵みも長へ、打てばはづきぬ陣太鼓、久しき御代を祝しけり。

妹春山婦女庭訓

久松 新
版
歌
祭
文

近

松

中

二

久松 新
版
歌
祭
文

座
摩
社
の
段

敬白難波の里の大社、座摩明神の鳥居前、張り廻したる一構へは、手の筋失物走人、息もすたすたきこえながら、四季の草木の賣買は、花の顔見せ冬籠り、斬参古参大當り、御願染御懸屋敷八を、今入れ替りお休めと、打つたり舞うたり神楽所口、鈴の音さへ賑へり。参詣草屋山家屋佐四郎は、お百度の錢籠の數さへ九つ時、長屋指に手かひから、年季重ねて久松が、屋敷廻りも務め附、主の目處に油屋の、下人小助の二人連、宮にはお百度垣の佐四郎、見ゆる小助が惣案頭、立ちとまつてオオタタタ、上邊に尻餅作り柄と知らぬ久松、例とした小助殿、怪我はないかといはれば、オオ怪我はせんか昨夜から冷寝でオオオオ、こりやこり寒の中に氷浪んだぞと云ひ、久三の胸で急病ぢや奉公の身につらきは、大概なことは押して居なと、かう病氣が差込んでからは、小白練になどかゝるにやならぬ、二一エ、こよんな事ぢやなう、小倉の屋敷の御銀一貫五百目、此までに請取りにこいと御使、霜先の銀、念の馬の二人連、というて近なつてゐる親方の無間法になる事、いつそ私一人住で

「こうかい。」「そんなら大儀ながらさうして下され、是れでは申々一足も往かれぬ。」「一ツレ氣を鎮めて茶店などで待つて居やんせ。」エ、丸子持つて來たりよいに、展りに反魂丹買うて來て進ぜうぞや。」と傍輩の氣をかね財布、裏表なき小倉竊、屋敷をさして急ぎ行く。後に小助は山伏の、圍ひの傍へ小聲になり、「法印どの。」「一ツ、油屋の小助殿か、何ぞ用か。」「一ツ、貴様に銀儲けです事がある、それの宮の内、百度参りして居る人は、山家屋佐四郎といふ銀持、こちらの娘のお染さまにきつい。それやう、それ故にあの類参り、爰らが貴様の能い代物、おれがとひ打つて貴様に祈禱願ます仕業。今おそこへ往て、あのわろに逢うて話す中、何も角も筋が知れる。貴様そこから立聞きして居て、占の奇妙を見せると跡が銀ぢや、遺憾よう懸つたら二つ山ぢや台點か。」「ム、そんなら、あのわろが、彼の大身代の山家屋ぢやの、うまい。」と法印に、しめし合はしてよい時分に、小助がうしろ足では知らぬ、佐四郎はお百度を、廻り仕舞うて神樂所の、前に平伏し柏手もやん／＼。南無座摩大明神、油屋の娘お染を、私が女房に持てまするやうに、どうぞあつちから惚れまするやうに、なむ神明なむ稻荷の八幡、なむ大師遍照金剛、なむ觀世音菩薩。」「申し／＼佐四郎様ぢやござりませぬか。」「一ツ油屋の小助か、わが身やいつの間にこゝへおぢやつた。」「イヤたつた今來て後から、お前のほやきを聞きました。」「聞いたかエ、面目ない、山家屋佐四郎ともいはれる者が、慥なればこそコレ此の綾ごしを

見てたも。」一シタリ百度参りとは、きつい瀧りやう。」一イや癡つた段ではない、元浦屋の家には親どもから、百貫目餘の取りかへ、夫れを急に催促せぬはあの縁故。後家のお蔭にとうから言ひ込んで結納まで入れて有る。それに今日此の頃後家が言分には、いかにも上げませうけれど、縁の事は親の儘に無理押しにも成りませぬ、あれが心を聞いてからの、何のかのと巧の聞かぬ。そこで我が身に槌打たさうと思つて時々之用無心、イや縁故の裏がほしいの、縁の縁を買ふわの、艶艶の色揃ひまで呑込んで遣つた此の山家屋、夫れにマア。」一おつといふまい、働きが鈍いと笑しやるのか、慮外ながら急度働いて居ますぞ。」夫れなりこそお前のお望み、十分の物九分は境が明けて有る。」一マアそりや本かいやい。」一真か誰か此の間の文の裏事、かはらしてお染が筆、要に持つて居るけれど、さういふお前の請けなれば、マア、お目に懸けまいわい。」一ア、こりやすねすところやつと見せてくれ。」一見せたら此の働き代は。」一ハ、此の望みが叶うたら、縁はさつとわづらひ形にするわい、マア其の文を。」一マア成多に代物手放されど、當世かけ前ひはあぶない。」マア後での縁は縁、先へちつと力付かぬと勢がない。」斯うさう、此の文程が讀んで聞かします程に、よい記事の文切なら氣加減を上げさんせ、まいか、さらば間帳致さうか。ハア何ぞや、ようぞや御文下つて縁しく縁しやらを縁。ヌレ縁しいと書いて有るぞや、縁に數へられ我が身に渡かぬ御し。」一ア、そのと、身に。」一縁う存じ参りて候。

ソレそこで冥加錢めいかけせんに心得こころえ暗くらみ銀入ぎんにれから戻板もであいた一つ、「サア、其そのののち後あとは、」身みに餘あまり、聲こゑう存ぞんじ参まゐらせ候さうへども、母様ははさまの有ある身みにて任まかせぬ譯わけ御座候おんざさうへば、先まづつ、御斷おんことわり申まうし上あげまゐらせ候さう。」ヒヤアこりやどうぢや。」サ、こ、こが味ぢや、母親ははおやの許ゆるしさへ出でたら、私わたしはお前に添そひたいといふ事ことぢやわいな。又々母様またまたははさまに尊たづね候さふらへば、縁えんの事ことはどうなりと、そなたの好すいた殿御とのごを持もてと御申おんまうしなされ候さう故ゆゑ、それは、嬉うれしう存ぞんじ参まゐらせ候さうとけつからわい。」エ、忝かたけない冥加錢めいかけせん、今度こんどははすんで、二朱しゆ一つ、「」トしめた。」又著服またちやくふく、「さうして後あとは、」嬉うれしう存ぞんじ参まゐらせ候さふらへども、何分なにぶん私わたしはおまへがいやにて御座候ござさうらふ。」「イヤア。」「いや、急せくまい、こりや是れちつとした讀よみやうぢや、私わたしをお前まへがいやで有あらうといふひざりの文ぶんぢや、其そのの證しょうこ據こは後あとに、あなたにも、私わたしを御斷おんたふりの事こと推おしし参まゐらせ候さう。」「ソレ、」「若もしまた眞實しんじつにて候さうらふはば、誓文ちかみぶん々々私わたしが事は、ソレ爰こゝが肝心かんしんの性根しやうこんぢや、今度こんどは一歩いふぢや冥加めいかけせん。」「サア遣やるわいやい、マア氣きがせく、あとを早はやう聞きかせいやい。」「誓文ちかみぶん々々、私わたしが事はふつりと思おもひ切り下くだされ候さうらふ、何なんの因果いんぐわにお前のやうな男おとこに。」「ヤ何なんと其そのの跡あとはどうぢや。」「サア此この跡あとは、イヤもう聞ききなんすな、跡あとはぼんやくたいぢや、壹分いっふん一つ井戸いどへ落おとしたと思おもはんせ。」と、聞きいて佐四郎さしやうらはおろ、顔おもて、お性根しやうこん取とられた鼻紙袋はながみぶくろ、下地したぢが抜ぬけたさし許かりの百度ひゃくど参まゐりも恨うらめしき。」申まうしさう力落ちからおとした物ものでもない。お前まへの戀こひの邪魔じゃまといふは、久松ひさまつといふ丁稚てつちめ、

何でもこいつに腐り付いて居ると見えます。尤も男はあいつよりちつとお前がつぎなれど、肝心の所で喰ひ付かしたら乗りかへるは知れてある。」「サイヤサおれが介中の職のすんに、是れほどな事があつて、こいつが前後に振りかはつて有る位なら、恐らく前後に仕負けぬものを残念や。と、尻を捻つて無念がる。」「い、申し物には斬新といふ事がござります、幸ひあそこに山伏が有る、久松とお歌と縁切りをお頼みなされぬか。」「ホニ是れは氣が付かなんだ、第一おれが戀が成るか成らぬを見て貰はにやならぬ、シタが若しびよつと成らぬというたら、又十二文損するのぢや。と、根がしはれぬ安物から、腰に纏つた烏居の前へ、御判書色相性の考へ、見て上げませうお這入り。と、呼び込めれるをしばにして、はひる佐四郎さん。こゝだ小助の相替。貴方の年は三十一でござりますな。」「ム三十一。」「當年三十一歳の男、お生まれ年が寛永六年。」「是、御一代の字本尊は月二十八日不動明王、姓分は火にして別ち住所より南すこし東に當り、水邊に侍人あり、女と見ええ。こゝろや色事でござる。」「旦那何ときつかく。成程此の旦那大由事生でござります。」「八軒の面にさう見える時に其許は其一年で、牛の糞に程々銀を持つてござる、此の糞裏に當つて金銀の星は見えする、是れが其許様の年頃に當る。別ち其の金銀の星で、此の星はお手に入るぢや、要に一つの時がある、其許様には存中の紙に、此が一つ有らうがの。」「イヤアサアく見通しぢやく。」

「サア／＼なけりやならぬ理ぢや、此の疵のある所が悪い。惣體脊中に有る疵は脊疵というて、只今師走には或は牛房鰯鮓、何なれ角なれ人に物をやる許り、錢銀を取られる許りで、これまで頼んだことが、一つも埒が明かぬと見えます。」とんと其の通り。「さう有らう。時に又一つ大きな邪魔がある、ハテかはつた物四角な物ぢやが、坎良震巽りかんがすかん、兌中斷とつてたゞぼたの兌の卦に當る、人相に取つてはこりや前髪と見えます。彼の金星銀星が寄り合はうとする中へ、此の前髪の眞鍮星が、毎晩夜這星になつて邪魔するといふ卦體。」「サア夫れがけたいでなりませぬ、どうぞ其の前髪を。」「此の法印が行力で祈り殺して進ませよう。先づ縁結びの星祭、こりや其許様の御家へまゐりて致さにやならぬ。」「サア夫れが第一お頼み申したい。」「申さぬ事は聞えぬが、金銀の星を祭るは、同氣相求めるの道理で、金銀の元入が餘程入ります。」「サア何ほでも大事ない。」「供物は随分大きな鏡餅十二重ね、跡は法印が受納致す。扱祈禱の間、酒肴で我等を御馳走なされるが能い、斯く申せばとて、手前が喰ひたい飲みたいではござらぬ、則ち夫れが星様への御馳走、物をほしがるによつて是れ星なり。祈禱始めに宮の内の福屋で、マア一寸御神酒上げよかい。」「旦那こりやよござりましよ。」と煽てる太鼓神樂所の、鼓片手に糟禰宜が、「山家屋佐四郎様、御獻上の神樂が只今上ります、サアお出でなされませ。」「是れはいかな様で交せてどんちやんと、是れも矢張今の願、モウ神様を頼す

に及ぶぬ、コレ神樂の酒手ぢや、貴様も御神酒の相伴さすぞ。」「イヤ有の難いわ、さらば福屋で腹存分、彌宜山伏の位争ひ、彌主様先づお入り。」と鼓より先づ石鼓、打ち連れ茶屋へ勇み行く。小助はそろ／＼小戻りし、手招きされば最前より、待ちかね山師の浪人者、烏居の影より又一人、是れも手合と顔見合はせ、三人いつしよに寄りこざる。中にも勘六氣をせて、「シテくだんの物は」「コリヤ聲が高い、あの井の内に仕かけて置いた。此の鈴木彌忠太、久松めとは仔細あつて意趣のある中。彼奴めをしくじらす工面は、小助かうく合點か。」「よし／＼彌忠太様は勘六と、福屋で飲んでござりませ、前髪めが髪るを待つて、手工合首尾よう／＼。」と、耳から耳へ相談さたり、しめて三人別れ行く。人一盛り夢の世や、浮名の端の種油、獨り娘と寵愛の、お染が思ひ日に千度、行きつ戻りつ蝶々の、縫の模様を振袖に、包むとすれど娘氣の、迷ふ心を一筋に、座摩の宮居に歩み来る。下女のお傳が、「中しお染さま、宮の内の茶店で、ちとお休みなされませ、私に、に張番して、彼の人が今でも見えたらしコレ斯うにと、いへばお染はほ／＼笑みながら、神のお庭で勿體ない、お合ひのない時に、おを見るのが嫌しむ」と、待つ人よりも待たる、身、久松はいきせきと、屋敷の用事そ／＼に、足元かろく立ちかへる。お染は見るより、コレ久松様といはれもせず、爰に／＼と寄り添へば、久松も途中の人目、「コレお傳殿小助殿に見えなんだか。」と、いひつ、傍に氣を付くれば、香込むお傳が、「よう

し御寮人様、わたしやあの綱八の芝居が、一切り見て参じたい」「ホンニそなたは芝居好き、敷入でなけりや行かれぬに、けふは幸ひ勝手に往つておぢや。随分緩りつとだんないぞや」「ハイ／＼そんなら往て参じよ、久松様もお染様と、どこぞそこらへ敷入さんせ」と、はつすに猫に鯉木の、氣の通ひ鼠木戸、是れも忠義と行く跡に、契りし中は詞數 いはず取る手を振り放し「ようし御寮人様、お前さまは迫付い男をお持ちなさるけな、私は下人の事、何とせうしよ事がない、といて勘強のはやつぱり愚癡、勿體ないお主様が、是れまでのお志、眞實冥加なう存じます」と、押し下れば、指し寄つて「コレ夫れはマア何の事、内では人目があるによつて、久松々々と家來あしらひ、様といふ字は口の中で、常住消して居るわいの。せめてこんな所でなりと、女房がお染かと、いうてたんのうさしもせず、お前様の御寮人のと、獻上向きの挨拶は、まだわしが氣を疑うてか、そもや見初めし其の日から、エ、こんな事何やかやいひたいけれど、人が見るので何にもいはれぬ。どこぞ人の聞かぬ所で、しつぱりと話したい、こつちへおぢや」と手を取れば「さうぢやて茶屋の内ちやつぱり人目、どこぞ暫しの隠れ家」と、覗く八卦のかこひの内「マア誰もないわいの、外から懷は戀の時、サア此の間にちやつといの」と、手を引く主従三世相、二世をかねたる妹存鳥、忍び入るこそわりなけれ。神樂の鈴も時移る、ほろ酔ひ機嫌に法印は、とろ／＼日して鳥居前「エ、きやつも客い奴ぢや、

喰はれもせぬ吸物にたつた酒三鉢子、ホニニ端酒飲まうとて、店を明けたは不用心、山伏が物ぬすま
れては見て貰ふ所がない。や、何やらぶつ／＼騒ぐやうな、此の内に人の聲あるは、ハッ怪しや」と
暖簾の内、差し覗いて歸り仰天、這入られもせず氣は上づり、繪馬に上つた一來法師、さすくみに
成つて居る所へ、いきせき走つて下男、「コレ／＼法師様、一つ見て貰ひたい」と入らんとすれば、「ア
コレ今内へ這入ると水火金庫騒ぎ、水火土金計を問かさいやい。八世なら寝でもつゝ見てやる、
失物か走りか心中が、つた者なら、奇妙に所を指いて見せるぞ」といふそんな物ぢやない、こゝろ且
郡山家屋の佐四郎様が、今朝から今にお歸りなさぬ。「ア、それかやい、此の山伏が行方を以て
只今こゝへ天降らして遣さる、佐四郎さま、法師坊そこにかかると、出てくる佐四郎にそれ
違ひ、そつと後の懷から、奥居の内へ行く二人、嬉しいお染と母にも知らず、リッ／＼／＼、一時も
はやう星奈、是れから直に手前が宅へ」「そんなら参りか」といふ言つたり真心の應答道具、持参此
そつと聞ひの目「アアア素早い奴もう逃げをつた、奴は今のが喉の前髪であつたな、やうは代
を喰ひ逃けにしをつたな。よい／＼此の意速返しはたつた今、お染がお前に聞く様に、暫り伏するは
我が球數先、さんけ／＼六根大聖南無ぶどう明王／＼。何ほうに見つとむなうても、男はれこも喰
はねば立たぬ、身體よしの山家屋で、是れ料理喰ひ次第、煮菜干干菜漬かけ／＼、味噌のありたけ

えいぞ、さういふ、さしものお娘も喰ひにつき、魂の返るは今の中」と、いそいで打連れ歸りける。南
の辻に入らるし、喧嘩々々と騒ぐ聲、驚き出づる久松お染、下女うつかは久三の小助、一所に落ち
合ふ数凡の上、喧嘩は振物園侍、相手は商人駒ぐら取られ、引き立てられてもひるまぬ男、二りや
何ともしやうと、「一同」とに素直人の、武士の足を泥踏で踏みながら、御免とらぬかき愚慮外者
の、「アア」といわいな、愚外なら歸るぶん、マア安を致さん。踏んだはおれが貰、踏まれたはこな
れの親、武士ぢや商人ぢやてて脚に逆ひはあるまい。それなこつき喰ふ男ぢやない、聞かぬというて
どうもさう、お太刀ひねくつたとて甚多に切れる物ぢやない。人をばえせすとお侍、どうなし召さ
れ、「こゝり常盤」を、じしきぶら致すも刃の穢れ、どうしてくわう」と傍邊、有り合ふ財布、肩間
へはつしり、ハハハ驚く久松を、お染が抱きしめ押ふる袖、氣をうみ裏の裏へ行く、小助がきつし、
「コレ申し、あの包は手前の銀財布、斷りもおつしやらすお侍には引合はぬ仕方。」一紙に是れは心
をく儘手前の龜相真平々々、なむ三寶少々血が付き申した、幸ひの井の元」と、清むる穢れは薄けわ
ど、包みし懸事すしかへる、手目を見せじと小助が氣配り覆になつて、立鞆の財布手早く「コレ久松
此の銀は懐へ、お染様掛の合ひになりや悪い、私もお供すア、早う」とせり立つる、巧みの底は
白藁のお染、久松「ア」と手を取つて、せはしい所が結ぶの神、足を早めて立ち歸る。跡は人たえ富芝

居の、切のめりやすし、ゆかに、囁く二人が仕済まし顔、彌忠太さま首尾は、――「す、件の物は手洗鉢の下に有る。」「うまい、うまい」と立ち寄つて、財布取り上げ、「彌忠太様、今日の働き代は、――」「ソレ金二兩。」「エイ固間に寔まで付けられて、たつた是れかいな。」「サアよいわ、其の一貫が百圓どうで、助にも、口錢やらにや聞きをるまい。そんならふてうはぢやでせう、これのこね門きでござんせ。」「と、銀俵へ取り納め、連でない前跡先に、のしく歩む鳥居の陰、盜賊待てと聲かくる。譯つくひしなから賊の顔、一時とは誰が事に、「已らが事うに――、何の御機に盜賊とは。」「サアぬかすまい今日此方の屋敷にて、油屋の下人久松に被せし銀子、子供上りの袴、やつ何とも心もとなく、跡を來口窺ひ見る、おのれらも廻りごと。ひやうの時給仕女と、お金持の付け置かれた、岡村金右衛門といふ者はい。サアおのれ等引つゝ、つて屋敷へ連れ行く、腕を廻せしと詰かけられ、――「アアどう見られたら是非がない、なる程其の銀は廻りましたが、此のお侍は通り合はして連に成つた替り、何に御存じないお方。私一人縄かけて、サアお引きなされませ、サアく――」と油問を見すまし、彌忠太が着したる刀抜打ち、肩先すつと金右衛門、同じく抜いて切り結ぶ、兩方寄らぬ牛角の早業。彌忠太は八分に眼を配つて、サレくそこを、聲の助太刀ちからにて、強氣の點六より切り、さる刀を請は損じ、たじろぐ所を付け入つて、兩腕流れよろ／＼、うん／＼のつけに倒れ伏す。勘

六は一息ほつと、人や見ぬかと見まほす彌忠太、「勘六どうした。」「氣遣ひせんすな、もうとまつた。」
「トイシテ此の捌きはどうせう。」「ハナどうといふ高ぶけり。」「す、身どもとても爰には居られぬ、
ドレ其の銀を此方へ。」「彌忠太様、お前此の銀取ると笠の臺が飛ぶぞえ。藏屋敷の侍をばらしたか
らは、どうでおこや廻れぬ命、とても助からぬからは、何も角も勘六が引受けて、こな様の名は出さ
ぬ。」「さういふ内早往かんせ。」「七もエ、適れ男ぢや、縁あらば重ねて。」「細言云はす。」早う
早う。「す、さらば。」と別る、跡、結めた勘六そろ／＼と、死骸の傍へ立ち寄つて、「首尾よう行
たぞ。」「す、もうよごんすか。」と、むつくと起きる體は血塗れ。「勘六殿今のでよかつたか。」「はいと
もよいとも、物した物を又こつちへ。是れも貴様の切られやうが上手なから、何ほ切つても疵痛ひせ
ぬ、紀州源藏大儀でこんした。」「す、サそこらやさす物かいやい。」「ミタ方餘り拍子に、つて、よ
つ程の疵、いたみやせぬか。」「何のいやい、もう最前吉野丸付け置いた、夫れを知らずに今の侍め
が、逃げていにをつた態。」「コリヤ此の位の疵は、たつた一付けで癒るわいやい、はなたれが。」「そ
れ酒代の一兩。」「忝い、サア／＼是れからこちらの商賣、紀州源藏様お歸りぢや。」「ア、コリヤ立前ど
ころぢやない、アレもう芝居が果てる、人の見ぬ間に早う行け。」「サ、／＼、幕際綱八の、切狂の
果て太鼓、音に紛れて。三重

野崎村の段

年の内に春を向へて初梅の、花も時しる野崎村、久作といふ小百姓、せはしき中に大房は、萬事限りの醫病、娘おみつが介抱も、心一はい二親に、孝行自の石より、堅く有儀の爪はづれ、在所に惜しき育ちかや。冬違菱も焼り三味線、つはもすまたの弾き踊り、調子物の紫太鼓、木は上下綴木で六文、お夏清十郎の遣行々々、あづまからけのかいしよなき、こゝろ形でも五里一廻りしやれ、母様の頼ひで三味線も耳へは入らぬ、手の開かぬ通つて下され。清十郎抵へ、お夏が手を取り顔打ちながめ、同じ戀とはいはなから、お主の娘を連れ運く、おれより上の罪もたし、聞きとわない、通りや／＼といふ聲に、久作は納戸を出で、大坂ではやる紫太鼓、其方にも問かしたけれど、病人の氣に構はう、木とて眠んで氣晴らしやとて、義理の心も手を思ふ、恵みは厚き舌は掛の、煙草入かゝつて、腰取り出して一ドレ一附買ひとて、アチヤお夏清十郎、道行娘の草鞋。コレ見や、此のお夏は手代と念頭して、姫路を飄落する道行、同じ娘でも世は様々、幾三里の大坂へ、芝居一つ兄にも行かず、今度の大坂から目立たるお夏を介抱、お夏は俺が喰物まで、其の様に氣を付けて給る孝行娘、若し焚れでも出ようかと、おりの夫れを案じられぬ。口は勿論ない

事言はしやんす、煩うて居さんす母様より、健なお前のお心苦勞、せめてこの手助けと思つた許り。其の様な事苦にやんで、煩ひでも出ようかと、私や夫れが悲しうござんす。「ハハ、わつけない。したが百日と限りのあるば、が大柄、案じるも無理ではない。か玄庵殿の加減の薬で、今朝から末の晩蓋におも湯が二はい通つた、見かけに寄るに巧者な番首殿、ヤ幸ひ今日は日和もよし、久松が親方殿へ最暮の禮に往て来るほどに、随分ば、氣をつきやうと、いひつ、脚絆草鞋がけ、紐引さしむれば、す、父様とした事が、此の短い日にモウ其過ぎ、明日の事になさんせいでし。「何のい、いやい、年こそ寄つたれ此の足に覺えがある、一時三里犬走り、日暮までには戻つてくる。歳暮の祝儀はコレ、此の蘆薈、山の芋は鱈になる、久松が年が明いたらば、汝は又お内儀になる、夫れ藥しみによう留守せいでりや往て来う」と身拵へ、蘆薈屑に、やえいとこな、表へ出でしが立ち止り、「取りわけ今年はずう喰いた此の情、何より角よりよい土産」と、春待ち顔に咲く花を、手折つて苧に一枝を、添へてひまひよか野崎村、跡に見なして出で行く。影見送りて久松が、事のみ思ひ免や角と、胸に一杯半分、水量の込む薬鍋、一へぞ入れる生姜より、辛い面つき久三の小助、久松引連れ入口から「久作内に居やるか」と、つつと這入ればおみつは嬉しく、「す、久松様、ようやア戻つて下さんした。定めてあなたは送りのお方、お茶と煙草」と嬉しさに、立つたに居た氣もそゝろ、「エ、嬉しいわい、う

そ磯い在所の茶飲みにはこぬ。コリや追従せずと聞いて置けよ、此の久松めが親方の銀一貫五百日、お山狂びにちよろまかしたによつて、今日連れて來たわな、久作と三つがたわで詮議するのぢや、親父を出せ／＼／＼。」と辰巳上り、身の誤りに久松が、差俯いて詞さへ無いには苦しやと思ひながら、「御腹立ちはお道理ながら、何のママ久松様に限つて、よもやうした事は有るまい、定めて是れは何ぞの間違ひ。覚えがなくばないといふ、ツイ言譯をして下さんせいな。」「ハ、べるわ儲否るわ。コリヤマイ、天宮こそ前髪なれ其の素早さ、傍輩には辭宜もなしに、取つて置きのお娘まで、此の跡はいはすにこます。堀貨泛のはつた行き過ぎ丁稚め、首繩のかゝること、言譯に如上があるかい。小倉の屋敷へ講取りに往た偽替の銀、御役人から改めて渡つたは正貨、内へ戻つて明けた事がわやひんの胸脈、道の間ですりかへた品玉の太夫、早咲久松でございます、ハリトリ／＼。白眼剣くは無念なか、無念なら銀立てるか、有るまいがな。サア久作は何所に居る、出さるまば引き出さう。」と、懸け入る其を久松引きとめ、「成程銀をすりかへられたは皆私が無調法、身の明分の立つまでは、在所へ行けと後室様の結構な御料簡、それを其方が。」「ヤイ／＼／＼なに吐すぞい、そのや汝が勝手料簡の間き損ひ、俺には此の詮議仕ぬいてこいと、内諍で後家御の言付け、ぢやによつてめつきしやつきするが何ぢや、ひんこめ出され。」と大聲を、おみつが押へて、「コレ申し御もでござんすけれど、奥の病

人に能い事がまう聞かしましては、物氣の障り、もそつと靜かに、「イヤ高ういふのぢやなく、是れ程わたくしに聞き耳潰すは、親父もなるの仕事ぢやない。」と父様はあなたの方へ、歳暮の禮に往かれました。どうして道が違つた事、皆し持病やなど發りはせぬかと、外も氣が、病氣への聞えも氣遣ひ、久松が身の言辭に寄つたんだ、猶に覺えるばかりなり。弱みへ付け込む患者根性、大坂へ往たが定なり、否ながら道で逢ふ者。そんなてれぬかすなや。下しもう家捜しと出かけてなるまい、我々も驚かぬとなりとおふを引寄せ、取り付く久松面倒なと、踏むやら蹴るやら無法に打罵、馬方もなき折々に、道引き返しいつきなき、戻る久作願け入つて、小助を引き寄せ突き飛ばし、「宵守の間へ来てわづらはしは、ほかに寄つて申さぬぞ。」とまう戻つて下さんした、最前から久松様をなごし、「よいてや、久作が戻るからは嫌もなつと落着けい」と、納める程には業腹澤し、大まいの銀り負ひした其のばり、論議に來た小助は親方の代り、夫れを又わりや何で投けたのぢやない。是れは迷惑な、ひばり骨見る様な手で、血氣な此方投けたのではない。怪我のはすみ、出廻れの曲り途で道が違つて、宵守の間へ、大坂から息子が來たぞやと、若い者共が知らしてくれたで、行き戻り五六里を助かつた。徳安堤引き返して戻つたが、そんなら何か、其の引負で久松は戻つたのか、と、夫れ聞いてマア落着いた。マア、何角は指し書いて、傳繼衆の御世話であらうと、陰ながら言うてばつかも居ま

すわいの。寒い時分によう連立つて来て下つたなり、ソレおみつゝ茶など汲まんかいやい。「コリヤ納めな／＼、わいの夢に見た事も有るまいが、一貫五百日といふ銀高、子の科は親にかゝる。銀立てるか何しほまた頼はうか、二つ一つの返答聞こわい。」「ハテよいわいの、其の様に息ぜいはるは太き／＼毒、兎角人間は心長う持つのが業ぢや。其の業で思ひ出した、土産にせうと思つた此の山の芋をとろ、にして、出来合の麥飯を造ぜうかい。」「置けやい、見せかけ許りの正直倒し、麥飯のとろ、のこ、ぬら／＼とは吐させぬ、あんだらくさい」と蹴らるす藥苞、破れてぐわ／＼と出る。丁銀「ソレ久松が引負の銀、渡したからは言分あるまい、とつとと持つていなしやれ」と、聞いておみつも久松も、思ひがけなき驚きに、小助もぎふつと仕ながら、包改め「このや生糺ぢや、そそ出にくい所からよう出たな、吹きや飛ぶやうな内」の態で、泥鰌三つで一貫五百日、請取るからは言分ないわい。「や、其方に言分がなうても、此方に／＼つと言分があると、言ふも古い糺ぢや。是れまで御世話になつた親を様、御恩こそ有様はなけれど、人に欺され取られた銀、引負の惡遣ひのと、名を付けて貰うては泥鰌が前まぬ、というて無理難取るではない、親が暫く預つて置く程に、此の通りやうながよい。」「モ、二十年能が昔いと、わがこれには／＼つと馳走もあれど、入らざる殺生、／＼／＼早う仕込んだがよい。」「一言はれてこつやう氣味悪く、銀の出入さへ滑んで了つ、外の事はお構ひない、さうば

お暇いとままうさう。」と、打邊取り出し捻ぢ込み押し込み、「ハ、ア命冥加いのちみやがな、一貫五百日内いっくわんめいうちへいんで出した所ところが、墓むになつて居ゐやせまいか。」ハテ仇口あだぐちを聞かすとも足元の明あかるい中うち。」「すいなきぢや、銀ぎんこそは主しゅの物、何なんの其その俺おれがでに、俺おれがかたけて、俺おれが足あしで、俺おれが歩あるいて、俺おれが體からだがいぬるに、ぐつとも言い分ぶんない筈はず。」と、へらす口してとつば門口柱かどぐちで天窗あたま、アいたし小助こすけは足早あしはやに、大坂おさかの方かたへ立ち歸かへる。おみつは親おやの氣きを兼ねて、いらへ無なければ久松ひさまつすり寄り、「此この身みの手話てわは通うれても、此このお難なんしで餘程よほどの銀ぎん、跡あとでお前の御難儀ごなんぎには。」ハテ俺おれぢやとて相應さうおの隠ひそまひはせまい物ものか、始末しまつしてためたあの銀ぎんは、黒谷くろやの方かた丈だけへ上あげる冥加銀めいがぎん、氣遣きづかひ仕しやんな、まんざらあれ許ゆるりでもないわいの。改めていふでなければ、末すえはわが身みとひとつにする約束やくそくで、此このおみつはば、が連子つれこ。あれも否いやでもないさうなり、折ひもあらば親方殿おやたきへ、隙ひまの事を頼たのはうと思おもうて居ゐたが、是これが眞まことのもつけの重寶ちゆうほう、もう大坂おさかへいなしはせぬ。早却さしかくなれど日柄ひがらもよし、今日けふ祝言しゆげんの杯さかずきさすぞ、何なんとおみつよ嬉うれしいか／＼。我われ等は又また天齋てんさいを丸まるめ、参まゐり下向しもむかに打うるか、らうと、頼たのみ寺てらへ頼たのうて、袈裟けさも衣ころももちやんと着きけて置おいたてや。幸さいひ餅もちは搗ついて有あり、酒さけも組重くみぢゆうも正月しうげつ前まへで用意よういはしてある、オア／＼早はやう拵こしらや。」と、敷ふから棒ぼうをつつかけた、親おやの詞ことばに吐胸はなの久松ひさまつ、しらぬ娘むすめは嬉うれしいやら、また靴くつかしき殿とまうけ、顔かほは上氣じやうきの荷あつね、袂たもとくはへるおほこさを、見みるにつけては今更いまさらに、否いや應おうならぬ親おやの前まへ、急きふに思案しあんも出での口くちの、壁か

にいの字を垣一重、裏の病架に咳嗽く聲、「おんニおちの事に取り込んで、定めて姿が寂しからう、久しぶりだ久松にも逢はして、此の事を聞かしたら藥より利目がよい。ハ箆いて評判居すと、おみつ鱈も刻んでおけ、久松おぢや。」と先に立ち、悦びいさむ親の氣を、知つて涙らぬ問合紙、襖引き立て入りにけり。跡に娘は氣もいそく、「日頃の願ひが叶うたも、天神様、観音様、第一は親のお蔭。エ、こんな事なら今朝あたり、髪も結うて置かうもの、露草の付けやうな髪、どういうて能かろやら、髪束縮拵へも、祝ふ大根の友白髪、茶袋刀と氣も勇み、手元も麗うなまき／＼と、切りても切れぬ髪女や、本の白地を懸かに、お染は思ひ久松が、跡を慕うて野崎村、是傳ひに濟うと、母を目常に軒のつま、供のおよしが聲高に、「申し御寮人様、かの人逢はう許り、寒、時方の野崎参り、今船の上り場で救へて貰うた日印の此の梅、おはなを度でござりませうと、さういふ、もそつと静かにいやいなう、久松に逢ひたさに、來事は來ても在所の事、目立つては氣が難。そなたは船へ、早ういふと追ひやり、立ち寄りながら越えかぬる、意の峠の敷居高く、「物申を頼み申しませう。」と、いふもこはく、暖流越し、「百姓の内へ改まつた、川が有るなら這入らしやんせ。」「ハイ／＼率爾ながら久作様は内方でござんすか。」左様なら大坂から久松といふ人が、今日戻つて見た答、ちよつと逢はして下さんせ。」と、いふ詞つき形かたち、常々聞いた浦屋の、叔はお染と氣氣初物、胸はもや／＼

かき交まじり合あひ、まな板押いしおしやり戸口とぐちに立ち寄り、「見れば見る程ほどエ、美しい、あた可愛かまひらしい其その顔かほで、久松ひまつ様に逢あはしてくれ、そんなお方はこちや知らぬ、餘所よゝを尋ねて見やしやんせ、阿呆あほうらしい。」と腹はら立ちも盛も、心付こころづかねば、「ホ、ニまあ何なんぞ土産みやげと思おもうても急きふな事こと、コレノゝ女子おんな衆しゅう、さもしけねども是こゝれおれ」と、夢にも夫それと白玉しらたまか、露つゆを襖紗あはだちに包つつみ盡まし出せば、「こりや何なんぢや大所おほところの御寮人ごせうじん様さま、様々さまざまと言いはれても、心こゝろが至いたらぬ置おかしやんせ、在所ざいしよの女おんなと侮あはつてか、欲ほしくばお前にやるわいな」と、やら腹はら立ちに門口かどぐちへ、ほればほけてばらノゝと、草くさに露銀芥子人形つゆぎんかしのにんぎよう、微塵みじんに香簪かうざん割わりれ出した、中なかつへつかゝ親おや子連こづね、出ででくる久作きうさく、「どうぢや繪えは出来できたであらう。叔親言おやしういひの事こと要いか聞きいてきつゝい俊とび、ぢやが年は寄よるまい物もの、きつきのやつさもつさで、取とり上あしたか頭痛づうしゆもする、いかう肩かたがつかへて来たきた。ア、繪えの數かずは爭あらそはれぬ物ものぢやわいの。」左様さやうならそろノゝ私わたくしが揉もんで上げませうか。」ソリヤ久松ひまつ忒おい、老おいては子こに随したがへぢや、孝行かうぎやうにかたみ恨うらみのない様やうにおみつよ、三里さんりをすゑて晝ひるれ。」アイノゝそんなら風かぜの來やぬ様やうに。」と、何なんがな表おもてへあたり眼まなこ、門かどの戸こびつしやりさし艾もみ、燃もゆる思おもひは娘氣むすめぎの、細ほき線香せんかうに立つ煙けぶり。「サアノゝ親おや子こぢやとて遠慮えんりよはない、艾もみも晝ひる癖くせも大綱おほづなみにやつてくれ。」「ア、ノゝきつうつかへてござりますでえ。」「さうで有あらうノゝ、次手ついでに七九しちくをやつてたも、オット微こへるぞノゝ。」「サア居すゑますでえ。」「アツ、ノゝえらいぞノゝ、あすが日死ひしなうと火葬くわさうは止とめに

して貰ひませう、丈夫に見えてももう古家、屋根もねだもこりや一時に割替ぢや、アッ、ハ、ハ、」
「す、父様の仰出な、皮切りは仕舞でござんす、ホニ風が當ると思や、誰ぢや表を明けたさうな、
しめて参じよ。」と立つを引きとめ「ハテよいわいの、晝中に鬱陶しい、オウ久松々々々、アッ、久
松、餘所見許りして居すと、しか／＼と揉まぬかいの。」「アッ餘所見はせぬけれど、エ、親くが悪い
折が悪い、悪い／＼／＼。」と目顔のしかた「アッ悪いの親くのと、足に灸こそすゑてゐれ、何所もおみ
つは親きはせぬ。」「アッアッ悪いと言ひましたは慥か今日は當夜は、夫れに灸は悪い／＼、悪いとい
うたのでござります。」「エ、愚氣な事を、此のやうに述べるは、およく／＼灸す余作をする、そこで
久作、アッ、エ、何ぢやわい、わがみ達も、違者なやうに灸でもするわい、俺も、の孝行ぢやぞ
や。」「アッさうでござんすとも、久松様には振袖の美しい持病があつて、招いだや呼び出したり、悪い
らしい、アッ病づらが遣入らぬやうに、敷の上へ大さうしてすゑて置きたい。」「アッおみ／＼殿、振袖
の持病のと、色々の耳こすり、はしたない事聞いてはゐぬぞや。」「アッ、ハ、ハ、ハ、變つた事かお氣に障へ
た。」「アッ、障ないぢや。」「こりやをかしい、其の御聞くぞ。」「いふぞや」と我を足して聞かぬ、外
に聞く身の氣の毒さ、振袖肌着に玉の汗、久作も持て振ひ、アッ、アッ、アッ、足もひびく／＼するかなひ
りひりするがな。まだ祝言もせぬ先から、女夫婦ひの取り越しか、笑聲のがはり、喧嘩の行向さす

のかい。やい二人ながら嗜めく。」「イエ、構うて下さんすな、今の様な愛想づかしも、病づらめ
がいほしくつる。」「何をいふやらモウノ、兩方とも、俺が貰ひぢや。ヨ、中直しが直に取り結びの
杯、髪も結うたり鐵景もつけたり、湯もつかうて花嫁御を、コリヤ作つて置け。」とうち笑ひ、無理
に納戸へ連れて行く。其の間運しと騙け入るお染、逢ひたかつたと久松に纏りつけば、「ア、コレ聲が
高うござります、思ひがけない爰へはどうして、譯を聞かしてく。」と、問はれて漸う顔を上げ、「譯
はそつちに覺えがあらう。私が事は思ひきり、山家屋へ嫁入せいと、残しておきやつたコレ此の文。
そなたは思ひ切る氣でも、私や何ほでも得切らぬ。餘り逢ひたさ懐かしさ、勿體ない事ながら、觀音
様をかこつけて、逢ひにきたやら南やら、しらぬ在所も厭ひはせぬ。二人一所に添はうなら、飯も炊
かうし織り紡ぎ、どんな貧しい暮しでも、私や嬉しいと思ふ物。女の道を背けとは、聞えぬわいの胸
慾。」と、恨みのたけを友禪の、振の袂に北時雨、晴間は更になかりけり。曇りがちな久松も、青撫
でさすり聲密め、「其のお恨みは聞えてあれど、十の年から今日が日まで、船車にも積まれた御恩、仇
で反す身の淫ら、冥加のほども恐ろしければ、委細は文に残した通り、山家屋へござるのが母御へ孝
行家の爲、よう得心をなされや。」と、いへど答へも涙聲、「否ぢやノ、私や否ぢや。今となつてさう言
やるは、是れまでわしに隠しやつた、許嫁の娘御と女夫になりたい心ぢやの。是非山家屋へ行けなら

ば、覺悟は疾うから極めて居る」を、用意の剃刀取り直せば、夫れは短氣と久松が、留めてもとまらず、「イヤノ、ノ、そなたに別れ片時も、何樂しみに生きて居よう、替めすと殺してノ、」と、思へ詰めたる其の風情「そんなら是れ程申しても、御聞き分けはござりませぬか」「一派はぬ時は死ぬるといふ、誓紙に讀がつかれうかいなう」「ハア達て申せば主殺し、命にかへてそれ程まで」「思ふが無理か女房ぢや物、叶はぬ時は私も一所に」「お染様」「久松」と、互に手に手取りかはす、悲縁深き契りかや。始終後に立ち聞く親「其の思案要からうし、言はれてはつと久松お染、膝を痺へて一、大事かいノ、マアノ下」に居や、因縁とは言ひながら、和泉國百津の御家中、和泉大夫様といふれこそこの息子殿、聊かの事で家が潰れてから、わがみの乳母は佐々味、其の嫁で十の年まで育て上げた此の久作は後で姐、草深い在所に置こより、智慧付けのため油屋へ丁種奉公「夫れ程まで成人して商ひの道讀み書きまで、人並になつたに、有りて親方の大恩、其の恩も義理と報へぬは、是れ見や、先に買つたお夏清十郎の道行本、嫁入の極つてあるまの讀をそ、なかつとは、道知らす人て無しめ。」「こりや清十郎が話おすわいの、疾うから意見も仕たかつけねど、丁度今の様な事が有らうかし、夫れが悲しう一日延び一日延びする間、降つて来た銀の事も事、是れ言ひ立てに御か貰ひ分けて置くのが上分別と思ふから、引負の銀の下而、どの様に氣ばつても、高き額れた水呑み

百姓、僅かの田地著頼著せけ、おみつめが勘筈まで賣代なし、漸う拵へた先刻の銀、なさぬ中でも
親子といふ名が有るからは、内心分けた手も同然、可愛うなうて何とせう。コレお染様、ではない此
の本のお夏とやら、清十郎を可愛がつて下さるは、嬉しいやうで恨めしいわいの。聞いての通りおみ
つめと女夫にするを棄しみに、痛苦を堪へて居るアノ婆様に、今の様な事聞かしたら、何と命がござ
りませうぞ。若い水の出端には、そこらの義理も縁紙の皮と投げやつて、こゝ様といつまでも、
添ひ逢はれるにしてからが、戸は立てられぬ世上の口ぢやわいの。エ、アノ久松めは、辛抱した女房
藏うて、身上的に能い油屋の増に成つたは、コレ榮耀がしたぢや皆欲ぢや、人の皮著た畜生めと、在
所は勿論大坂中に指さされ、人交はりがなりませうかい。コレノノノ、愛の道理を聞き分けて、思
ひ切つて下され。申しコレ拜みますわいのノノ。是れ程いうても聞き入れず、親御達が満足に奉仕付
けて置かしやつた其の體を、切りさいて淺ましく死ぬるのが女の道か心中か。サ久松も其の通り不義
密夫の悪名掛け、實親の名を汚す許りか、世間の義理も主の思も、むちやくちやにして仕舞ふのが、
侍の子か人間か、返事次第で愚案がある」と、眞實眞身の剛意見、骨身に徹へて久松お染、何と返事
もない。是れ程いうても返答のないは、コリヤ二人ながら不得心ぢやの。一々、勿體ない、實の
親にも將つた御恩、送らぬのみか苦を懸けるも、私が不所存から。一々、其方の御では無い、

皆此一身の浮き沈み、過にも身にもかへまいと、思ひ詰めても世の中よのちうの義理にはどうもかへられぬ、
成程思ひ切りませう」「一す、よう御合點なされました、私もふつり思ひ切り、おみつと祝言致しま
する」「一そんなら其方も」「一おまへも」と、互に目と目にしらせ合ふ、心の覺悟は白髮の親父、「アノ
さつぱりと思ひ切つて、祝言をしてたまるか」「何の歳を申しませう」「一娘様も今の詞に、敬母も違
ひはござりませぬか」「一女松の事は是れ親や、私や嫁入をするわいの」「一ア、出来た、わくつけ
な親父めと喉も立てず、よう聞き入れて下さりました。晩の間おしれぬ妻が命、息のある中祝言が済
んだと、聞かして下さるが大きな善根、我は急ぎぢや、今こゝで拜さす、おみつノノ」と呼び
立つる、聲聞えずや病氣より、母は漸く探り出で、親父殿久松とここに、待ちに待つた娘が祝言、
縛しうす、此の間にはい氣色のよき、大娘の上様まで漬れた国衆人、備極のお迎へを待ち兼ね
たに、難言の命があつたりのこと、傍ぶ群を聞くといふも、奉行な久松が膝、不事な所生より、心
には入るまいけねと、其の面影見て下さり、頼みとするといふ中も、妻火は胸にせき上れば、「エ、
此の寒いのに寒所に、矢更居たがござります、冷まれば悪い」と右側の上、抱きかへて久松が、
介抱御在納戸より、親子の中も丸腰に、柔せた経鏡手鍋、運ぶ久作、お婆、矢更實では居るら
いで、したが烏索のない代り、世話事の財と程々新しい、目の見ものは日出度い秀知ぢや、ハ、ハ、

エ、日出度い次手に此の嫁は何所に居るぞい、おみつく。尻轢に、立つて一間を差し覗き、ハテ
出くすみをして居るわ、夫れでは果てぬ。」と手を取つて、「サアくマアく、嫁の座へ直つたりく。」
エ、ときに一家一門著の儘の祝言に、改まつた綿帽子、うつとしからう取つて遣る。」と、腕がすはず
みに、筭も、ぬけて惜しむも投鳥田、根よりふつと切り髪を、見るに驚く久松お染、久作暴れてこ
りやどうぢやと、いふ口おさへて、「コレ申し父様もおふたも様も、何にもいうて下さんすな、最前か
ら何事も、残らず聞いてをりました。思ひ切つたといはしやんすは、義理にせまつた表向き、底の心
はお二人ながら、死ぬる覺悟でござんしよがな、サ死ぬる覺悟で居やしやんす。母様の大病、どうぞ
命が取りとめたさ、私やもう頓と思ひ切つた、サ切つて祝うた髪かたち、見て下さんせ。」と兩肌を、
脱いだ下著は白無垢の、首にかけたる五條袈裟、思ひ切つたる日の中に、うかむ涙は水晶の、玉より
清き真心に、今更何と詞さへ、涙呑み込み込んで、こたふる辛さ久松お染、久作も手を合はせ、
「何にも言はぬ此の通りぢやくく。エ、女夫にしたい許りに、そこら邊に心もつかず、著の花を
散らして退けたは、皆おれが鈍なから。赦してくれ。」も口の内、聞え憚る忍び泣き。「ア、冥加ない事
仰有ります、所詮堂みは叶ふまいと、思ひの外祝言の、杯する様になつて、嬉しかつたは只半時の
無理にわたしが添はうとすれば、死なしやんすを知りながら、どう杯がなりませうぞいな。」とおみ

つの何をいやるやら、女夫になりやるを此の母も、悦びこそすれ何の死の、マウ親父殿、「ソチャワ
イノとても此の世はない縁でも、せめて未來は、ア、イヤ未來までも憂らぬといふ、杯さ」と立ち
上り、口に唱名ぶつくと、沸壇明けて取り出す、花瓶の松に鶴龜も、あの世を契る心の烏臺「サ
アサア斯うしてなると杯さすのが、せめてもの心許し。エ、言ひたい事だらけぢやけれど、此のや
うな座敷には、たべ付けぬ此の親父、三々くどうは言はぬが花嫁、一つ飲んで久松へ、ア、日出度い
日出度い、婆も賑かし嬉しかる」「ア、嬉しい段かいの、一世一度の縁が晴、定めて髪も美しう出来
たである、さき葬に結やつたかに「アエ」「そんなら兩親か」「ア、兩親ともなく、思ひがけなう
すつぱりと、アいやさつぱりと能う出来たわいの」「ア、親父殿の言はしき通り、自慢も少ないか
髪は大ては上手ぢやござらぬ。」「ア、前が大坂の土産に貰つた漆の箱、今日の晴に差しやつた
かや。著ものは取つて置きの花色、加賀の御模はそれかし。」「ア、ア、それ着て居やるか」「ア、ア、」
「ア、我がみにはよう似合ふぞいの、ならう事なら纏束付けて、顔直しやつた人々も、たつた一
日見て死んだら、善光寺様の御印文にも葬つて未來は極樂往生。」「ア、ア、ア、思ひした事が、日出度い
中で思はしと、久松必ず氣にかけてたもんやいのに、子に逢ふ暗き目に去れさ、ア、ア、ア、
悦ぶ母親の、心を察し誰々も泣き聲せじとくひしば、四人、涙八つの袖、復た八つの落し水、膝の

堤や越えぬらん。見聞くつらさに忍びかね、お染は覺悟の以前の剃刀、南無阿彌陀佛と自害の體、久
作僂て押し止めのコレ姫御何が不足で死ぬるのぢや」と、聞き間違て娘そと母は驚き、「コレおみつ
待つて／＼」と這ひ寄りて、探る手先に五條袈裟「ヤア此の袈裟といひ此の頭、どうして髪を切つた
のぢや、誰を聞かして／＼」と、急げばせく程咳き上り、病苦に悩む母親を、見るに娘は猶悲しく、
「コレ母様こらへて下さんせ、添ふに添はれぬ品になり、私や尼になつたわいな」「ヤア／＼、そ
んならづつきから、母が氣を休めう爲」「オオ來世の縁を結ぶ杯、此の世の縁は切れてあるわい
の。」「ハア。」「オ、尤もぢや／＼、そなたは見えぬがいつそまし、傍でまじ／＼見て居る心、推し
てたもい」と、いふ聲咽に詰らせば、「サア／＼其の悲しみをかけるのも、此のお染から起つた
事、死ぬるがせめて身の言譯」「イエ／＼死なねばならぬ此の久松、私から先へ」と騙け寄るを、久
作剃刀引つたくり「是れ程いうても聞き入れず、是非死にたくばおれから先へ、物の見事に死んで見
さうか。」「爺様が死なさんすりや、私も生きては居ませぬぞえ。」「オ、娘出かしやつた、わざい在所
に育つても、貞女の道を辨へて、よう尼になりやつたなう。そこにごさるが噂に聞いたお染様か、
お前様や久松を殺しとむないばつかりに、蝶よ花よと楽しんだ一人娘を尼にして、出かしたといふ心
の中、思ひやりがあるならば、なぞ存へては下されぬ。折角娘が志、無足にするとお慰め、と、堪

へし涙一時に、わつと許りに取り亂せば、「さ、道理ぢやない、サアノ、どうあつても死にたくば、要
も娘も俺も死ぬる、三人ながら見殺す氣か」「サアに、れは」「思ひとまつて下るるか、但し死なうか
サアノ、ノ、」と三方が、義理と情と恩愛の、しめ木にかゝる久松お染、死ぬる事さへ叶はぬは、い
かなる過去の報いぞと、前後正體泣き倒れ、咽を返るこそ道理なれ。久作涙押し拭ひ、「どうやら斯う
やら合點が行たさうな、嘸母御様が案じてござらう、大事の數御禮かな者に。」「サアそれには及びま
せぬ、母が慥かに請取りました」と、言ひつゝ、這入れば、「サア母様、ハアはつ」と許りに詞なく差し
附けば、「コレノ、お染、野崎参りしやつたと、聞いて餘り氣遣ひと、サ、サ、氣慰みによからうと、
跡追つて来て何事も残らず聞いた。夫婦の衆の深切、おふつ女郎の志、最前からのまて、おや
んで許り居ましたわいなう。サ、觀音様の御利益で、怪我過すのなかつた特しう、是れから直に御禮
参り、サ、に足ればさもしい物なれど、御病人への見舞の印、竟末ながらいと詞かす、言はず用過ぎ
ぬ折を、僕の男が差し置けば、「サアノ、冥加もない御見舞、戴きます」と取り上げると、手元はづ
れて取り落せば、中よりくわらりと以前のおサアうつき渡した此の銀を、「サ、表向で取つたり
や事は済む、改めて尼御へ布袍、せめて娘が冥加ぢやないなう。」「言ひが立つからは久松も元の通り、
戻つて日出度う正月しや。取込みの申長居も不慮、娘もおぢや」と手を引いて、表へ出れば久

作も門送りして、「是れはマア、何とお禮を申しませう、お罷宜政すも却つて無様け、せめてものお
 土産に、折つて置いた此の早咲、目出たい春を松竹梅と、お家も榮え蓬萊の飾物、幾久松が御奉公、
 大事に勤めて此の御恩、忘れぬ證。」と差し出せば、「オ、心ありけな此の早咲、譬へていへば雨露の、
 恵みをうけぬ室咲は、葉むも早し香も薄い、盛りの春を待てといふ、二人への良い教訓、殊更内には
 口きがない者もあれば、何角に遠慮せねばならぬ。幸ひ私が乗つて來た、あの竹輿で、コレ久松其方
 は堤お染は船、別れ／＼に往ぬのが世上の補ひ心の遠慮。」「左様でござりまするとも。お志ぢや
 乗つて往にや。」「娘は船へ」と親々の、詞に否も言ひかぬる、駕鸞の片羽の片々に、別れて二人は乗
 り移れば、「そんなら久松もう行きやるか、來る正月の敷入を、母も必ず待つて居る。」「兄様お健でお
 染様もうおさらば。」と、言葉まで早改まるおみつ尼、哀れを餘所にみなれ棹。「船にも積まれぬ御主の
 御恩、親の恵みの冥加ない、取りわけておみつ殿、斯うなり下るも前の世の、定まり事と諦めて、お
 年寄られた親達の、介抱頼む。」と言ひさして、泣く音伏籠の面ぶせ、船の中にも聲上げて、「よしな
 私故おみつ様の、縁を切らしたお憎しみ、堪忍して下さんせ。」「ア、わけもないお染様、浮世放れた
 尼ぢやもの、そんな心を勿體ない、短氣起して下さんすな。」「ア、娘が言ふ通り、死んで花實は咲か
 ぬ梅、一本花にならぬ様に、目出度い盛りを見せてくれ。随分達者で。」「ハイ／＼お前も御無事で、

お袋様もお娘御も、おどらばさらば。」「さらば、さう遠ざかる、船と堤はへだたれど、縁を引續一筋に、思ひあうたる恋なから、義理の橋柄のかせ杭、竹奥に比翼を引きわくる、心々ぞ、重世なかりけり。

長町の段

東は外堀に内、打ち納めたる一層あり、書を置く長町の、東店賣物家々の、春を請取る貸つき屋、賑ふ日取付の音、とんと、笑うからせつきくる、下女が丸面とり附る、縁の太小手持、分相違一年前め、實に御國の賑なり。忙し中、酒屋の、小坊は野に風言草包、さうと、来る酒屋の門、「アア勘六、」にか、今日は年越で一日の休み、明を過ぎず貸物にまで置かれるとは、さうい精の出しやうおつたに「アア」是れもさう事なれやわいの、何が寂なり宿はなし、年中の飯米は圓訖か餅か、五文取、代五六百。此の値目賃で帳納すのおやが、貴族の世話でその門へ、較りにははれて行くにつは、山林の座敷での仕事、久松のがむろくとおれが顔を眺めると、どうやら氣味が悪いわい、「アア」おれは頭に似合はぬ直なる事いふわい。貴族を統々に入れて置くのも、久松を目論にかけては出す仕事の特油、あすは大晦日、仕事仕事もや、朝から来てたも。今夜は徳の子でも抱いて寝る

晩、そで我等も御貰うて、是れから色の座へ行くのちやに、「さうかして月代も、つほり」「ア
「このや障つてくれた、只今駄で結ひ立てちや」「ふ、それに又其の風呂敷は何ぞやぞい」「是れが
「このや立てに行く太盃衣裳ちや、内からは著て出られぬ故こ、まで小出も、折紙は即ち此の露の古手
屋に誂へて置いた。ヤリ、此の間の茶箱締仕立てであるかな。ヤ何ぞや、もう追付出来ます。こ、
遅い、今夜色に見せに行くのちや、爰から直に著かへて行き、何でも今夜はえら立てちや。御六
貴様も新殿に連れて行く、其の代り俺を旦那あしらひにして給も、コレ必ず久三といふまいぞ」と、
太半樂の下緒古、聊へ入れば立ちかはる、季もあら玉や往來の、足も春めく祇園道、手持つ身には年
徳の、恵が参りもそこへに、忙しう戻る久松が、指り違うたる提灯の、印に日早く見返る女へ申し
申しお若いの、ハハ、ごなたでござります」「一、ヤ幸嗣なことちやが若しお前は」と、言ひつゝ、明り
に顔見合はせ、「久松様か」「ヤア乳母のお庄、是れは」とぼつたり小提灯へ、竜の煙を消さすと、
とつくりと久振りの顔見ませう。半元服さしやつてから、お果てなされた丈夫太様にとんと其の儘、
ま、きつとした良い殿振やの。此の間の文定めて見やしやんしたである、乳母が日頃の念願叶ひ、今
度殿様におめでたで、多くの科人も御赦免なさる、折漣、一つの功さへ有るならば、丈夫太が倅久松
和泉の本國へ歸参さするは此の時、其の功の立て様は先だつて紛失の古光の守刀、則ち此の度のお

日出度に正月三日鎧開きにお飾りなさるゝ、それまでに其の刀を許諾して差し上げなむ、昨日相違有らじと、御家老中御供を渡され、まだ年もあるけれど、親方様へ願ひ、働き掛けがあつた。かまたか、マア年越に健な顔見て、嬉しうござる。御念なき、御身の間に久松は、今更國へ生なれぬ。明けてはいれず、「夫れはマア嬉しいが、師走の内も今日明日になつて、働いてほしい急に出張、さうして其の吉光の刀は手に入れたか。」「うればいさ、大坂府中の買置にある。聞いた故、尋ねに往たらば、其實は半年前に流したといふ。此の刀を失せたと折々、お國を出奔した鈴木彌次太、此奴が盗んで立ち退いたに類れてある。其の賣主の名を覚えても居ないから、此の買置と相對と思はるゝ。」「フウ何といやる、谷町や京屋には、暫く山家屋とに言はれよ。」「オ、それ〴〵、其の山家屋佐四郎、彌次太は此の長町に居るかな。隨分な手振りがあるから、必ず氣遣ひさしやんすな、さうしてその家の御用金でござる。御子、マア私とした事が、やつぱり功利的に、是を千両百兩のお金で、立派な馬に乗せて来して、はい。同様に國人より、お目出たことなりです。一個から四まで乳母の御用、これに於ける久松、けふまで命を救ひ、其の方へ見入作殿のお情、其の刀の質請にも、定めて金が入れられ、是れ見たしにもなるまいけれど、重々世話の恩返し。萬分の一歩七つ八つ、守袋を明けて出す、はずみに落し、お葉が也、隠すを聞かぬ、一里十八松林、奉公人に情合は

ぬ黄金、誰に借らしやつたぞ、台駟が行かぬ。」ア、イヤノ、氣遣ひな事ぢやない。此の一步は小遣にせいと御寮人様が下さつた、其の書いた物は大事の守、こゝちへたもの。「イヤ待たしやんせ、ハテ情深い御寮人様ぢやな、シタガ餘り親方の情過ぎるも善し惡しの、なには免もあれ、しをらしいお前の志の、金預つて置きませう。此の書いた物は熊野の牛王か、定めて大切な守であらう、神様の名を書いた物、そゝこしうしては今の様に、つい溝へでも取り落せば、守が却つて其の身に染る、こりや私が預ります。」と、あらりと見付けて懐へ、くろめる乳母は守神胸に納めて、「久松様、明日は私もお家へ参り、俱々に暇の願ひ、親方持ちやマア早う往なしゃんせ、諸事は翌日。」と言ひ残し、立ち別れては立ち留り、「コレ申し必ず國へ行くのぢやぞえ。ア、どうやら濟まぬ顔付ぢや、ほんに又油斷のならぬ、いつまでも坊様ぢやと思つて居る内、つい坊の親にならんすなえ。コレ怪我さんすな和子、いとしや仕馴れぬ奉公を。」と、昔思へばひと半、涙催す師走空、見返りノ、三重別れ行く。往來人絶え、長町の夜店の賣聲、小唄物真似、なまいたんやほ厄掃ひましよ、落しましよ、ヤアラ目出度いな、何ほう日出度いな、こなたの御壽命申さうなら、鶴は千年龜ぢやないか、三か六かと一所へ、眩き夜の小働き、ナントよい仕事したか、サアひがだいの街妻、侍に逢うて物いふ間に、ちほ引いた、ヤア結構な守ぢやな、中には一歩書いた物も入れてある、日本橋でうふせう。アレ／＼又

御妻が此方へうせる、かはせ／＼とばら／＼に、敵る三人を見つけた勘六、跡を慕うて飛んで行く。非道の刀さす世を、忍び頭巾の浪人に、小腰かゝめて付き添ふお庄、「うさんな者と思召し、お名をお包みなさん、は尤も、一言過ぎたことなれば、御見忘れなさる筈なれど、此方にはもう覚えてあります、石津の御浪人鈴木彌忠太様、其の時の同家中相良丈太が家来、三平が女房のお庄でござりますわいな。」「ハハハ、成程さういわれれば見た様な、此の彌忠太には何の用。」「へいお願ひがござります、おなた様が國元へ、お立ち過ぎなさる、折簡、紛失致した青光の刀、其の御めで主人丈太夫家退轉、此の刀が今でも出れば、主人の跡目相続致す。承れば當座の御屋敷山家屋に御前になり、限月は切れたれど、其の御主さへ知れたれば、買値を貸し取り、此方へ請戻したさ、色々心な碎いた金子十五兩、才助致して参りました。」「さうそ其の金で買者を、私へお賣りたまへうならぬ。」「サレ／＼、何と言ひめす、スリヤ其の買の御主を、此の彌忠太ちつと御召さつたか。」「さう左様でもござりませぬど、」「夫れに又龜相千萬、其の買主は則ち盜賊、さうして身ごとくおとすやれば、此の彌忠太の盜賊といふも同じ事。なと思ひ聞き流せば、慮外至極。」「さうぞ押しにきめける。」「さうぞや、左様ではなけれど、買つたが此の買主を、御存じなればお知りて賣されてさうさういふを打消して、さ、師走の果てに左様の事、相人にたふ馬鹿が有らぬ。」「さはいふ物の例は相互、尋ねて

やうまいものでもないが、其の詞価りなれば十九兩の金子、そこに持つて居召されうの。「イヤ旅宿に預けて置きなした」「ム、手前も只今急用で他所へ参る、明日参つて篤し談ぜう、お手前の旅宿は何所だ。」「ハイこんな事も有らうかと、則ち旅宿の所書、認めて置きました」と、何心なう懷へふつと氣の付く守錠、捜せど見えずはつと胸の、「イヤコレノノ身も只今は心せき、重ねて緩りと早参る。」と、缺ふり切り急ぎ行く。「ア、是れ申し今暫く、エ、折もをり今の守、苦し人に拾はれては久松様の身の大事、其れも氣遣ひ、今来た道へ、イヤノ、刃の詮議は延ばされぬ。」と、我が身は一つ二筋道、忠義一途に追うて行く。勘六に締め上げられ、手をすりごうの痛い顔。「ア、申し、出します。」「出しかがれ。」「今働いたは此の守、一步が八切其の儘でござります。」「まだ是れ許りおやない、何も角も吐き出しを。」と、せごす後に立ち聞く彌忠太。「イヤ汝や勘六ぢやないか。」「オ、彌忠太様か。」「彌忠太かとは横道者、汝めよう身共をやつたな。」「サ、、何にも言はしやますな、コレ此の紙入はお前ので有らうがな。」「ヤ何が。」「ハテサお前のぢやノ、中にはしつかり、是れが日外の入れかへ、ナえいかえ。」「ム、ノ、いかにも身共が紙入よく盗んだな。」「まだノ、コレ此の印籠。」「オ、それも身共がのぢや。」「イエノ、其の二色は、お前様のぢやござりませぬ。」と、いふを言はせずどうすりめと、二人が寄つて踏んづ蹴つ、いがみの物取る大盗人に、命からノ逃けて行く。

三、

つて居よ」と、住家々々へ立ち廻る。木綿でもなく絹でもなく、せう事なしの山繭紬、久三小助が畢通ひ、勝島の茶屋で昨夜から、しつぱく酒の二日酔、こそのお山に送られて、瓦屋橋にふつと氣が付き、アアこのやうかノ、来て早この内ぢや、もう往んでくれノ、アア城前からいねノ、いびぢやけれど、内方が見たさについて来た。アア、ヨリで覗くな、手代衆が見やしやる、アア手代共は大善といけれど、女共が見たら情氣する。ちやつといねノ、アアそんな旦那は、かた三日違へなえ」と、ひんしやん歸るを待ちかねて、番部屋物の物がけで、苦かへる衣袋褌手の帶、土着くるノ、すつぱりと、元の久三の尻からけ、急がし顔で竹帯、昨夜ののらの掃帚を、蹴つら拭ふふき掃帚、手桶の切水はつノ、と、浮名は餘所に立つぞとも、知らぬ久松小隠様に、情氣の目香も眞直に、いはれぬが苦の世界なり。お染様そりや何事有る、許嫁のおみつまでお前には見やへ私、それに何の浮氣らしい、外の色事所ないな。アアヤノ、何はかういやつても合點が行かぬ。是か見や久様と言いたお山の文が昨々来るは、どうでも茶屋狂しやるに極まつた。アアコレは父疑ひ深い、何所の奴がそんな牀、哲文私に茶屋へ行たら西から目が出る。東堀、いつこ川筋師走の掛取、田中屋でござります、申擲ひの残り拾費五百文、御算用頼みます。アアム、田中屋といふは覚えぬが、こんな様何賣つたのぢや。アアヤ私は馬場前の茶屋でござります、久様にお目に懸れば御合點、女郎衆の取りかへが六員三百、残り

五

きなつほ、ソレ重井筒にもござります。踏むな呼屋に件もない、火爐にたんと火をいけて、待つて居ますくわつとお立て」と、こそ屋はいき／＼、生玉うして立ちかへる。「ソレ小助殿、此の間がしい人晦日、何所へ往て居やしやつた。」「へ、前髪がなまちよござい置いてくれ、久三と手代二人前の此の小助、請拂ひは昨日しまふ、年越に隙貫うて、戻ると直にはき掃除、此の働きが目に見えぬか。」「イヤイヤさう許りぢやない、明日の節會の櫛家具、藏へ行て出してこいと、母様の言ひつけ。」「イヤイヤ藏の出入は久三の役ぢやござりませぬ、お氣にいらぬ久松、御寮人様と連れだつて行きや。」「それでは詞に角があつて氣の毒、今のは私が言ひ損ひ、サアいつしよに。」と傍輩の、機嫌取る手をひつしよなく、「ハア行けなら行くが邪魔にならぬ、あすは元日、大かた姫はじめの取越し、お染様の藏の鍵、明けましてお日出たうござります。エ、同じ傍輩で、門口から御禮申す事さへならぬ、此の久三には何が成る」と、けたい悪口傍輩情氣、ぶつくる蹴き立つて行く。年一日も暮れ掛る、四十の浪も世話による、乳母のお庄は久松に、尋ね大坂油屋の、中戸に昔なひ頼みませう。何方と内より出合ひ頭、「久松様か。」「す、乳母か、よう來てたもつた、マア／＼爰へ」と深切は、覆らぬ中の行燈の影、男が先へ箱提灯、燈し立てたる禮衣裳、上下ため付け山家屋佐四郎、歳暮のお禮とつつと入る。「コリ、喜八よ、今夜は是れで夜が更ける、夜半前に迎ひにこい、お勝殿は奥にござるか。」「ハイさやうに

申しませう、暫くお待ち」とつい立つて、行くも見送る主思ひの、乳母が氣の付く煙草盆へ眞に幸ひ
よい折から、今日もあなたへ参つて、お尋ね申さじにやならぬ許、後の吉光の守刀。――、是れ一昨
日も申す通り、其の刀は手演藝に取つたれども、もう嘆うに流れました。――、其の頃は承りとした
が、其の遺主は若し鈴木彌忠太とは申しまして、いかゞイヤもういかゞ事の口實、すゝきでござんや、
此方おぼえは致さぬこと、塵灰つかぬ調の腹、お茶上はませうと久松が、若し出す茶桶引つたり、
一エ、小したたるい丁種めぢやな。手入の茶茶桶、ちよここ、續りさうな調付き、茶桶の代りに
親方の菊で、何とやらはつ渡つてこま。――、はふはふ家に通うてあつてきしやつき、婦人の通つるにはう
づがある、結納おこしてから幾月になる、今夜申にお交を渡すが、さうなけりや結納の遊の脇へ一腰
金拾兩、取り戻してこちから變改、其の代りに又借して置いた百二十圓は、あまぞ算用して取るぢや
や、――、案内しをたす和め」と、しやちこばつたる處迄、奥付つ足に總に驚はれ、問はぬに夫れとお
乳の人へさんなら和子と酒で待つて居りますぞと、心殘して立つて行く。――、藏かゝるつと小助が怒
智恵、小判の包は切切り、先づ拾兩銀、此の主人が久松めに、さうなけりやと一人夫も、人に難
儀を堂文庫の、申へ目録をびつたりしめたてゝ、時に此の分と問、再度そこに置かれ、小
助殿小助殿」と呼び立ち出づる下女のおづつ、――、く小助殿、今奥で山家屋の旦那様とお家様と、

結納を戻せとやつつ返しつ其の中に取り交せて、結納の金が見えぬというて大抵の詮議ぢやない、
「さうござんせ」一、さ、さ、そこへ、さ、どこへ隠して置所に、事かく折敷御機の高盛へ、つつ込
む小判のこもく飯、上から押し付けさしらぬ顔、うち連れて行く奥から口、日から鼻へ抜目のない女
主、後家に負けぬは銀の利の、かきにか、つて蜷山家屋、お勝様結納の誠潔白に、戻さうと言はしや
つたから、今更否はいはれまい、さ、さ、戻して貰ひまじふ、さ、今お聞きなさる通り、大切に
て筆箱に入れ、しつかりと藏に入れて置いた結納の金拾兩、今になつて見えぬといふは「コレ置か
しやれ、言ひ掛りで戻さうとはいふたれど、結納戻せば百二十貫目立てにやならぬ。所で何と引き
延ばす、てれんはたべぬ、人にこそ寄れ山家屋の佐四郎、一保が講釋二年間いた男ぢや、そんな計畧
に乘つてたまふ物かいの。が又識でなくば其の結納お出しなされ、さ、さ、何と」とつつか、る主
の常惑取りわけて、氣の毒あまる久松「私が差出がましけれど、大枚の銀さへ立てうとあるお家様
が拾兩の金を惜しんで、何の間に合ひおつしやらう。油屋南賣は人勢の仕事仕、毎日入り込む事なれ
ば、たれが業かは知らねども、失せたには違ひなし。私どもも各身時とも吟味して、今夜中に急度
お目にかかせう、お疑ひ晴らされませ。」と、挨拶する程むつと顔、何かな小みづをくり出す勘六、
さうへにどつさの大あぐら、「コレ丁稚殿、貴様あぢいな事いふの、爰の内に金が見えにや、仕事仕の

おいちが盗んだのか。」「イヤ、どうではないわいのし。」「イヤ、どういふのぢや、仕事仕が大勢入り込
み、胡散なといふからは、絞の仲間を盗人といふのぢや、殊に俺や今日此の頃の斬面ぢや、猶以て耳
に立つぞ。但し何ぞ證據があるか、證據もないに盗人呼ばはり、けたいが悪いぞ忘々しいぞ。」
是れ、聲高にいわないのじや、留めやんな小助、あのせんまめ仕様がゐる。」
「モロぢや、我が身の立たん様にはせぬ、ア、待ちやいの。」
「イヤ、留めやんな。」
「能いわいの、わが身の立たん様には俺がせぬ、喧しいやんな。」
「古町ぢやいの、人が立つわいの、勘六正座者ぢやかい、もう腹立てるわ、イヤ、久松、一すおち、ア、言うてし
まやいの。」
「言へとは何を。」
「我が身が金盗んだ事を。」
「コレ、小助殿、そりや何いふのぢや
變でもない事を。」
「ハ、振もう叶はぬ事、其の眞顔が否ぢやいの、證據の出ぬ中、ア、時魔にい
うて仕舞うたか能かもうぞや、俺に言や。」
「ア、知らぬわいの。」
「實止おほえないか、エ
氣の毒ながら、證據なさばなるまい。」
と、久松が手習ひ文庫引提出で、こりや足れわが文庫
、佐四郎様から、結納の證について來た目録、女が部屋の人物の中に、コレ、ア、入れて有つた
が選れぬ證據、天命のつり足れでもわが金が盗まぬかと、差し付けられても覺えなや、身の災
難に詞なき、久松が胸つくし取つて引据ゑ勘六が、「イヤ、ばりめ、うぬが盗んだ金を人にぬつ、よう

おれに續付けたな。「コレ、勘六喰しういやんな、金の在處ぬかさねば、どつき居ゑて言はすのぢや、エ、ぬかしあがれ。」と責めせつてう、お勝は聲かけ、「小助待ちや。」「エイお家様などお留めなさいます。」「ハ、下人というても人の手、疵でもついたら何とする。殊に其の金の盗人、急度久松には極まらぬ。」「アノ是れ程知れた證據有るに。」「サレバイやい、其の久松が文庫は、明いてあつたか、錠がおりてあつたか。金盗む程の者なら、其の目録は破つて捨てる筈の事を、我が科の知れる様に、わざわ我が文庫に入れて置いて、然も蓋明けて置きさうな物か。但し又錠がおりてあつたを、其方が明けたら、人の箱錠捻ぢ切るは盗人の行作、サ夫れならそちにも疑ひが掛るぞよ。サそれは其の様に手荒うせずに、静かにしても詮議はなる。」と、ぎつくり詞の角屋敷、納めた後家にいらつく佐四郎、「アノそりやお勝殿、最良のさばきぢや、現に知れた盗人の久松、其方で詮議がならずば、町内へ斷つて代官所へ引きずつて行く、小助しめ上げて詮議しやいの。」「ハイ、合點。」と立ちかゝる。「コリヤ主の詞を背くのか」と、主命流石うじつく腕。「小助せくな、此の丁確めは勘六に任せて置け。」と、久松が前髪引き付け平手でびつしやり。起き直つて、「コレ勘六、こりや何とするのぢや。」「大すりめ小助は薄蕨だけで手ぬるい、其の日雇はれの勘六、どなたにも遠慮はない、金はき出さるにや商賣の油の搾喰らはすぞ。嗣性汁の油精絞り出して云はさるにや置かぬ。」と、土間へ引き立て踏み落され、

髪もぼろ／＼あら涙、こたへ兼ねて囁け出る乳母「マア／＼待つて下され、待つていの」と庭に
囁けおれ「コレ久松様、お前の身に受けない言譯は私がする、眞に／＼今でこそ聞家の奉公、筋目
正しい此の和子に、其様さもししい心があらうか。無念にござんしよ、最前からお前より、私が只惜し
うてならぬわいなア」と、脊撫で辱れば「ハ、何ぢやけたいな婆が出た、ごくにも立たぬ言譯せず
と、いま爰でだはの勘六が、盗人の政道するをよう見て置け、おやが酔酩で俄にぐつとひだらうなつ
た、飯一はい喰うて腹丈夫にむてから、どうするそ待つてをれ」と飯桶引き出し箸取り懸れば、小助
はびつくり「ア、コリヤ飯桶な／＼、夫れはマア何するそいつい」一々側するとは、俺が飯を俺
が喰ふのに、其れか何で飯桶な「イヤマア夫れはいかにもわが飯さうなといふ事」一々、俺が飯を
やによつて「ア、コリヤ／＼、其の飯喰ふないやい」「妙な事をいふ人ぢや、ム、ばかめをいふ
のに、隙が入るといふのか。よい／＼そんなら飯喰ひ／＼やつてこそ、一責せめたら、白狀さすは
膳の上の審」と、飯桶放つぬ勘六「ア、是れはまた情ない、ア、こりや／＼、マア夫れ下
に置け、此の飯は喰はされぬわいやい」「ア、けたいな、そりや又何で」一々、金持盗人が知
れぬ申は、仕業仕にも肯ひが懸つてある。ヨウ若し汝が盗んだのなら、盗人に飯喰はず法があるか
身の正を抜いた上で、跡で喰へといふ事」一々、こりや理窟ぢや、そんならこいつもうしこいて仕舞

はにやならぬ。ア、是れノ、大事のおれが扶持切米、ものいひの付いた飯ぢや、やつはり爰に置いて貰を。」様々の事で食どめしられ、おれが爲には食敵、汝には是れ喰らはす。」と、割木引提け立ちあか、ろ、「勘六待ちや、家來の吟味は上がする、雇ひ人のそなたが入らざる差出ひかへて居や。」そんなら小助が。「一々わがみも頼まぬ。」す、すりやこな様の直の吟味、見物致そ。」と、つつばる佐四郎、いやといはれぬ此の場の表、「頼みませう。」小助表に案内がある、小助々々。「ハイノ、ハ、ハチどなたぢや」と、出迎ふ門口、かねてや譯し合ひけんを、互に見ぬ顔空とほけ、「拙者浪人者でござる、此の度有り付いて國方へ参るにつき、路用の拵へに手づまり、お家を見かけて御無心、と申して只は申さぬ、實は身の差合はせ、賣りに参つた一品、まよと御覽くだされ。」と、懐より取出す一通、「コレ淨土宗一向宗にはなければならぬ、圓光大師の一枚起請、實か正筆かは、たつた一日御らうじろと、忽ち知れるお見知りの手跡、ななんと是れ許りは買はつしやれすばなるまい。天罰起請文の事、此の跡を讀ますに直を付けるが商ひの祕事。娘御に買うて進ぜられたら、一生の災難を遭れる守本尊でござらうぞや、但し御所望にないか。ナニこれにござるお若い人、其許にも入用の物ぢやお求めなされい、現當二世の起請文。イヤもうノ、有り難い御文章、お望みならば讀んでお聞かせ申さうか。」と、意地くね惡う鬼門の肝先「ドレ拜見いたそか」と、立ち寄る佐四郎は金神の、中から

お庄が引き取つて、一枚起請買ひとした、私に賣つて下さりませ、御不承ながらと差し出す金包手に取り上げ、こりや僅か金拾五兩、こんな事では、一々／＼夫れは當座の手附。「ム、手附と有れば請取つた。」一餅は何程致つうと、わたしがい買ひます、今年に夫の十三年、此の有る難い詩文章、何と人手に渡されう。つれ久松様、お前の親御太夫様、預りの御重寶失うた、詞房拵ひに逢ふのが無念さ、お覺悟の切腹、夫三年介錯の上主人の追腹。お前は漸う六つの年兄久作の在所へ預け、わしは國にとまつて、どうそ今一度相良の跡目相続の願ひ、御家老中へ月々の訴訟、其の時失せたる重寶、此の太政の倉庫に有ると、聞いたはお主の出世時と、其の爲に拵へた此の金なれど、差當つた地獄の苦痛、知る、は此の一夜屋敷、其の大切なことを何とも思ひしやんや、親御の思を仇に思つて居るとやあから、一見つら／＼せ、神皇西岸信を俗名、半、こりや私が夫の遺名、片時も親身を取して事はない。お前の親御は、御親等居す、其の心では命賣と、忘れてかゝ居さしやらう。此の位牌のちや半、悲義の心を申しでも思ふ氣があるなら、未來の約束、悪い御文章を反故にして、瀧へ歸つて命長う、家相続して父親様に、敬慕の思ふからにつこめと、愛はもとて下さねと、恨みも意見も十分一、聞けていはねね千萬、我が子の様に養ひ我、思ひ詰のたる親戚の、母より深い大恩無悲と返つた、こりや、もう堪忍して、こりや、飲けば涙拭いてやる、あまいは乳母のな

らひなり。歎きを餘所に山家屋が伸び欠伸「ア、こりや盗人の詮議が來年になりさうな。イヤコレ御浪人見た所があの聲、跡金の才覺心許ない、手附限りの事である、いつそおれ買ひましょか」「イエイエ、外へはやらぬ、わたしが先づ、サア跡金は何様でござんす。」「總高金は五百兩、エ、イ安い物ぢや、サア只今請取らう」と、聞いて今更ハッと許り、常態顔を見て取るお勝「イヤ、イヤ、無難けながらさうや出来ぬ、五百兩なら私が買ひましょ、今か、りに渡さう程に、先刻の手附はあの人へお返しなされ」「成程々々さうなうては叶はぬ所、めくさり金で大事の代物、買ひ取らうとは違ふとい女め、手附金コレ返す」と、投げ出す包お勝が取り上げ「お侍様、こりや最前の手附とは違ひましたな。」「何が違つた。」「イヤ違ひました、中は見いでもしれてある、大かた是れは衣様の贋小判。」「イヤ、そりや何か手前存せぬ、あの女が。」「イヤおつしやんな、こりや最前の金ではない、わしがよう見て置いた。あの人が渡した金は、反古に包んでござんした、是れは是れ白紙。包が違うてあるからは、お前が内から拵へてござつたふきかへの贋金、正眞の金は懐にあらうがな。」「日外久松がかたられたもちやうど此の傳、是れをたぐつて詮議したら、何が出ようもしれまい」と、穴を見付けた發明後家、暗い仕事は油屋の、明りにきよろつく化のかは「イヤ其の詮議よりこちらの詮議、ドリテ起請の正體を顯はしてお目にかけう」と、立ち寄る小助を勘六が、取つて突き退け起請の一通、

明りも忽ち打つて替つた助六殿、急によ過ぎて合點が有かぬ。「コレ氣遣ひでまい此の助六、久松殿の肩持たねばならぬ譯は、是れ見て下され腕に卒増婆の入應、妙譽西岸信士。」と、此の位牌の戒名と、合うたは不思議。「母者人健でござつたの、こな様の子の三之助でござんすわいの。」と別れたは十四の年、見忘れたさんしたも七も、斯ういふ腕慣になつた物、一體が小さい時からいけすであつて、助六の傳の分で、歷々の家中の子供衆に、磔打つたり天窓はつたり、手討にもせにやならぬ處を親父様の慈悲の勘當、間も無う死なしやつたと聞いてかつくり。始めてもつと人間の魂が出来たれば、悲しや體がみだれ同然、親の墓へさへ晝は得参らず、夜の中に寫して來た戒名、命日に坊様呼ばうにも、宿なしなれば佛様は猶なし、せめて親の太恩を忘れぬ様に彫り付けた、此の腕が私が佛壇の寶所が悪さに手を合はしては拜まれず、毎朝片一方の手で御禮を申しますわいの。餘所ながら聞けば御主人丈太夫様、御切腹なされた元はといへば、紛失の古光の刀、此の大坂に貴物に入つてある由しエ、是れを請戻してお家を立つれば、お主へ忠義親父様のお位牌へ、是れに上こす手向はないと、思ひ立つた其の日から、金の工面に様々の騙り事、日外座塵ですりかへた、其の銀故に難儀さつしやる久松様が、主人の若旦那で有つたとは夢三寶、たつた今聞いて腸がひつくり返つた拷問、日當の外れたも不孝の罰、母者人堪忍して下さりませ」と、眞實眞身の後悔は、昔に返る稚顔に其の氣にな

つたら親子ぢや物、何の審かろ、よう健で居て呉れたな。一母者人懐かしかつた」と抱き付き、襦袢の袖を絞りが、大つけ涙、勝なり。親子の心底感心しました、夫れほど二人の蒙が心を盡す、守刀は愛に有るぞや。一々、そいつ又どうしてお前の御手に。「サア縁は不思議と久松の人から、よし有る人と見た故に、導ねて聞いた氏素性、守刀の入る譯、廻り廻つ、山家屋にあると聞き出し、お染を望むを幸ひに、此方から乞うて取つた結納の證、久松其方に是れがやりたい許りに、嫌ふ娘を山家屋へ、やらねばならぬも愛の譯、此れを土着に本知に歸れば、和泉の御家中相良久松様、いつまでも油屋のすねで居るが爲めではあるまい。まだ年の端がぬ中と、私への義理や何やかや、譯さない事思はずと、早う出世でもせんせと、或、山家屋にけめなき、情に引込が、不甲斐ない我々が、思ひ込んだ念が届いて、嬉しいとも有りがたいと、久松は御禮を、「さ、是れは來年の事なりと、マア行かしやんで、一々、二母者人、うかうして居る所ぢやない、今夜の内に山家屋へお供して、お留守居へ御目見えなされば、結納の願ひが叶ふまい。さうさう、若し邪、早う二に久松は、お染に引かる、亂れ髪、撫で付ける間もせはしなく、突き出す様に早食、時刻が移ると助六が、先に押立てかけ出す足音、片息ながら取り付く小助、投て込む酒樽、御家様おさらば、御無事で、一まとめで」と内と外、隔つる一夜大年、其は百八煩惱を、跡に見捨て、急ぎ有

く、跡にむさんや油屋の、お染は一人娘氣に、思ひ詰めたる久松に、別る、様子立ち聞きに、聞きて氣もきえ胸せかれ、爰で添はれぬ縁ならば、未來でつもの白雪の、庭へ泣く／＼折柄に「お染お染」と母のお勝が聲すれば「ハイ／＼」と元の座敷へ立ち戻る。お勝はさあらぬ顔色にて「あすは日出度い元日、年の終りは寐ぬ物ぢやけな、寝ひごうなうても寺々の鐘の音で醒られぬから、持病の癖が差込んで、アイヌ／＼、些と爰を押へてたも」「あい」と娘は何氣なく、手を差入れる懷を回して大れとは縋帶、障る手先にお染は悔り「母様こりやお前腹帯ぢやないかいな」と、思ひがけなき興覺め顔「娘そなた腹帯といふ物、して見やつた事が有るか」「アアイえ／＼何のマア、腹帯とやら、つひに見た事も無いけれど、お腹にやゝを宿した時、此の様に巻いて置く物ぢやと話に聞いた許り。」「オ、よう知つて居やる、いかにこりや腹帯、イヤサア、縋を押へる腹帯、此の縋の直る薬をコレ見や、買うては置いたれど、下女にも男にも煎じて貰ふ人がない。わが父大儀ながらこの薬、誰も人の見ぬ様に、こつそりと煎じてたも」「アノ母様の何言はしやんす、藥上るに誰に遠慮」「イヤイヤ人に見せられぬ、こりや此の縋を押下ける墮胎藥。」「エ、イ」「オ、肝が潰れう、娘の手前も恥かしけれど、太右衛門殿に別れてから、後家は立てても離れぬ煩惱、嵐三右衛門の芝居に誘はれ、名は言はれぬが美しい若衆形をふつと見てから、思ひ切られぬ悪縁、それがつもつて情ない、ツイこん

ひらりと内へ久松が、あはや人陰見られじと、潛む暗き夜藏の戸の、明いたを幸ひ密と入る、跡からついて見濟ます小助、外から戸前をどつさり、鼠落しの仕度よし顔、折から外には小提灯、雪の傘差し蒐る鈴木彌忠太、後を慕うて勘六が息もすた／＼「彌忠太殿々々々々、一遍此方を尋ねたわいの。」「身共に何ぞ用があるか。」「有る段か／＼、此方が盗んで立ち退いた吉光の守刀、質屋にあって手に入つた故、たつた今藏屋敷へ持つて往た所が、眞赤な簀物、眞眞は此方が持つて居よう、尋常に出した／＼。」「ハ、ハ、ハ、いかにも推量の通り、質屋のも一杯食はしたのおや。」「眞眞は俺が持つて往て、立身の種にする、温かに渡してよい物か。」「夫れ聞いたらもうよい、其の刀は大方爰に」と、肩にかける手をもぎ放し、直にすらりと抜き打ちを、傘でばつしり満身の手だれ、内は妹脊の縁側より、庭の井筒に合掌し、南無阿彌陀佛の聲聞き取り「お染様か。」「ヤア久松か。」「どうでも死なねばならぬ身の上、未來は一所に手を取つて、組み合ふ外の暗紛れ、手に障つたる小脇差、探つて見れば九寸五分、扱こそ吉光、夫れやつてはとわしやぶ付くを踏み飛ばし「エ、忝い、武連の花の聞き時、久松様は何所にござる。」と、夫れと白雪白壁の、藏と庭とになむあみだ、アツト苦しむ一聲に、驚くお勝久三の小助、久松めはくたばつたと、呼ばはり出づるを取つて引敷き、エ、早まつた御最期と、恨むに甲斐も百八の、鐘も打ち切りしら／＼明け、可愛の聲とも共、年のをはりに聞

け渡る、春を重ねて久松が、名は大坂の東堀、今に傳へて残りける。

新版歌祭文

新版歌祭文

伊賀越道中雙六

近松半二

伊賀越道中雙六

第一 鶴が岡の段

大權聖者の未來記に、書き記したる四海の治亂、元弘の戰ひ一統に、切り鑢めたる足利氏、草も動がぬ鎌倉山、頃は太永元年二月上旬、鶴が岡の奉幣に、敕使卜吉の知らせによつて、山内の執權上杉顯定、警衛の役目承り、坂本に假屋をしつらひ、一日がはり、家中の守護、和田行家が、子志津馬、威儀嚴重に守りをる。折ふし佐々木丹右衛門、非番の姿上取つて、下を憐む羽二重侍、假屋に來か、山一志津馬殿、當日の役目御書禁と禁勘し、別々、今日け敕使御入りの日なれば、取りわけ大切の御番、随分僉末のないうやにと、申すも此の丹右衛門、貴殿の親父行家に、警衛の門弟、是れまで外の弟子より、格別に御指圖下され、師匠の御恩、山よりも高ければ、其の御子息、志津馬殿、次第に立身も有る様と、神に心願を籠め奉り、新る程の拙者が心底、目煩から萬に表着し申すを、心算氣にはさへられな、貴殿の宛は御酒参ると、萬事を忘れさつしやる、色と酒をば敵とせよとは、賢者の誠の、常に此の儀をお忘れあるべきと、眞實なる意見なり「ハア添いおとす、家

兼親共が申すにも、劍術の高弟といひ、若けれど實義ある丹右衛門殿、兄弟同然に、萬端を相談致せと、申し付け置かれたれば、其許様を兄と思つて居りまする。「イヤさやう請けて下されば、拙者は何より甚だ祝著。弟子傍輩の事を申すは如何なれども、氣の許されぬ男は、澤井股五郎、彼が従弟城五郎は、鎌倉殿の呢近衆。直人を一家にもつたと鼻にかけ、御前の勤めも疎かにして、晝夜遊所に入り込む由、必ず彼を友になされな。昨日は拙者が番、今日は非番なれども、内證ながら見廻りも致さうと存じて推参致した。敎使のお入り間もあるまじ、別當へ参つて配膳の、勝手案内見て参らう後刻々々と別れ行く。折袖うさ／＼來かゝる町人、番人聲かけ、「アイ／＼何處へ行く、御假屋の前すぢををらう」と口々に、囁み付けられて大突進ひ、「アイ、私は切通しの町人、本庄屋定七と申して、和田のお家へお出入の者、志津馬様に用事あつて」と、聞くより志津馬「苦しいない、是れへ参れ」と傍近く、「今日は敎使御入りの社内故、一々人を檢むる、急用か、何事ぞ。」「ハイ、イヤ別儀でもござりませぬ、彼の金子の儀を。」「コリヤノ、イヤサ家來ども、其方どもは南門へ参つて人を通すな、残らず往け」と追ひやれば、「ハア如何さま、金銀の事は内證、爰で申すは不調法。」「アイヤイヤ契約の日が延引すれば、無理とは思はぬ。が此の事は股五郎殿を頼んで置いた、一兩日猶豫を頼む」と、はなし半ばへ大小も、金拵へのつか／＼と、入り来る澤井股五郎、人を非に見るのさばり

顔「ヤア定七、お手前が来た筋は、股五郎が香送んでを。部屋住の志津馬殿、吉原通ひの内証金、今川立つて置いたれば、兼てお身が願うてをる、お國の掛屋に仕てやる。時に志津馬頼みがある、身が懇意にする町人の女房、今日敎使のお入りを聞いて、都人の裏車妻拜見さして下つれと、撥なく頼みに付き、裏門からこつそりと、最前社内へ入れて置いた。爰は様な貴殿ならば、大目に見てくれまいか、どうぢや〜」ア、イヤ〜、町人たる者殊に女、左様の事を政道する志津馬が役目外の者の見ぬ中に、一時も早く追ひ歸されよ。」「ハテ左様堅う言うたものぢやないわい。コレ貴様の好きの女だわい、マアちよと好い女房、見たがよい、器量ほどてん天人姿、天降しとお目にかける、茲ぢや〜。」と手招きに、下り来る取の段がけき、屋敷の間と三車の帶、堅う見せしめてけなく、「志津馬様私ぢやわいな。」と被を取れば松葉屋の、「マア瀬川ぢやないか。」と志津馬が驚り、「何と股五郎は粹ではないか、何が一目逢はねば百日と、吸付き合うてをる中、身共とは違うて親持の身分。此の間より御前勤めに間がなうて、郭へ來ぬを女氣で、若しや心替りかと家人が可愛つに、手上合して今日の参會、こもや腹も立つまいが。コレ太夫轉しいか、遠慮なしにわい、と、突きやられてひんとすね、女市法度、此のお假屋、追ひ合ふと仰有つたは、よく、思ひのお暇ひさうな」と、思はせぶりの雪の梅、離けぬしやけいそやなり、さうではなけり、是れは又きつい

所へ連れて来た、御門は誰が通したぞ。「イヤ此の實内奴でござります。」「スリヤ御門を通したはお
のれか、エ、憎い奴。」とはいふものの、俺も顔が見たかつた。「エ、疾うから左様碎ければよい、堅
い顔が氣にくはぬ、家來どもは散つて仕舞うた。實内は志津馬の腰付、郭の供する粹奴、かう寄つた
所は、とんと郭の座敷になつた。太夫主のお持たせ是れへ。」ナイと返事は奴の遣手、蒔繪の提重角櫛
は、股様よりの御見舞、吉彌煙草、ナイと跡引き長煙管、包帯どいて取り出す、籠々、立木の櫻、あ
たのまばゆく見えにける。先づ一獻と股五郎大杯引受けて、「サ、志津馬慮外申す。」「イヤ、今日は大禁
酒ぢや。」というてあの君が顔見て、飲まずには居られまい。ちよつと一つは身の養生、飲めば甘露
の菊の酒、其の杯定七に差し召され、大事な一つ飲みやれ。扱杯を差し置いて、お手前に頼む
事、別儀ではない。此の瀬川と此の通りに深く言ひ替した中、所にゐる大家から身請の相談、先方は
千兩二千兩惜しまぬ家柄。慾に喰ひ付き親方が其方へやらうといふを、先約なれば志津馬が方へ、五
百兩で身請きすると、此の股五郎が突張つて置いたれど、今日明日に迫つた日限り。これまで取替へ
もする上なれば、用立つてくれまいか。「ハイそりや貴殿方の頼み、いかにもと申したけれど、部
屋住の志津馬様、たしかな抵當がなければ。」「サ、サ夫れも思案して置いた。和田の家の重寶正宗の
名作を質物に差入れる、是れ程慥かな抵當はない。」「イヤ、コレ股五郎殿、其の刀は先祖より傳は

つて、常の差料には致さぬ重寶、寶物に入れの事は、一ハ、叔悪い合點、其の大切な刀ちやになつて
書き入れて間に合はすのさ、金づへ書まねばきこはな、殊に此の度武將の若井、神元服の御親族
諸大名より名作の御献上あるべき折から、正宗多き中にも、和川の正宗は勝れて無雙の名作、殿よ
り御所望あるに必定、其の時に懸ければならぬ大事の刀、青くの用に立て、其の中には義左郎が王面
して取り返す氣遣ひとすと、志津馬、其の趣一紙書いて、敵にならるるに、色に付け入る正宗
を、仕てやる心の御とは、白紙取つて認むろ、若氣の思案さ是非ならき、定七殿又法中して、きんな
ら金子調達致し、装束方まで持参致さう。寶物は結構なれど、前此北方の陣にはならぬ、御氣遣の違
はぬ様に、二氣遣ひするな、身が一門は厭々、金銀源平が吞込んだ、二二二と、其の甲上首はね
事は聞えぬ、利銀は、割三月をとりて、と、然の趣、義左郎に、詞金うて立ち歸る、ア
ア、祝うて是れから祝言、天下晴れ、志津馬が現る、日出庵いとし、打つて殺せんと、ア、調子
に乗つても、一つ大事が二つも三つもいつの間、何ひか通つて、昨日の大事、忘れぬおれんにして、つ
たと、笑處に入つたる義左郎、義人は所ひの給へ、敵と云ひの義左郎、青く御を通さうと、御に
難儀をかけ作り、廊下へぬけて行くところ、股土々をそれへ、つた、ぬけを、目手が悪い、人
を、そのいと殺して置いて、逃けうと、軍情者、一、二、三、此の様な結しの中、殺すの死ぬのと

氣にかゝる事許り。」「そんならおれと祝言するが、そなたは眞實屬しいかと、有れば我等も千萬祝著此の筈に又一つ。」「ア、申し其の様に御清上つたら御用とやらの害になる、もう此の杯は止つにせう。」「止つにせうとは祝言がいやか、いやでなくば一獻、たとひ知行召し上げられ、ふちは瀬川になるとても、二人手に手を引き合せて、どく瀬川へも志津馬は本望、もう上も祝も人ら、殺せ殺せ。」と酔狂も、海がいはずるくだ枕、膝にたわいもなき折から、救使のお入りと、呼ばはる聲、聞く」とひとしく丹台衛門、志津馬はいかにとかけ付くれば、南無寶例の沉醉。」「コレ志津馬殿々々々。」「コレイナ太夫様を待たして置いて、あの様に寐てぢやわいなア、こそぐりおこそ。」と二人して、抱き起してもとく、目。」「コレ志津馬、正氣を付けやれ救使のお入りぢや。」「イヤ猪口は嫌ひ、こつぷで致さう。」「エ、なにいうても死人同然、一世の浮沉何とせん。家來共此の女裏門から追ひかへせ。」と、替社袂の肩衣を、身に引つけて志津馬が代り、救使を出迎ふ深切も、夢にも白川高嶺、松吹く風も音添へて、後の難儀と和田の家、世の成行こそ 三重定めなや。

第二 行家屋敷の段

春毎に、詠めは能か鐘石山、仁義を守る武士も、旦に隠す桐が谷、和田行家が一構へ、書院先の

ばし思おもはん」と、夫そとに隨したがふ貞女ていじよの道みち、言いひ聞きかされて差さしつ付き、とかう詞ことばもなかりしが、漸つうに顔かほが上あげ、何卒なにぞい今いま一度、父ちちのお教ゆるしあるお詞ことばを、お願ねがひなされて下くだつりませ。」と、其その事ことは氣遣きづかひあるな、一旦なんかう夫婦ふうふとなつたれば、世間せけんを守まもるが男おとこの役やく、遠あれ、侍さむらいを、理う木もとなさんやうとなし、命いのちにかへて願ねがうて見みん。先まづそれまでは自みづからが部屋へやへ行いきや、早はやう／＼といふ折せから、「澤井さわい様御出おいで。」と知しらせと共に打うち通とほれば、隔へだたる柴垣しばがきお谷たにをば、ちらと見るより空嘯そらうそふき、恟びくり驚おどろく奥方おくがたも、お出いでと許はかり詞ことばなく、入いらんとするや、「サ、ソレ／＼奥方おくがた、挨拶あいさつもなく御入おいりなさん、は、先生せんせいの御病氣ごびやうき、毎まい日にちお見舞みまひも得申とくまうさぬ、其そのの御立腹ごりふくがあつての儀ぎか。拙者せつしやとても病身故びやうしんこ、お斷ことわりの願ねがひを立て、御前勤ごぜんごめととくより引ひいて罷まがりあれば、御下沙汰ごぶさたの段たんは御免下ごめんくだされ。」何なんの／＼、親御おやご父また左衛門様ざゑもんさまから、御懇ねんな問柄もんがら、其そのの御挨拶ごあいさつに及およびぬ事ことに、「成程なるほど々々、其そのの懇意こんいについて、いつぞはお尋ね申まうさうと存ぞんじなす、其許そのもと様さまは先生せんせいの後妻のちづか、先奥方せんおくがたの腹はらに出い生の志津馬殿しづまどの、今いま一人お谷殿たにのと申まうす姉御あねごがあつたが、何時頃いつごろからやらとんと見請みまうけ申まうさぬ。嫁入よめいなされた沙汰さたもないが、やはりお屋敷やしきにごさるか。」と謹知けんちひながら聞きひかける、そこそこに心こころを奥方おくがたは何なんと返答へんたふく口籠くちどもる、一間まの内うちより立ち出たいづる和田行家わだゆけさ、病氣びやうきながらも突すき眼中がんちゆう「よくぞ／＼澤井さわい氏うぢ、心こころにかけられお見舞過みまひあ分ぶん々々。」「イヤ先生せんせい、存ぞんじたよりは顔色がはなも宜よろしく、珍重ちんちゆうに存ぞんじます。叔今きこ日にち参まゐつたは密々みつくにお話はなし申まうしたき事ことあつて。申し奥方おくがた、ソレ冷ひえる

[illegible]

たとへ、それは重疊、シテ志津馬殿はな、一、勘當致した。若し簡様の儀沙汰あつて、萬一殿様より御尋ねに預りし時、申譯ないと存するから、右の刀を御戻し御沙汰なき中、俵めは勘當致した。ハ、氣の毒千萬、時にお頼み申したいは、私木だ獨身をりまするが、何卒姉御のお谷殿を、拙者が妻にトごるまいか。スリヤ増は手なり、行家殿の御家督拙者が預め、其の内には志津馬殿、お心も定まりなば御渡し申に相違なし、是非お谷殿を申し請けたい、此の御相談は如何でござんた。「イヤ御深切系いが、其のお谷めが事は、唐木政右衛門と申す浪人と密通致し、家出したは四年以前、斯様の不届者なれど、勿論此奴は七生までの勘當。貴公も此の儀は申さいでも、能く御存じでありながら、何かこりや御座興でござんたの」と、何をいうても請け付けぬ、始めの恥辱に股五郎、何かな見出し付け込まんと、白眼み廻せば立ち聞とお谷、三人一度に見合はす顔、立て切る障子、驚く行家、「コリヤコリヤ悪い、今爰へ出ると身が武士が立たぬ、屋敷に叶はぬ出てうせいと、追ひ出して置きまし」と、言ひ紛らせば高笑ひ、「ム、ハ、ハ、ハ、ハ、行家殿何いはつしやる、娘やる事ならぬなら否で済む事、コニカコリヤ手前小身者と侮り、嘲弄召さるの、ヤ恥辱を與へるのか。股五郎は武士でござんぞや、侍でござる。娘は勘當致した、屋敷に居る物を追ひ出したの、勘當のと、貴公、殿の名代に一家中を泊むる役ではないか、サそれで御家老職といはれますか。志津馬を勘當したといふは偽り、

是れも屋敷に匿して置く、正宗の刀、貴公が質に入れたでせう。」と、悪口雑言出放題、こたへかねて膝立直し、「慮外なり哉五郎、汝が親父左衛門は、身共より上座の家筋、其の倅と思へばこそ、劍術の弟子ながら禮儀を以てあしらへば、のし上る法外者、心得ぬやつと思へども、何卒して撓めなほし、親の跡目を續がせてやりたき、槍の一手も教へてくれた。師の恩を忘れ、倅志津馬をそ、り上げて遊所へ連れ行き、正宗の刀を眞に入れさせ、奪取つてそれを横儀に我が家を滅亡せんと、よくも巧んだ人非人め。こりや汝が智慧許りでない、正宗の刀に望みをかけ、頼んだがあらうがな、其の横儀人も合點たり、さういふ直に内政政で、頼むが頼む人による、昔頼むつた頼む郎、頼む郎も流石初めに、正宗を出すにも及ばず、牛が指針の比喩、巧みの頼む郎を出して、流れて見せうか、何となく」と、頼む郎の一言を、見送つた五郎、頼む郎にしまけぬ、さういふ頼む郎もなかりと、面目なかに顔を上、右の左に手をうつた、頼む郎は我を頼む郎とされ、折節の御恩が耳に當つた、頼む郎根性通つたる色好む、頼む郎の友を頼む郎と、志津馬を郭の頼む郎へ引き入れたに頼む郎者、さう見送られてからは一言もこころに、好む郎は、頼む郎は、大恩の頼む郎、頼む郎に自らは非道、只今頼む郎の心、頼む郎の通り、正宗の刀を奪取つて何に致さう、頼む郎は色好むの金、が欲して、さういふ付付述べ、右の刀を奪取つてくれなれば、金も手に入らうと、頼む郎だ

此の世の名残おさらば」と言ひ捨ててかけ出で、城五郎聲かけ、「イヤコレ、先づ待たれよ股五郎、身不吉なれども澤井城五郎、お匿ひようしたい、意氣地によつて討たれど、我々が頼みしより事起る。聞き通てに致しては武上道の表かたさぬ、此の上は我々が命にかけてかくまはん。先祖の意根今此の時、出かされたり股五郎、こゝに和田一家の奴原、君命を以て来り、何程の事あらん、一時も早く足敷へかへり、評議を定めん、油断は不覺の基なり、路路の用心氣遣はし、氣を付けられよ近藤殿。」「其の儀はいつレも氣遣ひなし、歸宅済むまで御役目、指でもささば彼らが家の一大事。」と、備へ、亂さず張り出す、威光輝く鎌倉山、連れて我が家へ三重立ち歸る。

第三 圓覺寺の段

されば澤井股五郎、行家を討つて立ち退くより、直に驅け込む圓覺寺、門戸を閉して、間、近藤、海田、荒川、澤井を始め、呪近の若殿原、若し上杉より寄せ来るとも、引きは返さじ弓鐵砲、佛の説きし法の庭、平等大會に引替へて、修羅の街の大評定、方丈狭しと詰めかけたり。股五郎一禮し、「物かすならぬ陪中の拙者、威左郎殿は一家の好み、其の縁に連れ御厩々の昵近しう、御匿ひ下さる段、身に取つての面目此の上なし。許しながら主人上杉憤り深く、拙者が母を人質に捕へ置き、股五郎

を渡さずば、母を成敗するとの難題、我故に一人の母を殺すも不孝、且は好みなき呪近江、斯く騒動に及ぶも氣の毒、やはり拙者を上杉へ御渡しなされ下さるべし。」と、邪智を隠せし賢人顔、野守之助進み出で、「何ぞ、其の遠慮に及ばぬ事、此の度我々が加増するは、お前の爲許りでない。上杉には此方共、年來の遺恨ある、武將の御先祖尊氏公より、譜代相傳の呪近武士、元弘建武の古尊氏公に粉骨を盡し、忠義を勵みし我々が家筋。上杉を始め其の外、諸大名は、顔色のよきに從うて、降参した腰拔の家筋。我は顔に高嶺を取り、呪近衆を麓に輕しむる日頃の在外、こそかたあれと思ふ折郎、お前をかくまうたは、上杉に恥を與へる爲。一案の如く上杉此の事を聞き、追付足れへ押し寄せんと、軍評定最中の由。今太平に治まつて、茶湯遊興に目を送り、御兎の著やうもしぬ國大名、何程の事あらん。」「オ、野守殿の仰せの如く、日頃偏難な事を待ち受け、武藝練練の我々、よくりに躍ちらして、呪近武士の遺恨をばらすに今此の時。敵方より寄せぬ先、此方から逆寄せにして上杉に泡吹かせん。」「オ、尤も」と立ち懸る、城五郎押し止め、「暫く、果が所縁ある股五郎をおさらひぬる例れもの御深切、忝と、よりながら行家を討つたる事の趣りは、此の城五郎が頼みし事。其の仔細は、此の度武將の公達、御任官の御親臨に付き、諸大名より名刺を獻ぐらん、然るに行家公家に、持ち傳へし正家の名刺あり、主従の事なれば、上杉はお取つて獻ぐすべし。」

れば、彈上杉が鼻高く、威をばはん事心外至極。何とぞ此の刀を奪ひ取つて、某が手より献上されば、我は勿論呢近衆の、手柄にもなると存じ、股五郎に言ひ含め、行家めをぶち殺したは、正宗の刀を取らう爲許り。其の外の刀、行家めが手にはなく、佐々木丹右衛門が預りたる由、股五郎を請取りたくば、老母の命助け、竝に正宗の刀を此方へ渡せよと、難題の使者を立てたれば、此の返事の有るまでは、かくお伺へあれよ」と、言ふ間程なく馳せ来る、門番の徒士の者一、丹右衛門より、今朝の御達令。」と、指し出す文箱を城五郎、封押し切つて一通を、さら／＼と読み終り、「ホ、ウ城五郎が思ふつほ、股五郎をお渡しあらば、母鳴海が擒を赦し、正宗の刀を遣はすべし、追付二品とも、丹右衛門計参致さん此の文言。後刻御出でを相待ち居ると、口上を以て返答せよ」と、蓋引きしむる明文箱、取るより早く走り行く。「イヤサコレ城五郎どの、一旦かくまうた股五郎、今更のめ／＼と上杉へ渡し、夫れで武士が立ちますか」「オ、我々も其の意得ぬ、貴殿は上杉が御下か、臆病神が取り付いたか、卓快至極。」と詰めかゝれば、股五郎押し静め、「ア、何方にもお願より下されい。イヤ城五郎殿、拙者も命は惜しみはせねど、武士の意地を立てぬく貴殿が、今になつて腑甲斐なく、上杉へ渡さうとは、こゝ聞えた、行家をぶち放した許りで、お頼みの正宗手に入らぬ御下腹、夫れ故にござるな。」「イヤサ左様の事でない、今合戦を取り結ぶとも、只貴上へ獻がす許り、其の

111

中の肝心と取り納めたる折こそあれ、又もかけ来る遠見の者、上杉の使者佐々木丹右衛門、綱乗物一挺、供は纔か三人、只今門前まで、「オ、よし、よし、言ひ付けし如く門を開き、隨分神妙に取り計らひ、此の所へ使者を通せ、ソレ何れも裏門より、先へ廻つて待伏の、用意々々に逸り男武士、我一急ぎ裏門口、股五郎は十兵衛を、引連れ奥へ入りける。琴を弾じて敵を避け、竊窺として檻弄の謀もやあるらんと、心赦さぬ丹右衛門、使者の禮儀の社拜も、四角四面の方丈へ、綱乗物を昇き入れさせ、しづ／＼と打ちとほれば、城五郎威儀繕ひ、「オ、聞き及ぶ、御邊は佐々木丹右衛門と云ふ、今日の使者大儀々々。今朝も言ひ送りし通り、武士の意地によつて爭論に及ぶといへども、かく清議に納まりし代に、私の遺恨にて合戦を取り結ぶは、武將への恐れあり。罪は罪なり股五郎、望みに任せ渡さんなれば、此方よりも望みしくごと、正宗の刀、ならびに老母鳴海が事、上杉より定めて送られつらんすな。」ハア成程々々、主人上杉顯定、怒りの元は股五郎一人、逆礫の刑に行ひ、國の政道を正すべき存念、股五郎だにお渡しあらば、外に曾て仔細なし。則ち是れこそお望みの正宗、竝に老母を誘引せり、オザ御檢め下さるべし」と、箱に納めし持參の刀、取り出せば手に取り上げ、切先、物打、御元、とつくと檢め鞘に納め、「オ、聞きしに違はず天晴名作、慥かに落手。」と引提けて立ち上る。丹右衛門引きとがめ、「ア、竟忽なり城五郎殿、股五郎を是れへいだし、老母と互に取替へざ

る中、むざと刀はお渡し申さぬ。サア下手下人股五郎に、繩打つてお出しなされ、ア、近頃我儘千萬。」
と、眼を配る勇氣の面色、「ア、實に尤も、是れは身どもが義相、然らば刀は暫くそれに、追付下兵人
渡し申さうが、先づ其方の囚人、老母鳴海がかける體。」ア、母に科なければ、最早繩目にも及ば
ず。」と、采物の箱取り拂で、引き出す交縛の繩、子故に科を身に老の、恥と鳴海が憂き思ひ、是輩も
繩目を解き捨て、丹右衛門老母に向ひ、「子息股五郎を此所にて捕取る上は、其計が命を助け、城五郎
累へ渡すべき旨、今朝殿より仰せの通り、彌承知なるべし。」と、聞いて鳴海は顔を上げ、一瞬に内
不所存、彼方此方へ御苦勞かけ、憎い奴とは思へども、天地の間に親一人、子一人の股五郎、未練
と卑屈と笑ふ人に笑ひ合せ、何ぞ助けてやりたいと、思ふが親の身の囚人、親主人へ對しては
不忠者の倅なれども、母が命を助けう爲、繩掛へ出まうといふは、此の親には孝行者、老い年寄つ
た此の母が計ない命生き延びて、我が子が刑罰に行はれるを、眺めて何の嬉しがる、お情却つて恨め
しい。ア、股五郎此の母は、何の様な身目に逢はうか親せうが、ちつとも構はぬ厭ひはせぬ、必ず
爰へ出てくたさよ。或る事なら此の道を、科直に殺して股五郎が、命お助け下さりませ。悪人でも
産んだ丁に逢ひがなければいぢらしい、お慈悲、ア、恩愛の、子故に迷ふ憂き洞、志の家来、見え
けるが、ア、思へば誰にも恨みなし、此の科の起りといふは、ア、しんない刀に念みかけ、成敗に逢ふ

本作の劔は我が子の敵ぞ。」と、言ひつゝ、這ひ寄り棒を、ずはと投、手も見せばこそ、咽喉のくさり
 をかき切つたり。是れはとかけ寄る城五郎、佐々木 仰天乗物へ、手負を打ち込みしつかと押へ、城
 五郎に目を放さず、底意をさぐる碇縄、又も大事と見えにけり。澤井惣と空とほけ、「レサ 丹右衛門
 契約の通り鳴海を受取り申さうかい。」「いかに、科入股五郎を請取、かはり、母が命は助くべしと契
 約は申したれど、御覽の通り、只今老母は自害致した。併し此方の手で殺しはせず、我が手に相果て
 二は果が存ぜぬ所。」「黙れ丹右衛門、置うた性五郎を料簡してわなすは何故、老母を受取りう爲許
 一、置かぬ子にかふる大切の鳴海、なま役、元のとくまかして殺せ、左なれば澤井惣五郎、
 いつか、殺しはてぬ。老母を早く請取らう、サア何とく。」と詰めかくる。丹右衛門ちつと
 ら、前か自害はいうて返らす、弟子として師匠の殺す極悪人の性五郎、目の前で親が死な
 ればとて、悲しむやうな奴でなし、説して縁者の城五郎殿、鳴海が最期を夫れ程に、惜しまつゝ、
 様がない。誠は老母が事は付けた、正宗の刀がお望みでござらうがの、夫れども刀は入らぬ、
 を生かして返せとあらば、拙者とても爲方なし。約束變替元の白地、罷りかへつて此の趣、主人上
 杉に言上し、一家中是れへ押し寄せ、槍先を以て股五郎を生擒にする分のこと、人非人の澤井が母
 死神の付、は是れを聞、軍の血祭早くなされ。と、手負の刀ぐつと引き抜き、「正宗の刀の切れ、

も、龍の腮を出でて行く、危かりける次第なり。影ほの暗き黄昏時、繩付引立て丹右衛門、前後を固めて行き過ぎる。思ひがけなき山門より、ぼつしと射かくる白羽の矢、膝にかつきとコハ如何にと、引き抜く間も又一筋、弓手の腕に立ち騒ぎ、周章で驚く同勢が、中へむら／＼物陰より、顯はれ出でたる數多の武士、物をもいはず拔連れて、家來を脇切り車切り斬り伏せ／＼一文字に、切つて蒐るを丹右衛門、前後左右に渡り合ふ、其の間に澤井を引包み、何國ともなく奪ひ行く。南無三寶と驅け行くを、新手を人れ替へ煙みかけ、既に危き其所へ、心ならずもかけくる志津馬、スハ一大事と拔刀命限り根限り、火花を散らす。強勢勇氣、相手は大勢身は二人、金鐵ならねば丹右衛門、數箇所の手疵力を破。志津馬殿か、エ、口惜しや股五郎を奪ひ取られた、無念々々」と許りかつばと伏す。ハハはつと志津馬もどくと坐し、弱るを付け入る家來ども、後ね馳せに池添孫八、片端撫切りほつ散らし、志津馬を構ふ忠義の働き、お谷も斯くと氣もそゝろ、足らしどろに走り付き、ヤア志津馬は手を負ひやつたか。」一若旦那手は浅いぞ、コレ氣を遣かに／＼と抱き起せば、「イヤ手疵には痛ねど、是れが正氣を失はずに居られうか。股五郎は手に入らず、正宗の刀は敵へ渡す、頼みに思ふ佐々木殿は此の深手、いよ／＼殿への言譯なし、運命も是れ限り。」と刀逆手に取り直す。「ア、コレ待つた、具方が今死んで父兄の敵は誰か討つ。」「ア其の敵が討たれぬ故此の切腹。」「イヤ／＼何ほうでも

放しはせしむと争ふ二人、倒れ伏したる丹右衛門むつくと起きて、「ヤレ志津馬早まるな、股五郎を奪ひ取られたは最初より寛悟の前、正宗の刀は我が手にある。」と、すりや最前城五郎に渡されしは。」「す、アレハ實物、行家殿より預りし正眞の刀は、いつかな渡す誠の正宗、志津馬が手より主人上杉に差上げ、上杉公より、武將へ献上ある時はお家の譽れ、是れを功に敵討の、額首を立てさす我が工夫。」とは思へども城五郎は、音に聞えし刀の目割、實物を突き付けては受取らぬ野智倭人、先づ正眞を模めさせ、すぐ様取つて鴨海が自害、乗物の中の鏡目で指り替へた實正宗、眞は是れに。」と乗物より取り出す切柄。正銘の極めは爰に今際の鴨海、早なるの息の下、股五郎が見の身で、丹右衛門様と言ひ合はせ、城五郎を諷りしは、さうで非道な座めか、命は所詮叶はねども、殿様のお手に渡れば、竹雞が森の御成敗に知れた事。せめて武士らしく、志津馬殿と敵討の、勝負で死すれば何程嬉しい親心、此の場を見通し下されと、お頼み申して今日の晴宜。」「す、お母の頼みはなくとも、志津馬に討たさにならぬ敵、態と敵へ等ひ取らせ、丹右衛門一人が通になつて相果つれば月日待つて本望達け、敵の首を先生の、位牌の前と身が墓へり、手向はてくりやれ頼む。」と、最期の際まで師弟の義理に我故命を捨てしる、此の大恩は何時の世に、かへす人と残念は、大敵の股五郎、志津馬が助太刀後立と、頼む此方に今別々、心のかなし、揺籃あれ、さす不甲斐ない志

清島殿、母右衛門は死するとも、無念の魂此の世を去らず、郡山の政右衛門こそ、我に十倍勝りし人、早き歸つてお管段、助太刀頼むといはすとも、彼が儀にも賜の誠、違背はよし早さらば。此の直のうらば水車出門出、母右衛門様、望海殿、思へば今日の言ひ合はせ、敵と敵が修羅の道連、とめは互に一太刀と、落しにる刀指添を、よめめきながら取り上げて、敵は敵めと胸と胸、差し貫いたる我上殿を、歎き悲津島は涙手の頼り、家来が肩に敵の圍み、齒をくひしはつて立ち歸る、心の内

第四 郡山宮居の段

諸君萬歳の言として、神に奉ふを述べたり、ノ。國初めの其の昔、誰か名付けて郡山、御城下の見付筋、武家町人の別ちなく、引きとらざるの八幡、奉納願主郡山大内記殿、此の番數をも、うち納まりし郡山川、あらお日出度や日出度やと、上を見習ふ下がり、頼てお立ちを松陰に、列を正して待ち居たる、主助が聲高に二何と能動どう思ふ、同じ様と言ふは初意ない事だが、殿様は道藝が好む故、今日は河所の奉納、明日は夏ものとお能、我々も其のお家に奉公して居ながら、其の氣のないは其如ない事ではないかと、いへば能動うち笑ひ、ハ、ハ、ハ、何を主助がいふやら、

80

驚きし、ノノ舞ひノノ屈み控へ居る。威光輝く内記殿、奉納首尾能く納まりて、早御下向の先拂ひ、お徒御近習前後を配り、鳥居前まで出で給へば、御供には宇佐美五右衛門、中尾定に召し連れられ、御前間近く引き添へば、跡押へは裏出林左衛門、指南の棒を振り廻し、卓高々と御供す。暫く是れにて御眺めと、宇佐美が詞に近習の武士、御腰掛を奉れ、遙か跡より能太夫源之進、御傍近く手をつかへ、今日殿様のお能、恐れながら驚き奉ります、いつノよりも出来ると給ひ、神も納受ましよと、叔一家中、何方様もきついお上手、殿様の御機嫌の程御伺ひ奉る」と、申し上ぐればうち笑みたまひ、源之進、是れといふも其方が指南の徳」と宣へば、ハハハ冥加な、御詞、時の面目あり難し。一と、退去つて、禮のべければ、重ねて仰せいださるゝは、「ア、羨ましいは源之進が身の上、我が望みは外になし、能太夫になつて狸々の亂れ、一世一代がして見たいわい。取りわけ今日の奉納も、我一人の力にあらす、一家中の者までも満足せねば奉納とはいひ難し、殊に天氣も宜しければ、我が悦び限りなし。大儀々々」と有りければ、皆一統に頭をさけ、ハツト許りに平伏す。互右衛門御前に手をつかへ、「誠に殿様の御意の通り、今日は一人天氣宜しく御祈願の奉納、一家中の者は申し上ぐるに及ばず、我々までも恐惶至極に存じ奉る。恐れながら互右衛門が御願ひの筋あり、先達御取次仕る唐木政右衛門儀、御衛を申し立て、お家へ御奉公に出し候所、名のみ許りにて、

其の器量あるなきを御上覽に入れ奉らす、何卒林左衛門殿と立合の儀、御高免違はされ候様に御願ひ上げ奉る」と、聞きも敢へず林左衛門殿、是れよく字佐美殿、御上へ對しおれ多い願ひ、七も政右衛門とぞ、貴殿の御世話によつて御術を申し立て、御奉公に出られた人、武士は相互成程お望みなば相人に成つて進まうが、そむやもう御願が答とぞ申す事さ、いかぬ事ぢやなく止しに召され、お氣にほつてられた、此の林左衛門相人には餘のおよなげなく、何の力か一塊りもあるまいか、殿にもをかしと思召す、ひ、ひ、ひ、と囁き、林左衛門には見向きもせず、政右衛門は、不鍛錬なる者杯と、悪口を申す者と候よし、左様なる者に御知行を賜はり候ては、取次仕此の五右衛門、一家中へ相済み申さす、是れによつて政右衛門に立合の儀、御知り申し上げ候様申し聞かせと、彼も斯き者の御故罪退任、候す此の御御上より御て付けとや下らば、拙者が前目此の上なしと、無値なき願ひに内証殿二式の道にしと、なれとも、我其の家に生れながら、御の事はとれに氣が乗らぬや、政右衛門事は、家老とぞいひ取持、相人の立合相方が御難苦事にもせよ、某が情にお事、家老とぞ心得せし、身が事に何様とも見物せん、今日の参勤とぞいふ家老とぞ不得心、そなたは父水田より出て忠勤盡す其の代り、前目候が天事ながら、始末の御難事候けふも道なす、政右衛門事に御進致すこと、兩人の事は、用人方へ言付けてくれ、其の代り

か。決然には勘當せし此の如行、某の親と云ふ女房に持たせしに、料なきものに金を付け、追ひ出しておこすのみが、親代にやつれる此の刀の物打に、腰の状を奪きおしは、おれを欺く憎い奴、心算にこたへ／＼こたへて料間ならず、年寄つたれどもこの字佐文、突き刃金の切味見せん」と一圓に渡つたる圓作、お算に取り付き、マ、マ、お待ち下され」と、親を捧ひ「マ、愚か／＼」まづ此方は、屋敷へ歸り朝氣もなすもてなされよ。我も跡より押しかけて、事によらば先手を取つておれかけん、其の時こなたと此の刀で、尋常に自害せられよ。未練に心残つた」と詞立派に言ひ放す。夫の心の善悪を、小様源々しく帯引しめ、勇ましく心取り直し、勇みいでむや庭神樂、打ち連れてこそ、マ、マ、歸る。

第五 郡山屋敷の段

昔は山の崎なれや、今も名のみは郡山、家中屋敷もつくろはす、直な唐木の目ある、家の柱は退き去りに、奥様役の留守頼り、石留武介は忠義者、常の奉公更表、内識賄ひ關がしき。臺所より元どもばら／＼と立ち出で、「コレ武介殿、今夜は内方へ嫁御様が見えるけな。お目出たい祝言振舞、私らもあやかるやうに、お手傳ひに参りました。」「マ、御苦勞々々々、小身は且影政右衛門様、仲間

一人に女一人、若黨の此の武介が、料理人やら家老やら、人手が無きに、御家中の女中方も御無心、待女郎にも耐人にも各を頼みます。一、二同じ給仕でも、祝言と聞けば氣がしよぎ、したが合點の行かぬ事は、お谷様といふ奥様、お里歸りなされておら、聞けば去られなうつたけな。まだぬくもりも冷めぬ内、新しい女房を入るとは、餘りな手廻し。一、二今度の奥様は何處からお出でな。るのぢや。一、二我等もかつふつ存ぜぬ、何だか知らぬが旦那一人存みこれで、今般様を呼ぶ程に、祝言の揃へせいと言ひ付けて出られたから、何か俄に料理揃へ。少し許り聞きはつた、海老の舟簀置御置等といふ、しちむつかしい事は取り置き、明の吸物腹合は、舊枕の心ちやけな。肝心の烏堂を忘れて、正月のお古を置みかへて間に合は、いかぬ物は鏡子加への折形、知つてなら折つて貰ひ度い。一、二何の其の様に儀式せいで大事ない、外人へない嫁人、今まで何處をこつとりと、圖うてもつた女中であろ。一、二オ、オあの政右衛門様とお顔に似合はぬ色事師、先の奥様はお腹が立たう。一、二朝染の女房殿取らして歸へ来る様づらは、どんなお顔ぢや見てやうたいこと、さがぬい女中の口々に、うたて浮名の高話。憂き事の思ひの種を身に持つて、我が内ながら心置く、夫の留守を窺ひ足、腰元目早く、一、二奥様能うお出でなりましたこと、いふに武介も押し下り。一、二幸ひ只今旦那のお留守と聞かればお知らせ申さう、先にお暇いと。一、二待て、いと重なる。一、二奥内様

おいて立ちあへと押し付けて御家老の二ひ渡し。今晚妻を迎へるとる婚禮の中、一兩日お延べ下され
 と、願うてもいかぬ聞き入れず、女房呼ぶは私事、明日は延ばされぬと、きりとは心ない家老殿。
 この方は内へ氣か急ぐ、もゝ足になつて、漸う只今祝言の拾へ、用意は出来たか、ケレメ、知行取り
 にも施き果てた。嫁の来るまで上解脱いで休息せし、比おこせ女子ども、アアと泣きもつし足に、角
 を隠せし。密にわたへに奥様を、腰元がはりの見えがくれ、袴は解けど胸解けぬ、籠、常の付
 肩衣、折つて覺んで取り直す、詫言の種とは見付けた夫。アア武介、あの女子は何者ぢやい。アア
 エイ、イヤそれば波の、こんにもお目見えに参つた、新参の女中で、アア、アアハアハア日那づまの目
 られて下さるまで、アア奉公人ぢやな、見かけから愚鈍ぢやな、不束な女なれど、遣うて見せしめ
 う。コリヤアア今夜は身とちが女房を呼びわける、祝言の給仕申し付ける。アアアア嫁とお杯、
 其のお給仕をせいととは、そりや餘り、イエアア餘り急な御祝言、不調法な私に、給仕得ずば奉公
 叶はぬ、立つて歸れ。アアアアノノ申し何でも御意は背きませぬこと、下女になつても夫の内、誰れ家
 ねたる心根を、察して武介が呑みこみ涙。アアアアだ、奉公は辛抱か大事、何おつしやうと、アア
 アアと、そこを程よう鹽梅加減、ドレお杯の用意せうと、料理を議會に立つて行く、折から宇
 佐美五右衛門様御出でと案内、アアハア又堅蔵がわせられ、誰ぞ持職持て来いと云はぬ先から心得

て、勝手遣えし女房、徳、機轉利かして後から、著せの羽織をひつゝよへ、二、子供で居ないわ
い、差し出女房後方へ行け、と、腕の付けられて是非なくも、上つ間せにしく入り来る左右衛門、彌
左衛門、敷の社舞、こはばり切つておすと坐し、一、政右衛門殿、今晚は其許に嫁入があると承り、御祝儀
申しに参つた、老人の寸志ごと御覽下され、と一通を差し置けば、一、是れは、婚禮を祝しての御發
句でがな、先づ以て忝し」と押し聞き見て驚き顔、一、フウ、こゝや拙者への果し駄でござるな、ハ、存じ
知らぬ、先づ其の意趣の次第はな、一、知れた事、科ない女房何故去つた、一、ハ、拙者が女房を、拙者
かゝるに、お手前様が何故の御立腹、一、いふまい、しもお谷は主杉の家中、和田行家が娘なれ
ど、お身と密通して、一、連、此の部山へかけ込んだ娘々の體不便に思ひ、且はお手前が器量を見込み
殿へ申して有り付かされたは此の左右衛門、其の上臈當番けて親の無いお谷、身共が娘分にして、改め
てお身にくれたれば、以前は行家が娘にもせよ今は身が娘、少しの見落し有るとても、去られる義理
ではな、と、一、思を忘れたお谷の女房持ちかへて、左右衛門と踏み付けたに方々忍ぶらぬ、それと
もお谷に據ない積でもあつかそれ聞かう、返答次第座は立たせ、一、と猶打ち叩いて詰めかけたり、
一、一、重々御免を千萬、お谷に微塵も言はなら、去つた仔細は別儀に、一、聞きよした女房と
いふものは、聞いてはもう、一、片時、持つて居られるのではござらぬ、一、一、お聞きな

相成いて罷りある、ヨメヲ新参の女もよき聞け、身共には先妻を失つたれども、親の許さぬ密通、
 自家殿の勘當の娘、それ合ひ女夫の悲しきは、表立つて婿男といふ事はならぬぞよ。今部山の扶持を
 罷く政右衛門が、よしふもな他人の助太刀がなるべきや。コレのお後は世間晴れた有家殿の忘れ
 片身、志津馬鹿娘に逢ひない。此の子と今祝言すれば、是れこそ眞の婿男、切の敵、小舅の助太刀
 住ると、殿へ御願ひようんに、まも不届とは思はれまじ。彼方此方を思ひはかつて、科たぬ女
 男、まづた謂は此の通り、義理といふ色に迷うて、五年の馴染に見替へた心、設けられて政右衛門
 殿、御立置の段々は、まづひらく御免下され。我等もう酔ひました、何申すやらたわいのこと、
 酒にまぎる。本性の、言諺聞いて手を合はせよう去つて下らんした、其の誠みちつこの間も、恨ん
 だ女子のまはり氣を、堪忍して下らんせ。身共もよい年を、疑ひの悪口面目ない、天晴
 武士か。政右衛門殿、此の祝言に敵討の門出、武士道も立ち家も立つ、よい嫁を迎へられた。賀々の
 でたい繁盛、我等もともなくお取持と、初めの腹立打つてかへ、一度に顔の色直し、お心が解けた
 れど、彌壽らぬ政右衛門が、後妻のお後や、二世かけて其方の男、今我から抱いて寝るぞや、コレ
 を男共々やなと、いへどお後は矢張り乳母もういなう。一とやんちや蜂。是れは娘とした事が、縁
 入早々生んでたまる物かいの。二や九駄まだ清まらぬ、殿御の杯、殿く物ちや二。三や九からはいや、

う、どうか、ハハハ御深切、近頃申上されたやうも、其許様に候明日、功願なつて下さ
れ、其の仔細をいつは、明六時、野田林左衛門と立合御せ被せし、此の勝敗に掛合はまする。

其れ知れてゐる、林左衛門が手の内、打つてふは伏するは合點なれど、轉じて御前の御意に叶ひ、是
れより一室中の師範御を仕ける、暇に出る時は、助太刀の望みが叶はぬ、御前においで、政右衛門
物の見事に打ち負け、それより越に知行差上し、浪人と思ふ儘、小鳥の助太刀渡す所有。時には
持前の御前を、風流にされた其許様、負けた我等が悲しむ、見損うた御馳騁、よもや生きてはござ
らまい、其れにやゝなり、これとて野田御前以下、様々御思に候りし、思を仇と申さ
るか、腹切つて下されと、申し出るは五臓の血を、一時に吐くよりも苦たはれども、別の腹が割れて
す、志津馬に本望を達せし、たい許様に、斯様の不届を申し上る、御敵に候て下されと、東を歇
く政右衛門、わつと泣いたる覺實に、感じ入つて、命進上申す、何よりもない事、
只残念なは、林左衛門に就頼かかぞんと思ひしに、却つて此の政右衛門、面目を失うて相聚するは
悔しけれど、貴殿が本望とされたば、其の上で身共が死ぬ、其の時雪ぐ哲しの無念、或ある者の爲
に、御腹一つ、夜に立たば、身に取つて大變々々、死するを常の武士氣質、一に聞いたか、主人
に預けた御代々にする、有り難いとお禮申せ、女房共とはいはれぬ、一「親子とも又、は

が孝行。「勝つべし勝負を負くるも義心」「恥辱を取つて御最期も、侍同士の情」と、互に禮儀の中々に、涙霑す八つの誦、時計の七つ忙しく、アレ早勝負の刻將近し、身は先へ登城致す、用意あれ政右衛門、貴殿のお暇出づるを相圖に身共が切腹、御邊は直様鎌倉へ出立、冥土の出立早参る。御苦勞、後刻」と式禮黙禮、性急武士の短夜や、明くる間を待つ最期の門出、勇んで御前へ、時邊ぎて早明六つの知らせの太鼓、朝日輝く大廣間、大内記殿上段の御に警座、近習の武士、各見物時が勝負、政右衛門は大の竹刀、櫻田は兼てより、好む所の三より流、長柄を持つて待ちかゝる。雙方呼吸、透間なく、先を取らんと共に合ふ。鋒先刃金に、けれども、鎧を穿る心の武闘、打ち合ふ数は、顔に、見る人々も息を詰り、暫く時を待てど、就て期したる政右衛門、櫻田が槍先を、あしらひ兼ねる手の狂ひ、竹刀があらと巻き落され、槍にひはらるゝと許り、がばと倒れて俯伏しに、面目なうこそ見えにけれ。勢ひ込んで林左衛門、一、二何れも神覺たは、敵で廣吉は誰いふ、よか勝負に勝つては、生兵法の役によつ物ではない。此の様な扶佐を、お取持ちなされた方右衛門殿、何と今御合點が参へ、イヤハヤ天晴のお日利き」と、嘲弄する。驚愕の前、御前に向ひ、さうで「不鑑識の政右衛門を推挙致すし不調法、恐れながら申上りて、言ひもあへず、肩衣取ね退け、不識に手をかくる。」ヤレ待て方右衛門、あれ留めよ。「御意ぢや、切腹先づ待たれ」と近習の聲々、ハッ

と許り、暫し控へて平伏せば、櫻田林左衛門唐木政右衛門、兩人共是れへ参れ。「ハハハッ。」と一度の答へさへ、肩で風切の櫻田と、唐木は枯れし萎れ枝、見せしけに蹲る。「ヤイ政右衛門、只今の勝負、大内記是れにて逐一に見届く、其方が致し方、神妙におもふぞ。」と、仰せにハッ、と許り夢見し心地、一座の不審「ヤ、其方共は、今の立合ふなんと見た、是も勝負には政右衛門負けたりども、始よりつくなく、見るに身構へ太刀捌き、能く鍛へし鍔の達人、林左衛門が中々及ぶ所ならず、彼が心を察するに、新参の身を以て、古参の者に恥辱をあたふるは、武士の情にあらざる、慙と恥を諒りしに、御許りか心まで、奥ゆかし頼もしし。群しながら、是れまで遊藝を樂しむ、武藝に疎き大名と噂に言はれし大内記、御術の批判、聖東なしとも言ふべきが、弓取の家に生まれし身が、武藝の知らぬ様有らんや。然れども、弓を袋にし、太刀を鞘に納むるは太平の掟、今足利一統に治まつたる此の御代、静謐の世に故を引き鎧を研ぎ、鎧よりよくは、上への恐れ家裏微の基、思ひ計つて、茶の湯風舞に目をくらせども、心に捨てぬ御術武藝よく知つて居る、身どもが眼相違あらじ、政右衛門を取持ちし五右衛門、身が爲に天晴忠臣、誤りと思ふべからず。又林左衛門事は、怪我が我の勝をそれとも知らず、いかめしく罵るは、我が藝の我が手に見えぬ不慮千両、知行くわゆる國の費え暇を遣はす、勝手に屋敷を立ち退くべし。」と案の外なる御詮意に、林左衛門一句も上らず、尖

を殿の御賢慮に、恐れ入つたる一家中、御前に叶はぬ林左衛門、早立ちめされ。」とせり立てられ、し
た、かた目に大廣間、一人すこゝ立つて行く。かたは政右衛門にいふべきは、新参ながら其方、
武藝、鍛錬感入る、二百石の加増申し付けらる、黒書院にて改め、今より一家中の階範となり、
唯忠義を勤んでくぬまうと、いと懇に仰せあり、しづく御座を御太刀持の、小姓引連れ入り給
へば、近習の面々も、めき渡り、一よりとて政右衛門殿、言しかねぬお首尾、おめでたい、イヤ
もうお羨ましく存じます。我々もあつかる筈、お杯が戴きたい、詰りに相侍り置ります。叔々お
手慣れ手慣れと、挨拶悦びうける程、ぐわらりと違ふ胸算用、二人は顔を見合はす許り、只一つとり
と手を組んで政右衛門殿、一は右衛門殿、是れではお殿は難はれまい。」「サア、身共も、折角切
りかけた親がひねになつた、コリヤマアどう。」と腰もぬけ、一度に溜息次の間の、横よりには妻のお
谷、肩にかゝりし柴垣が、喉に横突き詰りし、母の自害に稽す、お後も跡におろし目元、二人
驚き、何は此の生害。」「イヤ、う是れは世傳の上、唐太鼓の頼もしい心底を聞く上は、此の世に用
のない體、未來へ参つて、横お谷が此當の訴訟、今日の様子を兄留はすと、此の廣間にお次で、隠
れ忍んで委曲の事、思ひの外に立身で、お殿の出ぬは是非と、此の上から姉も妹も、此方様の
女房と思ひ、敵討には行かれますと、心の助太刀を、影ながら志津馬が力に成つて行へ、兄弟共さ

ばよ」と、顔を見上げ見おろして、露りの梅と春の櫻、障に残して息絶ゆる。コレは是れと取り付
 いて、泣く婦人や菊の間より、大内記殿の御直中、久方御前立ち出で給ひ、「改めて殿様の御詔意、政
 右衛門が今日の仕方、定めて様子あるべしと、御伺ひなされし所、心の底に望み有つて、態と我が手
 練を隠し、主を謀りし通、今に御座の次の間へ女を引き入れ、御殿を離れし科によつてお殿を遣は
 さん、さうなればしも扶持し置かれし家來、浪人の態に盡くろも不便なれば、刀一振、お殿の
 印に下さるゝ。殿様御秘藏の信簡の名作、敵討の機別とは仰有ぬ、賣代ふして世渡りの、助言に
 いとの御慈悲、有り難う頂戴しや」と、小姓に持たせし刀箱、うち開け申さぬ心の底、しろし召され
 し御座ぬ、と、相果てし志津馬が母、今少し生き延ばはり、此の御詔意を聞くならむ」と、とゞめ兼
 ねたる有り難涙、御簾中も御落涙、「父にも母にもおくりわたる、其の稚子は手廻りにて、養ひ育つる三
 世の縁、殊更姉は只ならぬ、お腹に持ちし大事の身、暇の親分五右衛門の、屋敷で介抱御在り、本
 望とけて立ち歸り、元の主従對面を、待つて居るぞ。とつどに、仰せも重き亡骸は、宇佐美が屋
 敷で野送りの、供にひかへし若黨武介、此の世の名残、御殿の名残、始めの妻と後の妻、生まれぬ子
 にも引かるれど、返すも大恩の、御前を拜し立ち出づる、世の有様こそ三輩ものうけれ

第六
沿津の段

東路に、安らぬ名高き沼津の里、富士見白酒名物を、いつ召せり。附屬にては、お駕籠やのみい参
りうか、お駕籠ノくと箱付の、船に車を乗り付けける、その値ひと知れたり。浮世流方は煙々
に、草の種がや人目には、荷物もやんと因廻り、泊りを待て一人連立場に見ひくちとされし。
ふかしや、大事の用事と八上忘れた、大崎さくら庵が當つた所まで、一疋馬に乗られたこと、急
ぎの川事走り書、さらしく一紙書き送り、早く行くことに決まれば、上に芳々み達者なり。安其樂
池敷に、元来し通へりきへる。同村より、足部中と、お前りと申すところなり。申し旦那様、
何卒としたして下りきて、今朝から一度と此の端を見よとの、どうぞお氣遣いとにじつけられしや
う。わしは、今日は夜越しに行きこえ、そこが御意だと言いますと、和合の口はお是れなくも、
「サ、それなら吉原まで何はぢやないか」と言われども、能く頼んで持つてのものを、よく手に取りま
せ。二三日をなさずしやつね、平素通りしにいひ、「さあみな持たせて下さう」と言ふ。……早
い、早く出てこられませ、……。……と云々。……に聞け、一騎走つては立ち留まり、今日は何情を天氣
おもふ、……サト云なせ。二肩注では思はず、旦那申し、向うの立場に……。名物は……。……

マツトまかせと、杖するたびに追従口、深田に下りし白鷺の、餌嘴をすることにならす。見るに
氣の毒、「コレ親仁殿、ちつと持つてやりませうか、ア、それ／＼／危い／＼」。「イエ／＼勿體ない
勿體ない」。「ア、氣の毒な足元、最前から見て居るに、氣しんどでならぬ」。「是れは私が足の癖でこ
ごります。旦那のかけで、今日も内入りがよござります」。「そのこなたも幾年ぢや」「七十に手がと
どいてござります」。「ア、コレ／＼／、合點の行かぬ足どり」。「お氣遣ひなされませう、古い時は
小指拂の一番も取りました、マツトまかせとな」と、いふ下道の爪先上り、木の根に躓きひよろ／＼
ひよろ／＼、コレ見やしやれ、エ、きつい事をしたので、親指を蹴かいたか、ヨシ／＼早速に癒してやる。
と、用意の薬取り出し、付けると其の儘「何と如何ぢや、痛みはとまみが」「コレハ結構なお薬でこ
ごります、痛みはとんと癒りました。サアお出でなされませ」。「イエコレ／＼、荷はおれが持つてや
る」。「ア、旦那減相へ」。「イヤサ駄賃はやる、氣遣ひさしやんな、此方の足元、最前から危うてあぶ
なうて、荷を持つ方がやつと氣樂な、話しちつて行きませう、サア／＼ござれ」と先に立つ。平作は
千鳥足、しんどが利になる筋弱の、砂になるかと悲しさに、小腰屈めて「申し旦那、一肩やりませう
かい」。「イヤ／＼是れで大分歩きよい」。「ア此方の足元、茶めいた物ぢやの、其の足取を狂言師に見
せたいわいの、亂れなどと言つて、傳授事になりごうな事」。「イヤ旦那の仰有る通り、大概亂れか、

に入らぬ妙薬」と、語れば娘は驚きたり。父様の命の娘、一日や二日で、お蔭は言ひも盡てがす、ならう事なら、今宵に爰にお違ひ遊ばし。」「ア、娘何言ふぞい、こんな家に泊めとして、肴は下膳の一疋なし、盃より外あなたの方に替く物はない。」「イヤ、ノ、不自由はしつけて居ます、娘御が彼様の様に、しなつてゐるうちはいやで、何うやら爰に根が生えた、女事なくば事を泊めて貰ふかい。」「日、お抜けし商人も、上手な娘の経験に、このりとなればお比し、油氣はない眞身の馳走、見れも一樹の笠舎の、壊れる軒の目印めてに内に入。」「旦那是れにごぞりますか、お立ちなされまで。」「か。」「安兵衛や、早かつた、其方に其の荷物を持つて、吉原の鍵屋で宿を取りや、旦那が細ねぬ、早う行きや。」「兩具の用意は吉原の、鍵屋をさして急ぎ行く、お茶は立つて門の戸を、引きささんとする所へ。」「平作殿内にか」とぬつと這入るは、原の町の古道具屋、一エ市兵衛様、御苦勞さようお出で。」「イヤ此方も商賣づく、昨日此方の言はしやるは、急な入用錢に、道具諸式を直にして取つてくれといふ事なれど、代物見てからの事と、手附に三百並せて、残りの錢持つて來た、駄賃出しては合はぬ仕事、直が出來たら、此方様が荷うて來て下さるか。時に、道具といふは、見え渡つた此の通りか、こりや聞いとはきつい相違。」「ヤ、第一、放しにくいと言はしやつた故、見込みに思つた佛壇が、こりや百が物ばかり、ナモマア、よこ置いて見よ、一つ土蔵、銅釜かけ、百二十と入

た」「ッ、また何故に」「ハテ一旦人に遣つたれば、捨てたも同然、我が子ながらも義理ある物。今其の客が身上が好いとて、尋ねに往て、客かたり貰うては、人間の道が濟みませぬ。今出逢うてもあかの他人、子といふは此の娘一人。」「ム、それも、其の兄貴は今幾歳位ぢやの。」「ハハ、斯うつと恰當今年二十八、鎌倉八幡宮の氏地の生まれ、母の名は豐と書付け、守袋に入れて遣りました。其の後此の山本が産んで、母も相果て、則ち今日が命日で、孝行な娘が水手向、花の立方御覽ぢやつて下さりませ。」「何心なき話の合致、一々胸にこたふる十兵衛、思ひ合はせば覺えある。扱は生みの親父様、血を分けた我が妹が貧苦の有様、有り合はせた路用の金、なま中親子と名乗つては、受けぬ氣質を何とがな、金の遣りたい屈託に、胸を痛めて、コレ親仁殿、何と物は相談ぢやが、此の娘を私に下されぬか。」「エ、奉公に上りますのか。」「イヤ、まだ女房のない男、利發な娘御、商人の噂には、極上々の羽二重地、得心して下さるなら、仕拵へは此方から。旅商人の事なれば、呼び迎へる目限は、まだ何時とも定められぬ。嫁入の拵へ料、爰に少々持ち合はす、是れ置いて往にまする、得心かいの如何でござんす。コレよい女房、面目ないが最前から、私や此方様に惚れたわいの。」「と、しなつきかければ、ついと趣き、「父様、彼のお方もう往なして下さんせ、いかに貧しう暮して居るとて、あたなも過ぎた、阿呆らしい。」「と、打つて變りし寝立ち顔「エ、嗜み、よい女房と云はれるが、何の

それ程腹の立つ事、我が器量なまの故むと、俺を情しい、と申し責り様、能く御深切に惣められ
やつて下さりました。おや、此のお事は女房というてはやらぬ御がござりです。と云ふ、そんな御
亭主があるのか、是れは、と云ふ實は只今のに任人の重典、主のある人とも存ぜず重相申した、真
平御免に預けまてう。と、殿御、御難直して貰ひたまはう。と云ふ痛み入つたお詞、ほんに思へば所
者を、お難りなうなる意受けにして、お返事してし莞爾と、笑ひに心うり解けて、暗にまぎれず
つづりと、目の暮れて有るに氣が付かぬた。三日月夜が上つてござる、好い月夜で御燈は入らぬ、
御燈明を闇にして、辻堂の雨舎り。お宿帳、最うお休、と足元ばすと燈につかへる奥座敷、帳りとな
がかりつて御簾をきき、此の奥帳、と云ふ趣は、其方に寝、且御簾はお堅いけれど、時の正
さみでは、主の有る池へ踏の込、と云ふも知れぬ、用心には御を預れりや、今後は俺が御引を引
て寝や。と云ふれど後方には、私のおんごの御になし、遠慮もてする縁の御、いとしくと問はけ
る。お前は一人物無ひ、心にかゝ、夫の病氣、我が子で介抱する事も、再世の義理に隔てられ、秋の
螢の消え残る、津波の聲と聞くと、嵐にふつと雲の付く、と云ふ言に泣いた父娘のみの聲、今でも敵の
手が、我が知れりや、夫の病氣では堪へず、と云ふ、と云ふ心で御簾をきき、娘の消えたるは
天の與へ、夫のためと云ふ足元、足元は、即ち取り上げ立ち足、足、足、足に目覺す上共、思は

高聲何者と、裾を提へて引きとれば、わつと泣き入る娘の聲。平作も悔りし、起き上つても眞暗
 なり、お米／＼と言ひつゝ、探す竈の埋火、付本にうつし顔見合はせ、「娘ぢやないか、旦那様か、何故
 に此の有様、エ、何の因果で此の様な、情ない氣になつたぞいやい。コレや此の親は、其の日暮しの
 者ぢやけれども、人さまの物もちぎなか盗もと思ふ氣は出さぬわいやい。エ、親の顔まで、穢しをつ
 たこと、わつと許りに泣き居たる。十兵衛は氣の毒顔に金銀を取つたといふではなし、是れには譯の
 有らうな事」と、問はれて、お米は顔を上げ「恥かしながら聞いて下さりませ、様子あつて言ひ終
 せし、夫の名は申されぬが、私故に騒動起り、其の場へ立合手疵を負ひ、一旦本復あつたれど、此の
 頃は切りに痛み、いろ／＼介病つくせども效なく、立ち寄る方も旅の空、此の近所で御養生、長しい
 間に路銀も盡き、其の貢ぎに身の廻り、櫛簪まで賣り拂ひ、最前もお聞きの通り、悲しい銀の土
 間、男の病が治したる。先程のお話に、金銀づくではないとの噂、燈火の消えしより、アノ妙薬をど
 うがなと、思ひつきしが身の因果、何卒お慈悲にこれ申し、今宵のことは此の場切り、お年寄られし
 お前にまで、苦勞をかけし不孝の罪、今日や死なうか翌日の夜は、我が身の瀬川に身を投けてと、思
 ひし事は幾度か、死んだ體でもお前の歎きと、一日ぐらしに日を送る、何卒お慈悲に御料簡」と、東
 育ちの張りもぬけ、戀の意氣地に身を破く、心と思ひやられたり。歎きの端々つく／＼と聞き取る十

兵衛、「コレ御、そんな此方様は、江戸の吉原で金儲け、松葉屋の瀬川殿ぢやの。」「ハイ、それ能う御存じ。」「すうや瀬川殿の夫の爲に、ムシノ。」と心の目算思案を練め、「イヤ夫殿、夫の手紙を消す婆ぼしいは尤も、それ聞いては進ぜたい物なれど、是れは人の預り物、此のことは思ひ切らつしやれ、今此方案の話をとほり、私も又恩を受けた、其の恩を受けた人の爲に、何れの寺でも苦しうないが、右様一つ寄進がしたいが、何と世話して下さるまいか。」それは御奇時、結構な寄進でござります、何時なりともお世話致しますう。私も来年は甥が年忌勤むる功德、共に成佛とやら、荒井お世話致しまするでござります。」「どうぞ今度の下りまで、遣はぬ様に頼みます。要ての頼みに、書付も此の内に委しうござる」と金一包取り出し、「コレ必ず頼んだとや、親子の衆最早お目に間もなし、半分無事に親仁殿に立ち出れば、半作も必ずお下り成ります。」「姉御さん」と許りにて、心に一面、荷物は先へ、道を早めて急ぎ行く。跡に親子は顔見合はて、金取り上げて、「ううおよね、半分大事にかけておきや、長男までに関も有る、和女も休みや」と水いらす、見廻す傍に落ちたお印籠「ア、是れはいさこの印籠のおつ、定めて尋ねてござるであらう」といふにお子の手を取つて「此の印籠にどうやら覚えの有る模様、ハイ合點の行いぬ、それが是れか」とよく、問ぬ、「ア、それよ、こりや澤井殿五郎が、常々持ちし物とお印籠、ハイ不思議な」と平作も、金取り出しよく見れば、金

子三十兩、此の書付は鎌倉八幡宮の氏地の生まれ、稚名は平三郎、母の名はお豊、コリヤコレ我が子に付けて置いた書付。」そんなら今のおりは、私が爲には兄様。」「、我が子の平三で有つたかい、そんなら最前からの深切は、それとはいはず此の金を、貰いでくれた石塔代、不思議の縁」と親と子は、暫し呆れて居たりしが、お米は印籠手に取つて、竝端折つて驅け出す。「コリヤ待て娘、コリヤどこへ。」「何處へとは父様、此の印籠を持つて居る、其の兄様は敵の手掛り、追つ驅けて股五郎が在處お尋ね、志津馬様へ。」「よし、おや／＼が我ではいかぬ、年寄つたれども此の平作、理を非に曲けてはして見せう、我も續いて跡から來い。どの様な事が有つてもな、必ず出るなよ、敵の在所聞くまでは大事の場所、木陰に忍んで立ち聞きせいの。必ずとも兎忽すな、合點か。北海道が廻り道、三枚橋の濱傳ひ、勝手覺えし拔道。」と、子故に迷ふ三惡道、轉けつ轉びつ走り行く。跡にお米は身拵へ、續いて出でんとする所へ、折柄來かゝる池添孫八、瀬川様か。一孫八殿、好い所へござんした、今夜安に泊つた客で、敵の手筋が知れさうな、詮議の爲に吉原まで、父様が行かしやんした。」と、忝い、シテ其の行先は、吉原まではよも行くなり、何角の様子に道にて聞かんと、瀬川に續く池添も、足に任せて三重慕ひ行く。實に人心さまん／＼に、町人なれども十兵衛は、武士も及ばぬ丈夫の魂、夜深に立ちし獨り旅、千本松に牽掛る。オ、イ／＼と、杖を力に息すた／＼、申しく、旦那様、ヤレヤ

しお早い足元」「フッ、全呼、だは此方、慌しう同の用。」「ア、只今のお金を戻しに参じました、
お塔と名を付けて大牧の金子、拾兩、其の日暮しの雲助に下さるにも譯が有る、又請けとするにも
譯が有る、けれども此の金を請けましては、さう人が立たぬ義理がござります。是れをお返し申しま
す代、こ、貴方にお願ひがござります、お聞きなつて下さりますか。」「ハ、一夜に宿るも何ぞの約
束、様手に因つて煩まれまい物でもない、と、夕間の風の聲しるべ、跡より竄ふ池添瀬川、周廻を吞
んで聞き居たる「シ、其の願ひの様子は」「ハ、仰有つて下さりませ、此の印籠の主の在處を承り
たうござります。是れを尋ねて知りたいばかりに、様々の流浪致す人、それ故にも御を出でて憂き難
難、是れが知れると本望成就、故につれて臥まで、ハ、ハ、ハ、此の上の世はござります。二十や
三十のはした錢で、露宿をつなぐ私が、死ぬるまで安樂に暮さる程、三十兩、其の金銀にかへて
のお願ひ、七十に成つて雲助が、子に叶はぬ重荷を持つ、それはまだ休むもする、子の可愛といふ
重荷は、寂た間も休まぬ一生の、苦痛を助くる妻の名、お前様も親御が有れば、子ゆゑには愚直に成
るものぢやと思召しやられて、願ひを叶へて下さりませ。」「ハ、申し旦那様、血筋と義理と通分け
有、ね、て血の縁の三界に、踏み迷ふこと、三道理なれ。親の心を慈しめり、左様有らう、心底
至極だ、ぢやが、是ればかりはどうも言はれぬ。俺も頼まれた男づく、其方の人が大切なら、此方に

又大切、又處處を聞いても、命がなうては本望は達せられまい。其方の内に落して置いた、主の、甲斐の、其の妙薬で養生、達者に成つた其の上では、望みの叶ふ時節も有らう。親に殿、左様ぢやないか」と心の掛籠、一重聞はぬ十兵衛が情の詞、それ程御慈悲の有るお方、とても、の事なら其の藥の持主、一、二、三、悪い合點、此の藥の持主は、其の病人とは大敵、二十兩の其の金、敵の恩を受けまい、返したではないか。此の持主の名をいへば、敵の藥で養生、恩を返すには、其の時の、鉈が廻らうぞや。やッ張拾うた藥にして、心措きなり養生したか、よござうに思はるゝ」と聞いて平作感じ入り、「アッさうぢやあつた、エ、お前様は恐ろしい發明なお人ぢや。左様聞きましては、申し様もござりませぬ、左様ならもう歸りましょ、旦那様おさらば」と言ひつ、擧つて十兵衛が、脇差抜き取り、腹へぐつと突き立つる。「アッ、何とした、コリヤ自害か、何故に誰を恨んで勿體なや」と、うろ／＼涙、聲に手當てる池田が、泣く首止むる響、草に喰ひ付き泣く許り、平作苦しき目を閉き、「俺や此方の手に掛つて、死ぬるのぢやわいの死ぬるのぢやわいの、ハ、此方と俺とは敵同士、志津馬殿に縁の有る此の親仁を殺したれば、頼まれた此方の男は立つ。コレ、此の上の情には、平作が未來の主産に、敵の在處を聞かして下されいの、外に聞く者は許さない、今死ぬる者に達意に有るまい、不思議に始めて通つた人、如何した縁やら、

まだ内蔵は白蘭の蒙、雪氣はぬ寒空に、水の出花や煎じ茶の、佛をだしに参詣人、黒谷の上人、鎌倉へ下向の道、山中の法僧寺に今日で三日の御逗留、御符御札のお虎にて、腰が物言ふ聲が治る、膝行のお祖母が参り御参りの三人が、茶屋の味凡に腰打ちかけ、何と太郎兵衛きつい人衣集の、皆聞かしやれ、御符のお虎で奇妙な事がござる、吉田の宿の鵜栗屋といふ安屋の子が、竜塘で目が潰れ、河が一人手の事故、夫婦の衆が憂心して、罪亡ほしに西國に出る所へ、上人様の御立ち寄り、河の御符を戴くやら聞かしやれ、其の夜から目が明きましたといひ、それから吉田中がひつくり返し、山中がお泊り故、毎日の参詣人、有り難い事ではないか、ハハそりや其の符いひ、安屋の子なら、黒谷様に御縁がある、ハ、ハ、こちらも往んで縁のある、噂が焚いた御符を、戴きませうと打笑ひ、我が家へに歸りける。父の教へを守らざる、其の罪科の降りつもろ、雪氣の空も厭になく、妾をやつす和田志津馬、敵の行方知れざれば、空しく過ぎる光陰の、矢竹に心關所前、コシ姉様、最前より此の茶店で、待ち合はす體の人は見えなんだか。「イエエ、左様なお方は見受けませぬ。」然らば暫し」と腰打ちかけ、姉様、此の遠目鏡は往來の慰みか。「イエエ、慰みではござりませぬ、私父様は、此の關の下役人、若し切手なしに抜道を通る人が有らうかと、吟味のための遠目鏡」と、聞きて志津馬が心の當惑、差當つたる切手の用意、ハテ如何がなと思案がほ、お袖は一心志津馬が顔、

ラモ好い男と思ひ初め、言ひたい事も娘氣の、口へ出兼ねる茶の花香、顔を眺めて没む手元、脇へ流すも氣もそぞろ、茶椀許りを手に持つて、弄出す心の思はくは、汲んで知れかし目遣ひも、相手に藝氣が有ればこそ、「是れはきつい御馳走、餘る茶に頼が有る、然らば今一つ、とてもの事にほんまの茶を、いくつもノ、呑みたい」と、思はぬお茶の捨て詞、お前故なら何度でも、入花を上げたいと、何と言ひ寄る方もなく、顔は上氣の初紅葉、男の生憎一森に、戀の思花と見えにけり、志津馬も探はと心付き、我に心をかけしこそ求ひ、切手の手が、れと、心で點頭きまり寄つて、「コとお娘頼みだい事が有る、さんと聞いてくれる氣か」と、思つた盡へ利かに、言ひかけられた返答は、詞につまらな女子の情、何と返事と言ひ聞かすわたくしもお前に頼みか、と、その様な事なれた、頼むた有れば引きはせぬ、「と、赤い、わたしもお前故ならば、どの様な頼みで、願ひはせぬにと、寄り添へば、おそれ聞いて落着いた、何を隠さう我が身の上、今夜中に此の關を通らねば、我が一念にかゝる事、こなたの頼みは道々、何ぞ教へて貰ひたい、死んでも忘れぬと頼む」と、色で仕かける我が身の大事、さつと聞かむお娘は頼みかへ、思かひやら頼みいやら、抱き付いてはしめなす、顔は人目の關の門、六つからは通らなから、それとてに私が覺き、苦し間違へばわたしの老無きとて漏かた、必ず氣遣ひ遣はするにと、おもひ合ふたお娘の縁、二人が望みは「道中、一筋道を急ぎの道中、狀

箱刀に括り付け、通るか、ればお袖は呼び留め、「お飛脚様お休み。」と、いへば奴が立ちどまり、「呼び
かけられて姉様に、恥かかしてよ、者が、まだ八つには間も有るわい、一ぶくせい。」と腰打ちかけ、
「ヤレノ、しんぞやノ、申しお客様、御免なされ。」と、いへど志津馬も何氣なう、「お飛脚はどれか
らお立ち。」「イヤ下掛は鎌倉前が谷の四つ辻切通し、前夜漬松泊り、日が短くて漸う爰まで。」と、間
くより志津馬は心當り、だまして問はんと傍に寄りうてノ、早いこと、私どもは何としてノ、エ
羨ましい足元。」と、はなしは機会に茶の出花、一日見ろより餘念なく、お袖が傍にぐにやとなり、「ヨリヤ
い、白齒敷のお初穂、一日飲ます氣はないか、一目見ろから懸茶となつた。」「エ、奴殿悪もやり
置かんぞ。」「ちやは、とちやノ、入れまい、こちやすつと漢のこつちや。コレイノノ、其方や向
くまいどうぢやノ。」「エ、去りとは貴客も頗に似合はぬやつし方、名は何と言ひます。」「身共が名
は助平、イヤもう飯まわも好物だてや、コレはお漢どう仕てくれる。」「エ、じやらノと、そんな事
より此の様な、面白い物見る氣はないか。」と、目鏡の傍へ突きやられ、助平は差し覗き、「ハアヨリヤ
面白いこと、眺め入り。」「エ、大勢人が見ゆる、ハア向うに見えるはア、あれは、俺が仲間の頭だ。」
「頭、何ぞ用はないか、何ぢや金比羅様の提灯もある。ハア川が見える、何ぢや藤屋の二階で客が衆
しみる、エ、味い事ノ。」ハアあの女は見た様な、それだノ、ヤわりやおきのでないか。」と、一

目見るより血相かへ、「や汝は、ようも俺に退狀おこし其處に樂しんで居るな。コリヤヤイ、言ひかはした事忘れはせまい、旦那へ願うて奉公引かし、女房に持つと思やこそ、春から一歩遣り、三歩やり四歩遣り、女房ぢやと思やこそ、俺が切替うち込んで遣つたぞよ。コリヤ其の折、俺に何と言うた。お前と夫婦になつて、夜も晝も、樂しもうたぢやないか。それに何だ、我が見る前で尾流千萬、其の男と抱かれてゐるか、よくも俺をだましたなり。鎌倉で人も知つたる、澤井殿の家業澤井助平、もう料理がならぬわい、と、願け出せしが、「ハア、今のは何處だ、何だ何にも見えない、コリヤどうだ」と、言ふにお前が少し疑ふ、と、吉田の茶屋の二階、爰から一里も有る所、願ひを言ふだけが見、もう料理なされ、「如何様言へば一理ある、遠方から情氣するは罪に耳をらするにあらじ、とは言ひながら残念」と、又差し置き車に成れば、是れ辛む、其は澤井の家来よなと、志津馬は邊に氣を付けて、状態の封押し切り、「一通へ取り元の如くに看すもの、知らぬ助平一心不亂、うづ眺つて、エ、エ、日中を乗りをる、こりやもう堪忍ならぬ」と、お前が腰を力草、「一、致して下へせ」と、何と是れが厭な、ハ、く」と吉田の如く縮張り返り、横にとつたり朽木物と、お前の詰たる双足、締目の切れし如くなり、傍に落ちたる紙入の、中より出づる開きの切手、見にお前は驚び立つ思ひ、縛しいやら怖いやら、結衣の袖の此の切手と、志津馬に渡せば懐中し、「我が子の雛像は

運れたが、かうして置かれぬ奴殿、アッ、蟲腹か。蟻納め、アッ、顔へ其の水吹きかけたらう。いふふにお前
 は狼狽へて、涕と違つたる茶釜の茶、天寶へぞつづ、打ちかくれば、刑め氣の付く助平が、意見相し
 過ぎ上り、うち背しに許酒にし、ア、何方様か。赤い、生まねついで、軍めが蟲草く、時をおこる。喧
 子に、湯がかつて助かつたこと、話せば一人は顔見合はせ、をかしう眼。許りなり、時もおこる。喧
 所には、打つ袖手木に助平が、一つ二つと揺揺りて、アッ、アッ、七つの時おほり、太切の此の味箱、
 一助も早くお届言申さん、腹所の切手と。婦人の、内を捜せど、ハ、めんうな、南無三寶あとの安
 店で落した、アッ、アッ、走りこゝち出づれど、水氣取られし河童奴、ふならくくと泡水の、泥埴に
 逢うたる如くにて、お前も道へ引き返す。お前は顔を見送ひて、此の間には早うと、茶店の道具を門内
 へ、運ぶ片手に顔眺め、見舞かぬ目録の懸、志津馬は一心腹の手掛り、白前娘が手を引いて、面輪
 さして歸りける。鎌倉の奥女中、お前歸りの道中と、人目に見せる飯乗物、問屋の前へ受合居る。
 家来お前へ立ち寄つて、お前でお前へば、暫く是れより御歩有と、聞くとひととき目を開き、京極
 に尋ね置し、東頭市に目許り出し、昨日にかなる勢ひも、淵淵と音聲は、あたりは廻し、アッ、
 罷流の音、太鼓で存つた、是れより早く歸つてなれ、林左衛門は倒してござる。アッ、アッ、お前へ御出です
 ござります、お前にはお先へお通りなされ。アッ、アッ、木にも音にも心置けば、世話人、志津馬

竹の押、分け忍び行く。とつく見届け助平は、狀箱腰にくゝり付け、味い／＼と拔道の、跡を慕うて急ぎ行く。不敵なるかな政右衛門、天に一命擲つて、目ざすもしらぬ眞の闇、降り来る雪の道踏み分け、裏道つたひ一丁許り行くよと見えしが、關所の内に聲高く「忍びの囃子の音するは、裏道を越えらぬ者あり」と呼ばれば、それ遁すなと捕人の人数、兼て用意の高提灯、人数を配つて取り巻きしは、危かりける。三重大鎧なり。政右衛門は事ともせず三角に眼を睜き、山を食する猿松め、皮引つはいでくえんと、太刀引きぬき待ちかけたり。それ遁すなと組子共、一度にかゝる四方詰め。いゝ小瀬なと振るほどき、付け入る所を宙にて切り取り、飛びくる熊手を受け流し、切り立て／＼切り立つれば、詞には假ぬ組子ども、跡をも見ずして逃に散つたり。逃ぐるを追はす政右衛門、道の案内は此の提灯と、勝手籠まし袖道の、足跡しるべに慕ひ行く。跡におくれて助平は、一ちの勝手は方角知らず、うろつく折納、取つて返す組子ども、それと言ふこも及ばばこそ、高手小手に拵り付け、狼狽へ奴と夢にも知らず、組子の頭大音聲、強敵の曲者を、組子仲間へ生捕つたり」と、引立ててこそ三重大急ぎ行く。

岡崎の段

世の中の、苦は色かふる松風の、音も寂しき冬空や、雲より降りつもる、軒を離れ家へ、
岡崎の宿はづれ、百姓ながら一理窟、主は山田幸兵衛と、人も心を奥口の、障子隔て女房が、續
ぐ車の夜職歌、黒いとし殿御を、三河の澤よ、戀の棧文柱若、更けて忍ばば、夜は八つ橋の、水も
洩らさぬお手枕、鄙も都も小娘の、誰教へねど戀草を、見初め惚れ初め打ち付けに、雪の夜道の氣散
じは、互に手先折り添ふる、傘の志津馬に纏れ合ふ、じやらくらゝ語何時の間に、戻る前が我が家の
戸口「オ、辛氣、いつもは遠う聞えたに、意地悪う今夜の早さ、まだ話が残つてある、歸へ戻つて下
さんせぬか。」さりとは譯もない、日は暮れる草臥れ足、跡へも前へも雪の段、蘇の木焚火より
暖かなそもこの間で、暖めて貰ふが御馳走、早うお宿を御無心。と、じやれた詞にうて、よい
こ悪いから白痴、聞いて仕舞ひ、謙ぢやく。「アイく母様わたしぢやわいな。」「オ、お袖とし
そ者が、此方悪いのに別して居るもの、早く帰るに傳へまね、早く退入りの、お母様の、詞は
に内へ入り、「疾う歸らうと思ふたけれど、道是りおな、あつ、それでは早く退入りを、お母様の、

(つづく)

泊めて上げて下さる。申し苦しいござりませぬ、此方へお遣入り遊ばせと、呼ばれて志津島は仙
仙と、小瀬船にすゝ御放されませ、廻り旅の浪人者、日は暮れる足は損ふ、氣方ききて此のお宿へ、
近頃やういふ事なから、一夜のお宿を御断心と、言ふも心に荷物のもつ、お見ゆるまゝ、とうも母
様、又様の旅高船、夜處に候つてゐるからは、一す、親父殿も今日暮前歸らしやつた、旅草臥で寐て
ぢやない、一す、置うても大事なに、早い事やと其の歸は、言はぬ色目を見て取らぬ、白頭
らゝ、親父殿とつと出て、灰りを案じる孝行な其方、どうやら不興な御持は、かゝい父御の氣持故、
折角お話を傳しませうと、お供しやつた邊達へ、約束が違ふかと案じ過ぎての事で有らう、親父
御は御心でも、此の母が不得心、何故と言や、今でこそ茶店の娘、去年までは鎌倉のお屋敷方へ、奉立
奉公、御主人様のお指圖で、なる武家方へ、相々は縁付けうと、悪い約束、其の許嫁の女を、無理難
難うて、祖の内へ戻つて、間も無うみたらが、あつては、以前のお主許りぢやない、顔は知らぬと、
した増殿へ、何の頼まけて言はせう、斯ういふは言ふものの、其方に限り左様した事があるとい
はれど、時分の来た若い娘のある内へ若い男、一夜は悪か平時でも、一つ所に床臥しをば、おは立て
られぬ人の目、其の上良人奉兵衛殿、固守よりのお目がなにて、所間の下役を勤めさつとやる今の身
分、常の百姓とは違つて、物事を正しうするも役柄、必ず思ふ聞きやんなやと、言はれて聞

首尾」に、這入るや否や後から、帯際ほうと引込んだかへ、常から目顔で知らしてら、ひんしやんくはね廻る、馬よりおれが太鼓のぶち、立場で陣見付けたやうに、きんばい仕舞れて居るわいの、否、厭なしに、ちよこ／＼と膝でかくれて、しなだるれば、穢い、穢い、嫌らしいこと、突き付けられても押し強く、誰でも初手はいや／＼と口では言ふが、がさ汁と色事は、味覺えてから止められる物ぢやないで、それとも否なら俺も意地ぢや、今夜藤川の關所を破つて、忍び道をとほつた奴、召しとらへうと岡崎中は、土を下へと詮議のどう中、胡散な奴との相合傘、ちらりとつないだ此の眼八、灰汁で洗うた蛇の目詮議、ほえ頬かしてこまうこと、かけ入る向うへ立ちふさがる、お袖を突き退け立て切りし、障子引き明け見て、こりや違うたと狼狽へ眼、かけ出す蛇の目が利腕捻ぢ上げ、立ち出づる上の幸兵衛、「百姓なれど新關の下役も相勤める、身共が居間へ、泥脚を切り込む狼藉やつ、料簡ならぬ所なれど、所存ある故放してくれる、此の以後きつと嗜みからう」と、投げ付けらるゝと思ひの外、突き放したる手強さに、底氣味悪くうご／＼もむ／＼、見るにお袖が嬉しさと、いとしい人の納まりを、心一つにとやかくと、案じ彌増す思ひなり。弱みを見せぬ悪者根性、お家へべつたあは股打ち、「役目々と言はるゝが、其の大切な關所をぬけた、利人を吟味する最中に、爰の娘が連れて戻つた旅の侍、引込んで置きながら、詮議する此の眼八、何故しめ上げて手こ

めにしたのぢや、一、娘が連れうち歸つたとは、其の侍は何處に居る。」「ア櫓が先刻に爰の内へ。」「黙りをらう、お袖にうつほれ最前より法外の有様、承引せぬ故無法の常様、假し又其の侍とやら、此の内へ来たにもせよ、鎌倉通の東海道、數里なき旅人の往来、是れをと言ふべし奇縁もなく、侍とさへいへば、悉く引捕へ、關破りと言ふべきか。勿論汝は常流の馬廻じ、誰が許しやの詮議呼ばはり、長居ひろかば括り上げ、御地頭へ引立てうか、何とく。』と、きめ付けられ、「ア車しくお氣の短、前賣が馬方だけ、豆から發つたいござで、親仁様の御所まで、踏馬御免」とへりす日、跡方も見すして遅く歸れば、跡見送りて落著く。忍ぶ志津島と一問を立ち出で、爰に身を關わりと、今の危難を免れしは、御亭上の御恩恵故、と申し、手を支へ、御の腕に「ア是れはく痛み入る、先づくお手を上げられい、さ、何に。」「是れは御浪人とな、定めて仕官のお望みで、上方へござるのかい。」「イヤく様子あつて世を忍ぶ獨り旅、則ち當面關崎にて、山川幸兵衛殿が密かに參る浪人者。』と、聞いて不審の眉に皺、其の山川幸兵衛とは幸兵が事、其侍は何方なり。』と、より直に幸兵衛殿とな、拙者は鎌倉の肥後武士、澤井源五郎殿に頼むる者矣。』と是れにて藤川にて、里に入る。通手に渡り、封押し切つてを以て、つぶく讀むも日の内、様子知らねば氣遣ふお袖、幸兵衛とく、説く終り、ふ、某が傳根を見込み、和田の家へ訪つて立

「是れ、澤井五郎かりとなつてくれよとある、お頼みの書面の趣、先達鎌倉の様子承りし湖より、詩に侍つた此のお頼み、随かに承知仕つた、遠途の所御大儀々々々、此の度をお頼み、其許に、或五郎殿の御家来なりと、尋ねる討敵の手筋、是れ幸ひと氣色を止し、澤井五郎殿の御親切、承心主からは何のか懸念、某の刀の遺恨止む事を傳へ、和山行家を手にかけし、澤井五郎殿と申す者、澤井五郎殿か、いかにも左様、鎌倉出立式で折は、澤井五郎殿に附人も、是れぞ、人目に立つとも御何と存じ、別れに罷り登る、或五郎殿には、頼もつて御慰意の幸兵衛殿、何とぞ御助力下さるば、此の上もなき拙者が悦び。」ム、さすれば貴殿が或五郎殿か、是れは、存じ寄らぬ、是れまで互に御意得れば、雙方ともに知らぬ同士、コリ、娘、許嫁の婿殿ぢやわやい。」ム、そんなら私が鎌倉へ御奉公の其の中に、澤井五郎殿のお勤の故、其方を清は、と、面談には及ばぬ、約束した花婿殿、終うこそ尋ねて下された」と、悦ぶ群の洩れ聞、母も立ち出で、「ヤレノ、ノ、思ひがけない、此方様が婿殿であつたかいやう、それが氣には支へて下さる、許嫁はありながら、或五郎と言ふ名を續うて、今まで娘が不得心、それ故疎遠にうち過ぎました。が聞いたと違つて、好い男、此のやうな婿殿でも、其方はやつぱり否かいやう、一、勿體ない事言はしや、許嫁の殿御ぢやと、今の今まで知ら、でさへ、誤つてゐるもの、縁

111

入りける。既に其の夜もしん／＼と、遠山寺に上り着る。早九つのかねてより、内の方内は知つて
 る眼八、裏から忍んで納戸口、思はず頻く聞きがらの、駄荷の荷籠を幸ひと、あたふた押し明け忍び
 込め、鼻息をすそ窺ひ居る。斯くとは人も白晝の、道も厭はぬ政右衛門、心も闇の忍び道、遁れ急
 ぐ跡よりも、数多の捕人が見え隠れ、慕ふ足跡は尋ねて唐木、南腰密と道端の、手探り集め押し隠す、
 透ちあらですば／＼／＼、腕を廻せと追取り巻く。ア仔細もいはず理不盡に、廻かゝるべき腹
 は、と、言はせも果てず、變方より、捕つたと掛るを引外し、苦もなく首筋一廻み、一聚りふつ
 て右左、弱腰蹴りあて、胸投げ、隙間を得たりと一番手が、腕を振り解き、ほぐれを取つて眞
 道様、一瞬刻骨雪道に、打ちつけられて叶はじと、入り替つたる三番手、打ち込む手かいくゝり、
 腕腹を丁ど真の當、罷しき手練にさしもの親子、左右なくも寄り付かず、跡どまりたる許りたれし見
 兼ねてかけ寄る捕手の小頭より上意によつて向ひし我々、手向ひなすは關破りの浪人者に相違は
 い、腕を廻せと、雷めかくれば、一ツと急急なりお役人、急用あつて此の如く我道を急ぐ、狼の者、丸
 體の束を、間所を破りし浪人とは、身に取つて覺えぬ難題、外は御詮議ならねと、ちつとも恐れ
 る丈夫の振舞、始終を見届は幸兵衛は、口口をかけ出で押し隔て、彈りながらお役人へ申し上ぐる、
 間所の御詮議半ば、深夜に一人歩行の旅人、御話ひは御尤も。併し此の者は鎌倉御殿、仔細あつて

此の幸兵衛、能く存じ罷りあれば、慮外の段は御用捨あり、無難にお通しくたされば有り難き仕合。」と、かばふ詞に政右衛門、「ムウ言ふ此方は何人」と、いふをうち消し、「イヤサコリヤ身に覺えないにもせよ、お役人に慮外の手向ひ、ア、不届至極。」と叱り付け、しづくと歩み寄り、倒れ伏したる組子ども、引き起して死活のいけ、「何れもお心慥かにござるか、お役目御苦勞千萬。」と、苦い挨拶氣の付く捕人、幸兵衛なほも威儀を正し、「承れば關所を破りし科人は、帶刀の浪人者、彼は町人此の丸腰、憚りながら人違へ、斯やうな儀に隙取る中、彼の曲者を取り逃さば詮なき事、早々お手當なされよ。」と、言はれて實にもと捕人の小頭、「ムウ其方が存じしとまうす詞に相違もあるまい、是れよりは山手へかゝり、彼の曲者を詮議せん。家來参れ。」と引連れて、元來し道へ引返す。影見送つて政右衛門、「ハ、ア危き場所を遁れしも、全く貴公の御厚志ある。がお禮は重ねて。心もせば失禮ながらお暇申す。」と立ち上るを、暫しと留め、「昨今なれど折入つてお尋ね申す仔細もあれば、見苦しけれど拙者が宅へ、暫時ながら。」と老人の、詞に是非なく政右衛門、然らば御免と打通れば、門の戸引き立て主の幸兵衛、修近く差し寄つて、「多勢を相人に今午の働き、感心の餘り役人を欺き歸し、難儀を救ふは身どもが寸志、それに付けても不審しきは貴殿の柔術、正しく拙者が流儀に同じき眞影の極意、手練せられし旅人は。」と、時の色目此方も不審、「眞影流の極意なりと、見極められし御浪人、ハテ心憎

雙方が、ためつすがめつ見合はす顔、ム、お別れ申して十年経り、相好に待たれしが、生國勢
 州山田にて、義徳の御指南下されし、男様ではござりませぬか、と、其の詞で思ひ出した、我勢州
 にありし節、幼少より育て上げし庄太郎であらうがな。「成程々々、然らばあなたか其のがか、是れ
 は是れはこそ手を打つて、盡きぬ師常の達智行燈、掻き立てくうち眺め、オ、稚童に見えぬ庄
 太郎に相逢は、又、如何に生れ立ちしな、と先生にも御健勝で、と、と、と、無事の對面互
 に満足、さりながら、ア、思ひまはせば過ぎ行く月日、其方は山田の荒蕪、荒田宮内が地なれども、
 幼少の御父兄に連れ、とある不便に、手障にかけ、育つる所、稚童より武藝を修むは、
 もしく思ふより、門弟どもへ稽古の次手、一手二手と教ふる中、一歩進んで知る、頗智といひ置
 けといひ、五以上にて槍術、劍術、鎗術、騎術、柔術に至るまで、諸師の弟子を出し拔き、
 奥義を極むる無雙の達人。何卒大家へ往官致させ、親の氏をも頼がせんと、心願に思ふ中、未だ
 師匠と見限りしか、家出致して十五年、便りなれば折に觸れ、此の庄太郎は如何なりしと、雨に
 け風につけ、思ひ出さぬ事もなく、夫婦打寄り其方が噂。シテ、其今の住所は何處、有付ともあ
 るかと、師匠の慈愛に政右衛門、思はずはつと手をつかへ、親にも勝る大恩の、師匠を見限り家出
 せしと、御疑ひはざる事なれど、常々武術の事、小耳に聞く其の中に、と、心に凝ら

り、清流に渡り修行をなすこそ、此の道に心づけと御教訓、心通にし渡り、十五歳にて國を出で、
齊く諸國を遍歴し、武術を磨く武者修行、天運に叶ひ然るべき主取も致せしかど、生れつゝいたる
好色者、酒に主人の機嫌を損じ、只今はその浪人、便るべき屋をなければ、若し女に有るやと
志して参る所、思ひがけなく先生に面目なき對面。と、うかつにそれと書の上、言はぬ披露は
白髮の母、様子を見てや一間立ち出で、庄太郎が、十人威人しやつたの、連日の目録に違は
ぬ武藝の上達、器量を見込んで頼みたい仔細がある。と聲を潜め、其方の家出した事は、三つ子のナ
ノお袖、もう十七になるや、縁有つて許嫁の舞臺殿や、肌を敷き付け舞臺者が有る故、と其
の時の後、方になつて下つと、無に人海人にも勝つて思ふと、いかに人いかに
にも、庄太郎と知らぬ先、難儀を見兼ね救ひしも、其の底を頼まん下心。と、師匠の詞聞きより、す
政右衛門州を當つて、其の昔は知ふ敵の敵名に、明にいふに上杉の家来、井筒五郎といふ
侍、件は知ふは和田志津島と聞いた許り、面識は知れども、常で知れたる吉原、幸兵衛の片腕に
も是れ知人。と、又一つの間隙といふは、後援が師匠、東家政右衛門といふ奴、前に聞かし武藝
達人、總ひ五十人百人加勢あるとて、政右衛門には及ばぬ。と、さうして、新米に立あはし、その
がなで外にはない、何とぞ堪に力を添へ、助太刀願ひ生太郎。と、除夜の鐘に政右衛門、先生

に内縁ある殿五郎殿に力を添へれば、少しは師恩を報する理、いかにも助太刀仕らう、サ、此の上は澤井殿の隠れ家へ御案内。と、せき立つ唐木忍びの眼八、蓋押し明けて差し覗く、紫をちらりと見付ける幸兵衛、心付かねば「ヤレ／＼」嬉しや、庄太郎の今の詞聞いたからは千人力、ドレ堀殿へ」と起ち上るを「ハテ扱いらざる女の差出、殿五郎殿の行方は知らぬ、ハテ壁に耳ある世の話し、それとたしかに知らねども、言ひ聞かすには折があらう、がうかつにそれと明づれぬ、暗の蓋は取らぬが秘密にと、何處やら一物歩行の小助、門の戸たゝいて「申し／＼、庄屋殿から急な御用、只今御出で」し、とんきよ聲。「ハテ又闇破りの詮議であらう、いやといはれぬ役目の不祥」と言ひつゝ、羽織引つけて、暗む大太刀差しこなす、腰も屈みし海老鉈を、葛籠にしつかと「ソリヤ女房、今も言つた話の蓋、戻つて来るまで明けぬ様、心に下した此の錠前、ナ合點か」と詞の謎、聞く女房も解けやらぬ、雪道いとはぬ高足駄、さす傘の骨組も、人に勝れし岩乗作り、歩行を先に幸兵衛は、心を残して出でて行く。「戻らしやるまで寐られもせまい、絲續ぎながら話ませう。」「ハア今に御上根な事、マア火にお當りなされませ、私も是れから下男同然に、お遣ひなされて下さりませ。」「何のいの、此方様は大事のお客、マア煙草呑んで緩りつと寝轉んだがよいわいの。」「イエ／＼勿體ない師匠の内、ホニ此の煙草は何處から参つた。」「ソリヤ親父殿が旅戻りに、貰つてござつた上方煙草。」「ハアあ

あなたのお口に合ふのなら、服部が國分か、此の天氣に斯うして置いたら濕りまじよ、留守事に刻んで見ませう、幸ひ爰に切臺庵丁「底に劍の葉拾へ、敵を聞き出す煙草の小口、葉巻手早くきり／＼を、大の體を小廻りの、奉公振も哀れなり。外は昔せで降る雪に、むざんや肌も郡山の、國に残りし女房の、思ひの種の生まれ手を、抱いてはる／＼海山を、たどり／＼て岡崎の、宿より先に日は暮れて、何處を宿と定まなく、がばと轉ければわつと泣く、手をすかす手も冷え凍る、雪の布圍に漆乳の枕、いんのこ／＼／＼に、友誘ふ犬の聲々、夜廻りの番が見付くる小提灯、や／＼／＼軒下に何で震るのぢや、きり／＼往け」と叱られて、「ハイ／＼／＼、私は秩父坂東めぐる頼義、頼でお腹を痛めまする、ちつとの間置かしやつて。」「頼義でも幽霊でも、在の中に寝てゐる事はみらん／＼、意地ばるはなほ胡散者、棒いた／＼／＼と提灯突き付け、見る爪はづれの尋常さ、白眼んだ眼うつかりと、細目に聞く戸の隙間、内から覗く夫婦の縁、思ひかけなき女房お谷、ハハと悔ひ羞しあはせ、包む我が名の頼はれ口、悪い所へ切りかけた、煙草の刃金、胸を刻むと人知らす、フウ見た所が小盗みする風俗とも見えぬ、此の雪に乳香子か、へて難儀もや有る、何所ぞ御生氣な所を頼んで、泊る貰はしやれ。エに見れば見る程比谷な好いだ房、一人寝さすは残念なれど、此方も寒氣にとちられ、瘦細の提灯であつた物を見逃す事」と、吹き歸るも頼みなき、人の詞もせめての頼み、火影を力、戸口に這ひ寄り

幼い者を連れた順蔵でござります、お情に今宵一夜は、お庭の端に」と許りにて、頼に苦しみ息切
 の聲に主は涙をろく、いとくや頼持ちさうな、門中に寢ては堪るまい、泊めてしんじま」と立つて行
 く、由無三寶と頼引き留め、一、足れば又御龜相千萬、此のお鯛の殿しい中、殊にお役柄の此の内、
 何所の者やら知れどもおに、誠に引き入れ、跡の難はどうなる、急度止しになされませ。夜中
 に一人歩行く女子、嫌な者ぢやござりませぬ。戸を明けすと、はい止なしたござります。一、いか
 様なう、親父殿の留守の中は用心が肝心、コレノノ旅人、憂鬱しけむと一人旅を泊めるに御法度、御
 城下の中に軒下にも寝る事はならぬ程に、宿外れの森の中へ往て寝やしやれ」と、和かに言うて引き
 出す縁中、来いと言うたとして行かれる道か、道は四十五里波の上、ハア何處へ行ても一人旅は泊
 てくれう様もなし、ほんのの海出も、此の千の顔を旦那殿に、見せたいと思ふ頼力で、産み落すか
 ら此の已之助、漸う思も漸くや明かす、腰を立つてつひに一夜は、家の下で寐た事がなけれや、身は
 ならほしと山寺の、頼がなれば寝ることにして、星の光を燈火と、思うて寐入れと今夜のくらさ、凍
 の様な此の肌で、寝苦しいは道理ぢやわいの、殊更頼で乳は影らす、雪に消えぬ間にうたる、幸き
 骨にこたふれども、旦那殿の弟が、敵を尋ねる辛抱は、またノノノ斯様な事ではあるまいに、其
 の頼にこたふては、雪は悪か初の上にも、家ろのかきめて女房の役、氣は張り詰めても此の頼の、

重^{おも}ろに付^つけては二人^{ふたり}の身^みに、勢^{つか}れの首^{くび}が起^{おこ}りはせぬか。萬^い一^{いち}悲^{かな}しい事^{こと}りやなど聞^きいたら、何^{なん}とせうぞいなう。頼^{たの}み上^あぐるは觀^{くわん}音^{おん}様^{さま}、弟^{あとう}夫^との武^ぶ運^{うん}長^{ちやう}久^{きう}、我^わが子^この命^{いのち}息^{いき}災^{さい}命^{めい}、未^み練^{れん}な事^{こと}ちやが私^{わたし}も、此^この子^こを夫^そに渡^{わた}すまでは、生^いきて居^ゐたい死^しにともないこと、信^{しん}に夫^{ちと}のあなごとも、知^しらぬ不^ふ便^{びん}さ喰^くひしは喉^{のど}に熱^{ねつ}湯^{たう}内^{うち}外^{がい}に、水^{みづ}火^かの責^{せき}苦^く雪^{ゆき}で、子^こを濡^ぬらさじと抱^かきしめ、天道^{てんたう}哀^{あは}れ白^{しろ}雪^{ゆき}の、積^{つも}り重^{かさ}なる旅^{たび}勞^{らう}れ、癩^{しか}と寒^{かん}氣^きにとちられて、アと一聲^{ひとこゑ}氣^きを失^しひ、とうど倒^{たふ}れ、物^{もの}音^{おと}は、肝^{きん}にこたへて南^{なん}無^む阿^あ彌^あ陀^だ、南^{なん}無^む阿^あ彌^あ陀^だも口^{くち}内^{うち}、今^{いま}のは何^{なん}ぞと主^{あるじ}の母^{はは}、口^{くち}を引^ひき明^あくれればつたりと、身^みは濡^ぬ瀉^さの目^めはみたり。「こりや眩^{くら}暈^{ゆん}が來^きたのぢやわいの、エ、審^{しん}しや、如^{どう}何^{なん}せうぞ、夫^それ幸^{さいは}ひ此^この氣^き付^{つけ}。」と、つかは文^{ぶん}庫^こに用^{よう}意^いの藥^{くすり}ア、申^{まう}し、こりや御^ご無^む用^{よう}にささめませ。」「なぜにいの、こりや親^{おつち}父^{ちち}殿^{どの}の道^{だう}中^{ちゆう}で持^もたしやつた結^{けつ}構^{こう}な氣^き付^{つけ}。」「サア其^その結^{けつ}構^{こう}な氣^き付^{つけ}を、人^{じん}同^{どう}然^{ぜん}の善^{ぜん}に吞^のまして、それでも氣^きの付^{つけ}ぬ時^{とき}は、かゝり合^あひにたりませぞえ、此^この儘^{まま}にして放^{はな}り出^でして、お仕^し舞^まひなされませ。」「ぢやといひて、どう見^み捨^すてなるもの、レ可^か愛^{あい}や、乳^{ちち}をさびして泣^なくわいの、せめて此^この子^こを殺^{ころ}さぬやうに、奥^{おく}の火^か爐^ろで温^{あた}めて遣^やりこせう、風^{かぜ}に當^あてじ。」と寢^ね室^{しつ}の橘^{たち}井^い、あかの他^た人^{じん}は慈^じ悲^ひ深^{ふか}く、比^ひ翼^{よく}とかはす女^{にょ}房^{ぼう}を、憐^{れん}う引^ひき出^でし戸^とを引^ひ立^たて、奥^{おく}口^{くち}見^み廻^{まわ}しさし足^{あし}し、男^{おとこ}手^ては見^み置^{おき}釜^{かま}の前^{まえ}、附^つき、隣^{あか}りの見^み答^{たか}へて、人^{ひと}は何^{なん}とかいひ柴^しを、そつと隠^{かく}して門^{かど}の口^{くち}、伏^ふしたる妻^{つま}の氣^きを付^つくる、半^{はん}の火^かのあは、まじ、

しめる齒を押し割つて、雪に濕す氣付の一滴、耳に口寄せ聲微め、お谷といふも憚りて、心の内で呼び生くる、夫の誠通じてや、うんと一聲「氣が付いたか、コリヤ女房。」「ハア、マア、コリヤ何にもいふな、敵の在處手が、口に取り付いたぞ。此の屋の内へかいの。」と、いふを押へて、「コリヤ何にもいふな、敵の在處手が、口に取り付いたぞ。此の屋の内へ身どもが本名、けぶらひでも知らされぬ大事の所、其方が居ては失望の妨け、苦しくとも堪へて、一丁南の辻堂まで、這うてなりとも行てくれい。吉左右を知らすまで、氣をしつかりと張り詰めて、必ず死ぬるな。サア早う行け。」と、夫の詞は千人力、觀音様の御引きあはせ、お前に逢うたは人參熊膽、エ、忝い、坊は何處へ。」「氣遣ひすな、坊主は奥で寢まして置いた、ソレノ向うへ來る提灯、見付けられな、早うノ」とせり立つれど、此の年月の悲しさと、嬉しき凝じて足立たす杖を力に立ち兼ねぬ、免やせん側に脱ぎ捨てし、薦に積りし雪の儘、著せて人目を暗き夜を、ほかほか展る達者親父、「オ、お歸りなされましたか。」「オ、庄太郎、寒いに門に何して居る。」「イヤお歸りが遅い故、お迎へに出かける所。」「ナンノ迎へには及ばぬ、こりや門口に柴の燃えざし、非人どもが業で有る、不用心な。」と、見廻す提灯、「イヤ私が」と取る拍子、態とばつたり、「コリヤ龜相。」「だんないだんない、きつい嵐で、すでに道で取られうとした、またも好い所で火が消えた。」と、言ふもこたへる疵持つ足、天氣も大方上り口、庭から足拭く下駄直す、師匠思ひに機嫌顔、「イヤ馴染程結構な

黃道中氣

も、其の丈夫な魂を見届けたれば、なにをか懸さう、股五郎は奥へ来て居るわいの、婆孃殿を起しておぢや、コレ／＼股五郎の片腕になる、頼もしい人が來たと、言うてこゝへ呼んでおぢや。」「入り澤井股五郎殿は此の内に居さつしやるか、ノリシテ外に連の衆でもござるかな。」「イヤ／＼供もなしたつた一人、奥底なう話してたもこと、打明け語ろは思ふつほ、何條知れたる股五郎、手取りにゐるは安かりなんと、手ぐすね引いて待つ大膽、志津馬は女房が案内に、股五郎が片腕とて、何奴なり。」「只一對もと、鯉口くつろけ居合腰、氣配り目配り、星にきつと、ヤア、こなたはノリと一度の仰天、幸兵衛おんすと居通り、唐木政右衛門、和田志津馬、不思議の對面満足であらうな」と、うきかけられ二人より、思ひがけなき女房が、心どぎまぎ不審顔、リント老人の目利き、よもや違ひはせまいかの。今青澤井股五郎と名乗り來る年配恰好、聞き及びしとは拔草の相違、扱は却つて付け狙ふ志津馬が、但し餘類の者が、臆敷させて詮議せんと、態と一ぱい喰うた顔、二十組板見いたし、我が弟子の庄太郎が、政右衛門と言ふ事を、知つたは漸くたつた今、骨柄といひ手練といひ、適れ股五郎が片腕にせん物と、頼めば早速承知しながら、股五郎が在處を眼を押して、聞きたがるは心得ずと思ひしか、子を一體に差し殺し、立派に言ひ放した目の中に、一滴うかわ涙の色は、隠しても隠されぬ肉身の思愛に、始めてそれと悟りしぞよ。澤井にさせる思はなけれど、娘お袖を或五郎方へ奉

公に遣つたとき、筋目ある人、姉、木々は我が一家の股五郎と堅合はせん、と、いかにもお粗事すと、つい言つた一言が、今更引かれぬ因果の縁、其の後娘は奉公引いて歸りしか、今筋目にまつた股五郎、見放されぬは侍の義理、かくも不幸兵衛、狙ふは我が弟子、悪人に組してゐぬと報ひに引かれず、現在我が子を一思ひに殺したは、御無愛の政有衙門、手はさきの此の問答へい言、さりとては過分なぞや、其の志に感じ入り、縁の肩持つ片京娘も、前早是れ限り、只の百姓、粗人も侍も、神らぬものは子の可愛さ、此がけ明のちきりのもある、最前ちなりと思ひ合はす、縁の縁の心が解しやらるゝと、悔みは門に堪へ兼ねて、わつと泣く筋目よりも、聞くる戸直に轉び入り、あへなき氣を撫き上げ、いざ助、物言ふことも、母をすわいのノ、今夜までも今朝までも、愛い辛い其の中にも、てうちしたる職責、父親によう似た顔見せて、自慢でうと愛したるの、進ふと其の儘差し殺す、嫌たらしい父情を、恨むるにも報せぬめ、前生にどんな罪をして、佛の子には生まれしぞ、こんな事なら先刻の時、母が死んだら受目は見まい、佛のお慈悲のあるならば、今一度生き返り、乳房を吸うてくれなかつと、直に頼むつ違ひ願ひ、抱きしめたる我を身、雪と清めべき風情なり。志津馬廻押し拭付、此の上は包まん様なし、とてももの事に此實の敵の在處を、何が此方も隠とはせぬ、有りやうは此の孝兵衛、最前庄屋へ嫁ばれた時、股五郎に逢うて来た。」「ヤ

すりや敵は庄屋の方に、心得たり。」と願け出すを、政右衛門引き留め、「愚か／＼、我々こゝに有ると聞いて暫時も此の地に足を留めうやうがない、はや五六里も行き過ぎて、もう爰に敵は居ぬ。此の行く先も用心して、海道筋へはよも行くまい、道をかへて落ちたと見える、親父様、何と左様でござらうがな。」「したり、黒星其の通り、とても非道の股五郎、天道の御罰にて、どうで討たる、者なれども、此の岡崎で勝負さすれば、肩持たねばならぬ幸兵衛、藥師堂の山越えに、中仙道へ落したは、城五郎へ一日の情、股五郎との縁も是れまで。思はぬ方便が縁になり、志津馬殿と言ひかはした、娘が身の果て不便や。」と、見れば籬の小陰より、思ひ切髪墨染の、袈裟に變りしそぎ尼姿「お袖か、オ、出かしやつた、悪人の股五郎に、假にも女房と名の付いた、其の間違ひが其方の不運、可愛や盛りの黒髪を。」「アコレ申し、もうなにも申しませぬ、顔は見ねども許嫁の、男持つのがうるささに、屋敷を戻つた其の時から、尼になる氣で袈裟衣、今日一日に氣が替り、染め違つたる鐵漿付を、元の白齒と墨染に、染め直しても剃つてても、思ひ染めた煩惱の、心が元けぬ佛様、御赦されてと身を反向け、泣かぬ氣を泣く親心、股五郎にも志津馬にも、縁を離れたお袖道心、袖振り合ふも他生の縁、子に別れた頼體に、菩提の爲のよい道連、關役人の我々娘、關所々々も切手入らず、中仙道への案内者、勝手連に連れて行かれよと、娘に敵の道引を、連子ゆゑに踏み迷ふ、未來の契り簞葎木、涙で渡

す父母の、恵みも深き觀世音、南無阿彌陀佛、無阿彌陀、我が子は冥土の道しるべ、志津馬唐木も聴き合せて、悄れぬ表武士の禮、「師弟に内證敵同士、此のまゝ、歸るは卑怯者、返せ」と一聲切り付くる。得たりとくる半蓋に、馬士の胸切り重ね切り、「まつ其の通りの手柄を待つ」と、まだお手の内は狂ひませぬ、「ハ、、、やがて吉左右々々」と、笑うて祝ふ出立は、侍なりけり。三重

第九 伏見の段

男共々々、ソレ胸の間へお布團に入つたかな。「ハイ胸の間の四人様、水菜は爰に置きます。コ船頭衆、此の荷物破物ぢやぞ、ソレ氣を付けて貰はう」と世話を素煙の土産物、積むより早く押し出して、舟を見送り御機嫌ようお下りなされと、そこへ、夕日ほどなく吳竹の、伏見の里の船着場、軒をならべし舟宿の、客に絶間もなかりけり。世の憂きを、何と志津馬は此處彼處、敵の行方尋ね兼ね、心氣勞れた眼病を、いたはる瀬川も雨共に、暫しは爰に宿りして、北國屋東三郎、手を引き連れてそのろくと、梯子をおりしも黄昏の、人なき隙を幸ひと逢見廻し、「イヤ市、志津馬は、二階許りもお氣詰り、月の夜、おの川景色、見やしませんか。日、養生」と、介抱如く撫でする。心遣ひぞわりなけれ。「イヤモウ何ほう養生しても、持たしうらない眼病、見かけに替はなけれど、今日は

此の頃は此の様に、其方の顔さへわかり兼ねる、ぶら／＼月日を過す中、主人上杉公急病にて、御死
去遠ばさるし由、御存生の中に、敵討たぬ残念、頼みに思ふ政右衛門殿、武介諸共引き割れ、大坂
へござつた故、此の伏見に逗留するも、若しや敵の、オ、是れはしたり、思はず知らず大きな聲で、
コ／＼誰も聞いては居なだかひと、萱にも心奥口へ、きこえ憚り差し寄つて、ひそ／＼話す店先
へ、志津馬に連れて孫八が、忍ぶ姿の按摩取、頼申すつ候。新著の、宿屋々々の門口から、按摩まご
ざい、一、孫八殿、一、レ、瀬川様、さりととは物置の悪い、我等按摩取の勘兵衛、必ず龜相御
有るな。と、さびつ、差し寄り小聲になり、若旦那のお供して、二三日以前から、此の伏見に逗留し
て、思ひ付いた按摩癢癢、毎日々々此の船宿、入り込んで氣を付くれど、さして是れはと申す様な手
掛りもござりませぬ。それは左様と、若旦那とお目はようござりますか。と、孫八の心遣ひ忘れ
はせぬ、某とても此の程より、歩行ならぬ、出入の旅人に、心を付けて窺へども、敵の行方知れ
ざる故、次第に重る眼病は、口惜しきよと許りにて、打萎るればお道理と、瀬川も涙孫八も、とも
に目をすり居たりしが、ア、さりとてはお氣の弱い、何の神佛様が無いにこそ、アレ天道が正直なれ
ば、御孝行な心が届いて、御本復も本望も、今の中でござりましょ。其の様に思召すは養生の大きな
毒。毒の次に瀬川様、道角病人は介抱が大事、お如才あるまいけれど、お若い同士何よりかより

卷之六

く志津馬「ア、瀬川、おれを聞きや、同じ武士の身の上でも、衰へると榮えるは、是れ程にも違ふ者か。心を盡して尋ね捜す、敵には廻り逢はず、困窮の上此の眼病、よつく武運に盡きたか」と、悔むに瀬川も共涙「ほんに思へばおいとしゃ、沼津でお別れ申してより、お跡をしたひ尋ね逢ふ、甲斐も長しい日は立てど、是れぞと思ふ手掛りもないを、苦にして此の様に、眞に悲しい病む目より、傍で見ると私の心が、推量して下さんせ」と、託ち歎くを此方には、聞き耳立つる櫻田が、兩耳びつしや「ア、コリヤ何とする、放さぬかやい」「ア、お前様も辛抱のない、斯う致して引きさけねば、お頭痛が直りませぬわい」「ハア仰山な按摩だな、シテコリヤ何といふ流ぢやぞい」「是れは南蠻流の癖、今宮流でござりまする」「ハア聞えた、それで聲にするのぢやな」「ハ、ハ、ハ、コレ瀬川、した其の様に案じてたもん、此の宿の亭主が引きあはせて、鄰近逗留してござる眼醫者、竹中惣宅老の加減の薬、湯煎に立てて洗うてたも」「アイ」と言ひつゝ、かい立つて、勝手へ入つて汲んで出る、夫に盡す貞節の、心は清き清水焼、白湯に振り出し差し出せば、始終聞き居る林左衛門、詞の五音心得すと、延び上つて差し覗くを、ちやつと兩手でめんなない千鳥「ア、コリヤ／＼何とする、目が見えぬわい、又是れも今宮流か」「イエ／＼」斯う致して置きまして、一時に手を放すと、何とお目がはつきりとなつてよござりましょがな、是れを名付けて天照大神、天の岩戸開きと申しま

す。「河を馬鹿な事を、したが氣作な按摩取、シテ其方が名は、何といふぞい。」ハイ私は坂屋助兵衛と申しまして、此の間大坂から参りました。貴方もお下りなされたら、外を申しおき、芝居へお出でなされるであらう、ア、面白い事でござります。コレ則ちこゝに持つてをりますが役者の番附、おなぐさみに御覽じませ。」ムウナニ是れが役者の番附。「ハイ坂屋土産に何をもらうたか、申し、役者の番附日傘でござります。」ムウナニ日傘。「チエ日傘。」シテそちが假名は、坂屋助兵衛。「一丁坂屋助兵衛。」一丁坂屋助兵衛、ハ、ハ、是れからお下を参りましたか、真におおきな名でござるか。「一丁」トの聲は後ほど聞く、荷物も一箱にくれう。中を氣作な聲の故、真景の聲を放たれた。さうば是れを氣作の、宿屋の知行に有付かう。助兵衛は、刀を抜き、上へ、一間へ入れば孫八は、上の間へと急ぎ行く。道指は違つて何處かは、前脚と見えて門口から、ハイ何れを頼ませう、是れのお客は、新五郎へ、大坂から此の館で、間々お尋ね津島は、假名の替名、「オ、是れはく、則ち情者林新五郎、直々に請取りました。」ハイお尋ね事なされるなら、追ひ取りに参りましょと、言ひ捨て、前脚は立ちかへる。「コレ瀬川、新大坂より此の館に、初参りなされて、早う、二におじめ参き、重宝ながら押し聞、真の内より様を頼み、是れ足掻き足掻き、西脇に記れて立ち聞くと、心付かねば、「テモ扱も政右衛門様のお氣の付いた、私で讀める様に假名

交りの此の手紙、……、彌御無事と存じ候、然れば敵一落足と……、大坂川口の出口々々、
は、西弟ども數多付け置き、油斷なく手當致し、我等事は武介請共、是か騎兵庫の邊に待受け候間、
其の邊にて待りし事と御座候はば、早速御知らせ下さるべく候、此の由よりし入れ度早々以上……、
……政右衛門殿には、大坂を立つて、兵庫の邊へ参られしか。此方よりも委細のわけ、返書にくはし
く申し送らん。コレ瀬川、こゝは端近奥の間で、大儀ながら書いてたも、飛脚の來ぬ中サア早う。」
……と瀬川は夫の手を、引き連れ這入る後影、とつくと窺ひ、「扱こそ、和田志津馬に相違なし、踏
……這んで討て放さうか、ハ、如何はせん」と言つ左いつ、思案半ば一ひよつかく、一僕さへも内證
の薄いを黒める木綿の居士衣、見るから薙井の竹中實宅、療治しまうて戻り足、それと見るより、「オ
オ是れは、……、聊座敷のお母様、コリヤ端近にござりますな。」と、昨晩のまつと、御意得申した贅
宅老、……是れへく」と片膝へ、招き寄せて聲を語り、「今朝も申す如く、聊室に返致して居る若侍
がアノ眼病、貴殿が療治召さるゝに付き、折入つて頼みし密事、彌御承知下さるゝや。」と、御
大身の貴方様のお預み、お禮物さへ體かならば。」「先づは過分、然らば打明けお話し申す、仔細あつ
て某始め、別宿に逗留致す、組の者共へ、仇ある奴と夜前より心を付くるに、身共が推量ちつとも
違はず、彼が實名知つたる上は、討つて捨てんと思へども、彼の者に力を添ふる劍術無雙の曲者ある

三

レドレ今一度、診て進すすまう」と、行燈あんどう引き寄せ燈明とうめいの、ためつすがめつ隠し見て、「コリヤ内事うちごとをぢやわいの、是これをら洗あらひ藥すりでは行かぬ番、コリヤ取とつて置おきの點藥ちんやくを出ださすばなるまい。コレ大切たいせつな藥くすりぢや程ほどに、うつかりと思おもはしやんなや、氣遣きづかひ召めさるな、今の間に本復ほんふくさして進すすまう」と、こゝてこて取とり出す藥箱くすりばこ二ツ、是これはよいお方に、かゝり合あはして拙者しやうしやが仕合しあ、此のお禮れいは本望ほんぼうや、さう追付おつけ本復ほんふく致いたしたら、急度きゅうど致いたすでござりましょ。「ハテ心遣こころづかひさつしやるな、醫道いどうは仁頼じんより、人の救いさなふは醫者いしやの役やくぢや、さすもそつと此方このちへ寄よらつしやれ」と、片手かたてに輕押かろおしし明あけて、すくふ件の毒藥どくやくは、直すに志津馬しづまが命いのちを斷ことつ、匕しの刃金やねかねの點藥ちんやく、忽たちち毒氣どくき廻まると見え、「ア、蒙あう此の目めが。」と、痛いたむ番、しむむか、しむむで有あらうがの、少しの間まぢや。怖こへさつしやれ。藥くすりめんけんせざる時は、其の病治やまひちせすと申まうして、一旦いつたん動うごかねば藥くすりは利きかぬ。追付おつけ兩眼りやうがん明あらかに、此の活藥かやく師しが治あして進すすざる、ドレ其の間に一服いつぷく致いたさう」と、煙管えんくわん取とり上げすつばノ、素破すやの骨頂こつてい納なめた頼付たよりづき、志津馬しづまは苦痛くつう堪たへがたく、「申し申まうし服致ふくいたさう」と、煙管えんくわん取とり上げすつばノ、五臟ごそうまでも沁しみみ渡わり、いかう苦くるしうござります」と、聲こゑに瀬川せがわも走り出いで、「若もしお藥くすりは違ちがひはせぬか、お心慥こゝろたしかに持もたしやんせ」と一方ひとかたならぬ介抱かいほうに、じろりと觀みめ。「うつそりどもめ、今藥いまくすりぢやというて點きしたのは、汝わがが目を潰つぶさうばかり、おれが秘方ひほうの毒藥どくやくぢやわやい。」と「アノノ、そんなら、今のは毒どくであつたか、何意なにい趣しよあつて此の仕業しわざ、サ様子ようすがあらう様子ようす」

卷之六

鋒先に、爾先すつは切り下けられ、うんと倒る、其の隙に、奥を目掛けて駆け入るを、一瞥くこ
聲をかけ、濱邊に繋ぎし苦舟より、時裝束、其の儘に、武介引連れ政右衛門、急々と入出で、手に
入つた敵なれども、こゝでは討たれぬ仔細あり、大なる氣心ある兵衛が此の深手、非道に親せ
し先年を悔い、志津馬が手にかゝりしは、本望ならん。」と、ありければ、手負はむつくと起き上り、
「オ、御推量の上は我が所存、令更くどく申すに及ばず、胆五郎はじめ一味の者共、西國へ落ち失
せては御本望の妨けと、政右衛門様の計略にて、最前の假令飛脚を、誠と心得裏道より、小倉堤を伊
賀越に、志州邊羽の池より、入廻して九州相良へ、落着いたことの言ひ合はせを、お知らせ申して
相聚てゐるが、志津馬様へは、お約束の通り、町人なれど有難の儀なれ、胆五郎に頼ま、この御を南
方へ、わけて置くは此の上なからうと、蒲川が事は政右衛門が、刀にかけて志津馬に懸はす、この
政右衛門の政右衛門様、其の御一言は呉服屋が冥土の魂香、さういふ片時も早くはつて、此の
年月の内に、早くく。」と、氣をいさつて、手負に取り替く妹が、歎を制して政右衛門「オ、い
かにもはつつき討ち置きたは、我が家の中にあると、志津馬が亡君上様殿の、御家門たる品山、政
家公よりす息なれど、寧ろ、百騎ある伊賀路におい、本望達するものならば、泉下に在す定
家、泉下への通書ならん、願ひ御目下千人、彼に力を添へるとも、天啓に背く敵の助より、何れ恐

る、事あらじ。時は初更の戌の刻、先へ廻つて伊賀越に、多年の本營今此の時」と、唐木が諫に力足、手負を跡に三つ瀬川、三途の瀬は敵のさきがけ、さらばくを夜嵐に、聲吹き分くる海道筋跡を慕うて 三重 急ぎ行く。

第十 敵討の段

されば唐木政右衛門、股五郎を付け出し、夜を日に繼いで伏見を出で、伊賀の上野と志し、先へ廻りて、代官所の居けも潛みて、北谷の四つ辻に、主従四人我劣らじと入り来る。政右衛門聲をかけ、「孫八武介は我に構はず、志津馬をかこへ。我兼て聞き及ぶ、股五郎には附人ある由、目ざす敵は只一人、縦ひ助太刀何十人あるとても、何程の事あらん。最早来るに間も有るまじ、身拵へを。」と制すれば、志津馬は今日を一世の時業、心得たりと片肌脱けば、南軍鎖の差込に、鎖の鉢巻、拜領の不動國行覺えの名作、同じ唐木も立附に、灑の鉢巻信國のねた刃は兼て合詞、いづれ劣らぬ古今の勇士、池添石留引き添うて、日頃の念願指す敵を、今や來ると待ちかねたり。ほどもあらせず股五郎、惡黨原に前後をかこはせ、一番手は林左衛門、さめき渡り我一と、小田町筋へと打通る。斯くと見るより和川志津馬、木陰より飛んで出で、向うに立つて大音上げ、「いかに澤井股五郎、汝が手に

かけし和田行家が「子同苗志津馬、此の所に待ち受けたれ、尋常に勝負せよ」と聲かくれば、政右衛門「ま、久しや櫻田林左衛門、郡山にて眞鍮の勝負をせよし其方、今日に至つたり、サア勝負せよ。」と呼ばはつたり。心得たりと林左衛門、馬上より飛下りるを、走りか、つて政右衛門、筋骨より肩先かけて切り付たり。ソレ通すなと聲々に、一流を得し附人をも、志津馬を目當て切りかくる。心得たりと池添石留四人を相手に切り結ぶ。股五郎志津馬は一騎打ち、兼て手練の和田志津馬、爰に顯はれ彼所に切り抜け、飛鳥の如く早業に、股五郎もあしひ兼ね、突つかける槍先を、腰ざりに受け留められ、腰ざりになつて立ち上り、坂の下へと引いて行く。こは心得ずと附四郎、股五郎を救はんと、腰ひ込でかけ行く所へ、こつこつとあらぬと政右衛門、二上立ちにつつまつたり。さう魔ひろぐなと打ちかくる。心得たりと受け直し、付け込む所を身をひらき、腰ふと見え、か附四郎、か附四郎に切り伏せたり。返す刀に助太刀ども、一人も残らずく切り、志津馬が身の上氣遣はしと、一人の家来を跡になし、坂の下へと飛んで行く。無八武介は死傷を任ひ、数多の付人相手に取り切つ切られつ戦ひとが、数箇所の手廻に目も眩み、同じ枕に死してけり。股五郎相手に和田志津馬手廻の時勢負、いづれ技目はなき所へ、政右衛門が韋駄天走り、助太刀の氣遣は一人も残らず討ち留めしと、殘るは其親具一人、ソレ踏込で打ち留めいと、聲の助太刀百人力、よろめく所を付け

入つて、肩先すつぷと切りけりたり。こは叶はじと戦五郎、死物託ひゝ勵けども、動ぜぬ武士の太刀
風、さしもの澤井も切り立てられ、しどろになるを覺みかけ、突き一刀、大地へどつさり、起りも
立てず乗れなくなり、年輩の父の敵、助の敵、主人の仇、一度に晴る。龍の月、空に知られ、上杉の、
家の奥れと覺ぶ唐木、武者は世々に晴りひやく、和田が手裏も口を追つて、頼て全郡十師もの、この
上へへへへ前、今に勝つて残しけり。

蘇州府志
卷之六
藝文志
詩
蘇太守記白石齋

紀
上
友
郎

妹は宮子の
妹にしのぶ
碁太平記白石噺

第一

誰か知る輩中の強、粒々皆辛苦すと農を頼む言の葉も、仁に止まる程と民、君、君たれば神國で、
こればあやしの賤の女も、孝を守り義を知りて、婦人脱兎の勇力は、石になつた虎と見つ、肥の勢
ひ南北朝、頃は建武の春の山、吉野の内裏時めき、さふは彌生の三日の室、上じの宴會榎梅、色香
争ふ闘合はせ、南岐の御薬籠と上げさせ、龍顔殊に麗はしく、玉座の左は坊門の常相清忠親、郭侯
の冠巾子高く、右座も同じ我慢の相、智慧は極かに左京將監、其の妹月姫居直れて、今日の節會
を非難ある。陛下は町人遊人の、大人子供も打撃れて、大倉來る日の門、日華門、丹見阿といひつ
べき。割する北面のんく、に、抱へた鳥の投半進極が、走れた大前にならなく、汗の玉敷漏合はせ
取も立たざる願とぞ。まへ一番に白紙鶴の、鳴りけ地下と御垣守、御す。我慢の願の、ら、良は出
えなつ鶴冠の色、横ひらつと左折りは、鳥帽子屋の黒長束、互に目と目、見ひよりその結毛の車
毛、半銅舎人も還を直し、持負付かなば和氣丹直、御時々の鳥は、喰ひ、御情に合はすは敷立の、平

野の禰宜、秘藏島、海に跡を遺鳥の、一羽ならず二羽、計、羽打も眠るは羽の家、羽を催す飛鳥、
 舟の、蘇我の長東大宮家、この先遣と羽毛の、禰の大忌部源は、南門の志と知られたり。しやむ
 に佐吉三位の禰鳥、中書のとられに、粟毛の鳥は有馬の頭、身の上白きに陰陽師、黒き位四位殿赤き
 は五位の、はみく、惑くるを思ひけ追ひ詰り、東天紅羽打ち羽打を御成は、目さましかりける御遊な
 り、禰鳥終を相し、羽判官正成、上と披露して、優美の舞たぶや、こ、智勇果斷と菊水の、
 流にに加ふ、長、恩恵を近召と共にて、御座の下に埋伏し、今日の天候を伺は、清米朝儀かに見
 下し、青、判官正成、今日の御會に遅参は如何に、今まで何してお話をした、御下参の牧説も
 あつたれど、早よきに参伺をいた、饗酒でも香る過し、貴軍でもおれやつたかと、頼むに要き出
 す坊門宰相、上殿にほも色を直し、又、今南朝と立ち別れ、歸る國の街、怖くも教諭を承り、
 南朝諸軍の氣配にねは、貴軍軍慮、王夫を運らし、諸陣の手配り出衆の進退、其の上は山奥につて
 敵兵攝州河川まで押し寄する様様、進き難く、其後進退是と、おに任す、只今の参内、おなながら
 貴卿の執達、天鑑とあしく布ひ奉ること、恭請辭讓の詞をうろ消す左の辨、さうや日付根にや
 つた、貴軍軍界に聞えたと何事、此の國、味方の敗北、十二八つは北朝の勢、負けるやう
 の軍勢なり、王夫も難儀もいふ、捕でも櫓の木でも、とちやんはうを振らぬ、肝、笑、笑、笑

若氣とは云ひながら、實むか明ち忠義、女は早く館に歸り、明朝淡川へ出陣の布れ直せ。和田の源秀、志貴源八、手筈は兼て談じ置く、早くくこと主命に、座を立花の正成が、譜代の恩地左近の樓後に見なして出でて行く。正成も奥御殿へ、入らんとし給ふ大紋の、袖をしつかと町人、麻上下もしほたれて、用ありけにぞこ俯く、領は正しく、一ヤア其方は佐々目の兼房。兼房「ハ、先づ以て御安泰の座願存し奉る兼房が役づ、御賢察下さるべし。幼少より御傍に育ちし詮もなく、先づ順天主の戦ひに手筈を違へし我が親り、切腹と覺悟極めし所、命ながらへ時節を待てと、君の詔意におめくと、浪々の今の此の態、何卒歸參の御願ひと、御館の御門まで、行き通うたは幾度か諷ある身の悲しさは、御門の敷居は目よりも高く、流浪の有様、古傍輩の手前を過ぎ、まごくと歸る許り。幸ひかな今日の鶴臺花、三千年になつて桃の彌生の壽、花咲かぬ身を不便とも思召されて今ちに待つたる今日の鶴臺花、三千年になつて桃の彌生の壽、花咲かぬ身を不便とも思召されて今一度、御貳氣御免の御詞、ことに御不便かけられし妹が懐胎、彼是思し廻らされ、御宥免の御一言御訴願ひ奉る。」と、思ひ込んで泣き居たる。正成も心根を不便とは思せども、私ならぬ官軍の掟、假初にも赦されず、稍うち潤み給ひしが、正成「ヤア如何に兼房、軍慮に心を碎くといへども、宰相清忠など、我を疑みて讒言まをす、計畧もはかくしからず。とても微連の正成、大功なす事

思ひも寄らず、今度攝州・河川の合戦、討死と違ふ程の上へなれば、遂に其方は生き残り、我が亡く
後も弔へかし。今も今とて宰相の御用をなさしめ、而人衆の汝を見降められては其方がかりか、我々も爲
よからじ、早々出でよ。」と振り切る袖、随つ思ひは千重の外、勝利を計る大將も、流石主従恩愛の
涙の大敵防ぎ兼ね、歎きに時ぞ暮れけり。折に宰相左衛門、其の外へ歸らば、「さうぞ取の意
き、忠思」ヤア正成の二殿式、御殿間近、怪しみ明と喚ぶ。御殿より直に出で北朝の廻し者、何と一
半して吉野を止ほす計畀に振まつた、彼等廻りと説く所には、轉官正成取敢へず、正成「イヤ全く
用道者ならず、此の者は果が家來。」左分科「ヤア其の家來は何故乳體、拙家に候人の家來
あるか、サア何と。」と罵る降賞、諸口は皆々、是はさうぞと疑はれた。又事をも言ひ、
電として家來なるや、御殿下心附す。ソレ使の言ひ官人ども、彼等に疑ひ替打はせ。「畏まつた
と、細心の御、堪へた／＼と打ちかくる、兼房も一期の瀬戸、無雙返し膝車、秘術を
主人の詞、はべり候へば、入ぬ同手、指し車なりと、押へて懸てこがれける。治部卿ソレ正成も
御前叶はぬ、綱かれ、御前下知する所の下、電説どうと御簾卷き上、主上

は許す、主上忠勤無二の正成、何仁ざる事あるべき。其其切上は南川、

吉事を奏せよ。」と、花も實も有る桃柳、色をも香をも知る人ぞ知る敕諭に、ハ、ハ、ハ、はつと有りがた涙のソレ伶人を引立てよ。」と、歪冠のこじかける、殿上人の倭人に、庭上人の忠義と忠義、命を的の湊川、空しく討死したまひし、名は未代に有明の、月と見るまで三吉野の、花の御殿や春の風、袂に薫る橋の氏の榮えぞ 一重

第二

丑ふつの空物凄き夜嵐に、篠を突くなる雨の脚、空に枝折の電、閃き渡り更け渡る、葎の宿の屋根の上、すつくと立ちし立姿、丈の烏も烏羽玉の、間に迷ふや立行の、淨衣の袖に鈴の音も、澄み渡りたる聲震はし、女、百日満する我が大廳、感應あやまり給ふな。」と、一念凝つたる女心、思ひの念數指り立て、祈りの聲も風に連れ、物凄まじき折柄に、雲間を分けて其の形相、一目に夫れと白絲藏、弓手に立てし旗の紋、色にぞ非手の山吹流し、さも欣然たる聲正しく、神靈善哉汝、赤心を袖きんで天に誓ひてねがふ所、満する今宵感應ありて、汝が胎中の一子に、我が魂を合體なし、南朝を助け奉る。」と、詞の下にハツとひれ伏し、女、コハ有り難き御仰せ、斯く天敕を示し給ふ、君は如何なる御方や。」と、問へど答へも口なしの、山吹の旗手に取り添へ、一ホオ、いしくも尋ね問ふもの

かな。我こそは建武の亂れに海川の泡と消えし、楠廷尉楠の正成が靈魂。汝が兄佐々目の兼房、吉野賀名生の皇居に於て清忠に怪しめられ、罪なうして刑に逢ひし、彼が修羅の怒りも休め、我が鬱憤晴らさん爲、今又汝が胎中の、一子の脾肉に分け入つて、南朝を助け奉り、功ならすとも一度は、足利と一戦なし、再來の忠を盡すべし。一子出生の後人とならば、宇治兵部助と名乗るべきぞ、必ず疑ふことなかれ。と、旗一流興ふと見ゆれば、應寺の鐘に跡方も、さむるや夢の重義世經し、荒れにし鄙の宮造り、神寂び渡る神燈の影、世を雲水の定めなく、法の旅とは裏表、八重瀬路や峨峨たる山、巖をも砕く武者草鞋、うち遣へたる舎り、松吹く風も身に染みて、我殿の義旗に、ふつと眼もよし四邊を眺め、山城の源入兵部「ム、夢であつたか。ア思へば當代の夢、我が前生を眼の當り、夫れと知つたる夢中の示現、伯父兼房は楠の家臣、夫れとも知らず此の年月、勤なき土民の子なりと思ひ、井手の里の素町人と、埋もれ果てん悲しみの儘、武術を勵む切瑳瑳、胸に神農が骨髄を傳り、三年に餘る武者修行も、今陸奥の果てに至り、今宵計らず此の宮居に、一夜を宿る夢の告げ、我が先生を目前の奇蹟、今南北の戦國の中、何れを夫れと心も定めず、漂ふ船のよるべを待ち、待ちおぼせたる今日只今、ハ、森や嬉しや。」と思ひ凝つたる一心不亂、南朝無二の一人と、定め切つたる丈夫の魂、夏の夜ながら夜は深き、又寐の夢と後引き寄せ、見やる向うへうそくと、闇はあやなし夫

けそとし、花橘の木の下へ、霞ひきつたる帳出立、怪しと見やり引を添ひて、ためらひ居るともし
 らぬ大に、御歌も消えて眞の間、あたへ見廻し手頃の枝、折るゝと許り地を掘り穿ち、日に虧へし生
 首を、その上埋めて心の印、建てて腰より矢立を出し、策の立所も星明り、宮内より奥州白坂の町は
 つれ間神の首、一圓一圓の首環と、印にとめて過ぎ行く後、川渡り人より「お待ちやれ旅人、いま
 待てと云はば」きて。一圓一圓の首環と、今の詞に我を忘れ、幸忽に呼び止めしは、ハハ互に
 涙言はれ、心は一つ水と水、お願もしう存じ、お近附にもとお止め申した。一河の流れ他生の縁、
 御前心なく、そぞろはこれと、云ふも答へも略納れ、聲をさるべに、河内の人「是れは、ト貴公
 にも人言はれど、武御御執心の程感じ入りますに、山崎の人は、是れは、御前様、さあ
 是れ、と膝と膝、打ちくつみ、で指火打ち、煙草の煙底は、お前様をさして先づお近付にはな
 りたれど、主の六日の月代も遅く、是れではお互に面識見知らず、さ、どうがなりと立上り、青
 衣の枝をひくべて、用意の犬頭姿をと、南音なふ風に、無え立つ衛士が舞火に、互に見合はす
 顔と顔、目もみえ、さ、コレ、是れでこそ眞の近付。河内の人「さ、貴公も来たお年若、シ
 朝出居は、いづく何方でござりますぞ。」目もみえ、さ、手前事は山城の出生。河内の人「さ、山
 城。」さ、さ、さ、いかに。」河内の人「さ、そんなら我等とても同調同然、河内、森で罷りある

て見よう。」由緒の眞人「叶はぬ。」河内「眞人」イヤ俺が勝つて見よう。」由緒の眞人「ア、コレノ、コリヤ
 話ぢや。」河内「眞人」ヤ、由緒の眞人「ヤサテ話ぢや。」河内「眞人」ヤ、ほんに話ぢや、餘り話に實が入つて、思は
 れ高聲、ハ、ハ、ハ、南無、今の話に思はず知らず、餘り力んで煙管を灰火の中へ打ち込んだの
 けた、シカシ話も断う身に入れば面白いて。が又其の叶はぬと云ふ話の發句は如何でござりますぞ。」
 由緒の眞人「ア、俗人も云ふ通り、中の悪い者をさして、火と水の中といふ様なもの、イヤ南朝ぢやの
 吉野方ぢやの」と、いしこさうに口には言へど、見る影もない吉野内裏と、田舎者までが見こなして新
 田桶の良將でも、持餘したる北朝の勢ひ、足利殿の武徳の高さ。」河内「眞人」何と。」由緒の眞人「イヤ
 ヤ、足利殿の武徳のたかさ。」河内「眞人」ナニガなんと。」由緒の眞人「ヤ、貴様は話を聞くと、びこ
 びことするが、貴様は何と思ひすぞ。」と向うへ廻る喧嘩の小口。河内「眞人」ヤアスリヤ御自分は足利殿
 様、京方へ付く御浪人な。」由緒の眞人「アハ、異な事を御念、若し京方へ付けば何とするや。」シヤ小
 頼なにと、互の氣用、譯の炎熱を立つ敵々、雙方顔に火花と火花。河内「眞人」ア、此の上は互の産業、
 一直合替負して。」由緒の眞人「ア、ホ、ホ、其の甲乙を試し見ん。」アアア。アアア。アアアと廻り廻り、修
 行手練の手利と手利、打ち合はせたる刃先と刃先、陽にひらけば陰に南ぢ、進み退く處々實々、千變
 萬化手を離き、絶南を盡して切り結ぶ。早月代も山の端に、白むや夫れと橘の、片枝を目がけ切り

込む切先、シヤならぬわと我が身を楯、押し圍へば飛び退つて、河内浪人「ア、心得ぬ汝が振舞、鎧を削り一命に代へ、此の橘の枝を圍ふ、貴殿の心底合點行かす。察する所是れ明也、南朝の忠臣橘延尉橘の正成の子孫なるか、先帝の御徳全く再び榮ふ橘の、開くる御運と表事によそふ、花橘の香とともに、惜しむ心の香も深し」と、見透すばかり其の一言、只者ならず見えにけり。横手を打つて、山城の浪人は都「したり／＼。太刀筋と云ひ推察と云ひ、天晴此の身の片枝と、なるべき器量、ホ、、サたのもし／＼。」互に夫れと姓名を、口外せんも壁に耳。山城浪人「名乗る我が名は山城の浪人。」河内浪人面白く、我が名とては河内の浪人、シテ在名は。山城浪人「山城の件出。」河内浪人「我は河内の八尾の邊互の胸はコレかうと、砂搔き平し指を筆、はや月影も清らかに、打明したる密意の神文、たがひに認め、河内浪人「イサ血判の暇め誓ひの砂起書、跡うも消して、山城浪人「何御浪人、暇めの神文見替す上は、神文はコレ此の胸中。」河内浪人「ホ、我とても誓ひの上、書いた物には心は留めず、白地の砂の胸の神文、委細は後の、面會を待つ。」山城浪人「然らば此の場は別れ／＼。」河内浪人「ア、井出の里の御浪人。」山城浪人「八尾の里の御浪人。」御縁あらば」と右左、締め直したる武者草鞋、別れてこそは、行く空の。

第三 二

六尺の狐を託すべし、大節に臨んで尊はざるは、君子の人なりといへり。石堂大領の後室寄被御前
過ぎにし夫の遺言を、守りも堅き岩手の節、鎌倉よりの上使を請け、若殿家督の御祝儀とて、三寶土
器、斗毘布、上下服ふ許りなり。浮氣盛りの趣共、一つ所に寄り舉り、兼てコレ早苗殿、此の間か
ら鳴り騒いふ御上使の御入り、九獻も御膳も首尾よう濟み、追付お立ちに間もあるまい、磨しや明日
から隙になろ。」皇女何云やる歌本殿、また是れからが御一家方、御振舞のお能のと、大體忙がしい
事ぢやない。妾らは今年で丁度五つ、宿下りの未進が殿様へお貸しになつた。盆にはきつと取り立て
て、芝居も見ふうし、よい男の兒飽きしよ。ソレハさうと、御草履取の伊達助殿、殿様と云つてもよ
い品な色男、千束様の強い御最頃、妾らもちつとおすべりでも戴きたいと思ひ、文まで書いても持ち
殺し、どうでこちとハお鉢は廻らぬ、いつそアノしつ深な臺七様へ遣つて見よ。」兼て「おかんぞおか
んせ、あの臺七の憎體顔、臭い者の身知らすと、お姫様を附けつ廻しつ、色取りかけるが可笑しい。
あの様な男に思はりよより、能い男持つまでの心のかし、ソレ賢へとのほり、馬持つまでは牛の角細
工物で間に合はそ、ハ、、、」と高突ひ。奥は祝儀の獻々も、目出度く納まる千秋樂、上使の顔も漆

証、立ち出づる赤橋將監、後に續いて富波御前、赤賀臺七福原普傳、其の外家中の諸侍、敬ひ侍く
廣開上、將監も會釋して、普三御念の入りし御馳走満足に至り、彌輪旨の改めは、鎌倉にて御沙汰
あるべしと、家督の親儀首尾能く済み、後室の御び察し申す、何れも心を一つにし、小次郎殿を守り立
て召されしと、厚き詞に皆々平伏し、御願宜しくお執成り、遠路の所御苦勞と、武家の行儀の儀か
に、上使は京館へ立ち歸る。後室御成儀はしく、何れも此の程の心遣ひ、鎌倉の御前にも首尾
能く済み、真かしの御び、自らか結して箱車しや。ついで小太郎、今日からは石室家の主、大人しうで
にやならぬぞや、普の御へも普傳しや。王御前に後び、普傳七片大儀、母上様有り難うござい
なます。と、臺を、婦上様は岩手の社へ御参詣、坊が好きな伊達助もお供ぞや、歸つたらば追付侍に
してやると云うてくれ、普傳も目を懸けてやれと、吾も趣ろに一睡も、育ち隠れぬ鎌倉の、素性
は外愛しや。と、二、三問きやつたか、と、ニ、三は争はれぬ、今の詞は先般様に其の儘ちや。と、傳
と涙も亡き御を、思ひ出したる其の風情、常座の横持志賀臺七、普傳の御せの通り、人人も及ば
ぬ御座り、石室の家は萬々年、また今日は千車儀にも、岩手の明神へ御参詣、普傳御下向でござ
いませうぞ、と、後室には先づ御入り、さて今絶はわつよりと、へ、へ、へ、と、ワケ女中交りの御目出た
御、お前も申し上げとす。と、已か無路の御手、普傳も、打たせぬと、後室の御目と逢

ひませう、サア皆おぢや。」と夕なぎの、寄波御前は若君の、手を引連れて入り給ふ。後は一組人喰ひ馬、田口同士が打寛ぎ、壺七「ナント先生、此の程ちらとお話の天眼鏡、百里、二百里隔てても、手に取る様に移ると申すは、實の事でござりますか。」細野先生「傳」成程、先師呂洞賓より傳はりしトシクルケリキヤ、漢字には天眼鏡、見たいと云ふ方角へ鏡を向け、祕文を唱へて是れに向へば、世界の内は扱置き、地獄天堂まで鮮か、行法成就の門弟へは、附屬する料簡。其の外にも忍び松明、毒箭炮終の軍器の傳授、手柄は仕勝ち、精出されよ。」壺七「コハ有り難しく、此の臺七も追付傳授して見せませう。此のごろ上の御用で稽古も解意、丹下松兵衛イサお來やれ。」と、竹刀しなへ取り寄せて、庭に下り立つ。一杯機嫌、袴の股立纏がけ、ヤアノトウノ互の勝負、普傳も悦び勵みの掛聲、暫く時をぞ移しけり。絆しなき、身の氣散じは野山越え、何國泊りと定めなく、人目飾らぬ麻羽織、綱代に紋も藍割けて、刀を纏ひし宇治兵部助、門外近く立ちどまり、美那「竹刀の音居合の掛聲、誠に、は石堂家の屋敷、主君は幼雅と聞きつるが、後室の擡正しく、武備怠らぬは、ハア、奇特々々。我武者修行之志も、斯様の家に因んでこそ。由縁なき身の残念。」と、好める道を過ぎがてに、暫し佇む其の折から、臺七は煙君の、戻り遅しと門の外、壺七其處に居るは誰ぢやい、イヤ其處に御さるは、ア、旅人ぢ、是れへお出での道筋、女中乗物はそと見給はすや。ガ又、其許は何故其處には休息。」と、とが

めに兵部は小腰を屈め、三三ハ、イヤ、拙者儀に上方より武者修行に出でたる者、御稽古の聲羨ましく、思はず足を留めしりと、語れば臺七、驚き足れば、御奇持の御志、傍輩共へも申し聞かせ、苦しからすと申しなば、ヤ、未熟の稽古御目にかけん。」
「大抵は大度仕る」と、草鞋とくく其の用意。臺七は内に入り、廻りやアウ何れも、門外に浪人と稱しき奴、武者修行と名乗る傍輩さ、何と呼入れて慰まうではござらぬか。さういふ様、大層に恥す奴に、ヤ、業の疎なはないものぞ、日永の慰み、打つて、打ち取らん、コレ斯う、と叫いて、小陰に松兵衛、心得丹下、伺ひあるとも白首の、笠脱ぎ置きて威儀整ひ、群々通る妻后の陰、聲をかけず左右より、はつしと打つを沈んでつま取り、三回、莞爾と笑ひ、三三ハ、ヤ、ヤ、ヤ、ヤ、ヤ、拙者儀は片田舎より罷り出でたる宇治兵部助と申す者、私しきでも刀を帯せば、武士の数と思召し、御當りなれて御覽とは、ヤ、一分として過分の儀、以来は御入魂くださるべし」と、直に座に付く丈夫の眼
中、二人は元より臺七は、手持不沙汰に見えにけり。普僧に始終手を掛け、見上げ見下す。工夫、兵部助は顔ふり上げ、三座上に在する御老人の御姓名は「一」
「一」愚老に蒲原普傳と申す、御見知り下されよ」と詞に情から臺七が、ヤ、則ち見れば拙者の師範と相む傳説の先ず、自分は志智臺七。「唐崎松兵衛」と、互に會釋打終れば、宇治は横手を端と打ち、三三ハ、先生には御見忘れ候か、

某は宇治兵部助、西國經廻の折から、御門弟の列にもならびし者」云「其のときの御名は、一、成程々々、旅勞れ見違ひ申した、今に出精たのもし。マ、コレ各隔心召さるな、聞かるゝ通りあの仁も身が門弟。是れは、と許にて、挨拶取りなる折節、姫君様お歸りと、先走りの若輩が、しらせに普傳は、普傳「ヤコレ臺七殿、アレ早、郵便にもお歸りとや、とくと申し度き儀もあれど今はサ云はれぬ。兵部殿を伴ひ先づ奥へ、後刻々々」と式禮に、返答志賀も唐崎も、宇治はそなはる兵部助、打連れてこそ入りにけり。家の名の石にはあらでほんじやかは、大領の娘千束姫、積るは、か玉眞の、一夜は寝たき品客、氏神詣での歸りがけ、乗物止めて道草や、伊達助と云ふ下部、月代青き緋子髷も、紺に勻ふや花かつらぎ、さしも立派な柄前の、鐔は角でももの云ふは、角のとれたる色奴。伊達助「アお姫様、モウお屋敷でござります。婢衆もお氣付けられ、おしとやかに御入り。」と、申し上ぐれば、千束「アレ伊達助、今日の様に面白、樂な物語では終にない、其方はさうも有るまいなう。お屋形へ歸つたら、すぐに小庭へ廻つてたも、いろ／＼頼む用がある。又部屋へついと往て、氣を揉ましてたもんなや、エ、憎い。」と、一つぴつしやりは、打ち殺さるゝ道具なり。伊達助「ハア、是れは、何の是れが氣を揉むのもまぬのと、お主様の御意とござれば、憚りながら、たとひ手鍋を握けよとあつても、夫れこそもう、下郎めが身の仕合、冥加ない儀で御わかりますでござります。」

千重、そしたら、ノどんな辛苦をうけるとても、其方は辛抱する氣かや。」「例へば、つのもない
お前様に下郎めが、偽り申してよい物でござりますか。」「東「オ、其れで落着いた、必ずやいぬ。」と
目で知らせ、しづ／＼上る書院先、草紙取ら手を人目のすぎ、ちよつと蔵く現目で見る、冥加い
ら縛しいから、其共に誘はれ、奥と勝手へ別れ行く。引違へて志賀臺じ、昔傳を誘ひ立ち出でて、
席を改め、主上々傳先生、以今更に御通し、御傳相違なく、机の上へくることを手につけ
ば、傳原は／＼うろたへ、其傳朝より見られし通り、氏部助へは聖堂の妖術、貴族へは天龍、
御南所へ引き分けて、秘法を以て土民を導き、時を待て南北朝、其方に親ん我が御計、東國へ行きとも、
授かりし、秘法を以て土民を導き、時を待て南北朝、其方に親ん我が御計、東國へ行きとも、
豪傑の士を求めん爲、此の鏡の奇特を見せん。」と、雲氣の臺臺、袂紗、敬しく飾り立て、
西に向つて呪文を唱へ差し出せば、漫々たる青海原、煙も雲も一つの島、城壁民屋整々と、時を松浦
の沖津波、海人の焼く草藻鹽草、手に取る如き鏡の内、是れは許り手を打つて、暫し感ずる許りな
り。臺七は悦び、天へもする其の心地、臺七かかる御衛を授け給ふ、立師の御恩報するに所なし。
其れに付き、かねて松兵衛と示し合は、東國の御衛を授け給ふ、立師の御恩報するに所なし、
見かけに似合は木下傳、其れが御衛、大か其御に似合は、其れが御衛、大か其御に似合は、其れが御衛、

掃除まで、備へて設けて待ちかくれど、今以て埒明かず、先生の妙計あらば忽ち出世、其の時こそ御
厚恩酬し申さんと、眞顔のやくだい。昔傳は片頼に笑みを含み、「千束様を本娘などとは不目利
不目利、あれは彼のお草屋取の伊達助めと、ほてくろしい色事、性惡の徒ら娘、攻め落さぬ杯とは、
アいやはや愚將」と打笑へば、臺七は熱くなり、事七さう聞いては堪へられぬ。が辭し、拙者にさへ
辭かぬ娘、中間つれに何として。コリヤ先生の御惡口、左様な義はござるまい」と、合點せねば
獨も摺り寄り、昔傳「ハテサテ貴殿人が好い、疑はしくば證據を見せん」と、伴の鏡押し直し、奥庭へ
指差し、昔傳「アレ見られよ、小書院に蹲うて、人待ち顔は千束姫」と、いふに摺り寄り差しのとき、
學一は、成程々々、コリヤ奇妙。ハ、又鏡で見る故か一倍見事、コリヤたまらぬこと、餘念半體目も
緩に、見とる、影は奴の伊達助、切戸を開けて水手桶、提けて入る體。こなたの娘、何かは傍へ寄り添
ふが、爰こそと目も放さず、肩で息して守り詰め、「アレノ、先生、何か物を申す様なが、ま、聲
までは移らぬかい。ハ、なう悲しや、アレ抱き付きましたわいの。ア、イ、ノ、ついと立つたは奴の
が、小氣強さに、ハ、コリヤ逃げるぞうな。ア、イ、ノ、逃げはきいで、アあれまた傍へ寄りま
した。エ、アレ見づつしやれ小氣の悪い、姫は後で袴に、アレ膝で背中を突きながら、やいの、
と云ふ様に見えます。エ、どうして何だほてくろしい。アレノ、ノ、丘に肌へ手を入れて、エ、けち

めに頼借を、さするといふは恨めしい、餘り聞えぬ、」と、傍なる人に云ふ如く、たはむいせいの
 い突立ち上り、二懸の敵の伊達助め、まつ二つにしてくれん」と、勢ひ込んで駆け出す。青雲の旗一
 面先づ持たれよ、平にノ、と止むるも聞かず、駆け込む七情原も、續いてこそは入りにけり。最
 前より向來に、様子窺ふ兵部助、手を括いて歩み出で、ハハハ心得ぬ兩人が振舞、殊に音傳が始終
 の有様、南朝を慕ふ義兵ならか、ア、ア、ア、彼が詞の端々、利慾に溺るゝ舛那の相、天子を捕佐の
 才にあらず。北朝一味の不義の軍が、ハ、ア、ア、ア、どうがなと首傾け、見ゆる其方は夕陽、東入りにてて
 遠山に、幽にうかぶを雲かと思れば、雲にはあらで不祥の氣、ハ、ア、ア、心得ず、時は五月、日は非宿
 赤鉤の如き雲氣の下には、血流るゝ事千里といへり、正に天市宮に屬せば、鞍太夫にあらず。ム、ハ
 ハ、七草の一揆起らん、天のしらせか、ハ、ハ、ハ、怪しき雲の有様ぢやまなア、ア、ア、ハ、無道に
 こりし白燈原、一揆の企て頼みなし、良禽は本を擇みて棲む、危邦に居らぬは聖人の戒め、匹夫の
 勇は學ぶに足らず。南朝恩顧の味方を集め、時節を待つて旗上げせん、夫れよノ、と打鼓頭き、立
 ち出でんとする川の上、見越の松を傳ひ來る、忍びの曲者、透し詠めて兵部助、様子あらんと身を語
 め、息を詰めてぞ何ひ居る。奥庭傳ひ出で來る音傳、相圖と思しき呼子の笛、夫れと聞くより忍びの
 音、探り寄りて、奥の音傳様、彼の御朱印は、ハ、ハ、ハ、ヤレ音高し、ハ、ハ、ハ、暫く夫れにて相圖を待て。盜

み出して手に渡さん、必ず傍に氣を付けよ。」鼻息もせず奥の方、恐びの者は打點頭き、しすましたり
と一人笑み、今や遅しと待ちゐたり。始終とつくと兵部助、探り寄つて曲者の、首筋觸んでつと絞
め、うんと仆る、死骸の装束、手早に著せたる卽座の頓智、臆も許みて待つとも知らず、普傳は奥よ
り御朱印の、箱を難なく盗み出で、探る庭先呼手の箱、時分はましと兵部助、以前のお忍びと見せかけ
て、探り寄つて嬌き聲、「首尾は」と問へば、「上首尾々々々、一刻も早く此の御朱印、件の方
へ急げ、」一躍まつた。一と押し藏き、一夏の鴉物有り難しと間は緩なし五月の空、行方知れずなり
にけり。臆も收まざる鎖燭の、光照り透る千束燈、隠しき人のまじもつと、奥より忍び出で給ふ。松兵衛
は、姫君の素振に氣を付け居たりしか、何氣なき體後より、「何し」と申しお尋ね、何々をい
遊ばすぞ、先づく是れへ」と膝折り寄り、「今日はお家の社へ御参詣、御神事も相済み、又若殿
様にも御歸目御相濟、斯様な日出度い儀はござりませぬ。何時そは申し上げようと思ひました、能い
折柄、別の儀ではござりませぬ、」お前様にはいつくまで、お二人でも神事られませぬ。里
克斯様申すも此がへは、お手附の水上を、致して上げた唐崎松兵衛、「何事か、能い巧者を、」や夫
れに付き、志賀桑七、「ア、苦一の走つた能い男、手跡は拙者、兵法は昔傳の桑七、御家中での器用
者、其の上お前様にきつ、い誠心。お心がござりませぬ、拙者がそつとお仲人致しませう、申しませ

やどうで御さりまする。」と、云はれて姫は面はゆく、千重、あの松兵衛のいやる事わいの、そんなことは此方や知らぬ。夫れに父臺七の噂聞きともない、耳穢れる、モウ／＼／＼重ねてから云つてたもんなん。松兵衛ハチナ、左様ならば、ぐつと下つてお草履取の伊達助め、サ、サ、コリヤどうかお氣がある様に見えます。何と是れにでもなされませぬか。」と口占引くも胸に一物、とは知らずして、千重「コレ松兵衛、あの伊達助が様な賤しい者でも、女夫にも、アノならん、かや。」「ハテ叔それが外見すの懷子。コレ申し、エ、お前様は、隠す／＼と思召しても、とうからハ、知つて居りますわい。ハテ何と致しませう。お前様のお厭ひなさる、臺七殿、拙者めがよい様に申しませう。ハテ私も腹からの野暮ではさら／＼ござりませぬ。」と、可笑味まぜて姫君の、得手にほの字へ持ちかけて、乗せる詞に好いたのは、つい乗りやすく莞爾と、笑顔に戀の絲口も、顯はれさうな折からに、併し申し松兵衛様、若君様が召します。」と、奴の伊達助出で來り、併し「叔申し、私めはお庭の掃除、山程御用がござりまするに、如何に御意なればとて、步中間の身分で高上り、部屋に居るとは違つて行くも／＼備後長、滑るまいと致すので、一生懸えぬ身は冷汗、もう下郎めはお敷し。」と、揉手をすれば、お尋道理々々。身共が參つて其の趣、若君へ申し上げ、其方にも休息させん。暫く是れに控へ居て、若し姫君の御用があらば、なに仰有らうとナイ／＼と、イヤ申しお姫様、彼の内々の御

伊豆「おぬ又あんな事許り」と詞をしほに抱き付き、こころも得手に詞を上げて、色の濃を出船の、
 越風受けし如くにて、何れわりなき風情なり「不義者みつけた動くな」と、一間を出づる桶原普傳、
 「人ははつと清き人の心地」。「ヤヤ下司儀めが高上り、主人を相手に不義ひろく、言語道斷憎い奴
 ら、不義はお家のきつ、御法度、姫君とても是非がない、觀念せよ」と云ふ聲の、漏れて奥より奇浪
 御前、續いて臺へ走り出で、一スリヤ何ぞや、姫君も此の有様、ハテ斯う云ふ事がある故に、ヤヤ
 其處を解奴め、生白けたしや面忌々しい。ヤヤ申し後室様、此のお捌きは何と違はす」と、何がな懸
 の意地晴らし。ヤヤ聲へよ臺へ、一人が不義と仰山に、夫れには慥かな證據が有るかに。臺上「ハ、
 ヤヤ證據は則ち伊達助めが、爰に居るのか慥かな證據」。ヤヤ夫れは證據にはならぬぞよ。常か
 ら若が氣に入りのヤヤ伊達助、貴が御して夫れで爰に、ヤヤ夫れが證據になる物か」。臺上「ヤヤ夫れ
 は」。ヤヤ「何と」に行き詰り、返答しかなの志智臺七。ヤヤ「慥かな證據は此の普傳が手に入
 り」。此の読書、國取の難君か、下司下郎「不義淫ら、お國の間にも如何」。コリヤ家の契は背かれま
 い。と、てつべ、挫ぎの折も折、息を切つて若侍、ヤヤ「最前何者とも知れず寶藏を切り破り、御前
 旨を奪ひ立ち退きし」と、知らずにハット驚く人々、後室千束は重なる難儀。ヤヤ「コレノ、申し母上
 様、コリヤ何とせうどうせう」と、立つたの居たのろろ。と、中に普傳も臺へも、果れて詞もなか

ひかりの寄浪神前は常盤の、御押し下けて、……サ、昔傳、全國きやゝ通りの一大事、忽に詮
議では仕様もあらんが、自らに女の事、其方に家（家）輔佐、家風を納むる計略、其方の思案は一言一ハ
ア某とても火急の場所、御家中列座の其の事なれば、思案もあらば通感なく、申し上げても一つは忠
義、アレ、あの御前は、常家に名高き岩手山、……花に似たる花は、……何とやら、……切りしまつ
つじの花も切りしまに、……ふ、ふ、思案もありつゝ物（三）疾風は雨と無異が、雨はなほ過ぎ目に餘、寄
浪御前思案を催し、……サ、貴殿の調で自らに心の覺（さ）え、……小太郎、幼けれとも石堂の家を離
ぎ、……調を調くれば、……調の調、……調の調失、……調合、の車（さ）に及ばぬ此の場の時宜（とき）に用意（ようい）を何と
白小袖、携へ給ふ手もふらひ御目も……小太郎、神様へ参る程に、此の女（おんな）……と御手
から、上著の小袖ひき替へて、無妝の小袖死装束、……と云はれど心に、脱ぎ上著の御前も、……
代高代と親しみに、變れば變る有様と、喰ひしば食ふの古人の、手前包めとせや來て、……と知る
る息（いき）で、……坊はよい衣（き）……和子（わこ）……は……知らぬい……し……お……に……
す千束姫、千束エ、御心強い母上様、何ばう武士（ぶし）……と……、離切（はな）の首（くび）……とは、……人（ひと）して人
の事、九つや六つで何の其（こ）……、……の……の……に……し……、……
を……れば、母上様の顔を上げ、……其方（そなた）も武士（ぶし）の娘（むすめ）でないか、家の内（うち）に侍（さむらい）の子（こ）が離切（はな）るに、……

な縁音、自らは覺悟極めて、コレ介錯をするわいなう。と立派に云ふも諸士の前。千三、千エノ、何は立派に仰有つても、手を思ふは親の常、生しの事の類ひでも、神や佛を頼む身に、如何に云譯なきとても、幼氣なあの若に、腹切らすとは馴れた。死ないで叶はぬ事ならば、あの手の代りに私を殺し、云譯立てて給へ。母様申し拜みます、拜むわいのと身を打伏し、手を思ふ眞實に、頼む身よりも頼まる、母の思ひは白千萬、包む涙は五月雨の、晴れては曇る如くなり。寄浪御前は氣を取り直し、第一末練の袂きに時移る、サアノノ誰かある、切腹の用意せよ、早くノノと仰せの中、ハツと答へて唐崎松兵衛、三方に腹切刀御傍近く直し置き、座を隔ててぞ控へる。母上派を押し隠し、若君の御手を取り、口に稱名九寸五分、手に取りは取りながら、流石恩愛別れの涙、胸一ぱいに突き詰め、くらむ心をと直し、思ひ切つて我が子の腹、突かんとすれば楠原が、何か心に唱ふる秘文、痺る、腕寄浪御前、コハ遅れしと取り直し、また突きかくれど叶はぬ手先、ノハノ、如何にと後室も、頼れ怪しむ許りなりや、有つて寄浪御前、サアイヤなう普傳、其方を始め人々も、嘸かし末練と思やらうが、子ゆゑの間に手も頼ひ、切つても切れぬ恩愛、そなた頼む、介錯して潔う、若の切腹。」普傳「アイヤ、夫れは御免くださるべし。勿體なくも主人の若君様、エ、亡君に別れあるらしより、何卒若君を守り立て、國家を治めんと思ふ我が心、夫れに付き後室様へ申し上げ度きを頼みあり、此

束も走り出で、後室圍ひ突立てば、一、二、三、果に何れあつて、一、二、三、何故とは悪く、最前より立候舞、台盤行かすと思ふ所に、若を助けて家を立てんと、表に見る忠我、不審と手に入りし、台盤の一軸を踏ませしに、邪法の印踏む事ならず。其の上小太郎が腹切らせんとつかけし、月持つ手に働かざるは傳が術、最早遁れぬ、尋常に名乗れ、一、二、三、名乗れ、一、二、三、束も共に詰められ、一、二、三、束もまで仕込みし我が大望、女、束のあざとき手立に、見廻はつれたか、一、二、三、残念残念さなり、我が傳へ、妖術を以て、縦ひ十重二十重に取り塞くとも、物其の數とも思ひ、某、見よ、一、二、三、の奇特を見せんと、印を結んで唱ふる呪文、日頃の妖術消え失せて、一つも印のあらざれば、一、二、三、汝が工み邪法を以て人を懐くる、此の術を挫かんには、曼珠沙華に男女の生血を注げば、忽ち邪法破る、とは、コレ時至る天の告、一、二、三、御定の通り、辰の辰の日辰の刻に誕生の女、未年未の日未の刻に生まる、男、互の血潮は幸ひに、お蔓様と拙者が生血、一ばい参つて重疊々々、覺悟ひられ、と嘲笑へば、昔は無念の幽霊をなし、一、二、三、奇怪や腹立や。よし是れかは妖術も何かせん、後室はじめ小太郎千束、奴も抱り殺して我が大望、一、二、三、下を平均せん事まのあたり、とても生けては置かぬ奴も、我が本名を語り聞かせん、とく聞け、我は九州七草に洞理軒と云ひし者、先祖は唐土より来て、黄巾の賊と呼ばれし者、故めて日本へ移

し渡り、皆ひ覺えし妖術を以て日本へ切り隨へ、其の隙に乘じて唐日本、魔國にたゞん我が大望、軍勢催促の其の爲に、石堂家の輪旨を奪ひ、小太郎を人質に先へ手始めは、此の家を擧げんと思ひしに、見馴はされて残念々々。まだまゝに其に、一家中も大半味方、術は失せても計り置く、相闘を印し、館も残りす塵灰同然、仕懸はし地雷火は見えよと云ふ間に立ち出る志賀榮七、ひりりと電桶原が、首をはつしと打ち落せば、驚く人々伊達助は詰め寄る、伊達助「アア詮議のある桶原普傳、何故首を討たれしぞ」と、せげ落着く志賀榮七、後室に打ち向ひ、榮七「アア、長前より普傳が振舞、合點けつと心付くのに、普傳が己の魔術を以て、又此の土割り魔のふも知れぬ、惜しがあつて思はずつはり、去りながら」普傳が不調法、疑ひ桶原生け足さても、輪旨の在處安々と、白狀と致すまい。謀でも不義の利人、二人が仕舞を致し、普傳がたゞいひ顔する、成程もつやが、家の政道正すのに、其方が指圖は受けぬ自ら、不義と浮名の立つ上は、二人を自ら勸常のやと、僕に伊達助千束姫、身の腹中に産容なし、安んず、腹が歎きを察しやる去りながら、約束の輪旨、尋ね出すは其方二人、合點かいたが、其の時は元の親子主従、再び歸参の時顔を見つ、一と、情も絶る御体さ、夫れを力の有り難源、普傳「アア、榮七、輪旨の日逢ふ様に申し上げな、普傳に一味の者ども、そこら邊にあらうと知れぬ。是れより直に榮七は、鎌倉表へ、はやく急せ」と、詞に接

持つ足の裏、底氣味悪く立ち上り、不承々々に出で行きしか、家來共、二人の義人形捨はな
らぬ、阿前より追ひ捕へ」と、詞鏡に言ひ放し、立て切る機、チナレなう暫し月上様、せめて全一
度お前よりと、立ち寄る處を留むる伊達助、長居は恐れ片時も早く、館を放れて斬首の計謀、
目出度く對面待ち給へ」と、寢る、煙を伴うて、立ち上る向うの方、大勢ひき其し切石丹下、
伊達助の締だて野郎め、似やつたやうに飯袋の、お玉杓子を引き込んで、三百店でも持たうとはし
居り、で、館の姫君千束様を、女房などとは騙つた奴、罰が當つて此の丹下が、刀に息を引取り、
死骸は店受葬禮は、投げ込む寺へお布施はこゝろ、首を渡せ」と呼ばはつたり。伊達助にこゝろ、打笑
ひ、
ぬかしたる代のしははり館の齒ざしり腹の皮、寺受状の一番筆、切石丹下御座なく様、宗旨は代々
の臺、離れぬ中に臨終の、念佛申すと嘲笑ふ。アア物な言はせそ打つて取れ、かゝれく」に家來
ども、有り合ふ手桶おつ取つて、火水になつて三重打ち合ひける。手練の働き根限り、梨割り立割り
捲り切り、捲り立てたる太刀風に、むら／＼ばつと小鳥武上、逃げ出す後を追うて行く、心得丹下が
繰り出す槍、回りと躲して伊達助が、槍首擱んでコリヤノノ、傍にハアノ、危む千束、抱へ解い
て卽座の横持、拵んで引張る心の助太刀、ひらいて付け込む切石が、思ひがけなき帯の良、轉ぶ末端

に投げ出す槍、出合ひ頭の家来が胴腹、二人重ねて鳥刺突き、倒る、丹下を掻開み、ぐつとさし上げ
投げ付くれば、眼玉飛石切石が、激塵になつて死してけり。外に相手も罷きし、塵に付添ふ伊達奴、
是れも一つは今日の沙汰、明日は女夫と罷遣や、出世を松島まつ山の、御恩は母様御主人へ、あふ隈
川もならぬ身の、心のたけ腰名残をば、岩手館を、出でて行く。

第四

奥州街道に本宮なくば、何れ便りに奥通に、夫れが姫路の受るはらし。頃ふ年月の早苗狀、秋や
連枝の雲の上、供神と云ふが下々の、盛切物相合半、内裏女前も喰はにの腰横十文書、一膳食の
一粒も、皆百難の汗零、明徳寺書の種類ぞとけ、非前坂の御製分、續付くる田にさらりつと、坑ぶ書箋
一文書、こゝろおくれめ、しら書時ぢやあるまいかい。今朝から精出しただけ、昨日よりは
はかばかいた、續付けては歸へ寄りし、夫れでか腰も、はかばか寄つた。武兵衛も藤兵衛も、お松も煙草
にせうぢやあるまいか。「よから／＼」とより切火起、母に詰めたる煎茶を、を休凡の一休み
「三和」と此の御茂伴は何して居るぞい。此方は昨日今日に御仲は違ふに、二分一もはかどら
ぬ。さればいなり、内裏家此の春からの預け、あの和女も心遣ひであめぞいの。さ

「夫れでも相付時に遅れると、秋入の時分まで、草取り肥に大抵や大方骨が折れる事ぢやないなう。」
 と言ひ、やいの、何と云うてもあの奥茂七の婿衆は、莊屋殿の妹、年貢の時分はどうなりとなるか
 いふこと、身もたれでも堅い氣の莊屋殿、真直な人ぢやんと噂半ば一村の、支配を莊屋七郎兵衛、
 といふふんなの家柄が出るよ、随分と働かしやれ。外の人の働ぢやない、今の辛勞が秋は働いて來るわ
 いの、シタケもう晝時、まに休んではたらかしやれと、下をいたはる慈悲詞、お、結構なお
 仕度、其のお前のお心を、お代官の臺七郎に、ちつと煎じて飲ませたい。」と、ア、コレノ、か
 りそのにも上の時、ひまつと誰が聞くまい物でもない、頼もしやれノ、ア、俺も歸り道、道々
 話して歸るぢやあるまいか。」と、草ハイノ、今私共も晝休みに歸る所、サ、御一所に」と氣散じは、
 茶碗もそこに着け、早く聞らなき泥足を、引き連れてこそ立ち歸る。第の騷動仕合と云ひ抜けなが
 ら己が身の、志賀へはかくれぬ臺七郎、家來ひき連れ、御頭、サ、サ、何片介や、其方も知る通り
 昨日當の大騷動、捕寮普傳を討つたる故、井どもか身には構ひなけれど、と、残念なけし千束、また
 憎いは伊達助の、耳も毒藥籠の一巻と、天照鏡は身か手に入る、是れさへ有れば人を懐ける術の第
 一去りながら、騷動の事何何とやら心懸り、一巻は懐中もなれど、是れ此の詭計は罠に因る、土屋敷
 へ行き歸るまで、隠し所はあるまいか。」と、何と、抑者のめに御預け、サ、サ、サ、人手に置くも心

障り、ガ夫はさうと弟臺轍、一昨日から行方知れず、貫平めに申しつけたが、未だ河の沙汰もな
いか。」丹介「ハア、成程、貫平めも諸々方々、臺轍様の御行方、吟味には出しましよが、今に何の沙
汰も御わりませぬ。」「ハテ心得ぬ。」と、とつおいつ、思案時つく鐘の聲。聖七「ヤ南無三寶早八つ時、
御用の刻限延引は疑ひの元。エ、此の鏡の置所ハテどうがな。」と屈託も、凝つては思案に邊見廻し、
聖七「エ、ワ暫しの其の間、人の心の付かぬ所」と、此の間に鏡を埋め、草引き覆ひ、聖七「先づよしよ
し、丹介來れ」と何氣なく、打連れ彼處へ急ぎ行く。こゝに城下の片在所與茂作と云ふ律儀者、元は
河内の武士の果て、女房の縁に撫縁の、袖帯衣、袴、腰刀のふの仕事の肩抱く、一荷に荷ふ草苗より、
まだ若草の小娘が、介錯しけに棲家へ、親の手助け正直の、顔に敵く書簡物、土狐片手に、黒是
れ父様よとの衆は傾付も、大方おひ、書牀みに行かしやつたか、此方は母様が寝てぢやゆゑ、何もか
も驚なつて、無おまへは氣が急かう」と、いへばほろりと涙をこぼし、聖七「オ、ようぶうたふて、
今更言ふではなけりとも、俺も元は上りで、刀もついた者なれど、ふとした事で浪人し、侍止めて
物作り、廻りはせぬと思つても、津ぎに追ひ付く貧乏神、水運に追はれて八年間、船は江戸へ勤め
奉公、已れ上には喰ひ付いても、津ぎに追ひ付いて金調へ、姑息を取返さうと思ふ中、船は廻り付く人手は
なし、エ、俺や残念なわい口惜しいわい。聖七「花より金、金より女は我許り、必ずきなく思つて、煩うて

くねなよ。とうちゑなれば、
 「コレ父様、私と云うても女の事、何處ぞから男の手貰うてなりと、
 早う棄して下され。」と、眞實眞身のしやらしき。棄作「す、合點ぢや、氣遣ひすな。疾と前侍の時、姉のおきのが生まれると、直に傍觀衆の子と云號して置いたが、是れも其の後便りも聞かず、其の姉といへば吉原とやらに君傾城、とかく汝が大きい成るを苗の延びる様に待ち兼ねる。又莊屋殿は噂が兒なりや、何や角やと氣を付けてくれるる、案じてくれる。」と云ひつゝ、も落膽れし身の姉や先思ひ廻しては味氣なく、歎く涙の玉苗や、袖忍ぬ先より袖濡らす、浮世渡りぞ是非もなき。棄作「ア、愚癡な事云うて、つい泣いて退けた程にの、其の様に案じ廻しはせぬ物ぢや、人間は老少不定、今煩うて居る噂は長生して、運者な俺が先へころりと死ぬまい物でもない、其の時にや汝やどうするぞ。」
 三「ア其の時は私や泣くわえ。」一棄作「ハ、ハ、ハ、ハ、子どもと云ふものはなあ、コリマア、泣いたとて喚いたとて、死んだものは歸らぬわい、いつ何時か知れぬで持つた世の中ぢや。」と、いふも女房が煩ひの、十が九つあつちもの、今から云うて覺悟さす、心と見えて哀れなり。與茂作はこゝろづき、
 棄作「ア其の時に思ひ出した、内に藥を煎じかけて置いたが、いり付けぬ申汝大儀ながら一走り、一香煎じを喝に吞まして来てくれぬか。」一「ア、内には昨日來た旅のお侍様、夫れはノ、氣を付けて、内の事は構はずと、田へ行て父様の手傳ひせてて。」一棄作「す、あの人も由緒ある浪人家と見たが、さう

恭太平記白石嶺

て、英太半「に、非道ハ臺七殿、コレハ、今私が死んでは、噂はあすを知らぬ大類ひ、スレハ、コレハ、
 續一人ハ路頭に立ちますわいのノ、命は助けて下さりませ。娘々、おのぶや、〇、〇、〇、娘々も港中
 人や聞くと、主従寄つて減多切り、倒ろ、上に乗つ掛り、ぐつと止めて四苦八苦、無残と云ふも餘り
 あり。血押し拭ひ立ち上る、折柄何の氣も付かず、戻る娘が、〇、〇、〇、父様を誰が殺したノ、父様
 イなうノ、〇、〇、母様はあの様に煩うてなり、お前に別れて、私や何とせうぞいの、〇、〇、〇、マアどう
 せう掛り、〇、〇、足掻りしたる愛憎し、涙ながらに邊を見廻し、〇、〇、〇、押は傳にござる臺七様、
 親の敵と有る合ふ早苗手早に取つて打ち付けノ、娘「ヤレ人殺し來て下され、在所の衆々」と
 呼びかける。聲に聞け寄る一村在所、〇、〇、〇、與茂作を殺しやつたは臺七さまか。お代官でもあつた
 に人を殺しては濟みませまい。此の手の加勢は村中一統、マア元のやうにしてかへしや。おんで殺し
 た諸君、どうぢやノ、〇、〇、〇、田舎育ちの高調子、聞き付け聞け来る七郎兵衛、争ふ中へ割つて入
 り、〇、〇、〇、村の衆衆が来るからは悪うはせぬ、俺に任しやノ、〇、〇、〇、〇、〇、臺七に打向ひ、
 〇、〇、〇、申しお代官様には、エ、どういふ譯で與茂作を、此の様に惨たらしう、お手打にはなされま
 した。〇、〇、〇、日頃から正直正統なマノ男、無禮致さう様もなし、様子によつて此の莊屋も、聞捨てには
 致すまい、コリヤ急度吟味を、〇、〇、〇、〇、〇、黙り居らう、與茂作とやらんが殺された其の場所へ來か

所の刀疵、百姓づれが手際でない、浪人者など尼羽打ち枯らし、荒れ歩行に違ひない。何と與茂作は身が殺さぬと云ふ事、是れで疑ひ晴れたか」と頓智の倭娘辯舌に、云ひ廻されて百姓ども、流石の莊屋も理の當然、詞の一理思案の吐胸、臺七は濟まし顔。是うアニ丹助貫平やい、ソレ弟が死骸、身が屋敷へ持ち歸れ、ア思へも寄らぬ災難、七郎兵衛身が心を察してくれやれ。アニ與茂作とやらも不便千萬、娘が歎き思ひつゝ」と、此の場をくろめる間に合ひ詞、善と惡とは紛はねど、暫しの異り天道の、鏡に心残れども、家來ひき連れのさばり行く。跡は泣き入る娘のおいぶ、莊屋が指圖に在所の者、傍の戸板に與茂作が、死骸を乗せて昇き上ぐれば、まだ幼氣なき子心に、思ひ詰めたる孝行の、念力通す大磐石、敵は誰とも白石や、石に矢の立つ例まで、司も引く方在所中、田の面の蛙なき連れて、我が家にこそは立ち歸る。早黄昏の暗道を、うそく戻ら志賀臺七、あたり見廻し見覺えの、深田押し分け件の鏡、忝しと押し敷く、後へおつと忍びの曲者、鏡のぎ取り臺七、脾腹を一當て一散に、跡を晦まし、三重行く空の、

第五

陸奥は、何處はふれど鹽道の、それにはあらで朝夕の、煙も細く白取の、城下に近き逆井村、與茂

作が留守の内、妻は春よりぶら／＼の、枕も替も散り積る、山田の娘は見晴らせに、晴れぬ思ひやありし世を、思ふ涙の六畝七畝、やせ百姓の氣も浮ぬで、水に汁をを絞ららん。上巻。さじうやをかみ様、もと氣色は良いかの。」と、うつと這入れば女房おきこ、枕を上げ、「さうも七助殿おうね女郎ようこそ見舞うて下さつた。昨日今日は少し頭痛も止んで寝ました。」と、おきこりやよこころ、折節見舞ひたつても知つての通り煩ひつけ時分、奥茂作も此方の病氣になつて、離れくさきとして居られう。」と、おきこは「さうして下さりませ、しつが今日つと見えた娘のお供、足が痛むとして言ひ御用心、今日も退留して御座るが、何から何まで氣を付けて氣まで通じて下さる、と氣の毒かいお人様、それ故奥茂作殿もおのふも出づりなす、留めたお人のお蔭の氣も付もはかひなく、清くに、人が、さうなつてゐる、奥茂作も元は侍であつたけなう。」と、正氣に悪いお人、それに引替へてお代官の臺と殿、百姓の油が菜種のやうに搾りぬく無得心、此のまゝ代官には何かなるぞいなう。」と、おきこは「さういふ、さういふにそれで思ひ出した、夏の殿様の御家に昨日天新様があつたけなう。」と、おきこは「それ、御家の昔傳殿、何やら鎌を運びかけて、御前なこつをやられたとの噂、今の殿様は御幼でしとほや、夏のはな村時、後室様に四十足さうさうでも後室御の青山でも引りかけとか、但しお氣遣をかいねり菜ちよびと、お菜と云ふ様な事であめかいさう。」と、おきこは「さういふ、さういふのめ。」と、おきこは

「中武上はぶしぢやが轍潰し、喰らひ潰し」とうち笑ふ。某求めて立ち歸る浪人姿變れても、捨持
 にして五千百一萬石には見えなく骨柄、某「ホコレハ所在の衆御免なりませアタ、」と「ハ
 今かみ様の話で聞いた御浪人、お足が痛みますさうで氣の毒様やい。」と「されば、某は諸
 國を巡る浪人者、ふと足を踏み損じ、昨夜から思はず此の家の世話になります。それはさうとナニ
 と所の衆にお尋ね申したいは、エ此の邊に杉本甚内殿と申す人元は上方の浪人、今は此の邊の百姓と
 成りある、由、各方御存じないか。」と「七郎」されば、某「甚内とは覚えませぬ、錢ないならば此處
 ら一面、銀ないぢやんないお望み次第、うか、話して肝腎の仕事忘れて錢ないに、なつては堪らぬ
 もういにます。」と「かみ様随分用心さしやれ、御浪人様面倒ながら世話して進めて下され。」と「打連
 れ田の面へ急ぎ行く。某「ア、流石田舎の正直一廻、が一へん尋ねて知れぬ人、ハテどうがな。」と思
 案中、牀をたよ、病人の女房、と「御浪人様、お足の痛みは良ござりますか、却つてお世話にな
 ります。」と涙ぐめば、某「ア、氣の弱い、一人旅の迷惑は、宿賃さぬ時は山に寝たり野に寝たり、一
 昨日などは鄰村の明神の森の内、一夜を明すほどの事、一樹の陰一河の流れも他生の縁、まして昨夜
 よりの宿の無心、見れば人手も内證の、暮し見る日も笑止さに、介抱致すもお宿の返禮。」と「コレ
 ハ又御迷惑、心ず氣兼ねますな。イ々申しそれに付いて、今お話し杉本甚内といふ人、何の御

用でお尋ね」と、調ひかけられて、「さねば、拙者も御見知らぬと、其の甚内と云ふは河
州の浪人身の親とは至極懸念、幼少の初めから此の娘と某、行く／＼は夫婦にせんと云ひ約束、ふと
した事で浪人せられ、此の邊にと風便り、此方の親も相果て浪浪の身、斯く申すは商家の浪人、金
江勘兵衛が平谷五郎。」と、半分聞くより、さういふお尋ねしや、夫與茂作と申すは、聞か其
の甚内。」と、二與茂作殿が御殿。」と、いふと、一人足ればしたり」と互に手を打ち、
「さうとは知れいでもからずそ外の他人が過ひ、候つて聞かれたら御免、それ聞いて如何やゝ氣
分よゝい候」と、さういふ浪女房に、谷五郎も安堵の思ひ、さういふ浪女房も安堵の思ひ、奥
間から上り目見て、晩は日出度う候事。」と、昨日は娘の御浪人令仕に堪へ、一晩御に「サレ
續しや」といふ初め酒氣が味を忘れ水、廻る／＼と名乗り合ひ腹のふと地獄なる。谷五郎心持き、
「さう、其の以前親を、云ふに東渡せしとある御息女は何處に、夜間より古松の下に見えす、心
得たし」と幸ひられ、三時と變つて二、何返事もござんず、さういふ浪女房も、其の御殿に全内
には、「さう、さういふ浪女房へ縁起した」と、さういふ浪女房も、其の御殿に全内には、
日出度く親をさねとせう。」と、さういふ浪女房も、其の御殿に全内には、
聞、さういふ浪女房も、其の御殿に全内には、

後に女房がうつとりと、暫し詞もなかりしが、
 一の世に云ひ初めしぞ、元は楠譜代の家來、杉本甚内と云はれし身の、浪々の身の方便とて百姓
 とまでなりしが、本名かくすその内も、以前娘の云號、勘兵衛殿の總領子谷五郎に廻り合ひ、女夫
 にせんと思ふ願ひも、過ぎし年、水損半損、仕慣れぬ業に辛苦の迫り、未進の替りに姉妹は、君傾城
 の憂き勤め、それも浮氣徒らならず、親い水牢見て居られず、孝行からの勤め奉公、漸う未進は納め
 て、内々兼ねたる貧の病、嘘や娘が心にも今日や迎へにくる事か、明日やと許り在所の室、購めて
 幾人可愛やな。年月焦れた増殿に、不思議に廻り合ひながら、その娘はと聞はれた時、何と返事が
 なるものぞ。浮川付の勤めの身、多くの肌觸れたと、増殿が聞かれたら若し愛想も盡きうかと、思へ
 ば思へばいぢらしい、どうぞ仕様はない事か。増殿の戻らぬうち早う相談して置きたい、戻つて下さ
 れ親に殿、背中に腹はかへられぬ。寧ろ妹のあのおのぶ、姉の替りにやつてなと取戻しては下されぬ
 か。ア、それも不便き浪人の、いかに貧苦にせまればとて、姉も妹も浮き勤め餘り惨いぢらしい、
 たゞさへ私が胸一ぱい、辛苦艱苦の七重八重、何と命が續かうぞ。談合したい親に殿、いつに替つて
 戻りの遅さ、どうした事。」とのび上り、
 「親に殿、與茂作殿。」と呼び叫び、病に弱る女氣に、夫
 は此の世を去りしとも、知らで焦る、胸の火に、涙の湯玉涌きかへり、叫び慄れ泣きたふれ、病み疲

れたる泣き入り、はかなき、夢を結びつらん。さき魂も、死出の田をことはやなりて、かへるにしか
じと泣くやらん、血を吐く思ひ七郎兵衛、泣き入るおのぶが手を引いて、しをへ戻るまさらは、
戸板に空しき與茂作が死骸を乗せて、在野の者。おのぶがうらな屋敷、此の境内へ入れたら直に總堂
の坊様をじ、七郎、コレをいふ。聲が高いわいの。知つての通り與茂作が女房はおねが妹、此の
春からの大喧ひ、此の土州が持てまいと案じる程の病の中へ、與茂作は切られて死んだというたら、
いつそ直に泣き死、そどうでは云にやならぬ事をやが、せめて一日半時なのと息災で置きたい。マ
リやおのぶよう聞けよ、今内へ這入つても、與茂作が死んだ事はコレよくあやど、酒に酔うてよ
う寝てゐるといふ程に、必ず泣きも場に泣顔死なふさ、さ、さ、悲しいは道理や無理ぢやない
が今知らなと母は直に死んでおける。一時に二親に離れた時、成が遠方にくれて、うろくする
で有らうと思や、と思ひ過しが知られて、涙がはらうとく、さ、さ、さ、若の衆、一村の衆ねち
する者が、おのぶの様にのろく泣くと、笑うてばし下さるなや。さ、さ、さ、此の情に不仕合な
男はないわいの。そのくせ正直で誠信心、是れを思へば世上に神も佛も、俺やないと思ひますこと、
云ふにおのぶも泣き目を拭ひ、おのぶ様は遠い所へ行てなり、只さへ便りのない上に、母様おのぶ
お願ひ、杖柱とも思つてゐる父様に此の様な、はかない別れは何事ぞ。また此の土に母様が若しもの

事があつたらば、妾やどうせう／＼と、わつと泣き出す口に袖あて、七郎「是れはしたり今も今とて云つて聞かすに、コリヤ其の泣聲を喉が聞くと直ぢや／＼。スリヤ第一一啼へ不孝ぢやぞよ、泣きたいも孝行、所を又泣かぬも孝行。ヨ、ヨ賢い者ぢや聞き分けよ。ア、親ぢやもの子ぢやもの、泣くのが無理ではないわいい、可愛の者や」と抱きしめて、短狐織の袂先も喰ひ縛りたる恩愛の、莊屋が涙は一村の、時雨に増る貫ひ泣き。氣をとりなほし涙を拂ひ、七郎「泣くまい／＼、さう／＼泣かぬ泣かぬ。サ、皆の衆、そんなら内へ昇き入れて貰ひましょ。ヤコレ今も云うた通りぢや、必ず何も云ふまいぞ、おのぶも合點か呑込んだナ、サ、サ、早う」と泣顔隠して内に入り、七郎「是れは又減相な、其の大病で端近へ出て堪るものか、コレハさて寐て居るか、サ、それも幸ひ、此の間に早う早う、コレ靜かに／＼、オットよし／＼。」村人「ハイ／＼、そんならお寺へ行くには。」七郎「ハテ叔いらざる事云ふまいてや、何ち云はずと去んだ／＼。コリヤおのぶ、ソレ布團を出して、父によろ著せて置け」と、おさよが寐姿打守り「ア、寝れたな、何として土用は越すまい。端折鏡の兄弟、今汝が死んだら俺も力ないわい。が此の上へ風引かしたら堪るまい」と立ち寄つて抱き擁へ、七郎「コリヤコリヤおさよ、風吹きに減相な、サ、牀へ這入つて夜著きて寝や、コリヤ／＼おさよ。」七郎「鼻様いへう。」と、揺り起されて振り仰のき、七郎「ヤお前は兄様、七郎衛兵様か。」七郎「サ、サ、サ、氣色

も大分能いさうで嬉しい／＼。」「アイ、アイ、お前はいつの間にか」七郎「イヤ、只今、コレ汝や家惚けたか、おのぶも爰に泣いてゐる、アイヤ笑うてゐる。」「アイ、おのぶ、汝や父様と、一所に居りやつたか。」「アイ、父様精出して藥を呑み、どうぞ早う達者になつて下さんせ、私は便りない」と、職の上ぐれば、「アイ、此の子とした事が、私が煩うて居たと、父様は達者なり、其の上七郎兵衛様と云ふ結構な伯父様はあるし、何便りない事があるぞ、ソレ父様は何處におや。」「アイ、」
「エ、コレ何處におやぞいの、急な用があるわいの。」七郎「用のあるも道理々々、逢ひたから逢ひたから、が與茂作は田から直に此方へ来て、南無阿彌陀佛、今年は取分け苗の出来もよし南無阿彌陀佛、アイ、實てくやと云つたによつて南無阿彌陀佛、それでアイ親うて名残の杯、をそれからアイ酒呑んで南無阿彌陀佛、それは／＼よい酒で、そしてからアイ入つて居るわいの、アイ、／＼、どんな急用があつても、あれではモウ間に合ふまい程に、俺にでも相談しや、と話しや、急な用とは何事ぢや、」
「ム、與茂作殿は酒に酔うて寐てかえ、アイ、寐てゐるとも、百年立つても起きる事ぢやないわいの。」七郎「エ、時も時と今日に限つて、オ、そんならお前に談合せうの、夕といた旅のお人は、こちらの堀の江谷五郎殿ぢやわいなう。」七郎「ア、ム、ソレそれが如何した。」
「アイ、アイ、あの人はこちらを尋ねて、酒うて先話と合ひて逢うた嬉しう、酒とてくと嬉

村へ。」と云ふ、ふあよし。」と云ふ。「サア夫れに付いてお前も御存じ、其の谷五郎殿に云渡の姉のお
 きのは、八年跡の難儀の時に勤奉公。」と云ふ。「す、知つて居る、それも親の爲ぢやもの、大事な
 い大事ない。」と云ふ。「否々それでも増殿の手前はづうも云はれず、お屋敷へ奉公にと云ひくるの常分は
 それで濟めども、行く、は取戻さねば増殿は元より親達への聞えも。」と云ふ。「す、立たぬは道理ぢや
 道理ぢや。」と云ふ。「す、云うて金の才覺の出来る身代でも。」と云ふ。「す、無いも知つてゐるぢや。」と云ふ。「サ
 アそれぢやによつて私がおもふには、いつそエ、妹のおのぶを、不便ながら替りにやつて。」と云ふ。「エ
 エもうそんな事云やんないなう、年も行かぬ者を可愛さうに。」と云ふ。「す、エ、それでも早う姉をと
 り戻さじや、傾城に賣つた事、ひよつと増殿が聞かれたら、日頃堅い奥茂作殿の氣質では、谷五郎殿
 の手前を恥ぢ、短氣な心でも起らうか。百姓なれど以前は武士、姉を勤めにやる時さへ、腹切るの何
 のとて突き詰めた侍氣質、煩うてゐる其の中に、若し其の様な事があつたら、私が先へ死にまするの
 コレ兄様、何卒よい料簡を。」と云ふ。「す、、合點ぢや、が俺ぢやと云うてどうせうぞ。マ此の様な悲
 しい事の數々が、一時に出来るといふ因果な事の聞き役は、けふ一日で百年の命が縮む。」と許りにて
 涙呑みこむ横しづき、顔を背けてくひしぼる。」と云ふ。「エ、可愛や妹なんにも知らずに。」と云ふ。「エ、コレ
 コレ兄さま思案が付いたかえ、サ、、どうせうぞいな。」と云ふ。「す、尤もぢや、が、どうせうぞ。」

此
也
不
可
不
察

には夫の敵、此の子が眞には親の敵、コレ兄は、何卒二人が力となり、敵を討たせて下さんぞ、頼む
はお前ばかりぞ」と手を合はすれば、是「二、頼むの力とは何の事ぢやぞ、俺が身にも成つてある
事、コレ親は泣き密の氣遣ひする。例やれ年こそ密りたれ七郎共、おのふも亦中斷する、侍で
も浪人でも其手に手なしぢやぞ、マア兩人は危い、俺に任して奥へ行きた、マア奥へに之
め遣り、何は浪人勝手もし、縁故とつかと身捨て、百姓衆はな車に、總力より三味、俺は手
馴れし草薙鎌、帶引き續めて谷五郎が、歸りを今やと納戸口、手を滑るたる心掛は、世來にも又驚ら
し。まきの早々其と入相に、這ふ山道谷五郎、そり、戻る表口、彼より使は来る思ひの武士、
手ん下に十手斧足掻足、とは知らず内に入り、一、二、三、ついにしたり、目が暮れたに火も點きず、コ
お着候、宿む足で道に迷ひ、大に取りました、頼む侍連。親に敵は走らぬか、マアここにもむやに
と探り寄ら、懐へぬつと七郎共、難ぞ同さんと寄る様、さそくを言かして訊ねばすこなた、親の
敵し打る懸る、娘がも親のなぐ懸、コハ心得ず」と谷五郎、かはしてすつ、言さずすれば、わつと
泣く聲母親が、差し出す行儀七郎共、顔を冷して力み寄る。マア、マア是れ親の敵とは、仔細を
らん、何となく、マア、マア、云はいてのいの、今日哉、上の山の峠道で、大の敵となは儀であらうか
な、マア、マア、馬鹿作態を殺したとは、マア、マア、マア、谷五郎とやら、兎がならぬ許は

ソレ傭が小袖に血汐と云ひ、一昨日明神の森に、一夜を明したと最前の物語に、七「コリヤ其の森の内に侍の殺してあつたら傭が仕業、武士に似合はぬ争ふか、勝負々々」勝負々々と詰の密れば、谷五郎もつとも臆せず、云分は未練に似たれど、與茂作事は眞以て覺えぬしの如何にも明神の森の中にて、一人を害めしは、此の江谷五郎と、聞くより表の志賀幸七、ソレと掛聲官平丹介、十手を振り上げ取り圍めば、「コハ狼藉、何奴」と云はせも立てず、幸「ヤ、只今傭がぬかせし、森の中にて汝が手にかけし幸藏が兄志賀幸七、弟が敵通れぬ所、覺悟々々」と呼ばはれば、から／＼／＼と打笑ひ、幸「與茂作の敵と切り掛けしは、老人と云ひ女わらへ、あしらひ居たるに好い所へ幸七とやら、相手に取つて面白し、誰かは知らぬ明神の森にて一人の侍を殺せし一條、包まず歸るよつく聞け、我武者修行の願ひを發し、普く日本六十餘州を廻つて、我にまさりし人に逢はんと、一國に一箇の首塚を築き終れど、手に立つ者もなき所に、一昨夜郷郷にても、一人の手に懸け首を手向け、新願を込めし感應にや、天晴ゆ、しき武士に出會ひ、再會の約仕つたり。かく一人を切り取れば、此の家の主を何害せん。卑怯未練に包み隠さず谷五郎ならず、汝如きのへ／＼武士、敵などと仕事をかしや一度に薙れ。」と身構へたり「ヤ、物な云はせそ討ち取れ」と、下知に随ひ一二のかは聲、左右に組み付く丹介官平、首筋掴んで釣子投げ、手練の手紋にさしもの幸七、廻して討たんと引き返す。廻さじ

ものと願け出す谷五郎、どつこいさうはと帯際しつかり、取り付く宮平丹介を、蠟飛ばす金鶴に、叶はぬ敵ぞと逃れ出す二人、襟際をつき引き揃へ、一ツリツリ此の家の主興茂作を殺せしは、汝等が主人豪七であらうがな。何れあつて手にかけしぞ、有様に自狀ひろけ」と、押ぎ付けられ、耳をすす、申します、豪七様は實の親、川の底へ隠されし興茂作に見付けられ、夫れ故の此の行動、私共は知らぬ事、御も助け、と、泣き詫ひるこそ見苦しき事、と、終くぬがしたり何といづれも、さう此の上は某に」と、驚ひに晴れました、祖に殿の敵は豪七」と、此取らも敵の片割、當座の座懸まつかりと、ぐつと一しめ目をむき出し、手足を地を死してさへ、此の上は豪七の、追廻け討たん。に立ち出づる、向うに豪七種が鳥、狙ひ固なる此方には、間先何ふ友の松の戸、とて切る幽音、ア窮乏ひろく、と立ち掛る、志賀が冒間に打ち付ける、腰は河邊傾け仰天、以前の手銃に二度のこり、銃手甲に拾ひ取り、跡をくらまし逃げ行く豪七、腹に鼠腹に腹に出る血汗、とて待たれよと鮮血かけ、復面巾取り、れば、一、一夜明神の森にて、一、我を懸けに暗なる、宇治兵部助正之、二、其の正之が何故に、豪七を見送せしぞ、三、不審し、よりなから殿の森には鼠腹の鼠といふとも、野に熊竹の北朝を打ちばし、南朝を取り立てんと、義兵の大切と思ふ者、新程の小事に拘るべからず。卓然と練の

幸七六れど、アレ今のごとく飛道具にて取り圍まば、貴殿孫吳が術ありしも、なごは是れに敵すべし
 や、大行に細説を願ひす、殊に臺七普傳が祕方の毒藥、傳授の一卷所持し、何卒傳へ聞かぬ其の
 爲に、我が手に入りし天眼鏡も、思へば邪宗不祥の器、天下を治むる寶にあらねば、彼へ返して恩を
 かけ、態と此の場を見遁したり。只此の上は與茂作の、娘達に力を添へ、敵を討たすが計要なり。中
 敵臺七も當所に居がたく、鎌倉へ逃げ行かんは必定、我も是れより山比が濱に立ち歸り、猶も味方を
 調じ合はさんや、ナニ七郎兵衛殿とやら、なにかの様子はあれにて聞く、ハ、御愁傷難し入る。中
 陰事なう相濟めば、必ず尋ね來られよ。姉妹も江戸にとやら、何かの用事も承らん。ニ、慈愛の詞
 寛仁大度。「ハッ。」ト兄弟がたじけなく、谷五郎も理に服し、谷五郎「ハ、ハ、誤つたり、臺七如きの
 國賊を、相手と云ふも大人氣なし。敵討は兄弟の女、お頼み申すは兵部殿。我は彌此の程の、貴殿
 の指揮に隨ひて、難波の浦の總大將、四天王寺の東門に陣所を構へ、寄せ来る諸軍、仁木細川吉良石
 堂、北朝無二の賊臣共、みつの濱邊の眞砂の数や、潮の如く起るとも、習ひ得たりし諸家の軍法、魚
 鱗鶴翼堅早破軍、進戰退圍利變の術、堅きを碎き、鋭きを取挫ぎ、奇正突衝六花八陣、五位の兼備、
 四十八箇七十二種、二百八十四箇の兵器、こゝに開き彼處に寄せ、變に應じ奇に臨み、時に大江の岸
 打つ浪、難波の盧の浦千鳥、わら／＼ばつと捲り立て、名を高天に輝かさん。若しも天運至らずば、

因め、場所を一足去らず、腹かつきばき討死の、来世の手本となすべしと、討は正に當ぬるかな、
反逆露顯の時いたり、四天王寺の東門に、旗をささぎと名に付ち、金江の義心を、兵部卿も
莞爾と笑ひ、「一も、面白しく。」果も鎌倉にて、赤坂臺七に尊ね逢ひ、關原會戦の兵法の精業、
術を以て受け傳へ、其の後二人に力を合はせ、惣に長刀、短は、田舎に育ちては馴れしとい、鎌倉、義兵
鍛錬修行を積み、其の敵を討たせし事、此の員部が方すにあたり、必ず氣取で、金江とて其に闘もさ
武士の、花はみよし、南朝に、二代の忠臣菊水り、流れば世々につんどしき。涙はらうて七郎兵衛、
一も、いさとしのお話を、聞えに付ては果敢とい、義兵、もとほつはさき、敵人の、敵に、
へ云、其の、娘は吉原、城の、助めも、親へみえ、孝行、必で、お見捨てなう、お願ひさうす、
兵部卿にも此の娘、神と一所に親の敵、お討たせなされて下よりますること、
きき、すすも花の身も、目には涙の陸奥、松山平代を討て、其の、
行左郎、今日より親の名を襲ぎて、金江助兵衛と名と、各家り別と、兵部卿、
一、大、成就此の上は、鎌倉に立ち上りて、
ま、互の誓ひ、亡き途をゆく三人、出でゆく二人も亡き人々、心ばかりの勇ひと、云はぬ色なる
一包、黄金花のく山をのし、食もしらんと、
一、包、黄金花のく山をのし、食もしらんと、

勢ひ山比が濱、一天四海に菊水の、武勇の旗をぞなびかせり。

第六

「ミヤノ、サアノ、旦那方、お茶屋様へお腰でもおかけなさい。今日は結構なお天氣で、私も辻合、觀音様もお仕合でござります。話も差合ひのない私が、作つたのをあけやしよ。お聞きなさい、旦那方の前だが、兎角世界は儒佛神の、三つでなければいきやせん、其の中でも佛法は口當りが能いから、とかく繁昌するわな。お立合にお寺様方もござりやせうが、アノ地獄極樂の繪圖をかけて、坊様が繪解をするのを聞きなさい。ハとんだ事よ、ハ、此方に御座るは極樂の體相、此の世において佛法信じ、善根の功力によつて、上品上生の佛體を得たる所でござる。こちらには地獄の體相、此の世に於て牛馬をむごうしたる報いによつて、人間の頭に牛馬の體が付いてござるなんぞといふと、ばア様達の手を合はして、なんまみだノ。わしやアどうも吞込めないわい。旦那方の前だが、牛馬をむごくした報いで牛馬になるなら、念佛を申さうより、手短に、此の世で佛を慘くしたら、ナア佛になりさうなものヨサ。斯う云ふ所が方便、私どもが斯う云ふも、錢が貰ひたさ。ハイノ、是れはお待ごま、ハイノ、是れは、町人方は格別錢になる。」と、お前追従口合に、「一文二文四文錢、竝大抵口

が、先はれつきとした奴、此の尻を持つて行くと、捨てても三十兩は取る、其の識文はコレ此の鼻が懷にある」と話せば番七、番七「ホ、ソリヤ金になるわいの。ヤ金になる次手に、今日よい話を聞きました。奥州の何とやら、オ、石堂殿とやらの預りの、宸筆とやら、若し持つてゐる者があらば、持参せば、褒美は金子三百兩下さると、お代官様より云付、何でもこいつを持ちつて出ると大きな仕合。貴様も早く歩く人ぢや、随分氣を付けつしやれ。オオおりや大家様に頼まれた用がある、一寸行て来う。……茶屋様、此の鐵棒頼みます。觀九郎殿此の頃に。」觀九郎「オ、行くか、其の中逢はう」と兩人は、別れてこそは急ぎ行く。にた山通の二三三人、茶屋が駄几に腰かけて、甲「御亭主何時ぢやい。」甲「ア、オ、オ、七つでもございませう。」甲「ナ、ト善公や、いつそ是れから直に吉原へいつて、土手からまつちや呼びのぐい上りは如何だらう。」乙「コシこいつは日本だ。コレ里邊、手前も行くか。」丙「知れた事さ。カノ柳樹にある、三人で三分なる智慧を出しとて、こいつはよく云つた。」「コレもう一はいくんだ。」とせんじ茶も、ちやを云ふ通と知られけり。ふかき蔭今より後はよちあらじ。甲「コレ申し、問ひたい事がござり申すサ、吉原で名の高い女郎サア何と云ひ申すぞ、知つて居るなら教へてくんなさいチャア。」甲「ム、其の名の高い女郎と言つては知れぬが、夫れは何所の名に何といふ。」甲「オ、コナ人は、名を知り申せば夫れへ行き申す、おら嬢サアでござるチャア。それを聞

くべいと思つて、商人屋で聞けば髪結所へ行はと云ふし、夫れで聞けば、その通に聞けといひ申す。マア其の通殿から聞き申すべいと思ひつき申したる。其の通とはマア俺が。一、二、三、誰だらうな。ハ、マア丁子屋で丁山が髪結か、松葉で松井か、扇屋で花扇か、申近で半夫か。マアヤイヤ、今では扇屋の人町か、しほ細かり斯ういつて聞かせてと、長崎やへ阿蘭陀を見物に行つた様にも知で、一つとわからぬ、ハ、氣の毒なものや、もう聞くなる。マアコ、何卒よい手が、其の末のて尋ねて行きや、マ、不便やとと々聞暮、薩に上野が浅草を、わざうたいうて背立つて行く。結終を後に親九郎が、襦袢で群に傳へ寄り、是れこそヤ、汝や姉を尋ねる者やうな、其の報に達してやろ。一、二ヤアそんなら達はせてくれやうか。一、三ヤア、達はせてやるはなるが、コ、其の汝が尋ねる吉原と云ふ所へ、奉公をそこやならぬぞよ。一、四ヤア、ここいな者で申す人があらば居申すわ。一、五ヤア、そこぢやて、その奉公するには、大分難しい。コ、俺を伯父ぢやと云はねば奉公にも遣はす、姉にも達はれぬ、俺を伯父ぢやと云へ。一、六ヤア、合點かい。一、七ヤア、俺や俺が連れて行く、マアあいべ。一、八ヤア、親九、マア待つて。一、九ヤア、俺を呼んだは誰だ、一、角町親方、何ぞ用でもござんすか。一、二ヤア、外郎事ではない、一、三ヤア、事なまなやい。高のしれた代物、笠の臺の飛ばぬ先、とつと止にしたがよいぞよ。一、四ヤア、コレ親方、そんな

時まで。シテ此の死骸は、奥山の片瀾へ、人の知らぬを幸ひに。」合點々々。」と引摺ぎ、繁火をこして急ぎ行く。觀九郎はしたり顔、
「九郎、コリヤ今日の様に畫が付く事はないわい。一寸來ると田舎娘
五十兩の唯取り、又宸筆の掘出し、是れを持つて行けば、三百兩の宸美、コリヤ無盡勘で貰うた百、
ざらちよほで十貫になつた様な物ぢや、ハ、ハ、ハ、シタザ、其の宸筆とやら、どんな物ぢや見た事が
ない、序に拜も。」と封押し切り、聞ければ中には紙札一枚。
「九郎、コリヤ富の札、しかも一昨日突いたのぢや、さてこそやらかされた、遠くは行かじ」と追うて行く。仕済ましたりと立ち出る五町、
付きそふ金貨以前の飛脚、
「五町様首尾は。」
「五町、シイ、馴慾な觀九郎め、一杯喰らつてよい氣味よ
い氣味。」
「ナント五町さん、飛脚の仕打絞め殺さる、身振、何と味をやつたでござんしよが、ヤ是れからは元の節賣萬八。」と、傍の荷箱取り出せば、男一、おれが金貨の役もちつと譽めて下され。」
町、巧いものぢやノ。イヤ今の觀九郎め、逢うたなら喧しかろ、此方は顔が合はされぬ、何卒思案
はあるまいか。」と、いふ中來かゝる豆藏のどぢやう、二人見るより、三人能い所へどぢやう殿、コレ
私らが逢うては悪い者が爰へ來る程に、コレこそ様の智慧で、追ひ歸す仕様はないか。」
「ア、コレノ、ハテ智慧と云つては皆無な我々、追ひ返す力は勿論、イヤモ是れは御免下さりませ。」
「三人、ア、コレノ、ハテ力の入る事ぢやない、來ると云ふは女衞の觀九郎、私らが逢うてはならぬしだら、コレ是非に此方を

卷之四

火やうちん阿鼻叫喚、一百三十六地獄、火責の罪を救ひ取り、極樂へ導く我が誓願。因果は廻る車の輪、今は錢の藏金次第、因果地獄と此の地に地じ、又は賽の河原にて、上に足らぬ幼子の、中にも汝が降めは、子供にまゐた徒者、一重二重積む石を、阿責の鬼の鐵棒で、突き壊されてアレ地蔵様、あの車あがと映えて来る。其の外給賣持遊びを、買ひたいと云ふ度々に、皆俺が賽錢を遣はせる、汝も哀れと思へや」と衣の袖も泣き地蔵、袈裟で涙を拭ひ居る。さしも我強き觀九郎、我が子の枷に縛られて、思愛の涙はたノノ、觀九郎「ア、悲しい話を聞きました。扱はお前様がアノ、因果地蔵様でござりませう、私の所の小僧が参りまして、強う御厄介をかけます。承れば、お賽錢まで遣ひますとは餘りで勿體ない。爰に四文錢が三百五六十ござります、是れで何ぞねだります時、買つてやつて下さいます。エ、大さにお世話様、お茶湯でも上りませう」と涙に暖る二本棒、一本足らずを差し出せば、角太夫が「ア、善哉々々。汝が其の心正直なる故、去年孔雀長屋にて此の世を去りし我が親にも、今は極樂の東門の番人になつてゐるぞよ、汝に是れも傳言あり。」一重二重「エ、扱もノ、佛は見通しと云ふが、色々の事まで御存じでござります。シテ親仁殿は何と申しましたの。」角太夫が「オオオオ善哉々々。今の世はもつぱらに後生願ひが多き故、極樂も大入り、最早蓮花の上には居られぬ、門番のひきを以て割込みでもしてやらん、一刻も早く来いとの敕諭。」觀九郎「イヤ申し、エ、氣味の悪

せぬ。何卒お連れなされぬ様に、ていとお歸りなされたか」と、天窓をあけてうつかりと、始めて心は付きながら、狐のぬけた如くにて、第九「コリヤマア今日はどう云ふ事だ、ア但し夢か知らぬまで、夢ではないか、いゝ／＼夢ではあるまい。カウト、先づ爰へ日のある中に来たわ。願禮の田舎娘、騙して賣つて、五十兩懷へ入れたわ。そこでまた宸筆の三百兩になる物と替へたわ。又夫れが富の空札と替つたわ。追驅けて行く、腹が減る、酒や肴を喰つたわ。錢が一本足らずと、南鐐一つ取られた。申議はなくなる。ム、此奴は夢かしらぬまで。コリヤなんだ、ム、コリヤ牡丹餅、ハ、ア夢にほた餅、ア、此奴はどうでも夢ぢやわい。ア、いゝ／＼夢ではない事がある、俺が懷にかの残り年の證文、三十兩になる奴がある、是れがあれば夢ではない。ド、オ、ある／＼、是れかあれば夢ではない。餅し斯ういふ時節なれば、念の爲讀んで見たいが、薄闇がりで讀めればよいが」と何れ云ふやらやくたいの、内訌後に聞くどぢやう、煎餅の霞へ水飴を、塗つて待つのは機轉の箱、觀九郎は證文廣げ、薄闇がりに透し見て、第十「ドレム、お頼み申す仕切證文の事、一つ此のなべと申す女子我等實の娘に紛れ御座なく候、此の度我等不勝手に就き、右の女子新吉原遊女奉公は申すに及ばず、茅中旅籠屋飯盛下女、其の外端々茶屋酌取奉公等にも差し出し申し度く候へども、我等方に其の往日御座なく候につき、貴殿を相頼み、仕切奉公に差し出し申し候所實正に御座候、尤も、年季の

儀は當々極月より寅の極月まで、中年十五年ふ、今年は丁の年。丁丑寅二年よし、うまいノ、ア
ア是れがれば夢ではない、何時でも三十兩は取るといふものぢや、ア、ふい。」と、藏く所をちよ
いと差し、行方知らず證文の、紙は上らせ給ひける。此奴はやつぱり夢ぢやわえ」と、
いふ間にどおやうは一散に、跡を濁して、急ぎ行く。

第七

古の遊童生ひし所をば、今は古字に書き替へて、新吉原の繁昌は、外に頼りなまめきし、或は貸
本小間物屋、早いぞきは洗練裏、晴笠引圖侍、のさけ、歩く書狐、一度ちこんと云いもせず、
跡ふり歸のそ、り行く、所に久しき角折め、大帳屋の看板の遊女、使うた姿も書見せに、素組の儘の
美しく、こぞの造ひたるかべの峯、一綱打ちたくありを海、人魚の生簀も斯くやらん。新造毛が寄り
あうて、こぞとしけり殿、竹がへしも、仕舞や、此の頃は川のおか様も、江の島とやらへお出
でなんして、跡に旦那さんばかり、私らも何卒よい男の金持つたお客に請出され、江の島とやらへ行
きたい。しよ殿は何が望みぢや。しよ、私や何にも望みはないが、何卒大名とやらになつて
見たい。いふを聞きある小間物や、つり、渡まじい望みを云ひ出した。して大名になれば、てま

へはどうする。」「ア、アイ、私や大名になるとな、中の町へ芝居を立てて。」「物屋、中の町へ芝居を立てて、そしてどうする。」しほり「アイ、使に行く度々に見んす。」小「物屋」したり、此奴は有りがた
い。此奴は話になるぞえ、ナウ本重。」本重「サ、サかう云ふ所が此の里許り。イヤ、此中花魁へお
貸し申した曾我物語の跡、四冊めから持つて参りました。是れを宮城野様へ上げまして下さりませの
又此の間お頼み申しました女郎様がたの名前、書付けて下さりませ、細見を急ぎます。」甲女「アイ、
書付けて置きんせう。コレ小間物屋どんや、下村の白粉をひとつ、百助のくこを一具置いて行きな。」
乙女「ソレ、私にも元結紙と鐵漿楊枝、そして此の象牙の櫛に、抱澤瀉と抱著荷、比翼紋に付けて、
早う出来るやう頼みやす。」二三日の中に客衆も御座るから、其の間に合ふ様にや」と、色に見せたき
紋所、絹一杯の眞實なり。」小「物屋」アイ、随分急ぎやしよ。ニタウ抱著荷に抱澤瀉とは、ナト何
方もしつこい望みぢやな。」本重「リレバ、抱著荷が男の紋なら、是れもサゲうそ鈍な奴であろ。」
乙女「アイお世話さ、人の客を悪う云うて貰ひやすまい、しみん、好かねえぞよ。」本重「アイつひぞ好
いたと云うて、一人でも女の取持してもらつた事はなし、私も抱著荷でも付けやんしよか。」乙女「ア
ア云ふもんだ見なんし宮里様、それでも色事があると。」本重「オななくて如何しんせう。主達はあだ
付きてで、方々の新造様方は自由さ。」乙女「コレ、なんぞ面白い物があるなら見せなんせ。」「アイ。」

と風呂敷解きほどき、大重「マヅ女郎、八方には、八文字お伽ほうこ小夜嵐、是れは縁櫻木明育、こ
ちらは奴存出、春太夫が當てた物、こし是れは今年の新版藝者甚孝記、此方は願撰入通通寶、これら
面白うござります」――「そんから夫れを」――「本一また何ぞ外に、オ、此の封じた本は」――「乙女「オヤ馬
鹿らしいやア。一寸見なんし、あきれもしない。」と、大勢がどつと二度に笑ひ、小間物やもし観
き、――「是れ許むに無筆にも讀める。」――「大さな物、此方も次々に、書いてゐる、由伏
の頭を斧で割つたやうな物だ」と、悪口云ふも影がさす、君は三夜に三ヶ月さま、甲子巳待庚申、當
日念する木陰に、十七夜「戸觀音」も、祭下はふいけへ」と、はち氣の移る女郎氣の、甲女郎「此中の
待人はよう當らんした、又一寸見て下んせ。」と、云へば法印算木取り出し、法印「ム、是れは離の卦
に當る。ム、是れは質屋か金貸だの」――「女郎「アイ所は何所と當てて見なんし。」法印「ム、所は東、本所
邊。」女郎「ア」――「情か神田土手下とやら云ふ所、そして内から毎日金貸した所へ、大勢で取りに廻ると
やら云ひした」と話する傍で本屋の重、コナ法印何といふ、神田と云へば南の方、毎日取りに歩くと
は、夫れはかの日なしではないか。」――「甲「ハテ所は南なれど、東と云うたは則ち日濟の云ひ違ひ、指
でも髪でも切り代へて、随分不參のない様に、女でせがんで見たらば、物にならう」と辯舌に、同
じく私が客人、どうもふ心が見えおくれ。」――「是れは久しく便りが無い。お前の部屋を持つた時

無心の文に返答も、なしも様も面目なく、來ぬのも道理震爲雷、新造の時に逢うた儘、「こゝろ探も奇妙に當りやした。」「サア、くおまへ。」と又次は、「卜の表も巽爲風、好いたが因果乾の卦の、髪物まで用立て、算司の中も坎爲水、客衆が有れば暗しく、髻を掴んで引き倒し、乾爲離、踏八たり過音坤、八卦にあらぬもつけ事、終に遣手の耳に入り、二階をいんと風地觀、お前も方々鞍替に、其の行く先も火山旅の、格子も時に合はぬ客、あふも不思議、逢はぬも不思議伏見町、盡きぬ縁も待つたがよいこと、云はれて、「ハア奇妙な祭卜様、コレお初穂」と、十二銅、包に餘る見通しと、出せば法印した顔、昔「當る道理此の里に、愚僧も久しく年をへし衣の袖の綻びや」袂に納め立ち歸る。また打ち寄つて、新造禿、「コレ大きなきご買つて來いんした、サア玉取つて遊ばうぞ。」と、餘念たれいななき折袖、奥より走つて出る遣手、衆「皆様今日は店も少ない故、世間より早うひけと旦那殿の云付、皆二階へお出でなんせ、マ夫れ店先で戯らするか。しほりも花魁の用がある、早う行け。お前方も大きななりをして、玉取らうより客衆でも、取る様にしなんせ、名代に出る許りが勤めでもないわいな。」と、一寸云ふのも氣味悪く、商人どもは荷を背負ひ、商人「オ、玉を取るくと思つた中、遣手衆の目玉を取り、コリやおそろだんべいきさでだ。」と、門へ出づれば女郎ども、サア皆様と々暮の、打連れ立つて入る後は、またも賑ふ見せ先へ、大小しやんと立派な武士、人目を忍ぶ細笠の、内ぞの

かしき風俗の、後より付きそふ船宿熊、其の旦那、今中の町の薦屋の店へ腰掛けて居た深藏等、此の大船屋の宮城野様を揚げたいとやら云ふ話、お前も又宮城野様をお揚げなされたいと仰る故、何かなしに私が、お急ぎおや程に大船屋へお連れ申して行く、後から来いと茶屋へは申して参りました、其の早うお揚りなされませうと、いふ間もあらぬ細雪の、散りよしのや伊平治が、来る道筋も長羽織、薦屋の男が先に立ち、お申す熊様、お客人をお連れ申し、後から来いと有る故、参らうと存じました所、又此のお方のお出で、今日はいせ時平藏は江戸へ出ました故、自由ながらお二人様を懸け持ちこたへ置ッ、暫い來、此のお方に宮城野様をお出し申して下され、リヤ早うと、と待つた、此の熊が連れたり耶、其方のお馴染故、一寸訪れお先へ來たのは、其の宮城野様を揚げよう計り、あとから來た精々に怪名代なりと外ななりと、其の其の都合がよからせと、手前勝手な間かめ伊平治、熊、其方が旦那衆大事なりや、俺とても同じ者故、お互に茶屋へ落合つて面假なら、座敷を待てて道々事もあれど、ハテ客衆は知らぬ同士、殊に御馴染と云ふではなし、ヨリ、此方へ大夫様を貰をかい、云ふ、流るまいと云うたら何とする。云々男ハ一庵も買はしやつた事ではなし、又此方の客衆は、此の間話にも聞いたであら、端村黒右衛門様と云ふ大衆は、初會から事によると請出さうし云ふも自由、云々是れ伊平治、吉原許りは今時の味噌は上げられぬぞ、此方の

客案が清出したら、其の時は何とする。」（中略）ハテそれぢやによつて今揚げるわ。」（中略）「其、イヤならぬ」と、互に云へば云ひ返し、藍けんばうのうづあられ、小紋も元ける揉み合ひの、出合ひ頭に牽頭（けんとう）の五町、（中略）「譯はいはすと皆聞いたが、コレ二人ともに旦那衆が大事の事なれど、俺もお二人様は知つてゐる、所を今我ら吞みこんで、宮城野様にお目に懸り、主の心で何方へでも、馴染に成つた其の上では、是非お一人は出物が出来る、浪風なしに納まる思案を」（中略）「其の思案は、果が料簡（りょうかん）と云ふ山、宮城野は身どもは揚けまい、彼方の合方におとり持ち申せ。」（中略）「其、イヤそれで此の熊が」（中略）「立つ、たためは馴染になつた上の事、其のやうに急ぐに及ばぬ」と、言ふに鶴羽は笑壺に入り、無言、是れはく、何方かは存じぬが、温順しい仰有りやう、一寸お近付になり申したい。」（中略）「半武上、イリニモ左様仕らん」と、互に編笠脱ぎ捨てて、（中略）「お名は聞き及ぶ黒石衛門殿、拙者事はケ瀬秋夜、以後はお心易く。」（中略）「其、イヤ拙者儀も申さば瘦浪人、中々其許様のやうに、結出すなどと申すことははどれお出で。」（中略）「其、イヤ拙者儀も申さば瘦浪人、中々其許様のやうに、結出すなどと申すことは罷りならねど、もし今日は貴殿に揚けさせ、又明日にも拙者が参り、互に買論などと大人氣ない事も致せんかと、憚りながら思召しも恥かしく、それ故お近付にもなり申した。兎角遊びは一人ではござぬ、よ」（中略）「御一座申しても苦しからずば推参申さうかな。」（中略）「其、イヤ強ひて求めようと拙者は申さぬ、よ」

屋から二人一座、お前にも早う身拵へして、お出でなんぞと遣手衆が申しんした。」富「い、急な
い、全身拵へして行かんぞ。したが知つた顔でもあるかや。」富「い、エ、どれもく侍衆さ、一人
はよいが外に獨りは職ぐらしい罷の、目の大きな花魁の客衆だと、吉野屋の兄様が云ひなんした
も嫌な客人でござんす」と悪く云ふのも、抑めるのも、にばなき新造の後生衆。富「い、コレ／＼又そん
な事いうて、遣手衆に叱られようぞえ。お前方は、ア座敷へ往きなんぞ。」富「い、エ／＼、お前と一
所に参りませう。座敷では牽頭持の五間きんかいつものお道化、眞に可笑しう参りんすに。」富「ア
可笑しい次手に宮里様、昨日旦那様の連れてお出でなんした奉公人、可笑しい物云ひぢやないかい
なア。」富「ア、サアイナア、遠い國から來たと云うて、中居衆が詞を慰めば、姉を尋ねて來た者だ、姉え
を知らせて呉んきわと云つては泣きんす。こゝ花魁え今一寸呼んで來てお聞かせ申しんしよ、サア宮
里様紳ぞんせ。」と、打連れ下へ立つて行く。宮城野は打笑ひ、富「眞にあの衆とした事が、ひよか
すかと苦勞のない、よい氣遣いではあるわいの。コレしけりや、此の手拭も替つて、生挿も纏子へ
出しや。」富「い、と禿が眞實に、袂を帯へかいしよけに、取り片付ける其所へ、新造二人が伴うて
「サア／＼こゝへ」と座敷の内、おのぶはつじに見なれぬ簞笥、錦の夜具に三ッ布圍、赤らむ顔の緋
縮緬、うろ／＼見廻し、おコレ女郎サア遠、人の寐をべつてゐる所を、用サアあるから早く來い

「……叔もがそれ其の語を、お前如何して知つて居るんや。……客衆も待たねであろ、私も今行く程にな、お前方皆様連れてよいやうに。コレしけりも中の町の井筒屋へいて、孫治様に昨日の返事は来たか聞いて来や。此の子は私が用がある、皆様早う。」と姉友郎の、詞に面々立ち上り、「真に助めと云ふものは、何國の人にも逢はねばならぬ、宮城野様のお話で、此の子の話を聞いたした。私らとても外ではない、だ、アやがアまの爲に賣られて、此の助めをするからは、客衆と寝そべる度ごとに、赤はられたれて氣に入つて、小遣もらを。」と口々に、奥座敷へと急ぎ行く。あと打詠め宮城野は、おのぶが傍へ差し寄つて、宮城野「コレ其の子や、さつきにからの話には、姫を尋ねて此の里へ来たと言やるが、マ、其方の國は奥州で、何と云ふ所ぢやぞいの。」と「オ、私らは奥州白坂の在、逆井村といふ所」と、聞くに始めて宮城野が、駒にぎつくり、傍を見廻し、宮城野「ふふそんなら其方のと、様の名は、奥茂作様と言やせぬか。」と「オ、それを知り召すそれ様は、姉サアでござるか」と、飛び立ちながら、奥「マ、イヤノ、ノ、母の常に云はしやるには、姉サアの方にも印がある、それを互に合はせたらうへ、志もうも明けろと云ひ召した、印があれば早う見せて呉んされなう。」と「オ、常々大事にかけて置く、その證據見せうぞや」と、立つもいそ／＼そこそ

音様も聞えませぬ。」と、愚癡に差込の癩癩も涙に洗ふごとくにて、身も浮くばかり泣きければ、妹も共に正體なく、
 姉サア、便りと思ふ其方が其の様に泣かしやつて、俺は何となるものぞ、よいしやんしてくれもしや」と、絶り歎けば、
 宮城野「す、いとしやなう、海山越えて遙々と、尋ね逢つたる此の姉は、あるに甲斐なき勤めの身、そのみならず此の私を、尋ねん許りに和女まで、又此の里へ身を賣るとは、何の因果か情なや」と、姉妹手に手を取りかはし、あやも歎きの有様は、秋の最中の月星に、雨雲かゝりし如くにて、涙の時雨ぞ哀れなり。歎きの内に宮城野は、氣をとり直し泣く目を押ひ、
 宮城野「レ妹、最前其方の品の中、云號の夫も江戸へとやら、其のお人の名所は」
 宮城野「シテ敵臺七とやらの顔は」
 宮城野「ア、よう覚えてる申す。目まへこの大きい鼻の平たい男サア」
 宮城野「モウ宜い云やんな壁に耳、父様は武士の果て」
 宮城野「ムリヤ其方や俺も侍の種だから、一時も早う敵が討ちたうござらわいの。」
 宮城野「す、よう云やつた、でかしやつた。コレ親の敵は俱に天を戴かぬとやら、幸ひ奥の大一座、驟ぎの紛れ此の里を、脱落するより外はない。何彼の事は一時も、早う立ち退き田圃の方、私についてサア來や。」と抱へ引締め身繕ひ、立ち出でんとする所へ、
 宮城野「何處へ」と主惣六、
 宮城野「エ、旦那様何時の間に」と胸りは、隠せど聲に知られけり。意より俺は雖今、胸りせいでよいことを。コレ宮城野、マ下に居や、其方は

の堅き男を尋ねても、いはば女の身の上、確乎とした北條殿と云ふ様な後立がなければ、申々思ひに
 踏まされぬ。其の中には悪い魔がうして、むづ／＼月日を送る事もあらぬものぢや。ハテ曾我殿原でござ
 へ、大磯化性取の領域に心を奪はれ色々貧苦、ハ／＼ヨリヤモ芝居でもようする事ぢや。又縦ひ此の
 郭を逃げ取つてから、遠國生まれの其方共事、常分先の的も無う、うろ／＼するのを内外の者が見
 付け、イヤ／＼そこそこ居まするし云ふを聞いて、打捨つて置くと主の身ではどうも云はれぬ。
 ハ其方許りの親に孝行ではない、勤めをする者に、親に孝行でない者は一人もないわい。それ
 ぢやによつてあれも孝行ぢや、是れも孝行ぢやと其の儘で置けば、俺も女郎屋をやめねばならぬ。リ
 リヤ浮世の身過世過。また面々の内の條は女郎買に行くに聞けば、ヤイ愛な癡愚者めが、勸當するぞ
 と嘲り付け。人の子の道樂者が来ると、偽になら客人者ぞ、随分と大事にしやと女郎どもにも云ひ付
 ける。此の様な得手勝手な商賣はして置れた、慈悲と情と云ふ事に心不斷忘れはせぬ。不思議に
 昨日淺草で、廻り逢うた奥州者、轡を替ねる許りに此の身を賣るとの志、直に女衞に金渡し、連れ
 て来たのも其方の身の上、國に妹があるとのこと、若しやと思つた甲斐あつて、二人寄つて最前から
 何やら話す。久こそし煙草吞みながら、郭の部屋で聞いてあれば、切ない哀れな咄を聞き、悲しうて
 涙が溢れ、手に持つてゐる煙管の頭首上りやうち忘れ、火皿で目を火傷したわいなう。元より浮氣

それなればよい、――早う来や、――「アイ一寸顔を直して、」想、――「イヤ素顔で、随分決し
い、」と、野郎も、職員賣物に、花も實もある亭主が詞、――「アイと返事も泡沫の、淀む隙なく行く水の、
流れに絶えぬ勤めの身、妹を爰に奥座敷、引別れてぞ、――重、造作半重、狐を釣らう、狐を浮かせ、狐を
釣らう、――取つて見せようぞ、――重、造作半重、狐を釣らう、――「サア、釣つたぞ、――、五、五、五、
め呑め、――野郎無二、ばかす、――と思つたら、――「アイ釣られ、――「ヤ釣られたで思ひ出した、此の宮城
野郎は悪い事、――造作半重、早う呼び申してお出でなんし、」――「アイ、――「アイ今来なんす、そ
れ、――、いふ間もなく、古の歌に讀みしも哀れなり、宮城が原の旅寝かな片敷く袖に鶉なく、
涙、――、五、五、五、皆様ようお出で、」と、座に直る。――「アイやようお出でなんした所、
先にからお前をまつの大太様、サ、日那、此の大入杯で一つお始め、」――「アイ先づ貴方から、
秋、――、此の秋夜より其許さまが、カノ宮城野郎をお待ちかね。初對面の杯、」――「伊平治様、つぎなん
はきつい通者、此の伊平治が仲人で、御祝言の杯は、是れ三々九度の黒右衛門殿サアおあがりな
されませ。――花魁、是れは私がお取持、ドレ、御酌致しませう、」――「伊平治様、つぎなん
すな拜みんすにえ、」――「伊平治何、拜みんす、ヤ拜みんすの谷渡り、向うへ渡つて秋夜様、此の杯は
貴方から、一つ飲つて御様へでも、ヤ、宮里様にかえ、よし、先づ是れでお杯もす、間の親方の

所なれば、女郎様方の御器量も日本一の君。」「新三、コレたんとは云はれぬぞ、さしあのおかめの面は此の頃方々に懸けてござりますが、何の爲でござりますか。」「宮城野ノお徳女の面の事か、あれを懸けて置くと仕合が能いとの事、それでかけて置きなんすわい。」新三、仕合とは有り難いナウ五町、是れも狂言の筋になりさうな物かい。」「其なるとも、此の頃揚屋前のせうか様が付けた通人舞、新造様方彈いておくれ。今こゝで神降し、本社と云ふは我々が名、宗頭といふも一つにて、コレ此の面を斯う被り、おれに坐す新造の、上着を暫しかりに著て、既に拍子も切あけり。通人舞を見つゝいな、大通人の客儀共には、いつも郭へ通ふ神、文の文魚も走りの出で、男の喜上立ちぬいて、もの雄跡の鯉藤さい、よいきせうではないかいな。首尾を占ふ六川の、龜も八龜も文洲に、來之あれは先ち、よしやなりよし振も吉原、漁長十橋森羅牧十、渭州左邊に秀民日月照りきふ里の夕映、祇園方でて物も善よし、阿能待美々江戸の幸、横河安經千局萬川、歌の囀梅も勇よし。新間本社のかみも賑し、只今美づる舞臺清く、花をひたして面白や、大通舞を見つゝいな。」「其れも、やんや、きつゝい物だ。」「其れも、宗頭のみでござりさう御座りますか。」「其れも、面白、事でも有つた、それ一つ吞の。」「其れも、マアコレも山吹色有り難い。」「と、いふに鶴羽も負けぬ顔、小判取り出し扇の上、是れ「ソレ伊平治、皆の者にしろせい。」「と、其れも、ハハハ、サア、時ならぬ惣花ぢや、皆々寄

つて是れはく、「是れはく」と許り花を吉野屋が、面々に配分し、扇を眺めて、何か書
 いてある、秋衣様、ヨリ何と云ふ事で御座ります。」秋衣「ふ、みごむらひ御簗と申せ宮城野の木
 の下露は雨にまされり、ヨリ々唐崎と書いて有る。」宮城野「そんならお前は唐崎様のお客様かえ、夫れ
 なれば彼方へお知らせ申したしよ、定めて主が今宵は悪うござんすによつて、夫れで私を名代の心か
 え、しふふ、お有り難うござんすにえ。」黒玉「是れはく、迷惑千萬、此の扇はもと許ある事。」宮城野「
 ア其の譯のある方へ。」黒玉「身共が國許の下役唐崎松兵衛といふ者、宮城野の萩見物の折柄
 被妖子自慢で此の扇、呉れた古歌、また今日逢うたそもじの名も宮城野とは、誠に是れも結ぶの縁。」
 黒玉「いふく、初にお日にか、つて、かう申すもどうやら何とか思ひなんしよ、結ぶの縁の門違ひ
 ござんす、是れに迷惑、執心で参つたに違ひは御座ない、何の其許にあかはらしたれ申さぬと、急げ
 ばついで出る國詞、黒玉「花魁へ、爰にも赤はらがゐん、主も奥州者だな」と、云はれて黒玉が
 悔の眞面目、黒玉「く、身共は京ぢや、京生まれぢや、夫れぢやうかいで方々奉公して、奥州にも
 少し居た事もあれどぢや、夫れはすつと久しい事だ、今は西國の大家に奉公する。江戸は始めて、生
 まれは京ぢや、京の六條数珠屋町夫れでサ、酒を呑むとつとくといぢやわいなう、無業ぢやわい
 の」と、詠り散らした京詞宮城野は黒右衛門が奥州詞に心付き、妹を呼んで見せたさに、宮城野「コ

もハ、、ぬける故、殺すとは通の詞でござります。お侍でもお公家でも、名の取らうより昧を取れ、
秋夜様と私は、奥へすいきのぐい呑みと出かけませう、皆
様奥へ入らせられませう。」熊ア、すつてん童子ノ、ノ、ノ。騒ぎにつれてぞ入りけり。提灯
提けて伊平治が、内を覗いて。熊ア、黒様に逢ひたい物ぢやが、ドレマ。座敷へ行て、アノノ、
夫れでは人目が有る、大事の神状如何してお目にかけうそ。云ふを後に立ち聞く熊、持たる狀箱
搔む。熊ア、何しろぐいと拂退け。此の伊平治が持つてゐる物、ちよつかいさつかけて、
イヤどうするのだ。」熊ハ、、如何するとは知れたこと、何か密事の其の狀箱、巾を一寸見たいか
ら。熊ア、イヤならぬわ、鶴羽様のお馴染から、内證の手管の文、持つて来るのは船宿の役、外の者
に頼みはせぬ、封目急度通ふ神、山の神には引裂かれても、いつかな見せぬ色紙をば、鼻つ紙の分際
で、見ようとぬかすと土手下の、紙洗橋へ叩き込んで、還魂紙の涙を溢させるぞよ。」熊ハア、面白
い、花のお江戸町廣い中、此の熊が日通りで、時の京町と黙つて居れば、無上に味噌を揚屋間、モウ
角町にして置かれぬ、伏見町の節々を、碎いても取らにや置かない、野郎の水道尾を打叩かれて、
謝らんむたと云ふなよ。」伊平治、アノ汝が。」熊汝が。」と互に詰め寄り軋合ひ、尻引葉身纏ひ、奥は
漲ぎの三味線の、拍子に紛る、二人争ひ、後に何ふ黒右衛門、作足さいたる伊平治が、急所を隙さす

やうんと立ち聞けば、其方は親々の云號、某は谷五郎、今の名は金江阿兵衛、密書、そんな云號の夫でもつたか。何もかも妹に聞きやんした。親の敵の志賀臺七、今日爰へ来たこそ幸ひ、助刀して敵を討たせて下さんせ。五郎いふにや及ぶ。我が爲にも男の敵、某も奥州にて、彼を討ち漏らしたるが残念、小指の先にも足らぬ奴、氣遣ひやうな今の間に。宮城野「ハ、ア忝うござんす」と、互の話を聞き居る臺七、谷五郎はつりや堪へぬ、如何してこゝへと胸雲ひ、差足表の方、こそノ、と進んで行く。時分はよしと吉野屋、縁先の釣燈籠、小石拾うて打ち付けら、音に秋夜は奥より出で、伊平治首尾は、無事重「甘々と仕果せ此の状箱」其後、シ、兼て常盤殿と某が太望の企て、鎌倉中の井の中へ毒を流し、皆殺しにせん王、其の第一の毒藥秘法、忍び松明軍座の一巻、楠原普傳が志賀臺七へ傳授せん所、然るに彼當地へ登りしと聞き、何卒近寄り奪ひ取らんすれど、而も知らぬ其の上に、本名を隠し此の里へ入り込む、是れ幸ひと此の秋夜も、遊所の出合に心付け、疾くより一味徒黨の面々、形を替へて付き廻ひしに、黒右衛門と云ふに臺七と、確と本名知れざる折柄。御手平ハ、ア夫れ故に宮城野兄弟が話を立ち聞き、又松兵衛が書きし扇、最前拙者が貰ひ受け、是れを贗せて内通の手紙を拵へ、本名を聞せし上は、謀を以て一巻を奪ひ取り、其の上常盤殿の頼みの通り、宮城野に敵を討たせし。其後「ヤレ音高し有竹作平、贗筆の達人ホ、でかきれ

た二はつと許りに此方より、隠すし一腰脇挟み、傍へ心次を問より、宮城野は身づくみひ、表をさして
て囑け出す。さうして「アアアア」といふ声つた、氣色を變へて何處へ行く。一、二里ほど行くと、知れ
た事、親の故郷の志留邊に、宮城野は未望を。一、二里ほど行くと、知れた事、親の故郷の志留邊に、
今はさうなれぬ。一、二里ほど行くと、知れた事、親の故郷の志留邊に、今はさうなれぬ。一、二里ほど行くと、
大望の、一、二里ほど行くと、知れた事、親の故郷の志留邊に、今はさうなれぬ。一、二里ほど行くと、
にて承りて、谷左衛門殿、宮城野殿は御存じない。一、二里ほど行くと、知れた事、親の故郷の志留邊に、
す其の谷左衛門殿、宮城野殿は御存じない。一、二里ほど行くと、知れた事、親の故郷の志留邊に、
も、一、二里ほど行くと、知れた事、親の故郷の志留邊に、今はさうなれぬ。一、二里ほど行くと、
り、其の谷左衛門殿、宮城野殿は御存じない。一、二里ほど行くと、知れた事、親の故郷の志留邊に、
る。一、二里ほど行くと、知れた事、親の故郷の志留邊に、今はさうなれぬ。一、二里ほど行くと、
生まれと聞かむ故、一、二里ほど行くと、知れた事、親の故郷の志留邊に、今はさうなれぬ。一、二里ほど行くと、
是れも、一、二里ほど行くと、知れた事、親の故郷の志留邊に、今はさうなれぬ。一、二里ほど行くと、
せやうと上は、一、二里ほど行くと、知れた事、親の故郷の志留邊に、今はさうなれぬ。一、二里ほど行くと、
是れ、一、二里ほど行くと、知れた事、親の故郷の志留邊に、今はさうなれぬ。一、二里ほど行くと、

狂言の櫛、直に常悅様の御宿所へ参り、則ち用金二百兩、跡金明日持参の上、宮城野殿は身受け致さん、金子は是れにござります。」秋葉「ホ、常悅殿の宿所まで行き戻り二里餘り、半時かゝらぬ其の内

に、韋駄天走りは聞き及ぶ、日に三十里行く道の達者。」ホ、熊川三平出かされたりノ、とある詞に作平多島は、作平多島臺七此の場を逃げ歸りし上は、如何致し候はん。」秋葉「イヤ此の場を遁れ逃

け去りしは、只敵討の用心許り。先づ宮城野が手附二百兩、亭主へ渡し、跡金は明日までと申されよ。」ホ「宮城野の身受の金、是れへお渡し下さりませう。」秋葉「何其許は御亭主か、宮城野が身の代

は六百兩とな、則ち手附三百兩、ソレ御亭主へ渡し召され。」多島「ハッ。」ト答へてならべの包、何心なく立ち寄る惣六、油斷を見詰まし切り込む多島、身を躬して鐺元確乎、惣六「コリヤ何するのだ、

ハ、アコリヤ又五町が、茶番狂言の稽古か、眞劍ではヤ危い。」と、突き退くる間も兩人が、一度に抜いて切りかくる一エー。」とさそくに蹴上ける聲、我が身の櫛に飛鳥の早業。秋葉「ヤレ手の内見えた、

過ちあるな方々先づ引かれよ。」秋葉「ホ、アッ」秋葉ム、さてく驚き入つたる御倒さ隠しても隠れぬ新田家の浪人、島田三郎兵衛殿と疾くより知つたり、何卒南朝の御味方となり、我々が太望の片

腕ともな給はらば、常悅も祝著致さん、偏にノ、お頼みまうす。」秋葉「イヤ申し太望と仰有りまするは、コリヤ夜具でも拵へるか、新造でもお出しなされますか、こゝは郭諸人の入り込み、洩れるも

易し、何をおつしやるも皆酒の筈、私は亭主、客衆の事は存じませぬ。又本名とやら俳名とやらを、明すも時節が御ざりましよ。何にも聞かぬといふ證據は、コレ誓紙の文言、宮城野そこで讀んで見や讀んで見や」宮城野「ヤアコリや私が年季證文やござんせんかえ」と、いふに驚け出る妹のおのぶ。惣六は引提へ、雲々小菊の良い叔父付も直したいと思ひの外、此の不器用では直るまい、内に置いても高が腰元、宮城野が受出された候に付てやる、随分目につけ遣つてやりやれと。宮城野ハ、ア有り難いお志、お禮に詞に盡されませぬと、伏し拜み、兄弟役も有様に、又何妹までも添へられては此方も痛み入る、せめては残りの二包を。惣六「ヤア其の三つは捨線の、さう九つの鐘も鳴る、コレ宮城野食更けぬ中に早う行きやれ」宮城野「ヤア大門の切手、派、派、派」惣六「お禮には及ばぬ、アレ引け門つのアノ拍手木」

第八

我が家に、千尋の陰の榎の末松、牛込邊にゐたあと、浪人ながら町一に、餘り風雅の美手心や、前も清き宇治の常夜、心響きなき友とらと、徒然時より良品の、用意を重ねてゐたおやつ、身の黒ひさへ世を忍ぶと、おのぶが名をも改めて、竹刀、おお箱、仕合の稽古、懸針いと柔しとも、流石手紙

の間の友、傍に竝みゐる女子ども、皆それ／＼にか、へ、固唾日紅粉香込んで、顰目も振らぬおせ
 つか愛太刀、付け入る信夫が八重垣くづし。まゝ一、出来／＼信夫殿、破軍の太刀を四寸に拂ふ
 利方の工夫、心懸が見えました」と、云はれてはつとよしばむ信夫、女ども日々に、一、お扱も
 扱も器用なお手、シさう機轉が利き過ぎては、追付男持たしやんして、お寢間の口舌に殿御をば、
 天井裏へ彈きあけ、腰技がさせて拜ますは、一、今の間の事である、一、おすけ殿、おな
 まの云やる通り、此方と古男に尻餅を、ほつたり／＼搦かき絶倫を書ふ心掛、重なりと情に入れて
 おこしと申ぐれば、一、ア、コリヤ軽忽な物の云ひ様、人間きも宜しくない、重ねて急度略め」と
 と行儀も家の様方、信夫は氣の毒取りなして、なま「おせつ様のお詞、皆悪う聞かしやんすな」それに
 付いて、御前の嗜みになる稽古のお相手、毎日々々習うても、心ばかりの不器用者、必ず笑うて下
 るすなま。追付日の暮お客のお出でに程も有るまい、次へ／＼にでんばども、あんかう烏明いた口
 「ア利口なお子や。」を引滑に、皆々勝手へ入る跡に、か、へ解き捨て縛を外し、一、す、信夫殿、敵
 志賀臺七尊は、常悅殿とは近しい中、輕羽黒右衛門殿と云ふこと、其女中も妙御も知つての上、敵討
 を急ぐとの思ひ立ちはおもながら、鞠ヶ瀬様との密事の企て、それに付いて黒右衛門殿、親しうする
 も一荷と、常悅様の奥深い御思案、女の私が問はれもせず去りながら、兎角武藝が肝心關門、抑へて

人
之
心
也

つちへ聞くと主のお詞、一言を頼みにして、例にも案じる事はないや、モ、必す、急な
 めいといぞと諫めに嬉し悲しさを、信夫が便り杖ぞとも、柱時計の音芽えて、火や點さん告は
 渡る、秋の日は心なる、今日暮れたか。ソレ今宵は胸ヶ瀬、稀人を同道と云ひ越えられ
 心待ち。ソレおせつ、放れ座敷の味懸物、花も生けたか、釜も懸けたか。「アイノノノ。あひの機
 こし信夫が連れて勝手口、入るの秋の風防ぐ、障子吉見が建て切る折から、次の間よりも咳拂ひ、
 胸ヶ瀬袂に入り来れば、あるじ常俊吉見諸共、夫れぞと出づる入魂の挨拶、そこノに座も定まり、
 第一コトハ、秋夜殿、在鎌倉の諸侯達へ、日々に出入の隙なき果、いづぞはお招き申し入れ、お
 話となじをつた。を折に幸ひ、塞て密事の用談も、つゞく積鬱晴らし申さう、イザまづ奥へ、驚
 せば、それは身共も同し事、御簾指南の弟子衆は、背歴々の大身故、平外の難談も差し控へ、鬱散を
 心懸けしに、今宵の招きは別して樂しみ、秋の夜長の物たり、久しく絶えしソレ御秘藏の御調べでも
 承らう。誠にそれよ、琴の味経の連引きに、幸ひの相手を同道、ソレ松田氏おきのを是れへ、早
 く早くの聲の下、彌多七連れて宮城野か、今は日立たぬ袖頭巾、地味な小袖も愛くろしく、切戸開い
 て、宮城野よ、辛氣。御玄關に待たして置いて、いつの間に此のお座敷へ。」秋夜よ、サ、二月ばか
 り程経ながら、まだ宇治殿へは連れだたぬ宮城野。」第一、スリヤ稀人とはおきのが事が、す、よ

卷之六

には宮城野が阿婆拙、所作袖見るも餘り氣の毒、暗闇の強意見、香やは隠る、我々王夫、色をも香
 をも、秋夜殿の早香、これ、深入りしし給ひと」と、鼓由詠り句の詞のにべ、心おせつも宮城
 野も、思案取りく、常夜重ねて「秋夜殿イザ一開へ、皆も一所に、コリヤ宮城野、必ず今の強意見
 跡に残して忘れぬやう、篤と心をナウ鞠ヶ瀬殿。」秋夜にそれが肝心要、常夜老の志、イヤサ縦ひ
 心に忘れても、汲みやしつらん旅人の、高野の奥の玉川の水く、ナ合點がいたか」と底意をば、残
 す詞の露の夜や、暮に數ある鞠ヶ瀬が、屈せず聲を胸の内、おしき宇治の常夜おせつ、松川吉見も諸
 共に、心をかねて入りにけり。跡宮城野が物思ひ、色なる浪の月代や、定かに秋の穂に出づる、影さ
 へ遅き願ひの一圖。宮城野郭で皆のお話しあつた、常夜様のお情とは、どうやらそぐはぬ今の仕儀、
 合點の行かぬお心を、汲みやしつらん旅人の、高野の奥の玉川の、水とかけたるお詞の、誰かは知ら
 へど解けやらぬ、様子ありそな御有りやう、いさどうかなこと、とつおいつ、軒端信夫が奥よりち、
 そろく「朧月影に、一跡様こゝにござんすか。」宮城野「ヤアさう云やるは、妹ぢやないか。」信夫「アイ。」
 宮城野「一、息才で嬉しやく、逢ひたかつた」と取り違る、便り涙の姉妹が、思ひに安る、哀れさは
 血筋の逢や解るらん。信夫は涙の目を拭ひ、當中申し姉妹、此の東で名に知れた、常夜様にお頼み申
 すは、佛神の御引合はせと、お前の云うて下さんした、詞にいと頼らしく、お世話になる内おせつ

様のお情まで、残る方なき、稽古の修行、奥州者と知れぬ様と、詞付までお世話になり、恩に思ある常
悦様。されども本望達するは、急くな早いと止めてばかり、其の上先刻の集の腹立、私や立ち聞きし
て居りました。頼み切つた常悦様、あのやうに仰有つては心遣われる様様。」と膝に凭れて嘆き泣く。
常悦様、さう思やるは道理がやが、浪人ながら大名商家に、もてはやする、常悦様、か弱き其方や
此の私に、頼まれつしやる氣は全無。がふちやとは思へども、目指す輩の黒石衛門、越か着を脱着
して、行方知れぬと聞かば聞く様、云はば、古主の惣六様の、志も立たぬと云ひ、便々と待つては居り
れぬ、工夫思案も互に女、果敢ない所育と此輩の大名五郎様、未卒の父様母様の、草葉の陰よりお
呵りが、思ひやられて悲しやうと手に手を取つて又々々。昔の下行く未々の實、涙の雨に懷より、様
牌取り出し庭の面、手向は父の想に知る、行轡山形の手水鉢、上にとりて、津津海、母の位牌を
立て控へ、ともに頼む手を合はせ、三浦置子善信士、俗名は父様の異茂作様、只便今宵か御命日
なわ阿彌陀佛。それから経かうお果てなされたお母様、幾時か善信様、お前の手引で通りこ、
まで、尋ね迷ふ父の故、陰身に潜うてお守りなされて下さるやうな、頼み切つた常悦の合掌、佛さま
に水品の、珠数繰りかけし桂陰（御養育）御思も違ふ、程遠い此の地へ来て、隔てて居れば二親御
お遇ふふ。おの月日さへ、七日々々の小じも、知て遊した不幸の不幸、前きの上の憂き物め、眞に

向ひ融く紅も、思へば血の池、氷の地獄、罪のありたけ仕盡した、今更せめてと付け狙ふ、敵に廻り逢はせてたべ。さへ去りながら女の身の、二人より外便りのない、わたしらを娘に持ち、極樂世界へ成佛とも、拜まれ給はぬ未來の闇、嘸かし迷うてござらうと、悲しいわいのノ、妹。」「口惜しい姫様。」と、位牌の前に身を打ち伏し、涙にすだく蟲の音に、いと秋さへ更けぬらん。宮城野やうく泣く目を拂ひ、宮城野「コレ、妹、そなたを世話の常悦さま、わしとても受出され、武藝を教へ貰うたろ、恩義の深い秋夜は、寝てお心背いても、黒右衛門さへ討ち果せりや、お二人の世話申妻は有ると云ふも、愛を抜け出し黒右衛門、何所に居るとも尋ね出し、討たうとは思やらぬか。」と云ふ。ごんすとも、黒右衛門が居る所、火の中水の底にもせよ、顔は見知つて居りまする、探し出して討ちませう。」宮城野「オ、出かしやつた、サアおぢや。」と互に帶締め裾打合はせ、件之位牌を守りと肌、用意の懷劍一文字に、驅け出すあとより、「待てく女云ふ事あり」と聲かけしは、宮城野「座敷に誰も人は居ぬが、庭傳ひに來はせぬか」と、月に遷せど定かに知れず、ハテ何所からと盤桓る、イヤ愛からと庭先の、井戸の中より水にも濡れず、ぬつほり鵜羽黒右衛門、段平大小長月代、錆びたる井桁靜かに踏み越え、のさく上る縁の上、續いて兄弟かひなくしく、面々懷劍抜き連れて、左右に圍へばごろりと見て、黒右「オ、出かすく。此の黒右衛門を汝らが敵、志賀五七と知つたか知らぬか、腰

上
九
:

に討たれぬのいのに、「姉様コリやマ、何と」「如何せう」と、積る恨みを姉妹が、恩義に迫るはらに涙、落ち絶津瀬の吹き越して、懸樋も月に照り添へり。黒石衛門顔うし覗き、黒石衛門とてうもあらまいな。イキ又郭で見た時より、格別違つた其の泣顔、生地顯にして美しい。コリや宮城野、とても義理ある常情が、爲にならぬ敵討、うらりさつと止めにして、黒石衛門が心に從ひ、應と云つて抱かれて寝い」といふ。憎憎厭答へず、無念々々を堪へる二人。黒石ハ、其の様にひこしやくせすと、サア身可愛くば返事して、どうぢやノ、と云ふ。へる信夫、引き退け突き退け宮城野に、ぼろど掩き付く懸懸煩惱。黒石ハ、要ふ大悪人の果よ蛇よ、そもやそも現在のに。黒石ハ、ト敵は知れて有る、標に育つた様にもない、寝れ給へノ」と、肌の手入れ傍若無人、又取り絶る妹を隠懸ばし、黒石ハ、氣の通らぬ、見ぬ顔せい」と、うきを宮城野ふり放す、手に當つたる以前の位牌、引き出して、「コリや何ぢや、極假子淺信士、俗名與茂作、ム、コリや身が手に懸けた汝らが親の位牌ぢやな。」とそればし」と兩人取り付くを拂ひ退け、黒石ハ宮城野、應と云うて安で寝るが、厭と云へは此の位牌、踏み割つて退けるぞよ。エ、否か應か、否なら親を踏み碎かうか。サアノ、ノ、何と」と付け廻され、不便や宮城野泣く音さへ、聲を信夫がおろし顔、いつそ詞を出でばこそ、顔見合はして齒をくい締り、口惜し涙堰きあへず。黒石ハ、めろノ」といふとい性根、目もしたまん。

私らのお手に懸けられ、未来の父へ云譯させて下さりませ、コレ申し秋夜様、おせつ様、お情お慈悲
 に殺して、と、命惜しまぬ姉妹打伏し歎くに取れまて、齎の痛みが宮城野が、苦しむ體に妹が、
 心細くも介抱、氣扱ひこそいぢらし。おせつは心思ひやり、いともしやなう、親の敵を討たう
 討たうと、東の果てから鎌倉へ、難行苦行も厭はずに、今日か日まで私らへ氣兼、武士の詞に討たう
 うと、讀合ひながら此の神文、此の神文を悉く上、彼の忍び松明の呪傳、一國殺しの毒の秘法
 でお傳へなされて下されまいかとおせつも共に餘儀なき頼み、黒右衛門大目あき、黒右衛門、ハ、ハ、
 貴様達は豪傑々々、や非道い物ぢや、如何にも説方は是れノと、歟らす身共に云はせて置いて煎
 じ殺さ、ノ女郎どもに、ハ、ハ、ハ、と嘲笑ふ。黒右衛門ハテ扱それは氣の通り、斯理お頼り申
 すのも、田嶋六には御身上相憐まり、御目見え有りと常徳老、御懸念の密談故、是非に今宵と傳授を
 急ぐも時節柄、押推にはちと御短慮。黒右衛門、イヤ短氣にごさる、拙者大きな短氣者ぞ。黒右衛門、ソ
 ゝ其のお腹立を當にお直しなされて。黒右衛門、直したくばアノ宮城野、口説き落しておこつ
 しやるか。黒右衛門、サアそれは。黒右衛門、ならまい、否なら斯うぢや。と宮城野目かけ、きらりと手裏劍す
 かさぬ信太、露路下駄取つてしつかと受け、黒右衛門、リヤ姉様を例とする。と詰め寄る擬態におせつか
 同睡、秋夜見とれて、黒右衛門、天晴々々、ハテ教へたり覺えたり。と、あたりをばらぬことの虞美

星「やきつ、はなはだうまい。」「小あまめ、くすねられちやならぬ、其の小柄豆はうまい。」
信美「ア

小あまめ、くすねられちやならぬ、其の小柄は、こづかこいへば、いへば。」

信夫ア

「若^わう持^もて」
「信夫^{しんぶ}アイ。」
「早^{はや}う」と大人^{おとな}氣^けなく、小悟^{こづ}に事^{こと}寄^よせ出^だす人^{ひと}、取^とらんず氣色^{げしき}に

信太「アイ」「早う」と大人おとな氣なく、小柄こづかに事こと密ひそかに出す人、取とらんず氣色けしきに

宮城野が、
 笄かうがいつしり黒右衛門、
 隨ともに當あたつて拂はらふ間に、
 遁にげれ、信夫のぶお倂よろ秋夜、
 せつは早業はやわざし救すくへ方かた

心で與めるも、互の目遣い、膨れ返へて黒右衛門、
「何奴も一奴も、僅い氣味さうな厭けき、見た

互の目遣ひ、膨ら返へして黒右衛門、
「何奴も一奴も、能い氣味さうな單けき、見た」

浦浪吹きこめて、
兼ぬる高嶺の秋夜は日頃の重氣の鬱々へ、
氣性に當るごとく死えしが、

て、
 推おし取とり兼かめめる高たか山やまの
 秋しゅう夜やは日ひ頃ころの豆まめ氣きの
 八やち、
 氣き性せいにさるるごとと死しええしが、

是れはとのおつとも姉妹、庭へどつさり真逆様。是れはとのおつとも姉妹、

庭へどつさり眞逆様。是れはとおむつも姉妹、

の、
「
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百」

一、百濟三夫人、助王太子、所居宮室、皆以寶物爲之、更無他飾也。

身の上を、
谷の道、
世話の、
出入り、

谷道二、世語有二、大語、常言、出處、大略、本質

[illegible]

か「リヤ／＼姉妹赦してくれる、今こそ敵軍常に、討てよ勝負。二突き放せば、今更何と宮城野
も、信夫らともに、私ら故、御大望の妨けに、成ると聞いてはそもやそも。」「イエ／＼大事御さ
入るぬ、今の様な悪口聞いて、女の身でさへ悔しいに、秋夜様のお腹立、更々無理とは思ひませぬ、
構はず勝負。」とおせつが勇め。猶通立つて黒右衛門、黒五「云ふまい／＼、あいつらが荷擔せず、身共
に弓を引くまいと、兩人が其の神文、反古にして武士が立つか。」秋夜「オ、此の神文こそ我々が、大
望に代へ力と成り、その方を討たせられうと、宮城野信夫へ遣はす血判、最前見ぬか汝が不覺。」と、
おせつ諸共押し聞けば、狼狽へ眼に見て怖り、黒五「謀られたか残念々々。此の上は破れかぶれ、
鎌倉へ注進して、追付咲顔、待つてをれ。」と、驅け出す後に宮城野信夫、懐劍抜く手も見ればこそ、
伺ひ寄つて雙方より、がぼと剔られ七轉八倒、無念々々と黒右衛門、狂ひ死に死にたるは、心地よか
りし有様なり。秋夜おせつも偏ざ立て、手綱々々と賞する中、奥より出づる松田吉見、旅装束に風呂
敷携へ、松田吉見「ハア、出来た／＼。様子はあれにてお聞きなされ、常悅様のお指圖にて、アノ女中を
介抱し、奥州表へ送りながら、先途見届け立ち歸れ、急ぎの使延引すなど、我々に仰せ付けられ、取
る物も取りあへぬ此の支度。宮城野殿信夫殿の支度も道にて調べん、サア／＼早う。」と急ぎ立てば、
「何から何までお心遣ひ、せめてお禮を皆様へ。」松田吉見「ヤア禮所でない本國へ、早う知らすが此方

の世話申斐、圓周も氣違ひ憂七、首は腰より送るべし、早うく、とおせつとも共々、と詞背くは即
つて無禮、そんなら皆様よい様に、彌多七勝衛に伴はれ、まだ明けやらぬ出汐や、津奥まで急
ぎ行く。跡は月澄む客路大の、陰も真夜に見送る秋夜、おまつれども一間に向ひ、安堵有る幸
俊老、事調ひしと詞の下、障子押し開き、常盤、白無垢着し女も禁忌の著明、出づる火取く庭
先、黒右衛門のたれし死體、むづくと起きて立つまゝと見せしめ、水氣忽ち消え、見とめし宇治
が照月にくソタヤデイスの幻法祕印、ほどくに猶も吹く東風、とくに驚かす木々しき、前も足も直も
せて、残るは以前の天眼鏡、富士衣の袖に巻ひつる、鄭重の奇行は、神變福氏と云はつべし。
二人も不思議と感ずるばかり、常俊指さし、常盤「見られし秋衣殿、我兵衛助と云ふしとき、諸國
を経廻り、洞理軒に習ひ覚えし隠形分身、奥にて承合は、一層しく、幻法にて此の義も、黒右衛門が
形と顯はし、宮城野信夫に討ち取らせ、彼らが功を立てたと假ばせ、本國へ追ひ還らば、是れより
後に黒右衛門を、親の敵とねらふ者、軍中にはよとあるまゝ、此の術をさん」と明り消ひ、「一旦捨
てたる幻術これども、去りたる今月今宵、月影にりたりと、観念して有るべき、黄泉の土に
助けしは、リッパの如きなるぞや、アラ心よや俊、と、語れば我々が、持前の頭處、直ぐ
振舞、是れと云ひ、とは言ひながら、いよいよ二人の衆、「マダぐどノ」と黙り召さ」と、制しと

して鏡を納り、薩摩子に尻さし袴、常侍秋夜は居間の味、常侍の大横物、掛地を取れば壁に隠家
 師の内より大の男、上下黒十日月月代、身いし、隠す志智豪七、正銘大小立派の人品、態々とて座
 に着、常侍秋夜は一揖し、山吹山の軍用役、生果せて立ち歸り、御所若故二天間、み渡せし上、
 思ふは明奇樂傳授、御望、なれども今以て、お給へ申さる某、心底の推量あり、宮城野信夫と違
 ひ還されし、今宵の幻術鑑き入る、高が女、事ながら、清浦大蔵、是れより世間の廣くなるも、云
 はば御所人、今宵の御推量とて、下より世間の廣くなるも、云
 詞にも盡されす。此の上は毒藥傳授忍び松明、祕方の一卷、藤原普傳が家の祕密を御譲り
 申す、必す他見御無用。」と、したり顔に懷中より、出す一卷を押し戴き、秋夜と共に繰り廣げく、
 青二ハ一同白々々、去りながら、鳩鳥の生血を搾り、磁石の煉様射岡の法、水に混へて濁らぬまで、
 全く傳書に顯はし難き、口授口傳あると聞く、共に師傳をあかされよと、蛇の道さすが平身低頭、
 餘儀なき詞に、流石の宇治殿奇妙々々。其の口傳こそ祕中の秘事、申したはれど人々聞く、
 ソとおせつ殿、視々一心得おせつが牀の間の、料紙の蓋をとりくや、黒右衛門筆おつ取り、かの二
 書へ書き添へる、毒の分量趣味の奇製、残る方なくさらくく、書く度々に常悦が、悦喜に連れ
 ぞくく、おけ藪二眠る幸火の陣松明、火筒の奇法も序ながら、と詞に隨ひ文字に運ぶて口傳の奥義、

卷之四

谷、所の役所へ届け置けば、苦しい早う、我等も跡より後話、門出の饒別此のやい、お氣
 の付いた秋夜様、宮城野殿へは此の長刀。」「エ、糸」と姉妹が、勇み進んで立ち出づる。言「コ
 リヤ必ずおくれを取らぬやう、心の備へは妥なるぞ」と、一句の示しに勵まされ、おもひ詰めたる宮
 城野信夫、物をいはず手水鉢の、片側すつぱり長刀の、音より妹が飛石を、二つに鐙のむね打ち割
 り、音「是れでは討たれますまいかな」と出かけた行けを氣の配り、矢竹心に迫うてゆく。秋
 深き草葉も半ば照りそめて、露ぞ置くる扇が谷、常夜秋夜が同意の面々、勝負の場所の固めの手配
 り、立てに立てたる辰の刻、肩胛張つて志賀臺七、一圓に目見えと仕済まし顔、來かゝる陰に人數の
 集り、早押推の小腰を屈め、言「コレハノ御大身より、某を御迎への方々ならん、嘸お待ちかね、
 思はぬ隙入り、何れも御前宜しき様、お取りなし下されよ」と、揉手を構はぬ堅めの人々、黒右衛門、ソリ
 黒右衛門、何れも御前宜しき様、お取りなし下されよ」と、揉手を構はぬ堅めの人々、黒右衛門、ソリ
 黒右衛門逃る様、取り巻け圍へ」と身構へに、悔り仰天黒右衛門、黒右衛門一扱は汝等は最前の、女め
 が餘頼ならん。夫れもぬからぬ常夜、秋夜の指圖は此の時ノ、ソレ火蓋を切らつしや」と、猶
 と落著く黒右衛門、中に取り込み一同に、動かば討たんと、狙ひの筒先、黒右衛門「ア是れ、身共を討つ
 がおやないわいなう、エ、悪い呑みこみ」と、一人氣を揉むあひもあらせず、宮城野信夫伴うて、廻け
 付ける島田三郎兵衛、思ひがけなく出で来れば、なほノ不審のきまろノ、眼三郎兵衛聲をかけ、

一々うつその黒石衛門、宇治梅子の衛に、心の救ふ傳受の秘方、とくと知られし上からは、
我意に勝る汝が自滅、観念して尋常に、此の兩人と敵討、用意の場所へ誘き出でしと、松田吉兒が知
らでによつて、常夜殿秋夜殿になり代つて身共が後詰、廻れぬ所、頼頼といふと、聞いて憂七が相黙
踏み、又謀られし口惜しや、此の上は死物狂ひ、何時つ頼みの女郎ども、事なり、に切
りやいぬ、汝等が太望残さずぶちまけ、注進して頼頼んこと、方合んで見ても頼頼に、弱れど負は
ぬ溝頭顔、わんざ下伏に三日食、逃げそ、くれのだ、け者、追取りをいふ常城野信太、今ぞ誠の敵討
と、勇む人をや、勝負、勝負とて立てられ、ふしよう人に上着を脱ぎ、白無垢ばかりに身纏
の出来、三郎兵衛氣を以、常所の衆人諸共に、宇治梅子酒も連なぐ、おれぬ猿屋に
見初めれば、晴ればちし此の勝負に、後のたき憂七が白無垢の肌付、ウシウイづれも吟味あれ、
と、指圖に告ぐと富つて、雨風無様に押し親がてば、眼力たがはぬ猿屋子、ウシウイこそ大きな車輪
者と、人前にて剣を取られ、面目紅にふしける、宮城野信太とぞしく小堀外、天へし上る心地と
て、猿屋のかみはしめんと、腰をななき御世の程と、矢張の場所へ立ち向へば、憂七も驚き、
恨みしうに相なるに、同じく入る来り矢来、内、鳥田、引き添ひ静置まし、又依りある者は相互
に敵討、勝負の勝れた大旗、歌、音を聞てかけ引き、頼頼の討つと、河なると、頼頼の理に

任官と、常侍老の指圖なれば、雙方共に心得られよ。と國格致意の茶碗に水、敵と味方の前に置き
 三郎「イザ尋常に。」と矢來の外へ、引けども心は引かぬ氣に、息を詰めたるばかりなり。姉妹並んで聲
 をかけ、先づ頭取州自取の域下に置いて、其方が討つたる重茂作が長官城野信夫、爺様の敵志留
 臺七、サア立ち上つて勝負しや。」と云ふ、身が手にかけた真茂作が娘兩人、返討に、観念ない
 と、其身引提は立ち向ふ。官城野は以前より、信夫もともに鎮座、互に心を一致の金氣、殺伐鋭
 臺七が、絶情にひらぬ枝、雪折れざる姉妹、目眩しもせぬ三郎兵衛、外の見るまへ勤めの勝
 負、火花を散らして三重挑みあふ。始の程は臺七が、嵩に懸つて見えけれども、骨髄をえし兄弟に
 惱まぬ。命の、石突返しに神鞭を回ふ、其の間に得たりと鎌投げかけ、打落したる左の腕、
 へ廻つて又利腕、づんはら立ちの志留臺七、無念とあてあみ長刀に、割打ちかけて一拘ひ、薙ぎ倒し
 官城野信夫が討ち取つたり。」と、愕然と笑うて立つたる有様、倏ぶ島田同意の面々、兼立の小鷹作
 が、驚を翳うつて當てたる如く、感じ入る聲響める聲、暫しは鳴りも止まざりし。息つぎあへず、
 官城野は信夫、兼立をなだに云ひ置く通り、斯く木望を達した上は、一着三着、合點で御さんす。
 と、一度に腰抜き放し、我と髻切りかくるを、日早き島田置け當つて、二人が刃物撈ぎ取り撈ぎ

取り、三郎の朝髪に「イ、イ、イ、お生のあるな」とせり合ふ内、三郎は早ま
な、しほしほと聲をかけ、常夜秋夜は假屋より、しほしほ出で来る悦喜の顔ばせ、宮城野宿夫に
うち向ひ、「密事合體の谷五郎に、所縁ある其方たち、秋夜と云ひ合はせ、本望を達せし上
は、本國奥州石堂家の領分へ送り返し、時節を待つて金江氏へ添はせん計らひ、我々の心をだし、
押して前髪は其の意得ず」と秋夜と共に言葉の傳、有り難い御返りあけ、三郎は船中にも成されぬ大
恩、お心背くでなければども、親の敵と云ひながら、女の心にて大膽な、人を殺せし罪亡はし、親の爲
敵の爲、死にふとのがせめてもの。三郎は秋の腸い、親夫に武士を持ち、姿を變へて先祖へ立つ
か。お世話あつた御兩所、此の島田が先達まで、見届けられる所存にないか」と、理に據へられ、ハ
ハハハ、さういふ縁の島田が諫めに、思ひとまりし姉妹の、操をがへす常夜が、討死の後悔の恥、
雪むる心前部川や、偏行の世にも恥ぢざる、思ふへしこそ殊勝なれ。時刻はれば常夜秋夜、同意の
請上にもうなむひ、ハハハハニカハ、勝負を見届け常夜明の役人、伯母より送られれば、目も知れて遠慮
に及ばず、宮城野宿夫が勝利を得たる、互に何も言が谷、大望成すも大膽なり、北朝を打ち破る、野
謀謀議の場所と定め、「島田殿と我々三人、桃園に我を結ぶ、半に等しう黒石勘助が、直汐を
つて盟を立て、秋の木の葉の鎌を、ちり／＼に打ち亡はす討策の手始めとし、奥州へアノ敵妹

送り役を和殿に頼み、すぐさま軍勢催促を。」と、引かぬ詞に三郎兵衛、三つ、つぞや郭でお頼みの、鞠ヶ瀬殿も同座と云ひ、辭退致すもそこがまし。奥筋の一味を集め、此の鎌倉へ登るは何日頃。秋夜一オ、夫れこそ毒藥地雷の相圖、發する時を手筈として、南朝の汗名を堂々旗上げの惣大將、鞠ヶ瀬秋夜が心地に徹したり。」と、きつと目くばせ常夜も、心を悟つて上著を脱げば、兩勇劣らぬ大將出立、錦の直垂萌葱一ひの小手鞠當、人集の中より陣羽織、軍配床几らいつの間に、菊水の旗懸罷と、揃ふ心の三郎兵衛。同じく上著取り捨つれば、肌に着込の滋金物、南蠻鎖も南朝へ、「一味の手始めはれ見給へ。」と、隠し持つたる塗込鞘、抜けば玉散る焼刃も鋭く、臺七が一の駒、死骸すつぱり血刀を天晴血祭心地よと、兩將立ち寄りうち寄り、常夜ハ、ア兄事々々。焼刃は愚か中心まで、一日に著き貞宗の、刀は北朝不吉の切先、味方に有つては吉事の名作、ハ、頼もししく。」と、肺肝までも見透す度量、神機妙算同意の人々、共に感ずるばかりなり。宮城野信夫も盡きしなき、禮はつどつとおせつ様、情の因おく筋へ、直に出で立つ三郎兵衛、常夜も安堵の眉、常夜關八州は秋夜殿、島田氏をば副將と、頼めば心に危みなし。返すくも短慮の振舞、心に止めて出されそ。我は是れより都へ登り、五畿七道を狩り罷し、金江勘平に謀し合ひ、笠置の山に程近き、古郷の井出の親里に相留まり、鎌倉の騒動次第、役の地にて旗上げせん。」と、秋夜諸共貞宗の、刃の血汐三人が、日に含め

ぢぢひの暇、共に宮城野金江が畔、都の空を懐かしき、奥の心も細布や、烏田が連れて行く二人、叔父への土産は毫七か、首を信夫がむし包へ、涙も今も名残とに、知らぬ三人三方へ、別れ別れ、一隊の人数、共に評議の飛鳥山、瀬瀬定めぬ、其の二や。

第九

道行いはぬいろぎぬ

菱の在郷に良いこの嫁御、外の男に氣を挫く能く、かいはれは、縁は千年かき水の、流れて人の行末は、いざ白石や小石、千代に八千代と結びあうたる娘と昔の、契は聖石堂の、館の出で伊庭助も、肉の取れたる玉川の、里の川屋の吉六に、千束の腰も解束の、古物を括へ、井山の里、きのふは前の朝水も、今日の朝水手に巻いて、花の露添ふ玉水の、水は年合、飲れやうき、磯の手裏の順布、晒して染めて、水に幾度濡れた同十、互に頼も春の川屋の、流れて山城の岸傍ひ、酒場指して行く方の、山の端毎に花盛り、懐かしく春の川屋の、降らばわさうん雪野山、降らば木津の川原に、風添へて二人連、若草や寝よけに見のと娘が満、さいなうさうかいな、氣をつくくし細々と、文のすゑれは辛つばな、八束山吹のかへす若、ういたくさうかいな、中同十もなつ、て、浮名

心一ぱ、歸出して呉れろので、覺えた者より漸と仕業の擧が行くわい。此の八尾六は何所へ行た。
 一、間が透き出る歩き居る。ア、大方湯屋で、又いけもせぬ新内節がな登つてゐる。ヤ夫れは
 う、此のお嬢に、まだ髪を仕舞はすかな、めんよう此の間に身仕舞に隙が入る程にの、いつまで子
 供の様に思つて居れど、親旦那がお過ぎなうれてから、私が替つて世話するも、今年でかうと、ハ、
 一、丁度あの手をうと七、そろそろと蟲の付きたがる時分ぢやてや。ア、どうぞ何事もない中に、
 實體なぬい端を取つて、早う此の世話を脱れたい物ぢやが、ナウ吉六。」吉六「ハ、左様な事が随分と
 ようござります、ナウお竹どん。」吉六「ハ、いそせん事が大てい能い事ぢや、ごんせ。増様がないして
 こら傍だそ。」ノ、ノ、ノ、ひまつしもう此方の人に。」吉六「何と云やる、お竹。」吉六「エ、ア、ア
 ノ此方のお嬢御のお染様に、其の蟲とやらが付かうかと、私やたと案じられます。どこぞかう遠い
 所から、早う増様を取つて、お上げなれますがよろうな事のやうに、私は存じられます。」と思ひ
 のたけを後日に、詞のはりやもらすらん。彌左衛門は氣も付かず、彌左「イヤ、夫れでも滅多に氣
 を知らぬ者はどうも入れられぬてや。ヤ何吉六、其方は國に二親もないと聞いたが、定めてまた女房
 も有るまいなう。」吉六「エ、一、二、三、有りるか。」吉六「ア、いや。」吉六「一、二、三、また有るまい。」と打顔く、心
 の工面廻面の、目顔で止めても止らぬお竹、吉六「コレ申し旦那様、夫れ聞いてお前何になつれます。」

11

ぢや、干物と取り入れたら、紋と給ひ有り、何からしう、袋物の、絹の色々取り出し、
 一ム、コトを落し、何ぢや書付は、紋もに二、三、ム、はて合點の行かぬ。正しく是れは足利の定
 紋、今日前に見るに是れ、此の處に寄つて申黒、押してよとある知らせなるか。但し時節が清く
 とあるか、ハ、いやノ。此方は何ぢや、珊瑚紺に釘貫、ハ、テモ大きな紋ぢや、エ、コレヤ
 折介の看返物ぢや。ヤ失れにやうと、お城より出て見まうと、おぢやが、先にかたゝの約束
 を、よしと通ひはるゝといふが、首尾はどうぢや。と悪人を、松平の浦の々などに、越えや薩沙の身
 魚す、お舟にそつと岸足に、奥の逢間を忍び出で、上ツレ申し義助様、イヤアノナニ吉六殿、今更
 云ふに及ばぬぞ、斯ういふもしい宮仕へも、此の家へ便つて常侍を、味方に付ける術の爲ぢやと、
 おつしやつた様にもない、其の常侍は打つちやつて、妹嫁の、ノお染を、どうやら味方に付けて、
 此の家を取り立てるお心と、見たはまんざら違ひはあらまい。それでは互に云ひかへした、愛を離
 も水の泡、聞えませぬ。」と取り付いて、わつと泣く口おてふる袖。吉六「ア、コレノノ、聲が高い、
 又しても我を忘れて、俺が心を知らぬか何ぞいやうに、エ、咄みやノ。」お舟「イエノノ、何
 其の様に云ひしやんしても、此の道許りは。」吉六「ハテ悪悪な事ばなめ。大事を抱へし此の吉六、
 色に観る、性根と見たか、皆是れ南朝の御爲。只我々が身の上を、けどられぬが肝要と、云ひ聞か

イハノ、その二は頼との、そのやあつて日も暮れる、行燈の拵へして、御持佛へも御明しの汁やこ
 レ吉六、爰へ來や、マ此の端持つて墨打ちを、見てたもやいの。」と寄り添へば、竹が傍からつこご
 聲、
 吉六、マノ、マノ、お前も油相なの、いかにやお主様ぢやと云うても、そりやモウあんまりあつ
 かましいといふもので御ざんす。現在女房の、イヤマノ、女房のない吉六殿ぢやとても、娘御のお相
 手になると云ふ事が、どこの世界にあることで御ざんすぞ。人が見ても白墮落うで、マア第一、傍
 で見てゐるゐる、もうぢやござんせぬ。ホ、ニノ、吉六殿も吉六殿ぢや、まそつと此方へ退いてゐるたが
 よいわいな。」と無理に押し分け引き退くれば、猶逆立つて、お婆「コレお竹、何の其方が差配だての、コ
 レ吉六、主の云付け背きやるか。」と又引き寄せる主従が、あなたこなたと争ひを、見てゐる八尾六む
 しやくしや腹、遠慮會釋も三人い、中へすつくり懷手。見るより悔り吉六お竹、うじノ、もぢノ、娘
 のお婆、お婆「コレ八尾六、二人ながら主の云ひごとを、ねつから聞きやらぬわいの、ちつとさう云ひ
 つけてたも。」八尾六「へ、こ、ア、結構な事で御座りますわ。全體お前には此の私が、よつほど氣が有
 つた故、ちよこノ、しかけて見たけれど、主と家來の悲しさは、蹴飛ばされたら夫れぎりに、張り込
 みも云はれぬ故、エ、七面倒い打遣つて、思ひ切つてゐた所へ、マ、此の吉六、始めて目見えに來た
 時に、コレお婆様、ソレお前がナ、アレ彼處からちよつとのぞをくれた其の時の、其の日つきの其の

「ノ、来らしい顔わいの。コレ此の布を斯う持つて、斯う引いて、斯う巻いて、斯う取り付いて」と抱き付ければ、吉六「まうし／＼皆くろしい、ア、ア、ア、八尾六が、アレ、ア、マ顔を御覽じませ。」

「一、何ぢやいの八尾六は家来ぢやもの、大事ないこ。吉六「イ、エ大事が御さりますぞ。」八尾六「とつとこウ、／＼悟り切つた此の八尾六でさへ堪らぬもの、凡そ人間たあべきものが、コレザマア見てのらゐ、態かいな、オウお竹様、ハ、ハ、ハ、こゝろは家来ぢやもの、梅はすて見て居たかよいわいの。」と、いざ尻目や願で、當てつけらるゝ吉六が、吉六「アレ、お竹様見て居るぞ。」

「お、見て居れば何とぞするかや、其方の女房ぢやあるまいし、かまはずとよい返事、おうといやら、や放しはせぬ。」と、ちとまだ早き染色の、二人がじやらくら八尾六は、物干竿を、わつたびし、闇がり粉れかつちうち、から／＼鳴らす火打石、竹が急くほど火も移らず、吉六「エ、どんな火打箱。」

「一、付たいふとがりぢや。」吉六「エ、お竹様、おの／＼あのやうにしたるうては、炭も硫黄も濡るか道理。」

「一、いざ／＼／＼染物も乾くものぢやないわいの。」吉六「エ、また火が付かぬは、氣が付かぬか。」

「八尾六「吉六殿も吉六どん、大事の染物のしはせいで黴だらけ、彌左衛門様が留守なりや、爰の内は暗闇ぢや。」と、火打ち／＼八尾六は、仕事も脇へふくれ顔。吉六「エ、吉六早う熨斗で仕舞はぬかい。」

「一、いざ俺はのらはせぬけれど、爰へ来いとお召小紋、何するも奉公ぢや。」と申しお染様

八尾六、二お竹も、ソレ行燈へも火を點さぬかい、と納戸より、附來をしほに告げ出づる。莊屋殿仕舞うて、商ひ先の旦那衆、脈の上つた古懸、おこらぬは合點でも、次手ながら催促したりや、いかず村の孫三が、錢三百の内上げ、足のついでに戻りがけ、此の三方ねざり詰めたが、俺が年と六十八文、三方が若い、俺が年が安いか、皆よつて評判きやうく、ヨリヤ八尾六、染物はみな出来たか。」八尾六「ハイ、大方に片付きました。」頼左「おつとよ、」と、云はつしやれ。お「オ、そんな事誰がいうた、こちら一人に覚えはない。」と、口は涼しく手はあちもぢ、吉六は貝お竹が手前、顔もしかなの煙草を、呑まぬ煙に紛らかう。詞もたぬ彌左衛門、やレお染様、此るのぢやないが、俺が云ふ事よう聞かしやります。こなたの兄御勝助殿は、商人様ひ兵法解き、武者修行とやらに出て行かれたはとうの事、夫れを氣病にお袋の死なしやつたは去年の夏、歸終まで苦に召され、俺を枕元へ呼び付け、兄にこゝた妹様、好いた男と女夫にせよ、娘は其在、家の家督の繼るまでは、町所をも勤めてくれと、俺が前の名長兵衛を改め、去年から彌左衛門と、かへたは愛の旦那の名、お袋の遺言なれば、好いた男と見て女夫にするのぢや。」と、語り吉六お竹、娘とかうの返事さへ醫に覆ふ振の袖。心のたけが手拭を、嚙んで振ち向く夫の顔、夫れと

針刺引き寄せて、針のみ、手に願ひの糸、通ひも早き色の道、吉六お染が傍に寄り、吉六「申し、お染様、此中染めた此の手拭、ちよつと端になんかと叩、松葉なりと縫うて下さいませ。」お染「ソレ、アノ、いつぞや時行つた歌の唱歌、よつにこんとはわしや氣に懸る、つれない心。」と寄り添うて、わし「私が心は此の糸を、斯うしたところ、私が判じ物。」吉六「ハ、ハ、ハ、そのや知れた事、平假名のもの字に、お染「サア、いとしいわ。」と、糾れ糸、譯け、りし下紐の、非手の下行く水刷筆、深い淺いを探りあふ。」吉六「中しお染様、チトお尋ね申したい事がござります。」お染「ア、ア、ア、改まつた、何事おやいなう。」吉六「ア、ア、ア、何の事でもござりませぬ。」吉六「ア、ア、ア、お前の兄御は、宇治の常懷様に申しませうがな。」お染「ア、ア、ア、兄様の名は勝助。」吉六「サ、サ、サ、其の勝助様が常懷し名を變へ、鎌倉にござるを、お染「ハ知れぬ。」いふことはあるまい。」斯う言われて夫婦にならねば、何事も隠さぬが互の眞實、どうぢやア。」とどうらどへば、お染「サア、ア、ア、兄様は此の内を、家出して行かしやんして、夫れから一向便りもなし、力になつて共々に、お行方も尋ねてほしい。何かの噂もたんと有る、その夜も奥へゐて寝よう。」と手を取れば、吉六「ア、得心で女夫になるから、今宵に限つた事ぢやない、今夜は延ばして明日の夜か、いつそ紺屋の明後日になされませ。」お染「エ、何ぢややら氣の知れぬ、私が心のやうにもない、こゝへおぢや。」と手を引かれ、糸よるべのふしの間も、お染が手前氣の毒を、ア、

一、謂の程思ひ知らんやつにか、いいて其の厄介數つたを思に著る俺ぢやござらぬ、妹御のお染様
 もぞろ十七、髪飾りや衣裳まで能い物が欲しい、最中、此の間も云はしむるには、コレ彌左衛門、ア
 人前のおよし様にしてゐるんす、黒織子の帯、帯にも何卒買つて欲しいとてかゝるやゝコレ此方も
 帯どころからあるまいぞ、と物に勘界つしやれ、去年から数々の物入り知りぬか、彌分内の仕事
 を精出しやつたら、買つて出ると此つたも、いゝ、いゝ、同分仕事精出、縁に、何卒買つてくれ
 て、詞も返す間分けるに、コレたはなう。俺やその其の時にはの、コレ此の白い言玉から、
 黒織子の襟を涙でこぼれたわいなう」と、親方思ひの偏屈親仁、昔作りの形板に、地味な涙を流しけ
 り、常覺もうお絶えて、勘當の身の悔み泣き、今更返す詞もなし、彌左衛門目を瞬き、コレ、
 まだ其の上に母御様も。」三、御先去の様子は参りがけ、村はづれで承り、申さう様もない
 残念千萬に、其の残念が遅いわいなう、解し、今泣かしやるか眞實眞身、母御様が存生の中云
 はしやるには、コレ長兵衛、此の勢助めは何國に居るぞ、此の母が死んだら、日頃の不幸思ひ知り
 勘當が悲しから、若し心も直り戻つたなら、勘當を救してやつてくれと、親旦那の名をおれに譲つて
 置かしやつた、久離は切れぬ、救します。」要当何々、彌左衛門と名を要へ救してやるとは、ア有り
 難い御仁心、どうも心に染み渡り、家来とは思はぬ彌左衛門様、親父様、ア、要な若子勿體ない、

し心を改め義興に仕へ、南朝の御味方申すや、サ、返答聞かんこと、詰めかねば、當「ホ、健氣なり新田殿、南朝無の忠義臣、實に義貞の舍弟ぞかし、頼もしく」某「宿願の一瞥、名もなき軍に豈天下を苦しめんや、我も南朝譜代の忠臣、楠判官正成の一子正之、ハレの申しき對面や。」と、優美の顔色、義興からくと打笑ひ、「サア手詰に至り、此の場を遁れん其の爲に、正成の一子とは、何を證據、ソレ聞かん。」と云はせも果てず「ホ、不審尤も、我正しく夢の告げにて、一子なる事悟りし上、今又奥にて亡き母より某へ、殘し置かれし定紋の旗、彌左衛門より譲り受けたり、サ疑ひを晴らされよ。」と、懷中より取り出す、櫛家につたふる菊水の旗、折に幸ひ山風に、へんぼんと翻へる、實にかんばしき橘の、氏の系譜ぞ著き、義興ハット横手を打ち、「サハ、誤つたり誤つたり、斯く明白なる櫛の正統、いかで疑心を生ずべき。今より共に心を合はせ、勢を徴弱の古野山、花咲く御代に、翻さん。」と、誓ひは龍虎の新田櫛、義兵の礎、「サハ、ハ、幸ひ幸ひ、常覺が去りし頃白坂にて、思はず手にある石堂家の輪旨、我が手にあつて益なき賜、千束殿への我が寸志。」と、渡せば取つて押し戴き、千束「ホ、いさゝかな、我等夫婦が交々愛し入り込しも、常覺さまを討ち取る手筈、斯うお心解け合ふからは、此の場の様子味方の音へ云ひ聞かせ。」と、「ホ、能くぞ心付きしぞかし、片時も早う合體の委細を知らせ、師泰が捕手を敵らん、千束來れ。」

と引連れて、出で行く兩人奥の間より、「コリヤ待て吉六、お竹も待て」と、しはがれ聲、お染が手を
引き彌左衛門、力み返つて大胡坐、「やま吉六め、やまお松名は折田殿であらうが、また千束姫で
御座らうが、コリヤ見よ、コレ奉公人賣狀の事、一つ此の吉六と申す者、コレ／＼／＼、此の竹
と申す女、跡の文言讀むにや及ばぬ、是れが此方にあるうちは、御大將でもお姫様でも、やつぱり
組屋の下人吉六、飯焚のお竹に違ひはない」主の俺が用がある、／＼／＼、来い／＼、コレ／＼お染
さま、何と泣く事はござらぬぞや、二人とも爰へ來をらぬか、殿のぢぢ捨ては天下の法度ぢや。
コリヤやい俺は例にも知らずに、要の間に寐て居たぢや、此の子がござつて、コレ彌左衛門、吉六と
云うたは義興様、お竹は千束姫様とやら、女夫もやけな、そんな上つ方に、組屋の變がどうな大に
なれうぞ、止めたうても此のやうな形で、あなた方に詞をせすも恥かしい、したがあんなに残り多
程に、留めても一度あなたから、例となりとお詞が聞きたい、ちつとの間なりと止めてくれて、寐
て居る俺も驚き起し、しく／＼と泣いて居るしやる。すこし又先々、無理ぢやない、／＼、一番云は
にやならぬ所ぢや、大事ない／＼、氣づかひうしやるなと受合つて、留めに出了此の親に、論より
據、書いた物が胸云ふわいやい、書いた物が、お竹といふ女房がある上、ナゼ此の子に疵付けた。
コレヤ、いかな大身れぞ／＼でも、大事の／＼、御所の喧嘩は、人情に似合はぬ／＼、と、わ、り、

けたる主思ひ、理の當然に義興千束、行くも行かれず顔見合はせ、默然として在せしが、義興「ハ、ア尤もの一言去りながら、聞かる、通り敵方を、取り挫ぐ性急の此の場所。」
 千束「こりややい、組屋の内、巾形や、小紋の形はありうちぢやが、敵方とは何の事ぢや、其の様な用を、誰が云ひ付けてわりやするぞ、最前祝言までしたぢやないか。」
 義興「イヤ、夫れはさうでも、確と妻に致したと云ふではなし。」
 千束「サ、妻でなければお染様はお主ぢやないか」と、こねる組屋の棚加減、ねまりの強き親仁なり。千束も氣の毒、千束「サア、其の奉公人に何卒お暇を。」
 義興「オ、其の様にびら／＼と長い物著た奉公人、職人の内には合はぬ、成程暇もやらう、ガやるにしてからが十日と二十日は、お禮奉公も勤めの内ぢや、お染様の得心さしやるまではマアならぬ、出替り時まで待つて貰はう、ならんぞならんぞ／＼すんどならんぞ。ア、餘りしやべつて腹がへつた、コリヤお竹よ、飯焚いたか。」
 千束「イ、エ。」
 義興「是れは叔、早う焚きをれやい、出来たらソレ、茶漬け一杯喰はせ。コリヤ吉六よ何うろ／＼、ソレ味噌摺つて、汁拵へい。」と我儘も、主命なんと長袴の、裾踏みしだく膳拵へ、姫君變じてまゝ焚きや、袖の錦に襷掛け、手拭ちよつと奥様も、今更何とゆふ食の、まゝならぬ世を姫は氣の毒「手つだをかいな」と云ひつゝも、男の袖をすり鉢の、日と日を味噌のこい中や、お竹は胸の中くわつ／＼、じやく時の釜の下、火を引き挽拭く、鍋取の、お公家様でも大名でも、喰はねばな

らぬと彌左衛門、密箱取り出し待ち居たる。常悦は諸手を組み、始終の様子伺ひゐる。お竹は時分と杓子とり、櫃にうつせば陰々と、湯氣立ちのぼる不祥の氣、常悦きつと目を付け、お竹、う心得ぬ、一掬の米一盞の水、釜中に熱して人間の生育す、生成の根元食糧の冠たる一物、宇宙の珍寶是れに過ぎず。今器に移せる飯の湯氣、役伐の氣を顯はすは、ふ、軍將合體の今此の時、味方に取つて不祥の逆氣、我が手に於て事破れん覺えなし、授け合において秋夜が方に、凶事あるは必定、さう不思議や訝しと、そなたの室、詠めやつたる叙智の明變、義典下東人々も、共に怪しむ其の折から、百二十里を一日半、飛鳥の如くに熊川へ平、常悦が前に手をつかへ、お竹も今度の御采配、鎌倉表の總大將と、定め置かれし秋夜殿、軍川を案じんと、出入の具足師藤兵衛と云へる者、招き寄せて酒興の上、一味の密事を明されしに、其の場は承知の體にもてなし、内へもかへらず、鎌倉の決斷所へ即刻仕進したる由、胸を潰殿を痛めんと、既に其の夜の亥の刻過ぎ、捕手の役人市川將傳、親子引連れ込み入る所、例の鎌倉總横無業、寢巻の素肌に掲書きて、憐む所を折り重なり、籠のに引かる、決斷所、其の間に老母が即座の横間、連判状に火跡の中、燃え立つ煙に立ち紛れ、漸うと一方を打ち破り、虎の首は獲れんと、我今日に權いで参上と、大息ついで訴ふれば、是れはと人々呆る、内、稗々然たる宇治常悦、無念言辭に叩し通り、眼は笑けて血を出す、お竹、口惜しや残念やな、月曜

短慮の鞠ヲ瀨秋夜、一方を預けしは一生の我が誤ち、三平は様丁落波の油の勘兵衛へ、片時も早く告
 げ知らせよ、急げ。の下の知まり早く、飛ぶが如くに驅けり行く。彌左衛門はうろく、聲、
 大事の殿御を二人して。「エ、有り難い。」とお染が悦び、忙しい中で妹春の固め。忍び立。聞く八尾
 六、身構へして躍り出で、八尾六「何もかも皆聞いた、師泰公の下知を受け、犬に入込。此の八尾
 六、報知は斯う。」と有り合ふ火入、もがりの竹に投げ付けねば、合圖の眞體に、違ひに響く
 貝鐘太鼓、義興すかさず首筋掴み、ぐつと一しめ投げ付けねば、目玉飛び出で死してけり。常悦は突
 立ち上り、「此の場は我に任せよ、義興殿には二人の女、彌左衛門諸共に、一先立ち退き笠置の古城
 へ、早く、道程近きは長池玉水、此の地へ来る道筋は皆常悦が味方となし、笠置の要害堅め置き
 たり。軍憲を愛より見せ申さん、彌左衛門。」と詞の下、千束お染も奥の障子、明方近き笠置の城、中
 黒の旗菊水の、旗手に指物數千の人馬、折知る花に色添ひて、晝と見まがふ提灯松明、目撃しく又
 潔し。常悦庭におり立つて、何かは知らず川岸の、八重山吹をかきわけて、支度する間に義興は、
 二人の女彌左衛門諸共に、引きつれてこそ出でて行く。ほどもあらせす寄せくる師泰、大勢ひき具し
 大音上げ、師泰「此の家の内に謀反り張本、宇治の常悅隠れ居るよし、合圖によつて向うたり。最早還

かぬ尋常に腕を廻せ」と、呼ばはつたり。常俊勝が「態を然と、牀几にかゝり、常俊と謀反とは在りか」と、敏達天皇の後胤、楠御官正成を、子正と、常俊と假名せしは、大望に及ばぬ以前、今日只今憚りなく、北朝を取り替へ、大元帥の目通りなるそ、池になつき、總儀をほりこみ罷出よ。對面してとらせん」と、勇傳の詞にさしもの師泰威に恐れ、如何はせんとのちふ内、どうと替へし大石大矢、太地は裂けて懸立つ炎、秘法の火術に師泰主従、微塵に碎けて死してけり。常俊につこころち笑ひ、一年來渡つたる地雷の試み、さき心よや替ばんや。是れこそ直に笠置の城へ渡詰して、北朝をとれ替へ、日出度き御代に在るかへらん」と、英雄種々たる丈夫の魂、實に楠の二葉の勇氣、遅しかりける。有様なり。

第十一

蛭蜂集まつて大樹を動かす、義興を搦めんと、笠置の山を十重二十重、滝野木津川瀬原、甲の嶽を叩かし、喚き叫んで攻め登る。爰ぞ一明と義興は、太刀真向に差し替へ、火花を散らして、戦ひは智勇兼備の太刀先に、を納めあへんで見えたる所へ、思ひかけなく津障より、崩れかけたる北朝勢、前鋒の太刀と替へなつれば、右往左往に敗軍す。義興猶も追驅くるを、一「ば」とと身を

かけ、宇治の常懷馳け來り、常金江熊川に謀を傳へ、北朝の後陣より只一戰に打ち勝つたり。心安かれ義興殿。」義興「ハ、ア驚き入つたる貴殿の妙計、南朝ふたゝび榮える吉相、頼もししく。」と悦び勇む折こそあれ、小治郎伴寄浪御前、千束お染彌左衛門、金江熊川馳せ來り、寄波南朝和睦調ふ上からは、鞠ヶ瀬殿も相助かり、兩將に異變も有るまじ。常懷殿の情により、綸旨も手に入る千束お染も妻妾、新田楠白堂家の、契りは堅き白石噺、姉と妹が孝の道、道に道ある時津風、北は越後路、南は紀の路、津々浦々の末までも、納まり靡く君が代は、目出たかりとも中々に、申すばかりはなかりけり。

昭和二十三年十二月二十三日發行
昭和二十三年十二月二十三日發行

近代日本文藝系

第九卷

(非賣品)

編輯所	編輯者	出版者	印刷者
東京市神田區神田區會社	東京市神田區神田區會社	東京市神田區神田區會社	東京市神田區神田區會社
東京市神田區神田區會社	東京市神田區神田區會社	東京市神田區神田區會社	東京市神田區神田區會社
東京市神田區神田區會社	東京市神田區神田區會社	東京市神田區神田區會社	東京市神田區神田區會社
東京市神田區神田區會社	東京市神田區神田區會社	東京市神田區神田區會社	東京市神田區神田區會社

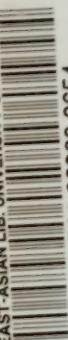
國民圖書株式會社

東京市神田區神田區會社
東京市神田區神田區會社
東京市神田區神田區會社
東京市神田區神田區會社
東京市神田區神田區會社





EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02989 0654